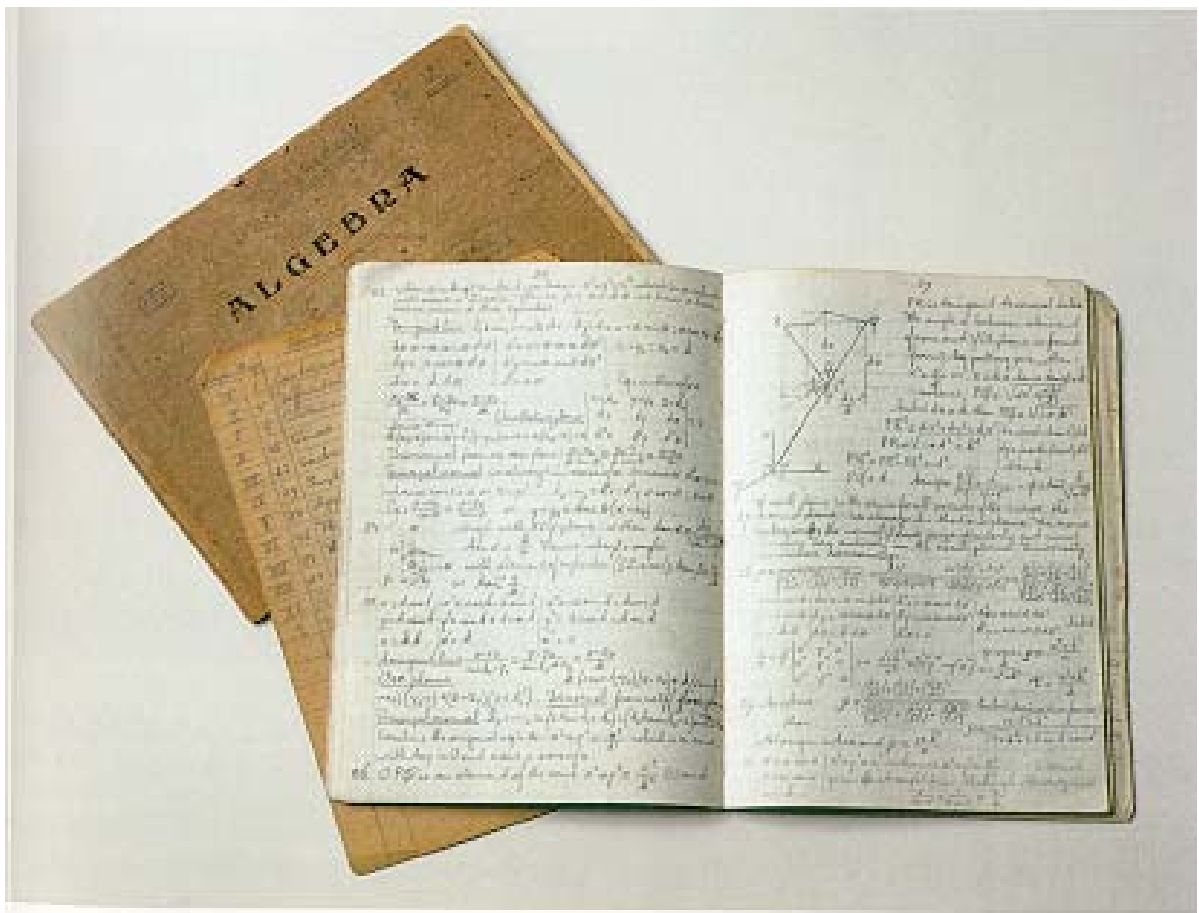


日記でみる日本占領時代の蘭印

チデンに於いて書かれた日記



この出版物はオランダ戦争資料研究所が「日蘭歴史研究プログラム」の一環として行った『日記プロジェクト』の成果の一つである。「日蘭歴史研究プログラム」は、1994年に当時の村山富市首相が提唱した<平和友好交流計画>から生まれ、日本政府による助成金により運営されるものである。

2004年、オランダ戦争資料研究所

A digital version of this manuscript can be studied on <http://niod.nihon.nl>

日記でみる日本占領時代の蘭印

チデンに於いて書かれた日記

編纂 : Jeroen Kemperman

編集 : Elisabeth Broers

翻訳 : Tomoko Schenk-Onishi and Takako Shibayama Reinhardt

目次

背景	1
序	3
移送と収容	47
収容所組織—欧州人並びに日本人収容所幹部	110
日本人による被抑留者の扱い	142
食糧及び物資事情	176
就労状況	221
健康状態と医療事情	243
イラスト	276
教育・娯楽・宗教関係	278
終戦後の生活への想い／収容所の雰囲気	323
人間関係	347
性意識	362
収容所外部との接触	365
戦況の報道と流言	395
平和通告	423

出版にあたって

日本の蘭領東インド占領に関して残された一次資料は数少ない。日本の公文書は終戦時に大量に破棄され、インドネシアの資料は殆ど無いか、またあったとしても、その入手は困難である。一方、オランダの資料は主に戦後になって作成された報告書や声明書に限定されるが、その中で例外が戦時中に記された日記である。この日記を基に十一巻からなる<日記シリーズ>が編纂され、これはそのシリーズの一冊である。シリーズのうち五巻分の日記集はすでに『日記の中の日本占領』シリーズとして、ベルト・バッカー社（アムステルダム、2001-2002年）からオランダ語で出版されている。日記は現実の主観的表現ではあるが、日本占領下での日常生活の様子を良く表している。

ここで言う日記はすべて、オランダ人が記したものである。日本人管理下の収容所では‘書き物’をする事は禁じられていた。収容所外でも、家宅捜索の際に日記が見つかるとう罰を受ける可能性があった。それでも多くの人々が敢えて日記を付けていたことから、日記が書き手にとっていかに重要な意味を持っていたかが窺われる。彼らの個人的な語りは、これまでに形成されてきた日本占領のイメージに新たな視点を提供するものである。

シリーズでは各巻毎に強制収容所、あるいは捕虜収容所に焦点を当てたが、収容所外の生活にも関心を注いだ。シリーズにはある日記を一冊、丸ごと収めたわけではなく、日本占領下の西欧人の日常生活がはっきりしたイメージが得られるように、取捨選択が行われている。選択に先立って、複数の日記からの情報をいかに明瞭な方法で組み合わせるにはどうしたらよいか、熟考され、長い議論が行われた。一見すると、それぞれの日記から部分を選んで、日付順に並べるのが最も妥当ではないかと思われた。しかしこのように並べると、日記の各々の部分が提供する収容所生活の独立した側面についての情報を全体の中から抽出する事が難しくなり、そのために情報が失われてしまう恐れがあると懸念された。また、我々は日記の部分をさらに細かく項目分けすることで、全体がさらに読み易いものになるではないかと考えた。さらに最終的には、シリーズには各収容所毎、独立した巻が設けられ、複数の日記が出版されるということがあり、我々は複数の日記からの情報を並べ、比較することができるような方法を見いだそうとした。

そこで結論として、日記を各々、収容所生活の重要な側面を表す項目に分ける方法が選ばれた。項目毎に日記の部分を日付順に並べ、時の経過がはっきりと分かるようにした。さらに、こうすることで、シリーズ内の複数の日記に見られる話題の発展、例えば医療状況を、互いに比較することができる。しかし実際、項目内容はそれぞれ相互関係にあり、分け難い。したがって日記の部分の多くは幾つもの項目に跨るものである。

編纂にあたっては日記原本を使用した。ただし、読み易くするために、文章は現代オランダ語に統一する方法が採られた。また、紙不足から日記の書き手があまり考慮しなかった句読点や段落を付け加えることにより、読み易さを促進した。略語は幾つかの例外を除いて通常語に戻した。読み易いようにするためか、あるいは説明のためか、いずれにしても原本に後から書

き加えられた文章は、すべてカギ括弧で括った。プライバシー尊重の観点から、文中、書き手を著しく傷つけるような文脈、あるいは犯罪的な行為をしたとなどの非難の文章に限り、その個人名を伏せるようにした。時には書き手自身が、ある状況の中では名前を伏せている場合もある。全体として、書き手の認識は個人的なものであり、彼らが置かれていた極端な状況に影響されているものであることを特記しておきたい。

使用した日記の著者およびその近親者からは、我々が彼らを捜し出せる限りにおいて、この日記プロジェクトに彼らの日記を使う許可を得ている。

チデン収容所

序

女性と子供の一般強制収容は、1942年10月にバタビアで初めて実施された。同措置では、バタビア地方自治体に居住する「配偶者または保護者と別居する」純血のオランダ人、英国人、米国人、オーストラリア人の女性と子供全員、男子では17歳以下の少年と60歳以上を対象にすると発表された。米国人、英国人、オーストラリア人の女性と子供は、元刑務所ストリウス収容所に抑留された。オランダ人婦女子に対する強制収容居住区として、バタビア市東側に位置するラーデン・サレー（クラマツト）と西側にある西ペトジョ（チデン）が指定された。その移転計画は、Gemeentelijk Europees Steuncomité 地方自治体欧州人援護委員会（GESC）¹により統制されていたため、女性たちは希望する居住区と同居人をこの委員会へ申し出ることができた。加えて、GESCは、収容所の管理が軍政により実施される時期まで(1944年)、チデン収容所、クラマツト収容所、そして貧困な婦女子のために1943年9月に開設されたグロゴール収容所へ向けて医療品及び現地のパサールとトコを介した食糧の供給を手配していた。

収容所の住人たちと外観

チデン民間人強制収容所は、バタビア市西側の境界に位置する同名の地区に所在した。チデン居住区は砂の堆積した低地に建造されていたため、特にモンスーンの雨季には排水が不十分となり、裏側の敷地の各所が冠水した。幹線道路であるラーン・トリヴェリとムシ通りに沿って、かなり大きく快適な住居があり、一番外側の通りには、一部には編んだ竹で作られた建物があったほど、簡素で小さい住居があった。チデンは戦前も特に優良な地区とはされていなかった。戦争の最終段階における収容所は、西の境界を線路の土手に、また東と南の境界をチデン - バンジル運河に置いていた。収容所の北方には湿地帯があった。居住区沿いの鉄道路線は、タンゲランからクバヨラン（バタビアの南方）を經由し、バタビアの港であるタンジョンプリオクを終点として北方面へ敷かれていた。女性たちは、港へ向かう戦争捕虜の様々な輸送を収容所から見届け、また、このことが噂や関心を呼ぶ大きな根源となった。

チデン収容所の開設当時には、2500人の婦女子が収容されていた。居住区内での生活は、その頃はまだそう悪くはなかったが、この状態も被抑留者数の増加にともない急速に変化し

¹ GESCは、欧州人による欧州人のための統轄援護機関であった。日本人は、おそらく統合組織の統制を容易に行使すべくこれを許可したのであろう。GESCは、自治体の補助金を受けたが、その額は、全業務（収容所の助成、送金、食糧・医薬品・石けん・その他の物資の配給）の資金調達のためには不十分であった。バタビアは、日本軍政が市内にその種の機関を（ある程度）是認した唯一の町であった。

ていった。1943年8月末、クラマツト収容所の被抑留者全員はチデン収容所へ移されたため、一気に被抑留者数が2倍になった。マルガレータ・ファーガソンは、この移転の結果を次のように記述した。

「たいていひどく雑然としていて大騒動。1軒に30人、40人の人々、台所ひとつ、ガスコンロ1台、浴室ひとつ、トイレひとつ。そこで家事をするのは容易でない。部屋はベッドとがらくたでいっぱい、庭はがらくたでいっぱい、前と裏の廊下はテーブル、椅子、どっさり入った食器棚でぎゅうぎゅう詰めだ。女性たちは洗濯中、皿洗い中、雑巾がけ中、調理中」²

高齢の男子用には、特別に介護されるよう「小アデッキ」と呼ばれた（アデッキはバタビアの男子収容所であった）別棟があった。また、1943年9月から1944年9月まで入所していたカトリックの修道女へは、ゲデッキで覆われた別個の家が与えられた。その他の「別」グループは、「国家社会主義運動党（NSB）の婦人たちでいっぱい詰め込まれた大きな家。彼女たちはまわりを様々な旗で飾ったムッセルトの肖像を壁に掛けている。当然誰もがこのことを知っている」³「刺のある風景」の家の住人で形成されていた。増大するスペース不足の影響を受け、以後、NSB黨員でない女性もこの家に入居するようになった。

1944年と1945年には、他の場所から被抑留者の新しいグループが次々に到着したが、ここを去るグループもあった。リディア・シャゴルは、グロゴールへ1943年8月に移され、1年後の1944年8月にここへ再び戻されたのである。「チデンは変わった。以前よりも狭い。超満員。…中略…まるで豚小屋、ひどい騒々しさ、計り知れなく無秩序な倉庫」⁴ 収容所の面積は次第に縮小されていったにもかかわらず、終戦近くには、被抑留者数が1万人以上にも達した。収容所長によると、この縮小は安全確保のためとされるが、刑罰として住居数の減少が適用されたため、この説明には疑わしいところがある。1943年8月には推定380軒に約5千人が当てられ、終戦近くには約280軒が残されて、そこに1万人以上の被抑留者が詰め込まれた。⁵ 結局、過密化した収容所において大き目の家に100人、さらに150人以上もの人々が収容されたことは例外でなかった。全員が寝床に当たるスペースしか持っていなかった。

この人口過密は、衛生面で深刻な影響を及ぼした。トイレは足らず、詰っては使用不能となり、汚物だめはたびたびあふれ出した。そのため、女性たちは汚物を道路沿いの無蓋の溝に捨てたため、溝の中ではそのような排水処理が十分にされない結果を生んだ。汚物だめの中身が、家の前の排水溝に毎日捨てられたため、多数の汚物だめはふたをしないで放置され、時折子

² Margaretha Ferguson 著、「Mammie ik ga dood. Aantekeningen uit de Japanse tijd op Java 1942-1945.」（Den Haag 1976）, p170.

³ Ferguson, p81.

⁴ Lydia Chagoll 著、「Buigen in Jappenkampen. Herinneringen van een kind dat aan de nazi's is ontsnapt maar in Japanse kampen is terecht gekomen.」（第4版 Mechelen/Amsterdam 1995）, p85.

⁵ NIOD IC 032.635, p4.

供がその中へ落ちてしまった。家庭ゴミは、初期には（チデン収容所の最北西部にある）オガンフィールドで焼かれたが、火を禁じられたあとには、まったく不可能であったが、全部埋めなければならなかった。そのため、当然チデン収容所でも悪臭が漂った。日本降伏後においてさえ、収容所では半年たっても広域にわたって悪臭が残っていた。

収容所組織

日本人と朝鮮人の監視員の数は非常に少なく、10人にも至らなかった模様である。しかし、彼らはおよそ100人のインドネシア人兵捕⁶による補佐を受けていた。収容所の外側、正門に近接した所に収容所長の住居があった。正門から収容所の中へ入ると、すぐその左側に事務所と収容所欧州人リーダーの住居があったことから、所長は必要とあらば即座に彼女たちを呼び集めることができた。また、正門際には、集団や個人に対する処罰が行われた。1944年4月まで、収容所は非常に品行方正な民間人コンドーの指揮下にあった。リンゼマによると、コンドーは日本人軍人が慰安婦を募る目的で収容所を訪れた際、酒に酔わせ彼らを正門から出すはからいをしてかかる募集を未然に防いだとされている。コンドーはその思いやりのある態度に尊敬を抱かれていた。⁷ 彼は所長を退く際に、被抑留者たちにクラシック音楽のレコードコンサートを提供したことで女性たちから高く評価された。⁸

コンドーが去ったあと、収容所の管理体制は強力に変化した。彼の後任者、「日本人の寸法からすると際立って大きな男で、見てくれもそう悪くない」⁹ ソネイ・ケンイチは全くの恐怖支配を行った。ソネイは、バタビアとボイテンゾルグにある全部の民間人収容所、つまり、チデン、グロゴール、クラマツト、ストリウス、アデック、タンゲラン、コタ・パリス、そしてケドンバダダックの所長を務めていた。¹⁰ ソネイはたびたび酒に酔っていて、その行動は予測不能な激怒と無謀な残忍さにより特徴づけられた。彼が収容所に来ると、女性たちはパニックに襲われて全てに間違っただけのやり方をしてしまったため、かえって所長の怒りを強める結果となってしまった。彼は恐ろしいほど激怒しても、その5分後にはきちんとした身なりをして平然と町へ外出することがあった。

ソネイの部下は、日本人も朝鮮人も同様に彼を恐れ、しばしばトラブルを未然に防ぐ

⁶ 兵捕の人数は、被抑留者およそ50人に対し1人の割合であった。

⁷ Win Rinzema著、「Dit was uw Tjideng. Aspecten van de vertraagde afwikkeling van Japanse interneringskampen in Batavia met het Tjidengkamp als casus.」（第2版、Utrecht 1991）、p64-65.

⁸ NIOD IC 052.155, p7.

⁹ Elise G. van der Stouw-Lengkeek著、「De hel van Tjideng. Herinneringen van Bep Groen, ex-gevangene Jappenkamp, oktober '42 – december '45」（Barneveld 1995）、p39.

¹⁰ ジャワの全収容所の責任者、（1944年3月以降）中田正之大佐の下には3つの地域別に分所、つまりバタビアに第一分所、バンドンに第二分所、スマランに第三分所があった。これら分所はいくつかの分遣所に分かれており、ソネイはバタビア地域にある分遣所のひとつの責任者であった。

ことに努めた。中でも朝鮮人ノダは、彼の上官の統治をいくらかでも緩和させようと試みた。¹¹ 1945年6月にソネイが収容所長を退く際に、ノダは彼の上官は「ブスーク・プトゥール[本当に悪者]」であると思わず口にした。¹² チデン収容所に抑留させられていた若い女性のひとりエルス・ベルフは、1945年8月22日に日記の中でこの朝鮮人に対し好意的な気持ちを記している。

「『プラン・プトゥール、プトゥール・ハビス[戦争は本当に、本当に終わった]』と言ったノダは、その名前を私の日記に書き留めておきたい人だ。なぜなら、彼は私たちに本当にとっても親切な人だったからだ。彼は、私たちの困難さや悲惨さに対して暖かい心をもって理解してくれたまさに父親みたいな友だちだった。彼は、祖国へ戻ることをとても喜んでいる！」

リンゼマによると、他の監視のひとりオハラ軍曹は、収容所を去らねばならなかった少年たちに同情していた。出発前夜、一箇所に集められ閉じ込められた少年たちは歌いハーモニカを吹いていた。その時、運動靴を履いたオハラが中へ入り込み、わっと泣き出した。驚いた少年たちは、しかし、そのまま歌い続けたのである。¹³

ソネイの後任者サカイ（1945年6月以降の所長）はもはや処罰を科すことはなく、収容所は彼のもとで再びある程度の平静を取り戻した。大半の被抑留者はこの所長の交代を知らされていなかったために、自由裁量による暴力に恐怖心を日本降伏が発表されるまで持ち続けた。ソネイが去ったあと、日本人はその数人の後日の証言によると、悪臭のためとされているが、次第に姿を見せなくなった。¹⁴

初代の欧州人収容所リーダーはM. S.ウィリンヘ - スリハー夫人であった。1944年4月、彼女はタンゲラン収容所へ向けた移送に就けられた。ソネイは、彼女を彼の前任者コンドーの残した歓迎できない人物と見なし、そのためにおそらく彼女を追い出したかったようだ。彼女が去った直接の原因ははっきりしないが、いわゆる「サル」の檻事件が重要な役割を果たしているのかもしれない。ソネイ自らが言うことには、子供たちを楽しませるためにサルを入れた檻を収容所に運び入れさせたのである。しかし、サルは攻撃的で近寄りすぎる子供をかみついた。同じく収容所運営部にいたJ. E.ファン・デル・ハム - アンネフェルトは、ウィリンヘ夫人の要請でこの檻を除去するようソネイに願った。ソネイは彼の贈り物を拒否され激怒した。これらのサルは取り去られ、その後しばらくして、ウィリンヘ夫人と同様にファン・デル・ハム - アンネフェルトもタンゲラン収容所へ移され、同時に檻は再びもとに戻された。¹⁵

ウィリンヘ夫人が去ったあと、1944年4月からM. E. J. M.アバルバネル - レーデル夫

¹¹ D. van Velden 著, 「De Japanse interneringskampen voor burgers gedurende de Tweede Wereldoorlog.」(第4版, Franeker 1985), p493.

¹² Rinzema, p82.

¹³ Rinzema, p86-87.

¹⁴ Van Velden, p427.

¹⁵ NIOD IC 032.635, p3.

人が一時リーダーを務めたが、同年6月にはソネイにより外され、ふたりの教師 A. M. ロールダ・ファン・アイジング及び J. Ch. デ・クワント、そして英国人女性の代表者であるニコルソン夫人で構成されている「幹部委員会」が後任となった。この委員会内で最も頻繁にソネイと接触したのはロールダ・ファン・アイジングであった。収容所事務の必要性から、S. R. アメント夫人が起用された。この仕事は、収容所における供給品は事務所の資料をもとにしており、収容所に関することは全て報告書に記録しなければならなかったためかなりな量だった。

他の収容所と同様に、チデン収容所でも組織的に区分され、「ハン（班）」が4つ、そして各班に多数の「クミ（組）」があった。さらに、何回も行われた引越により組の配置もかなり変更されることがあった。班の責任者として「ハンチョー（班長）」がおり、組の統制は「クミチョー（組長）」が務めた。この役目の女性は班長あるいは組長の腕章を毎日装着することを義務とされた。また、一軒毎に家の責任者であるクパラがひとり選ばれた。

ソネイ

ソネイ・ケンイチは、1910年和歌山県由良村に生まれた。父親は神戸にある船会社で船長をしていた。ソネイには3人の弟がいた。1935年頃、彼は商業学校、現和歌山大学での学業を修了した。その後、兵役を終えると（少尉に任官）、父親が働いていたのと同じとおもわれる船会社へ就職した。1939年末、彼は再び徴兵された。東京近郊にある歩兵連隊で軍務に就いて2年半後の1942年7月には、ジャワに配属された。1942年9月に、バタビアの「第10大隊」戦争捕虜収容所の所長を務めた彼は、移り気で冷酷な振る舞いをした。1944年3月、ソネイ大尉はチデン婦女子収容所へ転属された。¹⁶

ある元被抑留者の女性は1946年に次のように証言した。「医師たちはソネイのもとでとてもひどい目にあった。看護婦も同様にだ。彼は病人、病院、そして看護に何か逆らうところがあって、それも彼自身も健康ではなかったのに」。¹⁷ ソネイは、極度の緊張と憂鬱な時期が交互に生じる精神障害である躁鬱病に罹っていた。加えて、彼はさまざまな月の周期に依存すると考えられている発作及び不意に夢遊状態、幻覚、発狂する神経症の一種である「ムーン病」を患っていたようである。この病気は、彼の発作的な激怒に対する無抑制さに一部示される。バタビアの第10大隊収容所にいたある戦争捕虜は、ソネイが声をたてて泣いたあと収容所内に駆け入り、運悪く彼の目に止まった人たちを容赦なくむち打ったのを目撃した。¹⁸ ムーン病の期間には、彼は他の時よりも早く激怒したが、彼の粗暴な振る舞いは満月の時だけとは限らなかった。

注目すべきは、ソネイが明らかに信頼していたと見られる収容所医師ライケブッシュ

¹⁶ Fred Lanzing 著、「Geen school, geen schoenen, geen ouders. Autobiografische aantekeningen over soldaten en vaders in Nederlands-Indië」内「Maatstaf 28」（1980）, p68-69.

¹⁷ NIOD IC 032.635, p10.

¹⁸ Van der Stouw-Lengkeek, p6 (S.A.Lapré 筆「Ten geleide」).

- ロンベルトに定期的に注射してもらっていたことである。同医師は彼に鎮静剤を与えていたようだ。ソネイは、投与される物質を知っていたか、また、この医師がだまして彼を信じ込ませようとし、ソネイは単に無害なビタミン剤と思っていたのかは不明であるが、仮に一番目の場合だとすると、ソネイは自分でもどこか正常でないことが分かっていたはずである。ライケブッシュ-ロンベルト医師が日本人の扱いを良く知っていたという現実により、彼女はかえって収容所内での論争に巻き込まれることになったが、彼女の注射が一層の悲惨さを予防し、また、時折、特別にいくらか薬品を手に入れることにも成功したのである。¹⁹

ソネイの病気は、その残酷さのみに示されるものでない。彼の犯罪行為は、心神喪失した精神病による不合理かつ不測の狂気に基づいていただけではなく、時には、目的意識を持ち計画的な性格をおびた処罰を行ったのである。1945年6月、ソネイがチデン収容所を去る直前に、被抑留者に強い印象を与えたふたつの処罰決行をもって彼の残虐行為は頂点に達した。6月5日に起こった最初の出来事は、食糧を積んだ車でいつの間にか収容所に乗り入れたソネイに誰も挨拶しなかったことにあった。この「尊敬の念に欠く」ことに対する怒りで、彼は車をそのまま収容所から出させて道路上にパンを投げ捨てた。被抑留者に食事を与えないようにするために調理場は閉鎖された。その夜、朝鮮人監視員ノダは、ソネイに気づかれないようにそっと、何人かの少女にそのパンを籠いっぱい拾い集めさせた。翌日ソネイは、この投げ捨てたパンを埋めさせ、自家用調理器具全部を引渡させた。6月7日になってやっと調理場の作業が再開され、飢えに明け暮れた2日間後に収容所の住人は再び温かい食事をもらったのである。また、6月5日と6日に入荷した食糧の多くは、すでに腐っており食用には適さなくなっていた。

ソネイがチデン収容所で科した最も衝撃的な処罰は、彼の後任者サカイが正式に収容所の管理を引き継いだ翌日の1945年21日から22日にかけての、-女性たちから「サンパルテルミーの虐殺」と呼ばれた夜間に行われた。6月21日の朝には、戦争終結についての噂がことのほか強くたち込めた。飢えに駆られ、平和の噂とソネイが去る予定で安堵の思いに至り、慎重さを欠いた数十人の女性が、収容所の北西側にある柵越しに真昼間からインドネシア人と衣類を食べ物と交換することを公然と始めた。このことは同時に相当な騒ぎをともなった。止めさせようとする班長たちの試みも無に帰した。収容所中に知れ渡り、日本人もこの知らせを受けた。当時まだ在所していたらしいソネイは、この事件を直ちにサカイから引き継ぎ、彼の意のままに行おうとした。

ソネイは、被抑留者たちを点呼刑として整列させた。「罪人」は、直ちに名乗り出なければならなかった。夜遅くなってやっと、彼の考えている数を満たす人々が申し出た。少なくとも20人の女性が虐待され、乱暴なやり方で頭を刷られた。特に、ハンチャー（班長）全員と数人のクミチャー（組長）はソネイ自らの手で頭を刷り上げられた。また、同じ夜に、収容所は罰としてさらに狭くされ、何軒かの家が明け渡されてゲデック（竹で編んだ柵）が移動された。加えて、調理場が閉鎖された。その翌日にソネイは去った。彼の後任者サカイは、直ちに調理場の

¹⁹ NIOD IC 032.635, p10; Rinzema, p66, p71, p109-110.

作業を再開させた。

上官たちの目にすら、今回のソネイの行いは度を過ぎていた。戦後行われた証言のひとつによると、ソネイは、「唯一のパン配給を差し止め、およそ 20 人の女性の髪を切り落としたゆえに」²⁰ 叱責をとまなう訓戒を受け、10 日間拘束された。この罰が実際に処されたのか、また、誰によりこの問題が日本当局の上層部へ持ち込まれたのか、(おそらくサカイによるか?) は不明である。おそらく、この証言は自己の利益のために行われたのであろうが、日本当局の上層部さえも(結局のところ)ソネイの行為を許しがたいと完全に認めていたようである。ジャワにおける全ての戦争捕虜収容所及び民間人収容所の責任者である中田正之大佐は、戦後に、「チデン収容所でのソネイの行動が多分に非難さるべきこと、欧州人の女性たちの頭を剃り上げることは非常に品位を落とす行いであること、このことに対し、また、収容所内にはびこっていた全ての悪習に対し、何も知らずにいたためにいかなる手段も講じることができなかったことを自ら恥じている」²¹ と証言した。

一方、バタビア地域にある軍人と民間人用の全ての収容所の所長であった河辺 正中佐は、戦後に、チデン収容所でこのような暴力もしくは常に虐待があったことを何も聞いていなかったこと、ソネイは立派な将校として知られていたこと、軍人報告書内では良好であり、また「前述の件(つまり、ソネイが訓戒を受けた件)で初めてソネイの躁鬱病について知ったこと、…中略… 自らが組織した将校の会合で勤務以外の時にソネイと定期的に会っていたが、彼に何か特別などころがあることは一度も気づかなかった」²² と証言した。バタビアを去ったあと、ソネイは、昇格と見なすこともできるであろうジャワの全ての戦争捕虜収容所の本所があるバンドンへと転属された。ソネイの上官たちは、1945 年 6 月の彼の行いを明らかに嘆かわしいことだが、偶発の逸脱行為と見なした。つまり、このことが彼を上級の役職には不適であるとする理由にはならなかった。あるいは、ソネイを収容所から「退けて昇格させる」ことが彼らの目的だったのであろうか?

ソネイ・ケンイチは、オランダ領東インド占領時代における最も悪名高い収容所長として歴史に残っている。彼の犠牲となった人々の多くが、彼をサディスティックで粗暴な者、人間の姿をした悪魔と見なしたのである。この見解は、彼が被抑留者に屈辱を与え、虐待することを楽しんでいて、彼の不品行には目的があったことを示すものである。この意見に対して反論することは困難であるが、これだけが彼の行動について考えうる唯一の証言とは思えない。同じく、日本人監視員と欧州人女性被抑留者との複雑な関係も考察されるべきことである。ファン・フェルデンは、日本と欧州との文化の違いによる不可解さは、男子収容所よりも婦女子収容所の方がより多く存在していたことに関心を向けた。大半の日本人は、女性は不平を言わずに従順でなければならないとの考えでしつけられたとすれば、不従順な女性たち集団の責任者としての地位に突如立ったソネイは、自分が彼女たちから軽蔑されていたことを知っていたはずである。

²⁰ Van Velden,p493-494.

²¹ NIOD IC 028.921, p5.

²² NIOD IC 028.922, p10.

彼にとり、また他の多くの日本人軍人も同様に、婦女子収容所の管理に携わることは特別にいら
ただしいことであった。²³

ソネイからして見れば、女性たちは下劣で反抗的に振る舞ったのである。感謝の気持
ちと従順さに欠ける彼女たちは、彼に不可解な印象を与えたのであろう。女性たちは彼にとって
まるで理解しがたい態度を示したのであった。ファン・フェルデンによると、被抑留者の女性た
ちは、「もしソネイが狂っていなければ、彼は1万いる私たちのうちのひとりとなったはずだが」
²⁴ と語りさえしたようだ。ソネイの直属の上官である河辺 正中佐は、戦後同じようなことを
証言した。「欧州人の女性たちは、我々が持っているような、つまり、…自己修養とか自制心と
かいうものがなく、非常に扱いが困難であった。チデン収容所は、管理が非常に難しく…中略…
収容所長は信じがたいほどの精神的苦痛を受けていた」²⁵

このことはもちろん弁解として扱ってはならず、このいわゆる「精神的苦痛」は、日
本人が女性たちを強制収容することで結局自から招いたことであり、また、日本人の所長全員が
ソネイのように度を越したわけではなかったのである。しかし、彼の非難されるべき行為に対す
る証明は、一般に見なされている彼のサディスティックな性質におけるよりも、環境的、心理的
な要因においてまず調査されるべきであろう。²⁶ ことによると、ソネイは、彼にとってこの非
常に異様かつ不可解さで欲求不満となる状況に面目を保つことが難しかったために、日本軍で利
用されている手段、つまり、厳格な規律を頼みの綱としたのかもしれない。いわゆる「サンパ
ルミーの虐殺」について、ファン・フェルデンは次のように述べている。

「あとになって人々は、女性たちがソネイを嫌悪していたと同じ位、彼は婦女子収
容所と収容所長としての地位に強く嫌悪していたような気持ちを抱かされるのだ。
彼がまったく正しいと信じていた方法、厳格さでもって女性たちに軍隊の秩序と規
律を仕込もうとしたことが失敗し、それに対するうっぶんがあった実情で、明らか
に彼は出発に際し女性に仕返ししたかったのである」。²⁷

極端な欲求不満、不可解さ、不安定な精神状態が不幸に組合わさり、ほとんど制約のない、無統
制な権力の行使を背景として、ソネイは、最も恐れられかつ憎まれたジャワの収容所長とされた
のである。

²³ Van Velden, p420-421.

²⁴ Van Velden, p421.

²⁵ NIOD IC 008.805.

²⁶ 当時 11、2 歳であったフレッド・ランジンは、チデンでソネイのやさしい一面を見い出した。(Lanzing, p65-66) .

²⁷ Van Velden, p495.

収容所での生活

初期には、収容所はまだ「開放」されていた。住人は、夜 11 時（日本時間）に戻りさえすれば、自由に入出入りできた。加えて、制限されてはいたが、女性たちは依然としてインドネシア人の使用人（これは主に家事を手伝うバブであった）を雇うことを許されていた。しかし、徐々に自由は制限されていった。まず、1943 年 1 月末からは週に 2 日だけ収容所の外へ出ることが許されていたが、1943 年 3 月 1 日以降、バブは収容所内に入れなくなり、1943 年 5 月初め、収容所の扉は完全に閉ざされた。

前述にあるように、入居する女性たちの配分は GESC により調整されていて、女性たちは、1 軒の家に誰と一緒に住みたいかを申し出ることができた。その上、これは可能な限り考慮された。また、このことは、1942 年 11 月にマルガレータ・ファーガソンが記したような「コンビネーション」の形成を容易にしたのである。

「コンビネーションは、—この言葉はここですっかり定着している— 共同で炊事することに決められた大抵 1 家族以上のメンバーにより成り立っていて、これに関連する全ての仕事、買物も順番に行われるのである。食費もひとつにまとめられている。ものすごくうまく行く時がたまにあるが、しょっちゅう激しい喧嘩が起こる。この少しばかりの間に、相当数の交友関係が破れてしまった。『コンビネーション』は、また、洗濯、雑巾がけ、庭の掃き掃除における共同の分担作業にも携わっているが、炊事が一番重要なのである」²⁸

初等教育は、初期には許可されていたが、マレー語でこれを行わなければならなかった。コンドー所長は、視察の際にマレー語が公用語であるかのようにしていれば十分であると人々に理解させた。正式の学校は 1943 年 1 月 1 日から 8 月までであった。この学校が廃止されたあとは、授業を行うことは禁じられ、教科書の使用さえも許されなかった。収容所では、初期にローマカトリック、プロテスタント、そしてクリスチャンサイエンスの集會が開かれていた。コンドーは宗教的な集まりを一度も禁止したことがなかった。

軍政が実施された 1944 年 3 月以降とソネイの着任後には、収容所の管理体制が一層厳しくなった。外界との接触は全て遮断され、収容所の孤立化は完全となった。以後、正門は閉ざされた。礼拝式は一切行うことを許されず、埋葬の際の祈りさえもしてはならなかった。ファン・フェルデンによると、ある日（彼女は正確な日付を載せていない）日本軍の高官が視察に訪れた。ちょうど誰かが死亡し、死者に別れを告げに来た人々が棺のまわりに黙って立っていた。その日本人はこれを見て、死者に何回もお辞儀したあと、声高にソネイと話をした。最後に、高官は女性たちに挨拶し去った。それ以来、埋葬の際には再び「父なる神」を声を出して唱えてもよいこ

²⁸ Ferguson, p73.

とになった。しかし、これは日本当局の高官が、ソネイの措置から被抑留者たちを保護するために直接介入した唯一の時であった。²⁹

宗教的な集まりを開く代わりに、プロテスタントとカトリックの聖職者は、彼らの説教を書き留めてから、収容所の規則では禁じられてもいたのだが、「回状」として収容所に配布した。また、この文書は「クリスチャン便り」とも呼ばれた。このことを1944年9月にかぎつけたソネイは、被抑留者を点呼刑として整列させた。説教文を配布したり読んだりした女性は全員正門へ行かされ、そこで何時間も照りつける太陽のもとに立っていなければならなかった。このクリスチャン便りをタイプまたは配布した「主犯」の7人、つまりプロテスタントの居住区シスター6人とカトリックの修道女1人は、数日間にもわたり監禁された。この出来事はのちに「説教文事件」と呼ばれた。その結果として、全ての「宗教関係者」（居住区シスター、修道女、牧師、神父）が、どこかほかの所へ移転させられたのである。1945年6月にサカイが着任すると、この新しい所長は、宗教的な集まりを再開する許可を与えた。

1944年3月以降、チデン収容所では点呼が1日に2度、すなわち午前7時半と午後7時に行われた。医師の診断書または命令された仕事がある場合に限り点呼に出る必要はなかった。しかしながら、このような証明書も常に助けとはならなかった。9月末には、ソネイは、医師がこれら証明書に寛大すぎるという理由で、病院からの重病者さえも含めた患者全員に対し何時間にも及ぶ点呼刑を科した。その際に、スケルテマ・ヨウステラ医師はある患者を擁護した理由で虐待された。いずれにせよ、点呼では、監視員が上手に数え上げることができなかった模様で、いつも途中で混乱に陥ってしまったため、毎回トラブルを生じたのであった。点呼をとった者は、めったに実際の人員数を数え上げたことはなく、幸いにも班長の報告を信用したのである。チデン収容所の副所長オハラ軍曹は、戦後次のように語った。「君たちは点呼を嫌っていたが、我々が楽しんでやったとでも思っていたのか。我々が到着した時に、『また、いまましいヤップめが』と君たちがみんな思っていたことを我々は知っていたのである」³⁰

収容所運営部は、いくつかの雑役班を組織した。雑役の当番は、収容所の全住人に順番がくるようにグループが交替で行った。病人と幼い子供のいる母親は免除された。菜園班は、セラジューフィールドで野菜の栽培を携わった。この仕事は、ソネイが園芸用具を支給しなかったため、女性たちは包丁や皮むき用のナイフで間に合わせなければならなかったので過酷な作業となった。重作業班は、16歳から20歳までの少女がいる固定したグループで編成されていて、引越の手伝い、日本人の命令による収容所の柵の移動のような重労働に携わった。ドブ掃除班は、病院のつまった排水溝を流し込んだ。この不潔な作業を終えた少女たちは手をリゾール液で消毒した。

初期には、自転車修理班もあったが、自転車が没収されたあとにはこの班は廃止された。かなり後期になって、およそ5人の女性たちのいる棺班が編成された。木材の不足から、棺

²⁹ Van Velden, p375.

³⁰ Van Velden, p419.

は編んだ竹で作られたが、時折、粗末な包みの側面から遺体の水分がにじみ出る結果となった。1945年1月以降、ふたつの中央調理場のために調理班と下準備班が結成された。調理は固定した（信用のおける）グループにより、下準備の仕事は順番で行われた。調理班は、はんごうに詰めると180キロほどあるものを作り、夜中の3時には火を焚かなければならぬ過酷であった。また、夜の巡回もチデン収容所では義務づけられた。抑留最後の時期には、子供の雑役として害虫の捕獲、汚物だめの汲み取り、病院の敷地の掃除などがあった。その他、年少の子供がしばしば病気やからだの弱った母親の雑役を代わりに行った。特定の雑役をした女性や少女は、少額の報酬や（時々）食べ物の特配（いわゆる雑役スープ、雑役ご飯、雑役パン）をもらった。内職として稼ぐほかの方法として、日本軍のためにソックスを編むことがあり、1足につき30セント手にすることができた。

毎晩、灯火が漏れないようにしなければならなかったが、照明に覆いをする材料は支給されなかった。そのため、ほとんどの家では、やむなく暗闇の状態におかれてしまった。この状況下では、ゆっくりと読書することさえできなかった。軍政下では、日記を綴ることや、書籍を他の人に貸し出すことは禁止されていた。加えて、日本人収容所長の検印が押された本のみ所持することが許された。しかし、この禁止条項は必ずしも実行されず、チデン収容所では最後まで図書室が秘密で機能していたのである。点呼（刑）などの呼び出しのような日本人や収容所運営部からのさまざまな通告は、スピーカーを通して収容所内に放送された。「居住区のあちこちに、一日中音を発し、時折ひどく調子の合っていない改造スピーカーの入った箱を付けた高い柱が立っている。その近辺に住むのはさぞかし不快であろうと私には思える」³¹ 他の収容所と同じように、ラジオは引き渡さねばならなかった。こっそりと隠し持っていた者がいたかどうかは不明であるが、1945年5月に、チハピット収容所（バンドン）から移送されてきた女性たちにより分解したラジオがこっそりと持ち込まれたのであった。³²

女性たちはチデン収容所での日常生活をいかに体験したのであろうか？ マルガレータ・ファーガソンは1943年7月に次のように記した。

「居住区で、生き生きと感じ続けていることは時には困難となる。それには努力、精力、活力、ユーモアのセンスがいる。特に些細なことに生き生きとしたものを見出し、体験していかなければならない。なぜならば、おおざっぱに見ると、私たちの生活は、単調な暑さの中に、単調でぐずつく雨の日々の中休みがあっても、男女間の交際による緊張感のない、家事にあくせく働き、骨折る退屈なくらしだから」

33

同様に、他の多くの人々にとっても収容所の生活は困難であった。1943年3月に収容所リーダー

³¹ Ferguson, p82.

³² Rinzema, p147 (注 186).

³³ Ferguson, p153.

一のウイリンへ夫人は次のように報告した。「先月までの期間と比較すると、神経障害の人数が驚くほど多い。この神経症は、住むことを強いられている過密した環境、同時に小さな子供がたくさんいたり、病人のいる家庭では特に負担過剰な家事に原因があるようだ」³⁴ 神経障害の数はそれ以来さらに上昇し続けたと言ってもよいだろう。精神的・肉体的活力は、年月が経過するに従って一層弱まっていった。ファン・フェルデンによると、女性たちは抑留されていた最後の年には、「新しい移送との統一を形作ることができなかった。新しいグループに古い知人を見つけてもうほとんど反応を示さない。200メートル歩いて誰かを訪ねるのも非常に遠すぎた」³⁵ 新しい移送は、大抵、新来者に場所を空けるための新たな引越をも意味した。多くの強制的な引越(刑)は、住人が収容所全体に配分され、再び異なった環境に慣れなくてはならなかったため、それに直接関係した者にとっては悩みの種となった。このようにして、多数の引越では、女性たちにおける精神的混乱がかなり示された。「引越は災難だ。エネルギーをととも必要とする。全てのものを自分で引きずりながら持ち運ぶのはまだなんとかなる。もっといやなことは、信頼していた数少ない人々のもとから離れなければならないことだ。こうして最後のささやかな人間的な暖かみさえも私たちから奪われてしまうのだ」³⁶

食糧と健康

1944年4月まで、バタビアにある強制収容所に対する食糧の供給は、GESCの管理下にあった。同委員会は、インドネシア人及び中国人の業者が収容所へ食品の在庫を配送するよう手配した。GESCに従事していたラメール・シビンガ・ムルデル夫人は、毎日自転車で注文を取りに収容所を訪れた。この時期には、チデン収容所における食糧の供給は、パサール(市場)、居住区内トコ(売店)、トコ集配所からなる3つの施設を利用して調整されていた。

1. パサールは、傷みやすい食品の供給を行い、そのため、野菜、肉類、くだもの、卵などを毎日改めて入荷しなければならなかった。1943年9月・10月までは、インドネシア人女性の売り子が各自の品物を直接パサールで売ることすら許されていた。

2. 居住区内トコでは、米、砂糖などの長期間保存できる食品が販売されていた。ここでの注文と支払いは同じくGESCを介して行われた。トコで得た少しばかりの収益は、店員への支払い(トコやパサールで働く女性は、月額約30ギルダーを稼いだ)及び貧困者を援助するために使用された。

3. トコ集配所は、実際には、「居住区」の外にいる業者の代理人に対する総称であった。若干数の女性はこれら業者のために、時にはパサール、だが、大半が自宅に集配所を設けていた。これら女性は、GESCを介して業者と取引するトコ集配所の責任者のもとで注文と清算を

³⁴ NIOD IC 052.158 チデン居住地における2603年(1943年)3月に関する医療報告。

³⁵ Van Velden, p411.

³⁶ Van der Stouw-Lengkeek, p48.

行った。このようにして、トコ集配所はミルクの配給を調整していた。

これら公式の施設に加えて、収容所には衣類、裁縫道具、自家製の軽食などを売る女性たちの小さなトコが多数存在した。この様子は、当時の実体を優るかのようであるが、実際は、全ての必需品が供給されていなかったことは、1943年8月にマルガレータ・ファーガソンが日記に綴った証言により明らかとなる。

「絶えず、びっくりさせられる。明日から収容所に石けんが入らないこと聞いた？ まだあるかどうか見てこよう！ パサールへ駆け込んだ。そこには、一人につき卵3つと砂糖を少し買うことができる女性が長い行列をなしていた。私の番になって、ひどくちっちゃな石けんのかけらをもらった。私はこのために1時間も立ちどろした。翌日も、パサールへ行かなければならない。現在6人いる『コンビネーション』のために買物をする当番なのだ。…中略… バターが必要だけどないし、お酢もないが、石けんならあるのだ。長い、石炭酸の匂いがする棒状のだ。私が欲しいと思えば、4本も買える。…中略… 本当に必要なものを買うことができないし、実際に必要な時にあまり買えないと誰もがいつも感じているのだ」³⁷

多数の女性が何も所有していなく、そのため何も買うことができなかったが、他方、お金を所持していた人は、その時点で入手できるものが何であるかを静観していなければならなかった。

1943年10月半ばまでの食糧の供給はまずまずで、被抑留者は、一人当たり1日約1500～2500カロリーを摂取していた。その後この数字は下降していった。最初の痛手は、1943年9月・10月に、インドネシア人女性の売りが締め出しになった時に受けた。それからは、各家の責任者が収容所運営部のもとに食品の必要量を申し出た後、GESCを介して収容所の外にいる卸売業者へ発注されるシステムに移った。しかし、このシステムは柔軟性があまりなく、事務的に非常に面倒がかかったため、すぐにも食糧の供給は他の方法で手配されるようになった。結局、GESCが、収容所全体に対して十分と思われる量の野菜をパサールへ届けさせ、家の責任者が輪番システムに基づいて順番に買物することができた。

2番目の痛手は、1944年3月、軍政の実施にともない、全ての現金を引き渡さなければならなかった時であった。これは、該当した者に対して横浜正金銀行に口座が開設され、個々の「口座開設者」は、毎月この中から10ギルダーを食品の購入に当てることが許された。このことは現金を何も持っていない女性は、何も買えないことを意味したため、欧州人収容所運営部は、食糧を共同購入する目的で共同口座を開設するために自ら集金することを計画した。約60万ギルダーが集まり、その中から毎月各被抑留者に付き10ギルダーが収容所用に向けられた。³⁸ ウイリンへ収容所リーダーは、現金は全て共同で使用するために入金され、戦後に政府から返済

³⁷ Ferguson, p160-161.

³⁸ NIOD IC 040.116, p8 では、集まったお金は80万とあるが、NIOD IC 052.155, p5には、60万ギルダーと記されており、Rinzema, p85では、前後関係に誤りがあるが、同じく、金額60万と記されてある。

される予定であることを約束したため、同時にその成果は非常に多大であった。このことは、実際に行われ、支払証明を提出することができた者には、納入した金額が即座に払い戻された。³⁹

銀行に現金を引き渡したあとに、収容所運営部は必要に迫られて配給システムに移行した。各家庭は一週間に一度長持ちのする食品をトコで受取ることができた。その週に入手できる品物が載っている、トコの大きな掲示板で各自の順番、また、その週に入手可能な品物の知らせを読みとることができた。傷みやすい物資の毎日の配給は、パスールを通して行われた。全部の家がこのために番号をもらった。毎日、最初に番となるが番号が 50 ずつずらされたことにより、どの家も同じ回数で、良質の野菜やくだものなどを選べるように先頭の順番がもらえた。収容所全体のために不足した量で入荷した物資に対しても同じ番号順に行われた。

1944 年 4 月、GESC（当時、POP⁴⁰と改称された）は、収容所関係への全ての干渉を禁止された。これはパスール、そしてトコ・システムの終幕を意味した。被雇用者へは、質量ともに食糧事情の悪化を意味することになる、日本人により入荷されたものが主に割り当てられることとなった。1944 年の夏から、さらに少量の食糧が収容所に入ったが、ソネイによると、このことは、集めた現金が尽きたためであった。抑留最後の時期には、女性たちは一日に 800 カロリーにも満たない給食を受けていた。その内訳は、生米 80 グラム（調理済の場合は 200 グラム）、数本の茎野菜、水で薄めたタピオカまたはキャッサバの粥 100 グラム、砂糖 12 グラム、また、数日毎に、ゴムのように固かったため多くの人が一夜水に浸したタピオカのパン約 5 センチ。⁴¹ 特配として、被雇用者は約 10 日に一度 1 盛のモツをもらった。10 歳以下の子供は、半人前の給食をもらっていたが、これは、母親が結局自分の僅かな分け前を与えることになったため介入措置となった。

この僅かな給食を補うために、セラジューフィールドで野菜が栽培された。大規模な「個人の」菜園は、カンクン（野菜の一種）、トマト、唐辛子などの栽培に利用された。1944 年半ば、日本人は、全部の空き地を耕し、野菜を植え付けることを命令した。班長たちは、この種の作業をする道具を女性たちが所持してないと抗議したが効果なく、日本人は頑として聞き入れなかった。6 週間にわたり、女性たちは照りつける太陽の下で乾燥して固い土の固まりを掘り起こし、細かく砕いたのである。

1945 年初めまでは、大半の女性は自炊、またはコンビネーション毎に各所の部屋や庭で木炭の火で 4、5 人の人が調理にあたった。1945 年 2 月以降、食事は 2 箇所調理場でまとめて用意されることになり、家の中や庭で火を焚くことは禁じられた。それ以後、収容所運営部により決められた受取り番が、交替で呼び出しに従い班毎に食事を取りに行った。調理場に水を十分に備えておくために、食事を取りに行く女性たちは、おけに水を入れて持って行った。午前中に収容所に届いた食糧は、まず収容所病棟用に向けられた。特別食は、調理場で作られ、病棟と同じようにその他の所も医師の処方に従って分配された。

³⁹ NIOD IC 052, 155, p7-8.

⁴⁰ 「Pertoeoengan Orang Peranakan（混血系への援助）」の略称。

⁴¹ Rinzema, p79.

ソネイは、収容所内に個人所有の現金がまだ存在していると疑った。この憶測は、ことによると、何人かの死亡者のもとでかなりの金額が見つかった事実によるのかもしれない。彼は、1945年1月上旬と3月下旬と2回にわたって隠し持っていた現金を引き渡す命令をした。1945年2月4日に、ソネイは3日以内に40万ギルダを集めるよう欧州人収容所運営部に命令した。集められた現金は、特別に食糧を購入するために使用されるとソネイは説明した。家宅捜査のあと、依然現金が隠し残されていることが判明した場合には、収容所全体に対して、食糧の差止め、病院の縮小または廃止、居住区の削減をする厳罰に処すとされた。収容所運営部と医師たちも同様に現金の引き渡しを強要した。明らかに、ソネイはその結果に満足していなかった。なぜならば、彼は3月下旬に、現金を3月30日までに引き渡さなければならぬと要求したからである。最終的にいくら現金が集められたかは不明であるが、おそらく数十万ギルダになったとおもわれる。⁴² この金額は配給用基金に振り込まれたが、食糧事情のいかなる改善にも至らなかった。

ジャワの収容所では、赤十字社の小包を1944年5月と1945年5月と2回受取った。2回目の救援品が配布される前に、日本人は、総督の妻であるC.チャルダ・ファン・スタルケンボルフ-マールブルフ夫人を1945年3月15日に、この救援品の受取りを彼女に署名させるためにチデン収容所からタンジョンプリオク港へ連れ出した。赤十字小包1個が8人から12人の間で分配されたようだ。⁴³

1944年11月から1945年3月にわたって、ジャワにある全部の収容所はスウェーデン及び/またはバチカンを通じて東京へ送金されたオランダ政府の救援金から一人当たり控え目な金額である約8ギルダから10ギルダが支給された。このようにしてチデン収容所でも、ある班長の報告にもあるように、1945年2月1日に、東京の教皇特使から65,950ギルダを受取ったとされている。女性たちが署名しなければならなかった領収書には寄付者として教皇代理とは記されてなく、「在ジャワ強制収容所最高司令官」となっていた。金額は日々の配給費の支払い分として収容所内現金に振り込まれたが、前にも述べたように、食糧事情の改善は何も示されなかった。1945年3月28日、英国政府から金額不詳の支給を受け、1945年8月1日に、一人当たり約12ギルダ余りとなる総額128,405ギルダのオランダから2回目の救援金を受けた。1944年7月上旬、チデン収容所の被抑留者は、大半が子供用のいわゆる「教皇からの靴」を受取った。そして、履物を全く持っていない人々の間でくじ引きされた。女性たちはこれらのものが一体どうやってバチカンから東インドに届いたかについて頭を悩ましたのである。⁴⁴

療養施設として、チデン収容所にはラーン・トリヴェリに病院、保養所（危篤の病人

⁴² 2月のみの回収を述べているリンゼマによると、「誰もが驚いたことに」総額40万ギルダが分割されて集められた。(Rinzema, p84-85)。1945年11月現在のレポートで、元班長コーテ-ブッカーは、要求額を40万としているが、彼女によると、これは3月末に実施され、10万ギルダ「のみ」回収された。(NIOD IC 000.230-231)。2月上旬と3月下旬と2回現金が集められたという事実は、日記の原文で確認されているが、金額は述べられていない。

⁴³ Van Velden, p178-179.

⁴⁴ 靴はおそらくバチカンの寄付金で費用が負担された。Van Velden, p160-162.

も含め)、精神病棟、赤痢病棟、孤児院、そして高齢な男子のために老人ホームがあった。ひどい衛生環境、到着する移送でますますいっぱいとなった収容所、そして乏しい食糧により病人の数は不安にさせる状態にまで上昇していった。赤痢の蔓延から収容所を守るため、その患者は赤痢病棟に完全隔離された。患者は面会を受けることは許されず、急死した場合には告別する機会もない結果となった。そのため、赤痢病棟への入院は、特別に不吉なことと思われていた。それだけに、母親の多くが病気の子供をできるだけ長い間自分のもとに置いておこうとしたのも意外でない。医師に一度赤痢と診断されると、もう赤痢病棟への入院を逃れられなかった。赤痢病棟では、頻繁な使用ですぐにも先が丸くなり曲がり、時々、爪ヤスリで先をとがらしていた注射針が2本だけ用意されていた。⁴⁵

家々の衛生設備は一般に問題が多かったので、チデン収容所は病原菌の温床と化した。当時、水道管が不良となった時には、衛生状態は非常に深刻となった。多くの被抑留者が赤痢に罹った。新しい赤痢患者は、一口のぬるま湯とくだものを一片もらったが、大抵2日後にこれは与えられなくなった。病人は薄い少量のお茶と粥にした灰色のパン、米粥とサンバルもらった。1945年3月に、バタビアの強制収容所から、死を目前にした重病人を運び入れて収容する元修道院の聖フィンセンティウス「病人用収容所」が開設された。

チデン収容所で抑留中に死亡した人、または、聖フィンセンティウス病院で死亡したチデンからの人の総数は明確にされていない。1945年4月から8月までの期間に関してだけ、ファン・フェルデンが深刻な数字を示している。結局、収容所人口約1万人に対し、31人の少年と老人を含む311人の死者が出た。このことは、日本降伏前の5ヶ月間に1日平均2人死亡したことを意味する。リンゼマによると、終戦近くには、チデン収容所において1日約5、6人が死亡し、およそ1,200人の患者がいた聖フィンセンティウス病院では1日約12人が死亡した。1945年4月以前の死亡数はいくらか下回ると推定される。⁴⁶

戦後

すでに1945年8月17日には、被雇用者は戦争が終わったと強く感じていた。当日は、給食の米が200グラムから400グラムに、子供には300グラムに増加した。さらに、2日分として砂糖が2倍量配給され、大量の「肉」(食肉処理の屑)が入荷した。8月23日、ロールダ・ファン・アイシング収容所リーダーは、日本の降伏を正式に知らせた。この発表は次の通りである。「ポジティブなニュースを伝えます。平静を保ってください。灯火管制はなくなりました。移管されるまでは、収容所を出ること、外部から訪問を受けることは固く禁じられています。私たちはウィルヘルムス斉唱と国旗掲揚を正式日程まで待ちます」⁴⁷ 収容所の住人はその大多数が歓喜を表

⁴⁵ Rinzema, p73.

⁴⁶ Van Velden, p368 p371; Rinzema, p23.

⁴⁷ Rinzema著書からの引用文, p103.

わすのにはことのほか衰弱していたり無感動であった。加えて、大きな変化は起こらなかったのである。つまり、抑留されていた女性たちは、増量した食事をもらってはいたが、日本人のもとにあったと同じ状況の中でその後数ヶ月を過ごした。降伏後の初めの週には、1日に8人から10人が収容所で死亡した。配偶者、家族、知人の死亡通知がたくさん届いた。数人の被雇用者は家族を訪ねて出たが、大半が連合軍による「本物の」解放を待った。生活は精神面で抑留期間中よりも一層耐え難いものとなり、勇気を決して失わなかった人の多くが、この悲惨さと失望に対処しきれなかった。

状況は、さらに一層混乱していった。8月29日、兵捕の監視員は日本兵に代わった。9月8日、RAPWI（連合国軍俘虜救恤隊）の最初の一団がバタビア（ジャカルタ）に到着した。9月29日、英軍が市街を占領。彼らがそこで直面した状況は混乱そのものであり、この状態を統制するには兵士の人数が少なすぎた。バタビア（ジャカルタ）の大部分は共和主義者の手に収まっていた。そのため、英軍は10月にジャワに押し寄せた暴動の波を防御することができなかった。この混乱した不安定な状況により、チデン収容所の正門は再度閉じられた。1945年末頃には、中部ジャワのすでに明け渡された収容所からの避難者とバタビアで送還を待つ人々とで、住人はさらに数百人も加わりさえしたのである。その年の変わり目頃になって初めて、民族主義のプムダ（青年革命家）が市街戦を停止した。その後、大規模な送還が開始され、1946年2月にチデン収容所は閉鎖された。

戦後に、若干数の日本人は、収容所における険悪な状況に加担したことを理由に起訴された。ソネイは、「計画的な暴力行為」、戦争捕虜及び民間人被抑留者に対する粗暴な扱いをしたとして死刑が求刑された。判決の一部は次の通りである。

「被告は3年にわたり、絶えず意識的かつ計画的に正しい人間性の秩序と規律を乱し、また、数千人もの人々を誠に悲惨な状況に落とし入れ、戦争状態により日本にとって決して正当とされない方法によってなされた比類なき背信行為に報いるものとして、本法廷は、被告に対し死刑を求刑する」⁴⁸

ソネイは1946年12月、死刑に処せられた。当時これに立ち合い、死亡証明書に署名したオランダ人医師は、ソネイの脳を摘出し、その後、自らが行う病理学の講義における研究資料として利用した。⁴⁹

ソネイの上官たちも起訴された。彼らは、自ら責任を有する収容所内にはびこっていた悪習に介入を怠り、これを停止させなかったとして、河辺 正中佐には死刑が求刑され、中田正之大佐は15年の懲役刑を宣告された。

⁴⁸ Van der Stouw-Lengkeek著書からの引用文, p.94.

⁴⁹ Gavan Daws著, 「Gevangenen van de Japanners. Krijgsgevangenen in de Pacific gedurende de Tweede Wereldoorlog」 p423 (Baarn 1996) 同医師は当時日本軍の戦争捕虜であった。また、彼の妻はソネイがいた収容所に抑留されていた。

チデン収容所移送の推移

年月日	入所以前の収容所	移管先	移送人員	在所者総数	移送構成
1942年—1943年	バタビア地域		3,430		女性・子供 高齢男子
1943年7月11日		グロゴール	400		貧困婦女子供
1943年8月16日 ～31日	クラマツト		2,200		女性・子供
1943年11月12日・13日		アデック	50		17歳の少年
1944年4月1日				5,286	女性・子供 高齢男子
1944年4月18日		タンゲラン	10		ウィリンヘー・スリ ハー収容所リーダー と看護婦
1944年6月14日	タンゲラン		314		「英国人」女性と子供
1944年8月29日		グロゴール	650		11歳以上の少年 高齢男子
1944年8月29日	グロゴール		850		女性と子供
1944年9月8日		タンゲラン	200		英国人、米国人、 ユダヤ人女性と子供
1944年9月11日		クラマツト	105		「宗教関係者」
1944年9月15日	クラマツト		440		女性・子供 病人
1944年10月12日	ケドン・バタック (ボイテンゾルグ)		537		女性と子供
1944年12月1日	カレーズ (バンドン) ケドン・バタック		900		女性と子供
1944年12月2日	チハピット (バンドン)		200		女性
1944年12月13日	グロゴール、ストリ ウス、アデック		230		病気の高齢男子 老齢男子
1944年12月28日		タンゲラン	214		女性と子供
1944年12月30日		グロゴール	100		女性と子供
1945年1月1日				7,650	女性・子供 高齢男子
1945年1月26日		カンポン・マカッサル	590		単身女性
1945年2月25日		バロス第6 (チマヒ)	150		11歳以上の少年
1945年3月4日		聖フィンセンティウス	200		病人
1945年3月19日	コタ・パリス (バンドン)、ケドン・バタック		581		女性と子供
1945年3月21日	アデック		1,212		女性と子供
1945年4月18日	グロゴール		1,030		女性と子供
1945年5月13日	チハピット (バンドン)		1,000		女性と子供
1945年6月18日		中部ジャワ	1,000		女性と子供
1945年8月23日				10,300	女性・子供 高齢男子

出所：H. Beekhuis 著「Japanese burgerkampen in Nederlands-Indië. Deel 1 Java : 29 kampen」(Groningen 1996) p19 (補完作成)

日記の作者

ベルフ

エルス・ベルフは、1926年7月23日に生まれた。父親のC. C.(ケース)・ベルフは、バタビア法科大学の教授であった。母親は、A. A.(アリ)・ベルフ - ファン・ウルデンと称した。家族には他に、弟ロップ、妹のパウリーン、マグダ、トレース、エルナがおり、エルス・ベルフは一番年上であった。1942年1月12日に次男が生まれ、父親にちなんでケースと命名された。

1942年1月4日に、エルス・ベルフは日記を書き始めた。彼女の父親は市警備隊に配属され、同時に軍事検閲官として働いていた。1942年3月5日、日本軍が夕方バタビアに侵攻。数人のインドネシア人が略奪を始めた。エルス・ベルフによると、日本人自らも商店を空にし、「でも、彼らがやたらに打ちまくったりしているなど、私はそんな風感じてないし、彼らはかなり礼儀正しいらしい。もちろん、いろいろな噂が広まっているけど、そんなの頼りにならないわ」(1942年3月8日)。他の大半の市警備隊員と同じように父親ベルフも、最初はグロドック、その後、ストリウスの刑務所にすぐにも監禁されてしまった。町の占領状態が、彼女に敵意を喚起することにはならなかった。「この占領がそうひどいとは思わないし、ヤップに対してかっとくることもないが、でも、まったく熱狂的に日本の小旗を持って走り回っている原住民の若者に対してはあるのだ」(1942年3月8日)。7月末に、ベルフ一家の残りの全員は、住んでいるタナー・アバン・ホイベル沿いの家の立ち退きを受け、テロック・ベトン通りへと引越させられた。

1942年10月に、母親ベルフは7人の子供たちとともにチデン収容所に抑留された。1944年8月末にアデックへ移された弟ロップを除いた彼女たちは、全抑留期間をこの収容所で暮らすことになる。エルス・ベルフは、初期には規則正しく、入念に日記をつけた。自分の日記については次のように考えている。

「あとでこれを誰かに読ませるかしらと自問してしまう。きっとお母さんにはしない。これはとっても完全、いやむしろ不完全、私の真からの自我だ。不完全と言ったけど、なぜなら、自分自身を表現することは、絶対に完了しないから。でも、結局これがまさに私の本心なのだ」(1943年10月8日)

エルス・ベルフは、芸術性に富んだことをしたいという、内面に強い衝動を感じて書くのである。彼女はこのことを次のように表現している。「今のように、日記に書こうとする時はいつも、意見を述べるため、創作するために絶えず満たされない感情を持っているからだ。詩を作りたい、絵を描きたいと思っていても、いつも私は日記帳をつかんでしまう。ああ、詩を作れたらいいのになあ！」(1945年3月10日)

彼女は収容所でたびたび孤独感を抱いていた。学校生活、同級生との交際、普通の授業がないのを寂しく思った。また、彼女は妹たちに勉強を教えていた。エルス・ベルフはラテン

語が大好きで、シーザーとキケロに夢中であったが、抑留が長くなるほど、この独学に奮起することは一層困難となった。1943年9月に教科書の使用が禁止されたことは、彼女にとりひどい打撃となった。というのは、このことが教えることも独学も非常に疑わしくさせたからだ。しかしながら、彼女は異なる見方もしている。

「私はこの収容所に執着し、あとから絶対になつかしがるだろうことが分かっている。私はみんながカワット[竹で編んだ柵]の中にいることを好ましく思っている。私はこれらの人々の何人かが好きだ。渴望し、思いを巡らす…。私は自分の中に幸福を持っていて、私は理想主義者である」(1943年12月24日)

エルス・ベルフは、気の合った仲間をとて必要としており、また、いつもこれを探し求めている。時折、彼女の気持ちと古典文学に対する愛着を分かち合え、大いなる期待を満たしてくれるかもしれない相手を見つけたと思うが、そのたびに失望させられてしまう。しばらくの間、彼女はリセウム生のウィテ・デ・サヴォルニン・ローマンに好意を抱いていたが、この片想いも彼が他の収容所へ移されたために終わりとなった。

エルス・ベルフの気分は少しの間に幸福感から意気消沈へと急変することがあった。⁵⁰ 彼女は精神生活、友情、恋愛に関し豊富に書いているが、婦女子収容所での日常生活一般に関しては比較的少ない。これは、彼女が思春期にあることから驚くべきことでない。しかしながら、彼女は明らかに自分の日記の内容に疑念を抱いた。

「もし誰かが後にこの日記を見ることがあって、これが日本の支配下のチデンで書かれたものだとわかったら、期待を込めて開き、読んだ後は完全に失望して閉じることだろう。なぜなら、これは日記として期待される日々の事実や収容所生活についてやこの時代の典型的なことなどは全く違い、私自身のこと、私の幸せ、私の悲しみについて書かれているから」(1943年12月24日)

ここでエルス・ベルフは、自分自身を過少評価している。彼女の日記には、強制収容所にいる若い女性の気分が良く表わされているし、戦況に関する彼女の観察は大いに価値あるものである。1943年4月25日に彼女は次のように記している。「日本との戦争とこの状況について言えば、終わりの見通しが見つからない、米軍がある日ここに不意に訪れるなんて信じられない。もしそうだ

⁵⁰ おそらく、これは被抑留者に頻繁に現われた症状である。若い年齢で同じくチデン収容所に抑留されていた女性マルガレータ・ファーガソンはほぼ同じ「兆候」を示した。

「私の愛と憎しみを比較的投げやりに様々な人々に振りまいている現状から明らかなのは、私は精神的にバランスを失った状態にいることだ。真の愛情と接している強い同情の炎が突如燃え上がると同じように突然ひどく憎む兆しを抱いている。そして、その合間に、愛着、ものすごくいらいらする気持ちから和らいだ同情心まで多種様々に変化する」(Ferguson, p.59)

ったら、事前にわかるでしょうに」

抑留が長くなるに従って、彼女が書く回数はだんだん少なくなり、内容も一層短くなっていく。このことは、彼女が収容所で、最初は収容所病院の看護婦として、後には「重作業班」として重い役目を果たさなければならなかったことも影響したのかもしれない。日本降伏が発表された直後、日記が頻繁かつ長い文章で書かれていることから、再びたくさん書くチャンスに恵まれたことは明白だ。エルス・ベルフは、食糧の供給が大きく改善されたことにより、自分の体調が大分良くなったと感じた。そして、米軍を待つのみとなったが、彼らは来なかった。(また、決して来るはずもなかった)。食事以外は、収容所では何の変化が見られず、繰り返し行われるゲデッケン(柵越しのヤミ取引)を防ぐために柵の修理さえなされた。

「私たちが今朝カワッテン[柵の修理]に行かされたほど、ゲデッケンがはやっている。私たちの見事に修理されたばかりのゲデック[竹製の柵]は、…中略…ゲデックというより穴だらけで、そこらじゅうが切り取られていて、何と見にくい姿！あちこちに板を張り付けて、小さな穴にはマットを編んで急いでやった。…あわただしくいいかげんに修理する！明日も同様。サカイはこの邪悪な商売を最悪の場合は禁固刑にすると禁じた。ごもつとも！」(1945年8月26日)

ある面では、元の暮らしがいくらか戻ったが、エルス・ベルフはこれを全く評価していない。

「非常に落ち込んでいる。収容所には神父がいるし、明日は日曜。それでまた私は教会へ行かなければならないのかな！今またスサー[厄介事]が始まった！これに関しては、できれば全部取り除きたいけど…、今の時期に何の安らぎとならないし…手足が鉄の鎖で縛られているみたいだ。教会へ行かねばならない(私の精神はほとんど背信的だけど)、1年に1回聖体拝領に出席しなければならない。神聖なものに反感を抱いている私にどんな意味があるのだろうか？この精神的、宗教的な問題の山を苦勞して進むには疲れすぎていて心が痛むのだ。私の信仰は私を圧迫し、息苦しくさせること、今の時を楽しみたいということだけはわかっているのだが…束縛を感じなかった。それも奥深い恐怖心と不安なしで」(1945年9月1日)

9月後半に父親ベルフと弟ロップがバタビアに戻った。再会した家族は収容所を去り、ウィルヘルミーナ・ラーンの住居へ移転した。1946年1月から、臨時の大学校舎で講義が再開されることになり、エルス・ベルフは文学部に申し込んだ。彼女は二人目の出願者であった。戦争で中等教育を3年やりすごし、持っている知識の水準に対し初めの頃、とても自信がなかったが、彼女によると、講義はかなり「幼稚」であったということだ。父親はライデン大学からの任命を受け、ベルフ一家は1946年5月末、オランダに向けて出発した。

ブールマ

H. J. (ヤネケ)・ブールマは、1929年7月7日プルウォケルトで生まれた。父親のヤン・ブールマは国鉄の技師、母親の H. P. ブールマ - ドゥモンは化学技術者であった。彼女には1931年生まれの子がいた。戦争が勃発した時、一家はバタビアのマンパン通り1番地に住んでいた。当時ヤネケ・ブールマは、コーニングスプレイン所在の CAS (Carpentier Alting Stichting) リセウムの1年生に在籍していた。蘭印軍の降伏直後に彼女の父親は捕えられたが、日本軍は鉄道関係の専門家が必要としたため、暫定的に職場復帰を許された。オランダ領東インド政権の委譲後しばらくして欧州人学校が閉鎖されたため、代わりに「教室」が編成された。彼女の母親もここで主に数学を教えたが、全て秘密に行わなければならない、授業は頻繁に中断された。

1942年6月3日に、ヤネケ・ブールマは日記を書き始めた。彼女の経験したことが非常に細かく毎日続けて綴られていることがある一方、長い間何も書かれてない。特に抑留の最後の頃には、たまに記すだけとなる。日記の中で彼女は日常の事柄に関心を示しているが、13歳という年齢にも劣らず、戦後の社会的発展の予想を深く考えている。1943年2月19日に彼女は次のように記した。

「私たちは昨日の午後、食事のあとに物質主義者と共産主義者について興味深い話しをした。マリーおばさんが言っているように、戦後に何が訪れるのかな？ 革命だ。だって、パーティー開いて騒ぐことぐらいしか考えないで、小銭を数えて細々と暮している貧乏人のことなんか考えないような金持ちでいっぱいになるだろうから。たとえば、往診ごとに以前3、50ギルダー請求していた医者が、インフルエンザにかかった人のところに4、5日間毎日往診に行くとすれば、結局14ギルダーも払わなければならない。もし、私が医者だったら、給料に合わせて請求するわ。金持ちにはたくさんで、ひもじい暮らしをしている人には、無料」

1942年9月、オランダ人、英国人、米国人、オーストラリア人の女性は町の特別な居住区域に收容されることがバタビアで発表された。これに関してヤネケ・ブールマが書いたことから、当時はまだ階級意識が強かったと判断される。「誰と一緒に住みたいか申し出ることができるから、急いだほうがいいんだ。だって、そうしないと家の中がいろんな人でごちゃまぜになっちゃうから。…中略… 印人はそのままいることができる（居住区の外）。本当にラッキーなんだ。だって、そうしたら来るのはみんな純血のオランダ人だから」（1942年9月10日）。ブールマ家は、父親ヤンがいわゆるニッポン・ワーカー⁵¹として鉄道で役目を果たす必要があったため、

⁵¹ ニッポン・ワーカーは、日本の占領下に各種（公益）企業や事業の操業を維持するために暫定的に仕事を続けなくてはならず、そのため最初、強制收容されずにいた欧州人であった。目印に彼らは赤色のボール（日章旗）の付いた腕章を装着していた。

差し当たって自宅にそのまま住むことを許された。

1942年12月末に父親ヤンは解雇され、その後1943年2月になってから強制収容された。ヤネケ・ブールマは、1943年2月13日に書いている。

「勉強から家に戻ると、パパが政治情報局へ行ったことを知った。12時半頃にハンコと私は、パパがどこへ行かされたのか見てくるようにママに言われた。私は元氣いっぱいに出かけたけど、怒って帰った。だって、見つからなかったのだから。そしたら、ママは怒って自分で出かけた。一気にコーニングスプレイン西に向かって。その間にパパがコーヒーカップを取りに家に戻ってきて、私のほっぺたにキスしてくれた。ママはそのときいなかったし、私はしばらくの間大泣きしてしまった。だって、パパがアデックへ行ってしまったのは確かだし、ママとハンコが家にいなかったのがとってもくやしかった」

しかし、この別離はあまり長く続かなかった。丸2ヶ月後に父親ヤンは突然帰宅したからである。「自分の目を疑ってしまった。明日パパは、詳しい説明を得るため紙と鉛筆を持って政庁へ出向かなければならない。私たちは多分ボイテンゾルグへ行く」(1943年4月13日)。

事実、ブールマ一家はその1週間後にボイテンゾルグ(ボゴール)へ発ち、ニッポン・ワーカーとその家族対象の収容所コタ・パリに収容された。そこでは何ヶ月にわたって特別なことは起こらなかった。しかし、1943年12月初め、日本人を乗せた車が収容所を訪れ、彼女の父親を含む鉄道関係者4人を連行した。彼は何も持たず、また、妻や子供たちは別れを告げる機会さえもらえなかった。日本人の収容所長は彼女の母親に言った。「ご心配なく。バラン[荷物]はあとで取りに来させるし、あなたのご主人は働かなければならないのです」(1946年12月5日)。父親ヤンの荷物の引き取りはなされなかった。あとに残された家族は、1944年4月にケドンバダック婦女子収容所へ移された。ヤネケ・ブールマは、この収容所の状況がコタ・パリよりももっとひどいと見たが、これは一層粗末な住居が原因となっているだけでなく、すぐにも彼女は赤痢になってしまった事実にもあった。「この人たちはみんなコタ・パリとはとても違っている。年上の男の子がいなくてさびしい。私はもう悪になって腐敗してしまった」(1944年5月5日)

1944年9月1日には、ヤネケ・ブールマの弟ハンコも含む11歳以上の少年が集められ、バタビアにあるグロゴール収容所へ移された。「彼らが正門を出たとき、何とつらい思いがしたことか。それに、ママは数日とっても落ち込んでいたし、でもなんとか治まった」(1944年9月27日)。1944年10月、彼女と母親は同じバタビアではあるが、ふたりにとって生活状態のかなりの悪化を意味するチデンに向けて移送された。彼女はため息をつきながら、1945年1月に記した。「ああ、終りになってほしい！パパと弟のハンコとオランダの家族のみんなのもとへ、そしてオランダで学校に行きたいし、ここ東インドにはもう二度と来たくない」(1945年1月29日)。ヤネケ・ブールマにとって利点となったのは、母親の姉ディディ・ボッテマンネ・ドゥモ

ントも同じくチデン収容所に抑留されていたことであった。収容所内の他の区域に移り住むことは禁じられていたが、彼女は母親とともに、「コネと不正」（日記の前書）を利用して、3人の娘と一緒に住んでいる叔母のもとに落ち着いた。また、ヤネケ・ブールマと母親は健康を損なっていた。母親は脚気と足にできた熱帯性潰瘍が悪化して数週間を床に臥したことがあった。

チデン収容所でふたりはハンコからの葉書を2回受取った。父親からの便りは何もなく、彼女たちが彼に送った2通の葉書は返送されてきた。ヤネケ・ブールマは、父親が仕事を拒否したために、その罰として手紙を書くことも郵便を受取ることも許されていないのだと思っていた。日本降伏後に、ふたりはハンコからの便りを受取ったが、父親ヤンからの生きている証は依然として得られなかった。多くのオランダ人国鉄職員が憲兵隊のもとに置かれ、戦争中に死亡したことが明らかにされると、彼女たちは最悪のことを懸念した。1945年9月12日水曜日、彼女は次のように記した。

「月曜の夕方、私たちが赤十字の婦人から受取った1通の手紙の中に最愛のパパが死んでしまったことが書いてあった。…中略… パパがもう決して帰って来ないなんて、まったく信じられない。彼にとってもっと良い子になるつもりだったのに。なぜって、私は以前は憎たらしい、わがままな子供だったから。彼にキスすることも、一緒に外出することも、語学など私が知らないことを教えてもらうことももう決してない。そんなこと想像もつかない。…中略… 月曜日の夕方は泣いてしまったけれど、何かがなくなった。不安さがなくなったのだ。…中略… 中には幼い子供やたくさん子供を抱えた若い女性もおおぜいいる。その人たちのほうがもっと悲惨だ。だって、彼女たちは子供の面倒をみたり、育て上げなければならないからだ。でも私たちは必要ならばお金をかせいでママを助けてやることできる」

1週間半後、ふたりはハンコと再会した。1946年5月、ヤネケ・ブールマは母親と弟ハンコとともに「テーヘルベルフ号」でオランダへ向かった。帰国すると、フォールブルフに住む母方の祖母のもとに身を寄せた。祖母の家の中は、彼女たちがオランダ領東インドから送還されてきた唯一の住人ではなく、他に叔母ディディが夫と4人の子供とともに当分同居することになった。こうして、9人全員が1950年3月までここに住み続けたのである。

ボルハイス - スキルストラ

カタリーナ・ヘレーナ・ボルハイス - スキルストラ（1905年12月25日生まれ）は、G. G.（ガルブラント）・ボルハイスと結婚し、ふたりの間に息子マインデルト（1933年7月21日生まれ）と娘アンケ（1935年4月18日生まれ）がいた。夫ガルブラント・ボルハイスは、ボイテンゾルグの農業試験場栽培技術研究所に勤務し、一家は同じボイテンゾルグに住んでいた。

1942年12月17日に、ボルハイス - スキルストラは日記を書き始めた。その2日前に、彼女は強制収容される予定との通知を受けた。「15日火曜日、手紙が私たち女性のど真ん中にまるで落雷のように襲った。とつてもぞつとさせられるのは、私たちが収容所に入らなければならないという事実によってでなく、バンドンかバタビアへ行かされることでだ」。結局、バンドンのカレーズ収容所であった。1944年12月初め、ボルハイス - スキルストラは、息子マインデルトと娘アンケとともにバタビアのチデン収容所へ移された。すぐにも、彼女たちはチデン収容所における管理体制がカレーズ収容所よりも一層厳しいことを認めた。

「前にいた収容所で時々個別に行われた平手打ちは、ここで、私たちは点呼刑、または非常に長い間立ち続けたりそれに似たことをしなければならないので全体がもらうことになる。到着後の最初の日、殴打やスピーチや果てしなく立つことで、すでに十分私たちに教えてくれた。最初の頃のある日、3時間も続く夜間のクンプルン[点呼]。何と厳しく、処罰がここを支配していることか」(1945年2月1日)

1945年2月に、息子マインデルトは、チマヒのバロス第6少年収容所へ移された。ボルハイス - スキルストラは、息子のために医師の証明書を手配して、そのまま手元に置こうとしたが失敗に終わった。マインデルトにとってこの出発は、「すべてがすごい経験である。なぜならバタビアの少年たちの間で彼がただ一人のバンドン収容所からの少年だったから」(1945年2月26日)。ボルハイス - スキルストラは、「バンドンの人」が収容所で改修作業を不釣り合いに携わっていたため、悲しむべきことに、彼女たちの間でたくさんの病人や死者があったと嘆いたのである。

日本降伏後の1945年9月8日に、彼女は息子マインデルトから葉書を受取り、元気であることを知った。9月23日に初めて、夫ガルブランツの生存の知らせが届いた。彼はシンガポールにいた。彼の健康状態は良好ではなかったが回復へ向かっていた。夫婦間ではその後定期的に文通がされた。9月27日に、息子マインデルトが「帰宅」した。彼は変わりとても成長していた。「彼はたくましく、すがすがしい。何でも快く応じてくれる。もう内気ではなくなった」(1945年9月28日)。10月4日から、ボルハイス - スキルストラは、バタビア軍病院で住み込みで働き始めた。彼女はこの仕事で給料を得ていた。市街はますます不安な状況になっていった。「ここバタビアでは大量殺人が何度もあり、単独でも簡単に射殺されている。私たちのところの垣根のそばで昨晚ひとり撃ち倒された」(1945年11月6日)。彼女はシンガポールへのお出発を申し込み、様子を見守っていた。1945年11月21日をもって、彼女の日記は終わっている。その後まもなく彼女はオランダに帰国した模様だ。家族全員が戦争には生き残りはしたが、「ハッピーエンド」とはならず、婚姻関係は1950年に解消された。ボルハイス - スキルストラは、1988年ハーグ市で死去した。

ヘンケス - ライスダイク

A. H. (アネケ)・ヘンケス - ライスダイク (1907年8月27日生まれ) は、W. B. K. (ウィル)・ヘンケス (1905年7月4日生まれ) と結婚し、ふたりの間に娘アンネ (1935年2月15日生まれ) と息子ヤン・ヘンドリック (1937年7月25日生まれ) がいた。一家はバタビアに住んでいた。夫ウィル・ヘンケスは、オランダコンクリート会社で土木技師として働いていた。ヘンケス - ライスダイクは、オランダがドイツに占領されてまもない、1940年5月26日に日記を書き始めた。日記はオランダにいる彼女の親戚宛に記されている。「東インドでそのニュースをどう受けとめたか、それ以来私たちがいかに緊張の中に暮らしているか、おわかりいただけるでしょうか。お便りすることが不可能となった今、私は日記に書き留めてみようと思います」。1941年2月、一家はスマトラのパレンバンへ引越した。太平洋戦争が勃発して数日後、ヘンケス - ライスダイクは次のように記した。「あなたたちがすでに長い間置かれている状況を、私たちが今体験していくというのは、ある意味で良いことです。あとで私たちはお互いをもっと理解できましょう」 (1941年12月12日)

1942年2月14日の朝、日本軍の落下傘部隊がパレンバンの飛行場とふたつの製油所近辺に降下した。そして、東港 (スマトラ最南東地点) への欧州系民間人と軍人の大移動が始まった。一家もこれに加わった。「5台の車で出発しました。立ち往生した2台にいた人たちは、バトゥラジャで列車に乗り継いで進みました。私たちの車には全部で9人乗り、12時間以上のつらい旅になりました。様々なグループが私たちを追い越し、私たちは何回もバンクにあいましたが、大部分が全く「ブラックアウト」の状態でした。長い間待たされ、今やっと私たちはジャワ行きの船上にいます。丸2日徹夜して過ごした移民の集団。これからどうなるのでしょうか？」 (1942年2月16日)。「安全な」バタビアに戻って来たはずであったが、これもおよそ2週間だけ続き、やがて日本軍が進軍しこの町を占領した。

1942年5月11日に、17歳から60歳までのオランダ人男子の一斉検挙がバタビアで行われた。数百人の男子が投獄され、その中には彼女の夫ウィル・ヘンケスもいた。そして、彼はストリウス刑務所に監禁された。その後、続々と男子が多数捕らわれの身となり、収入を断たれた多くの女性たちにとって生活はますます困難になった。ヘンケス - ライスダイクにとっては、インドネシア人の振る舞いが (当分の) 希望の光となった。「一斉検挙が進行中の時には、原住民がいつも警告しに来ます。彼らが敢えてこうする勇気がなくなるまで、いつ頃十分に扇動されてしまうのでしょうか？これまで私たち女性は、彼らにあらゆることで助けられてきました」 (1942年10月6日)。1942年10月、ヘンケス - ライスダイクは、娘アンネ、息子ヤン・ヘンドリックとともに、結局全抑留期間を過ごすこととなるチデン収容所に強制収容された。運良く、彼女は収容所で、同じくふたりの子供アンケとヤン・オルファートを持つ親友リート・デ・ヨング・ファン・ベーク・エン・ドンク夫人と親しく交際していた。戦後にヘンケス - ライスダイクは、日記に添えた手紙で次のように記した。「私の誠実なるリート、私は彼女なしではこの時期を全く異なって経験したと確信しています。私たちを6人家族とみなし、そのために心配事

をともに分かち合ってきました」。

抑留が長く続くほど、ヘンケス - ライスダイクは日記に一層多く書き留めるようになった。抑留最後の頃には、ほとんど毎日メモした。家宅捜査がある時はいつも、日記帳を編んだマットの包みに隠し、家の前にある水溜りの中に入れた。点呼に集合する時は、彼女とふたりの子供たちは、各自が上に座るためにティカール（ござ）の「クッション」を持って行ったが、点呼のあとに家に帰られない可能性を考慮して、彼女は日記帳をそれぞれの「クッション」の中に隠したのであった。

ヘンケス - ライスダイクは、自ら娘アンネと息子ヤン・ヘンドリックにこっそりと勉強を教えた。アンネはまた、「M」という先生からも秘密の授業を受けていた。1945年1月30日、ヘンケス - ライスダイクは、「私たちは2年半の収容所生活の後でもまだ良いほう、完全にガラクタやわずかな空間に慣れていますが」と記している。彼女は、明らかに収容所の生活をなるがままとし、恐怖感や不安に自身が左右されないように決心していた。「自転車に乗って興奮した班長が通りを走っていると、つまりいつも『何か』を期待して、すこしだけ好奇心を持ちます。おそれは全くありません。私たちは水に浮かぶ木片とともにただよい、どこに行くのやら...」（1945年2月21日）。その2日後に彼女は書き留める。「奇妙です。でもこの緊張した一瞬に突然私は心を満たす静寂と喜びを新たに感じました。その時にはもう、どれほど続くのかもどうなっても良くなっていました。私の確信はゆるぎないものになりました」

1945年には月日が流れるとともに、彼女の気分もだんだんと落ち込んでいった。2月には夫ウィルのことを毎夜続けて夢に見た。そして、1945年3月8日に彼女は、「実際には到着した大きな移送グループが明るさを取り去ってしまったのです。現在、収容所は満杯、不潔です」と書き留めた。「6人家族」全員は、悪い健康状態と戦っていた。息子ヤン・ヘンドリックは一時赤痢病棟に隔離され、また、1945年7月には重病におちいったリートの生命をしばしの間、ヘンケス - ライスダイクは心配していた。日本の降伏が発表された頃に、再びリートはある程度回復した。

終戦は、食糧事情を除いて大きな変化をもたらさなかった。ヘンケス - ライスダイクは、この時期を「期待と失望の日々」（1945年9月4日）と呼んだ。女性たちは、夫の運命に対する不安と同様に東インドの政治的将来に対しても、相変わらず不安感に苦しめられていた。ヘンケス - ライスダイクは、1945年8月27日、彼女の誕生日に記した。「ウィルへ。私たちはあなたのことを想っています。その日の喜びは中途半端です。なぜならば、私たちは未だに不安な中に暮らし、こんな時だというのに信頼がだんだんと失われ始めているからです」。その2日後に彼女は次のように綴ったのである。「緊張が漂っている... 東インドの歴史において重大となる日々。長年にわたって汚いヤッペン政治に励まされてきた『スカルノさん』は、一体何をやるのだろうか？ 何人の若者たちが彼に従うのだろうか？ 私欲でか、それとも略奪欲でか？ ...いかに解決されるのだろうか？ そして、いつ？」

9月初めに、チタルム通り沿いにある家々に夜、強盗が押し入った。その際、ヘンケス - ライスダイクのベッドわきにあった衣装棚さえも空にされた。それ以来、彼女の不安がかなり

増していった。収容所には、夫たちの死亡や生存を載せた通知が続々と届いた。ヘンケス - ライスダイクは、1945年8月12日に夫ウィルの葉書を1枚受取ったが、これは少なくとも半年前に送られたものであった。彼女は夫の居場所も、また、彼が生存しているかも知らなかった。9月9日、彼女は、ウィルが1944年9月に魚雷攻撃にあった船⁵²に乗っていて生き残った数少ない人のうちのひとりであったことを知った。その後、彼からのニュースは何も入らなかった。「ウィルへ。あなたがあの輸送で生き残ったことを知りました。一体いつあなたからお便りもらえますか？本当にお元気ですか？いつ会えるかしら？待つことが長く、強く緊張するばかりです」（1945年9月13日）。9月24日に、ヘンケス - ライスダイクは、日本降伏後初めての夫からの知らせであるパカン・バルー（スマトラ）から葉書を受取った。

収容所の外はますます不穏となっていた。至る所に赤白の旗が垂れ下がり、銃声があった。夜間は、日本兵は家の前で見張りをしたが、このことで彼女が安心することにはならなかった。9月末、チデン収容所の監視が巡洋艦「カンバーランド」のイギリス人船員に交代されたことにより、彼女はやっと少しは安心するようになった。10月初め、ウィルからの手紙を2通受取った。彼はシンガポールの病院に入院していた。1945年10月5日、彼女は次のように記した。

「3年半の悲惨さももう終わりました。私が知る限り、私は決して勇気を失おうとはしませんでした。しかし、今...戦争のあと...私たちが「解放」された現在、そろそろ少しは人間的な生活をする権利があるのです。私たちは、混乱の中で恐怖に緊張して、まるで奴隷のように未だに心労しきった生活を送っている。…中略… 私たちが有り難く思っていないということではありませんが、一体いつになったら終わりになってくれるのかしら？1月半前には、私たちは歓声をあげていましたのに...今は疲れ果ててしまいました。私たちは解放を違うふうに考えていました。…中略… 夜中に、胸が締め付けられるような恐怖感で目が覚めます。遠くで銃声があります。ニュースが、完全に不足しています。ぐっすり眠ることは全然できません。ああ、願望する以外に本当に何もできないのです。本当の安らぎへの強い願望、夫への願望、そして自分の健康への願望です」

10月21日、ヘンケス - ライスダイクは、ふたりの子供とともに飛行機でオーストラリアへ出発した。彼女たちはメルボルンにいるオランダ人の知人宅に宿泊し、ウィルの到着を興奮に満ちて待っていた。ヘンケス - ライスダイクの日記は、1946年1月11日に「バンザイ...彼が来た！」のことで終わっている。その後しばらくして、彼女は妊娠し、そのためでもあろうか、彼女は

⁵² この船は、およそ4200人のロームシャ（労務者）と2300人以上の戦争捕虜を乗せてタンジョンプリオク港からパダン（スマトラ）へ航行中であつた「順陽丸」とおもわれる。1944年9月18日、「順陽丸」は、2発の魚雷を打ちこまれた。乗船していた6500人以上の人のうちおよそ5600人が死亡した歴史上最大の船舶災害であつた。

1946年中に子供たちと一緒にオランダへ発った。夫ウィルは同行せず、業務の関係上1947年中頃まで滞在する予定でバタビアへ戻った。1947年1月2日に一番年下の息子アウグストが生まれた。1989年、ヘンケス-ライスダイク夫人は死去した。

ランジグ - フォッカー

C.(リーン)・ランジグ - フォッカー (1908年6月30日生まれ) 夫人は、1940年4月以降チャルダ・ファン・スタルケンボルフ政庁総督のふたりいた補佐のひとりL.F.(ルー)・ランジグ中佐と結婚した。ふたりの間には、娘カロリーン(1931年7月19日生まれ)と息子フレッド(1933年1月11日生まれ)がいた。一家は初めボイテンゾルグに住んでいたが、1941年2月にバタビアへ引越した。

ランジグ - フォッカー夫人は、夫が高い役職にあったことで、高級官吏の、時にはお決まりのコースをたどる集まりとなった晩餐会に定期的に列席していた。彼女は上流社会との交際に大変忠実であった。総督、E.N.ファン・クレフェンス大臣、Ch. J. I. M. ウェルター他とともにするパーティーのあとに、彼女は「本物の貴族階級の人々に囲まれて過ごすすばらしさ」と記した。しかし、同じ日に彼女は次のように書き留めている。「尚、私たちは大臣の滞在中には、一日おきに総督の宮殿で昼食とディナーをとらなければならない。今はまだうれしいことだが、1ヶ月もしたら私はきっと退屈してしまうだろう」(1941年4月15日)。ランジグ - フォッカー夫人は、ふさわしい装い方を非常に大切にしている。盛大な舞踏会で女性全員が長い手袋をしているのに、彼女はこれを忘れてしまい、軽いパニックに襲われた。「時計が12時を知らせる音を聞いたシンデレラのように、私は宮殿の中を走りぬけ、車を呼ぶために電話を探しまわり、迎えにきた車で飛ぶようにして家へ戻ると、手袋をタンスからつかみ出し、猛スピードで戻った。ああ、よかった。間に合った。再び中に入ったが、今度は自信に満ちて！」(1940年4月30日)。1941年2月1日から、彼女は、送受した占領下のオランダの郵便物を通読するバタビア検閲局での仕事をボランティアで始めた。

日本との戦争が勃発し、連合軍部隊が受けた一連の軍事的被害(大惨事)で、1942年2月にはジャワでの戦闘は難局に向かっていることが明らかとなった。沿岸地域は危ないため、確実な攻防は内陸の高地でのみ可能と見なされたため、オランダ領東インド政庁は1942年2月20日に「バンドン要塞」へ移転し、夫ルー・ランジグも同行した。ランジグ - フォッカー夫人は子供たちとともにバタビアに残った。日本軍入城後のインドネシア人の様子について、彼女は次のように述べている。「大勢の原住民たちがヤップの旗を自転車につけている。私の使用人もだ。初め私はひどく憤慨したが、今それがよくわかった。彼らにとってそれはお守り、安全通行証なのだ。そうしないと、自転車を取り上げられてしまうと彼らは言っているが」(1942年3月12日)。

彼女が収容所の外にいる間には、常時、欧州人に対するインドネシア人の態度につい

て記した。1942年3月16日のメモでは、「インドネシア人の態度に関しては、この近辺では何も変化が見られない。路上では多分あるだろうが、私はあまり気づかなかった。使用人たちはとても快い。でも、どのようにして来月の給料の80ギルダーを払ったらいいのかしら?」。8ヶ月以上経ったあとも、彼女のインドネシア人の態度についての意見は変わっていない。

「彼らは一般的に以前と同じように親切だ。私は今までに原住民から何か無礼なことを一度も経験したことがない。『原住民の態度が非常変わった』とお互いに繰り返し言ってる人がたくさんいる。多分、進歩した『インドネシア人』のはそうかもしれないが、『マン・イン・ザ・ストリート』（なぜ普通の人と言われいいのかしら?）の態度では絶対はない。彼らもそろそろ何か違ったことを切望している。ヤップに対する喝采は少し静かにはなった」（1942年11月29日）

時折、彼女はインドネシア人に対する否定的な判断を示し、日記の文中に彼らを「敵性人種」と呼んだこともある。「私たち固有の人間のもと、ふたつの敵性アジア人種の間にはさまれることのない、規律ある社会に私たちが再び暮らすことがあろうとは想像もつかない」（1942年4月27日）。このことで明らかなのは、彼女が、東インドでの生活は以前あったようには絶対にならないと確信していることである。「宮殿でのきらびやかな晩餐会、「壮麗さ」、美しいドレス（と退屈さ）をもった生活は、もう絶対に戻ることのない今ではおとぎ話のようなものだと思っている」（1942年3月16日）。現状への不安とともに戦後に起こるかもしれない状況に対する不安は、次の引用文で明らかにされよう。

「ヤップがここを撤退した場合、多くの人々は原住民を恐れている。そしたら彼らが何を行うか誰にも分からない。そして、もう保護がなくなるとすると... というのは、日本人は秩序を非常によく維持しているし、盗みや他の犯罪に厳罰（手首の切断は、窃盗に対するごく普通の刑罰だ）を科していると確かに言えるから。私は以前いろいろなことに不安を抱いていたが、そんなことを恐れるたくもないし、二度とそのわなに落ちたくない」（1942年7月13日）

ランジグ-フォッカー夫人は、精神的に強くあろうと努め、パニック状態に身をゆだねることはなかった。「自分自身であることに恐れを抱いてしまうまで、長々とぐちを言い続けることが幾人かの女性たちの注目すべきホビーだ。だが、私は違う。この頃は、私自身の尊敬の念、やすらぎ、信頼を強めていることは信じられないほどだ。『恐怖心で人生を支配させてはならない』といつもルーが言っていた。今このことが私にとって意義深いものとなった。一度も起こらないことに対する何と多くの恐怖心を私の人生でこれまで切りぬけてきたことか。このような時勢には確かに精神的に成長させるのだ」（1942年3月16日）

1942年3月18日、彼女は、バンドンにいる夫ルーからの手紙を各所を経由したのちに

受取った。その中には、総督も彼も元気で、裕福な中国人の別荘に滞在していると記されてあった。このあとに彼女は手紙を1通受け、その返事を送ったが、4月9日に彼女は、バンドンを訪れルーと入念に話し合った、もう一方の総督補佐の妻ハニー・ファン・ティルから、中国人の別荘にいる人たちがトラブルに巻き込まれる恐れがあるため、総督は文通を控えたほうがよいと思っていることを知った。総督の忠告にもかかわらず、彼女は、その間にバタビアの第10大隊戦争捕虜収容所へ移されていたルーからの手紙を2回受取った。1942年5月10日に彼女は、「見つかってしまい固く禁じられたらしいので、もうルーから手紙を受取ることはできない。長い手紙を書き終えたのだけれど、ではこれを珍品としてとっておこう」と記した。1942年6月22日、彼女は、ルーが他の戦争捕虜とともに歯医者へ連れて行かれた途中、バタビアの路上で一度彼に会った。

「距離はその時30メートル余りあった。彼は私たちを見た印としてすぐに手を頭上に上げた。通りにはその他誰もいなかった。私たちは歩み寄り、私は日本兵のように足を引きずりながらゆっくり歩いた。おかしな格好だったでしょうけど、普通に歩けなかったのだ。子供たちは立派に振る舞った。…中略… ルーはじっと私たちを見つめウインクした。『私』がどんな表情をしたか、あとで分かると思うけれど、そう美しくはなかったのだ。私はまるで荷馬車の馬のように喘ぎながら歩き、彼らが通り過ぎた時にはすすり泣いてしまった。でも、私たちはすぐにも振りかえり、彼らのあとに続いて歩いた。ルーは橋のカーブですぐに振りかえり、そのあとに2回また振りかえった。私たちは急いで自転車を取りに行き、彼らのあとを追い、子供たちは振りかえって彼を見ていた」

夫ルー・ランジンは、第10大隊収容所では最高階級にあり、後に体験するチデン収容所の恐怖、ソネイ・ケンイチ収容所長に当然関与させられる地位にあった。

日本人占領者が意図することに対する不安を、ランジン-フォッカー夫人は次の通りに表現している。

「一般的な悲観性は：一体彼らは私たちをどうしようと思っているのか？一体彼らは私たちに対してどんな計画を持っているのか？一般的な結論は、彼ら自身でも分かってないということ。『彼らは私たちを飢え死にはしないだろう』 彼らはそうすることができる私は時々思ったりする。もうお金を全然持っていない女性たちがたくさんいるし、彼女たちを飢え死にさせている。だから、残りの者も数ヶ月したら同じだ」(1942年5月30日)

しかし、彼女が抱く敵意は日本人よりもドイツ人を対象としている。

「本当に憎むことができるためには、私はあまり「深く」ないと思う。でもドイツ人のことを考えて忍び寄る感情には、とても似ているところがある。ヤッペンよりも彼らをもっと憎んでいるかのようなのである。彼らは全てに責任がある。ヤッペンは、ヒットラーの後押しなくしては、決して始める勇気すらなかった」(1943年7月30日)

時折、彼女は日記の中で、次の引用文にあるような苦々しいことばの含んだ皮肉でユーモアに富んだ表現をしている。「孤独な女性のところで、時には原住民の座元による前置きをつけて、窓をノックする日本人将校たちについての噂が一層増えている。私はまだ経験してないけど、あとで孫たちに話して聴かせるには(16歳以上だが)ロマンチックな感じもする」(1942年6月30日)

1943年9月には、バタビアにいる欧州人女性は家を明け渡し、市内2個所の特別な居住区へ移り住まされることが発表された。1942年10月23日、ランジング-フォッカー夫人はふたりの子供たちとともにクラマットの居住区へ移され、そこでひとつの家に7人で住むことになった。彼女たちは未だ居住区で出入りを許されていたので、ランジング-フォッカー夫人はさほど悪い状況でないと見たのである。「ここではヤッペンを見ることがないし、近ごろよくぶらついて、日本の『歌曲』をさえずりながら、厚かましく内部をのぞいていたみじめなカチョン[原住民の不良少年]も見ることないのは利点だ。私たちはここで運命をともにする仲間と暮らしている」(1942年10月31日)。1942年12月1日、彼女は突然、「ランジング中佐の1942年11月分の給料の一部」と記入された45ギルダの郵便振替を受取った。そのお金は要するに夫ルーからのものであったが、差出人はソネイ・ケンイチとなっていた。それ以後、彼女は初め総額45ギルダ、1943年3月からは60ギルダの郵便振替を毎月得ていた。

1943年2月1日からクラマット居住区は封鎖され、その時点から女性たちは事実上強制収容されたことになった。しかし、彼女たちは週に2日外出を許されていた。ランジング-フォッカー夫人と同居人は、3月1日に収容所へのバブの立ち入りが禁止されるまで、7人で住む家にバブをひとり雇うことを許されていた。市の清掃局もゴミの回収や道路の清掃に来なくなった。1943年5月初め、週に1度だけ「外出日」を許可すると発表され、6月後半には収容所の扉は完全に閉ざされてしまった。この収容所の生活は、ランジング-フォッカー夫人がかつては明らかに異なると思われるが、政治に関心を抱く女性にした。

「私が変わったことをルーも気が付くかどうか興味ある。連合軍の戦略のことなら私にまかせて。それは明々白々よ。いつ彼らが行うか、なぜ彼らが行うのかなど、私に質問してくださいな！時々、私たちの論法に笑ってしまう。以前は政治について何も知らず、新聞の政治記事を飛ばしていた私たち女性」(1943年1月9日)

加えて、被抑留者間の付き合いは骨の折れることであると認識されている。

「しばらくすると、誰とでも仲たがいするようになる。至る所でそれを耳にする。私たちのところは、まだ大丈夫と思う。人間は強い寛大さなしにはお互いにうまくやっていけないし、そのため強く愛し合っている時にだけうまくいくのだ。それでもまだむずかしい。最近ある人が言った。『友情における私の基準は、ラブ・ミー・ア・リトル、ラブ・ミー・ロング』そして、これこそ全く本当だ。親密過ぎるお付き合いはいつも失敗するし、あまり頻繁に会わなくて、上辺だけ知っている『友人』はほとんどの場合役に立つ。これが近ごろ私の得た教えのひとつである。『洗練』とか『純化』でなく、全くの真実なのだ」(1943年1月24日)

彼女の精神力は、収容所での時が経過するにつれて衰えていった。そのため、日記を綴ることが少なくなった。1943年7月21日に彼女は次のように書き留めた。「最近あまり書く気がしない。いつも同じことばかり。希望して、希望しては、再び失望させられ、再び希望して、希望しては、再び失望させられて、そしてまたまた希望するのだ... 絶望的というものだ！」

1943年8月20日には、全員がチデン収容所へ移らなければならないと発表された。その後、3ヶ月の「沈黙」のあと、彼女は1943年11月20日に次のように記した。「3ヶ月間何も書かなかった！書く気が起こらなかった、ペンが盗まれ、少し静かに書けるスペースもない」。今度、彼女はひとつの家に30人以上の人々という。1943年10月以降、もはや夫ルーからの郵便為替を受取っていない。ほぼ同時に、彼女の健康状態が悪くなり始め、赤痢、五日熱、そして耳炎にかかってしまった。終戦の噂が多数広まっていた時期である1944年5月15日で、日記は終了している。ランジグ-ライスダイク夫人は日記を次の記述で結んでいる。「近ごろは抑留期間中で一番緊張する。叔母のようにごく僅かの人は何も信じない。私はもう彼女とはそれについて話すこともしないし、その不信さに我慢ならないのである！信じる者と信じない者として猛げんかをしている家々もある。すぐにもそれがわかるでしょう」

同じく、1944年5月15日に、「いかに人々はでっちあげられるのか理解しがたい！... 中略... ソネイが私のところへ来た時も、彼が私に言ったとされることがこのような粗野な話になって伝わった」。ソネイは確かにランジグ-フォッカー夫人のもとに個人的に訪れたが、彼女はその理由や何が起こったのかを記していない。彼女の息子フレッド・ランジグは、何年か経ったのちこの出会いを記述した。ソネイはある日の午後突然彼のもとに現われた。

『ランジグ？』と彼が尋ねた。(ラング・シング)。母がうなずいた。彼は私を指しながら『ユア・サン？』と言った。『イエス』と母が答えた。...中略... 彼は両腕を脇に伸ばし、私を上から下まで観察した。彼は何度か大きくうなずいた。『サン、イエス』と言って私を見続けていた。他には何も言わずに突然向きを変えて立ち去った」⁵³

数日後、ソネイは再びそこを訪れた。彼は、ランジグ-フォッカー夫人に彼女の夫

⁵³ Lanzing, p65.

は元気になっていると言い、収容所の正門近くにある彼の住居へ幼いフレッドを連れて行った。そこで彼はこの少年のただれた足を洗ってから軟膏をつけ包帯をした。その後の数ヶ月間、時々フレッドは足の手当（あまり効果はなかった模様）をするソネイに迎えられ、いつももらった果物を持ち帰った。

この治療処置は、1944年10月あるいは11月に、ランジング-フォッカー夫人がふたりの子供たちとともにバタビアの郊外にあるタンゲラン収容所に移動させられた時に終了した。1945年1月、当時12歳のフレッドはチマヒにある少年収容所へ移送された。一家全員が戦争に生き残り、1945年11月、東インドを離れた。フレッド・ランジングは、父親にソネイとの関係を一度も聞いたことはなく、父親もこれに関し何も話したことはなかった。

シスター・ロザリンデ

シスター・ロザリンデは、バタビア市サレンバ41番地所在の聖カロルス・ボロメウス病院内「オンダー・デ・ボーゲン」修道会の院長であった。彼女の日記は、オランダ人、英国人、米国人女性の強制収容に関する日本の規制が発表された1942年9月から始まっている。シスターたちは暫定的にその制約を受けなかった。

聖カロルス・ボロメウス病院では、日本人の患者を対象に、日本人の医療専門職員により看護がなされる個別の病棟が設けられた。シスター・ロザリンデも日本人の患者の看護にあたった。患者のひとり、シスターがその病室を訪れると非常に快く応じさせた。

「その人はとても喜んでいて。彼にとっても異国で病床にあるのはとてもつらいことだ。『オランダ人は良い』と彼は言い、『残念だが、英国人はブスークにする』（すなわち、内面から悪い）。彼はあとでシンガポールへ行かなければならなく、その間に彼の靴下を繕っておいてくれないかと、私に尋ねたのだ。お見事！彼らの子供っぽいナイーブさに私たちは時々大笑いしてしまう」（1942年10月21日）

もうひとりの日本人の患者は無愛想で不親切であったが、これについては彼の同僚から説明があった。「『どうか彼を悪く思わないでください。彼の父親が戦死したのです』。ああ、そうよね。彼らだって、なじみのない敵国にいなければならないのだ」（1943年1月11日）。

シスター・ロザリンデは、日本人の患者に対して偏見のない表現をしているが、同時に、強烈に反日的なことが言えたのである。1942年12月には、聖カロルス・ボロメウス病院の将来に関する会議が開かれた。出席者は、シスター・ロザリンデ、オランダ領東インド名義司教モンセニユール・P.J.ウィレケンス、数人の日本人有力者であった。シスター・ロザリンデはこの会議の報告において、占領者に対する極度に否定的な感情を示した。「彼らは、まるで大喧嘩をしているような響きの声を立て続けに発しては、割れ目から細い目をぎらぎらさせる。…中略

…この人々を飢え死にさせ、徹底的に略奪している敵の間においてどんな気持ちを抱かくか想像にもおよばないでしょう」(1942年12月9日)。この会議で、修道女は日本人の監督のもと、暫定的に病院で続けて働けることが決定された。

ますます多くのオランダ人が強制収容され、オランダ人学校や孤児院が閉鎖された。12月末には、プロテスタント系のチキニ病院が明け渡され、欧州人の看護婦が全員解雇された。シスター・ロザリンデは、1943年初めにバタビアにある病院で、責任者としての地位に留まっていたただひとりの欧州人であった。2月11日には、Centraal Burgerlijke Ziekeninrichting 中央市民医療施設 (CBZ) で日本の建国記念日を祝う集まりが開催された。バタビアにある病院の責任者全員が出席し、シスター・ロザリンデも招待を受けていた。「本当にいやだった。私たちの病院がこんなに危険にさらされていなければ、私はきっとこれを受け入れなかった」。出席者全員は敬意を表さなければならなかった。日章旗が揚げられ、お辞儀させられ、国歌が斉唱され、再びお辞儀し、スピーチがあり、終わりに両腕を3回上げながら「テンノー・ヘイカ万歳」と唱えたのである。この最後のことはシスター・ロザリンデは行わなかった。

その1週間後の1942年2月18日に、シスター・ロザリンデは日本人院長のもとに呼び出された。彼は、敬意の件でシスターに質問した。シスター・ロザリンデは、聖職者としてシスターが公で賛辞の表明をすることは事実上決してなされないと説明すると、院長は、「私はこれまであなたの宗教や生活における慣習を知らなかったが、あなたがこれに対して免責されるかどうか私から軍政監部(軍隊)に伺ってみる」と言った。

シスター・ロザリンデは依然としてバタビアの市内をかなり自由に移動することができたが、市街の雰囲気は時折非常に敵意に満ちていた。

「その都度、憎悪を感じる。もう私たちは数えもしない。スダ[もう結構]。私たちにとってはそうひどくはないけれど、いつも同胞のことを思ってしまう。私たちの同胞は人間のくずと見なされているのだ。ああ、でも、欧州人に憎悪を感じてないインドネシア人も十分いるでしょう。例えばこの使用人が大抵そうあるように。しかし、日本人に対するものすごい恐怖心からブランド(オランダ人)には親切にする勇気がないのである」(1943年2月16日)

その2ヶ月後に彼女は書いている。

「原住民の青少年は非常に横柄になってきて、まるで彼らこそが一番偉い紳士であるかのように生意気な目つきで見る。何と彼らはおだてられていることか。私たちと同じくらいニッポナーもインドネシア人に対してあまり期待していないことは、私たちは知っている。学童たちは、特別に大声でわめき立てられる完全なる軍隊式に教育されている」(1943年5月15日)

1943年7月初めには、自由でいられた欧州人はごく僅かであった。「私たちは、『有史以前』のもののように見られている。あの茶色の豆は、こっちを口を開けてぼけっと見つめたり、または見ようとしないうで度々私たちを運ぶことを拒否するのである」とシスター・ロザリンデは痛烈に述べた。(1943年7月4日)

1943年5月17日に、シスターたちがこの数ヶ月間恐れていたことが発表された。日本軍政が聖カロルス・ボロメウス病院の全権利を要求し、シスターたちはこの建物を早急に明け渡さなければならなかった。これは、バタビアにいる欧州人は今後、インドネシア人により賄われている中央市民医療施設CBZのもとにのみ置かれるであろうことを意味した。シスター・ロザリンデはこれを聞いてがく然とした。「ひどい。インドネシア人に全て左右されるCBZ以外はどこにも行かれない哀れな欧州人。ああ、もし私たちが手術を受けなければならなくなったら、そこへ行かなければならない。憎んでいる人に囲まれてだ。何と言う苦難！」(1943年5月17日)。

2、3日して、シスター・ロザリンデは、この展開をあまり好意的に見てない様子の病院の日本人通訳とことばを交わした。彼は言った。「私は初めの頃からここにいるので、シスターたちを知っています。シスターたちは敵でないし協力したいのです。調理場の食糧が30ギルダーしたら、インドネシア人みたいに40ギルダーなんて言いません。洗濯物が800枚入れば、800枚出て行きます。『シスター ウルス・バイク、ティダック・ボレ・ペルギ [シスターはうまくはからっている。去ってはだめです] 』」(1943年5月21日)

結局、37人のシスターは解雇されてしまったが、今後も病院の近くにある修道院に住むことを許され、日本人から毎月定額の生活費を得るはずであった。シスターたちはじっとしているつもりはなかった。いろいろな業務上の問題を伴ったにもかかわらず、彼女たちはほかの場所、すなわちクラマツト67番地に成人用、そしてマトラン通り(メーサー・コルネリス内)に子供用とふたつの診療所を組織することに成功した。患者たちは、シスター・ロザリンデが次のように怒りを爆発させたほど必ずしも従順ではなかった。「全くプロテスタントの連中はいやらしい。私たちの病院に掛かっている十字架像のことをまた批判しているのだ。病院はローマ・カトリック系のではないし、中立であると彼らは言っている。モンセニユール・ウィレケンスは取り外しなさいとおっしゃたけど、もし患者が十字架像を求めたら許すようにするのだ。人々の間で、それも再び宗教対宗教で、よくもまあ、ねたまなるものが存在するものだ。私たちの立場を困難にさせられ、じっと抑えて辛抱するのは厄介だ」(1943年7月7日)

その間に、婦女子収容所ではシスターや看護婦が多数必要となり、そのため、モンセニユール・ウィレケンスは、クラマツト収容所とチデン収容所に向けて若干数のシスターが応じられるか「オンダー・デ・ボーゲン」修道会に求めた。シスター・ロザリンデによると、「これらのシスターにとっては全くの犠牲、でも彼女たちは快く犠牲を払い、これを運命と思っている」(1943年6月17日)。

1943年7月初め、貧困な婦女子用に個別に強制収容所がグロゴールに開設されるというニュースが入った。クラマツトやチデンに行く代わりに、シスターと看護婦は今度この新しい収容所へ行かなければならなかった。また、モンセニユール・ウィレケンスは、各婦女子収容所に60歳以上の司祭をひとりずつ配属してもよいか日本人に尋ねた。初めこれは拒

否されたが、その後しばらくして突然許可された。シスター・ロザリンデは次のように判断している。「ヤップの場合は、全てのことが気分の居所次第だ。上機嫌は「よろしい」、不機嫌は「だめ」、そしたらもうどうにもならないのだ」（1943年6月24日）

1943年9月24日にシスター・ロザリンデは、サレンバ島にそのまま残ることを許されている3人の印人シスターを除き、シスターたちが3箇所の婦女子収容所へ配分されことを知った。9月27日、シスター9人の最初のグループがクラマツト収容所へ向けて出発し、その2日後に、5人のシスターがグロゴール収容所へ、そしてシスター・ロザリンデを含む8人がチデン収容所へ向かった。異なった修道会の修道女も抑留されているチデン収容所で、シスターたちは様々な養護の仕事を引き受けた。サレンバ島にいる3人の印人シスターのほか、おそらく混血人あるいは外国（中立国）出身であったためであろうか、収容所の外にあるふたつの病院に6人のシスターが残された。

シスター・ロザリンデは収容所生活におけるユーモアのあるひとこまに注意を払い、日記の中に細かく豊富に書き留めている。宗教がシスター・ロザリンデの人生で大きな役割を演じていることは言うまでもない。時折、日本人が、礼拝の行われるパビリオンを病院に割り当てる決定をした時のように、異説を入れず危険を伴う一面を帯びることがあった。「ヤップたちはこのことで病人の面倒をよくみていることを自慢している。でも何千もの人々の魂に傷をもたらすということはもちろん気にしていない」（1943年10月3日）。また、「クリスチャン便り」事件に関連して、もうひとりの修道院長がプロテスタントの婦人数人とともに日本人に監禁された場合にあるように、プロテスタントの収容所仲間に対してあまり肯定的な発言はしていない。「ひどいことだと思った。マザーひとりがプロテスタントの5人とは。みじめであった」（1944年9月5日）。この事件が原因で、カロルス病院からのシスターたちは、ほかのカトリックとプロテスタントの「宗教関係者」（神父、牧師、プロテスタントのシスター）全員とともに、1944年9月11日にクラマツト収容所へ移されてしまった。

1945年8月25日に、クラマツト収容所で日本降伏のニュースが正式に発表された。その布告文を読み上げた日本人が、「その途中で言ったことは、ことのほか狭苦しい所に住まわせたうえ、幾多の人々を3年間にわたって抑留しざるを得ませんでした。しかし、女性たちはきわめて立派にこれに順応していました」。その2日後に、モンセニユール・ウィレケンスが正門付近に立っていた。彼は、バタビアにあるほかの収容所と病院のために宗教関係者から看護婦を求めた。シスター・ロザリンデはこの依頼を受け入れ、9月3日に10数人のカロルス病院のシスターとともに、元戦争捕虜の世話をするために軍病院（元 KPM 病院）へ発った。この時点で、シスター・ロザリンデの日記は終了している。

ワイヘンケ

テオドーラ（テア）・ワイヘンケは、1904年11月17日メダンで生まれた。その後、本国オラン

ダでギムナジウムの A (文科) 系を修了した。太平洋戦争が勃発した時、彼女はバタビアにある CAS (Carpentier Alting Stichting) のオランダ語教師であった。彼女の日記は 1942 年 3 月 29 日から始まっている。冒頭の記述から、テア・ワイヘンケは恋人ディック宛に日記を書いたことが明らかとなった。

「最愛のあなたへ。ちょうど今、バンドンへ来てまた 1 ヶ月が経ちましたが、その間に、ディックは元気かしら？何をしているかしら？何を思っているのかしらと考えなかった時、そしてここで私たちが経験することやきり抜けなければならないことをあなたにお知らせしたいと思わなかったことは一時としてありませんでした。そこで私は、この張り詰める心を少しばかり解き放つためにあなたに宛てた手紙日記を解決策として考えつきました (変な文章!)。」

2 月 28 日にテア・ワイヘンケは、ディックと離れ離れにならねばならなかった。ディックはオーストラリアへ避難したのである。テア・ワイヘンケは赤十字のためにボランティアで働いており、3 月 3 日に、同機関の婦人 40 名とともにバンドンへ出向く指令を受けた。バンドンへ到着した際には、彼女たちを受け入れる者は誰もいなかった。到着直後の彼女たちが憤慨させられたのは、バンドンの赤十字は彼女たちが来たことに大変驚き、全く考えに入れてもなかったからである。町の混乱を失業者の立場で見守っていたであろう数日後、これらバタビア赤十字の婦人たちは、キリスト教リセウム校舎内にあった英国軍病院で 3 月 7 日から働き始めた。

1942 年 3 月 9 日、蘭印軍の降伏が発表された。テア・ワイヘンケは、この時の模様を数週間後に記した。「最後のヘット・ウィルヘルムスの演奏を聴きました。その時私たちは涙を流してしまいました。午後にはもう、彼らが来ることを予想しています。日本人。誰もが緊張していました。どうだろうか、どんな様子をしているのだろうか、どんな振る舞いをするのだろうか」彼らはその次の日に来た。

「金切り声、重苦しい足音、子供たちの泣声、そして家の中で騒音が突然し始め、私たちのところのドアがドスンと打たれて、私はそれが日本人だと分かりました。その一瞬私は死の恐怖を経験し、今までにないほど心臓がどきどきと高鳴り、震える手でもって部屋着の上にレインコートをまといました。彼らを目の前にした時、私はすっかり落ち着いていました。彼らは私たちの家の中をドスドスと歩きまわり、10 人ほどが全部調べ、全部開けて、そこここから持ち出して、おかしい帽子と耳覆いをつけ、ウンコ色の軍服を着た汚らしくて粗野で醜かったです。彼らは嫌な小さい目、曲がった足とひどい歯並をして、まったく己の風刺漫画でした。彼らの話すことばは、東インドのカエルの鳴き声とげろをはく音をミックスしたようだ」

4 月初めに、赤十字の婦人たちが今後英国軍病院へ来ることは日本人から禁じられた。

テア・ワイヘンケのバンドンでの交際は、オランダの権力の復活を企ている W という人物との間にあった。この計画に対する彼女の反応から、東インドの将来に関しては、彼女がかなり改革的な感情を持っていたと推測される。1942年4月27日、彼女は次のように述べた。

「Wの計画をさらに深く知る。原則として、不測の解放を考慮して、当座の事柄を暫定的に調整して行くははっきりしたきまりがあるというのは良いことです。ともかく、精力的なWが考え出す活力を持ち、活動的にこれに対処していることはすばらしいと思います。しかし、実際上は私を再び一層怒らせただけでした。ここでもまたたくさんの（でも特別に重要でない）個人的な野心（以前には妨げとなっていた）、そして虚栄心と全く否定的な考え方、つまり反カトリック、反何々が。騒ぎたてられている幾つかの事実に関して私が分かったことは、何か意見すべきことが少なすぎ、加えて相反してたことです。例えば、摂政政治が最も重要な構成要素として維持されるが、私たちはインドネシア人を完全にあごで使って指揮していかなければならないことに。本当は、私はそのことで気がとても動転しました。私は、これほどの熱意（原文通り）、善意、ノウハウであなたたちの地位の改善を行ったことを考えれば、ことさら良いことから発した広範囲な経験に基づき論理的に利益をもたらしたのであり、私が手厳しくなり、『私がこの中で成長してきた活動仲間は、真っ向から対立した意見を持っている』と言ったことにも後悔していません。でも、残念です。私がかもっと落ち着いていたならば、彼は多分私の批判をもっと良く聞いてくれたでしょう。彼のばかげた発言はまだあります。つまり、最初に愛国者であって次にクリスチャンであるべきだ！カトリック教は破壊をもたらす！政府に女性は無用、女性は幼獣を守る母ライオンだ！（もし幼獣がないものは？）この男性は結局のところあまり学び取らなかったか、学んだとしてももう忘れたのです。残念です。なぜなら彼は個性的（あまり存在しないうちのひとり）な一面があり、正直で妥協しないからです」

5月3日に彼女は以前住んでいたバタビアの自宅に戻った。当日にも彼女はインドネシア人の態度について述べている。

「バタビアでは、占領者に対してよりも茶色の連中について憤慨されています。そしてこれには理由があります。インドネシア人の官吏、医者、使用人、クーリー等の態度には手に負えなくなります。私たちの組織のことを本当によく分かっている着飾ったろくでなしが、物事を全くめちゃくちゃにし、おうへいに人を扱うのです。…中略… それでも根は誠実なのがたくさんいますが、日本人にぺこぺこするほど恐れを感じているのです。要するに、それでこの反動となるのです」

1942年10月22日に彼女はクラマツト収容所に抑留され、1943年8月31日にそこからチデン収容所へ移された。

ワイヘンケは、チデン収容所の雰囲気と連帯感はクラマツトでのそれと比べるとかなり劣っていると見たが、（恐らくそのことが理由となって）彼女は班長になった。「私は、神経の張り詰めた人々の中でおこる喧嘩にかなり失望しているにもかかわらず、まだたくさんのことが

出来るので正直に言えば素晴らしい仕事だと思っています。病人や弱った人々を助ける少女たちのことも今は手配する必要があります—これでかなり忙しいことになります。でも楽しく、静かに後方に立っていることが出来ないのが私の最大の欠点だとしてもちょっかいがだせることを気持ち良く思っているのです」(1943年9月27日)。また、ワイヘンケは、特にクラマツト収容所の元リーダーで彼女の親友リース・ザイレマーカーがチデン収容所の住人たちからあらゆる面で閉め出しを受けていることから、チデン収容所の運営部をあまり信頼していなかった。同じくワイヘンケをうんざりさせていたことは、彼女自身のことによると、チデン収容所幹部の監視員に対する卑下した態度にあった。このことは、中でもプレーヤーとレコードが強制的に引き渡された時に明らかとなった。「一番辛かったのはチデンの事務所でみんなが自ら進んで手伝って一番いいものを指したことである。リース・ザイレマーカーなら『ご勝手にどうぞ』と言って、その他は手伝わなかったでしょう。こんな卑屈な態度はきわめて腹立たしい」(1944年3月5日)

宗教はワイヘンケにとり大切であった。1943年末、彼女はH. J.カーター牧師から教理問答の講義を受けた。彼女は自分の人生におけるバランスと調和の向上を追い求め、信仰の中にこれを見出そうと考えた。周囲の者からの精神的な支えがなかっただけに、このプロセスは決して容易でなかった。「私は自分を哀れんではいません。でもとても孤独を感じます。私が窮地にあり、難しい性格だからこそ、他の人を拒絶してしまい、その上人々は私のキリスト教的性向を嘲笑するのです」(1943年12月25日)。信仰で彼女の欲求が満たされ、迷いが消え失せたことは、その後まもない1944年1月6日に、彼女が信仰告白式を受け、プロテスタント教会員として受け入れられたことで明らかとされる。「とても素晴らしく、安らぎのひとつ、まったく感傷もなく、深い感情で満たされました。私はこのごろとても安らかで内面に喜びがあふれ軽くなっています。この一歩は私に本当に幸福を与えてくれました」(1944年1月7日)。しかし、信仰が彼女に与えることのできる幸福には限界があり、彼女にとってチデン収容所の生活はそれでも過酷であった。

「私たちが最初に未来について考えたとても重苦しくなって、今ではわずかしこ考えません。現時点のことがたくさんあり過ぎて、未来を考えるには疲れ過ぎています。未来は私たちにとって現在のところ、休養とたくさんの食事(なぜなら一日中ほとんど飢えていますから)と新しい衣類、そしてオランダだけです。私は本当に望郷の念に苦しみ始めています。そして私たちはオランダやヨーロッパのことについてはなるべく話さないようにもしています。なぜならその願いは痛みを伴うからです」(1944年2月10日)

彼女は明らかにチデン収容所では苦境に立ちどまり、クラマツト収容所へ戻る機会が持ちあがった時に、彼女は、リース・サイレマーカーとともにこれに対する申し出を自発的に行った。ワイヘンケは1944年2月23日にクラマツト第3収容所へ向かった。「2月23日水曜日。まずものすごく劇的なお別れをして、物音一つしない町を通って行進。全ての道路、家々、敷地はこのほ

か整然としており、私たちへの好奇心があったけれども、無情さはまったくありませんでした」(1944年3月5日)。1944年12月25日、彼女はクラマツトからアデッキ収容所へ移され、ここに終戦まで留まった。

日本降伏の発表があったあとも、ほんのわずかしかな変化しなかった。8月24日に予定されていた連合軍機の救援品投下は依然起こらなかった。9月7日になって初めてこれは実行されたが、お祭り気分とはならなかった。その時投下された小包の一つが当たったひとりの女性が即死したためであった。まさに対照的な日々が続いたのである。

「毎日何十人もがこっそり収容所を出て、何十人が(2、3時間してそのまま帰宅するが)、戻って来た時に興奮した熱烈な話を持ちかえります。毎日死亡通知の数が増えているし、どの大部屋でも、興奮し喜んでいる人々の間に、マットレスの枕の上に顔を伏せて身動きしない姿がいくつか見られます。これらの日々を認識できません。緊張、感動、喜びに満ちた期待、死亡通知よりひどいショックや他の収容所における悪状況、オランダからの悲惨な話、不備なあるいは不十分なニュース記事、希望、幸運、勇気、善意、何もかもが、時折、感覚に鈍ったような状態に陥らせるのです」(1945年9月9日)

9月末に彼女は臨時看護婦として、普通のベッドと清潔な浴室が利用できる比較的静かな環境に所在するチキニ病院へ移った。町の混乱状態が原因で外出は禁じられていた。テア・ワイヘンケはそのため未だに「解放」されたと感じることができない。四六時中銃声が鳴り響いた。1945年10月19日に彼女は次のように記した。

「数日前にディックが突然やってきました。あら、ディックさん。…中略… あなたと完全に結ばれていない感じがすることは事実ですが、その時、私は説明できないほど幸せな気分でした。あなたがいたからです。…中略… でも、あなたに再会できたこと、あなたがそばにいることですばらしい、安全な安らいだ気持ちを持てます。今後の一緒に過ごすひとときや奥深い語らいに全く興味深々です。私たちはお互いにあいまいな態度をとりましたが、再会をごく自然に喜びました。あなたは落ち着いた印象を私に与え、あなたのしたいことをはっきり分かっている、あなたの仕事に関して落ち着いた感じを受けました。何とあなたは私の興味をそそることでしょう」

彼女はこの6日後の10月25日に日記を再び綴った。

「ディックのこともあってものすごく憂鬱な日々を送ったが、今もう何とか克服した。…中略… ディック、疲れきり暗い面持ち、失望した。理解されうることだし、

彼に同情してしまう。オーストラリアへの郷愁にかられているという彼の気持ちが理解できるが、自己の『歳月』を経験したあとに、この『混乱期』にあって理解されることなく、欲していた全ての愛情や真心を得ることができないのは非常に辛いことである。多分、オーストラリアのいとしい人のもとへ。ではお達者で！」

ワイヘンケは 1942 年 3 月に「手紙日記」として綴り始めた相手の男性、ディックとの新たなる出会いにおける失望が原因してであろうか、これ以上日記を書き続ける意欲を失った。1945 年 11 月 1 日に次のような記述をもって彼女の日記は終了している。

「この物語を今やめることにする。新しい生活が始まった。私の人生で最も悲惨で、困難で孤独な時代は過ぎ去った。もちろんこう簡単には決して言えないが、今私は回想するとそう思われるのだ。その真っ只中に私たちがいた時にはすることがあったが、そこからは上がった現在には、この生々しい過去が日ごとに一層激しいものとなる。でも、大したものである。なぜなら振り返って見ていると大抵良いことを選んで思い出すのだから。将来についてもまだ対処するのが困難な概念だ。ここはまだ混乱状態で、空気は不和、誤解、憎悪、失望、そして絶望で充満している。」

参考文献

- Lydia Chagoll, *Buigen in Jappenkampen. Herinneringen van een kind dat aan de nazi's is ontsnapt maar in Japanse kampen is terecht gekomen.* (第4版, Mechelen/Amsterdam 1995)
- Gavan Daws, *Gevangenen van de Japanners. Krijgsgevangenen in de Pacific gedurende de Tweede Wereldoorlog.* (Baarn 1996)
- Margaretha Ferguson, *Mammie ik ga dood. Aantekeningen uit de Japanse tijd op Java 1942-1945.* (Den Haag 1976)
- Nell van de Graaff, *We survived. A mother's story of Japanese captivity.* (St.Lucia 1989)
- Daphne Jackson; *Nachtmerrie op Java. Het leven in de vrouwenkampen tijdens de Japanse bezetting, 1942-1945.* (Baarn 1989)
- Fred Lanzing, 'Geen school, geen schoenen, geen ouders. Autobiografische aantekeningen over soldaten en vaders in Nederlands-Indië', in: *Maatstaf* 28 (1980), p56-77.
- Win Rinzema, *Dit was uw Tjideng. Aspecten van de vertraagde afwikkeling van Japanse interneringskampen in Batavia met het Tjidengkamp als casus.* (第2版, Utrecht 1991)
- 'Sone Kenichi: verpersoonlijking van het kwaad?', in: *Documentaire Nederland en de Tweede Wereldoorlog deel 34: Nederlands-Indië bezet*, p816._
- Sorber, Adri, *Dagboek vrouwenkamp Tjideng 1945.* (自己出版)
- Elise G. van der Stouw-Lengkeek, *De hel van Tjideng. Herinneringen van Bep Groen, ex-gevangene Jappenkamp, oktober '42 - december '45.* (Barneveld 1995)
- D. van Velden, *De Japanse interneringskampen voor burgers gedurende de Tweede Wereldoorlog.* (第4版, Franeker 1985)

参考史料集

- IC 000.228-000.232: C.L.J. コーテ - ブッカー : 1944年12月以降のチデン収容所報告
- IC 022.076-090: 曾根憲一に対する判決
- IC 028.921: 中田正之に対する判決草案 (14頁)
- IC 028.922: 河辺に対する判決草案 (24頁)
- IC 032.635: J.Ch.デ・クアント : チデン及びクラマツト第1収容所報告 (11頁)
- IC 040.116: M.S.ウィリンヘ - スリハー 「日本占領下のバタビアとその近郊の収容所」 (16頁)
- IC 052.028: 1942年10月～1944年4月までのチデン収容所における食糧供給
- IC 061.733-734: M.E.J.M. アバルパネル - レーデル夫人の調書

移送と収容

ベルフ

1942年10月3日

私たちは収容所へ行く、つまりすべての欧州人婦女子、同じく 17 才未満そして 60 才以上の欧州人男子。ものすごく面倒くさい、なぜなら比較的小さな居住区が割り当てられているだけだから。一つはクラマツト、一つはチデンに、でもほとんどの人がクラマツトを申し込んでいる⁵⁴。私たちはまず抑留を登録しなければならなかった。この仕事は幸い欧州人によって統制されている、もちろんヤップが望めばいつも物事を混乱させるのは可能だけれど。登録の際、特別希望を書くことが許されたので、ほとんどの人はなるべくならクラマツトに収容されたいと記入した。ほとんどの人があちこちの家を願い出て誰と同居したいのかということも申し出た、というのは大勢の女性が収容され、一つの家に住む必要があるだろうから。ドウメン神父もこの委員会に属していて、彼は(他の人も)私たちは 9 人家族だから、私たちだけの家が一軒もらえるだろうと言う。だからお母さんは同居するかもしれない人を誰も指名しなかった。

最初、私たちはファン・デル・ヘルダー一家といっしょにクラマツト・ラーンにあるデ・ヨング・ケーシング夫人の家を申し込むはずだった⁵⁵。でもこれはファン・デル・ヘルダー家の子供たちの肺が弱いのをお母さんが心配して取りやめになった。だから私にはとても残念だったが、お母さんはファン・デル・ヘルダー夫人に、ある程度は本当だったが、シュパンゲンベルフ夫人といっしょに住むのは反対だと言って拒んだ。でも実は肺が関係していたのだ。現在、お母さんはラーン・ウィーシャート 5 番地または 7 番地の家を申し込んだ。5 番地はものすごく小さい、7 番地はかなり広い。でもザイレマーカー夫人(クラマツト収容所リーダー)の忠告に従ったから、申し込んだ時点ではまだ見ていなかった。現在、女性たちは皆どこに収容されるのかを緊張しながら待ち構えている。大勢がチデン収容所に行かねばならないだろう、なぜならクラマツトが一番狭く、そしてまさしくほとんどの人がこの居住区を申し込んでいたから。指定居住区に男子が入ることは許されない、だからトゥカンス[作業夫たち]なども駄目、なぜって女性を保護するためだから！

ラテン語はすごくうまくいっている、ギリシャ語は抑留のあとで始める。コンビネーションを探す競争がある。というのは最初保護者⁵⁶がいれば収容所に入らなくてもよかった女性

⁵⁴ チデンはあまり評判がよくなかった。「序」1 参照。

⁵⁵ ベルフ一家はバタビアのコーニングスペレイン東に所在するホテル・ダーンデルスのオーナーであるファン・デル・ヘルダー一家と知り合いであった。エルスはファン・デル・ヘルダーの息子ハインが 1942 年 6 月 25 日アデックに収容されるまで、彼と非常に親しくしていた。E. E. デ・ヨング・ケーシング夫人はベルフ一家と懇意にしていた。彼女はエルスの父 C. C. ベルフ教授と同様、バタビア法科大学で教鞭をとっていた。

⁵⁶ 女性の幾人かは「保護者」すなわち欧州人男子の同居者を探すことによって抑留から逃れることに成功した (Van Velden, p84)。「コンビネーション」あるいは「クンプラン (仲間グループ)」では、何人かの女

が大勢いたのだ。でも現在、この許可がほとんど取り下げられた。というのは突如として今は父親あるいは夫の保護だけが許可されることになったから。それで今はみんなすでにいっしょに仲間グループを作ることを約束しあっていたから、コンビネーションをみつけないことができない。今朝、腕章⁵⁷を巻いた重要でない男子全員が捕らえられた。そして現在その女性も収容所に入らねばならず、彼女たちは全くコンビネーションを見つけないのだ！お母さんは「まだ葉巻の帯を持っていますか」の代わりに「コンビネーションはできましたか」と歌っている。コッホ先生も最初はファン・ウルフテン・パルテ医師⁵⁸が家の中にいたので収容所の外にとどまる許可書を持っていたけれど、今は彼女も収容所に入る必要がある。現在、この居住区は明け渡されているところ。最終的にここに入らなければならない女性だけは残っていてもよい。でも彼女たちはもちろん家に大勢の人々を受け入れることとなる。たとえばザイレマーカー夫人。家具は持っていてもよい。

ヘンケス - ライスダイク

1942年10月18日

今週の木曜日、私たちは「居住区」へ行きます。収容所と呼んではいけません！だから困難な時期を迎えるのでしょうか？というのはみんなが一緒になりますし、だからあれこれ予想されるでしょう。私は彼らをあまり信用していません、日本の男ども！すでにもう男子にしているように、今度は私たちも急ぎ立てるのでしょうか？

ヘンケス - ライスダイク

1942年11月8日

新しい時機に突入、私たちは「居住区」にいます。各家屋にいくつかの家族、でも私たちは自分たちでコンビネーションを探すことが許されました。ミープ・ウィリンへ（収容所リーダー、カンポンのクパラ[責任者]！）とその子供たち3人、リートと2人の子供たち（アネケとヤン・オルファート）、ジャネ・ペルドック、アニー・ファン・デル・プラス、そして私と2人の子供たち。各家族に寝室が1部屋、単身女性はグダン[物置]。アンネ、ヤン・ヘンドリックと私はとても居心地がよくなったガレージ。植木は全部持ってきました。それに何百ものレンガ、サタムの助けですぐに段つきテラスを作りました。午前中は気持ちよく陽が照り午後は涼しい。家の雰

性が共同で1軒の家と家事作業などを分かち合うことを意味している。

⁵⁷ 所謂ニッポンワーカーで、欧州人は日本占領下暫定的に様々な（公益）企業や農園企業を機能させるため働く必要があり、最初は抑留されていなかった。彼らは識別のため日の丸がついた腕章を上腕に巻いていた。

⁵⁸ P.M.ファン・ウルフテン・パルテ博士はバタビア医科大学の精神医学・神経学の教授で、チデンとグロゴールでは精神病患者の病棟責任者であった。

気はすばらしい。二間続きの部屋はまだ食堂兼居間。全体的に実に居心地がよい。子供たちがベッドに入ると、私たちは何時間も庭に座っています。近頃では実際「ヤップの訪問」を怖れて「外で」はもうしなかったことです！…中略… 一日中カナヅチを打つ音が周囲に鳴り響き、杭が地面に打ち込まれています。周囲に鉄条網が張り巡らされるのでしょ

ヘンケス - ライスダイク

1943年1月10日

私たちの居住区にはおよそ 560 戸の家屋（その中には単身者用家屋と多くのカンポン小屋）、そして現在、2540 人がいます。

ヘンケス - ライスダイク

1943年2月20日

もう何日間も忌まわしい暑さ。家の中の仕事はほとんど終わりません。ここ 2 週間でヒステリーが 3 件。この気候で超満員の家の中では不思議なくらい少ないといえます。…中略… ニッポンは現在「余剰」家具を運び出しています。一番美しいものが最初に持ち去られています。

ベルフ

1943年4月1日

ちょうど今…地震。私はすでにベッドに横たわっていた、そして突然きしみ出す！「泥棒がトイレの扉を押し動かしている」と思って私は座った。でもベッド全体が動いていた！「どうして泥棒が私のベッドにやって来たのだろう」とまず考えたが、同時に地震だ！と気付いた。もうすぐ家が倒れる！ベッドから抜け出す、なんて大事件！床全体が揺れている！一生忘れない。すぐに出口に向かい、扉を開け、同時にお母さんと呼んだ。でもそれから彼女がやってきて、「子供たちをちょっと連れてこようか？」と言った。でもすでにおさまったのでユッフ⁵⁹だけがやってきた。それから私たちはしばらくベランダに座りにいく。また再度ベッドに向かう。収容所中がパニック状態だった。みんなが家から飛び出した。なんておかしなこと。

⁵⁹ ユッフはベルフ一家の保母A.デ・コーニングのこと。

ベルフ

1943年4月8日

コービー・ケニンク⁶⁰に関する事。近頃は家から追い出されることはごく当たり前である。ともかく、それがたびたび起こった時期はここへの抑留で終わる。だからものすごく驚いたわけではない。家具のことを尋ねた。さて、彼女たちは全部持ち出すことが許された、かなり幸運である。ここチデンにいる知人から一言い換えれば知人を通じて一彼女たちは家を1軒もらった。目的が手段を正当化する、これらのあらゆるプルカラ[事柄]はカワット[鉄条網]越しに取りかわされる。(この日記は家宅捜査がくれば燃やす、たくさん不正なことが書いてあるから！最もひどいこと！) 現在、彼女はマラン通りに住んでいる。

ベルフ

1943年4月16日

「これからはもうデ・ヨング夫人⁶¹の授業にはでない」とコービーが言った。私はそれを受けつけずに「お父様が連行されたの？」と言った。なぜならデ・ヨング夫人がガス会社から男子が一人連行されたという漠然とした話を聞いていたから。「ううん、ボイテンゾルグに行くの」とコービーは言った。それから家族収容所の話しになった。ガス会社から任意に選ばれた6人の男子とS.S.⁶² (ウィテ・ローマンの教室にいた親切なヨーピー・ファン・メールテン) からと他の人々がいっしょに行く。アードリー・プレイも行く。デ・ヨング氏は行かないけど、彼もおそらく近いうちに連れて行かれる。病気⁶³でなかったらもう収容されていたはず。彼女が望んだので日曜日ちょっとコービーのところへ行く。…中略…

何も持っておくことはできない。この時期にはすべて、すべてを失っていく。水曜日はなんになるのだろうか？私はまたコービーに執着しすぎている。…中略… 今、もうわずかしか持っていないと思う、でも一年たてばまたもっと減っていく、本なども何にもなくなる。有難いことに本はまだある。なぜコービーはあのガス会社の6家族に属しているんだろう？私は彼女に残っていて欲しい。

⁶⁰ 当時収容所外部に住んでいたベルフの友人。コービーの父親はバタビアの蘭印ガス会社で働いていたが、日本軍より強制労働を課せられた。ケニンク一家は自宅から出され、1943年4月よりボイテンゾルグのコタ・パリス家族収容所に収容された (NIOD、蘭印日記コレクション、Els Bergの日記より)。

⁶¹ エルスは一時期、クラマツト・ラーンに抑留されるまで住んでいたE. E. デ・ヨング - ケーシング夫人からオランダ語の授業を受けていた。

⁶² S. S. は当時の国営鉄道の略。

⁶³ デ・ヨング氏は狭心症を患っており、医師の診断書を所持していた。(NIOD、蘭印日記コレクション、E. E. de jong-Keesingの日記より)

ベルフ

1943年7月2日

街には緊張感がただよっている。絶え間のない移送。夜中、汽車が絶えず収容所のそばを走っている。病気だったファン・デル・ヘルダー夫人が収容所に戻ってきた。彼女は兵士や軍用トラックが絶えず往復していると言った… オランダ人男子は全員連行された、少なくともほとんど。そしてまだいる人たちには遅かれ早かれ収容されるとの通知があった。

ベルフ

1943年7月3日

彼らはまた小憎らしい規則を定めた。居住区が狭すぎたため、後から加わったカリ[水路]の向かい側の区画の一部が再度撤去される必要がある。すなわちコッホ先生の住んでいる区画である。そこに住んでいる人々がここに加わらねばならない。そして彼らに場所を提供するため、479人の生活扶助受給者がこの居住区を去らねばならない。それであと160人だけが残る⁶⁴。この479人はタンゲランシェ通りの集合住宅地に一種の居住区が与えられる。彼女たちはテーブル1つ、各自椅子1脚と衣類を持って行くことが許された。ベッドと食事はそこでもらえる。いいでしょ？またすごく楽しい、でもはっきりとどこか緊張感のある興奮が高まっている！生活扶助を受けている人々は常に犠牲になる。デ・G一家はとどまり、フレイリンク夫人、ファン・ザンテン-ボス夫人、フェルボーム夫人（その時に娘のアートはパサール・バルーにいた⁶⁵）が出ていく。カーレルチェ・ファン・デ・ウェーテリングはここに残らねばならず、彼の母親は出ていくというように、16才以上の少年たちだけはいっしょについていけない！すばらしい考えでしょ！殺してやりたいくらい。

ベルフ

1943年7月14日

グロゴールへ行く人々が真夜中（7月11日、日曜）出発した。

⁶⁴地方自治体欧州人援護委員会(CESC)から助成を受けたグループは、グロゴール元精神病院に収容された。グロゴールはバタビア北西部のタンゲランへ向かう鉄道沿いにあった。

⁶⁵アート・フェルボームは日本軍に連行され、パサール・バルーの警察署に監禁された。「日本人による抑留者の扱い」ベルフ日記断片1943年6月11日参照。

ベルフ

1943年7月21日

今はまだ楽しい、でも本当は 100%楽しいのかどうか私にはわからない、まだ続きがありそう！
ところで誰がここに住むことになるか知ってる？ コッホ先生とヘネクイン先生！ 二間続きの表の居間に！ 私は喜んでいるのかどうかまだはっきり分らない。彼女たちはちょうど私の誕生日にやってくる。誕生日なのうれしいけれど。…中略… とにかくこの未来の同居に対してはある程度遠慮が必要だと構えている。私はすでに、コッホ先生が私のことを退屈で時々期待外れだと思っているという気がしている。不思議なことではない！ もし私が常に彼女の傍で一つの家に住めば、もちろん現実的に私のお節介をやくことがあまりできなくなる。それにお母さんとヘネクインとコッホがそれぞれ親密になることだろう。まあいい。反対はどうていできないし、私は今の所かなり喜ばしいことだと思っている。

ヘンケス - ライスダイク

1943年7月22日

今月末までに居住区の一部が明け渡されていなければなりません。チデン（私たちの居住区）とクラマットから生活扶助を受けている 800 人の婦女子がグロゴールに送られたので、いくらか場所ができました。だから私たちの収容所からは 400 人余りがクランプ[蚊帳]とトランクとマットレスを携えて行きました！ 我々女性の素晴らしい組織と非常に助けになる（！）原住民警官によって、すべてがおだやかに進行しました。エリー・カンピオーニがクパラ[リーダー]として 3 人の子供たちとともに同行しました。

ヘンケス - ライスダイク

1943年7月26日

ブラックアウト⁶⁶初期のある夜、かなり大きな地震に私たちは驚かされました、6 分間続きました！ 麻疹にかかっている 2 人の子供たちを連れて真っ暗闇の中、できるだけ早く外に出るのは楽ことではありませんでした。でもこんなことではもうほとんど驚きません、子供たちも驚きません。

⁶⁶ 日本軍の命令により、収容所は灯火管制下にあった。

ベルフ

1943年7月27日

7月23日にまた「地震」があったことも私は書き忘れた。4月1日より長かった。私はもう怖いとは思わなくなった。

ベルフ

1943年8月4日

驚かないで、**クラマツトがここにやってくる!**家屋は加えられないという以外は詳細不明。ここにはおよそ10人が加わることが予想されている。何てこと!私はもちろん部屋を出ることになる。このニュースが数時間心にしみこんだ今、やはり残念なことだと密かに思っている。私は今ヘネクインとコッホ、あるいはユッフと子供たち[妹のマグダ、エルナ]のところに居ることになる。でも、もちろんできるならコッホかヘネクインのところにいきたい。さもなければ勉強したり子供たちと働く時間もなくなる。なぜなら現在パサールが学校の中にあり、多分学校はもう開設されないだろうから。そしてユッフは最近とっても不機嫌、忙しいし、怒りっぽい。だから6人で寝ることになったら… そうなると全く自由を失うことになる、とても嘆かわしいと思う。なぜなら妹トレーシェも加わるのだから。ともかくまだなにも確かではないけれど、お母さんは私の部屋に行くことになるだろう。これはプルロー[必要]だ、さもないと彼女は病気⁶⁷になる、だから必然。もしかして弟ケースも加わるかも。

現在、ゴン・フィッサーとコル・リントとウィテ・デ・サヴォルニン・ローマンがここに加わる、でも他の家はなんてひどいことだろう。ここはまだましだけれど、他の家はすでにもう満杯。下水道やトイレなどもひどいし、それにちっぽけな浴室で息苦しい。すでに多くの不愉快なことや喧嘩、すごいんだ。それにクラマツトの人たちはもっと悲惨。彼女たちはもちろんほとんど何も持参することが許されなかった。小さなトランクと多分ベッドだけでこんなひどいところに入って来たのだから。お母さんはファン・デル・コルフのクンプラン[仲間グループ]に興味があるようだ、でも私たちはもちろんこんなことが可能なかどうか全く分らない。それにコッホたち⁶⁸はまた部屋を出なければならぬ。ああ、なんてひどい。でもどうなるかまたみてみよう。現在狂ったように家具を盗んでいる、あのヤップたち。ここにはまだ来ていない。

⁶⁷ ベルフ夫人は喘息を患っており、そのため一つの場所で大勢いっしょに寝ることを好まなかった。

⁶⁸ ベルフはコッホ及びヘネクイン両教師のいる「コンビネーション」を「コッホたち」と呼んでいるようだ。

ベルフ

1943年8月5日

ああ、私はここに倍の人数（だから 13 人）が加わることをまだ書いていなかった（たぶん）。

ヘンケス - ライスダイク

1943年8月7日

クラマツト収容所全員がここに加わります。全家屋に人々が詰め込まれます。全部で約 3000 人がやって来ます。ミーブはクパラ[収容所リーダー]のままでしょう。

ベルフ

1943年8月8日

計画がまた変更。私はもうコッホ先生とヘネクイン先生の部屋に入らないことになった。残念。でもしゃくにさわる時は、コッホ先生が喜んでいる（私は確信している）と考えることにする。もちろんまだ確実ではないけれど、この方がいい。子供たちばかりの部屋で妹パウリーンのベッドより、私にとってはむしろコッホ先生の部屋のほうが好ましいけれど。でもコッホ先生は私が傍に寝ない方が快適だと思っていると考えずこし慰める。コッホ先生は私のことをかわいいと思っていると私は信じるけれど、でも私をずっと眺めていたくないということは、とにかく理解できる。…中略… その他デ・ヨンク夫人がこの収容所にやってくると思う、なぜならまだ外に住んでいる女性たちも入居する必要があるから。まあ楽しいことだと私は思う。私たちはおそらくファン・デル・コルフ夫人の外に、クンプラン[仲間グループ]のグロットヨハンとファン・サントワイクを申し込むつもり、なぜなら 2 人の娘たちが私と同年だから。とにかく私はもう何も期待していない。

ベルフ

1943年8月11日

また今計画が一つ：クンプラン[仲間グループ]のファン・デル・コルフ、クンプランのグロットヨハン、ハルト - メールロー夫人とその子供たちが自ら願ってガレージに。でもハルトが入居しないと聞いて、私はまたローマン一家のことを考え始めた。お母さんは「あなたはローマン一家を望むのね、いっしょに楽しくラテン語などをしたいんでしょ」と私をすこしひやかした。私は

「もちろん、そうすれば一度は頭がよくて、なおかつ同年代と一緒にになれるもの。ゴン・フィッサーやコルたちはみんな 20 才くらいだし、お母さん、今まで私には誰もいないのよ」と正直に言った、ともかく、彼女は理解し、お願いしてくれるだろうという気がした（夜、申込書が提出されるはず）。でも夜、ヘネクイン、コッホとの話し合いで手紙が書かれている途中には、お母さんの口からローマン一家の名前はでなかった。グロットヨハン、ファン・デル・コルフ、ヒッディング、それからローマン一家ではなくほかの誰かの名前を申し込んだ手紙が出された。

私は自分を抑えていることがほとんどできなかった、なぜなら最近とても緊張し、神経質になっていたし、ウィテ・ローマン（彼は最近ヘネクインの誉め言葉の中で聞いたけど、私よりちょっと若く、ちょうど 17 才）がここで、弟ロップと彼といっしょにモリエールの「女学者」を読み、中等学校のことや、授業や先生のこと、他の子供たちのことをしゃべったり、男友だちを持ったり（女友だちがなければ、なぜならクラージェとファン・サントワイクの子供は本当に退屈だから）、ラテン語を勉強したりするのをものすごく待ち望んでいたから。ああ、ステキ。でもお母さんはピアノを奏でに行き、それから私は自分の部屋へ行って泣きわめいた、そしてヘネクインは手紙を持って出かけた。それからお母さんが部屋に入ってきたとき、もちろん彼女はすぐに私が泣いていたのを見た。でも私がとても友だちを欲しいと思っていることはどうしようもない。最初は何も言いたくなかった、だってお母さんにはトランクの荷造りやウルサン[心配事]やいろいろな話し合いなどなど、すでにかなりスサー[厄介事]がある。でも彼女はやはり知るべきだ。お母さんはやさしい、彼女は私を慰め、ヘネクインのところへ出かけたが、すでに手紙は出された後だった。

ヘンケス - ライスダイク

1943年8月12日

ミーブの仕事のために私たちの楽しい家族が分散。多すぎる人々がこの家に入居しなければなりません。現在彼女はラーン・トリヴェリ（正門のある本通り）のちいさな離れに入居、なぜなら彼女の「領地」に入ってくる人全員に通じていたいでしょから。この家には 37 人が入居します。すでにここに 10 ヶ月も住んでいることになります！日曜日にリートと私はジャーネといっしょにチラマヤ通り 5 番地の小さな家に引越し、そこにクラールチェ・ローフィンクとリート・クラインデルト（それぞれ 2 人の子供たちと）、ニームウェルス先生も入居するでしょう。ジョルジーネ・エスフェルトと赤ん坊（彼女は夫が企業のために働いているのでまだ外部に住んでいたが、彼もアデック⁶⁹に行く、だから彼女は今すぐ病院から居住区に引っ越さねばなりません）のために私たちは場所を空けています。

⁶⁹ アデック収容所はAlgemeen Delisch Administrateurskantoor（一般デリ農園企業主事務局）の略称であり、デリにあるタバコ農園企業用のクーリー募集事務所に開設された。アデックはバタビア郊外に所在した。

ベルフ

1943年8月14日

今度の引越しに関しては他にはまだ何も明らかになっていない。私はほんとに待ちきれない。ああ、あのウィテが私を落ち着かせてくれない。こんな状況の時にこんなこと書くのは恥ずかしい！なぜなら私はもう 17 才で、子供じみていたくないから。私は一方ではクラマツの人々がやってくるのをうれしく思っている。あえて言うつもりはないけれど、コッホ先生もそうだと昨日話していて分った。もちろんそんなに好きではないし、きっとここにやってくるヒディングスさんと共に 35 人の人々がこの家に入るのは忌まわしいけれど、ヘネクインやコッホに時間があれば、中等学校（いまのところ全員クラマツの収容所にいる）の人たちといっしょに楽しいことになるかも知れない。元気を失わないこと！

ベルフ

1943年8月15日

いつどのようにクラマツからの人々がやってくるのか一度聞いてみたかった。彼女たちにとってこの引越しは楽しいことではないだろう。なぜならヤップが「みんな一緒だ」というはずだし、あるいは彼らはともかくも大集団を送るかもしれない。アバス先生はファン・デル・コルフのクンプラン[仲間グループ]が離れ離れになると断言している。私たちのところはきっとヒディング一家だ。チェ、私はヒディング夫人があまり好きではない。お母さんはおそらく（計画が変更）大きな部屋と離れ、ロップはグダン[物置]と二間続きを明け渡すつもり。二間続きは単身女性と年長の少女たちの寝室になる。だから私も。でもたぶんコッホ先生のカーテンを部屋に吊り下げたままにしておけば部屋は分けられたままだ。誰がくるかにもよる。すごく興味がある。その他、近いうちに一日 40 セント使えるだけだとか、年長の少年たち用に宿舍が用意されるという話もある。でもクンプランがいいと言えば、年長の少年たちも家で寝ることが許される。少年たちが家の外で寝た方がいいというのは、結局だれが家に入ってくるか分からない場合の対策だ。私たちはロップが外へ行くかどうかまだはっきりしない、これもコンビネーションの構成にかかわっている。

この家が新しく、広く、頑丈に建てられているという事実は私たちにとって有利だ。この収容所には、例えばカンボン小屋の半分ほどのハルト夫人の家みたいに、天井が鼻のすぐ上にありネズミがそこに隠れているような家もある！もし家がたまたま広いなら（面積が、中身ではない！）、20 人ほどの人々が入ってくる、幸いだということ。その他、いたるところトイレがあふれ—幸いここはまだ大丈夫—これは大惨事である。とても熱く息苦しい雨漏りする家、ベランダのない家（ベランダのある家の人は幸いだ、そこには人が入らなくてもいいから）、それぞれ縦横 2m（いわゆる単身者用の家、少なくとも以前は！）の部屋と向きを変えることのできな

い浴室の2間だけの家。全く寝室として建てられていない部屋があり、新鮮な空気を入れるために穴を開けた部屋もある。その他、午後5時頃誰かとぶつかる一女性でいっぱいなのだーあきれたこと！数週間たつと、もちろん発生しうる喧嘩のことは考慮せずにだ、言い換えればそれを加えるとどうなることやら。

私たちの収容所には年老いた神父様がいる。彼は毎日ミサをあげている。でももしクラマツトからの人々がくれば、教会のどこに彼女たちを入れるつもりなのだろう？なぜなら初等教育の学校が病棟（学校は閉鎖で、私はマグダとすでに代数を始めた）に来るし、学校の講堂で今までのところミサをしているし、もうすでに超満員なのだから。病棟ができるとミサがそこで持続できるかどうかまったくわからない、他に空間はないのだから。クラマツトからも高齢の神父様来る、フレールアッカース神父だ。広げられる空間は病棟のスペースだけである。最初病棟は普通の家にあっただけけれど、今は学校全体、加えて手術室、そしてもしかして3人の専門医が加わる。でも患者たちも大勢いる！…中略…

（後から）私たちはすでに通知を受け取ったファン・デル・ヘルダーさんのところにちょっと立ち寄った。火曜日に9人が彼女たちのところに入居する。すこしたってから私たちはヘネクインから明日およそ50人の最初のグループがやってくると聞いた。火曜日には2番目のグループ。水曜日にはおそらく100人などなど。コッホ先生は水曜までに来る人々の名簿をみたのだ。まだラン・トリヴェリに来るひとは誰もいないし、知人も入っていない。…中略… 私たちのところは確かに現在34人だけ来る。でも人々はどこかに滞在するはずで、ハルト夫人の家のようなカンポン小屋半分の家は少人数用に再査定された。今、まだ外部からの人々が加わる、どこに滞在するのだろうか？私たちの家のようにたくさんの人が入居可能な家かしら！

ベルフ

1943年8月16日

最初の50人が到着した。いろいろ大きなパレードのようなものを想像していたけど、私は最後のベチャ[自転車タクシー]が数台入るのを見るのにちょうど間に合っただけ。一台が戻ってきた、そのご婦人は行き過ぎたのだ。彼女は腕章⁷⁰を巻き、見事に着こなし、2人の行儀良い子供たちを伴っていた。以前のように水曜日ごとベチャで外出する時みたいに。そして今朝、ベッドとトランクを積んだ数台のグローバック[荷車]が入ってくるのを見た。私は「すごく興奮」し、そして今は落ち着いた。それだけ。私は彼女たちがどんな様子なのか、あるいは知人がいるかどうかを見るつもりだったにちがいない。でも何も見なかった（ローマン一家が加わっていなかったかどうかを本当は見るためだったのだ、でも加わっていない、加わっているとすればコッホたちか

⁷⁰ ヘンケス - ライスダイク夫人も外へ行く際、腕章を付ける義務があると述べている。「収容所外部との接触」1943年3月20日参照。

ら聞いていたはずだから)。

ベルフ

1943年8月17日

近頃多くの出来事が起こっている。まず通知があった。私たちのところには一番ひどいクンプラン[仲間グループ]の一つ、すなわち結局すでにいるコッホとヘネクイン以下 10 人の单身女性たちということ(目下、7 人は指示されていない、そしたらどうなることやら!)。その他は(正式に)ブルク-ヤンセン夫人(私の知っているデ・ヨング一家のネーチェおばさん⁷¹、ステキな人!)、ロールダ-ファン・アイシニング先生(コッホと彼女から授業を受けたロップによれば、彼女もいい人)とケールス先生、それにファン・フェルデン先生⁷²。その他非公式(収容所委員会に知り合いがいるヘネクイン先生から)通知は、太った印人の騒がしい(化学が彼女の受け持ち、教師で私は表面上しか知らない)デ・クワント先生、ペーレラー先生とフィッシャー先生、そしてあと一人誰か知らない人。

ブルク夫人はデルフトで学び、あとはみんな教師とかそのような人、だから 10 人の教師が家に来る!みんな单身女性!こんなことが可能とは考えてもみななかったけど、いやなこと。彼女たちが走りまわっているのがもう見えるよう。すでに正式に指定された 4 人の女性以外には、2 家族がくる。母親と 13 才と 8 才の娘 2 人(フリーダとズス)のデ・ヨング一家と 13 才と 11 才の息子 2 人(ピーターとウィル)のいるベルネロット・ムンス一家。

私たちのところにすでに指定されているこの 10 人は 21 日の土曜日に来る。7 人の教師たちもすぐに来ることになるだろう。もう通知がでているのだから。ヒッディング一家のほうはまだまだだったと思う。少なくともクペラ(長)一人の家族なのだから!現在は、13 人のクペラということ、明らかにされていない 7 人も加えて。10 人の教師はコッホたちにも、私たちも比較的知っている人たちだといえる。けれどこの 2 家族は知人ではない。…中略…

私にはなぜ单身女性ばかりになったのか分らない。コッホたちも同僚たちばかりより家族のほうをよりよかっただろうし、それに私たちも家族がくることを望んでもいたのに、駄目だった。他の家を指定されたヒッディング夫人は木曜日に到着する。私は 2 時にクラマットの第 2 グループがとても行儀よくベチャ[自動車タクシー]に乗って到着するのを見た。知人はいない。…中略…

⁷¹ ブルク夫人は 1942 年 12 月からデ・ヨング一家と同居していた。

⁷² ドラ・ファン・フェルデンはバタビアでオランダ語と歴史の教師をしていた。1942 年 10 月下旬、クラマットに抑留され、1943 年 8 月に 8 月、チデンにいた。彼女はロールダ・ファン・アイシニングの友人であり同居人であった。チデンでドラは収容所事務所民事部に勤務していた。1963 年、論文「De Japanese interneringskampen voor burgers gedurende de Tweede Wereldoorlog」で博士号を取得。(Elsbeth Locher - Scholten 「Een onbekende auteur van een beroemd boek」Negenste Jaarboek van het Rijksinstituut van Oorlogsdocumentatie, G.Aalders編、Zutphen 1998 年 p242-265) .

さっきは絶望的だったけど、今は少し落ち着いた。想像してみて、10人の単身女性たち…誰が来るかによるけど、大きな寝室とガレージは家族のために残されるから単身の女性たちは「大部屋」（二間続き）に入る。10人の教師がいっしょの家だなんて！私は教師をととても尊敬しているけれど、でもこれはひどい…。教師たちと単身の女子をいっしょにするとはなんという考え。だから私はおそらくお母さんと同じ部屋になるだろう。なぜならロップが2人の少年たちと彼のグダン[物置]に入れる。でももしかして少年たちが一緒になるかも、それに少年たちが寝室を欲しがると、わからない。もしロップがグダンにとどまり、ユッフと2人の子供たちが私の部屋にとどまれば、お母さんの部屋に私の場所ができる。なぜならそこには5人入れるはず。それ以上はお母さんの呼吸にとっては不可能だから。なんと煩わしいことか。お母さんの部屋にも私の小部屋にも洗面所がない。備え付けの洗面所はクラマツトの人々用になる。ガレージに1つと大きな寝室にも1つある。

ベルフ

1943年8月19日

昨日、100人がクラマツトから到着した、レンメルツ一家、シューラー一家、フェルブントさん、スリスさん、スピットさん、バーレンドレヒト夫人、などなど。私はクラマツトからの人々の到着を様々に思い浮かべていたのに。

ベルフ

1943年8月20日

…でももちろんまた失望。パレードのことではない。これは毎日おもしろくなっている。人々は2時頃に道路沿いに立ってベチャ[自転車タクシー]に座っている人々に歓声を送り、熱狂的な挨拶をし、共に走りながら握手し、人々の間をラーン・トリヴェリを通過してクラマツトからの人々が収容所に入ってくる。でも昨日やってきたのはミケ・シューラーでも、ゴン・フィッサーでもない（スフッテン一家、ブッケマー一家、そして他の人々）…⁷³。

⁷³ ベルフのこの話しは1943年8月21日に続く。

ランジグ - フォッカー [日記を記した当時はクラマツ]

1943年8月20日

全員チデンに引越し！チデンはすでに何百人もの女子が抑留しているもう一つの収容所。みんないっしょに収容される、3人用の家に15人などなど！私たちは明日出発。数日間荷造りして今終わった。放棄、放棄というのが現在のスローガン。母からの手紙は全部破いて燃やした、夫ルーがすでに25年間持ち運んでいた義母からの手紙も。多くのものを残していく：食器、ガラス製品、多くの家財道具、差し迫って必要でないものすべて。多くの衣類も、私の美しいクスノキの収納箱、木製ベッド、鏡台、ルーと兄ブラムの衣類、ルーの乗馬靴、まだまだある。私の銀の小箱は幸い持って行ける。それから本と楽譜も。

私たちはこのことを10日前に聞いた。最初は大型トランクを持っていけると言われていたが、後にはベッドの下における分だけ、積み重ねることは**禁止**！ナンシーおばさまもたくさんのトランクを置いて行く。哀れだ。ルーとブラムの衣類が一杯詰まったなめらかなクスノキの収納箱を持っていく。でも無駄なことだという気がする。誰もが今、私たちは手さげだけで行くことになるだろうと言う。暗い展望！楽観と悲観が交互にやってくる、私にはもう分らない。今年で戦争は終わるのだろうか？これは去年の今頃にも問うたことである、そして…私たちは全く疑わなかった！でも今…またあえて希望を持つことしかできない？彼らに時間があれば、まだ私たちみんなにひどいことをするだろう。まあよくよしないこと。

ベルフ

1943年8月21日

私の小部屋（黄金時代だった！）から出て以来（今日で数日目）、日記を書くチャンスが全然なかった。私たちの新しい同居人について書く前に、前の日記の続きを終わらせよう。だから：ベチャ[自転車タクシー]で到着した時はミーケもゴンも私を見なかった。あとで通りでミーケに会ったけれど、挨拶もほとんどしない。以前はフランス語の授業ではとても親切だったのに。でもまあ、彼女は私のことを忘れていたのだろう。ちょうど感覚がなくなったり、緊張したかのように、喜ばしい（今、私は恥じらう）期待だった。私のいつもの癖である。見て、私は思わず彼女たちを授業で知っていたから、クラマツからの女の子たちを期待して待っていたのだ。私はコッホ先生の教え子として、だからこそ彼女たちと絶対親密にできるだろうと期待していたのだ。類は類を呼ぶでしょう。でも彼女たちは私を「同類」とは見していないか、あるいは以前の類の友だちと（他の）友人だけで満足だろうと思えた。…中略…

家にちょうど23人、いかにぎゅう詰めで慌ただしいことがわかるでしょう。あらゆるスサー[厄介事]、それに本ももうない、ない！今はもちろんすごく雑然としている、でもいつか静かになるなんてことは私には全く想像できない。

ベルフ

1943年8月22日

ここ数日来私の小部屋から出たことはもう書いたけど、そこには今ユッフとマグとエルナが寝ている大きなダブルベッドが置いてある。私はお母さんの部屋でパウリーンと1つのベッドで寝ている。その他はお母さん自身とトレースとケーシェ。それからまだ誰も寝ていない子供ベッドが置いてある。さもないとお母さんの呼吸にとっては厄介になりすぎるから。でも私たちは6人で寝ているみたい。必要であればもう一人子供が入れる。ロップはグダン[物置]でベルネロット・ムンスの息子2人といっしょに寝ている。どちらも手に負えないガキのはず。彼らはもうかなりのクンプラン[仲間グループ]の人たちをヘトヘトに疲れさせ、いつもまた喧嘩を始める。コッホ先生は一昨日彼女の優雅な表の部屋から出て、裏の部屋でトランクの上にベッドをつくった。私はクランプ[蚊帳]を腰板に綱で止めるのを手伝った。いやな仕事！昨日は綱を、まだ上手くつなげてなかったので、新たに四方に引っ張らねばならなかった。ともかく今、彼女はその下で寝ている。いずれにしろ、今のところはたくさんの蚊だ。

この寝台のためのトランクは、ロップと私が木曜日にすでにひきずって移動させた。近頃私はかなり丈夫なことが分った。これは少なくともいいことだ。コッホ先生の場所は、裏の部屋はみんなが通り過ぎるので現在最もひどい場所である。表の部屋には少なくともコッホ先生とヘネクイン先生の以前のカーテンがある。今は5人が裏の部屋に入る必要があり、彼女たちもあまり運が良くない。これは他の3人のことでコッホとヘネクインが最悪、彼女たちはトランクの上でしかも機能さえしていない一枚のクランプの下で寝ているのだから。トランクの上には大きさの異なる2枚のマットレス！私もみんなの中で一番言い争いをする（子供っぽいでしょ）パウリーンと同じベッドに寝ているので最悪だと思っている。でもどうしようもない。…中略… 私は寢室の椅子に座って日記を膝の上にトランクをおいて書いている。とても不便だ。

私たちの新しい同居人に関して：はじめに2家族がやってきた。とても雑然としていた、というのは彼女たちのバラン[荷物]を積んだグロバック[荷車]がちょうどついたばかりで、荷を下ろすのに忙しくしていたから（なんて意味のない文章！）。私はまだ一度もあらたまって彼女たちと挨拶していない。デ・ヨング夫人はすぐに親切で、愛想のよい人だという印象を受けた。彼女の2人の娘たち[フリーダとズス]は何も言わず、初めからかなり高慢な態度だったし、いかにも愚かにみえる。ベルネロット・ムンス夫人は渋柿のような顔つき歩きまわり、男の子たちは11才と13才の普通の男の子みたい。最初の質問はもちろん「あなたのお考えになられた…」場所のこと。さて、お母さんは（彼女が息子たちといっしょにいたいかどうか分らなかった）表の部屋を婦人と少女たちに、少年たちをグダンにと考えていた。現在、表の部屋に5人は入れるから素晴らしい、でも彼女たちはそれほど喜ばなかった。クラムットからの人々は私たちより分別がなく、ここには「私たちは一人当たり4平米もらえる権利があり、私たちはだまされないわよ、もうたくさん！」という考えでここに来たらしい。…中略…

仲間グループのロールダ、ブルク、ファン・フェルデンとケールスは、理想的に座れ

るテラスと洗面所つきのガレージをととても喜んだ。コッホたちが私たちの側につき、ロールダの仲間グループに属していないことを私は快く思っている。彼女たちはとても分別があるように見える、良い選択でうまく行くだらう。お母さんは2つの家族が難しそうだからガレージに入ることを望んでいたが、ロールダにたくさん人の出入りがあったので、コッホたちは彼女たちにガレージを与えたのだ。でも私はロールダがテラスをもっと必要としてもやはり家のなかにいたほうがいいと思った。今は、私たちがいつもベランダを他の人々と分け合わなくてはならない。まあいいや。少年たちは犬とニワトリ、ウサギをいっしょに連れてきた！私たちは動物を怖れていつも表に出しておこうとしていたのに！さて、私はフェルハルト医師のところに本日の新入者の名簿がもう掛っているかどうか一度見に行く。

ベルフ

1943年8月25日

ウィテ・ローマンが昨日到着した。もちろん私たちのところではないけれど、バタンハリ2番地だ。彼の到着する1時間前に名簿を読んだが、やはりショックだった。なぜならまだ望みを持っていたから、愚かな私。現在、一日およそ200人がやってくる、午前12時ごろに最初のグループ、昼食のすぐ後、1時半ごろに第2グループがやってくる。ウィテは最初のグループにはまだいなかった。私は彼が見られるだろうと期待していた。私自身も信じていなかったのだが、彼が少なくとも私に挨拶するだろうと望みながら。今第2グループが来れば、私たちはまだテーブルについているはず。だから彼が第1グループにいなかったのがとても残念。でも幸い私は間に合った。食事がいちやく終わったのだ。人垣のあいだを最初のベチャ〔自転車タクシー〕が走りぬけた時、中に座っている人々はほとんど皆、反対側をむいて知人を見つけ出そうとしていた、私たちの方はつまり太陽を背にしていたから。だから私は早めに飛び上がって、到着するベチャの方に斜め向きに人々の列の―空いている場所の後ろで―一番前の目立つ所に立っていた。

ほとんどのベチャがすでに通り過ぎた時、突然一人の婦人が「マルグリートだわ！」と叫んだ。私はそれがローマン夫人の名前だと知っていた。彼女は一人でベチャに乗っており、2番目のベチャにはアードと弟、その次に背が高く、少しほほえんでいるウィテが妹といっしょに乗っている。もちろん彼は私の方を見ないで通り過ぎた。…中略…私を見て、挨拶した人はまだ誰もいなかった。昨日到着したウスケもゴンも、フリーダ・デンカーもヘルバン一家も、誰一人として。もう私は期待しない。ウィテは私の一列前にいた男の子に挨拶し、その視線が私を通り過ぎて今熱狂的に挨拶している「あら、マルグリートだわ」と叫んだ婦人に移っていった。そのあと彼のベチャは行ってしまった。…中略…

この日記を他の人に読まれたくない、私はこれらのぐちをすごく恥じらっている。私は本当に満足できない人間だと思う。なぜなら私にはやさしいお母さんと、弟と4人の妹たちがいて、ロップと私たちはコンビネーションではまだとても運がいいというのに。

ベルフ

1943年8月28日

まだ書いてなかったけれど、私たちはあと2枚通知をもらった。1つはクンプラン [仲間グループ] デ・クワント、ペーレラー、フィッシャー、コスター…それにファン・デル・コルフ夫人の妹のブラント・コルトシウス先生のためのものと、一つは外部のクンプランからだ。最初の仲間グループは今日来るはずだが、ブラント・コルトシウス先生だけが到着し、他の人たちは31日火曜日に来ると話した。そして収容所外部からの家族も火曜日を予想している。私たちは家が適しているのではじめは子供のいる家族が来ることを明らかに計算に入れていた。でも外部からの家族は9才、11才、13才の3人の息子がいるので私たちは全く小さな子供を加えることができない。つまりこの家族が大きな寝室、ロールダ先生がガレージという最初にお母さんが決めた割当ては、これで駄目になった。この外部からの家族がまだ特別扱いされていたので、お母さんはできるだけ別々にしたがっていた。幸いガレージにいた親分たちが自ら出ることを望んだ。大きな寝室は、今7人の单身女性、そしてロールダ先生とヘネクインの訪問客は寝室から窓を通して通路に入ってくることになる。もちろんこれはガレージのベランダほど最善の受け入れ場所ではないけれど、かなり涼しいし静かな離れである。

コッホ先生とヘネクイン先生も「王座」と今では呼ばれるトランクのベッドといっしょに大きな寝室に入るので、クランプ [蚊帳] 全部の綱をまた解かねばならない。幸いまた取り付けるために男の子1人が来てくれた。王座は大きな寝室の端に置かれ、本棚が前方にありとても涼しい。彼女たちは食堂ではあまり自由がなかったけれど、今は備え付けの洗面所がある。なぜなら食堂にまた3人加えなければならなかったので、現在彼女たちは別の大きな涼しい部屋に7人だ。そのほかの人はロールダ先生、ケールス、ブルク夫人、そして将来やってくるデ・クワントとペーレラーだ。戸棚とカーテンで食堂の一部をブラント・コルトシウス先生とファン・フェルデン (ところで素晴らしいルネサンスの本を持っている、ミケランジェロに関する本、とても素晴らしい!)、コスター・ファン・フォールホウト (さっき私は彼女の第二の名前は思い出せなかった) とフィッシャーから仕切っている。デ・ヨング一家とベルネロット・ムンス一家はまだ表の居間にいて、実際にはベランダも占領している。私たちはテーブルが置かれていないし質素な椅子だけなので、もうそこにはほとんど行かない。もう何の役にもたたないから!

ベルフ

1943年8月30日

昨日、突然外部からの一家が到着。ファン・ドーレンという婦人と3人の息子たち。この地獄のような収容所では何が起こるか分らないわというとても哀れな様子。彼女はよく泣き、この人々がまだ笑うことが出来るのにとっても驚いている。…中略… ファン・ドーレン夫人といっし

よにアンドレー・ウィルテンスという婦人が到着。彼女はボイテンゾルグの家族収容所に近い内に収容されることを希望している。夫がちょうどアデックに収容されている。彼女がそこへ行くのなら—それを私は願っている、なぜならまた一人減るし、また彼女はなにか単純で、そのほかは親切だけ—そしたら私はコービーへの手紙を運んでもらおう。それに多分アードリー・プレイにも、なぜなら彼女たちはバタビアの出来事を聞くのをとても喜ぶだろうから。

ベルフ

1943年8月31日

今朝、クラマツトからの最後の人々が到着。最後のベチャ [自転車タクシー] はザイレマーカー夫人 (クラマツト収容所リーダー) だった。最近ベチャはもう居住区に入ることが許されなかった、でもザイレマーカー夫人のために例外を作ったようだ (あと数人の奥方たちにも)。彼女のベチャには元クラマツトの人々が殺到し、彼女の家が私たちのちょうど裏のカプアス通りだったので、いかに彼女が歓声をあげられ、「Lang zal ze leven(幾とせ生きよ)！」を歌って迎えられたのがはっきり聞こえた。いずれにしろ彼女は今その地獄のような任務が終わったのだ。…中略…今日、私たちの最後のお客たちも到着。彼女たちはとても騒がしく、エネルギーにみちあふれている。

ヘンケス - ライスダイク

1943年9月5日

アンネとヤン・ヘンドリックといっしょに9平米の部屋にいます。とても狭いけれど、やはり子供たちといっしょの部屋があるのはすばらしいことです。私が作らせた木製の二段ベッドのおかげで、いくらか座るスペースが残っています。コンドー (日本人収容所長) が現在居住区に住んでいます。ということは彼の家も周りがゲデック [竹で編んだ柵] で囲まれています！正門はかなり移動しました。5056人が現在この居住区にいます。その他にもまだ毎日外部から人々が加わります。彼らは私たちをどうするつもりなのでしょう？

ベルフ

1943年9月5日

デ・ヨング夫人が一昨日収容所にとてもわずかなバラン [荷物] だけでとても気丈⁷⁴に到着。彼女はお母さん、あるいはブルク夫人、あるいはヘネクイン先生を申し込んでいた。みて、3 人ともラーン・トリヴェリ 100 番地にいる。ザイレマーカー夫人が彼女を正門から収容所に導いた。私は部屋を出て、その時突然彼女がお母さん、コッホたち、ブルク夫人、ザイレマーカー夫人と砂利道の上に立って話しているのを見た。彼女はとても青白かった、でも私は彼女を見たり聞いたりしていると痛ましいとは思わなかった。彼女はとても神経質で、話しがあちこち飛んでいた。彼女はすぐに私たちが読んでいた「聖女ジョーン」の話しを始め、彼女はもっと進み、そして彼女は私の誕生日 (7 月 23 日) のために本を持ってきた。それから彼女は中国人の子守りのリー・ポー・カンのことをしゃべり、それからまた収容所や彼女のバランのこと、それから私たちのことなどを取り止めなくしゃべった。時には夫のことも。彼がとても静かで落ち着いていたということ。彼女はとても私たちのところに来たがったが、ここにはこの状況で彼女にとってやはり必要と思える彼女だけの別部屋はなかった。私たちは詰め込んでみたかったけれど、それは彼女にとって快適ではないだろう。G 一家が 2 つのグダン [物置] に入っていなければ! そうすれば彼女は 1 つのグダンに入ることができ、私たち 35 人でちょうどいっぱいになったのに。今はせいぜい一人だけの場所があるだけで、私たちはどこに入れればいいのかまだ分らない。

ザイレマーカー夫人は、部屋の割当てをする委員会に行って、グダンをもらった。これはデ・ヨング夫人にとって家の中にあるきれいなグダンである。これはガレージに母親と小さな子供、そして 1 人はこの、もう一人はクラマツトからの神父様 2 人が住んでいた離れである。この家はつまり様々な家の余計な家具の保管場所で、欲しい人はそこから必要な戸棚や椅子などを取ってくることができる。ウィリンヘ夫人が以前住んでいた家もまだ満杯ではない。病棟になっている家も、病棟が学校にできれば空になるだろう。これは外部からまだやってくる人々への予備の家である。デ・ヨング夫人と娘のアネケそしてバランはちょうどグダンに入る。彼女はとても喜んでいる。彼女は 82 番地なので、静かで彼女の友人の傍でもある。彼女ははじめての数日間はここで食事した。昨日はいくらか落ち着き、今日から全部自分でしたが、とても熱心に働いている。哀れなこと! なんと彼女は悲しんでいることだろう。デ・ヨング氏が 4 時間いなくなって、亡くなって家に帰って来たなんて。彼女はやはり気丈だ。収容所外部の面白い出来事さえも話している。彼女は誰もといろいろしゃべる必要があり、熱心に働くこと。これが彼女のやり方である。

⁷⁴ デ・ヨング氏は 1943 年 8 月 30 日、取り調べのため憲兵隊に連行された。彼は GESC を通じて地下組織の不正融資に加担した容疑を受けた。憲兵隊による虐待が原因で死亡し、遺体は日本軍によって家に戻された。デ・ヨング夫人も夫の死後 2 日目に憲兵隊に取り調べられ虐待された (NIOD、蘭印日記コレクション 061.871)。エリザベス・ケーシングの自伝「Op de muur」(1993 年、Amsterdam) p.108 - 115 参照。

ワイヘンケ

1943年9月5日

8月31日、見捨てられたいろんな道からグループが少しずつ集まって、最後の50人と一しょにクラマットを出発しました。見捨てられた界限を歩くのは奇妙ですーいたるところゴミの置いてある乱雑な敷地と空っぽの家（ほとんどがランパッセン [略奪] による）。街を通り抜けて行進するのは気持ちのいいものではありませんでした。私たちはすごい「見世物」だったのですが、幸い敵対心はありませんでした（大抵は、ベチャ [自転車タクシー] の運転手は欧州人を乗せるのを拒み、オランダ人女性はパサール・バルーに入ることが許されなかったのです）。予想以上に幾人かの欧州人を見ることができました（今はやはりほとんどが連行されています、銀行員もです。医者はおそらく家族収容所に行くのでしょう）、でも路上は静かでした。

チデンへの到着はリースにとって壮観でした。クラマット収容所にいた全員が彼女を迎えるために立っており、大喝采で家に迎えられ、導かれました。家中に花が満たされ、他の人々との再会の喜びにあふれていました。家は小さく、私たち11人が眠る小さな部屋が3つ。1つの敷地から、他の人はとても工夫に富んで居間をもう一つ作っていました。離れで私たちは炊事、食事、入浴、おしっこをします。洗濯は外です。お水は水道からほんのちょっぴりトイレはすであふれ、排水溝は悪臭がするーでも私たちはこの家に鼻を高くし、とてもくつろいでいます。お隣さんは実際入居できるより10倍くらいの方が住んでいます。3軒隣でも我が家で起こっているかのように聞こえます。でも私たちのところは幸運にもとても静かで、礼儀正しいお隣さんにめぐまれていました。全部家の中に詰め込み、清潔にしておくのは一種のスポーツです。でも成功、私たちは最も工夫に富んだものを考案するのです。

チデンは超満員です、それはもちろんのことです。でもなんとかできます。素晴らしいのはすべてが作動し、誰かが何かを作ったり、みんなスポーツとして考えていることです。残念なことは暑さと、強い陽射し、そして何百もの蚊が、少しだけはなんとかありますが、ほとんど防ぎようのない苦難なのです。ほとんどの人々は夜の食事後、蚊のせいで蚊帳の中に入ります。今、生活はベッドとクランプ [蚊帳] で支配されています！各家はそれでいっぱい。でも私たちは3つのソファと網戸のある戸棚、「居間」を**とても**自慢に思っています。引越しは見事に終わりました。素晴らしく組織され、引越しもいわゆるトコ集配所⁷⁵を通してのパンなどの供給も、すべて迅速で円滑に行われました。チデンに到着した人全員は、すぐにパンとミルク、肉などが与えられました…女性たちはお互い同士見事に実行しました。午前中はここでは就労。午後と夜は全員がチデンの通りを散策し、お互いに出合いの挨拶をかわし合います。はじめ若者たちは敵対視していましたが、もうすでに仲良くしています。

⁷⁵ 「序」参照。

ワイヘンケ

1943年9月8日

洗濯してすすいだ水を普通は捨ててしまいます。私たちは捨てません。それで掃除し、トイレの流し水に使います。古いカーテンは寝台の柱に掛けています。鉄や銅は結局とてもわずかです。私たちの洗濯物は最小のスペースに最大限干します、ベッドの前側と略奪品から作った鉄の杭を主にした装置のおかげです。そして小さすぎる家はペンドポ [パビリオン] を建て増すことによってより広くします。群衆はひどいものです：一日中周りに人々が群れ集まりがやがやし続けています―道は普通には歩けないので身体をくねらせて通ります。道沿いの溝は一部が開き、半分満たされた不潔な沈殿物を見ることとなります。浴室もトイレも人の数には対処できません。夜ここは、かつて見たこともないような蚊の大群が雲のように増えています。ある晩、クランプの外にでていた私の手は、翌日蚊に刺されて腫れあがっています。夜中に蚊はベッドのまわりでうなっています。でも私たちは元気にしています。

ワイヘンケ

1943年9月27日

ここの状況：まだ常に「騒がしさ」の典型。一日中人、人、子供そして犬が、家の中、路上、トコの中などに群れ集まっています。一日中まわりはおしゃべり、呼び声、叫び、ののしり、泣き声、さざめき。3軒向こうの家で「急いで」と叫んでいたら、すべてがとても密接しているので私たちは前に飛び出します。…中略… それに少年棟が1軒あります。女性ばかりでいっぱい家に収容しきれない少年たちが、クラーク - ドライヤー夫人を「ママ」として、そこに寝に行くことができます。残念ながら、その家は100人の修道女たちが入らねばならず、現在明け渡す必要があるのです。またその建物の中にあつた幼稚園も廃止されてしまいます。**大惨事**です。最初考えられていたよりもずっと多くの人を収容させることはまさに大惨事なのです。

クラマットにはまだ働いている女性のオランダ人家族用、そしてウルフテン・パルテ医師などの管理下、精神病棟のようなものが何棟かできます。これは有難いことです、というのはここには幾人かの気が狂っている人たちがいるからで、彼女たちは人口過密の居住区では周囲の者にとっても大惨事であり、彼女たちにとってもこの環境は大惨事だからです。これは「自分」を考えることができなくなる状態で、とても絶望的で悲劇的なものです。その他ヤップはキチガイのよう、すなわちある日はここに人々を収容し、次の日には人々を他の場所にまた放り出すのです。昨日デ・グロート牧師が家族と共に収容所に到着し、今日はアデックに行くことを自主的に申し出なければなりませんでした。…中略… ファン・ヘルウェルデン牧師が彼の代わりにここに来ます。到着する女性たちは、顔色が悪く、痩せ、疲労しきったひどいありさまです。そして今ここに収容されたことをとても喜んでいます。見てください、70才の老紳士はここで7軒

長屋にいっしょに住んでいて、女性たちに面倒をみてもらっています。パイプをくわえたパジャマ姿の年老いた紳士たちが道をうろついているのです。

ベルフ

1943年9月29日

ところで洗濯場が目下閉鎖、私は今とても暇だったので今日午前中半分ラテン語をした。今日は何人か分からないほどたくさんのシスターたちが外から着いて、洗濯場や、少年棟、幼稚園に使用されていた建物の中に入れられたので、洗濯場が今の所しばらく閉鎖されているのだ。でもまたガウルスト [何か手配される] だろう。また**男子**⁷⁶たち、そうまさに普通の男たちがこの居住区にやって来た。手術のためにコレット医師とレディンギウス医師、そしてカーター牧師とデ・グロート牧師である、でも後者のデ・グロート牧師は昨日家族といっしょにやってきて、今朝突然アデックに移された。だからとても希望的観測はできない。ファン・ウルフテン・パルテ医師は精神病院に責任者が必要なので再びクラマツト収容所に行く。この居住地の神経症患者も行くことになるだろう。私は町中の全てのブランダ [オランダ人] が連行されたという気がする。

シスター・ロザリンダ

1943年9月29日

(収容所外部にて) 私たちは今日お別れに御ミサに授かった。今日、最後のシスターたちが出発した。シスター・レギナルダ、シスター・バルマ、シスター・アメデア、シスター・グラシアとシスター・カティルダがグロゴールに。前方に引越しの荷車、最後の荷と食糧を積んだサド [二輪荷馬車] に乗ったシスターたちが出発。シスター・レギナルダはここにはもう戻って来られないという気持ちをずっと持ってらっしゃり、とても神経質になっていらっしゃる。他の方たちは立派に振る舞っていらっしゃる。ああ、誰一人として何が起きようとしているのか分からない。私たちは午後に出発、この別れが一番辛かった。私はそのまますべてを置き去りにせねばならなかった、サレンバ島の聖カロルス病院の印人シスター・フェルナンデ、シスター・プラシーデとシスター・セレリーネの3人。クラマツトにはポビン病院⁷⁷にシスター・ディムペナとシスター・セバスチアーナが、メースター・コルネリスの聖心修道院にはシスター・ヒルダ、シスター・ギ

⁷⁶ ファン・フェルデンによると「男子」は収容所にいる女性にとっては白人男子を意味する。(Van Velden, p417)

⁷⁷ Pobim (Pertolongan Orang Belanda-Indo Miskin) は貧しい印人の扶助を統制し、1943年5月以降、純血オランダ人が退いた後GESCを引き継いだ。1943年11月以降ポビムはPOP (Pertolongan Orang Peranakan = 混血系への援助) と名付けた。

ムティアム、シスター・イエスアルダとシスター・アロイシオをだ。

私たちのバラン [荷物] は午前中にすでに積み込まれた。私たちはベッドの下に置けるだけのトランクと一人ベッド1台と椅子1脚と小さな戸棚を持っていくことだけ許されていた。私たちはできるだけ食糧を持っていく。お米やお砂糖はたくさん持てない、なぜならここでは全部すぐにくさってしまうから。2日分のアジア粉⁷⁸でつくったパンといくらかのフルーツ。2日以上は保存できないのだから。収容所には冷蔵庫も冷凍庫ももうない。私たちは2時に出発、私たちのカロルス様にもう一度振り返りながら。

半時間後に私たちはチデン収容所の正門に到着。まあ大変、私はこの忙しさにまぎれて滞在許可証（ふむ！）を忘れてしまった。警察ははじめ誰かが戻って取りに行く必要があるといった。でも収容所リーダーのウィリンへ夫人が新しい証明書を発行したので許された。正門にはウルスラ会シスターたちの一人と今朝出発していた3人のシスターたちが立っていた。彼女たちが私たちを新しい「ホーム」へと導いた。家の廻り、いやトコの中と言ったほうがいい、そこに積み重ねて置いてあるものすごいガラクタを見て、私たちはなんと驚ろいたことだろう。収納箱や、トランク、戸棚、椅子などがごちゃまぜにおいてある。

最初の入り口の前には、瀬戸際になって学校が廃止されることになったので幼稚園の引越し荷物が積み重なっている。同じ教室には居住地の婦女子の家で場所のとれない年長少年たちのグループが寝泊りしていた。また家の前には木材や木切れが、まるで完全なゴミの山のよう横たわっている。この家あるいはトコの中で同夜、4つの異なる修道会の71人のシスターたちが寝泊まりしなければならなかった。居住区の何人かのローマ・カトリックの女性たちがすでに片付け、清掃し、実際クーリーのように働いたけれど、結果は取るに足らないもの。このような家ではどうしようもない。元々人家ではないのでわずかの快適さもないことは理解できる。71人にトイレがたった1つと原住民用のしゃがんでするトイレが1つ、2つの小さな浴室、とってもしゃがんでする小さな台所が2つ、こんなに大勢の人々のために調理するには狭すぎる。

私たちが、ここに到着した最初の小さなグループだった。さらに摂理修道会のシスターたちが到着した。22人のシスターたちで彼女たちのために店の1つが与えられる。その隣にはガレージとグダン部屋 [物置]。12人のよき牧者会⁷⁹のシスターたちが到着すれば、私たち8人にはガレージと物置の部屋、残り、すなわち2番目のホールといくつかの小さな部屋は、ウルスラ会29人のシスターたちになる。クラマット

収容所のシスターたち12人もここに加わる可能性がある。また私たちの前にチデン収容所に到着していたカプアス通りのシスターたち12人が加わるともいわれている。そうすると95人、どうすれば良いのか、まったく不可能なことだ。獣のよう、言葉に言い尽くせない。

⁷⁸ アジア粉には50-60%のタピオカ（キャッサバの根茎からとれるデンプン）、30-40%のトウモロコシの粉、10-15%の大豆が含まれている。（Van Velden、p349 脚注1）

⁷⁹ メースター・コルネリスのパサール通りにある未婚の母親たちのために施設を営む牧者会の修道院をさしている。この施設はマテル・ドロロサとも呼ばれ病院として利用された（M.E.de Vletter 編、Batavia/Djakarta/Jakarta. Beeld van een metamorfose (Purmerend, 1997年) p67、71、173)。

午後はウルスラ会の修道院長、シスターたちがやってきました。修道院管区長（マザー・ヘレフォンセ）、マザー・ジェラルディーネ、マザー・アントニーネ、そしてカプアス通りの修道院長様。彼女たちも私たちが示したこの小さいスペースに戸惑われたが、彼女たちはこの忌まわしい緊急事態を気丈に受け入れていた。そのあと、その夜の寝場所を獲得するためあくせく働いたことは、言い尽くせない。

私たちはみんな同じ運命にあり、シスターの一人一人に私たちはやはり憐れみを持っていた。マザー・ヘレフォンセがよき牧者会のマザー・フィロメーナに、どのようにしてこの夜眠られたかをお聞きになった時、彼女は泣き始めた。私たちも胸がいっぱいになった、誰が眠ることができただろう？きちんと着替えをする場所もなく、木製のバレ・バレ〔寝床〕は丸太の上に隣り合って、クランプ〔蚊帳〕（私たちは幸いベッドがあった）もなく、ものすごい蚊にさいなまれたのだから。

私たちは目下みな一緒に食事をした、後には各修道会ごとに別れて食事をするようになるだろう。でも台所は面倒すぎるので共同で使う。いずれにしても場所がないし…そして高くつくので。ある期間生き長らえるには、かなり儉約して生活しなければならないだろう。

シスター・ロザリンデ

1943年9月30日

あくせく働きお掃除をしてみんなクタクタに疲れたけれど、まだひどい散らかりよう。私はここから絶対に逃れられないと思う。ああそうだ、またここからの引越しがあるかもしれない。

シスター・ロザリンデ

1943年10月1日

場所は現在うまく統制されている、ただまだウルスラ会の人たちがもっとたくさん来ることが予想されている、そうするとまたやりくり算段することになるだろう。私たちはもう、小さなスペースに少し慣れてきたし、できるだけ上手に服を着ることに慣れた。

シスター・ロザリンデ

1943年10月2日

摂理修道会とよき牧者会のシスターたちは完全に個別に行動している。私たちはまだウルスラ会のシスターたちといっしょに食事をしている。修道院管区長は私たちが彼女たちと共にいるのが

最善だと思っていられる。それにしてもいたるところで活気がでている。今私たちは「毎日解放に一歩ずつ近づく」と考えることにしている。いまだにスペースを得るためにトランクを出したり、詰めなおしたりしている。なぜなら私たちのベッドの下はもうすでにいっぱいだから。一度ごらんになるといい。私たちはお互いに「ここは移動遊園地の車の中か船の船室のよう、息苦しくて狭いわね」としょっちゅう話している。ああ、雨期が来れば、何からはじめればよいものやら。

シスター・ロザリンデ

1943年10月3日

私たちは場所に関しては切り詰め、そして小部屋を少なくとも日中は空けておく必要がある。それから小部屋は再び幼稚園になり、夜中はシスターたちが眠り、日中は食事もしなければならぬ。ヤップは私たちをてこずらせることをよく知っているようだ。…中略…

雨が降ったり、夜中に熱帯性の雨に見舞われたら、私たちは物がびしょぬれにならないようすべてかたずけてしまわなければならない。これでは古道具屋だ。仕事に早く赴くために持ってきた私たちの自転車は、夜中は私たちのベッドの間に置いてある。汚れはあまり出すつもりはない。シーツは使っていない。私たちはティカール [睡眠用マット] の上で眠っている。これは竹で編んだござだ。とても快適で、よく眠れる。

シスター・ロザリンデ

1943年10月5日

今日は自分たちの部署にとどまり、再び聖カロルスのシスターとしてお祈りをしている。この2つの小部屋に8人、どこにも行くことができないとはなんと息苦しい気分だろう。道路のすぐ傍でもあり、ここは他の人々がいるような住居ではないので、敷地がまったくないのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月5日

働いている男子、そして数人の働いている女性のいる家族は、現在明け渡されたクラマツト収容所に行って住まねばなりません。…中略… およそ70人の高齢男子がこの居住地の、このために明け渡された数軒の家に入ってきました。これらの家に住んでいた人々は、こういった場合他の家に詰め込まれることとなります。幸いこれらの規則はまだ私たち自らの手の中にあります！

シスター・ロザリンデ

1943年10月8日

私たちは敷地の周囲に「ゲデック」—これは竹のパガー [柵] —がもらえる。幸いこれであまり人々から覗かれないですむ。というのは、ここではすべてお見通しで、収容所の中の収容所なのだ!! わずかなスペースにもかかわらず家の中に聖体を奉る小さなチャペルを作ろうとしている。うまくいっている、修道院管区長はこの日曜日に私たちの聖なる父がずっと傍にいらっしやるだろうとおっしゃった。

ワイヘンケ

1943年10月10日

ファン・ハッセルト、コレット、レディンギウスとファン・ダイクが居住区に入ってきました。その他の欧州人医師はクラマットにおり、そこから出ることが許されていません。だから居住区外部の印欧人住民には実際医師が誰もいないのです。これらの人々の状況は**絶望的**、すなわちお金はない、あらゆる物が法外な値段(ピサン1本が15セントする)、助けはない、医師もいない、ひどいことです。この医師たちと2人の牧師は居住区で興奮を呼び起こしています。今いるのはカーター牧師とファン・ヘルウェルデン牧師。最初はデ・グロート牧師でしたが、突然彼はアデックに行きました。

ワイヘンケ

1943年10月15日

今、84人のシスターたちがこの居住地にいます。ゲデック [竹で編んだ柵] の中で鳥が飛んでいるみたいです。彼女たちにとって容易いことではないのです。彼女たちはバタンガリ通りの3軒続きの店舗に収容されています。中を見れば(でもすべてカーテンで周到に閉ざされています)クランプだけがみえます。彼女たちは今、周囲に特別にゲデックが与えられ、それで(恥じらいがなく好奇心が強い)群衆の目からいくらか解放されるでしょう。でもやはり現在有難いことに、午前中の1時間半の間子供たちを預けておくことができる幼稚園のために、大きな場所を開けたままにしています。でもシスターたちはこのすでに特殊な集団の中、特別な生活をしているのです。彼女たちは裾のひろがった修道服をなびかせて、あちこちつむじ風のように手助け飛びまわっています。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月20日

383 軒の家屋に全員で 5516 人。2494 人の子供たち。1241 人の少年たち。2224 人の少女たち。16 人の印人少年。印人少女 13 人。179 人の男子。2883 人の女子。

ワイヘンケ

1943年10月21日

昨日およそ 50 人が出発しました。年長の少年たちと幾人かの女性がグロゴールへ、精神障害の子供や家族のある女性はクラマツト収容所（パルテ医師がそこに収容されている）へ。これはすべて 20 時間内（夜間を含めて）に行なう必要がありました。別れはきわめて心のこもったもので、また同情する人たちが一度だけわずかに開いた正門で一ほんの割れ目一少しの間だけ捕らえられた集団を見送っていたのは劇的な印象を受けました。

ベルフ

1943年11月11日

数日前、コスター先生などの部屋で食事中突然「17 才の少年たちがアデックに行く」と聞いた。これが疑わしいのか、決定した通達なのか、あるいは話しただけなのか私は耳を鋭くかたむけた。すぐに分った。デ・クアント先生が「あなたたち、もう聞いた？」といった。「ウイテ」と私は心の中で泣き叫んだ。…中略… そう、私は半日気分が悪かった。でも克服できないほどではないし、ハイン・ファン・デル・ヘルダーの時ほど辛くはなかった。

午後、散歩してウイテを見た時、私自身に「これが彼の見納め」とつぶやき、長い間彼を見ていた。でも泣く必要はない。そして夜、食事のテーブルでロップが（もちろんアデックに行く少年たちのことを話していた時）「ウイテ・ローマンは行かないよね、彼は 16 才の名簿に載っている」と言った。私は彼が 17 才だと確信していて異議を唱えたが、アイケン先生の公式名簿である。私はまだほとんど信じられなかった。コッホ先生が絶対知っているはず、私はすぐくたずねたかったが、たずねる勇気がなかった。でもお母さんがちょっと出かけた際、勇気をだして訊ねた。そして、そうです。ウイテは 1944 年の始めにようやく 17 才になる。すごく幸運。なぜなら今年 17 才の少年は全員行くのだから。彼の誕生日が 1 月 10 日だと聞いた。私は胸のつかえがなくなった、でもやはり信じられない、時々息苦しい気分が戻ってくる。そして今、私は喜んでいるとは言い難い。彼は 16 才。私が 16 才の少年と！狂っている。つまりところゲリー・ヘルベンのほうがまし、彼は 18 才だ！でもどうしようもない？…中略…

翌日連れていかれるはずの少年たちに関しては、8時半に集合しもうベチャ〔自転車タクシー〕は到着していたが、また家に送り戻された。今朝また移送のために点呼に集合させられたが、またヤップが来て彼らと話しをした。彼は仕事のことを訊ね、それからまた家に戻ることが許された。現在もう何日も出発する日を待っている。私はウイテが行かなくていいことをやりとても喜んでいる。トランクとマットレス、ティカース〔睡眠用マット〕をたずさえたあの少年たちはひどい様子だった。

ワイヘンケ

1943年11月11日

17才の少年たちがアデックへ行くために3日前に呼び出されました。彼らが整列した時、その日は取り止めになりました。一昨日も同様。昨日も、今日も同様。これはもう笑い事ではありません。明日50人のうち10人が出発します。そして毎日10人のグループです。この不安さとこれら延び延びにされる別れによって居住区の人々が神経質になっています。夜道は少年たちと女性たちのヒステリックな声がします。

ヘンケス - ライスダイク

1943年11月13日

昨日17才の少年が全員アデックに出発。今日は今年17才になる少年たちが続きます。全員でちょうど50人。

ランジング - フォッカー

1943年11月20日

3ヶ月間何も書かなかった！書く気が起こらなかった、ペンが盗まれ、少し静かに書けるスペースもない。今、内臓障害でベッドに横たわり、思いがけず書く気になっている。8000人の女子が350戸の家屋に住んでいるチデン収容所にすでに3ヶ月…。4人で住めばとても快適で心地よい家にいるが、私たちは30人！食堂、事務所あるいはベランダはもうない。すべてが寝室で4人、5人、6人が1部屋に入っている。私はまだ運がよく、2人の子供たちだけと縦横3m x 4mの部屋があり、家具の構成は3台のベッドと戸棚が1つ、タオル掛け、書籍トランクをテーブルに、加えて椅子1脚である。この椅子は多くの人からうらやましがられているぜいたくなものである。他の27人も、どのコンビネーションにしてもうまくやってるし、まあうまくいってると

いえる！

ベルフ

1943年11月23日

14才以上の少年（17才以上はもうずっと前にアデックへ行かねばならなかった）は、夜、寝るためにだけに少年棟に行く。このため正門の傍の家が数戸明け渡された。正門の前に家がある私たちの収容所ヤップ、コンドーが危険な少年たちをその父親としての監督下に置きたがったのだ。彼は顔を正門に向けるだけで、彼らとその照準に入る。そしてもうすでに超満員の収容所は、このおふざけのために大きな家2軒を明け渡さねばならなかった。それ以外に警察は少し前警察部署の裏の広い家を要求していたが、コンドーの家はいつも別だ。ひどいことだ。収容所委員会は人々をどこに収容すればいいのかももう分らなくなっている。

ワイヘンケ

1943年11月29日

雨がまた滝のように降っています。あらゆるところが雨漏り、そしてトイレと汚物溜めがあふれています。私の班では、庭の中に汚い泥がたまっている家もあります！

シスター・ロザリンデ

1944年1月15日

完全な雨期に入っている。このごろはとても激しく雨が降っている。炊事係のシスターたちはまさにぬかるみのなかに立っている。お手洗に行く必要があると、泥がまわりに跳ね返ってくる。幼稚園が午前中ずっと開いていると、ウルスラ会のシスターたちは、私たちが「泥の楽しみ」と呼んでいるコーヒーを飲む場所がない。私たちの部屋にいらっしゃるよう、修道院長様たちやシスターたちを招いた。彼女たちもとても喜こんでいる、それ以外は不可能なのだから。

シスター・ロザリンデ

1944年1月17日

私たちのコンビネーションには絶対良い猫が必要、なぜならネズミたちがごく普通に私たちの部

屋を横切っているのだ。時々シスター・イグナチアの悲鳴が聞こえる、彼女のスカートのそばをまたネズミが横切った。ああ、ここでは家事もたいへんだ。夜中は、ガレージの戸が開いていて、犬が時々ゲデック [竹で編んだ柵] をくぐって、ごみ入れをあさりに来る。もっと恐ろしいのは夜中に突然ベッドの前で犬が骨をむしゃぶっていること。私は犬がベッドに飛び上がってくるのが怖いので、動かないようにしている。

ランジング - フォッカー

1944年1月18日

雨期に突入、庭はぬかるみで裸足か「木靴」でのみ横切ることができる。洗濯物は乾かない、拭き掃除したばかりの家の床はまた汚れ、これは絶望的！昔も雨期のことを嘆いたことはある。でも電話をするだけでサストロが自動車で迎えに来てくれたものだ！乾かない洗濯物についての漠然とした嘆きがわいてくるけれど、まあ大したものではない。ああ、昔の日々が再び戻ってくるのだろうか？来年もまだこの状態なのだろうか？

ワイヘンケ

1944年1月19日

ちょうどまた今かなりの地震、あるいは海震。起こったことがなかったのに、私たちはすでにもう3回くらい経験しました。身の毛がよだちます。

ワイヘンケ

1944年1月23日

1週間ほぼ連続して雨が降っています。たくさん洗濯物、泥とバンジール [洪水] で絶望的、そして地割れで運搬が妨害され、私たちはほとんど野菜、ココヤシ、その他何もない状態だと云えましょう。その上、家の中は常に不潔です。有難いことに昨日私たちをすこし明るい気分にしてくれる良報がいくつか入りました、つまりアデックとストリウス収容所から水力技師 19 人がバンジール[洪水] 排水溝を修復するため解放されたこと。なぜなら、このことは占領者にはまだできないのは明白ですから。

ヘンケス - ライスダイク

1944年1月26日

すでに何日間もどしゃぶりの雨。洗濯物は全部湿ったまま家の中に吊るされています。子供たちは手におえません、彼らは外がぬかるみで不潔なため外に出るはいけません。

ワイヘンケ

1944年2月10日

一度何かなされるべきです。そう、何かが起こりました。男子を乗せた車が通った。おそらくバンタムの修理をするべくアデックとストリウス収容所から解放された技師たちでしょう。私たちはガスを使うことがほとんど許されず、現在灯りも節約、お水は3倍もの値段になっています。

ワイヘンケ

1944年2月16日

あふれる感情！先週金曜日（2月11日）男子抑留者（!）のために家屋数軒を明け渡すべしとの通達！、代替えに何かがクラマツトへ引越ししなければなりません。最初は誰もクラマツトへ行きたくありませんでした。いさかいについてやあらゆるきちがい居住地の中を横行しているというすごい噂が広まっています。リース・ザイレマーカーと私はその時、そこにいる婦女子のため色々（配給、家事の手伝いなど）統制するために私たちが必要だろうという考えがひらめきました。なぜならその上まだお互いに争っている男子幹部（ミドルドルブ、デ・フリース、パルテ、ホーハーザイル）のみだから。

ベルチェとミック（リースの子供たち）を含めたリースと私のこの計画は、この家の中にもすごい興奮をもたらしました。私たちはこれを義務として試みています、というのはクラマツトがいかに絶望的なものだったかを知っていますから、でもクンプラン [仲間グループ] からでなければならないのはとても辛いと思いました。お互い同士、そして全く曖昧で事務的でないティリー・ラマール (G E S Cのメンバーでクラマツトの連絡係) との果てしないハオモン [話し合い]。結局私たちが行くだろうことがかなり確定した時、コンドーはリースの出発を許しませんでした。だからハビス・ペルカーラ [終わった!]。一方では落ち着き、他方ではこの冒険ができなくて残念に思います。これら個人的な感情が一行きたい、行きたくない、泣いている、叫んでいる、諦めている、みずから申し込んだにせよ一行かねばならない140人の人々の悲惨さに混じります。…中略… 現在あらゆる興奮が過ぎ去りました。18日と19日に140人がクラマツトに出発し、私たちは次の順番になるのを待ちながらここにとどまっています。

ヘンケス - ライスダイク

1944年2月19日

チデン通り西側の通りが全部明け渡されました。「男子」が入居する予定、その他は何も知らされていません。210人がクラマツトへ、20人がグロゴールへ引越し、16人がグロゴールからここにやってきました。

ワイヘンケ

1944年3月5日

では、私たちはクラマツトにいる！やはり！…中略… 21日、月曜日の朝、一団がクラマツトへ出発した、とてつもない慌ただしさ。すべてベチャ [自転車タクシー] の中に積み込み、そして午後リースが帰宅：コンドーがやはり私たちがクラマツトへ行くことを望む。夜の10時半に、私たちは本当に行くことに決めました。リース、ベルト、ミックと私。火曜日、私たちは狂ったように荷をまとめ、水曜日（2月23日）10時半に出発しました。忙しさ、訪問客、別離の挨拶、真心そして良心の呵責などでとてつもない日々。でも私たちはこれが最善だと確信していました。クラマツトには必要だし、コンドーとミドルドルブが熱望したのです。水曜日はまず劇的な別れ、それから物音一つしない町を行進。全ての通り、家、そして敷地は見事に整然とし、私たちが好奇の目でみているが、どこにも敵意はありません。原住民がどのような様子なのかは予想以上でした。ほとんどすべての敷地に塹壕がありますが、一般的にはほとんど使用されていません。

ヘンケス - ライスダイク

1944年4月7日

本日、ファン・スタルケンボルフ夫人⁸⁰がタンゲランからここに到着しました。

シスター・ロザリンデ

1944年4月10日

チャルダ・ファン・スタルケンボルフ夫人と娘さんが私たちの収容所に到着。彼女たちが私たち

⁸⁰ C.チャルダ・ファン・スタルケンボルフ夫人は、オランダ領東インド政庁総督A.W.L.チャルダ・ファン・スタルケンボルフの妻である。

の傍にいるのはすばらしい。彼女ティネケの娘が私たちに挨拶した。彼女たちはすでに5ヶ所違った場所に収監されていたのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年4月16日

看護婦たちが出て行かねばならないと、しかも早急にとまたささやかれている。でも私たちをひとかたまりにしておいて下さるならば。

シスター・ロザリンデ

1944年4月17日

「今日は何が待ち受けているのでしょうか？」と今朝私たちは言った。そして夜になるまでにまた新たな驚きがある。看護婦全員が夜8時に収容所事務所に集合。彼女たちは心配しながら、でも気丈に出かけて行った。

幸い私たちシスターは誰も行く必要がなかった。7人の看護婦と医師一人が指名されたのだ。明日午前6時半にトランクをもって整列すべしと言い渡された。同時にウィリンヘ夫人と助手（ファン・デル・ハム夫人）、すなわち幹部も出発する必要があった。これは何を意味するのだろうか？何事がおこっているのだろうか。誰かが「ニッポンは忘れない！」とささやいた。他の人はまた「おそらく夫人は他の収容所をうまく整える必要があるのよ」という。どちらにしても、収容所の門で夜、彼女を見送った際、彼女は「すぐにあなたがたを連れに戻れるよう願っています」と言われた。彼女は長男をこの収容所において出て行かねばならなかったのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年4月18日

ヤップと警察が伴ないウィリンヘ夫人、ファン・デル・ハム夫人、そして看護婦たちがトラックでタンゲラン⁸¹まで移送された。ウィリンヘ夫人は独房が与えられる、そこは少年院だ。ポイテンゾルグでも看護婦を要請している。奇妙なこと。なぜ今になってヤップは病人を心配しているのか。タンゲランからトラック満杯の病人が連れ戻されている。この収容所で看護することが許

⁸¹ タンゲランはバタビアの西およそ20キロに位置する。タンゲラン収容所は少年院に開設され、市街から北東およそ1キロに所在した。

されたのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年4月19日

ますます奇妙。数軒の家を加えて病棟が拡張される。医師たちは病棟の傍で、一つの家に住む必要がある。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月9日

またチデン通り西側の区画と、加えてラーン・トリヴェリ 91 番地、93 番地と 95 番地が明け渡されました。400 人がやってくる予定。家屋はすべてますます満杯になり、私たちのところは「3 人増し」になります。ラーン・トリヴェリ 84 番地と 100 番地は病棟になりました。定期的に他の収容所から病人がやって来ます。…中略… 厳しい節水、ガスはほとんどもらえない、照明は非常にわずかです。強い電球は引き渡さねばなりません。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月16日

368 人の女子、英国人女性、そのうち 43 人の英国生まれがタンゲランから到着。

シスター・ロザリンデ

1944年6月18日

今人々は本当に気が狂いそう。あらゆる空間が利用される。すなわち 47 人がかなり小さな家に入っていて、しかもみんな知らない人ばかりがごちゃまぜ。哀れなことだ。

シスター・ロザリンデ

1944年6月19日

主よ、私たちもまた驚かされました。心配していたことでした。私たちは大部屋を明け渡さねばなりません。もうすでにぎゅう詰めになったグダン [物置] 中の小部屋に場所を探さねばなりません、なぜなら 33 人の未知の人々が大部屋に住む必要があるのです。無論彼女たちに対してもカッシアン [気の毒] に思っております、というのはどのようになるのでしょうか？またバラン [荷物] を最小限におさえます。炊事はどうなるのでしょうか？なんという間に合わせ。ひどいこと。また危険になるとのこと、なぜならタンゲランも全面的に明け渡され、グロゴールもそうだとのことだから。1000 人が私たちの収容所に加わるでしょう。ああ、どうなることでしょう、40 人が 1 つの小さな浴場とお手洗いが 1 つ、この東インドで!!

シスター・ロザリンデ

1944年6月21日

私たちの敷地はなんという慌ただしさ。杭を地面に打ったり出したり。私たちは眩しい陽射しを少し避けるために自分たちでベリック [竹で編んだ柵] の差しかけ屋根を作っている。ウルスラ会のシスターたちは外で食事をしなければならない。中ではできないのだ。いま私たちはまた考えている。もうたくさんあったけどもう少しは終わった。ともかく犠牲が多ければ多いほど、終わるのも早いのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年6月22日

ヤップはちょうどゲデック [竹で編んだ柵] をまた移動し⁸²、私たちオランダ女性が鋤いた畑を取り上げた。だからまた無駄だったわけだ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月25日

もう収容所外部からの原住民の手を借りた引越しは許されません。私たちはだから少しずつ奴隷

⁸² 時と共に収容所の面積は次第に縮小された。「序」2 参照。

のように働いています。…中略… また居住区の通りが一つ立ち退きにあいました。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月9日

私たちは「盗む」緊張感の中で生活しています。何度も人々が他の収容所に送られていきます。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月19日

ブランタス通り、セラジュー通り、チラマヤ通りを明け渡さねばなりません！私たちは他の家に詰め込まれるはず。

シスター・ロザリンデ

1944年8月19日

収容所での年老いた紳士たちへの新たな悲しみ。彼らはマットレスと小さなトランクをもって刑務所へ、なぜ？ブランタス通り、チラマヤ通り、セラジュー通りの家をすべて明け渡さねばならない、そしてそこに住んでいた人々は、南京虫が蔓延しているこの老紳士たちの家に入らねばならない。今は 110 人の人々が 1 軒の家で、男子 18 人が縦横 4m の部屋一つに入る必要がある。ですからアデック病棟（高齢男子のため）もたたまれ、それで（病気の）高齢男子たちは病棟の第 6 病室に行く。私たちのところのシスターたちが伴ない、そこで彼らの看護を続ける。

シスター・ロザリンデ

1944年8月23日

少年たちは収容所内部で一日 150 人の引越しをする手伝う必要がある。ああ、1 つの場所にこんなにたくさんの人を収容するとは、なんとすさまじいこと。ソネイ⁸³はひどい！

⁸³ ソネイ・ケンイチ大尉は 4 月中旬に退任したコンドー収容所長の後任者である。

シスター・ロザリンデ

1944年8月27日

点呼の際、11才以上の少年全員と男子が去らねばならないという非人間的な通達を聞いた。どこへ？誰も知らないし、話されていない。明朝、全員出発する必要がある。でも今晚呼び出しがあれば、すぐに準備ができていなければならない。この日は多くの出来事がおこりそうだ、多くの怖れ、悲しみそして別離。

シスター・ロザリンデ

1944年8月29日

昨日はなんとひどい日だったことだろう。ああ、なんと私たちはあくせく働きへとへとに疲れ果てたことだろう。ほとんど混乱状態だった。母親たちは全員、そしてほとんど全ての家では、衣類を点検し、マットレスは大き過ぎると持っていけないために小さくまとめられ、トランクに詰め込む必要があった。マットレスとクランプは夕方6時に正門になければならない。私たちは神経質な母親たちをやはり助ける必要があった。洗濯や援助をしている家からシスターたちが直ぐに呼び戻され、全員が繕い仕事にかかった。少年たちのシャツとズボン、下着にPOW番号⁸⁴の印、そしてなお悪いことには、一番悲惨な通知が私たちにもたらされた。神父様たちも全員去らなければならなかったのだ。…中略…

その日の午後は、男子全員が2時に点呼に整列しなければならなかった、だからその日の終わり、ヤップは男子がたくさんさねばならないことのあるその最後の日にも、およそ3時間立たせていたのだ。死ぬほど疲れ果てて高齢男子たちは家に戻ってきた。神父様たち、そのうちの2人はすでに70才を越えているが、荷物をまとめる元気もほとんどなかった。いく人かの婦人が助けに行った。マザー・ジェラルディーネもシスターたちを何人か送った。さもなければ何も終わらなかったことだろう。

フレールアッカーズ神父様はマザー・イルデフォンセにまだ器の中に5,6片のホスチアがあったとおっしゃた。神父様たちは朝早く出発しなければならず、私たちのところに来ることはもう不可能だった。そして今マザー・イルデフォンセが聖体をマザーたちに聖体拝領を行なう必要があった。なんとという幸運、私ももう一度神なる父の拝領が許された。でもまた他のことが

⁸⁴ 1944年4月民政部は軍に引き継がれた。前もって被抑留者は新しい番号が与えられた。第1、第2、第3地域は収容所番号にローマ数字I（バタビア）、II（その他西部ジャワ）、III（中部ジャワ）を用い、アラビア数字の番号が続いた（H.L.Zwitzer「Mannen van 10 jaar en ouder. De jongenskampen Bangkong+Kedoengdjati 1944-1945 (Franeker 1995年 p87)」。チデンの被抑留者たちはこの番号を戦争捕虜番号（POW番号）と呼んだ。「収容所組織－欧州人並びに日本人収容所幹部」シスター・ロザリンデ日記断片 1944年4月26日参照。

起こった。…中略…

突然知らせが来て、グロゴール収容所の人々が今日やってくる。どうしよう？850 人の人々が入ってくる…そこで病棟を手伝っている私たちの 10 人のシスターたちも。なんと感情の高ぶり！私はマザー・イルデフォンセに「正門に行って私たちのところのシスターたちが入っているかみてまいります」と言った。私たちはいっしょに出かけた。正門のところに来ると、少年たちの最終グループがバスに乗り込もうとし、「僕たちはグロゴールに行く！」と叫んでいる。だからこれは交換だった。男子が分離され、ここは婦女子だけの収容所になる。ソネイは男子たちに、今あらゆる婦女子の助けはなくなった、自らで面倒をみる必要があると言った。ああ、なんと痛ましいこと、どうして 70 才や 80 才の老人が自分の世話をできるのだろうか？私たちはそれが不可能だったことがわかっていて。母親たちは彼らの息子たちがグロゴールに収容されており、今 6 人の司祭様と牧師様 2 人がいることで少しは安心している。小さな少年たちの数人はマットレスの上で、母親から離れねばならぬと泣いている。他の少年たちはすごい冒険だと思い、歌いながら出発した。…中略…

私たちのシスターたちが中に入ってくるのが見えた。彼女たちはたくさん衣装を重ね着していた。彼女たちは 5 ヶ月間聖体拝領をしていませんと言った。だから私たちの代わりに彼女たちが聖体拝領に行くことが許された。

ヘンケス - ライスダイク

1944年9月2日

ムシ通り 8 番地に引越。幸いリートと子供たちといっしょに縦横 3m x 4m の部屋になります。家の全員がばらばらになりました。…中略… 私たちはすべて自分であくせく移動させ、疲れ果てていました。…中略… この家には 24 人が住んでいます。明日ユダヤ人、ユダヤの婦人たちはすべて移送のため 2 つの手荷物をもって整列しなければなりません。どこに行くのかは不明。フリーメーソン団員たちも去っていきます。

シスター・ロザリンデ

1944年9月3日

ユダヤ人とフリーメーソン団員は自ら申し出なければならない。彼女たちは他の収容所⁸⁵に送られる。ここにはユダヤ人の班長や看護婦さんたちが色々いる。彼女たちが去らなければならないのは残念だ、とてもいい人たちなのだ。どこへ行くのだろうか？これは日本軍の機密だ。ある人は

⁸⁵ 彼女たちは 1944 年 9 月 8 日タンゲランに移送された。

タンゲランでイラク系のユダヤ人のそばと考えている。他の人はまたクラマツト収容所だと考えている。またクラマツト収容所全員がここに移送されるとささやかれている。そうなるマザー・デシデーラと8人のシスターたち、高齢者たちの多く、そしてウルスラ会の病気のシスターたちもまた加わる。常に驚きが続く。

ヘンケス - ライスダイク

1944年9月4日

シスター全員が立ち去ります、グニング看護婦とその他すべてのリーダーたち。みんなはトランクを正門に持っていくのを手伝います！…中略…ユダヤ人女子は明日になってから出発。…中略… 11才以上の少年たち全員連れ去られます、今年11才になる少年たちも。おそらくグロゴールでしょう、650人の少年たちです。

シスター・ロザリンデ

1944年9月17日

1週間以上経った、なんと私たちは色々体験したことだろう！私たちは現在ここクラマツト収容所にいる。前に書き終えたところから始めよう。9月8日午後2時15分、私たちは、病気のシスターたちも全員、そして病棟で臥せているシスターたちさえもクンプレン[点呼のために整列]しなければならなかった。私たちが整列していた時、2人のヤップが視察にきた。彼らはとても恥ずかしげに行かない、私たちには何も言わず、そして「プラン」(家に帰れ)と叫んで去っていった。

私たちはまだ何も分らず、それだけにいっそう考え込む。私たちがチデンに残れるという望みは誰も持っていなかった。翌日、9月9日土曜日、私は早くもトランク、収納箱、スーツケース、バケツすべてに名前と戦争捕虜番号をつけていった。これはとても幸運だった。夜、点呼の後、私たちはまた残っていなければならず、そこで少年棟の逮捕者⁸⁶、そして他7人のプロテスタントの牧師様たち、宣教師たちとともに私たちはどこか他の場所に出発すると言われた。私たちはベッド、テーブル、戸棚や椅子を持っていくことは許されなかった。私たちの籐製の腰掛け、マットレスとリンネル製品だけが許された。「本は？」と私はたずねたが、シスターたちは触らぬ神にたたりなしで、その他の必要なものも持っていくように合図した。

私たちは数日後にあたる日曜日(9月10日)、トランクが点検できるよう、夕方6時までにバラ

⁸⁶ 宗教儀式が禁止された後、宗教集会を開く代わりに所謂「クリスチャン便り」(タイプした説教)を配布した女性たちは処罰された。「序」p7-8参照。

ン〔荷持〕すべてを正門に集めなければならなかった。私たち自らは月曜の朝、マットレスとクッション、1日に必要なものだけを持って正門に整列しなければならなかった。少しまえにグローゴールからやってきた10人のシスターたちも、少年棟にいる逮捕者と7人の他のプロテスタントもいっしょに行った。

点呼の後、家に帰ろうとする収容所住民たちは私たちに去らねばならないのかとたずねた。「はい」と私たちは返答した。顔付きすべてに悲哀が読み取れた。私たちもやはり毎日助けることのできた多くの人々のために思った。プロテスタントの一人は「私にヤップは私たちが人々に強い影響を及ぼすからだ」と言った。そうヤップは私たちの影響を怖れているのだ。彼らは私たちが本当はどんな人間かを知らないのだ。彼らは何か分らないし、おそらく信用すべきでない色々な力だと分れば、なにも関係したくないと思っているのだ。

家に戻ってすぐ、私たちは何を持っていくのか、何を置いていくのかを真剣に話し合った。ベッド、戸棚、小さな戸棚、椅子は置いていく必要があった。私たちはグローゴールから最近やってきた女子たちの多くに色々喜びを与えることができた。決して忘れることのできない日曜日になった。誰もが私たちを手助けしようとした。重作業班の少女たち⁸⁷や、縫い物と印しつけを助ける多くの知り合いの婦人たちが進んでやってきた。なぜなら洗面器、洗面具、寝間着、毛布などが入れられるようにマットレスはティカール〔睡眠用マット〕に縫い付けられる。私たちは早くに灯りが点けられるかたずねた。空襲警報がなければ許された。幸い、警報はなく、私たちは早くから始めた。

9月11日、ふう、何という騒がしさ。まるで移民の引っ越し。なんとヤップは私たちを原住民と同じラインに置くよう試みていることなのだろう。私たちが新しい場所になれば、地面に眠ることになるだろう。明らかにヤップの目的だ。私たちはほとんど眠れず、特にどこに行くのかという緊張のためだ。一人のヤップが「遠くない」と思わず口にし、それで私たちはタンゲランかあるいはクラマツト収容所だと推測した。その朝はすばらしい別れになった。私たちは荷物や袋をもち点呼に立っている何千人もの人々のそばを通過して出発した。こちらでは挨拶、こちらでは握手。私はしばらくチャルダ・ファン・スタルケンボルフ夫人を見た。彼女は私に「マザー、もうすぐ終わりますよ、私の夫がラジオで話すでしょう」とおっしゃた。

素早く私たちは整列。逮捕者たちも連れて来られた。幸いなことにマザー・ジェラルディーネもだからいっしょだ。私たちはすでにバランを下に置き、反対側に立つ。彼らはすべて点検したがっている。ああ、驚き、私たちの腰掛けも山のように積まれている。これさえも持つていくことが許されなかった。私たちは前の晩すべてのトランクや木箱が開けられ、紙類すべて、書籍全部と白紙の便箋はすべて取り出され、その山に放り出された。私たちが便箋を自らの手に持っていたのは幸いだった。でもトランクには無くしたくない書類が入っていた。もし私たちが書籍や例えば議事録などが入っていたなら、間違いなく捨てられたらろう！私たちはあとで女性の通訳から、書籍を検査したあとで私たちに送るつもりだと聞いた、そして事実送られてきた。

⁸⁷ 「重作業班の少女たち」はゲデック〔竹で編んだ柵〕の設置・移動や引越しなどの重労働を行なった。

数人のヤップが正門からやってきて、私たちのカバン、袋そして小さなトランクを点検しはじめた。すべて直ぐに放り出された。組長の婦人達がまた入れなければならない、彼女たちは少なくとも私たちを助けようとした。また重作業班の少女たちも時折隠れて何冊かの本を私たちのトランクに放り込んだ。いくつかのトランクには本がまだ入っていた、他のトランクにはなし、でも白紙の便箋はすべてなくなっていた。小さな荷物の点検がほとんど終わり、そこそこ、小さな荷車にメモが捨てられてした。また英語やマレー語の文書や講習や…マザー・エドメーナのところではヤップが電球を1個見つけた。彼は荒れ狂いました、というのはもう長いこと電球を所持することは許されていなかったからだ。彼女は列の前に出なければならなかった。彼は荒れ狂い、電球を彼女の足の前で壊した。幸い彼女は一言もしゃべらなかつた、叱責を受けている時には口を開いてはいけなかつた。

点検の後、私たちはバスがやって来るまでまだ長いこと立っていた。正門が開いた。私たちはグループに分けられ、もう一度整列、それからバスの中にぎゅう詰めになって乗り込んだ。私たちはほとんど座れず、バランを膝に上げ、そして出発した。どこへ？愚かにも、どこに連れて行かれるのか知らないと、すぐに緊張する。私たちは一言もしゃべってはならず、窓は閉めておく必要があつた。一人の武器を携えた日本兵が私たちの後ろ、車の中に立っていた。振り返るとどこを走っているのか良く分かつた。私たちは直ぐに分かつた、グロゴールでもタンゲランでもない。クラマツト収容所の可能性が大だつた。やはりそうだ。

ベルフ

1944年9月17日

最近多くの事がおこつた。全部は話したくない、なぜならことに私自身のことを全部話したかつたら、それに何日間も必要だろうから。一番重要なことはウィテが去つたこと、ロツプが去つたこと、コービーが来て、デ・ヨング夫人が去つたこと。そう、失つたものは得たものより大きいことが分る。なぜならウィテ・ローマンはまだやはり一番大切。そしてここ数週間はさらに親密になつてきたのに！…中略…

ともかく。ロツプとの別れも辛かつた。ロツプ、ウィテといっしょに11才以上の少年たちはグロゴールに移送された。同じ日（およそ3週間前）グロゴールからアート・フェルボームとレイニー・ファン・ノールトがここに来た。その1週間後、デ・ヨング夫人をはじめとするユダヤ人女子が（一部）移送された。彼女は別れの時私にくちづけた、でもウィテとは別れを告げる機会がなかつた。そして一昨日、コービーが来た。そしてもちろんアードリー・プレイも。…中略…

人生に多くを期待してはいけなかつた。人生が与えられるのはお粗末なもうけと勞せずを得る幸福だけ。私はウィテを3週間前まで得た、そして毎週コッホ先生と共にウェルギリウスをいっしょに読む喜びがあつた。悲しみは人にとって役立つもの、人生に一番不可欠なものである。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月4日

9月15日、クラマツトからの人々がやってきました。勤務のため家族収容所にいた男子の妻と子供たち。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月31日

ラーン・トリヴェリの家の1軒は熱帯性潰瘍のための病棟です。この慢性患者は普通の家に住むことが許されません。中央調理場が建設されます。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月31日

ケドンバダック⁸⁸の人々が到着しました。このためチタルム通りの半分が明け渡され、そして他の家に詰め込まれました。現在 6294 人です。

ベルフ

1944年11月11日

私たちは最初から収容所にずっといる特権階級に属している。私たちのチデン収容所はグロゴールの人々からなる見知らぬ人たちで満杯である。彼女たちがここに到着した同じ日に、同数のボタンハリ通りの高齢男子、少年棟の少年たちと母親から分けられた少年たち（合計およそ 700 人）が、明け渡されたグロゴールへ引越すため重そうなバスの中でチデン通り西の角でゆっくり方向転換していた。だからグロゴールの人々はチマラヤフィールドに収容され、その他ボイテンゾルグのコタ・パリス（私の心はまだ感謝でいっぱいだ！）からの人たちはチタルム通りのわずか5戸の家屋に収容されている。それからヨーピー・ファン・メールテンがいたケドンバダックの人たちがやってきて、残りのチタルム通りが必要となってくる。ああ、それにこの向かい側、チュジュン通りの奇数番地にはタンゲランからの人々の一部も住んでいる。でもタンゲランから

⁸⁸ ケドンバダック（ゲドンバダック）はボイテンゾルグの外にある収容所。1944年10月12日、ケドンバダックからチデンに500名以上の婦女子が移送された。

の人々はここにもう長くいる。

1944年5月末から8月末まで、見知らぬ人々のいない家の中でとても快適だった私たちの静かなブランタス通りは、今は閉鎖されている。奇数番地の側はラーン・トリヴェリ集合病棟の赤痢病棟⁸⁹で、偶数側は精神薄弱者用、そしてセラジュー通りは結核患者のためのものである。ヤップは赤痢（この言葉さえ口にはしてはいけない）と結核を死ぬほど怖れており、だから別棟なのである。ラーン・トリヴェリ最初の区画（私たちが前にいた100番地も入っている）はブランタス通りに入る必要のないものすべてである。まず大きな病院、すなわちその他よく知っている100番地は保養所、102番地はものすごく親切な私たちの元同居人ブルク夫人が家事に君臨し、コレットとレディンギウス（2人の外科医）が同じく医療に君臨している外科病棟である。それから2つの小児科病棟と、とてもひどい傷でクンプレン[点呼のために整列する]ことができない人々のためにハルト夫人の支配する住居兼診療所がある。その上にずっとクンプレンできない人々のための1戸、あるいは数戸の家屋がある。これが静寂のオアシスのラーン・トリヴェリ！なぜなら残りの収容所は…。

チデンの人々すべて（当初クラマツトに収容されていた人々を含む。コタ・パリスの人々は元クラマツトの人たち）は今ラーン・トリヴェリの向かい側に住んでいる、でもこの居住地の一部は見知らぬ人々によって占められている。私たち、チュジュン通りの偶数側はモヒカン族の最後と呼ばれていて、次に来る「喜ばしい新来者」にまず場所を明け渡すことになる。今現在はチュジュン通りの延長にある区画とその後ろ側に位置するラーン・トリヴェリの家も1000人（噂！）の新来者に明け渡される。それでまさに最初からのチデン住民の本拠地である偶数側が「侵入者」の真っ只中になる。侵入者がいかに愛すべき人々だとしても！いっぱい、ああ、あの家屋！そう、ヤップは居住地を切断し、不確かな理由のために大部分を放置している。ソネイ親父は私たちを見張っている、いやらしい奴！彼は本当に恐怖政治を行い、すべて忘れるむこうみずな人を例外として、彼の名誉ある名前を聞くことによって収容所全体をおびえさせ、震えさせる。

ヘンケス - ライスダイク

1944年11月16日

最初の雨が降りました、最後の靴を節約するため裸足で泥の中を歩きます。私たちはあらゆることのために外側を歩かねばなりませんでしたが、というのは部屋の中により多くスペースを得るた

⁸⁹ 熱帯地方におけるきわめてひどい伝染性の腸疾患（下痢、粘液血便、）で、細菌性あるいはアメーバ性がある。アメーバ赤痢は時には慢性症状を呈する。この疾患が悪化すると肝臓膿瘍あるいは腹膜炎を引き起こす（M.B.Co ë lho, Zakwoordenboek der geneeskunde : bevattende de meeste in de geneeskunde voorkomende uitheemse en Nederlandse woorden, uitdrukkingen, afkortingen enz./Co ë lho-Kloosterhuis (Arnhem, 1989年23版)p209)。

めドアを全部閉めているからです。炊事は通路あるいは外で差しかけ屋根の下でします、というのは台所と通路には全部人が住んでいるからです。現在ここには 26 人が居住しています。

ベルフ

1944年11月26日

「庭」はまるで水牛が心ゆくまで跳ねまわっている水田のよう。私たちは熱帯モンスーンの真っ只中におり、毎回通路から家の一番後方へどしゃ降りのなかを通り抜けなければならない時、雨の中炊事しなければならない時、雨の合間に洗い物に出なければならないのは大変。洗い物ごとに靴をついやす。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月2日

パルテ医師と患者がグロゴール⁹⁰へ移送されました。バンドン⁹¹から 900 人が到着しました。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月7日

あとからもう 200 人バンドンから到着しました。丈夫なものたちがその収容所を整頓する必要がありました。グロゴールからかなりの高齢者と重症患者が戻ってきました、ここで死水をとることが許されたのです。病棟になっていたあらゆる家屋はまた引越す必要があります。「トコ」も一度引越す！まだまだ収容できます！人々は疲れ果てながら身の回り品を苦心して運び出しています。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月13日

昨日の午後 7 時、この居住地では 7363 人を数えました。リーク・ノールダイク（収容所リーダー

⁹⁰ P.M.ファン・ウルフテン・パルテ医師は最初クラマツトにいたが、1944 年 9 月チデンに、そしてこの時グロゴールに出発。彼は 1945 年 4 月再度チデンに戻された。

⁹¹ バンドンのカレーズ収容所からの人々。ケドンバダック収容所からの婦女子も加わっていた。

ー！)はまだ普通の点呼を終え、夜10時半に彼女は今朝6時にグロゴールに行くため整列していなければならなかったことを聞かされました！全ての慢性患者はグロゴールに行かねばなりませんでした。暗い中、何もかも荷造りする必要がありました、なぜなら電灯は朝4時になってはじめて点けることが許されたから!ともかく、みんなもちろん終わりました、収容所全員が手伝ったのです。

正門に用意のできた移送グループが立っていた時、また234人の高齢の哀れな人々がよろめきながら到着しました。彼らはほとんどベッドも用意されていないいくつかの家のなかに入れられました。そして夕方近くになって初めて幾人かの志願者によってシーツが替えられました。一人はすでに瀕死状態でした。彼らは触れるには不潔すぎ、シラミがたかっていました。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月28日

本日、高い地位の夫を持つ婦人が全員出発、おそらくタンゲランへ！アニー・ファン・デル・プラスとハンス・ギーベン、ハンス・ヨルクマン、ヘレーネ・ファン・ビュティンガー・ウィヒャース - ラーマン・デ・フリース⁹²などなど。ユダヤ人も全員。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月10日

夜中の2時半メガホンの声：「重作業班全員直ちに正門に集合」大騒ぎ…なにが始まるのでしょうか？移送されるのでしょうか？いや、今回は「印欧人」のみ。106人が去りました。12月末の移送は234人に達しました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月23日

今朝、8時45分に「単身女性」がクンプレン [点呼のため整列する] (ソネイは20才から45才までの女性、子供のない既婚女性、母親のいない独身女性、あるいは息子や息子たちが移送され、他に小さな子供たちのいない母親を単身女性とした)。1時まで彼女たちは立っている必要があ

⁹² ここではそれぞれ蘭印評議会の議員 (dr.Ch.O.van der Plas) の夫人、マカッサル司法検事 (mr.A.H.C. Gieben) の夫人、国民参議会議長 (mr. J.A. Jonkman) の夫人、ジャワ銀行頭取 (mr.dr. G.G. van Buttingha Wichers) の夫人たちのことである。

りました。目的不明。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月24日

メガホンの声：「昨日クンプレン [点呼のため整列する] しなければならなかった人は皆、病気の有無にかかわらず収容所事務所に集合！」不安！緊張！誰も詳しいことは知りません。4時にメガホンの声：「新しい収容所に同伴したい志願者は全員、ただちに収容所事務所に集合！」不確か、年少でない子供たちを伴う幾人かの母親たちが、友人の「单身女性たち」といっしょに行くことを申し出ました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月25日

おそらく合計 360 人が出発する。彼女らは2つの大型トランクと小さな手荷物を携行することが許された。これは心をそそられるように聞こえます、いまだかつてこんなにたくさんの荷物が許されたことはありません（ほとんどが多くとも一人当り 20 キロ！）。この「丈夫な」女子の、ほとんど子供のいない移送は、労働キャンプ、すなわち農園企業に向かうらしい。ソネイによれば、そこでは良質の食事がもらえるところですよ（たわごと！）。…中略… 総勢で 500 人が出発しました、ここバタビア郊外のマカッサル農園⁹³へのことです。

ブルマ [ケドンバダック収容所から移送]

1945年1月29日

わたしが書かなかった間にいろいろな出来事が起きた！1944年10月1日印欧人が出発し、わたしたちの収容所ケドンバダックはぜいたくな収容所になった。でも喜びも束の間、10月12日わたしたちは全員チデンにいた。これはすごいちがいだった。…中略… ゲルダお婆さんとデーワ（ゲルダお婆さんの娘）とファン・デ・K一家といっしょにガレージに入った。それにガレージの後ろの運転手部屋にはファン・V一家が入る、だからいっしょに炊事する 10 人のクンプル [仲間グループ]。…中略…

⁹³ マカッサル農園あるいはカンボン・マカッサルは野菜栽培（収容所のための）や養豚（日本人用）の労働キャンプであった。キャンプはボイテンゾルグの本通りからあまり離れていないメースター・コルネリスの南約 8 キロにあった。

12月1日バンドン収容所からカレーズに1100人が到着した。これは農園企業の人々と小さな街から来た人々である。その収容所には6000人の人々が収容されていた。家は広がったが、食事は悪かった。その人々はみんな栄養不良で死んでいった。実際にバンドンからの人々はチハピット収容所に12000人とともに収容されていた。両収容所は現在全くなくなって、人々は他の収容所にちらばされた。人々はアデック、ストリウス、ケドンバダック、コタ・パリス、アンバラワ、セマラン、クラマツトに収容されている。…中略…

1月26日およそ400人の婦女子が（農園で？）働くため収容所から出て行った。少なくとも、ニッポン人収容所長ソネイはそう断言した。…中略… もっとたくさんの人が行くことになるはず。なぜなら名簿が要求され、作成された、そしてこれはいつも何か意味がある。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月30日

私たちの部屋は今まさにトレーラーハウスのよう。リートは今小さな「テラス」で料理していて、煙が楽しく中に入ってきます。私たちは2年半の収容所生活の後でもまだ良いほう、完全にガラクタやわずかな空間に慣れています。また一日が過ぎます、子供たちは眠り、月は美しい。私たちはまだ外に座っています。ヤップが見廻りにくるとくすくす笑いながらすばやく中に入ります！私の灯りを消さなければ、私たちも眠りにつきます。今日はメガホンの呼び出しがないことを願って。

ボルハイス - スキルストラ [カレーズ収容所から移送]

1945年1月30日

1944年11月末、私たちはカレーズを出発。12月1日ここに到着。カレーズでの最後の年、様々な事情でかなり日記は不規則になる、でも最大の理由は適当な紙があまりなかったことによる。今、息子マイントがこの現金出納帳を「オガンフィールド⁹⁴」で見つけた。そこには現在毎日のように突然出発する女性たちの捨てたたくさんのバラがみつかる。つまり彼女たちはここでは「スピンスタース」とも呼ばれる単身女性であり、私たちがここに着いた後、出発した最後のグループである。

私はカレーズの最後の時期についてあれこれ書きたいと思っている、でも移送前後の非常に辛い時期、さらにこの移送での常になく心配し悲しんだ、悲劇的な後遺症によって、今の所カレーズ時代を思い出すことがかなり困難である、すくなくとも満足に書き留めておくために

⁹⁴ チデンの最北端、オガン通りの傍にあるゴミ焼却場のこと。

は。

まあいい。なぜなら今私はこれがすべて辛い最後の時期になろうとしていると感じ—そして用心のために「辛い」を強調させ—それによって今また私に日記を書く熱意を固めさせることになった。やはり今がんばり続け、まさに今私たちの食糧がもう十分ではなく、すでに現在皆が空腹であることは確かなことで、私たちの神経がまいっていることを静かに見つめる勇気ややはり持つべきなのだ。これらはすべて—悪夢として—私たちをここに移送させた目的であった、そしてバタビアの人々がここでバンドン人と呼んでいる私たちは、最初の週はずっと運命の悲惨さと辛さを感じていた。…中略…

グループごとにカレーズから出発する直前、毎日バランを詰めた大型トランクを持っている女性は多くを残して行かねばならなかった。時間と忙しさ、ものすごい神経の緊張、だからヤップの目的がそれであったなら、成功したと呼ばねばならない。彼女たちはどこへいくのだろう、自分の番が来た時は、すべて疑問のままだが威嚇的である：鍋は持って行けない、10才以下の子供たち用のリュックサックもだめ、あとでまたよいことになったり、それからまたカバンが許される。みんな慌ただしく、その時初めて、多くの女性は書籍、写真など…トランクに詰め込んだリンネル製品や肌着など、夫のものなども含めて、大切な所有物に別れを告げなければならなかった。このことですでに2年間何にも所有していない私たちは、苦い経験を飲み下す必要があった、つまり私たちは今友人や知り合いのところに行き、リンネル製品や肌着の不足を補充することができたわけなのだ。

このことは私たちにとってものすごい落胆、そして私自身はこのことをカレーズ出発の最も惨めな経験の一つとして感じたのである。このことによって私は私欲と所有者がいかにか力を持つかということが分った。私は今いくらか最も必然を要する衣類を与えられたことを恥じた。そして私といっしょの多くの女性は、もっと前に援助してもらえなかったことを、この慌ただしさと騒ぎの中でいかに納得しなければならなかったことに関しては好んで話したくない。必然のみが彼女らに私たちに申し出を強要し、あるいは彼女たちの突然去っていった部屋のものを見出させたりしたのだった。これに関しては沈黙していたい。突然2度の移送を経験しなければならなかった私たちは、これらの醜態からは逃れられた、でも私は入ってきた時より多くのリンネル製品で出発したことを遺憾ながら言う必要がある。このようなことによって苦い思いをし、悲観的になった女性たちとここで出会ったが、将来解放によってこの感情が抑えられることを願う。私たちは20キロ持って行くことが許された。私はこの重量を持って行くためトランクはすべて残し、ただ食糧（米、コーヒー、お茶、小麦粉、デンデン）のみと2つの袋、2つのリュックサックとカバンを携えた。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月2日

私は今、引越しがある程度強制的なものであることを有難く思っている、なぜならもう引越す元気がほとんどなかったのだから。でも今、トイレ！のある一つの家の子供たち（マイントとアンケ）といっしょなのは喜ばしい、2ヶ月間の惨めさを経て快適とみなすことのできるこのぜいたくさ！まだ手を洗うために鍋を探さねば、でも日中にもお水がある！庭の一部分、もう最後の時期だという意識が増す中、日記を書くことへの欲求など、すべては1つの空間に3つの家族がいっしょに生活していることによって抑圧されていたのだ。

私たち3人は再び息をつくことができ、何キロも体重が減っているとはいえ、私たちは生活が生活であり、強制されるものでないことを体験する瞬間にまた達した。これらの瞬間は私が得た庭後方の垣根の小さなスペースによってもたらされたものである。ここに私は居間用の家具を与えられたことももちろん幸運である。私はたくさんのやさしく助けてもらったことや、それらがすべてとても個人的な分け前だということを黙っていたくない。なぜなら私はここで人がいかに生活し自分自身をみいだしているのかを一般的な基盤として持ち続けていきたいと本当に思う。

最新の命令：1軒につき最高40ワットの電球2個だけ点灯することを許可！

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月10日

この家に来る前、私はもう2人の女性といっしょにガレージに住んでいた。合計で8人。それは過密で、実際ひどすぎた。4才、3才、2才の子供たちなどを持つ家族構成がかなり異なる3家族。私の子供たちへの時間は全くない。彼らは無秩序に通りに出る。私は彼らに本を読んでやり、たくさん話をする習慣だった：一般教養をできるだけ身につけておくため。それらは何一つ成功しなかった。ヨーロッパでも大都市はアパートや賃貸倉庫やスラム街は過密家族だというシステムと知っているが、今私はどこか相違していると理解している。なぜなら50人が1つの家屋でお互いを無視することができるのと、あるいは私たちのように仕事のすべて、食糧のすべてを分け合う必要があるとは異なるとおもう。A夫人と一緒に食糧を取りに行かねばならない、ココヤシはB夫人、C夫人と分けねばならない。すべてを分ける必要がある。なぜなら小さな子供たちはサンテン [ココナツミルク] 入りの粥が必要、大きい子供たちは生のココヤシを欲しがる。このようにこの生活は思っているより神経がすり減らされると身を持って感じた。今グダン [物置] の中で私はより自由に再度息をつくことができる。そしてやはり54人の人々、言いかえれば婦女子といっしょなのだが一昔は印人の1家族でも小さすぎると思ったであろうーこの現代風な家に住む必要があるのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月18日

瞬く間に過ぎていく日々の中では奇妙なこともあまり目につかなくなりました。水位が高いため汚物溜めを空にすることができない（庭全体がすでに数週間泥沼で、雨は継続している）ので、人々は絶えずきわめて真剣な顔付きで歩いています。便器を片手に、片手には水の入った缶をたずさえ、通りのかどにあるふたのない下水溝へ向かいます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月20日

高齢男子全員と今年 12 才になる少年は収容所事務所に集合とのうわさがひろまっています…彼らは出発するのでしょうか？

学校以外の全ての病棟は再度引越す必要があります。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月21日

少年たちと高齢の男子は本当に去っていきます。およそ 100 人です。まだとても幼い。彼らは明朝 10 時半、荷物を持って整列する必要があります。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月22日

少年たちは 9 時半に移送を待つため正門に集合しなければならない…泣いている母親は誰もいません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月23日

大興奮！収容所全体が驚愕。全ての家屋がぎゅう詰めになります。また一部を明け渡さねばならないから。第Ⅲブロックの大部分を明け渡す必要があります、ラーン・トリヴェリとその後方の

通りの一部です。奇妙です、でもこの緊張した一瞬に、突然私は心を満たす静寂と喜びを新たに感じました。その時にはもう、どれほど続くのかもどうなっても良くなっていました。私の確信はゆるぎないものになりました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月24日

チュジュン通りのゲデック[竹で編んだ柵]を重作業班の少女たちが瞬く間に移動させています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月26日

昨日とうとう少年たちが出発しました。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月26日

2月21日突然33年生まれの少年全員に事務所に申し出るべしとの知らせがきた。なぜなのか誰も知らない。でもどの母親たちも、11才の息子たちが少年収容所⁹⁵に収容、移送の順番が廻ってきたことがほぼ確かと分っていた。私の最初の行動はマイントが眼科医の治療中であり、とどまる必要があるとの診断書を得るためファン・ハッセルト医師に向かうことだった。多少とも収容所リーダーを勤めている女性全員と私は話し、事情を説明したが、マイントが今回は加わるだろうと直感していた。彼も、明朝このために特別指示された家に整列し、直ぐには出発しないまでもそこで就寝する必要があるという知らせと共に家に戻った。ニッポンは言った：ママがトランクをまとめ、その家の中に準備されていなければならない。トランク1個とリュックサック1つを持っていくことが許される。その家のなかではマットレスが許されるが、持って行ってはいけない。ともあれ、いろんなことの合間に駆走が始まった。…中略…

合間をぬって私はマイントの縫い物を仕上げるためにあちこち手配した、私は2本のズボン同時に縫いかけで4分の3はすでにできていたから。私たちを最初にもすでにたくさん助けてくれた忠実な助っ人たちからあらゆる助けを得た。家でも人々は印しをつけたり縫い物をし

⁹⁵ マインデルト・ボルハイスを含む150名の少年移送は、1945年2月25日、チマヒのバロス第6少年収容所へ向けて出発した。

たり、そしていかにマイントが本当に毎日彼の収容所物資不足を補うために何かをもらっていることはほとんど言うにおよばないものである。マグカップ、食器を入れる缶、木靴。少年棟にいた一人の親切な母親は、私がマイントは木靴も靴も持っていないことを話した際、すぐに彼女の娘さんが鋸でひこうと思っていた木片を差し出した。このようにマイントはまだおおきすぎたアソケの靴をもらった。ズボンはきれいに縫い繕った。ともかく、あらゆるところから親切な助けがあった。

その他には気力が奪われるような日々であった。なぜなら少年たちは何度も家に戻ってきて、まだいつ出発するのか知らされていなかったから。他の収容所、グロゴール、マカッサル農園などの追加を待っているためだ。その少年たちはついに3人のオランダ人男子（エンデルト、ファン・フローテン、B. K.）の誘導の下にやってきた。私は、少年たちの指導と少年棟を受け持ち、そこで昼夜居住してほしいと依頼された。しかし食事と洗濯と私の娘アソケは家なのだ！不可能だった、でも数時間行って少年たちとゲームなどをしようと約束した。その約束は果たした、マイントは後で私に「君のお母さんはすごく話し上手だぞ、おい」と少年たちが言ったと話した。マイントにとってはすべてがものすごい経験である、なぜならバタビアの少年たちの間で彼がただ一人のバンドン収容所からの少年だったから。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月27日

収容所ではベッドやトランクをくくりつけたり運んだりしながら歩く人々の騒音、彼らの身の回り品が「運んで」あったら、他の家にぎっしり詰め込みます。雨の中、車輪のついているものは何でも、引いていきます。本日夜中にチョジュン通りが「閉鎖」（ゲデック [竹で編んだ柵] はもう準備されている）されるので、だからまあ濡れてもいい、さもなければ彼女たちは持ち物をすべて失うのです。大きなタンスはやはり取り残されます。自分たちでは持ち上げることができないのです。まるでみんなが私たちの住むムシ通りに住みに来るみたいです。まるで乱された蟻の巣のよう。だがこの状況はまだ我慢できないものではありません…私は本当に終戦が見え出す以前にもっとひどく狂いだすと信じています。…中略…

ブランタス通り（赤痢病棟）がオガン通りに引越さねばなりません、だからそこが現在「恐怖の通り」になるのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月28日

収容所はまたかなりの混乱状態です。1時半に「単身女性たち」がクンプレン [点呼のため整列]

しなければなりません。ラーン・トリヴェリ奇数側の一部も明け渡す必要があります。ブランタス通りとチラマヤ通り（奇数側）も本日明け渡す必要があります…数千人の人々が住むところを探しています。そして一度夜になったら、またすべてが静かになりみんな場所があるのです。奇妙なことです、でも本当のこと！人々は走り、子供たちの助けさえ求めるのです。何一つ異議を唱えることなく私たちは素直に従います！なんと彼らは自分たちの権力を強く感じ、オランダ女性たちの哀れな骨折り仕事を楽しんでいることか、日本の男たち！そして私たちがクンプル〔点呼〕に立ち、頭がすべて上がっていたら、私たちはまたクンプルの途中物音をたてたために何時間も「立たされ」、彼らを通る時にまた冗談をささやくのです！

慢性患者が「立ち退き」になります、どこへいくのでしょうか？…中略… 赤痢病棟以外の病人はすべて立ち退くとささやかれています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月2日

多くの人々がまた他の収容所へ移るという通達を受けました。「トゥンパット・ベルシ [清潔な場所]」とソネイがその収容所を呼びます！外科および慢性患者に外科医一人と看護をする人員。またたくさんの丈夫な若い女性がいっしょに伴なうことでしょう。徐々に子供を持つ母親だけが残っています。病人に必要な手伝いはもう話しにならないでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月3日

収容所の半分はトランクをまとめ別の人のところに保存するために運んでいます。あとの半分は勇ましく引越しています、そして残りは…残り的人々は無意識に「いつ私の番がくるのだろうか？」と考えています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月4日

私たちにとって昨日はまた明らかな混沌状態でした。現在、日曜日の早朝、一種の疲れきったような静けさ。わずかな物音、点呼もありません。

平穏??これを書いて1時間もしない後、病人（そのうち2人が瀕死状態）たちの考える最も悲劇的な行進。数人を除き病人たち全員が去っていきます！年老いた、そしてからだ

の不自由で、最初は共に行くことが許され、それから最後の瞬間になって許されず子供たちと離れ離れになった母親たちが軍用トラックやバスの中に乗せられました。200人以上がこのような方法で去っていきます。

およそ 500 人の人々の移送が今出発します…⁹⁶。ラーン・トリヴェリは泣き叫ぶ人々の一群で、誰も助けたり、何時間も地面に座って手荷物によりかかりながら待ったあと去っていく人々を助けたり、あるいは傍にすることは許されませんでした。このようなことをもう長く耐え切れない数十人の老人たちは愚かに惨めにどこか道の傍に座っています。…中略… 数時間以内にラーン・トリヴェリはまた静かになりました…これら哀れな人々のうちどれぐらいがまた戻って来られるのでしょうか？

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月6日

病人などの移送は聖フィンセンティウスに向かいました、数人の手術患者が戻ってきました。学校は、病棟としてやはり残るようです。…中略…家には5人が加わりましたが、2人が去りました。今は合計 28 人。(私たちがこの居住区に入った時には、収容所委員会は多くて 8 人と決定したのに！)

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月8日

居住地の中は不潔で無秩序そして絶望的です。実際には到着した大きな移送グループが明るさを取り去ってしまったのです。現在、収容所は満杯そして不潔です。

ボルハイス - スキルストラ

1945年3月13日

2月21日から早いテンポで出来事が続く。少年たちはだから2月27日に出発。2月25日に私たちは再登録、あるいは本当は赤十字社カードのチェックをしなければならなかった。「単身女性」たちはまた3度までも出頭し、通り全部を明け渡さねばならなかった。マイント出発の際の忙し

⁹⁶ この人々はビダラ・チナのメースター・コルネリスにある女子寄宿舎で、バタビア及びその周辺の婦女子収容所からの病人は、病院として開設された聖フィンセンティウス（バタビアのフィンセンティウス協会）に移送された。

さと悲しみからまだほとんど抜け出せないでいるアンケと私は、2月28日3時前にズワルト一家の控えの間に引越さねばならなかった。そして3月1日木曜日の早朝、夜中ずっとガメラン[ジャワのオーケストラ]を聞いた後、ニッポン時間の5時半にしわがれ声で「バグン・クンプル」[起立、点呼]と呼ばれた。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月14日

ブロックⅢの4軒の大きな家からはじまり、また家屋を明け渡さねばなりません。およそ250人が予定されています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月16日

本当に雨期の終わりなのかしら？すでに2日間陽が照っています、私たちの周囲の一番ひどい泥沼が乾燥し始めました。母親たちはみな衣類やベッドに空気を通す、誰もが陽気です、また引越しをしている人々でさえも！子供たちは屋根の上で日光浴。また20数人の人々が通知を受け取ります、荷物を詰めて…出発！どこへ？

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月18日

昨日また20人の看護婦たちといっしょに病人移送が出発しました。看護婦の一人が手荷物を一個余分に持っていかうとしました。ソネイは怒り狂いました。現在、医師全員、「十字社の人たち⁹⁷」、薬剤師たち、薬剤師助手、看護婦たちがクンプレン[点呼のため整列する]しなければなりませんでした。…中略…

本日夜10時半に、また600人の人々が入ってくるでしょう。子供たちを伴った疲れ果てた母親たち、彼女たちを助けることもできません。なぜなら10時半以降は誰も通りには行けないのだから。

⁹⁷ 赤十字社と青十字社（アルコール依存症予防のための国際基金）を意味する。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月19日

コタ・パリス、ケドンバダック、クラマット、バンドンからの人々だ。本日午後もっとたくさん到着するらしい。アンネがちょっとラーン・トリヴェリを見に行きました。彼女たちはまだみんな立っていたり、横たわっていたり、座っていたりしています。昨夜はなんという凄まじい夜だったことでしょう。今ようやく全てのトランクがチェックされ、道にひっくり返っています。多くの人が殴られました。…中略…

3時、新来者はいまだに立ったままです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月20日

600人がすでに到着しました、現在今朝6時から1100人がやって来ます。アデックの人々はもう全員そろっています。…中略… 涼しい日です。時折すこし雨。いずれにしてもこの移送の哀れな人々は、強い陽射しの下に立っていなくても良かったのです…でも反面わずかな身の回り品が濡れます。…中略…

11時。ムシ通りの反対側の家屋はいっぱいになっています。哀れな元気のない顔付きの人々が私たちを見えています。私たちはまだ何もしてはいけません、ソネイはムッソリーニのような目つきで彼の犠牲者を観察するために通りの少し離れたところに立っています。…中略… 夜9時半、移送で到着した病人たちが直ちに出発します。私は一たとえ孤独⁹⁸でも一私の息子が少なくとも自分も居住区で病床にあることを幸いに思います。泣きながら母親たちと子供たちが正門から戻って来ます…どれくらい長い別れでしょうか？おそらく多くの人々にとって永遠…

ブルマ

1945年3月26日

わたしたちは引越した、明日ですすでに3週間ディディおばさんのところにいる。…中略… 先週の火曜日と水曜日（3月20日と21日）ケドンバダックとアデックからそれぞれ500人、1100人が入ってきた。ファン・K一家はアデックにいたが、400人のグループがまだそこに残され、彼女たちはその中に含まれている。

⁹⁸ 彼女の息子ヤン・ヘンドリックはオガン通りの病棟に入院していた。「健康状態と医療事情」参照。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月31日

また病人たちが移送されます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月5日

私たちの家は現在満杯、32 人の人々。彼女らはいたるところで座り、歩き、しゃべり、作業します。少しでも動くのは不可能です。

ボルハイス - スケルストラ

1945年4月8日

ところで3月の出来事は素早いテンポで続いていく。3月19日、20日、21日と引き続いてコタ・パリシ、ケドンバダックとアデックからの人々がここに到着。これらの女性はまたそれぞれカレーズ（コタ・パリシとケドンバダックを経て）とチハピット（アデックを経て）からの人々である。多くの友人や知人に再会した。トーチェとその子供たちもようやくいっしょにやってきたと分った。彼女も今このラーンに住んでいる。彼女たち最後のグループは70人から100人が1戸の家屋に入っている。テラスにも居住している。ヘルミーン・ファン・Eと2人の子供たちなどはそこで寝ている。彼女たちはすぐマラリアに罹って、朝のクンプル [点呼] の時に倒れた。ハンス・マースはチハピットからクラマットへ、そこからコタ・パリシ、そして今チデンにやってきた。彼女は病気だ。アंक・ファン・ラインは病気だった。フィン・ハルドンは病人移送と共にやってきた。トーチェはアデックで重病に罹った。大きな引越しがある、チデンの人々の間にさらに多くの新来者が登録。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月9日

チデン収容所のこちら側にあるムシ通り 18 番地から 22 番地（だから私たちではない）とバタンハリ通り 13 番地から 17 番地は4月14日までに明け渡す必要があります。赤痢病棟はムシ通りの端にあるシスターの家の中になります。15日にはストリウス収容所からの人々がやってくる。最初のグループ 600 人、合計 1500 人が来ることになるでしょう。現在およそ 8600 人が数えられ

ます…「まだまだ収容できます」と Sp 夫人は言うでしょう。ここには 7 人加わりました…2 人が去り…あとからまた一人加わりました。今私たちは 33 人です。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月12日

強制的にまた引越し！人々は収容所全体に「詰め込まれます」。年長の少女たち（10 才以上の少年たちはもういない）に関しては、家族さえも離れ離れにさせられます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月18日

移送グループがどんどん入って来ます。グロゴールからはパルテ医師と「精神病」患者たち。ノールダイク一家もまた戻って来ましたが、楽しい⁹⁹。彼女たちがどこに詰め込まれるのか興味があります。デ・レーデ医師も加わっています、収容所にとっては有利です。彼がどこ（収容所のどの班）に入るか興味があります。1050 人です。これで現在ここにはすでに 9000 人以上の人々。

ベルフ

1945年4月21日

現在収容所には 9400 人いる。何度も人間の移送が到着する、その前に収容所では凄まじい家屋の明け渡しがあり、ほとんど無秩序な混乱を引き起こすのである。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月24日

引越し！6 日以内に引越さねばなりません。このように長期間くれるとはなんといいたいく…。どこに私たちは詰め込まれるのでしょうか？

⁹⁹ 元収容所リーダーのリーク・ノールダイクは、1944 年 12 月 13 日にグロゴールに移送されたが、この時またチデンに戻った。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月25日

リートと子供たちといっしょにチタルム通りの家になるかも！理想的です！

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月27日

私たちはチタルム通り 20 番地に引越します。居住地の一番先端。とても喜んでます！10時に警報…。急がせるため。私たちはベッド、戸棚などすべてを自分たちで引きずって動かしました（ベッドは分解してまた組み立てます）。これらすべてを塩、コショウをふったパン2枚（半分が4切れはたくさんに見える！）と冷たい紅茶だけの朝食の後で終えたのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月29日

身の回り品全部を移しました。私たちは半死状態。ヤン・オルファートが病棟で臥せていて手伝えないのがとても残念。何度も自らを失笑。汚れ暑がりながらリートと私はあくせく働きました。リートはしまいには裸足で、ヤン・オルファートがもらっていたジョンゴス [下男] のかぶのような帽子を被って！…。

夜。重作業と大工仕事がおよそ終了。子供たちは熟睡しています。私たちはみんな一日中眩しい陽射しでかなり日に焼けてしまいました。ここには残念ながら木がありません。でも汽車が通り過ぎるのが見え、大きな空間、そして遠くに素晴らしい林、そして汽車の土手の上にはアラン・アラン [茅] が見えます。私たちは6人にこんなに快適な部屋がもらえるとは思っていませんでした。疲れ果てた最初の夜は眠れませんでした、満月…・アネケと地面に座ってすこし米（朝食用）を食べました！月が私たちの灯りです！ニッポン監視が居住区の端っこにあるここを、定期的に通るのが見えました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月30日

私たちは家が満杯なのをほとんど感じません！…中略… この家には75人がはっています。

ブールマ

1945年5月7日

わたしたちはまた引越さねばならない。わたしたちの明け渡した家に今新しい人々が入る。わたしたちは最初トゥラン・バワン通りに行く予定だったけれど、すでに半分運んだ後、そこに住んでいた人々も引越すことになった。現在、わたしたち 6 人はアンパシート通り B14 番地の表側の居間にいる。大きな快適な部屋で他の 14 人といっしょなだけの静かな家だ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月14日

私たちはやはりチタルム通り 10 番地、ここは 122 人が入っている混乱状態の家に住んでいます¹⁰⁰。その合間に、チハピットから再度 750 人が移送されてきました。混乱と不潔さは滑稽です。私たちは全部持ち出すことができなくてよかった！戸棚とまだ私たちが持っている 2 脚の椅子は外においてあるがどうでもいいのです。ぐちをこぼしても何の得にもなりません。植物とツル用の竹さえも移動させることができました。リートと私は 10 時半過ぎ外に休息するためにどこか後ろ側を這い出す必要がありました…これはどうしても棄てがたいこと。家の中は南京虫が蔓延しています！…中略…

ソネイは自らこの通りの半分を竹で編まれた柵で囲むことを望んでいます。重作業班の少女たちがまたやらなければなりません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月16日

南京虫！…中略… 一晩中眠りを妨げるカワイイ生き物。多分最後まで飼うことになるでしょう。私たちにはデリスパウダー¹⁰¹、あるいは灯油がありません。シーツには全面しみがついています…そして朝早く蚊帳の隙間にいる南京虫を退治するのはとても興奮します。ヤン・オルファートはお椀に水を入れて待機しています、押しつぶすとひどい匂い、私たちは何ヶ月も石鹼をもらっていないのですから…。

12000 人がこの収容所にいます！縦横 3m x 4mの部屋半分の居場所が整い、また居心

¹⁰⁰ チタルム通りの一部はソネイによって突然明け渡さねばならなかった。この中にはヘンケス - ライスダイク夫人がちょうど 10 日前に入居した住居 (20 番地) にあつた。「日本人による抑留者の取り扱い」日記断片ヘンケス - ライスダイク 1945 年 5 月 8 日から 5 月 11 日を参照。

¹⁰¹ デリスパウダーはツル植物デリスの根を使用した殺虫剤。

地良くなります。いつまでここに住むことになるのでしょうか？ 前の部屋はちょうど 10 日間でした！

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月19日

昨晚遅く病人の移送グループが到着しました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月28日

現在、移送はすべて到着…もうこれ以上加えられないと思います。そしてこの満杯の収容所にはなにが起こるのでしょうか？

本日、また 35 人の看護婦とカイザー医師とクライトホフ医師が出発しました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月15日

明日、135 人の人々が出発しなければなりません。彼らは家族を求めたか、他の収容所からの人々に求められました。まだ赤痢病棟に臥しているリート・スナートをはじめ、ほとんど誰も行きませんがありません。全く助けは及びません、出発しなければなりません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月19日

昨日の午後、移送が中部ジャワの収容所へ出発しました。

ブールマ

1945年6月25日

7月1日に幾人かの看護婦がこの収容所を出てチキニ病院¹⁰²へ行く、そして7月7日には病人たちが続くことだろう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月29日

現在南京虫がいたるところにいます。本を開くと何十匹も飛び出します。私たちはゆっくりつぶして殺します！ 私たちは全力で闘いに挑んでいますが、全滅しません！収容所全体が汚染されています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月8日

本日午後、50人の患者が出発しました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月29日

この夜中、最初の雨が降りました。見たり歩いたりするところはぬかるみ、そして汚物溜めがあふれ始めています。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月30日

2人の子供たちが収容所から出る、母親が少し前に亡くなった。父親はNKPM（オランダ石油会社）で働いている。解放？きっとそのはず、少女と少年が出発、最初である。

¹⁰² チキニ「エマ女王」病院はバタビアのラーデン・サレー・ラーン40番地に所在した。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月18日

11時。チタルム通りの半分がまた加わると言う通知がちょうど入りました。私たちは20番地に戻ってもよい！そうするべきでしょうか？多くの人々は戻りません…。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月22日

私たちはチタルム通り20番地に引越しました。子供たちと一っしょに一日で全部運びました。リートは静寂とこの庭に生えている草を楽しんでいます！この部屋はとても日当たりがいいけれど、また私たちだけ、そして愛するリートがかなり回復しました。私は彼女が回復しないのではないかととても心配していたのです¹⁰³。…中略…

私たちは広い部屋を満喫しています。全部また引越し劇の前みたいに置きます！私の植物は「よみがえり」、三色昼顔の花が咲き続けます。毎朝いくつか赤い花が開きます。ああ、私たちはなんと恵まれていることでしょう！

¹⁰³ リート・デ・ヨング・ファン・ベーク・エン・ドンクは長期間病気で病棟に収容されていた。「健康状態と医療事情」日記断片ヘンケス - ライスダイク 1945年8月10日参照。

収容所組織—欧州人並びに日本人収容所幹部

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月10日

12月5日から10日まで灯火管制の訓練でした。私たちが上手くやらなかったらヤップが怒鳴ります。だからごく静かに私たちは電灯を消します。…中略… 私たちの聖ニコラス祭はたくさんびっくりすることがありとても楽しかった、1時間の灯火管制！…中略…

電話ではもうオランダ語を話してはいけません。懲罰として電話が2日間切断されました。なぜならもちろんオランダ語を話したからです。

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月31日

居住区から電話がすべてなくなりました。私たちをこの居住区に収容したヤップのナカマが去りました。後任者はどんな人でしょう？ミーブはクパラ [責任者] としての彼女の仕事をよくこなして、とても忙しい。私たちがこの家の中では出来る限り彼女の手助けをします。私は1週間に数回彼女のために赤十字社の事務所に行きます。でもそれ以外は出来るだけ家にいます。私は常に不意の出来事を心配していて、子供たちも出来るだけそばに置いておきます。

ヘンケス - ライスダイク

1943年1月10日

最近収容所内外で家宅捜査がかなりあります。

ヘンケス - ライスダイク

1943年3月14日

病棟ではまだ3人のバブ [使用人] を置いてもよい。これはミーブがかなり話し合った成果です。彼女はヤップたちに対して手際よく立ち回ることができます。彼女は怖がらないし、気軽に彼らをからかっています。

ヘンケス - ライスダイク

1943年5月1日

リリー・クラウスがここで今週2度目の演奏会をしました。…中略… 所長のコンドーが聴きに来ました。この人は実に好ましい。ことに音楽に関しては、彼がとても愛好しているのでミーブはかなりのことが許されています。

ベルフ

1943年7月25日

そのほか夜はこれから完全に灯火管制になる、というのはスラバヤが爆撃された⁵¹から。だからもうほとんど授業の機会⁵²がない。

ベルフ

1943年7月27日

灯火管制が突如中止された。昨日突然電灯をつけてもまたよくなった。幸いだ、暗闇でじっとしているなんて、ブルッ！

ヘンケス - ライスダイク

1943年8月7日

お菓子と喫煙は現在禁止。1軒の家に調理器具が1台だけ許されます。

⁵¹ 1943年7月19日と22日の間に実際連合軍のスラバヤ爆撃があった。(F.N.J. Van Dijk編「Noord Sumatra in oorlogstijd, oorspronkelijke dagboeken uit de interneringskampen chronologisch samengevoegd」(Makkum, 1997年) AP II : 1943-1945, p.457)

⁵² ここでは密かになされていた授業を意味する。「教育・娯楽・宗教関係」ベルフ日記断片 1942年12月25日及び脚注130参照。

ベルフ

1943年8月13日

うわさによると食卓椅子のみ維持しておけるとのこと、すなわちミシン（足踏み用）や冷蔵庫、ピアノなどが取り去られると言い渡された。こんなふうだと人生を楽しむなんてことはとてもむずかしい。

ベルフ

1943年9月5日

各家ごとにも皆が服従しなければならないクパラ（責任者）が必要である、つまりうちではお母さんである。それから居住区は班に分割され、各班ごとに班長、全班長のリーダーとしてウィリンヘさんとザイレマーカーさん。家のリーダー、班長、そして収容所リーダーに従う必要がある。これが出来なければ、ニッポンが介入すると通告された。

ベルフ

1943年9月10日

明日からもうパサールのために原住民はやってこない。まず収容所全員のために克蘭ジャン [籠] が居住区に運び込まれ、ここのパサールで分配しようということが決められた。昨日それが始まったが、明日はものが高くつき過ぎるため中止されるとか。それでまた普通に露天パサールになり、オランダ女性が奉仕することになる。4種類の克蘭ジャン [籠、バスケット] がある。籠Ⅰは5人分の野菜と果物、籠Ⅱは同じく10人分、籠Ⅲは15人分、籠Ⅳは20人分である。リストには各コンビネーションごとにパサールでどれくらいの量とどの籠を取りに行けるのか決められていた。私たちには10人分の籠と20人分の籠1つが許された。すなわちちょうど人数分だけの籠が注文された。もちろん家ごとに、そのコンビネーションに合った籠の数をクパラに伝える必要があった。一昨日ヘネクイン先生は午後になってからリストを受け取り、そしてもう次の日には収容所が克蘭ジャンを取りに行く必要があった。だから私は数枚のリストを持って出発した。本当は居住区警備隊がこのような仕事をするのだが、ヘネクイン先生はそれを好まなかった。というのは現在、居住区警備隊は手に余るほど仕事があり、若者は今までよりずっと生意気だったから。

私は3時ごろ（昼寝時で）とんでもない時間に始めたが、ヘネクイン先生はさもないと終わらないわよと言ったのだ。私はラン・トリヴェリ全体とそのほかにカプアス通り、バタンハリ通りのたくさん家…目についたのはバタンハリ2番地のサヴォルニン・ローマン一家。

なんて幸運⁵³！その他は収容所内にある異なるたくさんの住所、概してすごい数だ。すでに私の気持ちはバタンハリ通りに飛んでいたが、義母になるかも知れない人を昼寝からやはり起こしたくなかったので、ラーン・トリヴェリから始めた！思ったほど早くは進まなかった！いたるところで全部の話しをしなければならなかった。クパラたちは何でも知りたがった。すなわち同居人の特別食、赤ん坊のティムス [非常に柔らかく炊いたご飯]、あるいは果物が入っているかどうか、価格、まだトマトが購入できるかどうかについて。まるで私が全部知っているかのように。私はただ彼女たちがどの籠を取りに行くことができるのかを話すだけなのに。でも私は人々を怒鳴りつけることは出来なかった。私はこんな仕事には向いていない。時間が早すぎるなどの言い訳をしていてねいすぎるのだ。そのコンビネーションに対してもらうものが多すぎたり、少なすぎたりする人々があった。その間また引越ししていたり、あるいは人が加わったり…際限なくブルカラ [出来事] があった。病棟は 15 人から 20 人の籠を取りに行かねばならなかった、でもすでにまた多くの患者が加わっているのだ。翌日パサルでまだ単品の野菜を買い足すことができるのは幸いだった。それに原住民もまだいた、さもなければ患者たちは全員「何ももらえなくなっていたはず」。

スホル夫人は昼寝から起こされたため文句を言った唯一の人だった。ヘルバンのところに着いた時、テロック・ベトン通りへの引越⁵⁴を手伝ってくれたベート・ファン・ラーウィックが表のベランダにいたのを見つけた。彼は収容所に着いたばかりのようで親切な少年だった。最初私は正式に必ずクパラをお願いし入浴中だったりしたらもう一度引き返した—でもラーン・トリヴェリの後にはもうそれを取りやめた。私のことを…「奥さん」と呼んだ夫人がいた！いやになる！5時にラーン・トリヴェリが終了したあと、私はまず着替えに家に戻った。というのは古い膝の上に醜い平らなひだのついたテニス用のドレスを着ていたし、バタンハリ 2 番地のためにはもうすこしましに見えるようにしたかったから。ヘネクイン先生が即座に苦情があったのかとたずねた。さて、苦情はたくさんあった。でも私は—女性実業家ではないので—苦情を提出出来るかどうか知らなかったので書き留めなかった。私はドレスを選ぶのに少し迷ったが薄い水色で、柔らかい、女らしい（白いエーデルワイスの刺繍があってレースと飾りバンドのある）洗濯するはずのドレスにした！私はカプアス通りから勇気を出して始めた、なぜならバタンハリは 5 時にはみんなが通りに出ているのでもう少し待った方がいいと考えたからだ。

私はクパラが病気だったり、気分がよくなかったりした家などいろいろな家を訪問した。私はもちろんリーダーをたずねたが、ほかの夫人がいて、私が特にリーダーだけを求めているかどうか知りたがった。「ええ、お願いします」と私は言った。彼女はかなり反抗的だったが、そのクパラを呼んだ。「見て、気分がよくないのよ」私は「まあ、それならかまいません、伝言を受け取って下さいますか」と私は言って、パサールの話しをした。それに対してその夫人は完全に軽蔑したように「まあ、それだけなの!？」と言った。そして意地悪だったのは私がこのよ

⁵³ ベルフはこの家の息子ウィテ・サヴォルニン・ローマンに好意を寄せていた。

⁵⁴ 1942 年 6 月 27 日ベルフ一家は翌日夜 6 時には彼女たちの家から出ていなければならないと聞かされた。彼女らはその時テロック・ブトン通り 19 番地に引越した。

うなたわいないような伝言をととても重大なことのように言い、病気の夫人に命令しようとしたからだ。それで私は恥じらった？「はい、もちろん」。内気だったら？あまりうるさく言わないで我慢した？いいえ！内気さを克服しているか、わずか一時的であろうとやはり業務連絡係としての資格に自信を持っているか、いずれにせよ私はこの夫人にクパラは責任者としてこのような問題があれば出てくるべきなのを理解させた。なぜならクパラ、すなわち全コンビネーションの責任者であるクパラに、このクンプレン（仲間グループ）はこの籠であり、他の籠を取りに行くことは許されないということをも十分伝えなければならなかったから。そうです！冗談ではなく、私はかなりこの仕事を熱心におこなった。自信に満ち、どもることなく、冗談をそここに交えながら、理解と丁寧さ、そして必要な素早さで。本当！私はコッホ先生から役目を果たすやり方をたくさん習ったのだから。

クプアス通りの半分まで来た時には、暗くなった。私は最初すぐにボタンハリ通りから始めるつもりだったが…もし終わらなければ、どうして私はカプアス通りを半分終わらせただけの説明ができよう？さあ！カプアスを終わらせねば…そして私は賢明に行なったことが分かった。というのはまず全員肉食主義者で、そのため彼女たちは克蘭ジャンをたくさん欲しがったボタンハリ通りの1番地から始めた、それから2番地、ローマン夫人がアラードとウイテといっしょに庭で食事をしていた。心臓がドキドキし、息づまりながら玄関の前に立って、しばらく中に入るのをためらっていた。でもその後「ローマン夫人はここにお住まいですか？」と（偽善的）口にした時には、緊張感がなくなり、再度連絡係になった（一時的なもの、でも事業家のように！）。…中略…

もちろんすぐに終わった。それから私が立ち去ろうとした時、一番若いローマン、とても若い赤毛の少女が家から出てきて私に親しく「こんにちは」と言った。ああ、ああ、なぜこのような開放的で心からの挨拶がまさに今、一番若いローマンの口から出たのだろうか？私も「こんにちは！」と言った、でも残念ながら（幼い妹は素晴らしい糸口になるのだけれど）業務連絡係としてはきっかけをつかむことが出来なかった。出発する直前に「それでは失礼します、ローマンさん、みなさん！」と言って私は収容所にどのくらいたくさんの人が長ネギを好んでいなかったかを話した！というのはまさに連絡係としての私の体験だったから。これで私の人生のこの重大な出来事もまた終わってしまった。体面上私はボタンハリ通りをもう少しやった、でももう十分だと思った。というのはもう食事をしなければならなかったしとうてい終わりそうにもなかったから。ローマン一家への遠征に関しては満足。私は愚かでも、鈍くも、不器用でも、恥ずかしがってもいなかったから。翌日ずっと私は機嫌がよかった。奇妙なこと、なぜならウイテは私を見ることさえしなかったのに。

帰宅すると片付けられたテーブルの上に私のためのお皿を見つけた。テーブルにはたくさんの少女居住区警備隊とヘネクイン先生がいて、リストについて忙しくしゃべっていた、というのはまだたくさんの家をまわる必要があり、居住区警備隊がやはりそれをする必要があったからだ。後から分ったのだが、フラン・ムロック・ハウエルやリネケ・フェルフォールト・ファン・リーサートなども私と同時に出発し、帰宅したばかりだったが、彼女たちはより多く済ま

せていた。居住区警備隊がリストを持って出発した時には、リネケだけが残って、苦情をヘネクイン先生に伝えていた。ようやくそれが終わった時、私も書き留めておいた苦情を押しつけて済ませた。ロップもこれをしたが、彼はとても早く終わらせた、なぜなら彼はいたるところで早く終わらせるように「いいえ、奥さん、この量はとても多いですよ！」と言ったから。私は克蘭ジャンを積んだグローバック [荷車] が乗り込んできたのをみて長ネギが含まれていたのを見つけた。さあ、長ネギは昨日がよかった。ただサウオ [果物の一種] だけが固くて小さかった。今日の献立はニンジン、バジェム [ホウレンソウ]、ラプー [カボチャ] と豆。4種類が混ざっている！明日はまた通常のパサールになるだろう、でもそれはオランダ人女性のだ。でも今やはりまた野菜の克蘭ジャンが今日入荷したと聞く！まあいい、どうなるか見てみよう。

ワイヘンケ

1943年9月27日

私は今、あなたの言葉で言えばクラマットとチデンの違いの定式を見つけたいと思います。クラマットは「収容所」でした。そこでは誰もが収容所にいると感じ、よき収容所精神のために働いていました—幹部も収容所のためを考えていました。ここチデンは、幹部は完全に「収容所外部」のためのものでした。すなわちニッポンとチキニ [ポビム⁵⁵の事務所] (私に言わせれば飾り物にすぎません) です。そしてここに住んでいる人々は「ここにいないならならぬのだから、できるかぎり自分のためにがんばる」という雰囲気です。私たちは十分困難なことを経験しました。なぜならリース・ザイレマーカー (クラマット収容所元リーダー) がここでは完全によそ者扱いされていたからです。実際みんなそうされたのです。ミープ・ウィリンへとティリー・ラメールが全部自分たちでウルセン [手配] します。ティリーは気丈です、これは疑いないことです。彼女はそうなのです、出来るのです、まるで男のように一人で働いたり、手はずを整えたり。でもリースも出来ます、リースのやり方で出来るのです、そして彼女はよそ者扱いに対処しなければならなかったのです。ミープは間に入ってどうしてよいのか分らず、まったく (ことにティリーのたわ言によって) 「私のお友達」と「あなたのお友達」というような女生徒の態度を心配しているように見えました。話し合いがもたれ、時が解決してくれることでしょう。でもやはりリーダーにこういう事態が起こっているのは忌まわしいことです。リースの間違いは彼女が十分に割り込まないということ、その上きつい冗談を言うことです。アドゥ [ああ]、時にはむずかしいことです。

現在、居住区は班長を責任者とする班に分割され、その中に私もいます！私は、神経の張り詰めた人々の中でおこる喧嘩にかなり失望しているにもかかわらず、まだたくさんのことが出来るので正直に言えば素晴らしい仕事だと思っています。病人や弱った人々を助ける少女た

⁵⁵ 脚注 24 参照。

ちのことも今私は手配する必要がありますーこれでかなり忙しいことになります。でも楽しく、静かに後方に立っていることが出来ないのが私の最大の欠点だとしてもちょっかいがだせることを気持ち良く思っているのです。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月5日

各家屋は一人のクパラ [リーダー] を選ばねばなりません。クパラは同居人がなす失敗の責任を負います。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月19日

3日間灯火管制の訓練がありました。でも灯火管制は一部そのまま継続されます。

ベルフ

1943年10月22日

また防空訓練がある。もちろんまた最初とは違ったもので、訓練ごとに合図や方法が異なるのだ。現在サイレンが廃止された。とても不便。もし空襲警報がでたら、門番が言ってまわる。愚かなことだ！そして積極的に行動していて眠り続けていないという証拠に、夜中に5才以上の子供は全員通りに出る必要がある！まったくくばかっている！今日この厄介事が始まった。夜中に何が起こるか興味がある。

ワイヘンケ

1943年10月26日

私たちの収容所では盗みがものすごい。ゲデック [竹で編んだ柵] の傍の家は反対側がカンボンになっているため安全とはいえません。ランパッセン [略奪] とかなり似ています。警官は怖がり、私たちの居住区警備隊 (ここの若者たち) に「君たちが捕まえろ、そうすれば我々がやってくる」と言います。

収容所に日本のお偉方の訪問がありました。お偉方たちはまあよいとみたようです、

そして唯一興味をもってたずねたのは、こんなに大勢の女性に生理帯が十分あるのかということでした！

シスター・ロザリンデ

1943年10月26日

また灯火管制があった。最初はこのまま続くようだったが、一日後、また電灯をともすことが許された。だからまだ即座の危険はないということ。

ベルフ

1943年10月29日

また防空訓練が終わった。私たちはベットから出なくてもよかった。予想外の訓練結果、私たちは灯火管制に一部なるはずだった。でもまた直ぐにこれもなくなり、お母さんはひどくがっかりしていた⁵⁶。ちょうど同じ事が最後の訓練の時にも起こった。きっとヤップは灯火管制がめんどろすぎると思っているのだ。

シスター・ロザリンデ

1943年11月17日

また灯火管制、そして本当。私たちはまだ明るすぎた。また息苦しいガレージの中にずっとたたずんでいる。

ワイヘンケ

1943年11月20日

オランダ女性はまるで未熟成チーズ（アルファールの言葉？）のようです。押しつぶせばまた全面に噴き出します。ヤップから庭とテラスに電灯をともすことを禁じられました、そこが夜くつろげる（家の中は実際全部が寝室です）唯一の静かな場所だったので残念でした、それでみんなは

⁵⁶ 灯火管制は、連合軍機の活動が激しくなれば日本軍にとって戦況が不利になることを意味するので、エルスの母親はおそらく失望したのであろう。

何かを考え出しました：クリイ [簾]、大きなパヨン [日傘]、ドアや窓に電灯などなど、そして 1 日従った後は、またみんな外に座っていました！それでヤップは怒りました。ここはカマー
ル・ボラ [娯楽室] ではないし「バー」でもない。今からブトゥール・ブトゥール [本当] に禁
止だ。…中略…

昨日私たちの班の監視が「ワイヘンケ先生、どこにあなたが眠ってらっしゃるかお教
え願いますか？」と言いました (!)。この奇抜な質問は警報が鳴った時のことと関連していま
す、というのは警報が鳴ると彼らは私を起こす必要があるからです。

ベルフ

1943年11月23日

少年たちは泥棒を警戒するため何度も夜中に出て行かなければならなかった、これは夜間監視と
呼ばれ、居住区警備隊の中に含まれる。なぜなら警官がこれをなそうとしないし、飢えた貧しい
原住民によってかなりの盗みがあるのだ。そのほか夜中の警防団があつて、これは 14 才以上の
少年たちも入らないといけない、これは空襲警報などがあるため。最後にサイレンが夜中にあ
つたのは 1943 年 11 月 17 日、18 日の夜で、4 ヶ所爆撃があつた。すなわちマディウン、ボジョ
ネグロ、チェプーとタンジュンペラック⁵⁷。危なっかしいでしょう？私たちは現在「限られた照
明」をしている。これは「灯火管制」よりもすこし明るい。「限られた照明」はいつもで、「灯火
管制」は警防団によって呼び出される。

シスター・ロザリンデ

1943年12月3日

現在 14 才と 15 才の少年たちは、徒歩あるいは自転車で居住区監視をしなければならない、家では眠らず、別の家が彼らのためにある。

ワイヘンケ

1943年12月25日

外部ではアルメニア人、ギリシャ人が連行されたい。居住区のなかではドイツ生まれの女性

⁵⁷ 1943 年 11 月 17 日水曜日と 18 日木曜日に連合軍が東部ジャワとバリ島を空襲。スラバヤ、スラバヤ港(タンジュン・ペラック)、チェプーとデンパサール(バリ島)が爆撃された。これは 3 番目の空襲で東部ジャワ最大のものであった。(A.G.Vromans 'Algemene Indische Chronologie 1936-1949' 1943 年 49 号 (NIOD))

と夫がニッポンのために働いた女性たちが呼び出されました。このことが何を意味するのかはまだ私たちには分かりません⁵⁸。

シスター・ロザリンデ

1943年12月28日

新しいプリンタ [規則]。1年間ニッポン軍のために働らいた女性は申し出ること。新たな興奮、彼女たちはどうなるのだろうか？他国籍の両親を持つ人全員も申し出ること。私たちのところのシスターにはいない、グロゴール収容所にいるシスター・カシルダがそうです。彼女が他のシスターたちといっしょにいられることを願うのみ。

シスター・ロザリンデ

1944年1月5日

新しいプリンタ [規則]。再度私たちはまだ所持しているものすべてを申し出なければならない。例えばバケツ、ガユン [手桶]、鍋、シーツ、マットレス、そしてベッド。鉄に関係しているとのこと。街の柵もすでに取りはずされたと聞いている。

ベルフ

1944年1月9日

あきれたことにトコ集配所を通して全ての食糧や果物、ミルク、その他のものがこの居住区に入荷し、パサールには行かない。ほとんどがトコあるいは代理店のための balan [商品] である。ミルクは直接トコで分配される。balan がとても多ければ、グロバック [荷車] が時々クーリーといっしょに居住区に入ってくる、でもパンや牛乳を運ぶ自転車、手押し車、荷物運搬用 3 輪車、さらに balan を積んだサド [二輪荷馬車] はトコ集配所の少年たちによってこの居住区に出入りしている。パサールには荷馬車のなかの屑を直接与えられることになり原住民がそばにいる、これは別のものである。

⁵⁸ 連合国の男子と結婚した中立国の女子、あるいはドイツ国籍の女子は直ぐにもその他の女子と共に抑留された。(Van Velden, p451)

シスター・ロザリンデ

1944年1月17日

新しい規則、この居住区にいるすべての犬を登録しなければならない。ここには何か起こった時や、それにここには泥棒がたくさん来るので身を守るために犬を飼っている人々がたくさんいる。ヤップは犬に食糧が多くかかり過ぎだとおもっている。

ワイヘンケ

1944年1月23日

昨日と一昨日、ニッポンによって登録された犬(だから一番素晴らしい犬)が連れ去られました。これは最も悲惨なものでした。びしょぬれの雨の中で、犬を伴れた飼い主たちが泣き、濡れ、惨めに立ち、そして犬は吠え、神経質に、震えていました。それからついに幾人かの男が卑屈な警官を伴って、手に入れたいものを選び出し、女性たちの悲しみを大声で笑いながらゆっくり歩いてきて、それから犬が飼い主から連れ去られるという惨状です。彼らは縄を強く引っ張り、警官たちは怖れ、ヤップは一女性たちが犬を檻にいれるのために自らやってくるのを意地悪そうに笑っているのです。フローリックおじいさんは飼い犬シラノが連れ去られた時、くずれおち、シラノは警察の持ち場の途中で立ち止まり、振り返って飼い主をじっと立って見詰めていました。これらの人々がどのようにわずかの米と肉を分け与えながら飼い犬を養ってきたのか、いかにこれらの犬が逃げたりさまよったりした惨めさを経験したのかを考えると、皆と一緒に激しく泣き、その合間にはこの容赦のない苛めに激しい怒りを感じるのです。

ヘンケス - ライスダイク

1944年1月26日

今週、ヤップは大型犬の多くを連れ去りました。スペックお母さんは「ねえ奥さん、彼らはまず私から夫を連れ去り、それから息子、そして今私の犬、もう私には何もない。でもまあ、彼らが私のところで十分満足してくれていたならば！」と言いました。収容所リーダーのミーブの側にたってほとんどの人の対応をしているファン・デル・ハム夫人は「高射砲」と呼ばれています。

シスター・ロザリンデ

1944年2月14日

収容所内で家宅捜査！警告があった。すなわち 200 名の警官とヤップが収容所に入って来た。本当に私たちはカナン・キリ [左右] から写真機や、電気製品、皮のバンドやカバン、そして緑色の軍用品などもたくさん引きずり出されているのが聞こえた。老人の一人は緑色の良質のズボンを 1 本持っていたが、彼らはそれも持ち去った。またエヴァレディーの懐中電灯も彼らのお気に入り。まだ多くのオランダ国旗、王室のポスターもみつまっている。警官の一団が私たちのテンパット [寝床] を通り過ぎた。一人がビリック [竹で編んだ柵] 越しに叫びます、「スタ？」[もう終わった？] 「はい」とシスターの一人が応える、でも終わってはいなかった。彼らは幸いなことに礼儀正しく通り過ぎた。

ワイヘンケ

1944年2月16日

14 日月曜日恐怖をかきたてるお決まりの家宅捜査。朝早く 300 名の警官が幾人かのヤップと到着。最初は驚き。何が起きるのだろうか？パサールは閉鎖、全員帰宅させられます。肉、牛乳、パンは正門に送り戻され、警官が通りの角に立っています。結局は、武器、写真機、ユニフォームなどの点検だと分りました。寸劇はそれ自体素晴らしいお芝居です。何が起こっているか分るや否や、皆はお金やカメラ、望遠鏡などの品物を隠し埋めるために走りました！午後彼らが立ち去った時、みんなは埋めたものを掘り起こしたり、戸棚の下を拭き取ったり、屋根裏から引っ張りだしたりするのにまた走りました。でもまたたくさん持ち去られました。でも態度は警官もニッポンも立派でした、唯一そばにいた現地の民間人が横柄、愚かで狭量でしたが。…中略… ヤップがファン・ダイク医師のところですべて点検を済ました後、立ち去る際、きれいなオランダ語で「がんばれよ！」と言ったのは事実です。

ヘンケス - ライスダイク

1944年2月19日

2 月 14 日、どなり声をあげ数珠つなぎでヤップと原住民警官が駆け足で収容所に入ってきました。全員が家の中に入らねばなりませんでした。パサールは閉鎖され、大規模な家宅捜査！…中略…

分配は拡声器で呼び出されます。「3 班（居住区は班に分割されている）牛乳を取りに来ること！」この日はほとんど一日中通りで順番を待つ列に立っていた。警防団は廃止。

ワイヘンケ

1944年3月5日

レコードプレーヤーとレコードを全部差し出し、チデンではじめはまだ感情的になっていた後、とにかくするうちクラマツトに移送された。ニッポン人数名と原住民たちが一番いいものを持ち出すために搜索し引っつかみ、それから残りを運び出している様子を見ているのは楽しいことではありませんでした。一番辛かったのはチデンの事務所（オランダ人収容所リーダーの）でみんな自ら進んで一番いいものがなにかと手助けすることを示したことです。リース・ザイレマーカーなら「ご勝手にどうぞ」と言って、その他は手伝わなかったでしょう。こんな卑屈な態度にはとても腹が立ちます。

ヘンケス - ライスダイク

1944年3月7日

5日間の灯火管制訓練。私たちは番号をつけられました。すなわち 78, 79, 80 が私たちの番号！

シスター・ロザリンデ

1944年3月8日

今、私たちは本当にニッポンの捕虜。番号をもらい、来る 3 月 12 日に 50 人ずつのグループで整列しなければならない。3 月 12 日は収容所委員会のため。3 月 14 日は日本人収容所長コンドーのため、3 月 20 日は今後私たちを支配する軍政部のために⁵⁹。

シスター・ロザリンデ

1944年3月12日

私たちははじめてグクンプルト [点呼のために整列した]。50 人の班に編成された。幸い早く終わった。名前が呼ばれたら「はい」と叫ぶ必要があり、まず各 50 人ごとの一番目の人は一歩前に出て、班として「オルマツト」[敬意]を表してお辞儀すること、すなわち**深くお辞儀**と言われた。

⁵⁹ 脚注 31 参照。

シスター・ロザリンデ

1944年3月20日

グクンプルト [点呼のために整列した]！なんて長時間かかったことだろう。日陰に立っていたのは幸運だった。私たちは長椅子を持っていくことが許された、ヤップがいないうちは座ってもよかった。すべてが規則的で、私たちは監視されていた。

ヘンケス - ライスダイク

1944年3月22日

コンドーが去ります…軍司令官がやって来ます。番号がつけられました、班ごとにヒツジのように数えられます。病棟にいる重病患者だけは必要ありません。私は40度2分の熱がある娘のアンネを腕に抱き…1時間余り立っていました！そのあと家の一つに入り椅子の上に彼女を横たえました。歯科医一人と3名の医師が去ります、どこへなのかは不明！ここには中央管理局がきます、200万の人々に一種のカードシステムが整備されます。

シスター・ロザリンデ

1944年3月25日

様々な噂が収容所の中を巡り、新しい占領下での新たなプリンタ [規約] が予想されている。ウィリンヘ夫人はいろいろな資料を入手するのにとても忙しい。医師と看護婦が新たに登録された。タンゲランとボイテンゾルグ収容所のためだとのこと。そこにはほとんど医療援助がないようだ。また私たちが別々にされなければよいが、なぜならシスター・マティルダとシスター・グラシアは目下働いておらず、彼女たちがまず連れ去られるだろうから。

シスター・ロザリンデ

1944年3月31日

新たな命令。明日は新しい所長のためのクンプラン [点呼]。私たちはもう明日から軍政下になる。「キオツケ」の号令がでると全員直立不動しなければならない。二番目の号令では日本のアダット [慣習] で深くお辞儀をする、だから聖なるお祈りで「とても深く身体を曲げる」こと。私たちは「主に栄光を」などと心の中に言い聞かせる。それからまた直立、脱帽し、サングラスも取り、まったく理解できない怒鳴り声を厳粛に聞く。誰もこれから逃れることができない、す

なわち私たちはまさに捕虜であり番号をつけられているのだ。

私たちはまた、時間遵守の必要のある日課をもらった。ヤップが自ずから管理する。家の中でちょっとコーヒーを飲んでいて女性が罰された。ヤップは「今は飲んだり食べたりする時間ではない」と言った。そして彼女は午後ずっと照りつける太陽の下、ババッテンしなければならなかった、つまり草を刈ること。もちろんこれは熱帯でオランダ女性ができる仕事ではない。

以下日本時間（私たちの時間より1時間半遅い）の日課

遅くとも8時までに　：起床、点呼
8時半　－　9時　　：部屋と敷地の清掃
9時　　－　10時　　：朝食と食器洗い
10時　－　12時　　：運動と庭作業
13時　－　14時　　：昼食と食器洗い
14時　－　16時　　：休憩
16時半－　17時半　：部屋と敷地の清掃
18時　－　19時　　：夕食
22時半　　　　　：消灯

私たちはすべての警官や日本人にオルマツト〔敬意〕を表さねばならない。毎夕9時半までに誰が病気かを届け出なければならぬ。私たちはもちろん朝は早めに起床。これは許されていて、小さい電灯をつけてもいい。昨日突然ヤップが中に入ってきた。これは現在いつでも起こりえる。私は目を扉（ゲデックのピリック扉）〔竹で編んだ扉〕に向けている、なぜなら素早くこの日記を隠さなければならぬから。どこにいてももう自由はない。

シスター・ロザリンデ

1944年4月1日

新しい義務的日課でなんて気が狂うような一日。多くが遅い朝食で頭痛。私たちはこれからどうしよう？と気をもんでいる。ニッポン時間もすでに私たちをまごつかせる。…中略…今日は御ミサも聖体拝領もない、明日もなにもないだろう。今日は異なるシュロの行事がある、すなわち「クンプレン」〔点呼のために整列する〕。最初は私たちが前にいた場所、100人の班で、それからみんな4分の1回転してチラマヤフィールドに列を組んで向かった。そこでは7000名の婦女子と高齢の男子が所長のために整列する必要があった。とても静かに進行した。収容所リーダーのウィリンへ夫人の号令とそのあと日本人を待つ。突然拍手が起った。何だったのだろうか？黄色いトサカのある美しい大きな白いカカトゥが私たちの上方を飛んでいた。まるで大きな白鳩のようだった。それは群衆の上空に舞い、鳴き続けて、素晴らしい風景だった。「平和の鳩」と皆は

言った、残念だったのは本物ではなかったこと。

数秒後に収容所長と通訳が到着した。日本語の演説、そのあとマレー語、そしてウイリンへ夫人がオランダ語に訳した。内容を聞き取るのは全く不可能だった。一度尋ねてみよう。

シスター・ロザリンデ

1944年4月3日

軍幹部のお偉方による大がかりな視察。今、私たちはすでに日本の兵隊みたいになっている。私たちはマザー・ジェラルディーネによってまず班長と練習した日本語で号令がかけられる。私たちはお偉方が到着するまで照りつける太陽の下で1時間半立っていなければならない。誰もニッポンの国旗を持ってなかったので、昨日配られた日章旗を収容所全家屋に掲げなければならなかった。

自動車が到着。キオツケ＝気を付け！ケーレー＝敬礼（敬意を表して深くお辞儀すること）ナオレ＝直れの姿勢。ヤスメ＝休め。上出来だった。お偉方たちは私たちの住居を検査し、幼稚園で少し立ち止まって話し、それからまた立ち去った！さて今？各コンビネーションは家と庭を徹底的に掃除しなければならなかった。なんと人々は暑い中で働ねばならなかったことだろう。敷地と通りを掃き、大掃除した。日本人の満足度にかかわっているということだ。私たち「捕虜」－今私はそう呼ぶことが出来る－はまた教会を置くことが許されることを願っている、少なくとも礼拝を続けることが許されることを。

私たちはすこし笑わずにはいられなかった。日本人が中に入り、私たちが厳粛にキオツケの姿勢をしていた時、日本人が子供たちの前に来た時、「こんにちは、おじいちゃん」ととてもかわいい声がしたのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年4月7日

現在、私たちは全員POW（戦争捕虜）番号があり、またそのように取り扱われていくでしょう。10才の少年たちには民間人としての義務があります。

シスター・ロザリンデ

1944年4月7日

最近ニッポンがクンプル [点呼] で行なった訓辞の写しを受け取った。これは以下のものだ。

抑留者への訓辞

ジャワ強制収容所は現在、配置替えされ、司令官である本官はここに当施設の統制を行なうこととする。皆を保護する意向のもと、またこれに対処する為にも、皆の行動の自由を制限せねばならない。それゆえ、皆が平和な時代と異なる日常生活を送るべきことは避けられない。このことは、戦時情勢と皆の祖国の現状を考慮するならば、容易に理解できよう。

本官は皆の習慣と慣習を考慮するであろう。本官の主張が過去の信条と異なるにせよ、皆に対しては細部にわたり公平な扱いをするよう最善の努力をするつもりである。本官は断固として、反乱を起こす者、違反する者、本官の権威に逆らう秘密計画を行なう者は容赦なく罰することとする。

皆は解放の用意をせず、不注意な行動を控え、現状を踏まえた上で、諸規定を厳守し、本官側の命令に従い、精神と身体を健康を図るべく日常の生活を心がけるべし。皆が幾分たりともなじんだ暁には、今後とも幸いなる日々を過ごせることと願う。

ジャワ強制収容所司令官

サイトー・マサトシ

なんと私たちは素晴らしい生活になろうことか?!?!「日本人コンドー」は去っていったというのに！

シスター・ロザリンデ

1944年4月10日

また素晴らしいこと！私たちは宣誓をする必要がある。私たちが日本軍の訓令すべてに従い、収容所から逃亡しようという試みをしないように全能の神にさえも(そして彼らは神を信じてはいないのです!!)。こんなことも彼らは心配するなんて。強制的な宣誓、ですから効力なし！彼らはきっと理解していないのだ！お辞儀を正確に習得するのは大変。足を揃え、両手は膝の上に揃え、深くお辞儀する、まさに日本的。

シスター・ロザリンデ

1944年4月13日

また新しいプリンタ [規則]、普通より大きいナイフ、なた、写真機、映写機のランプ、軍服、

ネガ、フィルム、レコード、王室勝利あるいはV型⁶⁰の留め針などなどは家の前にだしておかねばならず、回収される。地図帳や地図も。今私は映写機のランプも失ってしまう。残念、でも私たちは実際少しずつあらゆる物に別れをつけなければならない。私たちのお金はすでに差し出した、何か見つけられたら重い刑罰がある。今私たちはすでに日本軍政下にあることがよく分っている。

シスター・ロザリンデ

1944年4月14日

神経戦！朝早くから大掛かりな見世物がはじまる。御ミサの途中に私たちは班長がゲデック [竹で編んだ柵] の中で叫ぶのが聞こえた、「はやく修道院管区長を呼んで」「ああ、主よ、また何かあるのでしょうか？」と私たちは思った。急いであちこち移動して歩く、私たちは聖体拝領もしなければならなかった。ともかく落ち着いていること。御ミサの直後、マザー・ジェラルディーネが「シスターたち、みんな早く食事してチラマヤフィールドでクンプレン [点呼のため整列]。食べ物を持っていかねばなりません、なぜなら3時までかかるかもしれないのです」とおっしゃった。

なんとという驚き。野外、太陽の照りつける中で6千から7千人だ。でも一番ひどいことはその間の家宅捜査だ。でもまず、すぐにはしごや踏み台は全部引き渡すこと。だからこれは屋根や屋根とビリック [竹で編んだ柵] の間に何か隠すことを防ぐため。まったく大騒ぎだ、何を持っていったらいいですか？私たちは米とトウモロコシのクッキーとトウモロコシの粥しか与えられていない。どうする、何かあった？はい夕食用のトウモロコシのライ麦パンがちょうど出来上がったところ。だからこれとすこしブラックコーヒーを持っていこう。そして隊商は出発した。

修道院管区長とマザー・ジェラルディーネ、マザー・テレスフォーラと私はまだ幾人かいる病気のシスターたちといっしょに残った。間もなく収容所は物音一つなくなった。遠くに日本人の号令が聞こえた。そして間もなく1人私たちの敷地にやってきた。彼は何も言わなかったが、先端の鋭った鉄棒で地面をそこら中探った。私たちが何も地面に隠さなかったのは幸いだった。不幸は予測できないものだ。私たちはそうしようと一度考えていたのだから、その場所が今まさに探られたところだった。主は私たちに味方してくださった。

それから家宅捜査する人々がやってきた。ヤップ及びトランクをベッドの下から引きずり出すのを手伝うオランダ人少年たちの集団だ。少年の一人は「シスター、僕たちはやらなければならない、さもなければ強打されるから！」と私に言った。トランクが全部ベッドから引きずり出され、ひっくり返され、戸棚や小さな戸棚が開けられた。しばらくしてまた彼らは去って

⁶⁰ 「勝利」という文字から連想するため禁止された。

いった。幸いまた終わった！2時にシスターたちが戻り、3時に食事をした。何が続くことだろうか???

ヘンケス - ライスダイク

1944年4月22日

家宅捜査のためチラマヤフィールドで一度クンプルン [点呼のための整列] しなければなりません、また何時間も。私たちは自転車に乗るのは許されない、だが置いておくのは許されます。双眼鏡、写真機やその他の電気器具は差し出す必要があります！4月20日に突然ミーブがタンゲランへ…新しい所長ソネイが一扫。なんと勇敢なこと！何がまた起こるのでしょうか？ミーブは誰も怖れなかったし、この収容所のために非常に多くのことを達成しました。

シスター・ロザリンデ

1944年4月25日

「自転車を取りに来ること！」とのアナウンス。だから自転車が戻ってくる、でも乗ってはいけない、また愉快的こと。カメラ、映写機、写真機など選び取ることが出来る。私は映写機のランプが戻るかと願っていたが、それはなかった。

シスター・ロザリンデ

1944年4月26日

新しく番号がつけられた！現在私の番号は272番のかわりにI-3.312である。一番ばかばかしいのはいつも持ち歩かねばならないこと。みんな番号をつけて歩いている、まるで牛のよう！

シスター・ロザリンデ

1944年5月8日

毎日のように私たちは名簿を提出せねばならない。活字体で、一部オランダ語、一部英語で。何千回提出しても彼らはまだ理解していないのだと思う。1語間違っただけで提出するのは、1000枚の新しいカード（票）を意味する。本当に紙の無駄。最初の名簿は本名、洗礼名、修道院名、生年月日、特技、卒業証明書、住所、捕虜番号。それからまた新たに母親の名前と家族の住所を加えた

もの。それからまた新規に父親の職業と生存しているかどうかを加えた名簿。気が狂っているのかしら？

記入しておいた名簿を提出してはいけない、自らおもむき記入する必要がある。活字体を素早く書けないシスター・イグナティアは震えおののき、彼女の後ろに立った所長のソネイは、彼女に「g」を正確に書かねばならないと言った。まさしく彼女にだ、だから彼女はさら震えあがってしまった。すべてに関する新しい報告書を得るために彼らが何を考慮するのか分らない。この紙全部日本に行くのかしら？

ランジング - フォッカー

1944年5月15日

5月1日ここに軍の幹部が来てから50の新しい規律が与えられた。そのうちいくらかは実践可能。それには日記をつけることなどは禁じられており、共通語としてマレー語を話すべしなどが記載されている。

シスター・ロザリンデ

1944年5月29日

コード、ソケット、電球、コンセント、卓上スタンドなど電気に関連するものはすべて提出しなければならない。シワ伸ばし機やミシンなどのあらゆる発動機も提出。だからトランク、ベッドが上にあってもこれらのものを探すためにひっくり返してみる。そうしている間に私たちはまったく何にも気にすることがなくなった、すべてが同様に持ち去られ、まったく無一文になる。ソネイがみずから点検に来るだろう。部屋には大小かかわらず電球が1個許されている。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月9日

兵補⁶¹が私たちを「警備」する！彼らは収容所の周囲にある二重のゲデック [竹で編んだ柵] の間を歩いています。10時半に消灯。重病患者で申し出がある場合のみ夜中に電灯をつけることが許されています。

⁶¹ 日本軍のインドネシア人補助兵。

シスター・ロザリンデ

1944年6月10日

また班長が呼ばれた。収容所の全員が毎日整列しなければならない。考えてみて、およそ 6000 名の人々だ。医師の診断書のある病人が免除される以外は誰も免除されない。だから小さな子供たち、赤ん坊でさえも。

シスター・ロザリンデ

1944年6月11日

興味ある騒々しさだった。正門からパサールまでラン・トリヴェリ全部が 10 人から 12 人の列になって立たされた。それから収容所中に聞こえる門鐘が鳴る。列ではつぶやきが起こる。私たちは 500 名の班になって立っている。ニッポンの司令官が収容所リーダーを伴ないやって来ると、班ごとに「キオツケ」の号令で私たちは直立不動、でもオランダ人が慣れ親しんだものではない。頭を持ち上げ、でもすこし曲げる。ヤップが私たちの前に立っていて、「ケーレー」の号令をかけると、全班は両手を膝につけて深くお辞儀する。ヤップも「敬礼」する。だから挨拶、それから次に「ナオレ」の号令が続き、私たちはまた直立不動する。

班長はこの班には何人の病人がいて点呼に来ていないか、何人ここに出席しているのかを読み上げる。所長の紙と一致すれば、彼は次の班へと進む。最後の班はだから最初に帰宅出来る。そして残りは静かに彼が通り過ぎるまで待っている。これが一日 2 度ある。これは聖名祝日に壮厳ミサが行われることとはまた違うものだが、私たちは点呼の後、御ミサができ聖体拝領に行くことが出来るのを神に深く感謝している。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月16日

6 月 9 日から 1 日 2 度の点呼、クンプランと私たちは呼んでいます。とてもうんざりさせられるものです。電灯は朝 7 時と 7 時半の間だけ点けてもよい。もちろん私はおちついてごまかします。さもないと何もできません。

シスター・ロザリンデ

1944年6月20日

マザー・グレゴリア（ウルスラ会）は収容所幹部で、昨日彼女は視察に来たヤップと共に歩かねばならなかった。彼女はほとんど追いつくことができず、それはすごい悪漢だった。そして自分に向けられた 6000 名の視界の中で。病棟の看護婦たちが「ああ、マザー、まるで悪魔と天使のようですね」と言った。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月25日

最初は 10 班に分けられた収容所は、現在 4 班になっています。

シスター・ロザリンデ

1944年8月3日

10 時半収容所リーダー全員が呼び出された。彼女たちは 30 人のヤップが立っている正門の外に集らねばならなかった。電灯がきちんと遮光されていないと（私たちは何かを作るためのボール紙の欠片さえ持っていません）うなり声、怒鳴り声で説明があった。すぐに収容所リーダーたちは電灯すべてをしっかりと覆うよう皆に伝える必要があった。彼女たちは明日でもよいかと聞いたのだが「半時間以内だ」ということだった。だからちょうど 12 時には電灯すべてを遮光しておかなければならなかった。ニッポン視察の半時間以内だ。

ああ、眠りはじめた真夜中、そして疲れ果てたマザーたちなのになぜ？そう。もうヤップがやって来た。電灯の一つは高いところにありすぎ、覆っていなかった。「ティダック・バグス」[よくない] そして彼は何かしゃべったが、もちろん私たちは理解できなかった。ともかく、しばらくして終わった。また半時間後、「電灯を全部つけてください、日本人が視察します！」もちろんそのまま座っている。しばらくして「電灯を消してよろしい」。これほど苦しめることで女性を疲れさせるものはないでしょう？朝早く 45 分間直立不動、そして誰もやって来ず、また送り戻された。私たちは今「牢」には入っていないが、捕虜生活を体験している。

シスター・ロザリンデ

1944年8月12日

昨日はマザー・フィロメーナ（よき牧者会）の聖名祭だったが、私たちは歌うことは出来なかった。夜遅くまでソネイが収容所において、電灯をつけすぎていなかったか、あるいは早めに完全な灯火管制かとすべてを見に行く。これはすでに刑罰として1時間早いものでニッポン時間9時半に（ジャワ時間で8時）に就寝しなければならない。ともかく真っ暗闇では何もできず、家の中では蚊に刺されてしまう。門鐘が9時半を鳴らしている。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月18日

2ヶ月前から私たちには番号がついています。1542、1543、1544が私たちの番号。この戦争捕虜番号は常に身につけていなければなりません！私たちはみんな戦争捕虜番号が入ったパパイヤの木片を付けていないといけません。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月20日

お辞儀の練習がありました、私たちにはまだ上手く出来ません。キオツケ＝気を付け、ケーレー＝敬礼、ナオレ＝直れ、ヤスメ＝休め。20回もケーレー、ナオレ、ケーレー、ナオレなどなど。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月22日

犬は全頭正門へ、そこで殴打され半殺しにされます。ひどいこと。私たちの飼い犬のブフィーが逃げました。

シスター・ロザリンデ

1944年8月22日

ソネイが新しい苛めを考え出した。収容所にいる全ての犬を正門に連れて行かねばならなかった。

最初に女性たちは「どんないじめもヤップは私たちに泣かしはしないけれど、今回は彼の意向がかなった」といった。いかにして、どんな方法で哀れな生き物を殺すことが出来るのだろう。少年たちは犬をしばりつけそれから棒で殴りつけねばならなかった。時にはうまく行かず、犬たちは暴れ出し少年たちはこれ以上するのを拒んだ。それでヤップが行なわねばならず、とても残虐に犬を殴るので、少年たちはまた引き受けた。でもその時ヤップは犬をトラックの中に入れるようにと言った。そして目隠しされて、それがなされたが、ある瞬間何匹かの犬が飛び降り、また捕まえなければならなかった。それから数枚の板を打ちつけ、犬たちを入れておく穴ができた。一匹が逃げたがった時、ヤップは頭を棒で四方から血が流れ出るほど殴りつけ、そして何度か飛び出したほかの犬の足を折り、穴に押し込んだ。ああ、なんという残虐な行為！

シスター・ロザリンデ

1944年8月23日

やはり何匹かの犬が戻ってきた。人々は実際あの残虐な行為についてはとても嘆き悲しみ、多くの女性たちは飼い犬に注射を打ってくれるよう頼んでいた。あのよう虐待されるよりは静かに死んでいくほうがまだましだから。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月23日

今朝一番に、肉屋（高齢男子の一人）といっしょにブフィーを殺しました。これは記すにもおぞましいほどです、ましてヤップに見られたらという怖れ！ヤン・オルファートが勇敢にも前もってお墓を掘りました。

シスター・ロザリンデ

1944年8月29日

私たちは居住区を歩く際、30回はお辞儀をしなければならない。現在それだけのヤップがこの収容所にいる。

シスター・ロザリンデ

1944年9月3日

私たちは点呼でまだお辞儀を習得する必要がある。とてももの分かりが悪いからだ。10回か15回してやっとできる。私たちはまったくヤッペンではないのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年9月6日

今日はまたヤップがたくさん居住区にいてうんざり。私は念のため衣類全部を整理しています。手揚げカバンには荷物がまとめてあります。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月4日

現在各班には担当医がいます。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月7日

昨日またヤップのお偉方の群れが居住区を歩いていました。彼らは勝手にどこにでも入って行きます。彼らは少しずつこの満杯さと不潔さに満足するべきです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月9日

「非常に重要」（と黒板に書かれています）。「1枚でも洗濯物を夜、外に干したままにしておくのは厳禁する！今晚ソネイ所長が自ら視察をするであろう…。見つけたなら、彼の命令が厳重に守られていないということで、家の内外の荷物は兵補たちによって押収するという命令がだされるだろう。それで人々が衣類を所持することにあまり執着せず、それが無くなっても気にしないということが明確になるであろう！署名 収容所所長 ソネイ」だから濡れた洗濯物はすべて家の中で乾かすということ！ベッドの上で、なぜなら場所がないのですから！

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月23日

回覧、雨が降っても降ってなくとも中央調理場は操業する必要がある（そこはもう水に浸かっています！）。私たちはもっと野菜を植える必要があります！夜中に居住区を歩く人々がいると、居住区全員が懲罰を受けます。隠してあるお金は提出しなくてはなりません！提出した人は従順です、そうでない人々はニッポンの意向にそいません。よって追放されます！ハハ、私はいくらか罪を感じます！拡声器：4 時にトコあるいは重作業班においてニッポンのために働いている人々への支払があります。

ブルーマ

1945年1月29日

ここではまだクンプレン [点呼のために整列]。毎朝 8 時と夜 7 時半に、家の中で病気で寝ている人、クンプル免除の手紙を持っている人、病棟にいる人以外はラーン・トリヴェリへ。それから号令がかかる、「キオツケ、ケーレー、ナオレ！」そして「ヤスメ」その後ヤップが前にはやってきてリストを点検し、それで終了。今はわたしたちだけでしばらく立ってそれからまた戻る。幸運。なぜってとても辛いことだから。雨が降ったら、とてもうれしい、なぜなら点呼の必要がないから。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月1日

ここでの日課はすなわちカレーズでは「点呼」と呼ばれたクンプランス [点呼] によって定められかなりの影響を受ける。この収容所では総てが軍体制でまったくヤミ取引ができない。とても厳しい、病人は班担当医から欠席許可書を得るにはかなりひどい病状でなければならない。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月10日

クンプラン [点呼] ほどばかげたことはない。私たちは本当に時にはおよそ 1 時間立ってクンプランはないと言うことを聞かされるのだ。一般的に人々は現在すこしずつゲデッキ [竹で編んだ柵] の外部で重要なことが起こっていると推し量っている。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月21日

年齢リストで間違いがみつかりました（ごまかしたのかしら？）、現在居住区全員を新たに登録しなければなりません。病人も。これはまた何時間も列に並ぶことを意味します。居住区全体に騒然と拡声器の音が叫び続きます。

「Ⅲ班はチラマヤ給食所まで米を取りに来ることムシ通りは直ぐにボタンハリ調理場で特別食と証明書を取りに来ること！—戦争捕虜番号 1100 番から 3999 番はラーン・トリヴェリ 95 番地に登録に来るべし」などなど。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月24日

また一度警報！素晴らしいこと…12 時半、だから今「何かを取り入れる」必要がなくパンを食べることができる！一人の威張った兵補が待ち伏せて、私たちが素直に洗濯物を全部中に取り込んでいるか、外を歩いていないかどうか見えています。彼はヘルメットをかぶり本物の銃を持っています。彼はひどくおびえたように見えます。銃は一度発射するのです！とてもすてきな緑色の網は覆いのようにヘルメットの上にかかっているし、木の枝で彼はまったく目につかないようにしています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月1日

本日夜中 4 時にリートが夜警番のために起こされました。澄みきった月夜で心地よい静けさ。私たちはいっしょに私たちの小壺から（子供たちにもそれぞれの壺がある）挽いたクデレ [大豆] をいくらか匙ですくって食べ、リートが出発した後も、私はもうすこし一周圍に子供たちの規則正しい呼吸を聞きながら—この静けさをしばらく楽しみました。ネズミが部屋を宙返りし、クランプ [蚊帳] にそって上に登っていく…私の足の上です。後になれば淋しい思いをするでしょう。田園風景さえ私を楽しませてくれません。最初は遠くに、その後直ぐ近くに怒鳴り声！「クンプル [点呼] …ルカス・クンプル [急いで点呼] …クンプル!!」装備した兵補が通りを走ります。収容所リーダーの声：「みなさん、ただちにクンプレンです。子供たちは家にいてもよろしい。…みなさん、急いで下さい。電灯は少しの間点けてもいいですが、自分のクンプル場所に急いで行ってください」

不安、騒音、泣いている子供たち。「ルカス・クルアール [急いで外へ]、「ルカス・ク

ンプル」ほとんど黙ったまま私たちは衣類を身につけました。リートが暗い道を走って夜警番から戻ってきて…急いで私たちの場所へ行きます。子供たちはある程度落ち着きをもどし、その間また暗くした部屋に残ります。不安にもかかわらず、黙ったまま…緊張と不確かさによる沈黙。私たちはやはり連れて行くことに決めました。彼らは4人ともとても大きく賢明です。一言も我慢できないとは言わず、お腹が空いていると愚痴も言いません。静かにこの長く、寒い、お腹を空かせながらの時間ずっと私たちの横に立っていました。ようやく8時半に大規模な家宅捜査をするため点呼があると聞かされました。すべてが準備されていなければなりません。トランクは開いておくことなどなど。禁制品を通りに出しておく機会がまだあります！（ソネイはお金が入ると入っているのでしょうか？）

私たちはすぐに粥を炊いて、2時間後出ていった。リートとあと2人が家に残りました。各家で私たちの持ち物を点検するのを手伝うために3人残らねばならなかったのです。私たちはみんなで正門のところから追い出され、目で追われながら新しく区割りされた部分にまた送られました。かなり遠くで私たちはまたはじめから検査されました。ともかく長時間座ったり、立ったり、休んだりした後、家に戻ることが許されました…もう3時でした。リートはすでに監視塔に立っていました。私たちの部屋からは何も持ち出されませんでした！ソネイ自らの訪問でした…私たちは疲れ果て倒れ込みました、そしてすぐに食事が来ました。子供たちは今眠っています…子供たち？彼らはとても気丈で賢明、こんな時には支えになります。また終わった。また終局に一歩近づいています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月21日

私の息子ヤン・ヘンドリックが赤痢に罹って病棟で臥せているので、その名前を名簿から取り消すために我が家の食券をもってリートが炊事場に行きました。このような変更は毎日のようにあります。だんだん病気になる人が増えています。

ボルハイス - スキルストラ

1945年4月8日

クンプル [点呼] は短時間でみせかけだけ（だと思う）。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月16日

カプアス通りに孤児のための孤児院が開かれました。すでに満杯! よいことです、なぜなら人々はもう他人の子供たちの面倒をみるほどの元気はないのだから。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月17日

医師たちが国際赤十字社からの救援を要請しました。彼らは状況に悲観的です。これはソネイにとって困難な問題で、彼の反応は非常に驚くべきものでした。拡声器、「明朝は点呼なし!」大喝采! …遅寝ができる!

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月1日

ヤン・ヘンドリックが「クンプル [点呼] の時間ですよ」と私たちの班で呼び出すことが許され、彼は真剣に確信をもってしています! 彼自身「素晴らしい」と感じています。彼は1分変わらずに出て行き、1時間も前から時計を見えています!

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月17日

2時。チュジョン通りの人々は「外で」クンプレン [点呼のために整列する]。家宅捜査です、でも彼女たちは6時にまた戻ってきました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月24日

クンプレン [点呼のために整列する] は苦行です。なおざれにされた子供たちを連れて、哀れな疲れ果てた女性の群れは際限なき列を作って道に沿って引きずりながら進み、疲れ果てて点呼を待っています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月29日

また説明不可能な緊張感におおわれています。今朝は点呼なし。重作業班は呼ばれませんでした。「お偉方の視察」があるのでしょうか？

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月12日

午後1時半。大ニュース…感情を表に出すことは許されません…彼は私たちがわっと泣き出すのを期待しているのでしょうか？ソネイが去る！新しい所長はもっと「マニス」[優しい]らしいとのことですが、この人でなしが来た時にもそういうふうに言われました。私たちは感情を出さない、絶対！私たちは落ち着いてこのヤップの支配者が何をするのか待っていきましょう。殴られるのが少なくなるだろうからうれしいですって？とんでもない！とにかくまずソネイが本当に立ち去るのを見てみましょう！

あたらしいヤップの最初の親切な仕事は、最後の家宅捜査の際に押収されたものを申し出ることが許可されたこと。彼らはこれが起こったのを公然と認めたのです。…中略…あたらしい所長が「優しさ」から私たちに食糧をより多く与えると言うのは親切なことのように思えます！収容所リーダーたちは喜び勇んでこんな起こり得ないことで人々に望みを持たせている、と私は心配しています！

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月14日

(副所長) オーハラが立派な軍服と素晴らしい軍刀を携えた新しいヤップを紹介しました。ファン・スタルケンボルフ夫人を訪問。また私たちの家も見ました、非常に興味があります!!哀れな人々はこれに好意を見ています…あとで打撃が来ることでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月15日

ソネイが2匹の豚を殺させました。お別れパーティーのため？収容所の女性たちで音楽を演奏する必要のあるらしい！

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月19日

今晚は新所長サカイのための「予行」クンプル [点呼]。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月20日

10 時。新所長のためのクンプル [点呼] !新しい怪物がどんな様相かという大なる期待で。その殿方の訓令???ソネイが前演説した後、その哀れな男がぶつぶつ話したのは、唯一「ボレ・プラン [家に帰ってよるしい]」でした (!)

重病患者の傍では夜中にまた小さな電灯をつけることが許されます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月24日

変化が到来しつつあることは決定的な事実だと私は思う。サカイはあらゆる事を許可するでしょう (まず見てみよう!)、でも反抗には非常に厳しく対処します。奇妙に聞こえるかもしれないけれど、これがこの1万1000人の飢えた婦女子を制圧する唯一の方法だと私には思えます。「噂」に伴うはなはだしい楽観と時間ごとに増すゲデッケン [闇取引] で、幾人かが数日後「外」へ逃亡することができました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月1日

新しい委員会が構成されました。ロールダ・ファン・アイシング夫人がクパラ [責任者] !優しく正直な人、でも少々押しが弱い!でも彼女がリーダーになって私たちはありがたく思っています。彼女は忍耐強く、熱心に働いています。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月7日

はじめて朝のクンプル [点呼] なし。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月11日

全員、**病人も**、今日はクンプレン [点呼のために整列する]。愉快的ことになるでしょう。その他、今晚9時半に7月12日が始まる！時計の時間は変えてはいけません。

多くの人々にとってこのクンプル [点呼] は悲劇でした。私は少女が危篤状態の母親を家に担いで入るのに震える膝で手伝いました。ヤップにとってこんなことは全部何でもないこと！クンプレンの際、時間変更が言い渡された時、列にいた女性が「長いこと立たせていると家につく前に12日になってしまう！」と言いました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月15日

まだクンプレン [点呼のために整列する] は1日1回あります。病人全員の参加も**必要です**！新しい飢餓の日々への怖れ⁶²でみんなは自らを、また他の人を引きずりながら参加しています。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月28日

7月7日から朝のクンプル [点呼] がなくなった。その代わり少なくとも38度5分の熱がない者は夕方のクンプルに出る義務がある。でも待っている間は腰掛けに座ることが再び許される。

⁶² 点呼の出席率が低いことを理由に、日本人が刑罰として食糧を制限することに対する不安を意味する。

日本人による被抑留者の扱い

ベルフ

1943年6月11日

トラブルが。きのうの夕方、まだいくらお金を持っているかを記入する紙切れをみんながもらった。きょうは最高にいやなことがあった。すべての赤・白・青・オレンジが突然禁止された。というのは、チデンクラブの幹部であるウイニー・ファス・ディアスのところで、赤・白そして青色をした幹部のバッジが見つかったためだ。今、幹部全員は多分「政治情報局」にいるはずだ。彼らはけさ連れ出された。元リーダーのファン・ミュールスも（ヘネクインとコッホは数日前から）。この幹部は男子3名とアート・フェルボームを含む女子3名から構成されている。私は彼女が帰宅したかどうかちょっと様子を見に彼女の家に行ってきた。というのは、私はあのバッジのことで幹部と正門でスサー [厄介事] があったと知らされていただけだったからだ。しかし、そこで聞いたことは、彼女はいなく、同行しなければならなかった時にはちょうどひどくおなかの痛くなり、「あれ」になってしまったとのことだ。水曜日、ちょうどフリーな日に私もデ・ヨングさんのところでおなかの痛くなってしまった。そんな訳で私は、コッホ先生がヘネクインと一緒に食事しに来ることを知っていたけれど家に帰った。だけど途中とても不快であった。⁶³ ちっとも楽しくない。ニップと野蛮な警官たちのところにいるかわいそうなアート。あちこちに引きずり回され、むかついてくるだけだ。彼女は生理用ナプキンを全然持っていない。私は彼女をととてもかわいそうに思う。プイ！こんな時はきまって気分がとても悪くなってしまう。そして、幹部の男の子たちのこともあるし。

きょうは（いくらお金を持っているか書いてある）あの紙を一組になったニップと警官たちが取りに来た。その際、ただちに家じゅうが捜査されてしまうのだ。彼らはここに来た。そして妹のマグダちゃんが5年もたっている少し赤と青が入った白いえりの付いた服を着ていた。ニップたちには強烈すぎた。彼は激怒した。彼女はすぐにもほかのワンピースに着替えなければならなかった。お母さんは、赤・白・青の部分を切り取ることをお願いしたが、彼はこれが気に入らなかつた。すべてのトランクを開けさせられた。（ほとんどたんすなんか無いし、彼らはこの前、たんすなど家具を持って行ってしまったのだ。そんな訳で、余計なものはすべてトランクの中にあるのだ）。それで、その時彼らは旗を見つけたのだ。でも、お母さんは、ドレーウェス夫人のですと言った。本当のことだ。そこでお母さんはその人の住所を知らせなければなら

⁶³ 水曜日と日曜日（キャンプデー）には、収容所の人々は友人や知人を訪ねに外へ出ることが許されていた。1943年9月初旬まで外で暮らしていたE.E.デ・ヨング-ケーシング夫人は、これに関して次のように記している。「私の常連のお客は以前の同居人、そしてイェット・ヘネクインとアンネ・コッホ、（遠慮して決して9人一緒に来たことはなかった）ベルフ一家、また、時々メーレンス一家であった。…中略…お昼は大抵授業を行った。私はエルスたちにガレージや娘アンのベッドの上で(無許可で)こっそり教え…中略…」(NIOD 蘭印日記コレクション、E.E. de Jong-Keesingの日記より)

なかった。つまり、ライデン市フレヒト 8 番地と。収容所はこれからきっと門が閉じられることになる。彼らは激怒しているし、クラブもきっと禁止される。幹部の者にとっては大変なことだ。コッホ先生のことを心配だ。何事もなければいいが。

ベルフ

1943年6月12日

彼らはまだ戻っていない。男子は憲兵隊(?)のところにいて、女子はパサール・バルーの警察署に。かわいそうなアート。

ベルフ

1943年6月14日

アート・フェルボームはまだ帰宅していない。いやなことだ。ファン・ミュールスは政治的なことに関係して罪を負わされたことが今明らかに。

ベルフ

1943年10月12日

万歳！ アート・フェルボームの3人の仲間のひとり、ウイニー・ファス・ディアスがちょっと前に戻った。通りはひどく混雑。でも、私たちみんな、そこに到着したのが遅すぎた。彼女はもちろんとっくに帰宅していたのだ。ほかの3人の女子と男子4人は現われなかった。そこで、みんな目的を達成しないで家へ帰った。そのほかの詳しいことはまだ分かっていない。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月13日

少女2人と少年2人が政治情報局に4ヶ月監禁されていたあと戻りました。その再会は感動的でした。彼らは元気ない様子でした。

ベルフ

1943年10月14日

ウイニー・ファス・ディアスと同時に、リーク・ヤコーブスがグロゴールへ移され、次の日にエルンスト・ビールホーフとヘンク・フェルミューレンがここに到着した一方、アート・フェルボームはグロゴールへ。きょうはアネケ・サルク、ヤン・スミット、ドルフ・スパイヤーが戻るのを期待して1時頃通りがいっぱいになっていた。しかし、この最後の者たちは、政治情報局にいて、まだ現われないのだ。母親たちがかわいそう。少年たちは太っていて青白かった。私はウイニー・ファス・ディアスにまだ会っていない。

ワイヘンケ

1943年10月16日

4ヶ月前に連れ出されたチデンの子供たちのうち現在4人が戻りました。2人が依然、政治情報局にいます。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月19日

幸いにも、3人また戻りました。

ワイヘンケ

1943年10月21日

一昨日は、政治情報局に依然監禁されている若者たちが戻ってくるとの噂がのぼりました。30分以内に大勢が正門付近に集まりました。鉄製の手にまわりを閉ざされたように、抑制した緊張感を抱いて目をこらし、こらして待つ非常に濃厚で、沈黙した静かな群集に何か強烈に熱狂的なものが立ちこめていました。果たして、本当に戻ったのです。歓迎と群集の様子にまったく当惑しながら。

ベルフ

1943年10月22日

政治情報局にいた子たちが帰って来た時（幸い、ドルフ・スパイヤー、ヤン・スミット、アネケ・サルクもだ。彼らはパサール・バルーの他の者よりもっと悪い扱いを受けた）、通りは非常にあわただしかった。というのは、ニッポンが来ると電話してきたようだから。日が暮れ始めていた。フランと私は見物するために病院の仕事からしばらく離れることを許された。居住区警備隊によって道路は一掃され、（それは正門の近くだった。そしてヤッペンはずぐに怒るのだ）そして人々が押し進んだとき、フランが人々を制するためにがっちりと囲いを作り、私の手をつかみ命令した。「あなたがその男の子たちの手を取って順に伝えて」。変だけど、彼女にそう言われてもちっともいやでないのだ。

ワイヘンケ

1943年11月1日

グロットヨハンさんが住んでいる居住区の端っこの1箇所でお芝居が。そこにコンドーと警視ひとりのみが歩み寄り、グロットヨハンさんに来るようになじみの小さな手を振り回しました。彼女が彼らのために門を開け、出たあと閉めさせることだったようです。彼らはオランダ語で尋ね、それもととても丁寧だが、でも滑稽な状況であることは変わりません。バタビヤから来た高貴な女性の最近の任務。⁶⁴

ワイヘンケ

1943年11月29日

最近の興奮：ファン・ヘルウェルデン牧師が捕まり、⁶⁵ 三日たった今もまだ戻っていません。加えて他に女性ふたりが捕まりました。

⁶⁴ バタビヤの郵便貯金銀行頭取の妻M.P.グロットヨハン夫人とおもわれる。

⁶⁵ GESGの執行部にいたH.H.ファン・ヘルウェルデン牧師は、この援護団体を隠れみのに行った反日行動の罪で起訴された。

シスター・ロザリンデ

1943年12月3日

居住区にある我々の伝言板にヤップが彼らのレストラン向けに女性や少女を求めると書いた張り紙が一枚付いている。考えてもごらんなさい。オランダ女性がこんなことに借り出されるなんて。収容所中が憤慨している。ひと月 100 ギルダ―と住居が与えられるにしても、女性たちはみんな誰も申込まないことを望んでいる。彼女たちは明日誰が申し出るかを見るために正門へ行こうとするほど怒っている。収容所長ミープ・ウィリンヘー・スリハーがこの張り紙のことに對して異議を申し出たら、コンドーは言った。「今これは自由意志なのが分かるか。100 年前にいたとしたら、それこそお前たちは我々の奴隷なんだぞ」。何と言うことでしょうか。でもこんなことがなくて済みさえすればいいのだが。…中略…

この居住区に 2 人いる牧師のうちのひとりであるファン・ヘルウェルデン牧師は憲兵隊に呼び出され、下着だけの姿で残された。お気の毒に。これから彼の身に何が起こるのだろうか。知らないうちに何かに對して罪を負わされてしまうことがあり、誰ひとりとしてその身が安全でない。話すことによってすらだ。

ワイヘンケ

1944年1月2日

ゲデック[竹で編んだ柵]越しにお札を渡した女性たちがまた捕まってしまいました。そこで私たちが様々な処罰を少なからずもまた受けることになるのです。ばかばかしい。現在はもうチキニ病院を通してこの居住区からお金を出し入れできない。これまでずっと許されていたことであり、今では私たちにとって 1 ヶ月に数千ギルダ―差がつきます。さらに私たちは新たに登録されました。つまり、国籍と人種に従ってです。「何でまた？」とみんな思うのです。私たちはもうさほど良いことを期待してないし、またも居住区内はひどく緊張しています。

緊張を和らげるため、昨日はケーキを食べに来ないかとコンドーの招待がオランダ人収容所委員会へ届きました。彼は本当にたくさんもらったようです。リースも喜んで受け入れました。そこへ行くと、いつも決まって何となくぎこちない様子。コンドーは幾人かの仲間と一緒に雑誌をめくっていました。そして彼らは婦人たちをメガネの人⁶⁶ の前に座らせました。私たちはいつもどこに目を当てたら良いかわからないのです。でも、ケーキはおいしかったし、各自 1 個ずつ持ち帰えらせたのでした。

⁶⁶ 日本の裕仁天皇の肖像写真とおもわれる。

シスター・ロザリンデ

1944年4月1日

何かを隠すことはできない。日本人はからくりのすべてを知っているし、何か所持してはいけない物を見つけたら、めちやくちやに殴り、監禁するのである。ああ、神よ、我らが身にふりかけたまえ。神にある者、神を信じよ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年4月7日

少年棟は処罰小屋となりました。または刑務所か。すでにあるひとりの母親が彼女の子供4人とともに蚊帳やマットレスもなしに罰として閉じ込められました。

シスター・ロザリンデ

1944年4月12日

今日の午後、よくある大騒ぎ。収容所からの呼び出しがあった。「全員、30分以内にクンプレン[点呼のため整列]を」。いたるところに驚きの顔が。何のために？何か起こったのか？「急いで着替え、点呼に」などなど。30分以内に6、7千人がラーン・トリヴェリの両側でものすごく腹を立てたニッポン所長の到来を待った。要するに、これは点呼刑であった。30分も焼けつく日の下に立ち、小声で色々なことを話しながら気を付けをしていた。なぜならば、ニップがひとりでも到着すれば、私たちはホルマット[敬意]を表し、お辞儀しなければならないのである。どの原住民の警官にも同じ様に。正門が開くと、ニップが私たちの列の中を自転車で走る。そうすると、頭が深く下がっていく。彼が通り過ぎると、気を付けしてまばたきしながら笑うのである。またひとりのニップを前にして全員の頭が深く下がるのだ。その間、「悪者」と言ったりする。でも、私たちは違う。時には「グロリア・パトリ」などと口ずさむ。

再び、待たされる。長い間。そうしてまた、正門が開く。所長と彼の従者がゆっくり入場する。大いに見る価値あり。何せ彼は怒り狂っているのだから。彼は演壇の上に立ち、彼のまわり来るよう人々に合図するのである。また始まるのだ。私たちは何にも分からないけど、一応、耳を傾けるのだ。彼は激怒しており、節度なくわめき散らす。彼は言い尽くすと、ひとりの原住民警官が通訳する。要するに、私たちはニッポンをばかにすることは許されず、ニッポンが私たちに要求した（エッヘン！）ときは、「ブスーク」 - 腐ったものやがらくた - を渡してはならないのだ。そのようなことが再び起こった場合には、彼は私たちがこれにより負うべきことを示すことになるし、そのためまずは、ブスーク[悪質]な食糧をあてがうことにもなる。彼が敵で

あり、私たちが彼の敵であっても外に表してはならず、内にこめていなければならない。私たちは原住民より下等なのだ。原住民は少なからずや彼らの友人なのである。

その時、私たちはここにあるす・べ・ての自転車を30分以内に引渡さねばならなかった。何と言う誤解か。古い自転車を引き渡すようにとの連絡が口伝いされた。しかし、古いものの代わりに、ニッポン人は良好な自転車を期待していた。それも最高に古いものが出されたのだから理解できる。何と彼らは怒っていたことか。彼は私たちに禁固刑と引越で脅かした。今だからこそ彼らにはそれができるのだ。どうせ人々はみんなあれこれとあくせくさせられるのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年4月22日

一度、私たちは自転車のずさんな引渡しを行ったため、何時間も日差しの中で点呼刑に処されたのでした。

シスター・ロザリンデ

1944年4月26日

ウルスラ会のマザー・グレゴリアが娯楽・教育委員会会長に昇進した。彼女は今朝、即刻正門まで呼ばれたが、なぜか？収容所の気晴らし用に2匹のサルを受け取るため。これはソネイの親切心からと思わねばならない。なぜならば、収容所住民が罰せられた時、このサルが取り上げられたのだ。そこでマザー・グレゴリアはあとでソネイにお礼しなければならないとあるヤップが言った。今後、サルの手世をもしなければならないために彼女は腹を立てていた。私たちは彼女にサルの意味するところをひどく冷淡に問いただした。娯楽それとも教育？サルを運ばされた少年たちが大声で言った。「収容所の二新住人よ。君たちは番号札がいないの？」理解しがたいヤッペン。

シスター・ロザリンデ

1944年5月14日

日本人が危険をかぎつけた。昨夜、私たちの敷地内にふたりの女性スパイがいた。彼女たちは(原住民の) 警官の闇取引を調べなければならなかった。

ある班で家宅捜査が。カワット作業班の少年たちも密かに取引をしているようだ。彼らは時折いろいろな婦人に冷淡に尋ねる。「密輸業者をお探しですか？ぼ・く・た・ちは、子猫

を探している。プッシー、プッシー、プッシー」。

どんなことになるやら分からない。言われていることは、見張りの警官が去り、その代わりにヤップが200人来るといふことと、収容所の外にいる人々は3日間自宅に閉じ込められ、家の中に留まっていなければならないことだ。成り行きを見守ろう。

シスター・ロザリンデ

1944年5月15日

大騒動。昨夜、密輸業者が捕まった。少年全員がニッポンのところへ行かされた。ソネイが闇取引を行った者は手をあげるよう要求した。どういうことになるか知っていたのに、31名の少年がそうした。これはソネイも予想していなかったようだ。彼は少年たちに向かってスピーチをして、盗みや闇取引することは卑しいことであり、彼らがブアジャ[扇動者]として育てられたことを残念に思うこと、そして改心するよう努めるべきと言った。お腹が空いていたのなら、彼らはまず彼にそれを告げるべきだったと。タバコを一本もらい、彼らは帰された。理解できない。そのあと何の処罰もなかった。このことを彼も告げたが、今後、夜警番をすることは禁じた。これは女性たちに対し市民として行う義務となる。

シスター・ロザリンデ

1944年5月17日

昨日、それらの少年たちは、闇取引を手伝った原住民警官を指し示さなければならなかった。少年たちがいるところで、この者は蹴られては殴られたので、少年たちは気分が悪くなり、深い印象を受けて戻って来た。またもや白人と有色人との間の憎しみのタネがまかれたのである。

ニッポンは私たちをまさになだめようとしている。昨夜はゲデック[竹で編んだ柵]の陰で、「ノンナ、ノンナ」[お嬢さん、お嬢さん]と何回も、何回も大きな声がしていたが、誰もこれに応じなかった。数人の婦人は、収容所側からひとりのヤップが甲高い声で「バブ」と呼んでいるのを聞き、原住民女性が近づいてくるかをうかがっていたのを目撃させたのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年6月8日

班長のところで今日、私たちの班のクパラ[責任者]全員が集まった。ソネイは怒っていた。なぜならば、私たちがヤップに対し、また木製の銃を肩にして収容所中を歩いているインドネシア人

に対しても十分深いお辞儀をしないからだ。きまりに従って行動しない場合、私たちは罰せられるのだ。ある者はベストを尽くしているのに、しなかったり上手にできない者もいるので厄介だ。

シスター・ロザリンデ

1944年6月13日

ソネイはご老人たちに腹を立てている。彼らはほとんど何もしない、上手にお辞儀しない、もっと働かなければならないなど。かわいそうな人たちで、朝一番の点呼の時に3人が気絶してしまった。挨拶をしなかったために、3人のご老人が捕らえられ、少年棟へ入れられた。ひとりの年寄りはどうすることもできなかったのだ。彼はほとんど目が見えない。だが理由とならない。命令は従わねばならないのだ。彼らは地面の上に寝かされ、枕やマットレスは許されていない等、とてもお気の毒だ。

シスター・ロザリンデ

1944年6月15日

どんな小さな違反でも厳しく罰せられる。ある婦人は仕事中に読書した。他の者は番号札を付けていなかった。そんな時は書きとめられ、状況が非常に悪いボイテンゾルグにある、彼らが「不満分子の収容所」と呼ぶ収容所へ移されてしまう。

シスター・ロザリンデ

1944年6月17日

また、少年9人が処罰された。なぜならば彼らは仕事を早く終えてしまったのだ。そのため閉じ込められ、相当殴られた。彼らは今度老人棟へ行かされ、監視のもとで暮らし、働かなければならない。マットレス等は持っていない。

シスター・ロザリンデ

1944年6月20日

点呼の際、彼らは粗野だ。彼らにとって私たちは「人間のくず」なのだ、と私は思っている。心の中が煮え繰り返ってくる。全ての権力が神からでないとしたら、私は裸足やスリッパ、きたな

い服装や片方だけのソックスでコドック[カエル]に対してお辞儀などしないと思う。そう、彼ら自身は神なる天皇に従順なのである。

シスター・ロザリンデ

1944年6月22日

昨日の点呼では大笑いとなって、私たちはいくらか味わったのであるが、厳罰を私たちにもたらずことにもなった。それも真夜中（1時半頃）ラーン・トリヴェリに集合。こういう具合であった。点呼の前に長く待たされることが時たまあるし、その場に静止しているのは非常に疲れる。たいていの女性は時々大変遅れたりして、自分の班の中に時間通りに急いで立たねばならない。

その晩は大勢が遅く来たので、彼女らが自分の場所につく前にニッポンはすでにいた。遅刻者がそれを見て、走り始めた。それはすさまじいレースだった。彼女たちは間に合うかどうかととても心配そうな目をして見ていた。最後の者はむしろ引き返したほうがいいのだ。というのは、ニッポンの手に落ちることは「体罰」と同じだからだ。遅刻者の中には、フェルハルト医師もいた。彼女も家へ戻ってしまった。このことはまさに映画のようであった。また、「殴り屋のヤン」—私たちはある小さいヤップをそう呼んでいる—が目前に立って「ケーレー」（深くお辞儀すること）と音を出した時には、私たちはまだ笑い出さなかった。私たちは非常に深く頭を下げたら、ヤンは通りすぎた。しかし、私たちは捕まってしまった。なぜならば、彼は最後の班のところで真剣に人々をか・ぞ・え始めたのだった。30名多すぎた。つまり、遅すぎて後になって入り込んだ者がそこに続いてしまったのである。さあ、大変。そして、私たちはそのまま待たなければならなかった。つぶやき—「何？どうしたの？」と全部の列に広まって行って、私たちは状況を理解した。ある母親は思いきって逃げ出し、班長の自転車を使って居残っている彼女のふたりの子供を取りに行こうとした。私たちは早速、フェルハルト医師にも注意するよう合図したが、誰一人としてあえて列から離れようとはしなかった。ニップに見つかり、殴られることをみんな知っているのだ。

しばらくして、その母親と子供たちが自転車で到着したが、いかに列につくか？彼女たちはヤップに気付かれるのを恐れて横切る勇気がなかった。おもしろかったが、やはりかわいそうだった。試しては戻り、低木の茂みに隠れたり、次は細い木の後ろへ。突然思いきってやるまでは。そして、...成功したのだ。内心「万歳」を。しかし、再び静まり、「のろま」が足をひきずりながら近づいた。⁶⁷ 彼は無関心に通り過ぎ合図した。「解散」そして全員叫びながら帰宅した。

だが、真夜中の1時半頃に、いわゆる「空襲警報」があった。私たちは何も気にせず、寝返った。しかし、20分後にはびっくりさせられた。「ラーン・トリヴェリに即刻集合」。心の

⁶⁷ 日本軍朝鮮人監視のあだ名。

中では激怒していた。真っ暗な中に集合、母親と幼い子供を眠りから追いやるなんて。しかし、どうしようもない。10分以内にみんな点呼場所へ押し寄せた。かわいそうに、幼児は泣きさげんだり、母親の手を取りパジャマ姿ではねていた。「マミー、足が痛いよう。布がまいてないよ」とひとりがわめくと、他方である子はさわやかな声でとぎれなく、「シスター、こんにちは」と言った。私たちの白衣はよく目立つ。結局、幸いにもあまり長い間立っている必要はなかった。これはまさによくあるひやかしだった。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月25日

数日前、私たちは夜中の2時に点呼のためにラーン・トリヴェリに集合しなければなりませんでしたが。あかりもついていないし、恐ろしい静けさで、泣く子もいなく、私たちは黙って暗い道をたどって足を引きずって歩きました。恐ろしく緊張してしばらく立たされていたあと、私たちは再び家へ帰されました。…中略…

ある婦人が「ゲデック」（原住民との取引）で捕まり、彼女は重い罰を受け、殴打を引き起こし、300人の引越が。この最後のことは幸いながら実施されませんでした。

シスター・ロザリンデ

1944年7月11日

私たちは点呼の際、再びこっけいなことが起こった。今朝ニッポナーが視察に来た時、私たちはすでにしばらくの間きちんと整列していた。ちょうどパン運搬車（見たところ、レンガを積んだ荷車みたいだ。パンが無造作に投げ込まれている）が近づいてきて、視察官がわきによって走るようにと手を振った。しかし、ここの人々は彼が「帰れ」と合図したものとばかり思い、大声で「万歳」と叫びみんな去って行った。少し離れて立っていた私たち（シスター）は帰って良いのだとしか思っていなかった。「戻れ、戻れ」といたるところで呼び求める声が出た時、私たちはすでに帰宅していた。そう、私たちはそれを信じなかった。何回もいたずら坊主が本当でないのに大声をあげているのだと。それも聖体拝礼が始まろうとしているのに。

「戻れ」が続いた。そこで、私たちは戻る。やっぱり。「急いで、シスター。ニッポンがもう来ている」と班長がすぐに合図した。しばらくして、他の班は帰ることが許されたが、私たちの班は罰として残された。いやだ。なぜならば、すでに相当暑くなったし、しごかれて1箇所に立っているのは非常に疲れる。およそ1時間たった時、私たちの列に沈黙が生じた。ニッポンが点検に来て、私たちは去ることを許された。病院には感謝の到りだ。小児病棟の看護婦はほとんど全員が私たちの班にいたので、もうこれ以上離れていられなかった。

そのあと、すでに私たちはすばやく立ち去れないことがわかりでしょう。ヤッピーが手足で合図している。班長が「進め」と合図しているのだけれど、班は少しも移動できない。何千という人々が毎日2回も整列しなければならないことは非常に大変なことだ。相変わらず、彼らの意にそって十分にうまくいかない。また、フェーンバース医師が、整列するのを1日1回にしたらどうかとニッポンに尋ねたら、彼らは、3回やらせるつもりだと言った。女性たちはぐったりするほどあくせく働いているのに、彼らから見ると依然怠けすぎなのである。

シスター・ロザリンデ

1944年7月24日

14歳から17歳までの少年全員が呼び出され、今後はニッポンの管理のもと暮らさねばならない。約200名おり、彼らは3軒の家にかけて収容される。警備を担当するヤップはとても厳しい。第一夜目にひとりの少年が12時半以後おしゃべりしていたら、即刻叩かれた。胃の前面と顔に何回か強打。二晩目にも他にふたりの少年が。ひとりには歯が抜け落ち顔に縫合する必要がある深い傷を負い、他はあごが粉々になった。つまりはこのようにニッポンは行うのである。それなら彼らは非常に静かにはなるだろう。少年たちの静かさに恐怖を抱いていることが分かる。

シスター・ロザリンデ

1944年8月4日

ソネイがまた私たちの様子を見に来た。ご親切さまに。彼が入って来て、誰もそれに気付かなかった。全員が縫い物や掃除をして働いていた。ひとりのシスターは山と積まれた靴を磨いていたし、洗濯場は大忙し。彼はマザー・ジェラルディーネと話そうとそばに立っていたのを私は目にした。「マザー、ソネイが」。そして、その場合の要領を心得ているマザーは、誰も起立していなかったため、即座に「キオツケ！」で全員一斉に気を付けの姿勢になった。「ケーレー！」全員が深くお辞儀する。彼はとても満足していたし、挨拶すらしたのである。その他は下品なふるまいだった。何も言わずにそこいら中を歩き回り、再び消え失せた。どこでも同じ行いをする。私たちのことをどう思っているのか決してわからない。いずれにしても、私たちは仕事をしていたので、異常なしだったのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年8月5日

イレーネ王女の誕生日を迎え、ひとりのヤップの勧めによって、礼拝を行うことが再び要望された。それは許可されなかった。ファン・アールンスベルヘン神父とカーター牧師は2度も帰された。点呼のあと、彼らはもう一度尋ねるはずであった。ソネイは原っぱで祈祷会を開くことを許した。合同で「父なる神」を祈ることになる。しばらくの沈黙、それから（残念ながら）カーター牧師は、我らの国歌の第六連「我が信ずる守護者」を要求した。これは許可されなかった。

夜 11 時に、彼（カーター牧師）は留置された。なぜならば、勝手に戻ってしまったし、そのことを要求したからである。同様に、彼は結局政治的な側面を持つ説教文を提出した。残念だ。再び全てが台無しになるのだ。彼自身はタイプ室のグダン[物置]に入れられた。オランダ人の少年たちがそこをしっかりとクギ付けにしなければならなかった。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月9日

また、頻繁に全ての物の「引渡し」を行わなければなりません。幼い男の子、フリッツシェ・コヒウスが路上で遊んでいました。そこにヤップが来ました。そして、フリッツシェはできるだけ深く頭を下げました。そのヤップは自転車から降りて、彼に握手をしました。びっくりした彼は母親のところへ走りました。「ママ、ニッポナーは何も取り上げなかったよ。ぼくに握手したんだ。そして、ぼくはクマさんを渡さなくてもよかったんだよ」。

シスター・ロザリンデ

1944年8月11日

昨日、またもや収容所中に「天罰」がなされた。ソネイは何と精を出していたことか。すでに早いうちから始まった。彼は上官とけんかしたらしい。ともかくも、すごいけんまくで彼は収容所に入って来た。タンゲランへの輸送の準備をしていた人々がいた。それと同時に、オランダ人の挨拶を受けなかった兵補たちが入って来た。ソネイは怒り狂ったが、そうしているうちに、その兵補たちが、乗り入れて来たお偉方にホルマツ[敬意]を表さなかったのである。ソネイはまたも怒り狂ったのだ。

ソネイが病院に来る。踏み台の上に片足をのせて立っていたファン・ハッセルト医師が、足を台から下ろさずにお辞儀した。彼はその医師に飛びかかり、床に打ちのめした。彼のメガネが粉々になった。医師が立ちあがると再度殴られた。それから、足を上に上げたまま日の当

たる正門横に立たされた。この処罰のあと再び殴打が続き、そして、少年棟へ監禁されてしまった。

ソネイはさらに進んだ。あるお年寄りがトコ付近に配給品を載せた荷車を携えてやって来た。彼はお辞儀が間に合わなかった。それで同じく、地面に打ちのめされ蹴られたのである。ある婦人（ラーツマ夫人）はこれを見て気絶してしまった。

この乱暴者がまた病院へ行った。何と狂ったことを。彼は、す・べ・ての病人をペンドポ[ベランダ]（旧教会）へ連れ出された。歩いて、また担架に乗せられ、全員を連れ出さねばならなかった。そして、全員がホルマット[敬意]を表さねばならなかった。まさに悲劇だ。何と言う男。彼つまりソネイが病気かどうかを告げたい。12人を彼は即刻、家へ戻した。幾人かは14日間、他には7日間または3日間を病気とし、それ以後は家へ帰される。実際に留まることができず、また許されない者は出て行かなければならなかった。そのあと、外科の患者全員を（何と骨折り作業か、二軒向こうである）、次にいわゆる保養所にいる回復期の患者を連れ出さなければならなかった。同じく、「小アデッキ」の病んだご老人たちも連れていかなければならなかった。あーあ、何とあのソネイは忌まわしいことか。まるで悪魔だ。

これが終了後、彼は疾患証明書をすべて無効にした。つまりくだものや野菜の特配がもうない。アフタ、⁶⁸ 胃腸障害、そして赤痢の患者においてはどうなるのだろうか。わ・れ・わ・れが食べるものは、その人たちには食べられないのだ。彼が約束を守った。何も入荷しないのである。私たちも処罰を受ける。なぜか？野菜、くだもの、テンペを積んだ車が正門で止められ、進入を許されなかった。

シスター・ロザリンデ

1944年8月12日

昨晚、ソネイはさらに、「カワット作業班」⁶⁹の年長の少年（16歳 - 17歳）が満足に仕事をしなかったと見た。このことは実際には、少年たちが懸命に働いたので帰した他のヤップにより生じた。目下、少年たちはカーター牧師のいる（3 X 4メートルの）部屋に閉じ込められた。15名の大きい少年がそこに寝かされるのだ。不可能だ。十分な寝場所がない。だから順番に。何とひどいことか。枕も蚊帳もなし。少年たちはまず激しく殴打された。ある少年は2発目ですでに意識不明になってしまった。さらにもうすごかったことは、それら少年たちの母親がその晩に正門まで点呼に出なければならず、9時半から11時半までそこに立たされ、そして、どなりつけられたことである。まったくここは正真正銘の刑務所だ。ソネイが収容所にいる時は、みんなお互いに「ソネイ、収容所に在り」と警告し合う。

⁶⁸ ビタミンB複合体の不足による欠乏性失患。(Coelho, 745)

⁶⁹ この班は、(鉄条網の) 囲いの修復作業を負わされた。

シスター・ロザリンデ

1944年8月16日

収容所内の騒ぎ。女性たちが畑で仕事中大声で歌った。彼らはこれに断然我慢できないのだ。私たちはその・下・にあるべきなのだ。ひとりの兵補が来て「ティダック・ボレ」[いけない]と言った。女性がお辞儀をしなかった。そしてめごとが続いた。「お辞儀しなければだめです」と兵補が言った。「工作中、我々はお辞儀する必要はないのだ」と女性たちのひとりが言った。「すべきです」と兵補は怒って言った。「すべきか、しないべきか。どちらであっても、我々はお辞儀はしません」と、工作中は必要なしとニッポンが告げたことを知っている彼女が言った。その兵補はニッポンの事務所へ。同じくその女性も正門へ行った。しかし、もちろん誤りを指摘された。権利と理由、あるいは上層部に抗議するなどもうここにはない。

シスター・ロザリンデ

1944年8月17日

点呼。ソネイ自ら出る予定である。彼はみんなに何か言うことがあるのだ。朝の点検のあと、私たちは彼のためにすでに準備されてあった演壇の周りに整列しなければならなかった。彼は日本語で私たちにあらゆることを非難し始め、まるで野獣のようだ。時々、全くかんかん怒るのだ。我らがボスの言い様は？彼、ソネイが私たちの健康を良く配慮していること、そして無事であることを喜ばねばならないこと。しかしながら、私たちが一番良好に収容されているはずであるこのチデン収容所は、所長の命令に最も従わないこと。ニッポナーにはお辞儀がよくされているが、兵補に対してはお粗末で、時には全く行われていない。兵補はニッポン軍に仕えており、収容所に対する命令は高みから出され、兵補は天皇に仕える。それゆえ、私たちは適切なお辞儀をしなければならないし、彼は私たちにお辞儀の仕方を教えるつもりである。ソネイに対してはお辞儀するが、ソネイが収容所を出てしまうと、私たちは命令を無視している。直ちに、かつ的確に従わない場合には、彼は何百人をひとつの家に入れるか、刑務キャンプやカンボンへ送る処罰を下す。しかしながら、私たちが改心したなら、またもっと食糧が収容所に入るであろう。現在、私たちは1日につき一人当たり（85グラムのはずだが）35グラムを超えることはなく、野菜やくだものは全然もらえないのだ。

処罰小屋にいた少年ふたりが病院に収容された。そのひとりには医師に感謝し、「あの穴からぼくを出してくださったご恩は一生忘れません」と言った。また、マザー・グラウデマンスも他の処罰小屋から戻った。彼女は尋問を受けなかったし、まったく潔白でもあった。彼女が納得いかないただひとつのことは、何の権利も存在しないことだ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月18日

兵補へ「お辞儀しない者」といいかげんな挨拶をする者に対してさらに厳しい処罰がなされるようです。ひとつの罰に対して、居住区全体が食糧減らしによる処罰を受けることとなります。すばらしい！我々は日本人の見たところでは、まだまだ良すぎるのです。まあ、来るべきことなら、来るがよい。もうどうでもいいのです。

シスター・ロザリンデ

1944年8月20日

私たちが苦しめられる様はひどいものだ。点呼の際、5回続けてお辞儀しなければならなかった。このばかげた行いに一まるで道化人形のようなだから一吹きださざるを得なかった若いふたりの女の子は、正門へ同行させられ、何時間にもわたり強烈な日差しを顔に受けながらお辞儀させられたのである。そばを通ったシスター・オディリアーご老人たちに包帯するため出向いた一は、本当はそのばかげた様子に笑いたいほどだった。しかし、まったくひどいことだ。

シスター・ロザリンデ

1944年8月23日

私たちは点呼の際のお辞儀を刑罰と思っている。というのは、今日の朝と夕方には10回続けてお辞儀しなければならなかったからだ。笑いをこらえるのに苦労したが、やはり内から怒りが込み上げてくる。

ヘンケス - ライスダイク

1944年9月2日

クンブレン[点呼のために整列]する際には毎度20回～30回お辞儀を。今日の夕方、居住区全体が1時間半「罰として立たされた」。

シスター・ロザリンデ

1944年9月2日

昨晚、私たちはニッポンの命令に笑わざるを得なかった。私たちの住家の前に座って少し話をしていた。気晴らしだった。中はわずかな明かりが、そして外は月光が。仕事をするために何も見えないことを非常に苦勞しているというのに、その時突然私たちのゲデック[竹で編んだ柵]のすぐ後ろでどなり声がした。「アパ・ディサナ、ティダック・ボレ・オモン！」[何事だ。話をしてはならぬ]マザー・ジェラルディーネが返答なさったが、私たちはびっくりした顔をして「何だろう」と思った。マザー・ジェラルディーネは、「アパ・トゥアン、ティダック・ボレ・ピチャラ」[何でしょうか。話をしてはならないのですか]と質問なさった。「ティダック・ボレ」[いけない]ものすごく静かにしているというのに、私たちは話をしてはならないのである。まったくナンセンス！私たちは今はもうほとんど何も許されない。それで各自が小声でロザリオの祈りを唱えたあと、中で夕べの祈りをして床に就いた。

ヘンケス - ライスダイク

1944年9月4日

カーター牧師の説教を聴いたり、それを読んだ人々を連行するためにソネイが手配した車が2台ありました。⁷⁰ 罪人が集合させられました。そして、何と3千人以上が現われたのです。30分以内にラーン・トリヴェリがいっぱいになりました。ソネイは逆上していました。しかしながら、いくらか無力感も。…中略…

今日の午後、我々は2時15分前から6時半まで日差しの中に立たされました。居住区全体がです。…中略…カーター牧師の夫人は子供たちとともに、一そのひとは病気であったが一少年棟へ監禁されました。

シスター・ロザリンデ

1944年9月5日

私たちはきっと近いうちに何かが起こるであろうと予期していた。しかし、今私たちの身に降りかかったことは夢にも思わなかった。今や私たちは、ソネイの見るところによれば罪人なのである。この一日に私たちは多くを経験し、学びそして理解した。朝、即ち9月4日の朝、私たちは

⁷⁰ 「序」7-8参照。

プロテスタントのシスター、つまり牧師の助力者たちが正門横へ出頭させられたことを聞いた。これは、彼らが牧師の説教をタイプし、配布したためであった。私たちはこれを聞いてびっくりしてしまった。なぜなら、ローマ・カトリックの私たちも神父のためにこれを行ったことがあるからだ。私たちはこのローマ・カトリックの分に関してヤップにまだ知られてないことは分かっていたが、密告されることもありえると思っていた。お昼には、新しいことは何も知らされなかった。

その翌朝。点呼の際、点検のあとで私たちは全員居残された。班長らは、カーター牧師の説教文の全部を引渡させるように言われた。午後1時、収容所からの呼び出し：「2時15分前にラーン・トリヴェリまで点呼に全員集合」。ほらごらん。刑罰：かんかん照りの一番暑い時間に回収作業。素早く食事、皿洗い、戸棚を閉じ、その間にありそうな家宅捜査のためにトランクも。日記帳を隠す（今回はエンドウ豆の袋の中に）、また、あらゆる文書も。それから私たちは出かけた。まったく我慢できないほど暑くて、私たちは両側の木々の下にある日陰を探したが、すぐにも号令が響きわたった。「整列、気を付け、静粛に」

これが礼拝問題となり、私たちの興味が増した。班長（ハンチョー）たちは再び正門へ行かなければならなかった。彼らが戻ると命令が出された。「カーター牧師の説教文を読んだ者は、プロテスタントでない者も、全員正門へ出向くこと」。群集に動きが。そして、長い、ものすごく長い列をなして進んだ。行ったり来たりして、結局は発った優柔不断な人々を目にした。それなりの勇気が必要だ。というのは、私たちは、ニッポンがその裁きと処罰に穏やかでないことを承知しているからだ。私たちは彼らの士気を尊重しているが、しかしながらすぐにも私たちは「ニッポンは、私たちのところにいる聖職者も説教を書いていることをまったく知らないのだろうか」と自問してしまうのだ。ウルスラ会のマザー・ジェラルディーネはその説教文をすでに持って来ており、彼女は一収容所内の説教文を全部引渡せーを知ったのである。そこで私は言った。「マザー、どうせ知らないだろうからまだ渡さないように」。班長はプロテスタントであるが、同じくそのほうが良いと思ったのだ。

プロテスタントの人々がちょうど立たされていたのかもしれない。それとも2回目の呼び出しか：「神父の説教文を読んだことと配布したことのため、修道女全員は正門へ」。とっさに、心臓がどきっとしたが、そのあとには内心歓声を上げ始めたのである。「ふん、これは少なくともよい目的のためなのだ」。やりましょう。こうして4つの修道会がひとつの部隊となり勇敢に立ち向かった。私たちが何千人かの人々の前を通りすぎた時、私たちが耳にしたこと。「何と言うことでしょう。シスターたちが。どうして?」「あら、同じくあの説教のことで」それでも、カトリックの何人かがこう呼びかけるのを聞いた。「シスター、私たちもあなたのあとについて行きます」。そう、本当に。カトリックの人々が次々に私たちのうしろに続いた。

私は、ソネイがこの群集に死ぬほどびっくりしたことと思う。これは彼も考えてもいなかったに違いない。気が狂ったように彼は机を持って来いと命令しながら歩き回っていた。シスター・マチルデが当直をしていた病院（少年病棟）のすぐ前で、彼はある婦人を地面に殴り倒

した。その人は黄疸患者⁷¹ で、青色のメガネをかけていた。だが、黒メガネは禁止されていたのである。彼女を助け上げ、先に進ませようとしたある年配の女性は一突きされてしまい、彼は再び最初の婦人の顔を握りこぶしで強打して地面に倒した。彼女の口と耳からは血が流れ、意識を失ってしまった。当然、脳震とう、そして彼女が少し前に立っていた病院へ幾人かの人たちにより運ばれた。私たちはちょうど到着したところだったのでこれを見てはいなかった。いかに荒れ狂った気持ちの野獣であるかわかりになりましょう。少年病棟の少年たちはベッドから怒って起き上がった。そのひとは、「アー、一体ぼくたちはどのようにあの男をあとで処罰すべきか」と言った。

その間に、私たちはプロテスタントと一緒に間隔をおいて整列し、彼の怒号のもとにあった。すると今度は、カトリックと間隔をおいた向側で。すでに捕らわれた5人のプロテスタントのシスター（一種の伝道師）が私たちの反対側に気を付けて立っていた。6人の日本人がソネイの命令を待っていた。この男は私たちの方に向きを変えてどなった。「誰が説教文を引き渡したのか？」ええ、私たちの誰かがそれに答えねばならなかった。マザー・ジェラルディーネが私たちのコンビネーションの責任者—いわゆるここで言う「ケパラ」—である。マザー・ジェラルディーネは静かに落ち着いた様子で前に出た。ソネイは、誰が説教を作成したかと日本語で質問した。マザーは神父と言わざるをえなかった。「誰がそれをタイプしたのか」。通訳がマレー語等で尋ねた。マザーは私たちをご覧になったが、すばらしい返事をなさって他のシスター全員をかばったのだ。「わ・た・く・し・が、シスターたちに命令しました」（トゥアン・サヤ・スルー・ノナノナ）それをタイプしたマザー・デ・ルールデス、マザー・レオニーそして私はこれ以上黙ってられなかった。マザーだけに罪があるのか？決してそうでない。マザー・ジェラルディーネは他の5人の横に並ばされた。ヤップらが立ち去り、ソネイが近くの事務所に呼ばれた。

その間に、私たちはマザー・ジェラルディーネに合図した。「マザー、私たちがタイプしたとおっしゃってください。このままでは良い気持ちになりません」。「いいえ」とおしゃったマザーは、「ひとりで十分です」そして私に向かって「いけません」とお告げになった。彼女は私たちシスターと修道会管区長を思ってくださったのだ。彼女はまた、「私たちが変更したり、違うことを言ったりしたら、彼はさらに激怒するであろう。私たちはすべての人のことを考えなければいけません」と言った。私は震え、何をすべきか分からなかったが、やはり、全員の利益を配慮せざるを得なかった。プロテスタントのほうでも、ヤップに呼び出されたり質問を受けなかったタイピストがたくさんいた。

戻って来たソネイは、ここに立つ全ての者がその名前と捕虜番号を記入するよう命令した。もちろん、喜んで。私たちは誇りにしていた。居合わせた私の洗礼志願者全員に「何と私たちはよい目的のために懸命に戦うのでしょうかね」と言った。彼らは笑った。また、とても誇りとしていたのだ。ソネイと数人のヤップは、異教徒または所属グループ不詳の者の居残ったクンプル[グループ]の人々へ向かった。そして、これらの人々は3人ずつ並んでヤップの列の中を通

⁷¹ 黄疸にかかっているため治療を受ける人。

らねばならなかった。全てが終了したあと、私たちは再び名前を書かなければならず、それも今度はP（プロテスタント）かK（カトリック）を後ろに付けてである。だが、私たちはすでに2時15分前から焼け付く日の中に立たされており、5時、6時になってもまだ離れることが許されなかった。

正門の扉が開くと、兵補の一団が数人の日本人とともに行進しながら入場した。私たちはこれがどういう意味なのか非常に興味を持った。彼らは私たちのところで立ち止まった。まあ大変。私たちを刑務所に監禁することをたくらんで、捕らえるつもりなのだろうか？いや、違う。5人はすこし先へ行進していき、そのあとマザー・ジェラルディーネを呼んだ。彼女はこれら5人の兵士とともに私たちの住まいへ連れていかれた。そこで彼女にかかわる全てが取り調べられ、彼女の本などが持っていかれてしまった。私たちの前を通りすぎる時、彼女は言った。「少年棟へ行かねばならない」。ひどいことだと思った。マザーひとりがプロテスタントの5人とは。みじめであった。再び出されると、家へ行き、マットレス、蚊帳、毛布等を荷造りするよう言われた。なぜならば、彼女らは離れた収容所に行かされるのだ。私たちはそんなこと思ってもいなかった。惨い！私たちは憶測したのだ。多分、ユダヤ人と一緒にタンゲランへ、それともボイテンゾルグ、ケドンバダック、それともコタ・パリスか。⁷² いやはや、修道会管区長は、ウルスラ会のシスターふたりと一緒にまだいろいろと荷造りするため帰宅した。

私たちは相変わらず日なたで立っていなければならなかった。5時間もすでに立っていたのでノドが非常に乾いてしまった。家々からは、婦人たちがバケツに水を入れて、何個かのコップと水差しと一緒に持ってきてくれたので、私たちは幸いにもノドをうるおすことができた。また、病院に勤務し、私たちの境遇を非常に心配していたシスター・グラシアが水を持って行こうと思っていた。しかし、フェーンバース医師は、その経験により半日は水なしでいられると見た（オランダ人の彼であるだけにその行為に失望）。彼が席を離れた時、シスターが水を持ってきてくれ、多くのシスターや婦人たちを喜ばせた。彼女は本当に混乱している様子だった。

やっと、7時15分前に私たちは帰宅することを許された。そのあと、マザー・ジェラルディーネが修道会管区長、マザー・グレゴリア、そして私が見送る中発った。ウルスラ会のシスターふたりもだ。マットレスとトランクは自分たちで運ばなければならなかった。リヤカーにそれらを積み終わったら、正門まで走らせることが許され、私たちはそのバラン[荷物]を指定の場所に敏速に持って行った。とっさに修道会管区長は、簡易ベッドを持ち込ませたので、マザーに役立つことになるだろう。今朝、私たちはマザー・ジェラルディーネがぐっすり眠られたことを知った。私たちもぐったりつかれていたのが同様であった。5時間も立たされたのである。

⁷² シスターたちは、9月11日に結局クラマット収容所へ移された。「移送と収容」の日記の断片「シスター・ロザリンド 1944年9月17日」参照。

シスター・ロザリンデ

1944年9月6日

ニッポンは本当に気狂いか？今日、私たちはニッポン軍の親切さにより、いわゆるチョコレートを作ることができる酸とビタミンの錠剤をもらった。自分でとっておいたら良いのに。何と言うメンタリティーか。今日、暴力を振るい、明日はお菓子を配るとは。これがダイ・ニッポン[大日本]作法なのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月30日

ソネイ所長は、クンプラン[点呼]の際の数が合わず逆上。病人全員が集合させられました。何時間も立たされ、正門へと追いやられました。何百名が気絶、死の恐怖。何十名かが殴り倒され、一方で他の人々がはらはらして自分の運命を見守ります。ソネイは満足いくまで楽しんでます。今また、満月。⁷³ 彼は、叫びながら自分の家の前に立ち、殴りかかるのです。殴り倒された女性はいずれも担架で運ばれます。子供たちは整列させられる際に泣きながら母親にしがみついています。そして、黙って並ぶ医師たちは、すべてを見ているだけで、何の手立ても講ずることができないのです。息子のヤン・ヘンドリックをだっこしました。彼は 39 度の熱がある。でも、幸いにも「おたふく風邪」。ソネイはあて布とはれあがった顔を見て、私を通してくれました。そのあと、再び長い間待たされました。夜中の 1 時にやっと私たちは帰ることを許されました。リートは黙って私たちを抱きしめました。明かりなしでの着替え。おしゃべりをしてはなりません。収容所の日がまた暮れました。

翌日の午後 1 時、居住区全体が再び集合させられました。点呼免除証明書（医師によるもの：私たちの部屋ではリート、彼女の娘アネケ、ヤン・ヘンドリックと私が所持する）を持った人々は正門まで連絡しなければなりません。ヤン・ヘンドリックを再びだっこして連れて行きます。日中ずっと太陽のもとに立たされます。また数え上げられ、ソネイ自身によりグループに分けられます。再び、1 時に帰宅。娘アンネとヤン・オルファートは別にどこか違う場所で何時間も立っていました。15 分後、毎日点呼に出る正直者、健康な者はパサールで食べ物を取りに行くことを許されました。病人は何ももらえないのです。今夕激怒してソネイは、日本は単独で打倒でき、ドイツの助けを必要としていなかったと言いました。ドイツは本当に勝ったのだろうか。何とか回復したリートは、まだ非常にぐったりしているが気力十分です。処罰を受けた者は 1 週間パンが減らされます。

⁷³ ソネイは、そううつ病にかかっており、「ムーン病」にも悩まされていた模様。「序」3 - 6 参照。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月31日

点呼刑を受けている間（いつも各家ごとと一緒に立つ）、オハラ副所長が道に迷った幼い子を抱いてそばを通りました。私たちの家にいる5歳の男の子がこれを見て言いました。「ママ、ニッポンがちいちゃい子を抱いてるよ。これからその子を殺すの？」

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月28日

ソネイは、ひとりの子供が「ヤップ」と言ったため⁷⁴ふたりの女性を外科病棟に収容されるほど強打しました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月28日

6時半にメガホン：「全ての単身女性は即刻クンプレン[点呼のため集合]せよ」。つまりは家族がいない人です。どしゃぶりの雨。彼女たちは庭に自分たちのレインコートを投げ込みました。こっそりと取りに行きました。また、満月になります。そして、ソネイはこれまで以上に危険となります。

ブールマ

1945年1月29日

ソネイは熱帯神経症だ。満月の頃、彼は狂い出す。たとえばきのうは、単身女性全員が呼ばれた。彼女たちは、その時雨にあい、ずぶぬれになった。遅れてきた一部の人、つまり乾いていたので、次の雨まで待たされた（もちろん降らなかったのだ）。ソネイによると、その女性たちがいまだにきれいすぎる服装を身につけ、靴をはいて歩いているため「一発」食らったのだ。重作業班の少女を見たらいい。ボロ服を着て裸足なのに食べ物のことで文句も言わない。今度から彼女たちは、重い作業だけでなく、パサールやトコに立たなければならない。けさ実際にさせられたけれ

⁷⁴ 抑留者は「ニッポン」と呼ばなければならないとする（「ヤップ」という言葉は非常に悪い）日本人に対する侮辱をここに関係した子供の母親がつづなつた。（Van Velden, 406）

ど、幸い、45 歳までの女性だけだった。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月30日

その女性たちはみんな何時間も雨の中に立っていました。病人も。彼女たちは一度は帰され、また呼び出され、それからずっと立たされました。彼女たちは全員、パサール、トコそして重作業班で熱心に働かなければならないのです。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月1日

前にいた収容所で時々個別に行われた平手打ちは、ここで、私たちは点呼刑、または非常に長い間立ち続けたりそれに似たことをしなければならぬので全体がもらうことになる。到着後の最初の日、殴打やスピーチや果てしなく立つことで、すでに十分私たちに教えてくれた。最初の頃のある日、3 時間も続く夜間のクンプルン[点呼]。何と厳しく、処罰がここを支配していることか。そして、シュプレヒコールをして、私たちはソネイ大尉の命令に従うことを約束させられた。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月3日

ソネイは相変わらず激怒しています。40 万ギルダー集まらなければなりません。彼によれば、まだ存在するのです。⁷⁵ もしそうならばばらしい。彼の手中に絶対入らないことを望みます。彼は居住区内を怒り狂って走り、家々から椅子を引きずり出し、外科病棟のランプをもぎ取りました。

⁷⁵ この推定は若干の死亡者から相当な額の現金が発見された事実によるとおもわれる。「序」12 参照。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月4日

特定額に対するソネイ大尉の要求が再びあったが、供出されなかった。そこで再び補助食であったり、くだもの、ココヤシであったり、これを差し控えるという彼にとって経済的な要領で処罰する。私たちは同じ刑罰を前にも一度受けたが、その時は私たちがだらしのない点呼を行ったためだった。これは処罰である。しかしながら、7千人もの食糧を1週間保留することが得なことであるのは明確だ（ニッポンのため）。これが長く続くことはない。というのは補助食は不足状態で、野菜を増やして全て補充することができないから。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月5日

娘アンケのミルク証明書がまだ交付されない。これは「エキストラ」となるため、罰として差止めされるのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月6日

アンネ、ヤン・オルファート、ヤン・ヘンドリックは、裸足で正門へ出向きました。所長があめ玉を配るからです。どしゃ降りの雨の中、彼らは泣きながら戻りました。わきに押されて、何ももらえなかったのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月7日

ソネイがオーケストラを望んでいます。女性20人、たくさんの太鼓とサキソホンのです。さらに2人の女性が彼のために料理しなければなりません。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月10日

処罰は満了した。少なからずそのはずだ。非常に多量の野菜が入荷し、くだものすら入るのだ。私には、この食糧の差し押さえは、我々が「お日様」大尉が個人的に行った処罰と思える。結局、ばんかいする必要があった。なぜならば、栄養不良のケースが多すぎるほどであると医療局が指摘したらしいからだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月12日

クンプル[点呼]のあと全員帰宅を許されましたが、ムシ通りの人たちを除いてです。彼らはまだ立っています。頭痛のする私の頭の中で声の雑音がうなっています。四班は何かまた罪を犯したようです。アンネの誕生日を安心して祝えたらと願っています。⁷⁶ 彼らは数えられていると思います。そばを通った時、カーテンのすきまからのぞいたら、彼らがいました。ソネイが少し離れたところでわめいています。全部は分からないけれど、要するに「定刻に」「遅刻者を処罰」とかです。おそろしいほどの静寂。万歳、彼らが戻ってきます。今ちょうど午前10時10分前。7時半から彼らは続けて立っていたわけです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月22日

またふたりの女性が叩かれ、少年棟に監禁されました。理由は不明。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月10日

2時半にメガホン：「重作業班の少女全員、同じく病人は即刻、収容所事務所へ」 何のためか？
…中略…

重作業班の少女たちは少年棟に監禁されました。母親はみんな非常に心配して、ラーン・トリヴェリにグループとなって不安げに立っています。夕刻にです。

⁷⁶ 2月15日が彼女の娘アンネの誕生日。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月12日

重作業班の少女たちが釈放されました。彼女たち 150 人は少年棟で、スペースのないところに横になり縦になり眠ったのでした。恐らくこれは同胞の密告によるもの。正門付近で木材を積み下ろす際に原住民とおしゃべりしたのでした。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月26日

再び、オランダのお金を引き渡すよう通達が。ソネイは、大金が入らない場合、居住区のためにはトコの面倒を見ないようです。何も出されないであろうに。そうしたら一層飢えるだけです。彼は、いつも自分の好き勝手にやっています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月28日

夕方のクンプル[点呼]の際、ソネイの荒々しい叫び声。「金を出さねばならない。金・金・ 金！」
77

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月30日

ソネイは、お金が入らないと家々にもっと詰め込み、病院を閉鎖することで脅かしています。悪漢め。でも、彼が何も手に入れられないことを願う。

⁷⁷ 同じく、チデン収容所にいたアドリ・ソルバーは、その出来事を次のように記している。「昨晚、ソネイはお金について我々に演説した。…中略…彼はとても愛想よく、丁寧に尋ねた。我々は、その現金が収容所全体にかかわること。そして我々はもっと食事をもらえることと、結局理解しなければならなかった」(Adri Sorber; チデン婦女子収容所日記 1945年3月29日, 24-25)

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月3日

コリー・フュールホーフの家とほかに4軒の家を6時前までに明渡さなければなりません。彼らはすでに荷物とともに家の外にいます。…中略… そのうち1軒の家にいた女性がある兵補と話をしたのです。大急ぎで、ほかの家々がこの人たち(100人弱)のために場所を空けています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月4日

新たな混乱の始まりが。こうしてソネイは毎日人々を家から追い出すことになるでしょう。収容所中をです。ご親切なお知らせ。現状に感謝すべきもうひとつの理由。空家は設置されたゲデック[竹で編んだ柵]の背後にあります。つまり居住区外となります。

ボルハイス - スキルストラ

1945年4月8日

最近のものは、ひとりの兵補(!)がある婦人と彼らの最後のパーティーについて話したための引越刑であった。彼女は彼に尋ねた。「パンはある？」彼：「お買いになりますか？」つまりは、見事なでっちあげ。1時間後：ニッポンがお金を要求し、9ギルダ一渡さなければならなかった。全員が家を出され、隣の2軒も明渡された。彼らがこれらの家を空にしたいと願った可能性が大有りだ。…中略…

重作業班の少女たちが兵補と接触を持ったために罰を一度受けた。丸一日処罰され、一夜をゲデック[竹で編んだ柵]の外で寝た。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月15日

昨夜8時5分消灯。ただちに全員がラーン・トリヴェリにクンプルン[点呼のため集合]。10時半まで立たされ、黙ったまま。訓練？違う。…？… 夕方のクンプルンに遅れた罰。いずれにせよ、またまた、卒倒したたくさんの者、吐き出した子供、崩れ倒れた老人がいました。離れて立つソネイは、印象では少なからずや楽しみながら叫んでいました。同じく、兵補の列に向かってもスピーチを行いました。私たちは、できるだけ離れて彼の家の周りに立っていました。牧歌的か！

月光、でも殴打はまったくありませんでした。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月8日

私たちは現在、チデン通り西の住宅に何百もの人たちと一緒に暮らしています。全てが美しすぎ、その居住区は良すぎました。だが、ソネイは方策を講じました。10 時間にわたり、私たちは家から追い払われ（チタルム通りとチラマヤ通り）、殴打されました。手荷物を持ち、そのほか全ての物は置いたままで。引きずるようにして居住区内を正門へ向けて。手助けしてはなりません。少し休もうとしたり、子供を助けようとするとうかれました。進め...外へと駆りたてられ、でもどこへ？今回もまたソネイの気晴らしで扱われるこれら数千人の女子供を居住区の全員が震えおののきながら見ていました。正門では検査が行われ、背中を棒で突かれ中へ押し込められました。何時間も焼けつく日の中に恐れながら立つ。通りは、間に合わなくて道端にしゃがんで「たれ流し」した人たちの排泄物や大便の汚く滑りやすいかたまりでした。

夕刻前：トランクを残し、また居住区を駆りたてられ、待たされて、再び何時間も、座ったり、まといついたり、水もなく。しかし、大勢が赤十字社の缶詰を宝物のようにして持ってきていました。落ち着かない母親があちこちでこっそりタバコを吸い、子供が濃いミルクの缶をすすっていました。日が暮れてきました。その後、私たちは何百人もの人と一緒に家から駆りたてられました。子供たちと屋根のないベランダに横になります。ほの暗くなると、ソネイの家の前の路上に振って空っぽにされ、散在するトランクを取りに行きます。急いで全てを詰め込み、ずっしりと重いトランクを引きずりました。なぜなら、もう私たちには力がなかったからです。そして、またずうっとチデン通り西まで。そこで 10 時半に暗闇の中で食事をもらいました。大勢が疲れから気分が悪くなり、ぱったりとどこかで倒れてしまったり、もう食べることができなかつたり、しかしそれをとっておくこともできません。なぜならば、私たちは、それを入れる「テンパチェス」[うつわ]を持っていなかったからです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月9日

私たちは蚊帳を貸してもらいました。居住区全体が助けてくれました。みんなが何かを持ってきました。良く眠れました。夜間ひとときは雨の中ですが。それが何だ。こんな時にはもうどうでもよくなるのです。私たちの通りとチラマヤ通りは鉄条網で封鎖され... 家宅捜査のあと籠いっぱいの密輸品が運び出されました。昨夜、私たちはたくさんの食事をもらいました。それに加えて、タバコを一本吸ったのでした。私たち 6 人とも、気分は再び良好。ソネイにやられてたま

りますか。ごろつき！

万歳。私たちは家に帰ってもいいらしい。また見つけることができるかしら。子供たちはとてもやさしく、落ち着いて振舞う。私たちみんなこのところ汚れていて不潔です。私たちが今いる家は、予定された移動のため自分たちで明渡しました（ムシ通りとチデン通り西）。それ自体として、所長のすばらしき冗談！

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月10日

私たちのテラスに日光が差しています。昨夜は激しい雷雨があったが、私たちはたいしてぬれませんでした。良く眠れました。これらのガラクタ、いつも眺める庭にウンコ、水はなく、自分の立場もわからずにこれから何が起こるか待つのみ...こんなこと全部を含めても、もう気にしない。その反対。これが勇気づけてくれるのです。私たちの残りの身の回りの物を返してもらえかしら。ああ、どうでもいい。みんな一緒だし、まだ笑えるのだから。自分の居住区内でこのような移動とは奇妙です。私たちは、いつかは不明だけれど、チタルム通りへ戻ります。しかし、10番地⁷⁸ へです。多分、私たちは家にある物をいろいろと取りに行ってもいいらしいです。蚊張さえ手に入ればうれしいのだけれど。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月11日

一晩だけ自宅に戻ります。大変驚いたことに何もなくなっていないませんでした。でもみんな引っくり返されていたけれども。道具類と他にいくつかの物がなくなっていました。明朝に私たちは引越さなければなりません。私たちの通りは半分に減ってしまったし、チラマヤ通りでも同じです。その残った半分に私たちは入らなければなりません。新しいゲデック[竹で編んだ柵]の取り付けがすでに始まりました。ひどく興奮。…中略…私たちは缶詰のジャムをつけたサンドイッチを食べています。私たちがどの家に入れられるかまだ分からないが、どうでもいいのです。サンドイッチがおいしい。

⁷⁸ 以前は 20 番地に住んでいた。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月5日

ソネイの命令で調理場が作業を停止。(11時): パンはなし、食糧はなし、トコの配給なし。パン運搬車が入って来た時に十分ホルマット[敬意]が表されなかったのです。それでこの車はいっぱい積んだまま引き返し... 30分後にまた戻ってきて居住区のみんなが大喜びしましたが、結局、いらいらさせながらゆっくりと積んだまま去ってしまいました。チャルダ・ファン・スタルケンゴルフ夫人とキヴェロン夫人が正門へ呼ばれました。理由は不明。

5時。到るところが目立って静かです。子供たちは毛布をしっかりと掛けて眠っています。こうすると飢えを感じないのです。私たちはみんな気持ちを口に出さないけれど、本当は罰のクンプル[点呼]を予感しているのです。

ブルーマ

1945年6月6日

ここ二三日はいやな日が続く。我らが所長ソネイは、私たちを3日間パンだけで暮らせるのだ。お米や野菜などは調理することが禁止された。午後、私たちはこれからアングロ[卓上コンロ]を引き渡さなければならない。あした、「彼」が調理器のことで大掛かりな検査に来る。きのう私たちはパンを何ももらえなかったし、居住区の一部はお米なしだった。パンはパサールにあったけれど配給が許されていなかった。そして、けさ重作業班の少女たちに正門の外へ運び出させ、ざんごうに入れて粉々に踏ませた。どうせ腐ってしまったからとか言って。下・劣・だ! もしあした「彼」が何か見つけると、私たちは1週間食事なしだ。うんざりだ。さっさと寝よう!

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月6日

もう24時間も何も食べていません。アンネは毛布の中で眠っています。幸いにも、飢えを感じていないひとりです。調理場の出来あがっている食事(昨日の分配される分だった)が腐っていく... 人込みで物静かな母親たちが黙って通りすぎます。すばらしい朝日さえも私たちを暖めてくれません。トコは私たちが支払った貯蔵品からコピー・マニス(甘いコーヒー)を分配しましたが、ひとり一杯の量。そっと私たちはこれに差すお湯をわかしました。夕刻に木材が届きました。やっとまた木材が...でも、調理は今禁じられています。女性たちはもうこの野獣ソネイに立ち向かう力がなくなりました。

12時。私たちはパンがもらえるらしいです。しかし3日間お米はなし。5センチにも

満たない長さの小さなかけらを大いに満喫することか。

4時。カチャン・イジョー[小粒グリーンピース]を少量もらいました。挽いて生のまま食べました。またトコが、今度は病人食用貯蔵品を取ってしまいました。医師たちはこれまでになく大変心配しています。

6時。アングロ[卓上コンロ]、ガスコンロやそのたぐいのものは全て引渡さなければなりません。(もう1年前にガスメーターは外されました)。彼の好きなようにさせておきましょう。地面のいくつかの石ころで、私たちは何か暖めることもできるのです。彼は自分でコントロールに来る予定です。もし、火を見つけられたら、家中1週間食事なし。さあ、やってくださいな。

ブルマ

1945年6月7日

きょうは幸いにも何も起こらなかった。調理場で調理ができるようになった。各自がお米 100グラムもらう。6月5日火曜日にお米をもらわなかった人たちは今後もらえない。私たちが2日間「ニッポン砂糖」⁷⁹ をもらえない。ご飯は大半がすっぱくなったので、埋めなくてはならない。ニワトリさえもこれを受け付けなくらいだ。当然2日分の野菜が盛りだくさんあるのだ。問題の日のモツは冷蔵庫に入れられ、けさ早く分配された。調理していないモツはこれから作られるが、すでにドラム缶に入っている野菜以外、腐ったものなんかはないのだ。パンも私たちはもらった。つまり、これで全てまた終わったのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月7日

調理場が再び操業を許されました。各自がドラム缶に入っているカビの生えた食べ物を洗うために相当の水を持って行かされました。私たちのところにお湯が少しありました。塩を少し入れて薄いお茶を飲みます。これをブイヨンと私たちは呼んでいます。寒気には抜群です。

1時半。まだ食事が出来ていません。ベッドに横になったまま私たちの番号が向うから呼び出される声を待ちます。アンネがまた眠ってしまいました。幸いにヤン・ヘンドリックも。ふたりは飢えから緑色の肌をしています。…中略…

2時半。パンを取りに行く。ああ、ありがたい。私たちは再び挽いた生のカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]をのせて食べよう。飲み物と一緒に、そこでお茶をお日さまのあたる中に入れました。飢え。飢えが実際にどういうものか全然知りませんでした。飢えているのにパ

⁷⁹ 「ニッポン砂糖」とは、被抑留者に支給された日本軍からの配給品を意味する。

ンが溝に捨てられるのを見なければならぬとは。野菜の匂いをかいでも腐っていくのを見るとは。トコには全部いっぱいにあるというのに空腹であることを...このことを全て経験してきました。そして、私たち6人はともかくも、生きのびてきました。また、これからどんなことになるやら。これ以上のことには私たちは耐えられないでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月21日

メガホン：「重作業班の少女は全員収容所事務所へ」。しばらくして、「子供がいない 18 歳から 30 歳までの女性は全員ラーン・トリヴェリヘクンプレン[点呼のため集合]のこと」。調理場が閉鎖されたました。闇取引をした者が捕まりました。居住区全体が食事なし。闇取引をした女性たちが頭を剃られ、血が出た頭で日の中に立たされました。バタンハリの調理場近くの全区画の家を 1 時間以内に明渡さなければなりません。私たちのただひとつの疲れ果てた反応？—は、「ありがたい。今度は私たちの番でない」。こんなにも私たちは落ち込んでしまったのです。今また、こんな小さいパンのかけらでできるだけ永らえるように努めます。あとどれくらい飢えの日々が続くのでしょうか。…中略…75 人の人々が自発的に闇取引に加わったのですが、…だから、私たちは多分食べ物ももらえるかもしれません。敢えて申し出なかったが、一緒に加わった者が何百人もいるらしいです。彼らは密告されてしまうのでしょうか。

ヘンケス—ライスダイク

1945年6月22日

一夜。そして再び、決して忘れることがないであろうひとつのこと。⁸⁰ 重作業班の少女たち全員が、ラーン・トリヴェリでクンプレン[点呼]に夜通し立たされ、野蛮なお芝居を見せられたのです。疲労と悲惨さから気分を悪くして朝方家に戻りました。班長 4 人はひざまづいてソネイのところまで行かされ、兵補が 2 列になって見ていました。その班長たちは髪の毛を坊主に刈られ、そのあとソネイ自らがそれを剃りあげました。3 班 (明渡された家々) の副班長もです。そして、「闇取引」をした罪人も。しかし、彼には物足りませんでした。

居住区全体が非常に長い夕方のクンプル[点呼]を。緊急要請：「罪人は出頭のこと」。恐れる母親たちは、子供を残して出ます。疲れ果て、消耗して私たちは、ソネイが今度はあらゆるものを踏み倒し、石もゴミも一緒にドラム缶の食べ物に投げ入れた調理場のそばをぶらぶらとして帰宅しました。今日は緊張感がいくらか少ないです。2 時に私たちはパンさえもらいました。

⁸⁰ いわゆる「サンバルテルミーの虐殺」。「序」4-5 参照。

4時から調理場が再び仕事を始めることが許されました。一体全体食事が仕上がるのかしら。

明渡された家々は、またもゲデック[竹で編んだ柵]の後ろに置かれました。今日の夕方、リートと私は引越さなければならぬ知人を訪問します。

ブールマ

1945年6月26日

我らが収容所元所長ソネイは、去る直前にもう一度大暴れした。ヤミ取引が盛んに行われ、その人々は捕らえられ、殴打され、頭を剃られた。ハンチャー[班長]は、その夜、頭を剃られ、またその他にもたくさんの女性がだ。いずれにしても、これはまたも起こってしまったのだ。私たちは3日間食事なしとおびやかされていたが、その代わりにハンチャーの頭が剃られたのである。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月25日

それでも、あの「ゲデックドラマ」[闇取引のドラマ]は、私たちの気持では何週間も前のこととなりました。これに関係した人たちは、はげ頭で平然と歩き回っています。これがソネイの最終セットだったのでしょうか。彼は今本当に去ったのか。誰もそれを知りません。これは女性にとって最大の屈辱のひとつです。家を明渡さねばならなかった女性の多くは、今なお住家がありません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月29日

6月26日と25日にかけての夜は月食。すごい騒ぎ、居住区の外でもです。魂が打楽器の音で追いつかれ、カンポンでは叫び声がします。サカイ所長も同じく狂い出しました。なぜならば、12時に私たちは寢床から駆り出したからです。カトーは兵補とともに家々と庭でいわゆる泥棒を捜査しなければなりません。全ての明かりをつけさせられては消し、およそ1時間後には静かになり、私たちは再び寝ることを許されました。もちろん、泥棒は見つかりませんでした。子供たちをそのままそっと寝かしておきました。彼らはもうそう簡単には驚きません。かくして私たちは見事な月食を楽しんだのです。ありがとう。ヤップ様！

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月7日

5月の終わりから、私は希望ある日々を経験してきたが、時が経つのが何と遅いことか。我らがソネイ大尉がやっと去り、つまり、彼は上層部である本営へ戻ったのだ。しかし、1週間の飢えの脅迫、事実先月には24時間も行った独特な送別のあとではなく、彼が、闇取引でクミチョー[組長]とハンチョー[班長]、そして現行犯で捕らえた女性たちと罪のない何人かの見物人の頭を剃ったあとだった。ひどい一夜だった。

食糧及び物資事情

ヘンケス - ライスダイク

1943年3月6日

食事は幸いにもまだ良好です。私たちは少し貯蔵品をおいているのです。どうなるか全然分からないからです。

ヘンケス - ライスダイク

1943年3月20日

「またもあのおいしいスモークソーセージが。ゴミ収集車の少年たちすら、そんなソーセージをかじっている」。「爆弾と手榴弾の投下後も我々はこの様なソーセージについて語る」。そして、ある老人（ここには65歳以上の男子も住んでいる）は、居住区内にこの様なソーセージを売ろうとしています。

6時ーパンが配達されます。こうして生活の糧を得ているふたりの女性によってです。

ヘンケス - ライスダイク

1943年9月5日

野菜とくだものが少なくなります。パサールで、私たちは1軒あたり限られた量だけを買うことができます。

ベルフ

1943年9月5日

この前に原住民の男子と交代させられた原住民女性は今後パサールにいられなくなった。つまりパサールにはこれからオランダ人女性が来るのだ。⁸¹ 私たちは、くだもの、青野菜、根菜など

⁸¹ 1943年9月・10月以降、原住民女性たちは収容所の市場でその者の品物を売ることが許されなくなった。そのため、GESCを通じて市場用に注文される品物に対し、家の責任者が1軒あたりの必要量を収容所運営部に申し出るシステムが行われた。その後、家の責任者が自分で番号順に市場で買い入れる輪番システムとなった。「序」11参照。

にどれだけ支出するかを申し出なければならなかった。なぜならば、食べ物も権威筋から、つまりここではポピン病院のチキニ事務所によりいろいろなやり方で居住区のために(幸いオランダ人) きめられるのである。これはすべてニッポン措置だ。ますます不自由になる。私たちはこれまでおいしい食べ物、それも安く手に入れていた。これについて良識ある人々はみんな言っている。つまりお母さんが献立をきめている。でもこれからどうなるのだろうか？

ワイヘンケ

1943年9月27日

パサールはこれから完全に私たち自身でまかなわれます。売れ行きをよくしていくことは大変面倒なことであったし、最初は、野菜とくだものがわずかしかりませんでした。というのは、余ってしまう(原住民の女性たちは以前には売り払っていたのだが) 危険を冒かすことができなかったからです。そして、何も得られないことを心配する女性たちが殺到するため、パサールが非常に込み合っていました。そこで列になって待つシステムになって、30人ずつ同時に中に入り、何と長く待たされたことでしょう。今は十分に入荷していますが、売り子たちは余り物に手をやいています。そんな時、誰かが余ったバナナを買い上げ、焼いて売ろうと考えだしました。待っている人たちにコーヒーを売る賢い女性もいます。でも、たくさんの人たちが何か工夫してやってくるのはすばらしい。ある女性は余分なバラン[雑貨]を買い上げ、それを今度は自分のいるペンドポーチェ[ベランダ]で売っています。誕生日のプレゼントなど用に編物をしたり売っている人もいます。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月5日

食べ物はまだ十分にあります。

ワイヘンケ

1943年10月10日

最近、家具を手に入れる荒っぽい方法を話したかしら？家の中に有り余るものは全部敷地の二、三箇所に積み重ねられています。そして、何か必要なものがあつたら、そこへ行って頼んだ数人の少年たちとそのまま持って帰るのです。ベビー用テーブル、とてもすてきな骨董品の机、ダンス、ベッド、テーブル、ピアノ、何でもあります。お天気だった間はすでにあまり活気ある状況

ではなかったけれども、何度か雨が降った今は、まったくひどい様相です。クラマツからの私たちの家具は質屋係りの用地に山となって積まれています。リース・ザイレマーカーの持っていたビーダーマイヤー様式の椅子や古風なダンスを思うと腹が立ってきます。家具が簡単に取られたり時、その勝手さと無法さにばかげた気持ちになります。

ワイヘンケ

1943年10月15日

パサールのことで私たちは本当に苦労しています。不面目です。なぜならこれは女性たちの責任だからです。ちょうど足りるほどだけど、最初の二、三日の殺到状況を防止して、長い行列を控えるために今はクジ引きされます。結果：偽のクジ券。偽造を防ぐためにあらゆることが考え出され、常にこれに逆らって再び偽造が工夫されています。また、野菜や他のバラシ[商品]が搬入の際に簡単に盗まれてしまいます。お年寄りたちが夜通し見張っています。なぜならば、バラシはすでに前のお昼に入るからです。偶然にも2回引き続いて大きい番号を引いたひとりの婦人（大勢いる中のひとり）は、すぐにも「ずるい」と声を高くして言っていました。哀れで、みじめで、かわいそうでとても痛ましい。…中略…

最近の生活は行列で成り立っています。私たちが長いこと辛抱強く行列するので、お米、卵、肉、ミルク、全部が配給されています。

ワイヘンケ

1943年10月16日

食糧供給のことで、またもいざこざがありますが、再び解決に向かっていきます。

ベルフ

1943年10月22日

現在、食糧のことで大きなスサー[厄介事]が。何度も野菜、お米、砂糖が少しだけしか配給されないし、肉はほとんど手に入らない。何個かのジェルック[かんきつ類]にも何時間も行列なければならぬ。パサールでは、複雑な番号システムで行われている。

シスター・ロザリンデ

1943年10月26日

今後は、私たちが所有しているものは全部、ダイ・ニッポン[大日本]から借りているとみるようにと通達された。すばらしい。要するに私たちはまさにアリのごとく貧しくて何も持っていないのだ。でも、みんな持っているものといったらあまりないのだが。

ワイヘンケ

1943年11月11日

ミルクの供給が（赤ちゃん用以外は）ストップしました。お米が配給され、砂糖もすでにあまりありません。人々を少しも明るくしないことです。でも、他の収容所と比べると何と私たちは良い状況にあるのでしょうか。とりわけ私たちを監視する原住民の警官ポーハンでさえ、様々な英国人とその他の女性たちがいるタンゲランは、ものすごくひどいと見ているのです。それで分かるというものです。

ランジング - フォッカー

1943年11月20日

9月と10月に60ギルダーを郵便為替で受取ったが、11月1日以来まだ郵便為替が来ない。なぜ？誰も知らない。このお金で生活していた私たち女性はこのまま飢え死にすることにもなる。ますます多くの女性たちが自分のお金をなくすことになる。しかし、どれだけお金がまだ残っていると思うとまったく驚いてしまう。なぜならば、郵便為替をもらうことは例外で、もちろん特別の楽しみだった。「扶助」で生活する者は、ひと月に7.50ギルダーもらえ、ひどく貧しい女性たちが収容されている、ここよりもっと粗末だが、過ごしやすいバタビアのどこか近くの元少年院があるグロゴールへ送られる。⁸²

いつもまだ順調であった食糧問題は、今、困難になりはじめてきた。お米、砂糖、卵は配給されているが、ミルクはチダ・アダ[ない]。赤ちゃん用だけで、バターなんかもうずっと見たこともない。くだものと野菜は幸いにもたくさんある。ナンシーおばさんがくだものの蓄えを置いているので、それで何とか生計を保っている。私も今週働いてお金をかせいだ。テロン・ブランド[オランダナス]のフルーツケーキを作って11ギルダーかせいだ。毎日1キロをまたたくまに売ってしまった。知り合いが買ってくれた。最初に子どもにあじみさせた知らない人もだ。

⁸² 「移送と収容」ベルフ、1943年7月3日の日記の断片参照。

みんなおいしいと言っていた。うまく行っていたのに、そのあと砂糖は配給となった。1週間につき一人100グラム。私は1日に1キロ使っていたので、売る夢はもうあきらめる。でも多分トコの菓子部へ出すこともできるし、そうしたら砂糖を余計にもらえるかも。

ワイヘンケ

1943年11月29日

あの「行列」システムが、ミルクと卵のために復活しました。みんな小さな子供たちをお使いに出しているの、そこは何ともかわいらしい様子。おちびさんたちが列を作って小さなスツールやミルク用のおなべを反対にして座り、ペチャクチャと話ながら。…中略…

12月の支出：	15	ギルダー 家事費
	3,90	靴
	0,15	マジパン
	0,60	子供たちのプレゼント
	0,50	病人見舞い
	0,24	クジ
	0,25	GESC [地方欧州人援護委員会] ⁸³
	0,50	自転車
	2	クリスマス用のパン
	1,80	光熱費
	0,15	自転車

合計	25,09	

ワイヘンケ

1943年12月7日

お米のことはとても危ういです。私たちは1週間に1人分の4回の食事に足るだけ持っています。中身に関しては、夕食にサンドイッチ（高いし、あとどれくらいパンが食べられるのだろうか）と他にジャガイモ（これも高い）でその場をしのぐ。解決策だったウビ[サツマイモ]は、非常に入荷が困難で、全住民のために蓄えられています。砂糖はまったくぎりぎり、1週間に1人分

⁸³ 1943年11月以降、この援護組織はPOPという名称で活動した。脚注24参照。日記の作者は、この時はまだGESCと記していた。

100 グラムもらう（もし、もらえればだが）。しかし、居住区の外と比べると私たちのところはまだパラダイス。ここはまだ結構良いし、食糧不足の心配なんてまだはっきりしない将来の心配事のように。お米は、あればですが、それを 1 リットル 38 セントで買わなければならない住民のことを心配したいくらいです。ワロン[屋台]のそばでみすぼらしい、ボロをまといやせ細った群衆がけんかをしていました（私はKから聞き、私自身もゲデック[竹で編んだ柵]越しに見ました）。かごを差し出しても空っぽのまま、伸ばしたあのガリガリに痩せこけた茶色の腕を私は決して忘れないでしょう。

居住区の外では、もはや一粒の砂糖ももらえないのです。ここに強盗が数え切れないほど侵入したのも不思議でなく（だったのだ。今ここには自分たちの居住区警備隊がいるから）、それでも毎夜、原住民が居住区内をうろついています。居住区の外の状態が続き、ここを略奪に来たり、原住民を押さえきれないとしたらどうなることか心配です。do⁸⁴ によると、お米の収穫は、中部と東部ジャワではだめになり（洪水により）、西部ジャワだけが大丈夫のようです。

ランジング - フォッカー

1943年12月12日

郵便為替がまだ来ない。私の最後の 30 ギルダー（銀貨を取っておいた）をくずしたし、またベビー人形を 10 ギルダーで売った。他のふたつの人形がモル夫人がいるトコの売買部にあるので、これが売れば 17,50 ギルダーになる。そうしたら、あと何週間はやっていけるだろう。

ヘンケス - ライスダイク

1943年12月15日

ここの生活は村のと同じです。ほとんど何でも手に入るけれどとても高いです。このところガスはないし、そのため、今私たちは木炭の火を使ってあくせくしています。

ワイヘンケ

1943年12月18日

減っていく資金のこともあって、GESCが毎日援助しなければならない人たちのグループが増加し、小さなトコが軒並み出ています。家のまわりで何かが売られています。その大半は食べ物。

⁸⁴ 「ラジオ radio」と記すのを避けるため使用した略語とおもわれる。

私たちはサンバル・バジャック[炒めたサンバル]を売っていますが、他の家の人たちも私たちと一緒にやっています。スルンデン[おろして焼いたココナッツ]、マットレスの繕い、ガド・ガド、醤油等々も扱っています。

ワイヘンケ

1943年12月26日

ここにいるクラールは、減っていく資金のこともあってサンバル・バジャック[炒めたサンバル]を売っているが、今日奇妙なお客に出会った。原住民の警官のひとりが、きちんと小さい入れ物（近頃は、みんな何か買物をするときに自分の入れ物を持参するのです）を持って来てサンバル・バジャックを20セントで買いました。

ランジング - フォッカー

1944年1月9日

チデンに今もうおよそ5ヶ月いる。たくさん働き、ほんのわずかの気晴らし、いや、違う、まるでなしで、気分は落ち込みがち、「まいってしまい」、無関心。ここ2ヶ月に3回病気になった。この病弱な状態は、偶然にも郵便為替が届かなくなったのと同じ時に起こった。…中略… 初めの頃私はあまり物事を気にしなかった。そして病気になり私のわずかな貯金である50ギルダーも消耗した。そのあとナンシーおばさんがジェルック[柑橘類]を売って貯めていた中から30ギルダーを借りた。私はおもちゃなど少しばかりの品を売った。

居住区内には、自分の持ち物を売りに出すことができるビリック[竹で編んだ壁]で建てられた小さな店がある。この商売はとてもうまくいっている。すばらしいことに、居住区内にはお金がまだあるのだ。実に病気がちな私はその日暮らしをしている。私はいらいらしていると私の同居人はたびたび思った。幸いにも、私にとっての希望の光つまりしばしば援助の手を差し伸べてくれた友人であるヤンス・デ・フリースがいる。彼女は躊躇することなく私に200ギルダー貸してくれた。これで私は今後4ヶ月は困難から脱することができる。そして4ヶ月後には、まあ、どうでもいいは。私たちの不快さに関しては、現在、快活な方向に向けて調節した。あと1年に。…中略…

トコヤパサールに立つこともできるし、いろいろなおいしい物を作って売ることもしる。居住区の庭には看板がいっぱい立っている。例えば、サンバラン売り出し、中華料理、ガド・ガド、温かい肉コロッケ、タペボール（オーリボルの一種[もち米またはクテラ芋で作ったイースト入りの菓子]）、砂糖菓子、カチャン・ゴーレン[炒ったピーナツ]、クッキー、ジャム、アドボカート（アルコールをいかにして手に入れたのか誰も知らない）、ピクルス、チャツネ、

アチャル[酢漬け野菜]、蜜入りワッフル。つまり。大体各家ごとに何かを作っているのである。テロン・ブランド[オランダナス]入りクッキーでこの様なことをしたのは、この家で私が最初だった。病気がちで砂糖不足であることもあって、私はまだこれを再開することになっていない。現在ある人がメレンゲを作り、それで大繁盛している。その他この家の中にくだものトコがふたつあり、とても重宝している。そのために全部外から入荷する。「外」には自由が！どれもみんな恐ろしく高く、卵は7セント半するしほんとにわずかしかない。ミルクは5歳までの子供のためだけで、その3分の1が水であってとても高いのだ。肉は高くはほとんどなし、バターはもう長いこと見たこともない。砂糖とお米は配給だが、かなり十分ある。病人を丈夫にするような物はあまりない。戦争捕虜の場合はどうなのだろう。食糧に関しては、多分私たちよりましであろう。でも、彼らもこのいやな時期が終わるのを同じように待ち焦がれているだろう。

ワイヘンケ

1944年1月19日

2月1日に調理場が私たちに供され、私たちのお金が取られてしまうことはほとんど確かです。現在私たちはバラン[品物]を買うだけです。

ヘンケス - ライスダイク

1944年2月26日

卵がもう入荷しません。二、三週間なかったパンがまた入るようになります。その代わりにトウモロコシをもらっていました。

ワイヘンケ

1944年1月27日

卵、ミルク、肉、野菜、くだもの。なにもかも今はわずかしかないし、私たちの食べるものが不足しているというのではないですが、インゲン豆やカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]やトマトはいつもあるけど、居住区全体が飢えきっているために補充食、特に砂糖類を探しているのです。また、私たちの1週間の配給も決められました。その結果、列に並ぶ必要がなくなりました。班のためにミルクが十分に入る時はいつも(ミルクは分配されて来る)ひとりの少年が、拡声器とベルを携えて班の中を「第8班、ミルクを取りに来るよう。第8班、ミルクを取りに来るよう」と通って行きます。パサールの規則についてご存知かしら？各々の家がくじ引きし、ひとつ

の番号（大きな家はふたつの番号）が付けられます。朝一番には、1 - 100の番となり、その次には100 - 200の番というようにです。そしてこれは毎日100づつ繰り上がり、真ん中の番号も早く順番となるように月曜日毎に50づつ繰り上がります。⁸⁵ 今は卵の配給がある。ああ、この収容所の管理には大した方針はないし、全然哲学的でもないけれど、規則は良いものだし、順調に行っているのだからそれだけでも結構なものです。ここで何かが起こること、将来のために何かが創造されていくという感じをまったく抱きたくなります。

ワイヘンケ

1944年2月10日

現在はほとんど全部が配給されます。肉、お米、パン、ミルク、卵、石けん、そしてその他に入ってきたものも。グラ・ジャワ[シュロ糖]はもう入らないし、カチャン・タナ[落花生]も3週間前からありません。まったくきちがいじみています。外では絶望的な混乱状態にあるにちがいありません。外では1リットルのお米が闇市で1,25ギルダするし、配給は完全に不十分です。ココヤシは居住区では19セント（今日は、17セントに値下げされた）、1リットルのカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]が50セント。毎日、満足な食事を整えるのに苦勞し、私たちはこのこと以外は何も話さないほどで、気が狂ってしまいそうです。…中略… さらにお金も本当ににすっからかんとりました。

ヘンケス - ライスダイク

1944年3月7日

現在の食事は、私たちが1日中何かを「食べたい」と感じるほど非常に少なくなってしまいました。

ヘンケス - ライスダイク

1944年3月29日

ニッポンは、今後、ひとり1日につきお米100グラム、トウモロコシ100グラム、砂糖20グラム、塩20グラムを支給する予定です。水と明かりはただ。その他ひとり1日につき17セントをパサーで使うことが許されています。

⁸⁵ 脚注 81 参照。

オランダ人収容所委員会は、私たちにお金を全部引き渡すよう要求しています。そうすれば、全員に同等に買い入れることができるからです。うれしいことに、それでやっと「貧乏人」がいなくなります。私たちはひどく貧しい人がいるグロゴール収容所を助けることもできます。ヤップはこの気高い計画を認めるでしょうか。ミーブ収容所リーダーは、（運動する男子たちがいる）クラマツもこの計画に大変熱意を抱いていると知らされました。⁸⁶

シスター・ロザリンデ

1944年3月31日

今朝、突然マザー・イルデフォンセとマザー・ゲラルディーネと一緒に収容所事務所で緊急会議に行かなければならなかった。私たちは、そこで何が議論されるか非常に興味があった。次の通りだった。収容所幹部（ニッポンに対する私たちの利益となることを促進しているオランダ人）は十二分に討議した結果、広範囲におよぶ措置に移らねばならなかった。悪化を防ぐため、そしてできるだけ長続きさせるためにも、ニッポン当局の立場になり、ニッポンが行おうとする措置より私たちにとってもっと良好な規則を彼らに提起するよう願っているのだ。

私たちは全員持っているお金をすべて渡し、一銭も隠し持っていないこととなる。そのあと、私たちは、月にひとり15,10ギルダーを受取り、その中から医局に1,20ギルダーを払い、配給される食糧に4ギルダーがあてられる。これで各自が100グラムのお米、200グラムのジャグン（トウモロコシ）の粉、20グラムの砂糖をもらい、そのあと0,17ギルダーがひとり1日につき残ることになり、これからその他の経費を払わなければならないのだ。明かりと水はただであるが、私たちはアラン[木炭]の火で調理しなければならず、これはひと月に80ギルダーもする。

シスター・ロザリンデ

1944年4月1日

人々は苦勞して貯めた最後のお金を今、渡さなければならないことで非常にとり乱している。多く言われていることの中には、

「主人が戻った時にいくらか持っておくために全部売ってしまった」

「いくらか稼ぐために照りつける日の中でくだものを売り続け、子供たちをほったらかしにしてしまった。もっと良い将来に大きな希望をいただいていたし、これはそれこそ血のにじむようなわずかなお金なのだ」

⁸⁶ 1943年9月から1944年9月まで、クラマツ収容所には日本支持者もいた。

このようにも言っている。

「本当に必要なもの以外はすべて我慢してきた。他の人は楽しみながら全部使い果たした。今度は、そのような人のために私たちが持っている最後のわずかなお金を出さなければならないなんて」等々。

そして私たちは？そう、私たちにとっても大損失だし、何もないことになる。私もこの2年間にもらったもの、日本人のところで稼いで余ったものを一生懸命貯めてきた。これもみんなスマトラにいるシスターたちのためにだ。なぜならば、彼女たちは何も持ってなく、私たちの援助を期待していることが分かっていたからだ。特に、衣服は。私たちも同じように極貧な状態で、本当にすでにそうなのだが、ここから去るであろうことを予想しているのだ。

いくら稼ぐなどもうできない。できるとしたら、公益のため、あるいは収容所の他の人たちのために働く場合だ。例えば、神につかえるシスターが病院のために洗濯をしたり、カロールのシスターがひとつきに4ギルダー稼ぐために病院で働いているのだ。また、常勤の医師の場合も同じだ。この4ギルダーは、いくらか使う、つまり買うときにその額が消される1枚の券として交付される。要するに、他の人のために働けば4ギルダー稼ぎ、そのためもう少し買うことができるのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年4月7日

お金を引き渡すことに関するミーブ案が承認されました。

シスター・ロザリンデ

1944年4月9日

再び私たちは、緊急会議（それも復活祭にだ）に呼び出された。収容所委員会、班長、神父、牧師、私たちのコンビネーションのクパラ[責任者]。リーダーは、お金はすでにある程度集まっており、これを収容所運営部の手元に置いておく試みがなされ、そしてニッポンへ渡さなければならないと語った。彼らはこのお金をニッポン銀行へ預けるべきだと言った。失ってしまうことを誰もが承知している。つまり私たち全員は、ともに非常に貧しいのだ。私たちは要するにニッポンにより養われなければならないのだ。

午後には室長がパサールに集合させられ、すべてを知らされた。群集の中からため息がもれた。涙も流れていた。これまでこんなに苦労し、骨折って働いたあと、一人で、常にせきたてられ、すべてを取り上げられ、それも給食が絶対的に少ないと分かっているだけに想像もつく。13歳、15歳、16歳の大きな子供がいて、彼らを養うのに十分な食べ物がなく、ひどくやつ

れた婦人を私たちは慰めなければならなかった。「2日足りない」と彼女は泣いていた。こういう問題はまだまだある。

ウィリンヘ夫人（収容所リーダー）は、さらにこう言った。「ソネイからそのことを聞いた時、私は非常に失望しました。しかし、頭をあげ、微笑みながらその通告を受けたのです。まばたきひとつしませんでした。私がこうできるならば、あなたもきっとできます。チデンの皆さん、私たちは楽しい時も苦しい時も一緒に耐え、結束してがんばりましょう。冷静なオランダ人として、私たちは耐えるすべを心得ており、私たちの魂をいかなるものによっても犯させてはならないのです」。喝采！

シスター・ロザリンデ

1944年4月25日

私たちは、収容所の外部に家か財産を所有しているかどうかを届出なければならない。私たちの持っている銀貨をすべて要求している。私たちは補助食のために必要な10ギルダー紙幣を各自が持っている。トウモロコシやお米だけではやっていけないし、油は手に入らなかったし。

シスター・ロザリンデ

1944年5月10日

夜中にゲデック[竹で編んだ柵]越しに、闇取引が盛んに行われている。大袋のお米や缶に入ったミルクでさえということだ。お金はもう私たちにとって何の価値もないし、それで何も買うことができない。こっそりとお金を隠し持っていた者が食料品を入手できるのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年5月13日

病院で働くシスターたちは、ひと月に4,50ギルダーの給料をもらう。彼女らはそのお金で何に使えるのか、何か買えるのかと質問した。取っておくより仕方がないという返事がされた。これは日本・東インドの通貨なので、今後は何の価値もない。しかし、持っていることを彼らは知っているのだ。お互い間で物々交換は禁止されている。

ランジング - フォッカー

1944年5月15日

食糧に関しては、私たちの場合は申し分ない。トウモロコシの粉とお米のほか、ニッポンからもインゲン豆、カチャン・イジョー[小粒グリーンピース]、グラ・ジャワ[シュロ糖]、グラ・バトウー[氷砂糖]、砂糖菓子、石けんをもらう。ほとんど毎日肉か魚。3日おきに卵がひとつ。でも、くだものと青野菜は少ない。被抑留者に対する米国赤十字社からの援助で、バターとチーズが入った箱が届いたらしい。バターとチーズ、想像にもおよばない。

シスター・ロザリンデ

1944年5月19日

まだ食べるものはいくらかある。トウモロコシとお米と根菜。そしていつも、トウモロコシ、お米、根菜だけけれども。本当にごくまれに肉の小さな一片かくだものひとつ。大抵はバナナかパイアであるがうれしい。まだ、あるのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月9日

トウモロコシを使って、お粥、黒パン、スープ、ピューレ、ケーキ等を作ります。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月25日

再び、パンをもらえます。という訳で、居住区で作られていた「黒パン」を食べる必要がなくなりました。トウモロコシはもう入らなくなりました。現在、私たちは、ひとり1日につきお米100グラム、砂糖10グラム、塩10グラムをもらいます。パンには、ウビ[サツマイモ]、ココヤシ、グラ・ジャワ[シュロ糖]が補充されます（本当になされればですが）。肉はもうもらえません（急患証明書のみ）が、テンペ[発酵豆腐]は入るようです。私のヘモグロビン値⁸⁷はずっと60以下です。私は現在、肉の代わりにテンペ証明書を持っています。時々、庭仕事をまた始めましたが、

⁸⁷ 体内に酸素を運ぶ血液中のタンパク質。

すぐに疲れてしまいます。私が育てているスペリヒユは、ふたつの小さな菜園のものが病人用に予約されています。なぜならば、野菜はほとんど何も入荷しないからです。

シスター・ロザリンデ

1944年7月11日

これからもう野菜をもらえないだろうと聞いた。私たちは自分たちで野菜を作らねばならない。ここには土らしい土がないのに、あったとしても乾燥してかちかちだ。ニッポンは熱帯地方のことを何も分かっていないのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年8月11日

ガスは止められてしまったが、一部にはまだ電気がある。私たちがもらうアラン[木炭]は半分に減らされるので、一体何を調理したらいいのか。というのは、水も今は沸かさなければならぬからだ。私たちはどうなるか、とにかくやってみるが、彼らは6.7千人の人々が一体あんな半狂人ソネイのなすがままにあって、いかなものか分かってもいいだろうに。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月17日

もう卵がなく、ココヤシ也没有せん。

ヘンケス - ライスダイク

1944年9月2日

ますます飢えがひどくなります。(自分のお金で買った) 配給：一人あたり、カチャン・タナ[落花生]半カップ、棒状固形石けん半分、砂糖50グラム、コーヒー50グラム(12歳以上)、紅茶50グラム。これが入荷した時はお祭りさわぎ。お米は、ニッポンから21人分で(他の3人の同居人は入院中) 8リットルと4分の1もらいました。

ヘンケス - ライスダイク

1944年11月16日

調理場が完成に近づいています。うれしい。なぜならば、木材やアラン[木炭]はほとんど入らないからです。私たちは時々（各家にはコンロがひとつだけある）枯れ枝や壊れた椅子を燃やして何日も続けて調理してきました。

ヘンケス - ライスダイク

1944年11月21日

11月18日はリートの誕生日。警戒警報（ケイ・カイ・ケイ・ホー）の際、私たちは薬品ケースからコニャックを出して一杯やりました。砂糖をもらえなかったし、一日中ものすごく飢えています。私の菜園から時々トマトやスペリヒユを少し私たちの家にいる病人にあげています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月10日

砂糖は一日にひとりあたり茶さじ1杯をもらいます。幸いにもいくらか増えました。飢えはひどいです。野菜とくだもの不足。…中略…木になっているサクランボからいろいろなものを作ります。24時間づつ2日間放置しておく、発酵してすっぱくなります。パンにつけると最高。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月11日

パンはひどく少ないし、ゴムみたいなものです。⁸⁸ 何も上にのせるものはありませんが、塩を少しつけてもおいしいです。私たちが手に入れることができる唯一の「肉」、モツで、非常に少ないけれど（2週間ごとに1回）、いろいろなものを作ります。テンペ[発酵豆腐]は1週間に1回ひとりにつき少量をもらいます。これはタンパク質をたくさん含んでいます。

⁸⁸ このパンは、アジア粉で作られた。脚注 25 参照。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月13日

初めてお米を「ラギ[酵母]」で発酵させて食べました。とてもおいしい。医師たちは、ビタミンが豊富で消化しやすいためにこれを勧めています。唯一の問題は、私たちのわずかな食事にあるお米から当てなければならぬことです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月17日

今日、肉、本物の肉をもらったのです。私たちの家の26人分に1350グラム。飢えが減った一日。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月25日

昨夜は、パンを全部食べてしまったほどとてもお腹が空いていました。今朝は各自が茶さじ何杯かのラギ[発酵]米を、そして今日はパンが早く入るようにと願いつつ。私の初めてのソックス30セント分を出しましたが、ヤップはちょうどこの週には支払いをしないのです。⁸⁹ どのわん曲した足がこのソックスを履くのかしら?…中略… 11時に警報、火を消す。それでも、リートは浴室で火を消すための水を入れたバケツを横にして、私たちの食事（彼女はこの家の住人16名のために一日調理し、二日しないで、また一日という具合に調理する）をうまく仕上げました。また、ひどく少なかったけれど、私たちはおいしく食べました。お腹がぺこぺこ、1時間したらまたまたお腹が空いてしまいました。午前中に入荷するはずのパンがまだ入りません。私たちは飢えのためエネルギー不足です。

⁸⁹ 女性たちは、日本軍のためにソックスを編むことにより少しばかりの収入を得ることができた。その際、一足につき30セント受取った。「就労状況」ボルハイス - スキルストラ、1945年2月1日の日記の断片参照。

ブールマ

1945年1月29日

最初の頃の、⁹⁰ 食事はまだ良かったが、今はものすごくひどい。砂糖なし、油なし、野菜、くだもの、ココヤシはほんの少しかない時も。アラン[木炭]はほとんど入らないし、私たちは「盗んだ」木材で火をたくのだ。また、さらにたくさん働かされ、収穫したものは、疾病証明書を持つ人たち用の特配となった。現在これは減った。なぜならみんなが病気だからだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月31日

明日、調理場の作業が始まる予定です。配給は一日分だけとなります。今週の自給分として今回は、お茶少量、ひとりにつき石けん半分、3人分でカチャン・トゥンガ[大粒の大豆]カップ1杯。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月1日

晴天のすばらしい日だった。お茶の時間から夕食まで裏庭のすてきな茂みの一角に過ごした。私たちは濃いスープを飲んだ。トコの配給からは、カチャン・トゥンガ[大粒の大豆]、お米、少量のカンクン[青野菜]の茎と葉っぱ、そして、私たちのグダン[物置]の隣人の茎をも食べることができるのでとてもうれしい。お米、砂糖、塩の配給は、いわゆるニッポン・ディストリからですが、トコは、強制的に私たちから集められたお金による基金で賄われています。しかしながら、この制度はみんな同等の貧困さと飢えを及ぼす結果となっています。というのは、闇取引（ともかくも、今のところは私にははっきり分かっていませんが）はここにはないからです。これは、アヒルの卵一個につき 1,50 ギルダ―払い、移送される頃にはアヒルの卵 12 個から 25 個に背広ガゲック[竹で編んだ柵]を行き来したことを聞いたカレーズ収容所とは正反対です。私たち（私の子供たちと私）はプレゼントを 3 つもらって、カレーズで無数の見知らぬ人たちが楽しんでいたこの補助食の特配を、最後の頃には私たちもともに味わえました。

お米の配給は、ここではひとりにつき1日100グラムです。要するに、子供、赤ちゃん、おとなそれぞれ同じ量の給食をもらうのです。砂糖はひとりあたり15グラム、その他1週間に何回かくだもの、ひとりにつき1、2本のバナナか、ココヤシ、4人につき1個という時もあります。昨日は12人分で1個。開かれる予定の調理場は、今後私たちに袋の重さとかそのような口実

⁹⁰ 1944年10月12日に彼女がチデンに到着後。

により90グラムのお米を支給するそうです。すべての食糧が減らされます。パンは、年齢には関係なく1日ひとりあたり前と同じく半分で、これはお米も同じです。パサールは同時に野菜を意味します。大半がカンクン[青野菜]、スペリヒユ、サウイ[白菜]、またはロバック[ラディッシュ]です。この最後のものを、娘アंकは一日中生で食べさせます。これは、彼女が細菌性赤痢にかかったあと、再発⁹¹ 後には特別だし、まったく幸運でした。なぜならば、ほとんどの胃腸障害患者にはこの生野菜を摂取することはタブーだからです。

昨日私たちは、お茶の時間と夕食時間の間にクデラ[大豆]粉でパンケーキを作りました。たびたび間食を少しして、私たちのおなかを満たす手法は、ますます多くの女性の間で最上の方法と認められるようになりました。このことも私たちが調理場に関係しない限りは続けられます。ここ第3班ではこれがもう始まりました。そうなるともはや、火を焚いてはいけないことを意味するし、いかなる配給も受けられないこととなります。トコに属している現在は、フン・クウェン[青エンドウ豆]の粉を7人分1パック、油を3人分卵の殻2杯またはケチャップ、カチャン・イジョー[小粒グリーンピース]または褐色の豆（クデラ[大豆]）、そしてひとりにつき石けん半分が。

またも千ギルダーが入金されなければならないとの収容所命令が再度出されました。集まらなると、ニッポンは持っている15の住所から出されるはずとしているのです。さらに、この金額が集まらなると、収容所は食糧の差止めという厳罰に処されます。また、私は間接的に知ったのですが、食糧のためにプラチナやダイヤモンドも正式に引き渡すことができるらしいです。どんな内容かは分かりませんが、腕時計と引き換えに砂糖、ヤシ油等がもらえるとベッティー・Mから聞きました。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月2日

私たちは昨晚「モツ」をもらった。これは私たちバンドンの人間には目新しいものだ。だいたい一週間に一度もらうこのごちそうを私たちはとても複雑な気持ちで受け取るのだ。というのは、私たちはその栄養を最も重要としているからだ。煮汁の上に油が浮かび、胃、肺、あらゆる種類の腸とその他に誰もわからない、どこかからなる水牛か牛の内臓全部の煮込みとなる。時には、一片の皮のときもある。また、これは常に夕刻に届き、そのあとこの家で最初にいた週の時と同じように、ほとんど暗いところで、これをすっかりきれいにしなければならない。以前の家には水がなく、10時以後になって初めて汲むことができた。疲れた労働日のあとにこれらのモツが突然割り当てられたりすると本当にため息をついてしまう。実際にはこれを煮なければいけないが、十分に洗ったあと、あえて私はたっぷりと塩をつけるのだ。

⁹¹ 再発とは、病気が完治したあとにまた病状が現われること。

子孫のために家事の報告をひとこと - このことがすべてバタバタで行われている事実からも、1942年までは、生命に及ぼす危険を恐れることなしに、このようなものを冷蔵しないで行うことは決して考えられなかったし、当時はもちろんモツのようなものは全然なかったのだ。それでも、結構大丈夫のようで、戦時中だからこそできるし、こうしなければならないようだ。カレーズでは注文することができたカエルが、皮をはいだもの6匹1ギルダーで、カレーズでは脚気⁹²の患者に処方したこともここでは知られていない。アゲートカタツムリもこの人々はまだ食べたことがないけれど、私も実のところしたことがない。収容所生活において大きな違いは、カレーズでは1943年7月にオープンパサールが閉まってしまったが、ここチデンでは1944年の4月になって初めてなくなったことだ。大きな違いとなる実情は、私の感じた限りでは、まだ分かってもないのでここに書きしるすこともできない。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月3日

メガホン：「パン。パサールで2時半から、320番から始まり全部の番号に」。このようにして食事がここでは知らされます。いずれの家もパサール券を持っていて、家によっては1枚以上持っています。第3班はすでに調理場からの食事をもらっていて、当番の者がたらいやバケツに入れて各家ごとに取りに行きます。私たちは多分2月5日月曜日から初めてこれをお願いします（私たちは第4班です）。昨日私たちはひとりにつきジャガイモ1個をもらいました。居住区全体に歓声が。皮ごと全部平らげました。リートの体重はわずか51kg、私は49kg。彼女は70kgあって私は56kgだったので、彼女の場合は一目瞭然です。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月4日

明日、調理場は私たちのために作業するようだ。それで私たちは今後料理することを許されなくなるが、言われているところではドラム缶が不足しているため、しばらくの間はお茶やコーヒーを自分たちで入れてもいいようだ。私たちはこのところたくさんの野菜、ジャガイモさえももらった。注記：ひとりにつき1個が2日続けて、それに加えウビ[サツマイモ]も。結局私たちは2日続けて十分に食べたので、アंकとマイントは夕刻腹痛がしたほどだった。

バンドンの人々に宛て6500ギルダーが提供されたと東京を經由してローマ教皇の伝え

⁹² 脚気は、ビタミンB複合体の不足により起こる欠乏症。脚気はマヒ、やつれなどの乾性疾患、また、飢餓性浮腫は湿性疾患として知られる。(Van Velden, 357)

が入った。これは、死亡者、病人、疾患証明を持つ人の数字が多大である状況に関係しているようだ。バタビアの人々から私が聞いたところでは、彼らは 11 月末に、とりわけ砂糖や衣類等に使われるようにと 4500 ギルダ―をもらったということだ。⁹³ 12 月に彼らには以前よりも少ない量の砂糖が与えられ、衣服に関しては何も行われなかった。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月5日

今日私たちは初めて調理場の食事をもらう予定となっている。今午後 5 時 15 分(ニッポン時間)、私たちの食事が仕上がったと呼び出されるのだ。私たちのグループは、番号 2 番として食事をもらい、3 番目のグループは、私たちのあとに続くから、7 時になってしまうことは確実だ。これが初めての食事である。みんな仕事し待った。1 時になると私たちの昼食が予定されている。パンの(運搬)車はすでに到着しているはずだが、まだパンは分配されていない。私たちは前からパンを貯めておいたので、時々ま一切れのパンに塩をつけて口にすることができた。私たちは、カレーズでもらった米国からの小包にあったクリーム製粉乳を取っておいた。私はパンに何かつけるものかと思いきこれを砂糖とミックスした。

奇妙な静けさが。洗濯したり、洗濯物を日に当てて漂白したり、繕ったり、縫ったりした女性たちはみんなお腹が空いてきて、時々、同じようにお腹を空かせた子供たちを食事ができるまでの時間を見に調理場へ行かせるのだ。娘アンケは、自分で料理したほうがましとため息をついた。でも時間に余裕が出た。それでも、働いて、待ち、結局何をしたらいいのか分からないのだ。というのは、私たちが火を焚くことは禁じられているからだ。私たちが自分で入れていた一杯のお茶が恋しい。状況にも慣れなければならないし、かまどは雨でずぶぬれになった。要するにみんな慣れることになるろう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月5日

くだもの 1 個も入荷しないし、今週はテンペ[発酵豆腐]もなく、お金がまだ入らないので、働く人たちと編物をする人たち用の「小トコ」もないのです。これからはお茶を入れるために家の中で火を焚いてはなりません。今日は全部の班が調理場からの食事をもらいました。…中略…

⁹³ 1944 年 11 月から 1945 年 5 月の間に、ジャワにある収容所はオランダ政府から援助金を受けた。これは、一人当たり 8 ギルダ―から 10 ギルダ―が支給される金額であった。チデン収容所は、1945 年 2 月 1 日、東京の教皇特使を介して 6 万 5950 ギルダ―を受取った。この全額は収容所内資金として振り込まれたが、残念ながらこれによる食糧事情の改善には到らなかった。「序」12 参照。

11時半にメガホン：「第4班、3時に食事を取りに来るように」。飢えでみじめな気持ちになって、私たちはみんな寝床の中にいましたが、それだけにきつとおいしく味わえるでしょう。4時半。パンとくだものがあり、ひとりにつきマンギスタン[石果]1個。明かりがまたついた（3日間暗闇の中にいた）けれど、食事は未だに来ません。調理場で働く女性たちは気の毒です。…中略…

5時半になってやっと私たちの今日の最初の食事が届きましたが、少なくともお腹を空かして寝入る必要はないのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月6日

一日中、またまた食事を待っています。もう3時半です。

1. 病気の子供にさえもうミルクが支給されない。自己負担の石けん、ココヤシ、アセム[タマリンドの実]、テンペ[発酵豆腐]の入荷が今後許されなくなった。もう、何もない。
2. ブランタス通り（赤痢病棟のある通り）は、バナナをもうもらえない。
3. 10日に1回ニッポン発送品が届くと、これは重病人と2歳以下の子供たち向けだ。
4. 病院は今後湯沸し用のアラン[木炭]をもらえない。
5. 正門からパサールまでの荷物の運搬に、8名ニッポンから指名される。
6. 食事を取りに行く時は、おけに水をいっぱい入れて持って行かねばならない（当番の時には、夜貯めた各自の水を持って行かなければならないことになる。なぜなら、そうしないと蛇口の水は少しきり流れないからだ。
7. 明日からふたつの調理場は次のように作業する。チラマヤ調理場はサユール[野菜]、バタンハリ調理場はご飯。
8. モツは、下準備されたあと輪番システムで分配される。
9. 掲示板の通告を定期的を読むこと。
10. パサール券でなく、食券と呼ばれる。
11. 医局は小トコの売れ残りを配給する予定だ。
12. 調理番はテンコ（クンプレン）[点呼]を免除されるが、クミチョー(組長)に届出しなければならない。
13. 食糧の分配は、週ごとに輪番で交代される。
14. メガホンを注意深く聴くこと。ふざけて呼び出しする子供は罰せられる。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月7日

日本軍用に編んだ初めてのソックス 1 足に対して半分腐ったバナナを 6 本もらいました。それを私たちはおいしく食べました。そして皮は一晩少しの塩に浸して、できたものを明日私たちはパンの上のせて食べます。何粒かの砂糖をその上にまぶして、まるでお祭りのよう。万歳、私たちは再びお湯を沸かすことを許されたのです。もう 1 時間も煙の中に座っています。なぜならば、私たちにはもうアラン[木炭]がないのです。しかし、垣根の乾いた小枝でも良好です。私たちは小さな(干した)塩魚であるイカン・テリをもらいました。おいしい。これを使ってリートがパンにのせるおいしいものをまた作っています。想像力を少しきかせばまるでアンチョビーパイです。各自に茶さじ 1 杯。みんなのパンにちょうど間に合います。お米を少し取っておき(今日私たちは 90 グラムもらった)、これと浸したパンでリートは明朝用に粥を作ります。砂糖なしですが、きっと私たちはこれをおいしく楽しむにちがいありません。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月8日

いかにすべてが食べ物中心に動いていても、まず最初の 1 行に事実として明らかとなったこと、つまり夕刻は 7 時近くを回っていること、また、私たちは今日まだ調理場からの食事を受けなければならぬことを言いたい。これが 3 日目だ。昨日は一部が 2 時にもらい、グラス[精米]は 4 時になって。アंकとメイントは調理場のかまどから石炭を持ってきたので、その後は順調に進んだ。今日の昼食に、私たちはパンとあまりペディス[辛い]でない大きなピーマン形のロンボック[唐辛子]を食べた。というわけで、私たちは 1 日分の給食を 1 度にもらうことになった。つまり、私たち半人分のパンは、幸いにも毎日入るし、私たちは本当に今は飢えと食べ物でノイローゼになった状態にある。でも、このタイル 14 枚ないし 11 枚の狭いグダン[物置]でも、調理場のおかげで、また、これら 54 人の同居人との良い人間関係と秩序のおかげで、私は安らぎといくらかの楽しみを抱くようになり、私たちが健康であることを幸いに思っている。私たちはやせこけてしまったが、何とかのりきることができるのだ... …中略…

調理場は始まったばかりでまだトラブルが生じている。私たちはみんなこれを立派な試みと感じているが、結局私たちが再び自分たちでお米を炊いたほうがましではと思うのである。この休止期(私たちは水をバケツに何杯も自分たちで補給し、⁹⁴ 私たちの分担家事、私は前庭を 2 度も掃いたが、をつとめなければならないが)を私は衣服を作ったり、修繕したりして利用している。

⁹⁴ 調理場に食事を受け取りに行く者は、おけに水を入れて持って行かなければならなかった。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月11日

日曜日の朝、リートの娘アネケが部屋の雑巾がけをし、娘アンネが発酵させるサクランボを採っています。男の子たちは工作をし、リートは2、3個の石炭で何かを醸造する計画を練っています。多分、これはロウで揚げたサンドイッチパンになるかも。私たちの飲むコーヒーは何と薄いこと。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月13日

私たちは時々煎ったカチャン・カデリ[大豆]をもらい、挽いてご飯やパンの上に乗せるとおいしい。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月19日

私たちは一日中食べ物のことを話し、...一日中食事を取りに行き、一日中食べています... それなのに一日中飢えています。ひどく小さなパンをできるだけ薄く切ります。ミミ猫でさえこれに腹を立てています。調理場でいつもゴミをもらおうとしているヤン・オルファートが何も持ち帰らなかったため、この猫は怒って逃げ出しました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月20日

11 時。まだパンが来ないし、パサールもなし。そこで私たちは一杯の薄いお茶を飲みました。でもとても温まります。近頃、私たちのからだがかんかなか温まりません。12 時頃になって初めて和らぎます。この気候が救いとなりましょう。食事のあと、この頃はお皿までなめるのです。リートと私がお手本を示します。なめまわしたあと、みんな同時にお皿に目を凝らしている姿は滑稽です。…中略… テラスでリートの上履きからカチカチという音がすると、私にとってこれは大抵おいしい一杯のお茶、または本当にまれですが熱い一杯のコーヒー（ほとんど砂糖なしで、ミルクなんて絶対にない）を意味します。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月21日

夜、ベッドの中で（現在は日中の大部分も）、そしてメガホンを聴いて、食事が他の班に向けたものと知った時の子供たちの残念そうな様子が非常に強烈です。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月25日

食べ物は今も相変わらずふたつの調理場から出され、わずかな献立で、未だに約2時間おきに、例えば、ご飯だけ（チラマヤ調理場）、野菜（チラマヤ調理場）、クデラ[大豆]料理、テンペ[発酵豆腐]が不意に届くのだ。このことは、ある種のおかずの分配が予定と異なり収容所の半分きり配れなかった場合に起こる。今日のような豪雨の時は、まず初めにかまどをきれいにしなければならぬ。また、野菜が全然入らなかった時は、ご飯だけとサンテン[ココナッツミルク]粥となる。結局ここで明らかにしたいのは、食事の受取り番の時には、いつでもその役目を果たす態勢を整えていることだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月27日

もう4日もカチャン・クデラ[大豆]がなく、非常に少ないご飯だけで、おかずは何もなし。リートは弱ってよく横になっていますが、そうしないともう耐えられないのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月28日

私たちは再び飢えにあえいでいます。野菜なし、くだものなし、何も入荷しませんでした。ついさっき引越したあわれな人たちよ。⁹⁵ 5時半。どう言ったら分からないほどの頭痛。今までになかったほどひどい飢え。

⁹⁵ 当日には、収容所の一部の人はただちに立ち退かなければならなかった。そこに住んでいた人たちは他の場所に詰めこまれた。「移送と収容」参照。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月3日

調理場用の薪がありません。もう3日にわたって、椅子や戸棚などが燃やされています。お米は自分たちで炊かなければなりません。ありがたい。その方がもっとおいしくできます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月4日

今朝、ロウで揚げたアゲートカタツムリをおいしく食べました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月6日

調理場用の薪が入りました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月8日

私たちの食事がまたも夕方に届きました。8時になって食べて、誰も点呼の際に立ち続けることができませんでした。リートと私は順番で、飢えをしのぐために子供たちに本を読んで聴かせています。でも、向うから聞こえてくるメガホンの音にびっくりしてしまいます。子供たちは、第三班と呼び出しがかかったのに、2度も四と聞き間違えました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月10日

お米は70グラムに減らされ、15グラムのクデラ[大豆]も合わせてもらいました。砂糖は、もらえればですが、1日につき12グラム。これは順に80グラム、20グラム、12グラムでした。つまり、さらに飢えることになります。くだものはほとんど何も入荷しません。少量の青汁とともにこれが私たちの主食です。パンの上には、まだ十分ある塩を少しだけおせて食べます。多分、この気候が私たちを生き続けさせてくれるのでしょう。今はもう、私たちはウールの衣類を全部

引っ張り出して着るくらいです。子供たちは、暖かいトレーニングウェアを着て半日過ごしています。あとどれくらいこんな状態に耐えられるでしょうか。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月12日

現在も私たちのところには、少量ですが水があります。太陽で入れた！お茶を、ときたま薄いコーヒーも飲んでいきます。幾人かは見分けがつかないほどやせています。私はそれと反対にまた「むくみ」始めています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月15日

チャルダ・ファン・スタルケンボルフ夫人は将官とともに車でタンジョンプリオクへ行きました。赤十字社救援品の受取りに署名！⁹⁶ いつ私たちはこれをもらえるのでしょうか。そして、今回はどの程度彼らが横取りしてしまうのでしょうか。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月20日

その間に、今日の食事が届きました。スープです。リートが期待のほどを見に行きました。ことによると、先に始めてもいいかしら。お腹がとても空いているのです。…中略…

3時。やっとパンが届いたのですぐに食べてしまいました。今日の食事也非常に少ないです。一皿の薄いスープと極薄のタピオカの「一切れ」つきサンドイッチ、塩と水少々。

⁹⁶ チャルダ・ファン・スタルケンボルフ夫人は、事実 1945 年 3 月 15 日にチデンからタンジョンプリオク港へ出向かされ、日本軍により彼女は救援品のジャワ到着を証明し、署名させられた。チデン及びジャワのその他の収容所では、この救援品の一部は 1945 年 5 月になって初めて配給された。日本軍は、当初、この貨物を分配するつもりがないこと発表した。というのは、安全通行を保証されて航行する「阿波丸」がこの貨物の積み下ろし後、帰路を航海中に米軍の潜水艦に沈撃されてしまったからである。(Van Velden、178-180 参照)

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月27日

二、三日、私たちはパンをもらえなくなるようです。二、三日？

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月28日

ひとり 200 グラムの粉をお粥にしたものをもらえるらしいです。80 グラムのお米も。英国からお金が届きました。⁹⁷ そこで英国人は、自分たちだけでこれを受けるか、それとも私たちと一緒に分けるか決めなければなりませんでした。うれしいことに、彼らは後者を言いました。…中略…

食糧の実体は現在、お米 80 グラム、砂糖 15 グラム、クデラ[大豆]20 グラム、パンに代わりお粥です。とても残念なのは、お茶とコーヒーがないこと。アネケはアセム[タマリンドの実]証明書を持っているので、1日に1回はお湯があります。その残りで、リートはまだ少しあるお茶を薄く入れます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月29日

メガホン：「重作業班は正門まで」。医師が全員また呼び出されました。数日前から医師たちは、1日に100グラムの肉をもらいます。なぜならば、多くが仕事を十分に果たすことができないためです。彼らは昼も夜も動きどうしなのです。重作業班はバナナ、そしてお粥の特配を受けますが、病人には、くだものはありません。私たちの食事は、おそろしく少なくて悪質です。結局は、強い者だけがここで生き残れるのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月30日

調理場でトラブルが。粉が一度に入荷しました。昨晩は、保存されていたものから取ったお米、

⁹⁷ 1945年3月28日にチデンの英国人女性を対象に援助金が届いた。この援助金は、バチカンを介して東京へ送金された1万英国ポンドの一部とおもわれる。(Van Velden、161)

つまりは補完を必要とするお米 40 グラムでのお粥でした。今晚はこれと同じ分量もらいましたが、2 食分に当てがわなければなりませんでした（要するに単純そのもの）。再び飢えはかつてないほどにひどいです。昼食を少し残しておいたので、私たちは良く眠れるよう、寝る前に何か食べておくことができます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月31日

私たちのお昼ご飯は、ほんのわずかの米粒が浮いているタピオカ粥でした。これを見るといつも壁紙の糊をおもいます。また、今回は野菜も少し入っていて、話しでは、モツのブイヨンらしいです。いずれにしても、私たちは 30 分は「満腹」感を持つのです。…中略…

今日はお粥を 2 度取りに行かされました。昨日よりお腹はあまり空いていません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月1日

ミミ猫がもういなくなってほっとしました。⁹⁸ 猫は全部食い尽くされ、カタツムリ、カエルも。ネズミにだけは彼らはまだ手をつけていません。残念です。なぜならば、それがはびこっているからです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月3日

今日のお昼ご飯はまさにディナーでした。ご飯、野菜、チャベ[唐辛子]。アンネされもおいしく食べていました。カンクン（群生する雑草）[青野菜]はとてもありがたい。というのは、茎も一緒に煮であるので一口ごとに歯ごたえがあるからです。今回は、少し遅くなって飢えに悩ませるだろうことが分かっているだけにおいしく味わいました。

⁹⁸ ミミ猫は、1945年2月19日から3月3日までの間に毒をもらったネズミを食べて死亡した。この猫は庭に埋められた。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月6日

メガホン：「169番から177番までは、粥の特配を取りに来るように」、(私たちです!)。確かに酸っぱいお粥ですがどうでもいいです。メガホン：「1クミ[組]の重作業班はパサールまで来るように」。木材が入荷したのです。戸棚やピアノなどいろいろな家具が燃やされて2日間繰り返し料理されました。水圧が足りないために水不足。私たちの家には使える蛇口がひとつきりないので、夜中にバケツとたらいに水を貯めます。

ボルハイス - スキルストラ

1945年4月8日

順番に身体検査され、収容所内を特にお金、それも銀貨を対象に家宅捜査された3月1日のクンプル[点呼]の時から私は日記を書かなかった。すべてのことにオランダ通貨は貴重であり、日本のお金は無価値なことが分かる。カレーズ収容所ではすでにオランダの1ギルダーが日本の7倍の価値だった。1リットルのミルクが外では1ギルダーし、ニワトリ1羽が12ギルダーすることを知った。緊急に、私たちのお金を共同資金のために出すことが要求されている。そうすれば、私たちには再びもっと多くの食糧が与えられるらしい。

80グラムもらっていたお米が60グラムに減らされた。クデラ[大豆]、砂糖、塩、チャベ[唐辛子]は、3日に1度。クデラはありがたいものであるが、私たちがもらった時には腐っていた。日光の中でふやかしてそのまま食べるか、塩、パラ[ナツメグ]、チャベを挽いたり、トゥンブック[すりつぶす]やブブック[粉]にしたものを食べている。さらに今月と先月の終わりの週にはオーブンが壊れたためにパンがなかった。3週間もお粥、いわゆる糊だが、それでも定刻に届けばおいしいのだ。夕飯は朝食と同量で一人あたり半リットルだ。これを発酵させたものはおいしくて、ライ麦粉と同じようにとても温む。しかし、居住区では多くが胃腸障害(同様)にある。…中略…

私はアンケに馴染ませるためにも、生のカンクン[青野菜]を食べている。生のアメリカ・バジャム[ホウレンソウ]は私の好物だ。自炊することは禁じられている。私はこの禁止行為を現在(まだ2度目だが)週に1度している。なぜならば、私には“今”補助食が必要なからだ。これは1週間に100グラムほどだが、7月まで続けられることを願っている。菜園で一生懸命働いて、私はリーダーであるB夫人から一食分の野菜を得ることができる。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月12日

お粥によりはっきりと飢えが減りました。しかしながら、お粥はお腹にあまり合わないし、浮腫も増えるために、私たちにはパンがとても必要なのです。…中略…

今日トコの受取り当番であるリートは、ここの住人全員のために真剣な顔つきで木材を計るために手紙用はかりにとりかかっています。彼女のまわりに集められたおなべやフライパンがベットの上に置いてあります。落ち着いて、しかも確信して彼女はこれに携わっています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月13日

さらに、あわただしい歓声が。でもどうしてか？パンが「入荷」しましたが、これは再び飢えが増すことを意味します。⁹⁹しかし、のどの渴きの方がもっとつらいとおもいます。私たちは今、困窮期を迎えることになり、この先何ヶ月かを他の 1800 人の人々とともに苦しまねばならないとおもうと恐ろしくなります。…中略…すでに何週間も、くだもの、野菜やチャベ[唐辛子]が入りません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月15日

夕方家で遅くなって、パパイヤと呼び出しがかかりました。私たちの番号となり、その少ない分け前をおいしく食べました。メガホン - いつもの決り文句：「薪が切れた。全員、木材であるなら何でも調理場に出すこと」。「全員何かして手助けせよ」とのスローガンのもとアネケに竹を1本持って行かせました。ボタンハリ調理場のかまどが今になって壊れました。「木材と水をたくさん持って来い。…中略… さもなければ、調理はされない」。私たちはまたまたかなり遅くなって食事をもらうことになるでしょう。

⁹⁹ パンよりもお腹を満たした粥に代わってパンが入荷したため、飢えが増すことになる。

ベルフ

1945年4月21日

私たちは、1日に80グラムのお米（これは65グラムだった）、と水生の野菜（葉っぱというより茎ばかり）とチャベ[唐辛子]少々、そして1日にパン6センチ、砂糖15グラム、塩と煎ったケデラ[大豆]少量で暮らしている。これだけだ。くだものなし、テンペ[発酵豆腐]なし。ああ、そうだ、10日（時にはもっと長くかかるが）に1度はモツ入りの小さなパイが。みんなお腹を空かしている。私たち、重作業班とその他働いている者は、「給料」をもらっている。つまり、紙切れに金額が書いてあってそれでもってトコで買い物できるのだ。正式には、10日に1回支払われるのだが、多くの場合もっと長くかかる。私の最後の給料は55セントだった。それでグラ・ジャワ[シュロ糖]を30セント分とカチャン・トゥンガ[大粒の大豆]100グラムを23セントで買った。また、非常にまれだが、小さいパンの特配をもらう。でもこれを7人で分けるのだ。病院で私は一度1,10ギルダー、時には1,09ギルダーかせいたことがある。すごい大金だった。そして、グラ・ジャワのかけらや砂糖に対する家族の喜びといたら。私たちはまだ砂糖の予備（栓付きの小ビン1本）があるので幸いだ。そして少しあるインゲン豆を、お母さんは、これがあまりに古いのでやわらかく煮るために最初に粉にして、2、3日間隔で石油コンロで（こっそりと、なぜなら料理は禁止されているから）調理している。でもほとんど蓄えがなくなった。そしたら私たちはニッポンからのものが少しあるだけだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月29日

多くの女性が胸当てを着けていますが、その痩せこけて衰えた裸体を強調することは.... まったく下品で必要もないのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月30日

私たちの食券の番号は297番である。今日は1人分2個のジャガイモ、テンペ[発酵豆腐]のパイと多分くだものも再びもらえます。このくだもの過剰状態はもう3日も続いています。ことによると、ユリアナ王女殿下の誕生日のためか.... それともテンノー・ヘイカか。¹⁰⁰ 私たちの気分はまずまずだし、重労働のあとにはさっぱりします。

¹⁰⁰ 4月29日は、裕仁天皇の誕生日を祝う天長節であった。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月1日

1 時半。再び飢えに苦しみます。何もない。パサールも、パンも。ベッシー・K（私たちのクミ長[組長]は、米国と英国の赤十字が本当に来ると話しました。¹⁰¹ 「手にしなければ」とリートは思慮深い顔つきで言いました。

3 時。パンが届きました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月2日

今度の家の部屋は、快調に整い、私たちは砂糖を少しつけたパンでこのひとときを満喫するので。…中略… 小包がもらえるらしいです。5 人に 1 個だから、きっとびっくりもさせられるでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月4日

パン粥にレーズンを入れて朝食をとり、クンプレン[点呼]のあとにはチーズをつけたパン 1 枚！信じられません。ミルク入りコーヒーです。いろいろな缶詰があり、タバコも…まるでパーティーです。また、ニッポンは、くだもの、テンペ[発酵豆腐]、そして今日はインゲン豆ですら私たちにたっぷり詰め込むのです。みんなうれしそう。無駄使いしなければ、私たちはあと 2 週間は飢えることにならないでしょう。やっとぐっすり眠れます。砂糖をもらった 2 個の小さな缶入りの紅茶やコーヒーに入れます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月5日

受取り当番のリートを塀の上に座って待つ。今日はまた、くだものをもらいました。夜中の 2 時まで水を貯めました。終わったあとは、私の相手をしていたリートと一緒に床の上に座って一杯のコーヒーを飲みました。私たちはこのぜいたくさが信じられないのです。

この家に住む 3 歳の子供が昨夜死亡しました。この赤十字の小包は全員にとって救いとなったの

¹⁰¹ 脚注 96 参照。

です。残念ながら、多くの人々にとっては遅すぎたことでもありました。

ブールマ

1945年5月7日

うれしいことに、今はくだものをたくさんもらえる。毎日パパイヤ、バナナ、ジェルック[柑橘類]、ケセメック[柿]などを。さらに私たちは、テンペ[発酵豆腐]、ウビ[サツマイモ]、またはシンコン[キャッサバ]を毎日もらう。まったくすばらしい。おまけに、アメリカと南アフリカから缶詰が入った小包ももらった。アメリカの小包は1個が5人分だったので、私たちはディディおばさん、彼女の姪3人と一緒にひとつの小包とその他のものをもらった。南アフリカの小包は一部が腐っていたので缶で配られた。彼らの話では、今度私たちは10日もするとスイスとカナダからの小包をもらえるということだ。…中略… 医師たちは、この状況なら6週間もすれば収容所から脚気がなくなるであろう言った。まったく、これは必要であった。というのは、私たちはご飯、カンクン[青野菜]、パン、砂糖、塩、そして2、3週間ごとに1度モツをもらっていただけだからだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月16日

食糧は良好であり、週に何回かテンペ[発酵豆腐]のような形でタンパク質をだんだんもらっていけるようだし、ウビ[サツマイモ]とシンコン[キャッサバ]ももらえるということです。とにかく見ないうちはとリートは言います。…中略… 明日はひとり100グラムのグラ・ジャワ[シュロ糖]をもらいます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月19日

今日は調理場ではまた戸棚やその種の木材で火が焚かれました。私たちはインゲン豆とタマネギを少しもらいました。貯めておいた「フォドシーズ」(タバコの吸殻)をリートと私は、アフターディナーに吸いました。

ベルフ

1945年5月22日

この前、4月21日に食事について書いたけれど、その時私はどん底をちょうど脱したことがわからなかった。というのは、そのすぐあとに状況はゆっくりだが確かに改善しはじめた。まったくはっきりしない理由で、ニッポン側から何の通告もなく、私たちは初めにくだものの洪水を受けた。戦争前ですら食べたことないほどたくさんだ。配給のグラ・ジャワ[シュロ糖]が少し入って、1日おきにテンペ[発酵豆腐]をもらった。今私たちはインゲン豆療法の最中で、1日おきにご飯と一緒に大さじ何杯かのインゲン豆を食べる。おいしい。また、ウビ、シンコン[キャッサバ]、1日に約100グラムのお米、そして時々パサールからブンブ[スパイス]を少しもらう。一体だれがこれ全部を払うのかなぞだ。というのは、これらの補充食には大金がかかるだろうし、去年私たちが引き渡したお金は、もうあまり残っていないはずだからだ。

ニッポンのお金はあまり価値がない。ソネイは、ひっきりなしにオランダのお金（居住区内にはまだあるのだ）を要求しておびやかす。そのため家宅捜査、処罰、立ち退きなどですでにいろんな事件が起こったのだ。輸送が到着すると、必ずトランクの中にあるオランダのお金がすっかり捜され、ワン・ニッポン[日本のお金]には、“目”も向けない。しかし、私たちがニッポンからもらった（ご飯と一緒に1日につき15グラムの砂糖、そして私たちの好物のパイプ草、¹⁰² ケデラ[大豆]はもうもらえないから）モツは、3週間から4週間に1度このパイを調理場からもらうくらいでありあまり入らない。また、肉にはまったくお目にかかったことがない。さあ、今日はどんなおかずをもらえるか当ててごらんなさい。3人につき卵が1個。でも私はそんなに気にしないが、ただ砂糖がものすごく欲しい。砂糖、もっともっと砂糖を。グラ・ジャワ[シュロ糖]の代わりなら卵の私の分け前を喜んであげるわ。

また、私たちが5月2日にもらった米国赤十字社の小包のぜいたくさ。去年の5月にも、救援品をもらったが、その時は今ほどあまり必要でなかった。今回はまるでお祭りのようだった。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月24日

3時半。30分以内に、赤十字社小包の（空き）缶をすべて出さなければなりません。多数がすでにコップとして使われていました。…中略…

食事は再び少なくなりましたが、昨日は3人につき卵を1個もらいました。卵1個です。知らせを聞いて、通りはどこも歓声があがりました。お腹を空した幼い動物のように、子供

¹⁰² 茎と葉が食用になった水生植物のカンクンをいう。

私たちはこの住人用におよそ 40 個の卵が入ったバスケットをながめていました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月28日

またひどく飢えに苦しんでいます。神様、戦争が終わったら、私たちは何と思う存分食べるでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月31日

塩少々で発酵させたバナナの皮が、再びごちそうとなっています。私たちは再び飢えで気分が悪くて、一度座るともう立つことができません。このことが頭の中でいっぱいになり、いつも食べることができるように何かを考え続けるのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月2日

少しすりつぶしたシナモンをつけたパンは珍味です。今日も砂糖がありません。もう長いことありません。待つだけです。どうせ何も変わりはないのですから。

ゲデック[竹で編んだ柵]が、通りすぎるのがほとんどできなかったトイレ用溝のすぐ横に取り付けられました。そう、ソネイはよく分かっています。調理場からおけにご飯を入れて近くを歩いていると、溝のそばでいたるところの垣根のそばにいる子供たちを目にすると... 歩くことが全然できなくなった末、中を見ようと切望する飢えた子供たちが。そのあとは、もう怒ることはないのです。すべてが理解し得ることなのです。今日は多いか少ないかを彼らは知りたがりです。自分たちの番号が呼び出された時から 1 時間以上たって食事を持って家に着いた時まで、彼らは興味深々に立って待っています。たびたび母親の命令で。そんな時、あとどれだけかと自問してしまいます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月10日

食べ物は少し増えましたが、あまり感情的ではありません。そんな日々を合計すると、何により生きているのか想像もつきません。多分、この暖かい気候が救いとなっているのかも。私たちがここでも寒さに悩まされているのに、オランダにいる皆は一体どうだったのでしょうか。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月11日

4時。ベッドに横たわり、食べ物のことを思っています。以前に食べなかったすべてのものを残念に思います。アンネはまた眠っています。実のところ、ほかの人たちもほとんど一日中こうしています。彼らは行儀が悪いというわけでは全くありません。飢えで気が狂ったようになる人も何人かいます。子供たちはパンを盗み、母親は夜中にトコに押し入り、調理場の職員が窃盗のためにまたも解雇されたりしています。人々は食前よりも食後にもっと飢えを感じるのです。多くの者がほとんど何も食べられません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月15日

重作業班の少女たちが、1100 個の米袋を搬入しました。もっと来るらしい。彼らは貯蔵でもするつもりなのでしょうか。今日はまた野菜がなかったし、ご飯と少しばかりのウビ[サツマイモ]のパイと（カチャン・イジョー[小粒グリーンピース]の）モヤシを少々もらいました。しかし、私たちは、グラ・ジャワ[シュロ糖]をひとり 100 グラムもらいましたが、もう全部食べてしまいました。また、私はいろいろなことをしているけれど、それだけに飢えは増していきます。リートはもう何もできません。それで今はうれしいことに少し横になっていてくれます。…中略…

しかし、ヤッペンをよく知っているのです。彼らはこのようにして私たちを自制させているのです。医師たちが再び何週間にもわたって話合いをしたあとには、私たちは時たま少しは多目の食事をもらうことがあります。しかしそのあとは再びクンプル[点呼]刑や大規模な家宅捜査と引越があつて、回復した精力をまた失ってしまいます。ああ、すべてが手引書通りに行われています。彼らは知恵をしぼって綿密に考え出し、また、どの程度まで行うかを的確に知っているのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月19日

調理法を書き写すことに夢中になる「レシニコピー症」が収容所で流行していて、紙の上で盛んに味見がされています。飢えが結局は強迫観念となります。多くの者が、何もほかのことを話したり考えたりできません。

ブールマ

1945年6月25日

私たちはみんなひどい飢えに悩まされ、しばしばご飯とお肉と肉汁サンバル・バジャック[炒めたサンバル]、チャーハン、やきそば、レンパル[もち米の肉入りロール]、クタン[もち米]、厚いバターつきパンとチーズ、魚、ハム、ベーコン、ソーセージ、ピーナッツバター等々におもいをめぐらすのだ。まあ、今またお腹が空いてきた。私たちは、いとこヨップの誕生日を祝って缶入りのコンビーフを今ちょうど食べたところなのに。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月25日

もう一週間も野菜がありません。できるだけおいしく調味したモヤシのサユール[野菜料理]が少しあるだけです。胃腸障害の患者ですら、消化できないというのにこれを食べています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月29日

朝の点呼の際、居住区全体に対しグラ・ジャワ[シュロ糖]が入ったと告げられました。どのくらい？そして、いつもらえるのかしら。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月1日

幼い子供たちはみんなグラ・ジャワ[シュロ糖]の塊をしゃぶっています。私たちはひとりにつき

100 グラムもらいました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月2日

パンが入荷しませんでした。ことによると、夕方になって届くかもしれません。また飢えの一日、なぜならば、私たちのご飯の順番が遅いからです。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月7日

初めてひどい風邪を引いた。11 センチのパン（重さにしたら 250 グラム）の代わりにこの 5 日間にわたってもらっているでんぷん糊の粥¹⁰³ は、夜中に 8 回も私たちのトイレかオガンフェルトのトイレに出向かなければならなくなる。唯一の現象は、今日、私は受取り当番なのでベッド・テーブル・枕元で安らごうとすると、結局は、再び何かを書き始めることである。

1 日につき 15 グラムの白 (!) 砂糖で私の頭がいかにくらつことか。私たちは今度、お粥にそえてグラ・ジャワ[シュロ糖]をひとりにつき 100 グラムもらった。私たちはどんなことにも合わせてやっているが、糊はどうもいただけない。私たちの体重はまた減っていくだろうし、パンが入るのを見ればきっと大歓声をあげる。ご飯の給食は各人 97 グラムだ。飢餓性浮腫の患者数が上昇し、今後も上昇を続けるだろう。…中略…

食糧事情はほんの少し良くなった。主食は不足し続け、私は生のカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]を食べて飢えをしのいでいる。アンケですら同様。私たちはふたりとも良く機能する消化器官を持っているので幸いだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月15日

再び、モツのパイ（1 人分小さじ 1 杯）が定期的に入ります。モヤシ以外、野菜が相変わらずありません。時折くだものはありますが、1 度だけココヤシ（5 人につき 1 個）をもらいました。時々、お茶を入れるお湯がもらえます。お米は再び減りました。

¹⁰³ 被抑留者に与えられた粥は、タピオカ製造工程で得られる副産物であるアチが含まれていた。アチは、でんぷん糊の一種で、安価の木綿地の張りを強めるために使用される。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月19日

新たに、お粥の期間が開始されましたが、糊ではなく、最初の頃のもので、ある程度苦くて、不透明なものです。子供たちには食べられません。この飢えでやっかいなことは、多くの人たちは何であつても食事を出されればすぐに食べてしまいます。一方、食べたい時にまた食べる人も。そして、私たちは決まった時間に食べるグループに属します。それでも、一日中食べている人々を目にすることになり、たびたび飢えを新たに思い出すのです。一番面倒なのは、子供たちの気分をできるだけだそらすことです。そのため、私たちは、できるだけ多く自分たちの小部屋に身を引いて生活しています。午前中子供たちは働き、午後はゆっくり休み、ほとんど毎日30分間、私たちが順番で本を読んであげていますが、彼らも読書をたくさんしています。しかし、遠くからメガホンの音がするといつも食事かどうかを聞き入り、結局また食事を気にして、そのあとこの部屋の中にも緊張して待っているのです。

昨日と今日は、居住区全体にミートパイが出ました。もう半年もなかったことで、そのため母親でさえみんな緊張して待つのです。そして、押し合いしながら分配係りの回りで切望してやまず、公平に分けられるか注意深く見ているのです。今日、私たちは煮汁がかかった少量の野菜をもらいました。…中略…私がここに書いたことをあとですべて作ることができたら、どんなにかおいしく食べれることでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月24日

メガホン：「バタンハリ調理場に丸パンを取りに来るように」。医師たちの助言でお粥の代わりにこれが作られたのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月25日

幸いにも、私たちは初めに「丸パン」を受取る順番でした。居住区の大部分が、現在（1時）まだ朝食をもらっていません。彼らは、私たち全員をできるだけ早く埋葬したいのだろうか。死亡数が恐ろしく増加していますが、果たして救いは間に合うだろうか。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月27日

今度自分たちでパンを焼かなければなりません。そのため私たちは再び火を焚くことを許されましたが、薪をもらえません。ドラム缶は木材の火で調理したためつぶれてしまったのです。118人いるこの家にアングロ[卓上コンロ]が3台返されましたが、私たちは単に地面の上に石を置いてやっています。残っているテーブル、椅子、物干し台をそのためにばらばらにしています。これがあまり長く続かないことを望むばかりです。大仕事だから。私たちはこれを干しブドウ入りプディングと同じやり方でやっています。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月28日

私が病気になる直前にパンなしの日が5日間続いた。そして、入院している間に再びお粥の命令が出された。今は、2日前から朝食と夕食を自分たちで作ることが許されている。少量のアラン[木炭]が90人分として2束支給された。この労力は女性にとって多すぎる。1軒ごとに喧嘩や緊張した関係が生じている。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月29日

小麦粉が入りませんでした。4時にこれが来なければ、私たちはお米をもらうことになります。丸パンはことのほかおいしかったです。私たちは今日、お茶に砂糖を入れて飲みました。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月30日

ひどい風邪を引いてしまった。できるだけ休んでいる。幸いにも丸パン焼きはもう終わった。今日はまた初めてパン、苦いデデエ[ふすま]のパンだが、これは全然私たちの労力を必要としない。改善、つまりは食糧の増加について様々なうわさが広まっている。週にテンペ[発酵豆腐]4回、3人につきココヤシ1個、パパイヤ2個？まずは、様子を見よう。私たちは昨日、砂糖を45グラムに代わって60グラム本当にもらったのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月30日

パンが入りました。居住区全体に大きな歓声が。私が借りているトランクの中に、コシヨウ粒があるのをアンネを見つけました。それを細かくつぶして塩と一緒にパンにつけて今食べています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月1日

3人につきココヤシを1個、また、サウオ[果実]をもらったので、私は再びその皮を発酵させています。数個のタマネギももらいました。このあとは、まさに祝宴のごちそうとなろう。

ボルハイス - ライスダイク

1945年8月5日

私たちは、目新しいものであるオンチョム[豆腐料理]とタオチョ[発酵させた大豆]をもらった。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月10日

食事は驚くほど少ないけれど多少は良くなっています。しかしながら、飢えはこれで減るというよりむしろ悪化するほどです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月11日

アネケが病院勤務による給料から買ったもの：

白タマネギ 1 個	8 セント
赤タマネギ 25 グラム	15 セント
タバコ 1 箱	8 セント
葉巻 (父親用) 1 本	4 セント
ホップの実 1 個	6 セント

ケーキ1個	7.5 セント
チャベ[唐辛子]2個	4 セント

合計 52.5 セント

予測では、このことが10日に1度できそうです。私たちはみんなでこれをおいしく食べ、時々タバコを1本吸うことされできます。昨日は大豆の副産物であるタオチョ[発酵させた大豆]のパイをもらいました。パンにのせるとおいしいし、マディラワインの味がします。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月16日

パンなし。その代わりに200グラムのお米。自分で炊くのです。全部食べれるか気になります。彼らは、私たちが輸送用に飼育するつもりなのでしょうか。

ブルマ

1945年8月16日

短くなったエンピツで書いているので、少しぞんさいな書き方をしている。でも、きょうは「かなり良いこと」がたくさん起こった。ニッポン用のニットの靴下（少しかせぐため靴下をみんなが編んでいる：=30セント）を渡さなければならなかった。というのは、「大本営」がもう必要ないと言ったのだ。すでに靴下があまるほどあった。私たちはこれからパンをもらえなくて、3度の食事は、毎回100グラムのご飯だ。1度は調理場が野菜と一緒に炊き、他の2度の食事は自炊が許された。自己負担での外注は倍になった。7月の初めにこのことの嘆願がされたけど、今になって許可されたのだ。

ボルハイス - スキルストラ

1945年8月17日

異常な日。ひとつは、編物管理部が昨日すべてのソックスを要求した。夕方に私は宝石やそのたぐいのものを11時までに売ることができると聞いた。そして、今朝は掲示板に、要は、私たちおとなと11歳以上の子供には、1人あたり1日に400（390）グラムのお米が現物で支給されると書いてあった。10歳以下の子供は300（290）グラムと。今日だけは私たちの主食は、お米調理場からもらえるが、明日からは、自分たちで3度の食事を作らなければならず、そのためパンがもらえない。それでも私たちは1人1日に30グラムの砂糖をもらえるらしい。私たちはみんな気が狂った。悲観的な見方をする人がいるにしても、飢餓期はもう終わってもいいはずだ。私

たちが収容所としてすべてのものを注文できるし、食糧倍増の嘆願書が受け入れられたらいい。これらのことは何を意味しているのか？ 私たちにとって良いことにちがいない。今週はこの家から「飢え」で2名死亡者が出た。その人たちにとっては遅すぎた。この規則は5日間である。昨日と今日は、私が保存しておいたパンとブラス[精米]を使って飢えをしのいだ。お互いに考えた末も、私は、今も若干の予備食をとっておくことに賛成だ。アンケと私は補って食べていかれる。イカン・テリ[塩干しの小魚]と卵についてささやかれている。要するに、すべてに終末が近いことが分かり、大勢の女性たちがもう長くは耐えられないために恐れているだけに、これが偽りの幻想でないことを心から望むばかりだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月17日

注目！ うまく行っています。まったくすばらしい。バタンハリ調理場が停止（暫定的に5日間）されました。11歳以下の子供は、お米を1日に300グラム、おとなは400グラムもらいます。…中略…

みんなうれしそうです。お米が本当に分配されました。私たちにはこれを平らげることができません。お腹がいっぱいなのです。ぶくぶくになりそうです。なぜならば、野菜とくだものがありません。まだ入らない？ 私は疲労を回復し、リートは栄養十分そうにベッドに座りながら私たちふたりのためにレシピを書き留めています。私たちは今日はお皿をなめ尽すことすらしなかったし、おなべを洗っていた時に、米粒が2つ残っていたくらいでした。

ブルマ

1945年8月17日

今日私たちは400グラムの生のお米、砂糖30グラム、塩20グラムをもらった。お米は全部自分で炊くことを許され、おかずはチラマヤ調理場で作られる。バタンハリ調理場は閉鎖された。10歳以下の子供は、お米を1日300グラム、働いてる者は全員1人あたり1日200グラムの特配がつく。きょうは1時と8時に、調理場のご飯、インゲン豆、カチャン・イジョー[小粒グリーンピースの濃いスープ]を食べた。あしたの朝、私たちはご飯とココヤシのフレーク、テンペ[発酵豆腐]のパイ、タオチョ[発酵させた大豆]を食べ、お昼は、ココヤシとタマネギが入ったチャーハンだ。私たちはお昼と夕方に150グラムのお米を食べる。そのあとは、3日間続けて豆、そして、すでにイカン・テリ[塩干しの小魚]などが入ったが、特別注文したものを食べるのだ。じゃあね。もうだめ。くたくたで、食べることしか考えられない。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月18日

ますます良くなっていきます。いつ私たちはまた失望させられるのだろうか。いずれにしても、今日は、飢えてない日の2日目です。イカン・テリ[塩干しの小魚]10グラムに加えて、グラ・パトゥー（氷砂糖）100グラム！

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月20日

昨日は砂糖、くだもの、カチャン・イジョー[小粒グリーンピース]、オチョム[豆腐料理]、テンベ[発酵豆腐]、クニット[クニン]（ナシ・クニン[クニン汁入りご飯]用）、そしてお茶も。今日は、グラ・ジャワ[シュロ糖]150グラム、魚40グラム、(ココヤシの)油15cc、チャベ[唐辛子]4個。信じられない。5人につきココヤシ1個。私たちはディナーをとりました。

4時。私たちの目前にあるゲデック[竹で編んだ柵]が取り除かれます。通りの残りも歩くことができるようになるわけです。どういう意味か？何も考えずに、一日中...食べて...寝るだけ！リート、フェルスデーヒ夫人そして私は、二段ベッドの一番上に座って、私たちのお腹を満足にした食事のあとのタバコを1本吸っています。これが悲惨さの終わりなのかしら。私たちには分からないけれど、このひとときをことのほか満喫するのです。…中略…

子供たちは、ゲデックを取り除く重作業班の少女たちを興奮して見えています。母親として私たちはとても良い気分がします。なぜならば、お米、砂糖、お茶、タマネギなどまた少しは保存食があるからです。あとで私たちは、砂糖、それもたくさん入れてお茶をお椀で飲むのです。今晚も同じお茶で、適温のブイヨン茶（塩、胡椒、小タマネギ1個入り）！

昨夜は一晩中眠れませんでした。4時にリート（毛布に包まり）と私は表でしばらく座っていました。月光、(アネケのもうけからの)タバコ、お茶1杯。そしておセンチに小声で話し合っていました。何時間も。明日の朝は、簡単な献立から始めます。後のためにもなるからです。私は、これからは東インドとオランダに適ったものをたくさん自分で行うつもりです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月22日

ますますたくさんの食べ物が絶えず入荷します。メガホンは一日に度々に受取りを呼びかけています。私たちは、必要な靴と衣服の申し出を許されました。…中略…夜中の2時に部屋の床にじかに座ってご飯を食べました。砂糖つきご飯です。昨日、私たちは40グラムの“肉”つきナシ・

クニン[ウコン汁入りご飯]を食べました。今日は再び、グラ・ジャワ[シュロ糖]とカチャン・タナ[落花生]とコーヒーをもらったのです！

就労状況

ヘンケス - ライスダイク

1943年3月6日

これからは、もう居住区内にバブ（女中）を置いてはならないのです。みんなで助け合わなければならぬけれど、これは大きな問題なのです。なぜならば自分のことにも、どうにも始末に負えないから。年長の少年たちはゴミを集め、荷車に入れて正門へ持って行きます。ゲデック[竹で編んだ柵]が、鉄条網に沿っていたるところに設置されてあります。子供たちが家事を手伝っており、ほとんどどの家にも病人が何人かいます。

ベルフ

1943年8月30日

ここの居住区には、何かの理由で家で寝泊りできない男の子たちが夜いられる少年棟がある。このことは前にも書いたと思うけれど、実はきのうオープンしたのだ。けさ私は、ヘネクイン先生の指示によりトイレと浴室を掃除した。¹⁰⁴ ひとりぼっちだということ以外に、違うことにもぐちをこぼせると、わかってもらいたくてこのことを書いている。まったくいやな仕事だった。この少年棟は、モダンな家というにはもちろん及ばない別棟の店舗に(午前中には幼稚園も)設けられている。壁は白く塗られてあったが汚れてきたなかったし、浴室には一種の「ボックス式トイレ」があつてそれを(幸い内側ではないが)掃除させられて、クレソール液¹⁰⁵ で全体をごしごし洗って汚れを落とさなければならなかった。ほかにも別な部屋にトイレがあつて、これは砂の入ったしゃがみ式トイレで、私がバケツの水を中に流したら、ものすごくあふれ出してしまった。水で砂をかい出そうとしたのだ。ヒャー、おそろしく臭かった。どこもかしこもいやに暗く、床には暗い色のタイル、汚れた壁、ドアを閉めるとほとんど真っ暗だ。ひどく臭い仕事だったのよ。思い出してみても、よくそんなことができたものだと不思議でたまらない。ヒャー！汚物をどぶから釣り上げなければならぬなんて！

¹⁰⁴ ヘネクイン教師は、1943年3月から「チデン市清掃局のマンドール[現場監督]」であった。彼女は収容所の高等市民学校生徒を対象に、掃除当番の運営に従事していた。(NIOD、蘭印日記コレクション、E. E. de Jong - Keesingの日記より)

¹⁰⁵ コールタールから作られた消毒剤。

ベルフ

1943年9月5日

今日は日曜日。公益のためにする私の仕事、皿洗い番が次の食事のあとにある以外は、何もすることがない。収容所全体で皿洗いをする雑役班が3つある。家の中でも共同で調理されているし、こうしなければならないのだ。…中略… 野菜を下準備する2人の女性による雑役班もある。幼稚園の保母さんがほかの誰かと一緒に料理し、男の子たちは庭とどぶをきれいにしておかなければならない。浴室のための者、トイレにひとりと冷蔵庫（まだあるうちは。なぜなら、もう少しすると持っていかれてしまうのだ）のためにひとりいる。そのほか、もちろん全員がそれぞれの仕事を持っている。私は毎朝、部屋をかたづけるがそこいら中いっぱい積み重なっているのでまさにゴミ処理作業だ。そして、食堂をかたづけるともう9時半頃になる。そのあとは、妹のパウリーンとマググに勉強を教える。

ワイヘンケ

1943年9月8日

パサールは今から私たちがまかなうことになります。私たちが自分で売るので。というのは、原住民の女性は今後の入場を禁じられたからです。

ベルフ

1943年9月14日

私はもちろんつまらないことに一日中費やすつもりではない。明日からロールダ先生のところの洗濯場で働く。給料はひと月 2.50 ギルダーだが、私はそれを断った。最初に私は病院で働きたいとコッホ先生に告げたけれど、彼女はことばたくみに避けたのである。洗濯場の仕事は朝 10時から 12時までで、時たま午後もある。10時前は家事をしなければならない。まあ、それは結構簡単なものだし、片付いてしまえば暇が十分ある。ロールダ先生にとっては都合がいいのだ。というのは、給料が少ないのでみんなやめてしまって人手をととても必要としているからだ。私は給料のことなんか気にしないので、気楽なもんだ。

ベルフ

1943年9月18日

洗濯場はどこにあると思う？以前にトイレと浴室を掃除したことがあるあの少年棟の裏手よ。このすばらしい界隈で朝方どんなに良い香りが漂っていたかが想像できるでしょう。私は朝 10 時から 12 時まで勤務し、時々午後に洗濯物を取りこまなければならない。最初の頃は、洗濯物がとても少なかったので、10 時にはすぐにも終わってしまい家に帰ることが許されたくらいだった。でもきのうとおとといは、精一杯働いた。今日は洗濯機が故障していたために、全部手でごしごしと洗わなければならなかった。今は、洗うこと、漂白、すすぎ、のりづけ（ここの順番は全然ちがう！）、すべての作業の要領がいくらかわかってきた。急いでやらなければならないために、しっかりと作業に取り組むようにすることが気に入っている。ほかの女の子たち、14 歳以上が 3 人いるが、ふざけて逃げ出したりする。さらに男の子がひとり（おそらくもっといるかまだわかっていないけれど、交代でやっているのだと思う）働いている。すべてがパールス夫人を通して行われているけど、彼女はやさしい人だ。別棟があまりにも東インド風で、おんぼろであってあまり清潔ないのは残念だ。そこには蛇口がついた一種のキューベット、洗濯おけ、きたらしい排水どぶと水がまるで使いものにならない井戸がある。

そのほかには、草が少しとバナナの木が生えていて鉄線で囲まれたところに、漂白するためにうすよごれた衣類を置く貧相なさらし場がある。ここは一方に別棟、他方に少年棟の後ろ側（以前のトコのところだけ）に囲まれていて、二面が白い壁になっていてその日が差すところにカンパー通りに入るドアがついている。私たちは洗濯機、何個かのドラム缶や洗濯板、たらい、ブラシ、洗濯ばさみと石けんを使って作業している。ああ、それから洗濯機の横のグダンにある本来は調理場の水を終了後に掃くサブ・リディ[ほうき]がある。結構うまくいってるし、この仕事に夢中だとは言えないけれど、これは仕事だし、初めのころは気分が悪くなったペンギン・ブックスを読むよりもっと満足感を得るのだ。まあ、特定なペンギン・ブックス物はとても良いけれど。でも、これはオウィディウスが残した空虚さをうめるのためには十分でない。

ベルフ

1943年9月26日

コッホ先生は、病院で働いた者、そして病院へ働きにくるフラン・ムロック・ハウワーのことをいらだってテーブルで話していた。それも私が希望していたことを知っていたお母さんが「エルスが手伝えませんか」と言ったときまでだ。コッホ先生は、私が申込んだときに何人かの患者数（病院はこのときちょうど学校へ引越したばかりだった）の成り行きをみたいということで、少女たちの採用をファン・ノールトワイク夫人（このことの実行者）がしばらく待ちたいと、受け入れをことばたくみに避けたのだ。そして、私は洗濯場で働くことになったが、その次の日にフ

リーダが申込んだので彼女を採用したのだ。ファン・ノールトワイク夫人は当然その日にはっきりした事情をつかんでいたはずではないか。私はかなり長いこと洗濯場で働いていたので、コッホ先生はファン・ノールトワイク夫人が採用した女の子たちについてこだわりなく話した。お母さんが直接尋ねたときには、彼女はもうとっさに言い訳することができなかった。というのは彼女はもうひとり女の子を探していると言ったばかりだったからだ。そこで彼女はファン・ノールトワイク夫人に聞いてみると言った。

でもそのとき午後の皿洗い番のことをふと思った。だれが私の代わりをしてくれるのだろうか。なぜなら、病院は朝6時半から1時半までの勤務だからだ。お母さんがコッホのところにいる婦人たちにこのことを話したけれど、解決にいたることなく、話し合いはつかなかったのだ。その次の日に、私はコッホ先生にファン・ノールトワイク夫人について尋ねたが.... そしたらば、彼女はまだそのことを言ってなかったのだ。なぜならば、彼女はまず初めに私の本当の希望を知りたがった。私ははっきり決めていたけれど、ファン・ノールトワイク夫人の意向を知るまでは、皿洗いのため他の人を探すことにみんなに面倒をかけたくなかったと言った。また、コッホ先生は17歳ではおそらく若すぎたのだと主張した。私はこれが唯一の障害だったのかを知りたいと思った。というのは、余計なスサー[トラブル]を起こしたくなかったからだ。フリーダはもうすでに妹、それもあまり役に立たない13歳の子供に皿洗い番を代わってもらったし、そして今度が私なのだ。すでに全員が各自の時間を割り当てられていることで、雑役は割り当てられ、各自が任務を課されている。代わりの人を探すことはあまり簡単でない。なぜならば、暑さが一番きびしい時間にたくさんの仕事を片付けるのはちっとも楽しくないし、家の外で働く人たちは大勢いるから。

「そう、そう」とコッホ先生は思慮深げにうなづいた。彼女は午後病院へ行って見てくるはずであった。これはおとといだった。でも今になっても、私は何も聞いていない。もう何も言わないことにしよう。コッホ先生といたらば、本当にいやだ！ 彼女にはがっかりさせられる。彼女は心のそこから愛情にあふれているとはいえない。それでも彼女のさわやかな笑顔、彼女の持つ魅力によっていつでも穏やかな気持ちになってしまうのだ。一度誰かを愛するようになると、そう簡単にはすまされないのだ。…中略… 病院で、コッホ先生のため、フラン・ムロック・ホウワーのため、アラルトのため、バブス・ファン・ノールトワイクのためするのはすてきだっだに違いない。そして、私は午後に眠ることができただろうし。今はそれができない。皿洗いが終わってもお母さんを起こしたくないからだ。それでも私は7時まで寝て、あまりたくさん働く必要がないので、午前中にラテン語を習ったり、ローマン家のおちびさんたちのズボンを洗う時間があるのだ。私はもうどうでもいいのだ。でもコッホ先生はきっと違う。

ベルフ

1943年9月29日

今、病院で働いている。午後5時から8時までだ。この前に書いたあと、コッホ先生は私に夕方（日曜日だった）、彼女がファン・ノールトワイク夫人に私のことを告げたこと、そして午前中にむしろ婦人を置きたいので、午後に働いてみたいかと言ったのだ。丸一日を犠牲にすることになってしまうのでそんな気はちっともなかったけれど、私はもちろん「はい」と言ってしまった。でもどうでもよかった。次の日、私はすぐに出向いた。ひとりの女の子が病気だったので午前中に早くから洗濯場で働いたため、かなりつらかった。パンをトーストにし、ミルクを沸かしたり、食器洗い、買物などをしなければならなかった。かなりたくさんとコッホ先生も認めた。昨日はフラン・ムロック・ホウワーが私を手助けするために来てくれた。今後、フリーダ・デ・ヨングのような午前中の班の女の子が午後順番で毎日来ることになり、こうして彼女たちも午前中非番になるのだ。そのため今日は楽しかった。なぜなら私はフランにはもうずっと好感をいだいていたし、彼女はとてもしっかりしているのだ。おとといはバブス・ファン・ノールトワイクが手伝ってくれたけれど、この子はまだとても幼稚だ。フランは私より少し年上なので楽しい。

昨日は非常に長い間洗濯場で働いたので、くたくたに疲れて帰宅した。そのためコッホ先生が親切にも私の代わりに皿洗いをしてくれた。ぐっすり眠れた。病院の仕事について幸運だったと思っている。なぜならばつらい仕事ではないし、時々何か特配をもらえるからだ。私は調理場でコッホ先生の手伝いをしているので、余ったサンドイッチ（おとといはチーズ入り、おいしかった）やお粥の残りなどが私たちのところに回ってくるのだ。そして、全部が患者にとってと同じようにおいしいのだ。昨日はフランと私は、ふたりともコロッケ2コとチーズやソーセージがいっぱい入ったサンドイッチをもらえた。とってもおいしいのよ。

シスター・ロザリンデ

1943年10月1日

洗濯物をどうすべきかは大きな難問だ。私たちが洗濯物を引き取るべきか、病院でもすでに間い合わせしていた。居住区の多くの女性がいくらかの援助を期待し、非常にうれしく思っていることが私たちには分かる。私は修道院長たちと数人であちらこちら見まわった。家々の構成は何と言ったらいいのか、小さな家に23人から30人、時には幼い子供が17人いたり、大きな少年が11人もいたりする。母親たちは全部自分でしなければならないのだ。料理、洗濯、アイロンかけ、掃除、子供の世話をだ。そして少年たちは、各所の草刈り、庭の手入れ、道路の清掃をしなければならず、ファン・モーク大臣¹⁰⁶の息子さえもである。

¹⁰⁶ H. J. ファン・モークは、オランダ領東インド政庁の副総督であった。

ベルフ

1943年10月4日

今日から私は、洗濯場の休業、むしろシスターたちの管理に多分移るからと言った方がいいかもしれないが、それで、ヒッディング夫人のために洗濯することになった。

シスター・ロザリンデ

1943年10月4日

シスター・オディリアは、5つか6つのどこも満員の家に住むご老人のところへ行く。彼らは家庭的な生活から完全に遮断されて詰め込まれて暮らしていて、全員が60歳以上の男性である。自宅で愛情豊かな世話を受けていた者が、金持ちや貧乏に関係なく全員がエナメルのお皿を持って食事を取りに行くとは。幸いにも、ウルスラ会のシスターたちが彼らの面倒をみ、シスター・オディリアが病人を看護し、食べ物を配ったりしている。寝具は多くの者がもう持っていない。彼らが各地の収容所にいたとき、すべてをあとに残さなければならなかったのだ。

私たちはすでにかなり前進を遂げてきた。病院へ手伝いにいくシスター・テオドーラをポステュマ医師が向かえに来たし、シスター・ヨセはある家族を手助けに行くのだ。その母親はまったくとり乱していて、調理番であったためその他のことをする時間がまるでなかったのだ。ええ、全部女性を取りしきらなければならないので、本当に多くの家庭でもこんな具合なのだ。大きな少年がいない者は、老人の誰かに頼まなければならない。それでも誰もいない場合は、彼女たちは自分で、暑さの中に敷地を掃除したり掃いたりしなければならない。

どれほどオランダ人女性が無理を強いられているかご存知ないでしょう。ニッポンのこれらすべてのいじめにあっては、まったく耐えられないくらいだ。するとまた彼女たちは自分の夫が移動させられたり、移動したことを知らされ、そのあとは、新しいウンダン・ウンダン[規則]や命令で新たな動揺をもたらすことになる。こんなことに依然持ちこたえられているのか理解できないでしょう。いろいろたくさんの仕事にあっても、1リットルのお米や小片のお肉のために何時間も並ばなければならないのである。近々の解放への希望だけが彼女たちを力強くしているのだ。

ベルフ

1943年10月8日

昨日はヒッディングのところで60枚の洗濯物を洗った。洗濯には十分時間をかけて、全部念入りに行っているけれど、干すときにまだ汚れが落ちてない個所が見つかる。昨日はまたとても疲

れた。普通 8 時半頃にそこへ向かう。ラテン語のための時間はあまりない。立ってごしごし洗うのはかなり骨が折れることだ。そして、午後は病院へ行くが、そこはコッホ先生がやめて（あきれた！）、今たくさんの職員がいるし、ファン・ノールトワイク夫人が過労のためにフェレコープ夫人に代わった。3 人いる午前中の班の女の子のうちひとりが交代で私を手伝ってくれている。フランが一番好きだ。私のおぼろげな哲学的（これをどう言ったらいいかわからないが）傾向に反して、私にとって付き合いやすい人のほうを選んでいる。フランは全然穏やかな性格ではないし、そう機転も利かないけれどしっかりしていて正直なので好きだ。彼女はバブス・ファン・ノールトワイクには我慢できないようだが、私はバブスは活発ですてきだと思う。

ワイヘンケ

1943年10月10日

まったく暑くて息苦しいのです。…中略… 台所をボンカラン（[掃除]ごしごし洗ったり）したり、どぶをかい出したりすると、年をとっていくことがわかります。なぜならば、すぐに疲れてしまうから。

ベルフ

1943年10月12日

私の現在の日課では本当にバテてしまう。8 時半までお母さんの部屋を片付け、そのあとヒッディング夫人のところへ行って 11 時半か 12 時まで洗濯する。そしてマンディ[水浴び]し、1 時に食事する。続いて皿洗いの雑役があつて、これはまず拭いてから収納し、調理場を片付けることになっている。お母さんはもう寝ているので、私のベッドへ行くことができないからいつも庭へ行くのだ。そこで本を読むか日記を書いたりする。5 時には病院にいななければならない。これは午後 7 時半、8 時まで続く。そうしたら、私の一日はとっても遅くなってしまう。

ベルフ

1943年10月17日

私は昨日、病院の仕事をやめた。ヒッディングのところで洗濯したあと、ものすごく疲れてしまったただ涙が流れるばかりだった。それにはお母さんは耐えられなくなって、私にとってもだけど、それですぐに決心してしまった。おいしい残り物、肉やソーセージのサンドイッチ、また、フランや看護婦見習全員のあの楽しい振るまいがきつとなつかしくなる。なぜならば、私の年齢、

つまり私より少し年上の女の子との接触があまりないし、いろいろあっても、全然良く知らない子たちと一緒に楽しくなるのだ。ヘルダと[フィッシュ?]とバブスとアニーとコーチェ・サルクとウイス・スケルテマ。ヒッディング夫人をこれからも手伝ってあげようと思う。彼女はそれをもっと必要なのだから。でもまた午後にひまが持てることはすばらしい。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月19日

5時半に起きコーヒーとお茶の支度をし、洗濯をして（全部の家族のためにする私の仕事）、お茶とコーヒーをベッドにいるみんなに持って行きます。そのあと子供たちとしばらく表に出て庭仕事をし、まだあるうちに安らぎを満喫するのです。

ベルフ

1943年10月22日

病院に関しては、まだたくさんトラブルがあった。というのはフェレコープ夫人はほかの者の助けが不足しているので、私を置きたがったのだ。前のやり方ではとてもやって行くことができないし、そこでこれについて話合われた。もし私が昼寝できれば何の問題もない。だから婦人たちは、ヘネクイン先生が私の皿洗い番を引き継ぐことを考え出したが、そしたら私がペーラー先生のトイレの雑役を代わりにしなければならなかった。不潔な仕事だが簡単ですぐ終わる。確かに良い働き手の全員が家の外で雑役をするようになると、結局だれひとり家事をする者がいなくなってしまう。そのために私は雑役を続けなければならなかったし、これは少年棟のトイレでの私の評判により適格とされたようだ。信じられない！

実はお母さんからトイレの雑役のことを聞いたときは非常にショックだったし、真っ向から恥ずかしくなった。まったく不潔な仕事なんだから。私は、病院 - トイレ - 昼寝（または自分の部屋のベッドでのラテン語）あるいは、病院なし - 昼寝なし - 皿洗い番 - 午後非番、のどちらかを選ばなければならなかった。後者を選んだ。というのは、前者の場合はヘネクイン先生が病気なので、私がしばらく皿洗いをしなければならなかったし、いやなトイレのことがあっても午後の非番は私を引きつけたのだ。病院から離れたら、家で厳しい仕事をするつもりだし、ヘネクイン先生は、清掃局のために彼女が担当しているゴミの重作業をした朝に、今せっかく元気になったのだから午後の皿洗いをする必要はないだろう。そして私は「血の大草原」（カール・マイの書いたインディアンの物語に夢中な妹のマグとトレースがつけた家の横にある通路の名前でみんなもこう呼んでいる）で椅子に座って眠るようにするのだ。ひどく居心地が悪い。なぜならば、自転車が置かれているし、いろいろながらくたがあるからだが、それだけにみんなお昼は

前庭にいるからここは静かだ。

私は結局正式にやめたのだ。永久にだ。でも、またヘネクイン先生が、私にとって良い環境であったのに残念だとか、コッホ先生やほかの人たちも私が病院に残るべきだったとか言い始めた。私はしばらくためらったけれど、もうこのことを変えなかった。いつかは選ばなければならないし、ものごとを変えてばかりしてはいけないのだ。加えて、病院には病室から代わりの人がきたので、最初の約束どおりに私はそんなに長くいる必要がない。というわけで私はもう退いたのだ。フェレコプ夫人は私に、女の子のひとりが非番の日を取るときに代わりをしてくれないかと尋ねた。もちろんできるわ。私が好意を寄せているフランのことだけが残念だ。彼女はおうへいですぐに批判するけど。しかし彼女はとても正直でしっかりしているし、何と云うか、良い性格を持っていると思う。

ベルフ

1943年11月4日

家事を手伝う人を世話している婦人たちが、私をリストにのせたので、ヒッディングのところとする洗濯にたいして今度給料をもらえるようになった。1時間につき15セントで、2時間で終了するとして、一実は3時間を超過することがしばしばあるが、30セントになると計算された。10月分として6,56ギルダーもらった。そう悪くもない。

シスター・ロザリンデ

1943年11月8日

明日、17歳またはすぐに17歳になる息子さんは全員アデック収容所へ行かされる。母親たちにとり新たな悲しみ、そして居住区の労働にとっては多大に不備となる。なぜならば、年長の少年たちはゴミの収集など重労働を行っていたからである。¹⁰⁷ 若い少年たちは草刈りと掃き掃除をおぼえなければならない。このことは全部婦人たちの監督で行われ、義務とされている。

ヘンケス - ライスダイク

1943年12月15日

今朝は「道路清掃」。お偉方の視察。従順に私たちはまたまた作業に取りかかります。年長の少

¹⁰⁷ 「移送と収容」のベルフ、1943年11月11日の日記の断片参照。

年たちはこんど警防団をしなければなりません。ラーン・トリヴェリの 80 番と 82 番の家は少年棟となり、人々は再び居住区内のどこかに詰めこまれました。14 歳以上の少年は、警防団の任務のため今後そこで寝泊りするのです。

ラージング - フォッカー

1944年1月9日

現在、居住区内では様々な方法でお金をもうけることができる。居住区の外でも「上品なバーのマダム」として！これはたびたび募集されていて、必ず自由意志でとも付け加えるが、給料は1ヶ月に百ギルダーで住居はただだ。月に 15 ギルダーでトイレの監視員になれる。家々のトイレの負担過剰を軽くするため、路上に電灯つきで最も近代的な衛生設備の完備したトイレが3つ並んで建てられた。ええ、そうは言っても、実はカンボンにあるような「しゃがみ式トイレ」なのである。中年の陽気な婦人たちがその際、編物をしながら籐の椅子に座っている。

シスター・ロザリンデ

1944年4月10日

何という復活祭。私たちにとっもう日曜日なんてない。仕事だ。12 歳の若い少年たちは、ニッポン兵士とともに外へ行かなければならない。彼らは半ズボンだけの姿でクーリーとして働いている。坊やたちはすでに全身真っ黒に日焼けしている。

シスター・ロザリンデ

1944年5月25日

新しいプリンタ[命令]。10 歳以上の女子は、土地を耕さなければならない。子供たちは石を運び取り除き、女性たちはパチョル[鋤]作業をしなければならない。まったくいやだ。この焼けつく太陽の中ではほとんど実行不可能だ。医師たちが抗議し、多くの女性はこれができないし、原住民の女性でさえパチョルをする必要はないと知っていたはずと述べたらば、ニッポンは、「これらの女たちはそれをすべし」と答えた。この新たな出来事で、またまた近々の解放への希望が消えてしまい、多くの人々にとってこれは後退を意味するものである。

シスター・ロザリンデ

1944年5月26日

私は心の中で激怒したが、私たちの女性は本当にたくましいと思う。パチョル[鋤]とシャベルを持って、何百人もの女性たちが早朝に歌い笑いながら次々に出て行くのである。彼らは私たちの持つオランダ魂を負かすことはできないだろうし、こんなことは耐え忍ぶことになるだろう。いかにこのひどい赤色の粘土をパチョル[鋤]すればよいのだろうか。長い根っこ根株のある今まで一度も耕されたことがない土壌をだ。シスターたちは白衣と長いスカートでは行うことができないために暫定的にこれを免除された。これらの女性はショートパンツをはいて裸足で行くのである。私たちには想像にも及ばずだが...

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月16日

2、3週間にわたって女性と12歳以上の子供は全員パチョル[鋤]作業をさせられました。ヤップはこれを体操と呼んでいます。ここは固い粘土なので、まったくつらいことなのです。

シスター・ロザリンデ

1944年7月2日

看護婦に対して、ニッポンのために働く用意があるか質問が出された。彼女たちは、a、b、c別に記入させられた。

a = 志願

b = 呼び出しにより

c = 拒否

私たちは、「インターナショナル」に働きたいと記入した。つまりすべての人々、人種に対し修道院会に関係した、少なくとも4人か6人同時にである。ニッポンはこれを勘定に入れることはないと分かっているが、私たちは条件を付けたのである。

シスター・ロザリンデ

1944年7月25日

適格な女性は全員再びパチョル[鋤]作業を行わなければならない。ニッポンが言った。「種がタ

刻前にまかれるようにしっかり働かなければならない」。女性たちは何とがんばったことか。

シスター・ロザリンデ

1944年7月26日

居住区内がぎょっとする。ソネイは、女性たちが十二分に働かないと激怒し、今後私たちは 10 時から 12 時まで、そして午後 2 時から 6 時まで菜園で働かなければならない。熱帯地方のここでは何と言う骨折り作業か。いつ女性たちは家で自分の仕事をしたらよいのか。そして子供たちの世話は？あぁ、雰囲気は目立って落ち込み、当然言われることは「彼らは私たちをあとで何の使いものにならなるほどに、へとへとになるまで働かせるのだ」。

シスター・ロザリンデ

1944年8月2日

ニップはまだ満足していない。女性たちは 6 時まで菜園で重労働した。今ではごく普通に呼び出されるのである。「外で働く時間だ」。終了後は、「労働時間終了」これはまるで強制労働だ。時には笑わずにはいられない。なぜならばこんなことも耳にするからだ。「よろしい。何人かは外でそのまま働き、他は少し休む」。ニップが寄って来て、「注目！」、すると全員が飛び起き、外で掃いたり水をかけたりする。大勢の人は働いているふりをしている。

驚くべきことに、ニッポンはまだ私たちのゲデック[竹で編んだ柵]に入って来ない。彼はきっと修道女たちの活動を神聖なるものと信じているのかもしれない。私たちは本当に何か特別に有利さを持っているようである。私は今朝初めて「宮殿警備隊」を行った。一般トイレの警備を私たちはこう呼ぶのである。これは、どこもきちんとして、清潔に保たれているかを注意して見なければならぬのである。そう、それは必要なのだ。つまり全体は、すでにばらばらになって垂れ下がったところがあるビリック[竹で編んだ柵]で作られていて、女性や子供たちが庭にまくための水をたくさん取りに来る。ヤップは 2 回監視に訪れて、私は深くお辞儀しなければならなかった。

シスター・ロザリンデ

1944年8月6日

日曜日。それなのに、畑仕事で女性全員が 2 時間。またもや、太陽が頭の上を照りつける最高に暑い時間にだ。まったくひどいものである。日曜日だと言っても何も関係ないのだ。彼らには聖

体拝礼はないし、何もない。あくせく働く以外には何もないし、とにかく労働時間は完全に利用されてしまうのだから。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月9日

娘のアンネは、現在毎日2時間にわたり畑で働いています。8歳以上の者は全員参加しなければなりません。病弱な私はまた横にならなければならず、他の人たちが骨折って働いているのを見るとつらい思いがします。こんな暮らしを2年前には知らなかったのは幸いです。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月17日

歩道を全部作り直して植え付けをしなければなりません。看護婦も畑で働かなければならないのです。

シスター・ロザリンデ

1944年8月17日

ソネイは、各自がパパイヤの木を植え、もしその者の敷地内にこれができないならオガンフィールドかバタンハリフィールドに植えるべきだと言った。私たちは、この敷地内に一寸の場所もないので、私たち用の84本の木は全部フィールドに。明後日の19日には植え付けていなければならない。それも名前と番号、植樹日と収穫予定時期（後述のことはあいまいだ）を書いた木札を付けてであり、ソネイが自ら点検に来るそうだ。こんな脅かしがしばしば言い残される。

シスター・ロザリンデ

1944年8月19日

班長たちに対する命令のすべては夜に出される。そして実にさまざまな夜毎に、我がオランダ人の若者たちが木材や屋根瓦を運ばされている。ニッポンは私たちを仕事に就かせる方法を分かっている。

シスター・ロザリンデ

1944年8月20日

すべての菜園は全体を掘り起こさねばならないので、結局労働が必要とされる。女性たちはそのためへとへとに疲れさせられるのだ。女性たちはこれほどすてきな帽子（強烈な日差しを避ける帽子なのである）をかぶって、またハイヒールを履いて畑で働いてはならないと知らされた。「それならニッポンは他のものを支給すべきだ」と何人かの女性が話しているのを聞いた。

シスター・ロザリンデ

1944年8月26日

あえて路上に姿を現す勇気がほとんどない。ソネイはいつも女性たちを家から土掘り作業のために引きずり出しているのだ。これは本当につらい仕事なのである。砂地の歩道のすべてが掘り起こされなければならない。ヤップは、働き続けているか、また、上手にやっているかを見るために、あちらこちらに立っている。

シスター・ロザリンデ

1944年8月29日

少年たち、特に年長の少年たちが去ってしまった現在は、若い少女が厳しい仕事を負わされている。いかに彼女たちが重労働をさせられているかは非難さるべきことなのだ。まるでオランダの港湾労働者のごとくなのだ。トウモロコシやお米の入った重たい大袋を彼女たちはトラックから肩にし運びさせられた。また、バラン[物資]、トランク、ベッド等々もだ。すべて彼女たちは自分で行わなければならない、ヤッペンはその際座って見ているのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年9月1日

シスター・カシルダは病院の小児科に呼ばれた。こうして病院もうまく機能し始めている。2人のシスターは洗濯し、他の者は庭を掃除し手入れしなければならない。シスター・オリンピアは料理し、また、シスター・アデライデは4人の子供の母親のところで洗濯をする。この母親は病気だ。

若い少女たちが何と過酷に働かされていることか。昨日、重作業班が編成された。彼

女たちは角材を運び地中に打ちこまなければならない、「鉄条網班」の少年たちがやらされていたようにつらい仕事をしている。こうして彼女たちはすぐにも耐えられなくなり、がんばりとおすことは不可能だ。

今、点呼の際、すべての女性は明日チラマヤフィールドで働かなければならないと告げられた。ニッポンが私たちにそれを無理にしらなければいいのだが。私たちの服装でどのように行ったらよいのだろうか。ニッポンは私たちが忙しいことは知っているし、すでに認めているが。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月31日

汚物だめが置かれた。最高の不潔さ。庭のこやしとなる。

ベルフ

1944年11月12日

さらに、今までの未開拓地（広大なように聞こえるけど！）の全体が作りかえられ、ジャグン[トウモロコシ]、バジウム[ホウレンソウ]、エンダイブ、セサウイ[白菜]、トマトなどが植えられた。コッホ先生が言うように、我らが「保護者」のご加護による気高い菜園は、収容所の女性全員に多大な苦勞を負わせたのだ。サッカー場チマラヤフィールド、オガン・ピクニック場、バタンハリ - アラン・アラン[葦]草原をその土の中に種を植えつるために準備が整うまでには、6千人もの人々が一日中パチョル[鋤]やつるはしで作業し、スロカン[どぶ]から水を持ってこなければならなかったからだ。現在はその多くが丈夫に成長し増えている、手入れにさほどの労力はいらぬけれど、全員に1時間半畑で働く雑役が8日毎に回ってくる。

庭や道の路肩なども植えつけられた。ニッポンはこの事（ほかの事も！）にとっても熱心で、芝生が1箇所にも生えてはだめなのだ。さて、いたるところに生い茂ったトマトのジャングルができあがったのを目にし、垣根やそのたぐいのところは全部、丈夫なクテムン[キュウリ]みたいなつる植物が巻きついている現在は、彼の怒りはいくらか静まった。そして、洗濯物などをのせたりするために勝手にこっそりと小さなはげた場所をほったらかしにしておくことができるのだ。調理場も建てられる。大きいのがチラマヤフィールドに、そしてバタンハリフィールドに小さいのがだ。これが誰のためなのかはまだ知らないけど。

ヘンケス - ライスダイク

1944年11月21日

朝方4時半から7時まで私の常勤チームのヨー・ファン・ミューズ、アニー・ファン・デル・プラス・プライテ、フェン・ファン・ルユール・フィッサーとともに夜警番を行いました。私たちはいつも星空を満喫してしばし飢えを忘れるのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月10日

最近、少年たちがする道路清掃の指導を自発的に行っています。

ベルフ

1945年1月28日

誰一人として私の新しい活動を言い当てられないんだ。私エルスは、1月7日から看護婦をしているのよ。どう状況が突然変わるかわからない。¹⁰⁸ コービーもいる。私たちは一緒に始めたのだ。しかし、先生が「紡績工の移送(1月26日)」でいなくなってしまった今は、ここに留まるべきかわからない。いずれにしても今私は病気なのでどうせ何もできないのだ。私が看護の仕事につくなど誰が想像できたかしら。時々、気に入らないことがあるけれど、これから先も続けるつもりだ。なぜならば、私自身の魂の救いにとっても役立つから。最初の2週間は家事をした。これはつまり、不潔な仕事全部をすることで、浴室とトイレの掃除、お尻を拭く布をオガンフィールドへ持っていくこと、包帯の洗濯、要するにほかに誰もしない仕事なのだ。何週間にもわたりこの仕事の担当がいなかったのだから、私が来たときまでほったらかしにされていたし、うんざりさせられるのは、誰一人としてはっきりと受け答えできないことだ。業務は病院にあることのように明確には行われていない。また、人材とプルカカス[必需品]も不足している。

結局、私は多くのことをゆっくり、細心に自分のペースでもって着手した。少しの間だけだけど。2週間したらコービーが家事をすることになった。彼女にはむずかしそうだ。なぜならば私の場合とは違って自分のやり方であまりさせてもらえないようだし、私がする必要がなかったこと全部をやらされている。でも彼女は混乱(大げさ過ぎるから、なおざりにされた家事とでも言おう)に秩序を取り戻す必要もないのだ。私はこの5日間、あまり容易でなかった、かの最愛のとても立派だが非常におうへいで、とてもやかましく、とても利発な私が長年お慕いす

¹⁰⁸ 彼女は以前病院で働いたことがあり、1943年10月16日に退職した。

るリース・シュラーの指導のもとに看護を行った。幸いにもコービーと私はお互いに心に思っていることをはっきり言えた。そうだね。始めはいつもむずかしいものだ。でも、私のような生意気な女の子にはこのことはとても役に立つのだ。

ブールマ

1945年1月29日

エディットとウィリーは、ケドンバタック収容所から到着してすぐに看護婦として病院で働いた。デーワと私は手伝い。彼女は、ブランタス通りの赤痢病棟で、私はラーン・トリヴェリにある普通の病院のひとつでだ。…中略… クンプル[点呼]のあと、つまり8時から午後2時頃まで働き、それにより3週間に1度パン半分と、10日に1度は、「トコ」で少しばかりの食品に替えられる30セントをかせぐ。お母さんも5日ほど前に仕事についた。彼女はくだものくだもの証明書をいろいろな病院へ配らなければならない。4時半に出かけて点呼のときに戻る。…中略…

私はニットの靴下を持っている。そう、私たちはニッポン軍のために靴下を編んで、それで1足につき30セントかせぐのだ。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月1日

ここではニッポンのためにソックスが、2本どりで使わなければならないくらいに信じられないほどの細い糸をスポークにかけ編まれている。だから、そこら中に編物をする女性を見る。食品と替えられる30セントの券がもらえる。つまり、1足につき数個の砂糖菓子だ。私は子供のことを思って編み始めたが、いつも自分の時間に限りがあった。そんな時に、ある知人が私のを続けて編もうかと言ってくれたので、2ヶ月で片方の靴下きり先に進まなかった私はこれを喜んで受け入れた。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月2日

昨夜私は、しばしパサールで重作業班の少女と同じようなことをした。閉店後にアメリカバジャム[ホウレンソウ]を縁までいっぱい積んだトラックが入って来た。ちょうど私がそこを通った時に志願者を求めていた。10時半まで続いた大仕事だった。消灯して閉店！その際、一抱えのバジャムをかせぎ、これを我らの「裏通り」の暗闇でお隣さんと分けた。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月5日

うだるような暑さのために、裁縫しなければならない物がたくさんあるが中々手につかない。要するに洗濯と部屋の掃除だが。再び私に課されている家事は前庭を掃くことだ。結局一日中、何か仕事があるのだ。みんなおなべを磨くのに精を出していた。アラン[木炭]で火を焚いていたため、汚れが底にこびりついてひどいのだ。私たちは1個のおなべさえすっかりきれいにすることができなかった。オーブンの掃除、おなべ磨き、たまった洗濯物、裁縫、何度かの義務的訪問。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月5日

病気であることはこの時勢では何か特別なことであります。ほかの人は自分で何もかも行うためにことのほか忙しいのです。からだを洗い、洗濯物は今朝私の家族6人分をします。加えて自分のベッドの上でもまたいろいろなことをするのです。他のひとに迷惑をかけないように野菜の下準備、あるいはカンクン（湿地帯植物）[青野菜]の茎選びとでも言った方が適當かも、裁縫、パンの手配等々を。リートは夜警番をしたので疲れきっていました。というのは、夜にトコヤパサールで何時間か見張りをさせられると飢えを強烈に感じるのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月7日

パンやご飯などを取りに行くことはとても面倒なことで、女性たちが長いこと行列したあと、家の中で今度は分配しなければなりません。この女性4人が調理師をしているので、そのため家にいるその他の人の仕事をする負担は倍になります。

ベルフ

1945年2月26日

でもまだ病院で働いているのよ。初めの頃ずっといやな思いがしたけれど、今はこの仕事がとても楽しくなった。夜、睡眠が不安定で病院の悪夢をみたり、そして寝ている間に起きなくてはいけないという恐ろしい光景が目の前に現われ、7時（つまり夏時間の5時半だ）にもうすぐなると感じられたことがしばらくあった。毎日、ひどくおじけ付いていた。病院のことがいつも頭を

離れなかったし、ほかのことに対する緊張した関心により私の不安が弱まると、すぐにもこの考えに移る傾向があった。神経が高ぶって生活していたし、どんどんとスピードが増して行って静止することがない機械のようだった。夜中にもだ。慣れるということ、他の人に、他の仕事に、他の環境に慣れるということがとても難しかった。私は人との接し方をおぼえたのだと、そしてこれら看護婦とのつきあいはどれほど難しいかを思った。ああ、これも大部分は私のあら探しをし、まったく不親切であったリース・シュラーに責任がある。私が長い時間をかけてだんだんと築いてきた自信を突然失ってしまったのだ。…中略…

病氣したあとの最初の1週間は、収容所病院に対する嫌悪感を抱いていて、朝そこへ向かう途中、時々むなしさ、居心地の悪さで泣きながら歩いていた。その時、自分自身をきびしくして、がんばり通すことに決めたのだ。どんな犠牲を払っても。そしたら良くなった。リース・シュラーは赤痢になり、私はやさしい女の子、ピータ・ゲリッツェンと一緒に快適な病棟へ来た。1週間後に私は精神的に落ち着いた感じがしたし、仲良くやっついていられるやさしい女の子たちと一緒に勤務したのだ。コーチェ・サルク、ハンネケ・ウンガー、コービーも忘れてはならない。仕事に慣れて、自信も取り戻し、スナン[楽しい]に感じて仕事が楽しくなった。嫌悪していたのにだ！多分いやなことももっとあるかもしれないけどね。嫌いな人との勤務とか看護での予期しない問題とか夜勤とか。どうでもいいけど、最悪なことはもう経験したと思う。役に立つ仕事だし、その際よく考えなければならないということはとてもすばらしいのだ。

私は重作業班にいないので、ニップのゲデック[竹で編んだ柵]を取りつけさせられたり、引越しやつまらないクーリー作業をさせられたりすることがないのでとてもうれしい。がんばるのがいやなのではないのだ。病院だって不潔でつらい仕事をしなければならないのだけど、それでもとてもちがうし、卑しめられることがないのだ。重作業班なんかにいると、自分が落ち込まないようにする精神力が必要なのだと思う。というのは、きびしい肉体労働による反動で、女の子なのに荒っぽくて男性的になるからだ。彼女たちはののしり、大声で歌ってははしゃぎ出し、礼儀正しさを失って行く。ああ、そんな反動をはっきり想像できるわ。もし私があんなあほらしい荒仕事をいつもやらされたらば、ああ、そしたらば大きな絶望感との生きるか死ぬかの闘いをしなければいけないことになると思う。私だったら、おぼれている人が着ている衣服の重みで下に引かれていく感じがして、水に浮いていられないでいると同じような気持ちを持つことになる。しかし、あのフリーダ・デンカーが同じように感じているとは思わないし、エディット・ヘルフストや重作業班のほかの人たちもだ。多分私にもそう悪くはないかもしれない。それでもやっぱり私は収容所病院で働けてうれしい。

ヘンケス・ライスダイク

1945年3月21日

10 日毎に日本軍のために編んだ靴下を届けているけれども、よりによって今何も支払われない

のです。しかし、いつそれが出されようとも、何であろうとも、とにかく何でもうれしい。1足につき 30 セント。

ボルハイス - スキルストラ

1945年4月8日

私自身、日曜日の朝に呼び出された。看護婦、赤十字、青十字、薬剤師助手、全員クンプル[点呼]へ。私たちはグループに分けられ、グループで早々にも畑仕事に。畑で月曜日と金曜日、ニッポン時間で午前 9 時半から 11 時までと午後 4 時半から 6 時まで。私は板のように痩せこけ、カチョン[(町の) 原住民不良少年]のように真っ黒だが、がんばり通している。野外で働くのは健康なことだから。もし...十分食べることができればだが。…中略…

調理場、トコ、パサールの職員全員が辞めさせられた。

ベルフ

1945年4月16日

2、3 週間前から重作業班にいる。というのは、ソネイが非常にたくさんの病院職員を首にして重作業班に入れたからだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月1日

今朝、以前の家と庭をすっかりきれいにしました。ゴミを燃やしてすきりした気持ちに... 禁止されているのにすばらしい「焚き火」をしたのでした。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月21日

チャルダ・ファン・スタルケンボルフ夫人は、彼女のおまるをどぶで空けて、ほかのみんなと同じように缶に入った水でおまるをすすいでいます。私たちの部屋の前でこんなことが一日中行われているのです。1軒毎に1日に1回どぶにある汚物をシャベルで汲み出さなければなりません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月12日

今は7時に目覚ましがなります。6時半、もうジャワ時間の5時に起きる気力がありません。それでも私たち3人で楽しくやっているとまずは言えるのです。私にすぎる二組の小さな腕を解き、外で黙って体を洗い（マンディ[水浴]はこの満員の家ではできない）、まだ暗いけど、植物にちよっと目をやります。三色昼顔がまず一番目の花で、心房が明るい色ですばらしい赤い色をして、初夏の日光にあざやかさをあらわします。そのあとみんなを起こします。生ぬるいけど1杯のお茶、そしてしばらくして「クンプル[点呼]」へ。新たな一日が始まります。そして、1時間後私たちが再び帰宅したらば味気ない朝食をできるだけ時間をかけて食べます。何枚かのべとべとしたタピオカのパンに塩を少しかけて。こうして結局日々が過ぎて行きます。私たちは何もしないけど、それでも一日中忙しくしているのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月25日

今日、調理場の職員100人が「首切り」にあいました。彼らは他の人と交代させられます。

ブルマ

1945年6月25日

今、調理場で働いている。たいくつな仕事だけれど、少なくとも一日中家の中にいる必要がないし、雑役のスープ（とお湯）をもらえる。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月14日

アネケは、病院のペンドポ[パビリオン]でまた働きだし、事務所からニュースを持ちこむのです。彼女は私たちがレシピを書く紙をヤップから盗んでくるのです。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月28日

毎日ふたつの病棟を掃いて雑巾がけしている婦人は、シンガポールから来たボーイスカウトのリーダーで元同僚のミープ・ファン・デル・ラーンのようだ。ものすごい仕事だ。なぜならば、雑役のパンと小さなトコで使える 60 セントを 10 日毎にもらうのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月30日

一体一日中私たちは何をしているのかしら。現在は少し遅くなって起床。朝食。私は部屋を片付けます。子供たちは働きに行き、その間に私は（石けんなしで）洗濯します。大勢病人がいるため、私は毎日何かの「受取り番」をしています。休息するように努めていますが、大抵それができません。というのはお水を貯めなければならないからです。多くの人（家の裏側で）夜をこれに当てているけれど、私は昼間しています。そのあとは、ひとりの婦人の指揮で 1 日に 2 回定期的にとぶを掃きだすのです。「とぶレディーさん！」「今日は誰がとぶするの？」食べ物一杯入ったおけを運びながらそこと通るときに、男の子たちが立小便しているのです。外では一日中子供がおまるでやっています。食事を始めようとしている目前で。

6 時に食事（あればですが）、そして点呼、すると午後はもうほとんど終わりです。9 時に子供たちは寝ます。そのあと、入院しているリートに手紙を少しばかり書き、そしたらやっぱり私もベッドに入り込むのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月16日

日本軍用の靴下をもう編まないでもいいようです。靴下が必要でなくなったのだろうか？帰るのだろうか？それとも材料がまったくなくなったのか？いずれにしても良い兆しのように思えます。

健康状態と医療事情

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月10日

ヤン・ヘンドリックがその間にはじめて細菌性赤痢¹⁰⁹にかかりました、まだとてもぐったりしています。でもまたいくらか回復。彼が大分よくなった時、アンネが短期間、でも激しい細菌性赤痢になりました。幸い私たちにはヨー・フェルハールトが医師としており、彼女はファン・ヘニンゲン医師の助手もしています。

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月16日

はじめて狂犬病が発生しました。犬は今すべて口輪をつけて歩いています。

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月31日

私たちの家では4人が病気、ミーブ、リート、アネケと私。4人とも五日熱¹¹⁰です。

ヘンケス - ライスダイク

1943年5月1日

すでに麻疹が70件とジフテリアが7件、これらの場合は直ぐに感染の危険があるので外部に運ばれます。

¹⁰⁹ 脚注 36 参照。

¹¹⁰ 3日間隔で起こるマラリアの発熱発作。

ベルフ

1943年5月27日

ファン・デル・ヘルダー夫人が（1人で）居住区から出る、なぜなら何か神経の病気で重症だから。スケッパー夫人とエゲンス夫人もこの居住区に住んでいたけれど、彼女たちも出ていく。出る許可を得るのはとても難しい、緊急の場合だけ収容所の医師フェルハールトさんは許可がもらえる。

ヘンケス - ライスダイク

1943年7月22日

アンネとヤン・ヘンドリックは麻疹にもなりました。いまだにまだ熱があり、望ましいことではありません。ヤン・Hは今また高熱と耳痛。ジフテリアが増加し、赤痢患者がたくさんいます。

シスター・ロザリンデ

1943年10月1日

誰もが腕や足に包帯をしている。そしてこれらの傷はふさがるのがとても難しい。ビタミンの欠乏によるものだとのこと¹¹¹。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月5日

学校が全部病院になりました。すなわちラーン・トリヴェリ 97 番地は外科病棟。コレット医師が昨日最初の手術をしました。

¹¹¹ 軽い感染やあるいは裸足で歩くことによる（深く舐まれた）外傷によって、熱帯性あるいは収容所潰瘍が発生する。粗悪な食事やビタミン不足が原因でほとんどが下肢や足に現れる(Co ë lho, p605,823)。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月20日

医師たち、すなわち外科医 2 人、一般医 7 人、耳鼻咽喉科医 1 人、歯科医 3 人、眼科医 1 人、小児科医 1 人。

ヘンケス - ライスダイク

1943年11月13日

アンネが病院へ、赤痢です。愚痴もこぼさず気丈に、ピート・リッシンクが引く荷車（少年たちが病人を運ぶ）に乗って行きました。

ヘンケス - ライスダイク

1943年11月16日

アンネがまた帰宅、これは赤痢ではなかったから、以後ここで病気を回復させることが許されま
す。

シスター・ロザリンデ

1943年11月22日

新しい病棟が 1 つある。病気だった高齢男子たち（ここ「小アデック¹¹²」には 100 人余りの男子がいる）は入院することが全くできなかった。なぜなら病室はすでに女性たちと子供たちによって占められており、男子のための場所がなかったからだ。現在、彼らは少なくとも最初に住んでいた掘っ建て小屋よりはましな看護を受けることができる。この病棟も、いちばん大きな部屋にベッド 3 台置いてあるとても哀れな小さな家で、ベッドの間を斜めに横切ったり壁をはいながら通らなければならない。これは修道会の中では明らかに最も小さく貧素なものだ。私たちにはシーツがなく、洗濯ものをするたらいはない、洗面器なし。男子は順番にバケツで洗われる。椅子はない。ほとんど何もない。でも現在いくらか集められました。私たちはプロテスタントの居住区シスターたちとのあの「素晴らしい」共同作業についてはだまっています。

¹¹² この病棟は男子が収容されていたアデック収容所の名前にちなんで名付けられた。

ヘンケス - ライスダイク

1943年12月15日

クラールチェは丹毒、とても重病。ジョルジーネと私が交代で彼女を介護しています、4人で寝る必要のあるこの小さな部屋では容易いことではありません。…中略… アンネは黄疸で、5日間とても高熱でした。ものすごく弱っています。残念、というのはちょうどまたいくらか回復したばかりだったから。長びくほど薬が減っていきます。流行病が発生しないことを願っています。

ヘンケス - ライスダイク

1944年1月26日

ジョルジーネとリートが熱帯性マラリア¹¹³。2人ともとても重病、でもまだキニーネがあります。現在アネケもかかっています！

ヘンケス - ライスダイク

1944年2月19日

2月1日、グロゴール収容所 1200 人のうち 63 人が熱帯性マラリアでした。ここでは 300 人！ジョルジーネが再発、また病棟で臥せています。…中略… 収容所の中は百日ぜき、いたるところ夜中に咳をする子供たち。キニーネを取りに行った、蓄えはありません。幸いたくさん入荷しました。

ヘンケス - ライスダイク

1944年3月29日

アンネが熱帯チフスにかかる¹¹⁴。ネズミのノミが媒介です。犬のボビーがちょうど最近アンネのベッドでも 2 度ネズミを捕まえました。彼女はもう 10 日間体温が 40 度以上あり、40 度 8 分にさえなりました！私は疲れ果てています、でも幸いまだ自分の手で彼女を介護することが許されています。

¹¹³ 熱帯性マラリアは発熱発作が毎日起る。

¹¹⁴ ノミやダニなどを媒介して発病する感染症で、重い発熱発作、昏迷状態と腸管変調（下痢）が同時に起る(Coelho, p688,820)

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月9日

私はいたるところむくんでいる、顔と両腕が最もひどい。心臓発作と共に始まりました。慢性のビタミン不足。脚気¹¹⁵。私は肉、野菜、くだもの証明を持っています、そして完全に静養することが必要。ヤン・ヘンドリックは数日高熱がありましたが、今はまたいくらか回復しています。家ではみんなが私の仕事をいくらか引き受けてくれる、すばらしい。でも私はこんなに静かにすることを受容することがまったくできません。…中略… これを書いている間、ヤン・Hがまた39度の熱。コレット医師が診察に来ました。幸い盲腸炎ではありません、これが実際何なのか成り行きを見守っていきましょう。

ヘンケス - ライスダイク

1944年6月16日

幸いヤン・Hが回復。私もまた力が半ば出始める、他の人がまた陽気に紅茶やコーヒーをベッドに持ってきてくれます。私は気分が悪く、さらに疲れていてたいてい庭で横たわっています。それでアンネとヤン・Hはほとんど私の傍に座っています。男の人たちはこのような喜びを、そしてまた子供たちが病気の際の悲しみや緊張の時を経験しないことをなんと寂しがっていることでしょう！…中略… 長引くほど病人が増えています。

シスター・ロザリンデ

1944年7月2日

かなり多くの人々が私たちの収容所で死んでいく。このほとんどお年寄りと幼い子供たち。いつももっとひどい収容所の子供たちがほとんどだ。彼女らは赤痢や栄養失調で死亡する、でもニッポンはそれを決して名簿に載せることを許さない。なんと卑劣なこと、彼らは多くの人々が死んでいくのを恐れているのだ。

年老いたひとりのオーストラリア人が「小アデッキ」で死亡した。そこには家族がいなかったため、私たちの中から数人と年老いた男性がただひとり、屍を葬るために一緒に行く必要があった。でもこれを見ることは最も不愉快なことだ。オレンジを入れる箱がひつぎで、中は布張りされておらず、かんなをかけたあとの粗いおがくずが少し入っているだけ。遺体をいれた

¹¹⁵ 一般的に組織交代の障害により、特にビタミンB複合体と動物性タンパクの不足が原因で栄養不良性浮腫になる。ほとんどが足や下肢のむくみから始まり、後には顔（特に睡眠後）や大腿部に及ぶ（Van Velden, p357）。脚注 92 参照。

ひつぎはテーブルの上に置かれ、緑色の敷物がかけられ、濃いブルーの紙でつくられたとても品の悪い花輪—これはニッポンが置いたもの、その横には果物の籠、これは亡き人の魂のためです。哀れなこと！私たちは弔いにやって来たニップに深いお辞儀をしなければならなかった。彼はひつぎの前に立ち、さやから大きな刀を取り出し、彼のカービン銃の上に置き、捧げ銃をし、少しお辞儀をして去った。¹¹⁶

今またひとり子供が亡くなった。彼ら、あのニッポン人たちはなんと不愉快なことだと思っているのだろう。

シスター・ロザリンデ

1944年8月15日

今日、私たちは全員注射を1本（チフス、コレラ、赤痢の予防）受けに行かされた。そして注射を受けたのが3ヶ月前だったとしても、また注射を受けなければならない。ニッポンがそれを望んでいる。

シスター・ロザリンデ

1944年8月19日

小児病院の院長が大きな少年棟をシスター・マチルデに求めた。現在ほぼ4ヵ月慢性間接リウマチのシスター・テオドーラ以外、シスター全員が現在病院で働いている。私たちがカロルス病院にいたなら、彼女は放射線療法ができたことだろうに。現在誰も収容所から出てはいけなく、放射療法のためC B Z（中央市民医療施設）へも行けない。

シスター・ロザリンデ

1944年8月24日

シスター・テオドーラが病院に移送された。彼女は全く回復せず、最近では息苦しがっていた。心臓に何か支障があるのかしら。彼女は病室に臥せているが、とてもおだやかだ。マザー・シリラが彼女の隣に横たわっている。

¹¹⁶ 収容所が軍政下に置かれていた当時、日本人がお辞儀と共に花及び、あるいは果物を具えることによって死者の追悼に何度も来た。死者の数が増えると共にこの寄贈は行なわれなくなった。また木の柩も次第に高価になったので、死者は側面がティカール（竹製のマット）で作られた竹の柩で埋葬された。(Van Velden p374-375)

ああ、門の外にいるあの年老いた紳士たちはなんという状況だろう。病人は手厚く介護されているが、この哀れな人たちは自分でなんとかしなければならない。彼らにはそれができない。神のご恩寵でシスター・オディリアが彼らに包帯をすることが許される。彼女は監視を通り抜けるまでにまず3ヶ所でお辞儀をしなければならない。高齢男子のひとり（二段）ベッドがらもう落ちている。

ヘンケス - ライスダイク

1944年9月2日

リートは目の下に大きなくまを作って蚊帳から見えています。彼女は40度2分の熱があります。…中略… 今リートがはやく回復してくれるなら！

ヘンケス - ライスダイク

1944年9月4日

リートはまだ40度あるいはさらに高い熱があり、何も食べません。私は昼夜看病します。幸い私は元気、でも疲れています。

ヘンケス - ライスダイク

1944年9月6日

遠くで「ケーレー、ナオレー、ケーレー、ナオレー」などと何度も叫んでいるのが聞こえます。私は幸いまだクンプレン[点呼のための整列]をしなくともよい。今は子供たちだけが行く、なぜならリートが病棟で臥せているから。彼女は熱帯チフスでとても重症。8月14日に私たちは全員チフス、赤痢の予防注射を打たれました。

ヘンケス - ライスダイク

1944年11月16日

おたふく風邪にかかった、痛くて、面倒、こっけいなもの！

ヘンケス - ライスダイク

1944年11月21日

11月18日、スピット夫人が亡くなった。この日は4人が埋葬されただけでした（多くが細菌性赤痢と脚気）。…中略… またビタミン B の錠剤を飲んでいますが、再び足がむくみ、そしてものすごく疲れています。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月7日

コレラ¹¹⁷が確認される。1日の死亡者数が恐ろしく増加しています。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月24日

今まで体験した中で最も暗いクリスマスの夜。12月17日、私の友人ヘルダ・Kが赤痢で死亡…80才の老女のように、小さな部屋で3人の他の重病人といっしょに臥せ、ハエに毒されて。何日間も果物なし。全くひとりで、なぜならそこでは訪問が禁じられているから、痛ましい赤痢通りブランタス。看護婦たちは忙しい。自らの汚物にまみれたリノリウムの敷物の上、苦痛にすくみ上がりながら横たわっていました。ああ、筆舌に尽くし難い。彼女の13才になる娘の小さなデーワと私が、最後まで一緒に看取りました。私たちが最後だったので、ひつぎの横に座って炎天下1日中待った後、一緒に彼女の埋葬にも行きました…。この日は6人が埋葬されました。自動車に乗った原住民が墓の番号を私に手渡しました―「奥さん、大切に保存しなさいよ…あの木の十字架は役にたたないが、この183という番号は鉄製の小さなプレートに書かれているからね！」もう少し私たちは静かに墓地を、静寂を満喫しながら歩き、その後また収容所に苦労しながら歩いて戻った。かわいそうな小さなデーワ。今彼女は病気、でも私は彼女を明日ここに連れてこよう。今、恐ろしいくらい多くの若い女性たちが亡くなりました。私たちはずっと空腹のまま、重作業をしなければなりません。でも私たちは気力を保たねばなりません、それが私たちの唯一の救いなのですから。子供たちは愚痴もこぼさず勇敢にベストを尽しています。

¹¹⁷コレリティスは、ここではおそらくある程度腸炎の型をしたコレラを意味している、すなわちコレラ菌によっておこる腸炎。脚注119も参照。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月28日

アンネを小児科医に診察してもらおう。健康、ただ痩せ過ぎています。糖分の欠乏が著しいのです。
…中略… マイエル夫人が長女の命を救うために家ごといくらかの砂糖を物乞いしている。病棟では重病の人にさえ砂糖や特別食がありません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月10日

今月の死亡者は 40 人余り。…中略… アンネがまた病気、内臓の具合が悪い。そして毎晩体温は 38 度以上。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月11日

アンネは 14 日間お腹のために寝ていなければなりません… (果物摂取として) 4 本のバナナとレモン 1 個 を 6 日間もらえる証明をもらいました。薬はありません。彼女は著しく弱っています。バンドンからの人々がたくさん三日熱マラリア (発熱発作が隔日におこるマラリア) を持ち込みました。おそらく旅中の夜、汽車が「どこかで」何時間も停車した時にかかったものでしょう。彼女らの多くが、子供たちなども含め死亡しています。本日、野菜用の車の上に乗せられひつぎが 4 つ入ってきました。14 日間は誰も埋葬のため外部に出ることが許されていません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月13日

アンネの診断証明書が延長されました…果物ももらえます！お腹はおちつき、前以上に空腹、1 日中臥しているけれど、時々外に出ています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月15日

小さなデーワはもう何週間も病院にいます。私は彼女が脚気で、長期入院する必要があるのだろうかと心配しています。リートと私は 2 人とも死ぬほど疲れ果てているけれど、でも私たちの「居場所」はとても楽しい。…中略… いずれにしても私たちは寒くないし、満杯だとしてもかなり大きな家だ。そして私たちの居住区での女医や全部満杯の病棟にいる専門医たちのすばらしい医療援助があります。死亡者数はまた増加の線をたどっています。多くの高齢者たちや子供たちです。この子供たちの死亡では恐れをいだき、多くの人々が気力を失っていきます。ほとんどの人々にはもう抵抗力がないのです。

ブールマ

1945年1月29日

ヘルダおばさんがますますやせ細り、さらに気分が悪くなり、12月17日ブランタス病棟のなか細菌性赤痢で亡くなった、ここではとてもおおくの死人を出し、まだ出している。娘のデーワが全く親切ではないファン・デル・K一家の元に残された。彼女は現在病棟で横たわり、ひどい脚気になっていた。彼女はもっと回復する必要があった、でも少し前に家で寝ていた時よりもかなりよくなっている。その後、彼女はヘンケス夫人のところに健康を取り戻すため14日間行く。ヘンケス夫人はヘルおばさんにデーワの面倒をみることを約束していた。彼女が可能なら、デーワも逃げ出すのを企てている。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月1日

すでに前にも書いたように、私たちはチデンに到着した当初、私たちの満杯の部屋、グダン[倉庫]やガレージの整備に疲れ果て、移送と到着後の疲れで無感覚になっていた。最もひどかったのは私たちが知らないうちに細菌性赤痢に感染し、これがまさに私たちの移送中におこったことを知らされたことだ。私たちはほとんどが実際に使用できるトイレも水道もない家に入った。そして私たちの多くは夜用のおまるがなかった。というのは実は陶器を持ってくるのが許されなかったからだ。いずれにせよ、衛生状態を保つことは現実には不可能だった。個人的に私はこのことを強烈に体験した、というのは赤痢患者 18 人を含む私たち 50 人の家は、私たち自身が食事する床から 2 メートル余り離れた汚物溜めのふたの前にあった。だから私たちガレージの中ではアンケが最初の犠牲者になり、3 日後に入院することができた。今までのところ、家から患者た

ちは、ブランタス通りに臥している、なぜならそこは幸い私たちの到着直前に赤痢病棟として作られていた通りなのだ。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月2日

現在、私たちバンドンからの人間のほとんどが栄養失調をきたしていることがわかる。そして彼女たちバタビアの人々は、私たちは気候がよいためまさに強いグループだろうと期待している。それでゲデック[編んだ竹製の柵]の設置や便所雑役、労働力の補充としてなど、一般的な収容所義務を私たちに与えたのである。あまねくこれを理解した人々にとって一特にリーダーにとっては一私たちの中から毎日のように犠牲者が出るということであった。バンドンからの人々は時間が無かったためこのことがわからず、このことが前もって分っていたらみんな抵抗したことであろう。私の声は砂漠のなかで叫んでいるようなもので、なぜなら 7000 人の女子の仕事数において、私たちのグループに与えられている数が多すぎることは明確でありすぎたから。900 人から 1 ヶ月の間におよそ 34 人が死亡し、2 ヶ月目にはおよそ 90 人が死亡している。490 人のこの班には現在まだ 100 人以上の数の病人がいる。主に赤痢、次に脚気とマラリアを伴うものが先行している。

私はこのような病気報告やそれらの追加報告は、ここに十分に（そして非常によく）医師たちに任せることができるが、一眼を開き耳を傾けていれば一この重い熱帯性の病気は、私たちに心理的圧迫感を与え、対処もしなければならぬし、鉛のように重い難事を押し付けるものであり、そして私たちにはこの危険に対抗する物資も薬もないというイメージを示している。床にはまだ健康な人々の中に細菌性赤痢患者が横たわっている。消毒剤なし、ハエはいる、時間なし、夜の安眠なし。

私自身は 9 才の娘を背負って病棟から運ばなければならなかった、なぜならそうしなければより重症患者のための場所がなかったからだ。病人用の担架では手におえなかった、一日に 40 人を搬入出しているのだ。私たち女性、母親たちは薪なし、アラン[木炭]なし、鍋が欠乏している中、焚き火をするためあくせく働きながら、いかに毎日担架班が搬入出するのを見守っていなければならなかった。そして私たち自身はお互いに他の多くの仕事をこなしながら、携帯用マットレスやその付属品を運び入れるのを手伝った。

これらすべての辛いことは筆舌に尽くし難い。でも分かったことは、いかに医師たちがこの状況を把握していないか、いかに私たちが汚物溜めに一滴のクレゾールやリゾールもなく血液や粘液の入った鍋や缶を心に恐怖をもちながら歩いているかということ。それから一日に 6 回のわずかな食糧、すべてが食べるためにこされ、とても貧しく、補充食ももらえず、わずか 6 日間クンペラン[点呼]なしという条件のもとでのとても感謝すべき回復がある。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月3日

また熱。医師がもうすぐ来る。

ベルフ

1945年2月4日

コッホ先生はまったく元気がない、彼女は激しい仕事で完全にくたばっていて、体重は 42 キロだ。彼女は完全に疲れ果て、彼女を訪れた時(時折私は週に 2 回行く!)にはものすごく驚いた。彼女はこれらあらゆることに強い影響を受け、精神的にまいっていて、私には以前のコッホ先生がほとんど見出せないほどである。この戦争が終わればいいのに。ああ、神様、本当に必要です!

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月5日

また大雨。私は去年の 5 月の病気が再発するのを心配しています。おたふく風邪の後には必ずしも元気ではありません。この時期に元気がないのは大変です。でも私は気力を失いません。…中略…夜。医師が来ました。私は確かにまた脚気。再発。ビタミンBアンプルの処方箋を至急もらう。今晚のうちに彼女は注射しに来てくれました。リートはまた親切。部屋を走りまわり、私が何かをするのを欲さない、彼女自身がとても弱っているのに。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月8日

私たちの家には戦争の悲劇がある。ズワルト一家が 9 才のバルチェを失った。かけ値なく食糧の粗悪さと不足のせいだ。それはすでにカレーから始まっていた。彼女たちにとって今、父親には後に悲劇が訪れる。4 人の娘たちの後にできた唯一の息子だったのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月8日

ヤン・ヘンドリックが「証明書だよ、お母さん」と言って、アニスの実を砂糖でくるんだような味のするサクランボをいくつかくれました。医師は14日間のカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]の証明を書いてくれました。私はさらにむくんでいます。嫌な感じ、いつなくなるのか分らない！

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月10日

この収容所の開け放たれた汚物溜め、クレゾールの不足、そして何千ものハエが、現在細菌性赤痢が蔓延している原因であるのは明らかである。私たちがここへ移送される途中、停車したいいくつかの駅で供給された飲料水も原因に加わるかもしれない！少なくとも、ここではみんな私たちが持ち込んだものだと考えていた、でもどの移送でも女性は疲労困憊によって病気になりやすいということだ。

幸いいくらかユーモアもある、というのはひどくなりすぎた時、ひとり1日3匹のハエを届けなければならないとの命令が来たのだ。残念ながらこれは、行動よりもオランダ女性のあざけりを引き起こした防除法である。ことにこの家のように、命令を守っているところではいちじるしい。少なくともここではお互いにハエを苦勞しながら捕まえている。3時と4時の間には「ハエ、ハエ、ハエ」と言う声が響き、左右から義務づけられた数のハエを入れた箱や紙が運ばれてくる。前にいた家では、人々は見解も実践ももっとずさんだった。そこでは記すべき価値のある自然なユーモアを体験した。

ある日、私は料理をしていた、はかりと地面の上の窯にご注目。薪盗人にならないように、わずかなアラン[木炭]、炭籠のいぐさ、そしてゴミの残りが燃料。でも私はキパス[扇]（ボール紙の一片）であおぎながら、私は壁向こうの隣人の話し、諍いも楽しむことができました。私たちは時折魚があります、そして上に書いたように常にハエがいる。心配そうな声で「エルス、エルス！ちょっと来てみて、私たちの魚は大丈夫かしら、1匹のハエもたかっているわよ」と叫んでいる。これを叫んでいる途中、彼女は何を言ったか気づき、「おやまあ、私はハエがたかっているならば食べ物が悪くなったかと思っていたわ」と笑いながら立ち去った。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月13日

リートがアンネを専門医のところへ連れていきました。彼女は初期の脚気。やはり私が心配していたことです。彼女はカチャン・イジョー[小粒グリルピース]を一日 60 グラムもらいます。ヤン・オルファートは 45 グラム。同じ病気です。ひどく流行しそう。こんなに長期間飢えていれば不思議なことではありません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月16日

リートは私たち一家の看護で疲れ果てています。私は再び洗濯をしようと試みます。ヤン・オルファートはひどい心臓の痛み、かすかにうなりながらベッドに臥せています。ヤン・ヘンドリックの目は普段より 2 倍も大きい。アンネは顔色が悪く、とても衰弱していて半日ベッドで臥せています。これはどこでもです、どの家でも。「ブランタス通り」という言葉はいまだに恐怖です、誰かが行くことになると、人々はまるでお葬式の時のように泣いています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月22日

アネケはちょうどアンネが戻ってきたばかりの歯科医のところでは。臼歯が抜かれました。彼女は今また忘れていました。抜くこと以外はほとんどなにも行われません。最もひどい虫歯のみ一時的に充填されます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月25日

ヤン・ヘンドリックも現在カチャン・イジョー[小粒グリルピース]証明があります。アンネとヤン・オルファートの証明書が延長されました。ポスチュマ医師は動揺していません、この脚気が回復するだろうと思っています。私は子供たちの脚気の方が私自身のよりもずっとひどいと思っています、彼らは成長期なのです…。飢えていることも子供たちにとっては最も辛いことです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月3日

実際今日はもう私の指は全部無感覚です。もう疼きもしません、親指以外は感覚がありません。ヤン・ヘンドリックはまたかなりの高熱、心臓の痛み、そしてめまい。ヤン・オルファートも全く同じ…。どうなることでしょうか？…中略… 私の窓から毒を盛られたネズミを食べて死んだミミ猫のお墓がみえます。子供たちは無意識に、ラーンホフ¹¹⁸の私たち自身の墓地に列をなしてたっているような…黒字で書かれた木の十字架をたてています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月4日

子供たちは眠っています。ヤン・ヘンドリックは多分水疱瘡です…彼はすでに恐ろしく衰弱しています。…中略… 9時、メガホン：「看護婦全員と准看護婦は9時半に正門に集合すること！」（これはだから主に赤痢病棟のため！）トゥルディーは元気がありません、今（9時半）熱がはじめています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月5日

トゥルディーの体温が急速に上昇、おまるの中味は…いつものこと。疑いなし、10時半にはもうオガン通り（赤痢病棟）に横たわりました。そこではちょうど看護婦全員がクンプレン[点呼のため整列した]

しています。リートがベッドを整え、蚊帳を掛け、担架で病棟に運ばれたトゥルディーをその中に横たえました（リートは自分で暗いなか、マットレス、蚊帳、おまるや小さなトランクを荷車にのせて運びました！）。看護婦たちがきつと彼女を見つけることでしょうか…。真っ暗闇の夜で、リートが家に戻った時に私たちはお茶をのみ、トゥルディーのパンを一枚ずつ食べました（これは現在彼女が食べてはいけなないもの）。私は今朝早く、彼女が母親と小さな二人の子供たちといっしょに分け合っていた部屋全部を消毒しました。誰も感染していないこと、そして彼女が早く良くなることを願いましょう。彼女ももう長いことひどい脚気だったのです。私たちの家からオガン通りへ行ったのは彼女で二人目です。

¹¹⁸ ラーンホフは収容所の死亡者を埋葬したペタムブラン（チデン収容所の西、鉄道の反対側に位置する）の墓地である。戦前ラーンホフはヨーロッパ人とクリスチャン原住民のための墓地であった（M. E. de Vletterなど、1942年バタビア電話帳）。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月8日

私は今日また「かすんで」（多くの人々にある目眩や弱気についての友人の言いまわし）います。一日中あくびをして震えがあり、何時間もずっと眠りこけています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月15日

今朝、リスベス・ヤンセンが埋葬されました。夜中に突然死亡しました。13才です。子供たちはとてもびっくりしています。リートと私は一緒にチャペル・アルデンテ（死者の霊安室）まで行きました。…中略… レニー・スローテマーカーが輸血されました。私は最悪の事態を心配しています…。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月18日

日曜日。また惨めな気分。昨日からひどい胃痙攣…でも内臓障害でないことを感謝。昨日私たちの家から1人オガン通りに運ばれました…トゥルディーは幸い良くなっています！現在4人が横たわっています、その他、家ではまだ6人が病気、かなりの重症、でも病棟の一つには入れません。ほとんどどの家でもそうです。流行性胃腸炎、腸炎¹¹⁹が流行しています、多くが実際赤痢に移行します。そして移行しない場合には、恐怖が人々を衰弱させています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月19日

オガン通りは半ば回復した患者が家に送り戻されるほど超満杯です。トゥルディーは他の人たちとともに家に戻ってきました、彼女の周りで見たこと、そして隔離されていたことへの悲惨さに暗く悲しみながら。なぜならそこでは誰もが死への準備をしていて、ほとんどが死んで行きます。食事はものすごく少ない、朝は冷たい粥、ほとんど飲み物はありません。看護する人々には愛情が欠けています、それに病人食を盗んで食べる看護婦さえいます…。…中略…レニー・スローテ

¹¹⁹ 小腸の炎症、ここでは感染性のものである。

マーカーが亡くなりました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月20日

ヤン・ヘンドリックはお腹の具合がとても悪い。…中略… リートと私はこれからレニーの埋葬に行きます。誰もいっしょに外部に出ることは許されません。入ってくる群衆¹²⁰の間をぬって、自動車が出発するでしょう。…中略… 墓地ではレニーのひつぎに誰も最後の花を捧げられないでしょう。かわいそうなレニー、班のためにとても熱心に働いたのに…班ではどれほどの人がこのことを知っているのでしょうか？すべてが迅速に行なわれます、時には死亡から埋葬まで半時間以内です。…中略…

ヤン・ヘンドリックはひどい痙攣の後、おまるいっぱい血と粘液。これさえもまだ加わるのです。この小さな少年は今弱り、疲れ果てて私によりかかって…彼はこのことをよく理解しているので泣いています。

2時。すでに彼はオガン通り（赤痢病棟）へ向かっています。私はもう対処できません…どれくらいこの幼い息子に会えないのでしょうか？私たちは彼の傍に行くことが許されていません。一日1度だけ熱湯消毒された洗濯物を取りに行きます。涙ぐんだ眼で元気良く私に手をふりながら、彼は荷車で運び去られました。リートは忙しく働く、病人を送り出したり、迎えに行ったり。そして私はここで何もしないで横たわり、考えているだけ…ああ、神様、ずっと考えていること、そして無力感はとても辛いものです…。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月21日

1昼夜、また痙攣がありました、眠れず、ヤン・ヘンドリックのことを思っていました、このような夜はなんと長く感じられることか。…中略… クロウディーン・シヘンバーク・ファン・Hの二人の息子がオガン通りの病棟で臥せています。私は昨日の午後5時、荷車で専門医のライケブッシュ医師まで行かねばなりません。中に入ってくる人々の運搬で彼女はいませんでした。リートが私を遠くからヤン・ヘンドリックが見られるようにちょっとオガン通りまで引っ張って行きました。そこでクロウディーンと出会いました。私たちはロープのそばでいっしょに少し泣きました。

¹²⁰ 「移送と収容」ヘンケス - ライスダイクの日記断片 1945年3月19日、20日参照。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月22日

胃痙攣が内臓疾患になっています…でも私はこの胃痙攣のほうがいい…さらにひどくならなければ。アンネもそう、でも彼女はまだ熱心にリートおばさんの手伝いをしている。私がリートを頼りにするようにつめると、彼女はおまるとバケツを持ってかけてくる。幸い彼女は今日「受け取り番」ではない。私はバケツに「浮かんだ」ものといっしょに残された自分自身を笑っています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月23日

39度、昨日は40度2分。私たちはもうそれほど辛いことだとは思わなくなりました。辛いのは、2日間食べていないことです。お腹が落ち着いてきたような感じがします。惨めな気持ちです。ジョルジーネが私を洗いに来ました。これは私が洗う気力もない日々を送った後ではとてもぜいたくなことでした。ただ背中の中の痛みはほとんど耐えられないものになっています。ヤン・ヘンドリックが病棟に私の寝台の蚊帳を持っていったため、ことに夜中アンネの木製の簡易寝台に横たわっている時には、痛くてどう横たわっているのか分かりません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月24日

体温が下がっています。お腹のことで不安になります、ひどい病気だと感じています…夜が一番辛い、恐ろしい。

3時。ウィレンガ医師¹²¹が来て…ちょうどおまるを見ました…でもわかってくれ、私は家にいてもよいとのこと。私たちにはまだいくらリゾールがあります、彼女は私が2日間果物、さらにその後4日間柔らかい食事とパン粥をもらえるようにするつもりです。

6時半。身をくるまれ荷車でライケブッシュ医師のところへ行った。体重45キロ。カチャン・イジョー[小粒グリーンピース]と野菜の証明書も加えてもらいました…。この飢えの時期なんというぜいたくでしょう！14日後にまた戻って来ねばなりません、そしてずっと横たわっていなければなりません。素晴らしい、優しい女医、迅速に働き、我慢強い。すぐに彼女と私た

¹²¹ A.B.ウィレンガ - ベルフマンス医師の夫で、パロス6号収容所などに収容されていたD.K.ウィレンガ牧師は、戦後「Mijn sponde in het dodenrijk」という題名で彼の収容所体験を記した（Kampen, 1968年）。

ちの小さなデーワのことを話しました。彼女は今の所まだ病棟にとどまる必要があります。そしてソネイが再度病人を送り帰せば、彼女は直ぐに私たちのところに運ばれるでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月25日

ものすごく嫌な夜を過ごしました、寒くてじめじめし、ひどくさえきった頭。眠れなかったし、ひどい腹痛。リートが私をヤン・ヘンドリックの毛糸のセーターでこすってくれました、いくらか温かくなります。私たちには湯たんぽにいれる温水はありません、私はとても寒くてしゃべれなかったし、動くこともできませんでした…。私はこの寒く長い夜中、考えるこんでいるだけ。私は回復したい、私は子供たちとリートの傍にいたい、でも疲れ果ててしまったと感じています。

ブルーマ

1945年3月26日

ママはもう2週間半ベッドに横たわっている、最初は脚気、そして現在は右足のひどいおでき、これはひどい痛みがあったもので、まだ痛んでいる。わたしはおろかにも百日ぜきにかかって、先週の水曜日にはさらにインフルエンザにもかかった。わたしはまだ部屋の中にいる。現在、収容所全体がわずかな食事でまいていて、わたしたちは何も持っていなかったの、まさしく2人とも病気にならねばならなかった。わたしはまず熱帯性かいようになったが、いまは回復した。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月26日

ヘニー・T・クラウトホフから蚊帳を借ることができ、自分のベッドで眠りました。沈んだ気持ちになり冷や汗にまみれたあの長い長い夜を過ごした後、本当にやっと眠れました…。目覚めは新しい生活の始まりのようです。…中略… ヤン・ヘンドリックは回復してきています。彼は宿題を求めました。明日私が元気になれば、彼に宿題をだしましょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月28日

現在ほとんど誰もがかかっているお腹の変調は腸炎で、ささいな動きでも痙攣が起きるほどひどいものです。…中略… ヤン・ヘンドリックのお腹はほんとうによくなってきています、でも熱がまだあります。だからまだ家に戻ることが許されません。怖れながら、私はずっと彼の洗濯物を見ていました…。もし古い布を求められたら、駄目だということです。おむつを替えることさえできないということだから。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月30日

ヤン・ヘンドリックがいなくてとても淋しいと思っています、早く家にもどって欲しいと。幸い私たちは2人とも事無きを得ました。デ・ローズ看護婦のおかげで、小児棟の食事は成人棟よりもたっぷりです。ものすごく外に出て太陽の下を歩きたい気分です。私はどん底を通り越し、毎日ではないにせよかなり定期的にもらう証明書のおかげで、またすぐに元気になるでしょう。

突然、私たちの向かい側に住んでいるアドミラル夫人が死亡…また母親のない小さな娘ができる。数日前に話したばかりの人が亡くなるのは奇妙なものです。おそらくまたコレラだったのでしょう。これはだれも生き延びることができません。子供たちはほとんど引きつけをおこして死亡します。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月1日

ヤン・ヘンドリックはまだ家に戻ることが許されません。今朝、足が不安定で、リートのささえで初めて水浴しました。今、座ろうとしています。また良くなったのがとてもうれしい、とても元気がでます、歌い出したいほど…。リートの聞いているところではしないことにしよう！

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月3日

アンネがまた数日臥せていなければならない。また彼女のお腹の具合が悪い。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月5日

今朝とても早い時間に隣人で子供たちの友だちのウォルター・ファン・クリーケンが亡くなりました。彼が運び去られる時、私たちは子供たちを家のなかに入れておきました。とても心配しながら子供たちは何があったのかと尋ねました…母親がひどく泣いていたから。数日前には彼を木から追い立てたばかりなのに。気持ちの良いいたずら坊主で、いきいきし、とても健康だったのに…。今、もうすぐ埋葬されるでしょう。

12時。リートと私は墓地へ行きました。ひつぎに釘打つ音が聞こえている時、少しオルガンが鳴りました…。また父なる神の短いお祈り。自動車があと数人の死者と共に走り去りました…誰もいっしょに行けません。

2時半。たった今アンネを小児病棟に連れて行きました。私のまわりは空っぽで静か、今2人ともいません。彼女は近ごろとても衰弱し、ヘルマーナ・ポストゥマ医師は彼女をあえて家においておくことができなかつたのです。このほうがいいけれど、私はほとんどこのことに慣れることができません…。

夜。また1日がすぎる…1日？ まるで1ヵ月のようです、またいろんなことが起きました。リートと私は外で静かに座っています。ほとんど話しはしません、でもリートは私が心の中で思っていることをとても良く理解してくれています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月7日

今日の夜はむくんで固くなった足、でもレンチェス医師をみつけるため病棟に歩いて行き、ヤン・ヘンドリックがおそらく家に戻ることが許されることになりました。アンネのお腹はまだひどい、でもよりよい食事と検査を続行すればおそらく助けになるでしょう。私がヤン・ヘンドリックを静かに私の腕に抱いた時、この置き去りにされた小さな痩せた子はとても強がっていました…その後で振り返ってみると、彼は顔をタオルに埋めて泣いていました…。ウィル、あなたを見ることなく、彼のしぐさは全くあなたと同じです。彼の心遣いと冗談、私を郷愁に導きまです。声と動き、言いまわしなど、一日中私はあなたが私の傍にいますように感じます。私はまだすごく幸せ、あなたはとても多くを取り逃がしています、また彼らが早く私の傍にいたら…。アンネは気丈でかわいい。明日はヤン・オルファートがアンネのいる病棟に同じ理由で行かねばなりません。

ボルハイス - スキルストラ

1945年4月8日

女子と子供たちがますます衰弱していき、毎日のように栄養不足と伝染病の犠牲者がでる。…中略… 同室のトゥルース・ズワルトはすでにおよそ5週間重病、赤痢とマラリア。すでに3度輸血されていた。この頃ではマラリアと闘っている。とても厳しい、この一家は8週間前にも男の子を亡くしている。ベップ・ファン・オーイェンは9週間病棟で臥せている。本当はすでに12月25日から病気、彼女の持病とアメーバ赤痢¹²²。現在、およそ3週間家にいて、また胃腸障害と熱で横たわっている。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月8日

ああ、ありがたい。ヤン・ヘンドリックが家に戻りました！荷車でマットレスを上に乗せて、私は自分で彼を家に連れ戻しました。リートは同じ荷車でヤン・オルファートを運び出しました。ヤン・Hは家をとっても恋しがっていました。彼が私を見る時は、目から涙をこぼし、長くなり過ぎた髪の毛の小さな赤い頬を私に押し付けています。傍の二段ベッドの音が聞こえ、そして再び夜中に子供をおまるの手助けできるのはすばらしい。

ヤン・オルファートは病棟のアンネの部屋で臥せています。彼らは一緒に楽しく過ごしておいしい食事のことを話しています。朝、彼らは外の木の下で横たわっています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月11日

私の上顎に膿瘍、ものすごく腫れて、顔をすごい布でくるみ、またベッドで寝ています。リートは風邪をひくのをとっても怖れています…彼女は「口内炎」を恐れ、だから布でくるむよう促したのです！私は夜中モルヒネを打ってもらいました。

¹²² 脚注 36 参照。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月12日

腫れが引かない、痛みは幸い引いた！多分明日、奥歯を抜いてもらえます。…中略…
赤痢病棟は2日間ですべてムシ通りの端に移りました。看護に関しては、今大部屋があるのでより簡単になります。この病棟はゲデック[竹で編んだ柵]によって居住区から隔てられています。でも現在は細菌性赤痢より腸炎患者のほうが多く横たわっています。この病気で死に至ることは少ないですが。…中略…

ヤン・Hはまだ柔らかい食事をもらっている。アネケと私は二人ともカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]の証明書があります。加えて私の野菜証明書。でもこの補充食にもかかわらず私の脚気はさらにまたひどくなっています。横たわることによって、私の足はまた生き返りはじめました…最初は震えながら、そして今感覚さえも取り戻しています。自分自身をよくみると、ちょうどスローモーション映画のよう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月17日

奥歯が抜かれる…わずかな麻酔では「容易い」ことではない。アンネは顔色がいくらか良くなってきている、無関心な顔つきがなくなりました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月20日

トゥルディーが赤痢病棟から家に戻ってきて（再発で戻っていましたが）、場所が空いたら他の病棟に行きます。アンネが突然家に戻りました、場所がもう無いのです。彼女は元気、でもとても弱っています。

毎日多くの死者。ヨー・ファン・メウスが居住区に戻りました¹²³。とても重症、でも不滅みたい！

ヘンケス - ライスダイク

¹²³ ヨー・ファン・メウスはマテル・ドロロサ病院収容所に入院していた。脚注 26 参照。

1945年4月23日

医師の協議…診断証明書はもうでない、全部みんなのもの、さもなければ強い人々が衰弱し過ぎてしまいます。ビタミンBの錠剤がなければ、代わりにカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]だけ。ヨー・ファン・メウスはよき牧舎での病人と死者に関して暗い報告をしました。この居住区では毎日少なくとも3人亡くなっています。…中略…

再び男性の医師たち¹²⁴が歩き回っているのを見るのはうれしい。私たちのために何かできるのでしょうか？テウニッセン医師も。衛生環境面で多くがなされる必要があります、ここは何も構わなくなった不潔で落ちぶれた女性たちの群れです。人々は夜中、家の前にある溝の上に「しゃがんでいる」…偶然溝の横に落ちた場合には、彼女たちは単にそのままにしておく！リートと私はベッドにいて、彼女たちが「用を足す」のが聞こえます。

ブルーマ

1945年5月7日

ママは足のおできでもう4週間外科病とうで横たわっている。今ほとんどきれいになってすでに閉じはじめている。脚気には幸い錠剤がもらえた。ママは本当にひどくなりかけていたのだ。…中略… 今、わたしはどうしていいかわからないほど気力がない、わたしは歯医者にいかなくてはならないのに！プー！奥歯に2つ大きな穴がある。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月14日

リートと4人の子供たちはみんな病気…クンプル[点呼のため整列する]できるのは私ただ一人。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月16日

ひつぎはもうありません。ティカース[ござ]と竹にくるまって死者は外に運び出されます。今、多くの子供たちが死んでいます。…中略… アンネは赤十字の小包からの複合ビタミン剤を持っ

¹²⁴ P.M.ファン・ウルフテン医師とC.A.デ・レーデ医師を含むこれらの医師たちは、数日前にグロゴール収容所から戻って来ていた。「移送と収容」日記断片ヘンケス - ライスダイク 1945年4月18日参照。

ています。ペラグラ（足の火傷の跡で絶えず発熱発作を起こす）¹²⁵はこれで消えるようです。…中略… 私たちはみんなひどい風邪をひいています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月28日

昨日、耳鼻咽喉科のファン・ハッセルト医師が赤痢で亡くなりました。さまざまな女性が死の床に、そしてまた多くの死者がいます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月2日

今朝 3人の埋葬…ほとんど「出棺」しないうちに、また4人が横たわっています。

ブールマ

1945年6月7日

ママがまた足のむくみの厄介になっている、そしてそのせいで傷が閉じない。彼女の体重は 37.5 キロしかない。でもいろんな人は、ママの顔色が良くなったし太っていると思っている。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月7日

アンネとヤン・ヘンドリック 2人とも、そして私も 3週間のカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]証明をもらいました。私はまた錠剤を飲む必要があります、これは赤十字小包のおかげで、非常にわずかながらも再び続けられます。私はまた心臓発作、そして全面的にむくんでいます。

ヘンケス - ライスダイク

¹²⁵ ビタミンB5（臓物、玄米、イーストに含まれる）の不足による食品中の慢性ニコチン酸欠乏は、赤から茶色のしみを伴うペラグラ症皮膚炎が現れる重要な要因である(Co ë lho, p851)。

1945年6月10日

私はリートのことが心配、彼女はお腹の具合が悪く、恐ろしく痩せ細っています。彼女は今日の午後友だちの庭で横たわっていました…でももうしないことだろう、そこまで行くことだけで疲れてしまうのです。できることはほとんどありません、ただ本当に必要な人だけビタミン剤がもらえます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月15日

ビタミン療法はなにも助けになりませんでした。ひじ、お腹、頬はむくんだままです。とても疲れている、にもかかわらず眠ることはほとんどできません。枕をお腹に固く押し当てると、少し悩ましい空腹感がなくなります。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月25日

昨日はリー・スミットの誕生日（彼女の夫はバタビアのHBM（オランダコンクリート会社）の部長）、彼女は病気で蒼白く、高熱です。彼女が心配です。ジョルジーネの誕生日…彼女も病気でやせ細っています、気力を失い、ずっと高熱が続いています。…中略…

人々の60%は現在、食後にかなりの痙攣を伴う腸炎（慢性下痢）にかかっています。空腹の時に一番具合が良い、だから多くの人々は食事を残し始めています。また長期にわたる黄疸もあり、人々は食事をすることができません。飢餓浮腫が続き、食事を摂取できなくなり、数週間後には死に至ります。

3人、4人が同時に死亡すると一たびたび1日2度—「1つに束ねられ」そして並列されず、横向けに入れられます。赤鉛筆で名前が書かれ…しかるべき木の十字架が来て、実際に立つ？ これは本当に重要なのでしょうか？ 私たちにはもう何も意味しません。愚かな生活を一少なくともこれを生活と呼ぶならば—食事に何がもらえるか、いつ私たちの番がくるのが…を知りたいと思いつながり続けていきます。子供たちはますます増える群衆の中、柵の傍でバケツやたらいを持って「受け取り番」を待っています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月29日

ますます多くの人が死んでいく…たまたま 1 週間あとになって親友が亡くなったことを聞くことがしばしばあります。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月2日

私たちの部屋の女性 2 人は重病。…中略… 病人移送の患者が中に…家は満杯で赤痢患者はもう入院することができません。…中略…

4 時。一息いれるために少しベッドに横たわります。左下でエルス・V（部屋の反対側半分）がひどい痙攣でおまるの上にしゃがんでいます。右下のアンネも同様。ヤン・オルファートはほとんど泣きながら彼の順番を待っています…吐き気をもよおすような赤痢の匂いがこの狭い部屋にこもっています。アンネは眠っています、また 39 度以上の熱があります。ヤン・ヘンドリックは元気、この小さな毛羽立った頭は父親と同様にたくましいのです！V夫人は重病、同室の 11 人のうち健康なのは 4 人だけ…。そのうち 2 人は赤痢でおそろしく臭い。今私たちの部屋のことだけを書いています…。家全体、居住区全体がそうなのです。ふたなしの溝になにもかも捨てられています、私たちの家から数メートルのところで、私たちが食事を入れたたらいをもって通るところです。消毒剤はもうありません。食事時には何千ものハエを追うために部屋を暗くしています。血と未消化の便の臭いも私は忘れないでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月6日

明日、リートが出て行きます。彼女はとても衰弱しているのでもう家にとどまることが許されません。とてもひどい場合のみ入院可能です。私は疲れ果て、悲しんでいます。昼夜おまるを空にすることに明け暮れています。アンネはいくらか回復、でもアネケもヤン・オルファートも 2 人ともベッドで臥せています。アンネとヤン・ヘンドリックはありがたいことにお粥がおいしいと感じています！

昨日 2 度夜のクンプル[夜間点呼]、人を破滅に追いやり、そして私は粥を取りに行く受け取り番でもありました。たらいに 54 リットルです！2 人の患者を洗い、洗濯をします。リートが早く良くなってくれるといい。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月7日

この出来事¹²⁶によって、私の庭がゲデック[竹で編んだ柵]の外になった。残念だ、なぜなら空腹でうなっていたにもかかわらずそこで毎日半時間は働いていた一棒のように痩せ日焼けするほど訓練し続け、でもまだ日焼けに対処でき、筋肉はまだコントロールできていた。忙しくしていることは私のスローガンだったのでずっと重労働の家事もしていた。私は最後の栄光がみえる、でもここ飢えた収容所の生活に関してはまだたくさん語ることができる。アンケが水疱瘡にかかり、その後5日熱になったので、初めてその間2日間ポステュマ医師のところに行ける権利を得、その結果徹底的に検査がされ、3週間60グラムのカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]。すなわち重大な理由はこの愛らしいやせっぽの体重が21キロ(彼女は10才)だけということだった。彼女は8ヵ月前カレースではおよそ29キロあった。ここでは平均体重がとても低いので、補充食が配慮されるためには本当に病気でなければならない。…中略…

アンケはカチャン・イジョー療法の後かなり回復し、体重も1キロ増えた。彼女は活発で恐ろしく痩せてはいるけれどこの状況下では健康にみえる。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月11日

7月9日、リートが入院。私たちはずっとお互いに長い手紙を書いています。黄疸が広まっています。すなわち砂糖を嫌悪し、食欲がなくなることです。医師たちはなるべく食事をすることをすすめています。一日に平均4人の埋葬があります。ほとんどみんな浮腫になっています。現在はペラグラにも、これは非常に苦痛を伴う手足の皮膚炎症で、火傷の傷として手当てされますが悲惨なありさまです。

5時。38度の熱、下痢でみじめ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月14日

リートはもう食欲がない、すでに私がとても心配していたことでした。ヤン・オルファートはかなりよくなっています、私は彼にまた明るさが戻るよう努めています。

ブールマ

¹²⁶ 所謂「サンバルテルミーの虐殺」と呼ばれた収容所縮小のこと。「序」p4-5 参照。

1945年7月15日

今日、ヘネクイン先生がチフスで亡くなった。以前はとてもたくましい女性だったのに、でもすでに弱って抵抗力がなかったのだ。すでにもうたくさんコタ・パリからの人々が亡くなっている。デ・ワイヤー夫人、フレッチャー夫人、ヘルミンちゃん、ワーゲンフォールデさん、テルワイ夫妻、ヘルマンズさん、デ・フロート夫人、オーバーダイクさん、ミケ・クレーフェルス、ファン・デル・ヒュールさん、ニーデラー夫人、ケニンクさん。ファン・デ・K夫人の旦那さまが亡くなり、チタルム 10 番地の貴婦人ワウト夫人も。年老いたR・v・O夫人は重病、すなわちひどい脚気。ディディお婆さんはものすごく弱っている、彼女はお腹のぐあいがよくない。これはもちろんものすごく体重がへったから、75 キロから 42 キロにだ。さて、これは明るい話してはない、もうやめよう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月15日

輝くばかりの日曜日、静寂。イエット・ヘネクインが埋葬されました、2、3 週間前にはまだ丈夫でした。赤痢で抵抗力がもはやありません。ヤン・オルファートは回復しつつあります、よく眠ります。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月17日

お腹の痙攣がさらにひどくなる。子供たちといっしょにおまるを持ってクンプル[点呼]に行きます。アンネとヤン・ヘンドリックもまた始まっています。痙攣ごとにおそれとおのきがやってきます。多くの人々がまた死んでいるのは恐ろしいことです…みんな私たちと同じことを願い、計画を立てていた人々。居住区の大部分が現在病気で、その他は半病人です。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月19日

お腹の痙攣はいくらもおさまっています、毎回食事のあとでデルマトルをひとつまみ摂取し、古

い東インドの療法でよく効くといわれているオバットゥ・セリアワン¹²⁷を入れてお茶を入れます。…中略… 近頃の週ではいくらか食糧に変化がでてきましたが、まだ一日に少なくとも3回埋葬があります。私たちは果物、砂糖と脂肪を強烈に欲しています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月22日

子供たちのちいさなお友達が突然死亡しました。このことをその母親は身を持って知らず、知らされもせず、重病で赤痢病棟に臥せています。半年前にも全く同じことが別のお友達にありました。週に何度か病気の友人を家で洗い介護する1人の女性が昨日またやってきました…ベッドは空っぽ。彼女はトラックがすでに出発しようとしている正門にやっとたどりつくことができました。人々は彼女に警告することさえできなかったのです。4人が運び去られ、他の2人はまた横たわって待っています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月27日

ヤン・ヘンドリックのおまるにまた血液と粘液が混じっています。検査にだしました。陽性…でも病棟には場所がなく、彼はほとんど熱がありません。私はここに彼をおいておきたいと願っています（赤痢せず）。私自身は1日4、5回かなりの痙攣があります、夜中はたいてい2回あります。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月28日

7月7日は受取り番でかなり気分が悪かった。仕事の後で計った体温は昨夜39度3分あったことが分った。現在38度5分になっている。特配の米が来たので、もう一度たらいを持ってバタンハリ調理場まで行って来た。日曜日、私の喉が腫れた。3日後に私は膿瘍で病棟に入院。そこでちょうど息子のマイントの誕生日7月21日まで臥せていた。特配の食事が喉を通る、ライケブッシュ医師と24錠の硫黄剤¹²⁸が助けになった。私はひどい病気だった、最後に残った脂肪を

¹²⁷ 本来は皮膚の傷を消毒する粉末だが、胃腸障害にも使用される。酸を中性化する働きがある。オバットゥ・セリアワンは植物の葉から作られた熱帯性アフタの薬である。

¹²⁸ 硫黄を含んだ殺菌作用のある治療薬。

失ったが、まだぼろぼろのボールみたいでも回復したことを感謝しなければ。そこではペンドポ [パビリオン]で1週間に35人が亡くなる、平均一日4人。そこでは望みもなく痛ましく、栄養失調性浮腫の女性たちが飢えながら横たわっている。…中略…

私は48キロ、まだいいほうらしい。でも私の身長が1メートル75センチなのは考慮に入っていない。私が家に戻った日、B・ファン・Gが私のベッドにまだむくんだ脚で横たわっていた。イルゼ・ファーガソンは死亡した。これらの悲劇、理解しがたい。…中略… 私の喉はR医師に診てもらっている。膿瘍の具合はよくなったようだ、ほとんど切断する必要があったのに。…中略… アンケは調子がとても良くて、私が回復するまで手助けしてくれているし、いまだに私の支えである。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月29日

今晚、また隣人のフリーリング夫人が死亡しました。現在、2軒の家はすでに何百人もの孤児たちで満たされています、彼らは不潔で汚れておりできる限り面倒を見る必要があります。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月30日

ヤン・ヘンドリックがまたかなり回復。ありがたいことに病棟に行かなくてよい。…中略… 私は今日ロウの脂肪でパンケーキを焼き、病棟で臥せているリートに温かい一切れをこっそり運び込みました… 彼女はおいしそうに食べました、食欲が戻っています。よい徴候！

ブルマ

1945年8月2日

わたしはまだ台所ではたらいしている、まだなんとか持ちこたえているけれど、今すごい風邪をひいている。…中略… これが早く終わってほしい、なぜならわたしたちはみんな無関心で、ある人は他の人よりひどい。現在、1日に6人か7人亡くなっている。

ボルハイス - スキルストラ

1945年8月5日

喉はよくなったと診断された。…中略… ベップ・テ・Rは細菌性赤痢で、ベッドを待っている、すでに35人が病棟への名簿に載っている。今月は75人の死亡者。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月10日

リートは2回目のアクリフラビンの浣腸¹²⁹を受けます、具合がまたよくないのです。私たちの部屋からまたひとり赤痢病棟に。明日は他の人が普通の病院へ行きます、病的に衰弱しやせ細っているフィッサー夫人です。私は本当に良くなっている、違う人間になったみたいに感じています！ヤン・オルファートだけがいまだに「お腹」の厄介になっています。アンネは定期的に高熱を伴うペラグラで、数日臥せた後にまたほとんど回復します。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月14日

バンザーイ！リートが昨日家に戻ってきた、病棟で場所を開けねばならなかったのです。私がまた彼女の看護が許されることを心から感謝しています。

ボルハイス - スキルストラ

1945年8月16日

最近6週間で平均1日5人の死者が収容所から運び出されている。現実はおそらく私たちが知っているよりもっとひどいことだろう。

¹²⁹ アクリフラビンは防腐剤で、黄色状の殺菌溶液。ここでは浣腸液（浣腸）として投与された。

ブールマ

1945年8月16日

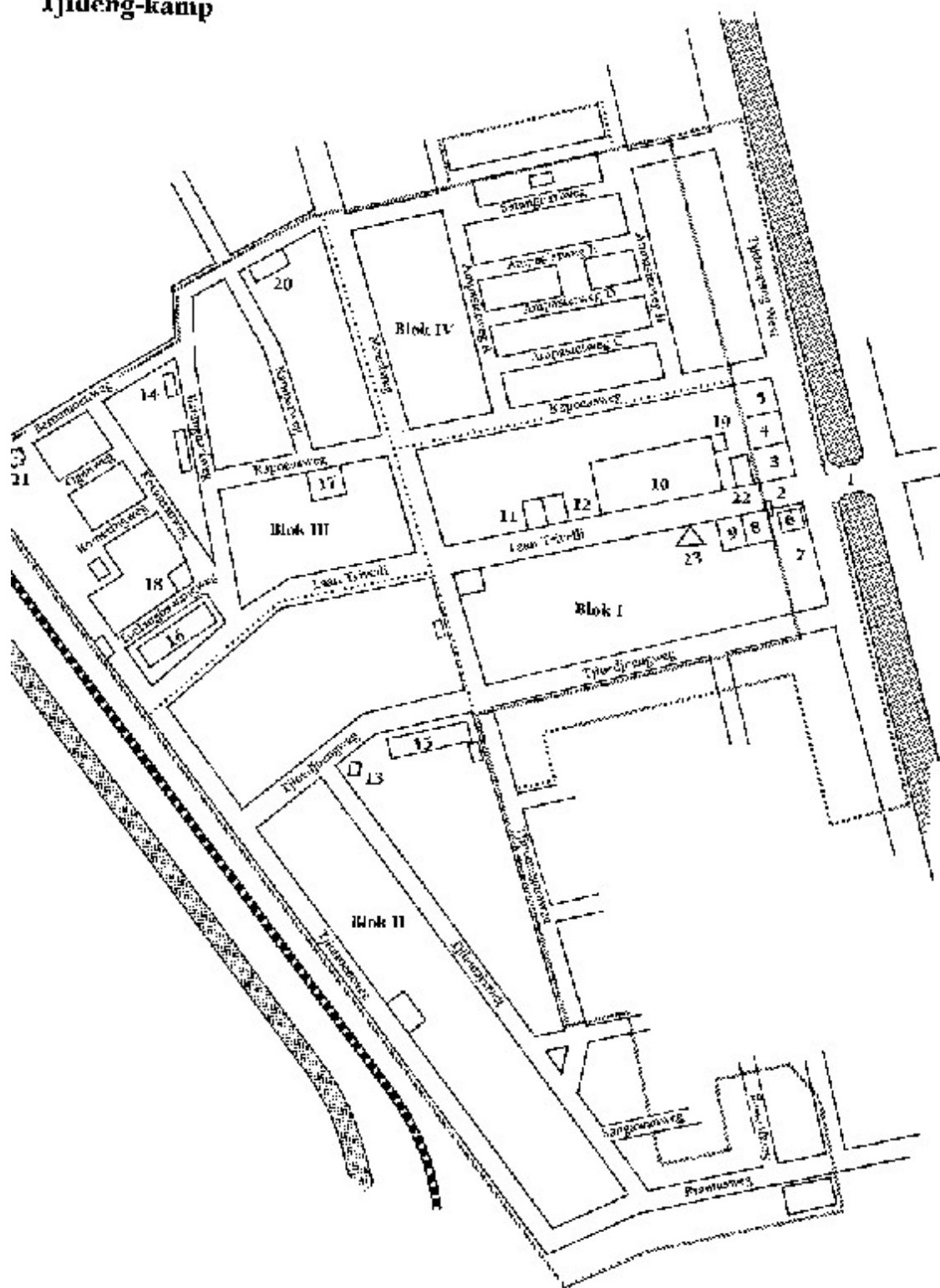
クスリが全部開放される。この居住区においてある戸棚から、毎月ある程度の数が提供されていた、でも今それが開放され自由に使ってもよい。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月17日

昨晚遅く薬品が4箱入って来ました。このことを私たちはどう考えてよいのか分かりません。…中略… 「オバットゥ棚[薬品戸棚]」の鍵がここに数ヶ月来住んでいる薬剤師のフェルグルーセンに与えられています…病人たちへの救済！

Tjideng-kamp



チデンの地図。



日本軍降伏後、チデンの門が開放される。



日本軍降伏後のチデンの家屋。

教育・娯楽・宗教関係

ヘンケス - ライスダイク

1942年11月8日

私たちの家の向かい側にある古い原住民の学校で、今日のはじめての礼拝がありました。最初は御ミサ、その後は私たちの礼拝のために全部椅子の向きを変えます。

ベルフ

1942年12月25日

ラテン語は進歩している。今週シーザーから始めた、だからだいたいギムナジウムの2年生の終わりくらい。現在文法1回に対してシーザーを2回する、なぜならもちろん文法がまだ全然終わっていないからだ、ただ必要なところだけ終わっている。動名詞、受動分詞と絶対奪格そして分詞と複数不定詞などだ。今ちょうどシーザーを少し読んだところ、知らない単語はあまりないと分かった。これは単語リストに学校文学に載っている単語が出来るだけたくさん含まれているからだ。文法では1600語くらいが必要、そのうち私は1300語くらい知っている。

私はラテン語が大好き、コッホ先生も。この授業がなかったら、まあ他の授業をとっていたけど。でもこんな素晴らしいものを他には「知る」ことはないだろう。私はコッホ先生からディルク・コスターの「オランダ詩歌百選」を借りて楽しんでいる。そしてデ・ヨング（-ケーシング）さんとも興味深いものを読んでいる、彼女の授業もステキだ¹³⁰。ラテン語を優先しなければ、私はもっと彼女と勉強したいと思っている。最近私たちは「To a skylark」を読んだ、彼女と読んだ中では今まででいちばん素晴らしかった。以前はデ・ヨングさんのために宿題をした。今はもうしていない、時間がないからだ。それに私は詰め込まれたくない、なぜならそうするといつも働き続けよ！時間がない！という感じがするからだ。

現在パウリーンは居住区のクラスにいる、1年生でとてもよくついてきている！これは去年の12月8日に1年生にいた子供たちだったから、彼女は2学年飛び級したわけだ。でもこ

¹³⁰ デ・ヨング夫人は収容所の外に住んでいた。当時彼女はそこで密かにベルフにレッスンをしていた。チデンは当初まだ完全には隔離されておらず、居住者は時々収容所外に出ることが許されていた。デ・ヨング夫人の1942年10月の日記にはイェット・ヘネクインとアンネ・コッホによっていかに中等教育が密かに組織化され始められたかが記されている。危険が伴うにもかかわらず、多くの女性教師（ほとんどの男性教師は収監されていた）が密かに教えることを名乗り出た。教育は「教室」すなわち教師のいる家あるいは生徒のいる家で行われた。およそ8名の生徒がグループでやってきた。(NIOD、蘭印日記コレクション、E. E. de Jong - Keesing) 「Het Koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog」11b, 上巻 L. de Jong 参照。(Leiden 1985年) p316 - 318)

のクラスにはドイツ語がない、だから私が彼女に1週間に3時間教えている。その他私は彼女に数学（繰り返し）をすこし補習している、なぜなら他の子供たちと同じくらい数学に精通するべきだから。それから彼女はもう1時間神話と人類学の授業がある。マグダが学校以外もっと私と一っしょに勉強させることはうまくいかないだろう、でも私はパウリーンには常にきびしく取り組み、彼女もほとんどぐちもこぼさずに勉強している。これは私が彼女を高く評価していることだ、なぜなら彼女はまだ1年生になったばかりだし、クラスでも熱心に勉強しているからだ。私は近頃パウリーンとうまくやっていくことができる。それから1週間に2時間正式にエディットを教えている、でも彼女はまったく現れない。彼女は私を道化役だと思っている。でも一方ではそれでいいとは思っている、そうすれば彼女のために私の時間を無駄にする必要がない。先日私はフランス語のために去年ギムナジウム5年生にいた少女たちのクラブに入会した、週2回だ。戦争がなかったなら私はほんとうに幸せなのに。

私は12月の初めにギリシャ語も始めた、これも進歩している。これはコッホ先生としている。みんなコッホ先生は親切だと思っている、彼女は愛らしい人でもある。彼女は幸いこのチデン居住区にいる。でも彼女にとって生徒がみんなクラマットにいるのは面倒なことだ。彼女はウォーターウェッハ11番地に住んでいる、私たちはラーン・トリヴェリ100番地だ。…中略… 私はマレー語も習いたい、でもどういふうに？時間がない、教師がいないし本はない！…中略… 私はたくさんすることがある、時間が2倍あればいいのに、なぜなら古代史と文学史をしなければいけないから。

今夜は居住地の深夜ミサに行ってきた。とてもすばらしかった。

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月31日

今夜カーター牧師が説教をします。ろうそくがもう一度ともされます。ミーブが物語を読み聞かせ、子供たちはクリスマスのようにまた楽しんでます。これらの日々はとても苛酷です、でも私たちはみんな同じことを考え、それは人を強くします。…中略… 教会での礼拝は全ての宗派合同で、この収容所のチラマヤフィールドでとてもうまく計画されました。アニー・ファン・デル・プラスがこの家でウィルヘルムスを読み、ろうそくの灯りのそばで楽しみました。向かい側ラーン・トリヴェリにあるユリアナスクールの鐘が12度鳴り響きます…新年が始まります。新年は私たちに何をもたらすのでしょうか？

ベルフ

1943年1月14日

ギリシャ語は楽しい、でももう以前のように速くは進んでいない、なぜなら私は今時間の半分をギリシャ語に、もう半分をラテン語についやしているからだ。ラテン語はやはり一番好きな課目だ、でもそれはギリシャ語のことを少ししか知らないからだと思う。私はもうすぐそれほど多くの時間を勉強にあてることが出来ないだろう、なぜなら居住区の中にもうバブ[女中]が来ることが許されないからだ。私たちはたぶんひとりだけ維持することができる、なぜなら12歳以下の子供が3人以上いるからだ。人々はこの収容所がもうすぐ封鎖されるだろうと予想している。コッホ先生はもちろん私には云わなかったけれど、このことを不愉快に思っていると思う。

今のところすべてがとても奇妙だ、コッホ先生が以前住んでいたマンパン通りでの授業は違っていた、もっと楽しかったと思う。みんなは私がすごく熱心に勉強するので気が変だと思っているし、みんなはラテン語のことも知っている。私は誰にも知られたいくなかった、でもコッホ先生が他の生徒に話したのだ。そしてもちろん私もここここで尋ねた人々には話したし、最初は私からも少女たちに話していた。だから今みんなが知っているし、一部の人たちはすごいと思っているが、一部（私のことをよく知っている人たち）は私が熱心に勉強するのは狂っていると思っている。誰も（お母さんもコッホ先生も）それが私の性格に合っていて、私がとても学問を愛しているということを理解していない。コッホ先生は私が家事をすべきだと言うし、デ・ヨングさんはもっとピアノを弾いたり多方面のことをすべきだと思っているし、アードリーは私が収容所の他の子供たちとあまりスポーツをしないのをばかにしている。私を理解しているのはお父さんだけだろう、でも彼はストリウス収容所にいる。彼は一まさに私を理解しているだろうから一ただひとり私が本当に助言に従うべきの人である。他の人たちからの助言は私にとって正しいのかどうか分からない。家事だけは正しい、なぜならお父さんも言っていることだから。さあ、もうすぐ私は心から楽しめるだろう！

ベルフ

1943年2月11日

昨日デ・ヨングさんから作文を返してもらった、その時彼女は私が紙の上で自分の難題をなぜ解きできる人間だといった。今私はデ・ヨングさんはいい人だとは思うけれど、このような意見にどの程度こだわるべきなのか全く分からない。私はそれほど信頼していないと思う。彼女はまだとても若い（35才くらい）し、彼女の人知をそれほど信用していない。でも事実は、私が時々とても日記を書きたくなるということだ、時間の無駄だと思っているからほとんどしないけれど。

収容所は現在、日曜日と水曜日以外は封鎖されている¹³¹。私たちはバブ[女中]をひとり保持することが許されている¹³²、ばかげたことだ。でも私は家事をまったくしない！私はすごくしいられている、でもお母さんもしなくていいと思っている。現在、朝自分の部屋だけ片付ける。パウリーンが授業にまた戻ってきたにしても、かなり罪悪感がある。なぜなら正式の小学校ができ、現在すでにその他の教育は禁止されているから¹³³。私はパウリーンにはもう本当は授業をしてはいけない。コッホ先生は授業をするためにたびたびこの家を「訪問」する。私ももうすぐ子供たちの訪問を受けるか子供たちを訪問することになるだろう。今日の午後ヘネクイン先生のところへ話し合いに行く。

ヘンケス - ライスダイク

1943年2月20日

子供たちは幸い一日数時間学校に行くことが許されています。アンネは3年生のクラス、ヤン・ヘンドリックはまだ入学が許可されていません。

ベルフ

1943年3月29日

バー、私はすごくむしゃくしゃした気分。私は午後だけ学校の課題ができる、なぜなら午前中はまず全部雑巾がけと掃き掃除（バブ[女中]はもういない）、そのあとはパウリーンを教えなければならない（実はこれも禁じられている）からだ。そしてもう理解できない、誰ももう学校の勉強をしていない。私はすごく孤独を感じる。午後の勉強は進まないし、パウリーンのためにも試験をチェックしたり作ったりすることなどがあるし、食後はまず食器を拭く必要があるし、コッホ先生はもう教えに来ない。まったく進歩しない。…中略… もし数日間一生懸命やったら、大丈夫だろうと確信している。そして毎日決心する、でも決して実行しない。私はよいと判断することを全部成し遂げるタイプの人間ではない、本当に私は意気地なしだ。

¹³¹ 脚注 63 参照。

¹³² 「収容所外部との接触」ヘンケス - ライスダイクの日記断片 1943 年 1 月 10 日及び 2 月 7 日参照。

¹³³ デ・ヨング - ケーシング夫人は 1943 年 1 月 30 日の日記に「居住地が閉ざされ、正式の小学校が始まる、そして教育のその他の形態、個人教授も速記、タイプも禁じられている」と記している。教育は日本の許可を必要とした。密かに教育に携わる人々を当局に通報する者に 40 ギルダールの金額を手渡すことが約束された。(NIOD、蘭印日記コレクション、E.E.de Jong - Keesing)

ベルフ

1943年4月6日

私は今日デ・ヨングさんの秘密の授業にとっても早く着いた。…中略…今回私たちはガレージにいた、というのはデ・ヨング氏が病気だったのでまた家にいたからだ。私たちはディケンズを読むはずだった、でも私は発音に不安を感じていたのでデ・ヨング氏と読んだ、なぜなら彼の発音は「完璧！」だから（私の授業は彼にとって「正式」で、許可されていたらしい¹³⁴）。ともかく私たちは英語を読んだ後またガレージに行き、コービーが来た時にはちょうど最初の4行を翻訳したところだった（私にすればかなり満足、かなりすばやくできた）。彼女は「うちに来てくれたの、実は私たちは家から追い出されちゃったのよ!¹³⁵」といった。

ベルフ

1943年4月8日

パウリーンは代数のテストで9点半を取った。私は天にも昇る気持ち！バンザイ！教師のほうが生徒よりも喜んでいると思う！ほんとにうれしい！地理でも彼女はいつも良い点をとるし、フランス語もだ。私はやはり上達していると思う。…中略…私たち3人（私とコービーとデ・ヨングさん）はガレージに戻りムルタツウリに没頭した。

でもまあビックリ！突然デ・ヨング氏が目の前に立っている。彼は気に入らないのだという印象を受けた、でも彼は私たちがいたので「これはだめだぞ！」と警告を含めた身振りを除く以外何も言うことができなかったので、ムルタツウリが突然日本人に好まれるもので（おそらく日本人石工のたとえ話¹³⁶によって）、私たちが本をすこし読んでいて本当の訪問以外は何もしなかったとデ・ヨング夫人は彼を説き伏せようとした。でも残念ながら、彼の唇からは同意の微笑みはうかばなかった、ただ立ち去ろうとしただけ、それでデ・ヨングさんは即座に笑い、「でもヨーブ、それならあなたもエルスに発音を教えられないわよ」と彼女の論点を射放った。答えはなし。彼女の微笑みは私にもいくらかわざとらしく見えた。この哀れな男性は、私がそばにいる時に彼女が彼になまりない英語の発音を教えることを求めた際、拒否しにくかったのだろう。私は彼が本当に望んでいたという印象はあまり受けなかった。でもデ・ヨング夫人と私の関係は先生と生徒…でしょう？

¹³⁴ デ・ヨング氏は夫人が密かに授業をしていることに反対していた、そのためできるだけ隠れてするかあるいは「当局の正式の許可」を得る必要があった。

¹³⁵ コービーは父親がまだ働いていたため収容所の外に住んでいた。脚注7参照。

¹³⁶ このたとえ話はムルタツウリが1860年に出版した小説「Max Havelaar, of de koffieveilingen van de Nederlansche Handelsmaatschappij」にある。このたとえ話は、人がその運命と社会的位置に満足すべきだということについてである。すなわち日本人の石工はその存在に不満なのだが、金持ちの男、王様、太陽、雲、岩に変身した後、素朴な石工がやはり最も幸福だということに気がつく話である。

ともかく、私たちは授業を続けた。とても楽しかった、なぜなら私はオランダ語ではコービーと同じぐらいのレベルになっているからだ。すこし教養があり「頭のいい」子供と授業を受けるのはすばらしいと思う。時々私は彼女よりも早く理解できる、もちろん反対のときもある。

ヘンケス - ライスダイク

1943年5月1日

ピアニストのリリー・クラウスがここで今週 2 度目の演奏会をしました。居住区全員が楽しみました。

ベルフ

1943年5月7日

今日は木曜日、そして先週の火曜日でコッホ先生が最後に私のところに来てから 3 週間過ぎた。私はやめた方がいいと思っている、そうすれば自由時間をフランス語、ドイツ語、英語を習ったり、ラテン語を全部復習するのにつかえる。でも教師がいなくて先に進む（とくにオウィディウス）のはやはり無理だ。ギリシャ語はまだできるだろう、これもペルロー[必要]だし簡単だ、でもラテン語は…。それにコッホ先生がまたやってきたら、私は暗記するための単語がたくさんありすぎるし（それも必要なのだ）、オウィディウスをする時間がもう残らない。そしてまさにこれが重要なのだ。ギリシャ語は違う、これは今のところ自分でできる、それからすぐにラテン語を取り戻す。なぜならギリシャ語がすごく遅れているから。そしてパウリーンも私の時間をたくさん求めているし、私はものすごく遅れている。ギリシャ語だけだと手際よく早く進む、そしてコッホ先生にとってもすごく忙しい仕事があつて面倒なことだから。本当は今やめてしまうのは卑怯なことだ…でもだんだん私の属すはずのウィテ・ローマンとヤン・ヘークマン、ヨーピー・メールテンとリース・デ・ウォルフのクラスにもう一度入るという理想はとても非現実的なものになっている…。教育はすべて中断し、戦争の真っ只中。

ベルフ

1943年5月15日

お母さんがピアノを弾いている、すばらしい。彼女は最近それほどひんぱんには弾いていない、彼女もとても苦労しているのだ。私は彼女にすぐに怒らないようにすべきだ。彼女はすばらしく弾く、多分技術的にはリリー・クラウスよりも劣るだろう、でも私は彼女のピアノを聴く方が好

きだ。

ベルフ

1943年5月18日

昨日コッホ先生がまたやって来た！うれしい…私のオウィディウスの翻訳(でもあきれたことに12行だけ)は幸い上出来。コッホ先生は現在仕事がない、なぜなら彼女は痩せ過ぎ(居住区担当医のフェルハートさんによると)だし、彼女自身のクンプラン(ラントザート夫人、ヘネクインとガレージにいる息子を持つ婦人とのコンビネーション)が必要としているから。木曜にまたレッスンがある、どう思う！私は天にも昇る気持ち。昨日授業中に私はラテン語が遅れていることが分かった。私はもう一度追いつくようにしたい。…中略… お隣りでバイオリン奏者のサイモン・ゴールドベルグ¹³⁷の演奏会がある、でも私はまだ18才でないので入れない。

ベルフ

1943年5月25日

パウリーンは長くやるほど上達してくる。彼女は瞬く間に2年生の教材も始めるようになる。彼女の最近の成績は代数が9.5、10、8+だ！すごいでしょ？生物は9と9.5だ。ドイツ語だけはそれほどではなく(私はうまく教えられない)6点ぐらい、そして幾何もよくない、これはもう少しよくなるだろう。ドイツ語はそれほど難しくないと思っっている、私も彼女の出来が悪いとは言えない、でも気がつかないうちにいくつか大きな間違いや思い違いをしてしまう。…中略… オランダ語は徐々に7点を取るようになっていくし、地理とフランス語も優秀だ。歴史はよくわからない。でも悪くない。私は発音が悪いので彼女に英語を教えるのはむずかしい。マギーにも今私はドイツ語とフランス語を教えている、なぜなら彼女はほとんどすることがないから。彼女は宿題をまだあまりしない、でも私がすぐにできるよう教える！

ベルフ

1943年6月1日

昨日コッホ先生が来た。とても奇妙、彼女が来なかった5週間私はほとんどやる気をなくしていたけれど、彼女が時々やってくるとやる気がでてくる。なんて私は授業を受けるのが好きなんだ

¹³⁷ 彼はおそらく1944年の初めにチマヒ4号収容所に移送された。

ろう。これなしではどうていやっていけない。パウリーンはドイツ語で8点をとった。私は教えることは素晴らしいと思う。この日記帳がいっぱいになったら、どこに書けばいいのか分からない。ロップはすばらしく分厚いノートを持っている、でも私がすこし探りを入れた時、彼は切手のためにいると言った。そのノートは彼のものだ、自分のおこずかいで買ったのだ、でもお母さんと一度話し合ってみよう。お母さんはピアノを弾き、私は日記を書いている。

ベルフ

1943年7月21日

パウリーンの誕生日（7月19日）はとても退屈だった。その上、防空訓練があり夜は灯火管制、そして警報が鳴ると完全に灯火管制になる。私たちは7月19日おいしい食事をしただけ、でもその他は…。お母さんも気にしていなかった、彼女は楽しい日にするためにまったく最善を尽さなかった。食事はユッフ[子守]が作った。その他彼女は本を2冊もらった。1冊はまだ真新しく私は大きくなりすぎていたもの、もう1冊は私が（お母さんのお金で、でもここでは重要なことではないと思う）パサール・セーネンで買ったもので、前の所有者の名前を消して面白い蔵書票を描いたものだ。その他彼女はヘアピンを2つ（私が聖ニコラス祭のハンクのダンスパーティー以来新しいまま持っていたもの）、くしとユッフの腕輪。お母さんからは特にないことがわかるでしょ。

ともかく。お母さんはパウリーンと私の誕生日にブラウスを約束したけど、まだ何も始めていないのを知っている。だから23日の私の誕生日にも特別に期待していないし、その日にコッホ先生がここに引越し¹³⁸てくる変化や楽しさのほうgstステキだと思っている。誕生日よりもコッホ先生のために23日をもっと楽しみにしている。いずれにしても退屈にはならないだろう、でも期待外れになる可能性はある。なぜなら私はコッホ先生とヘネクイン先生がその日私の誕生日だ気がついてくれることをとても願っているから、そして古い本とかなにか形のある贈り物がもらえるかも？記念という意味だけだよ！

ベルフ

1943年7月25日

コッホ先生は22日にやってきた、予想外に早まったのだ。私の誕生日に関しては、彼女はなんも気がつかなかった、あるいは気がつこうとはしなかった。というのはユッフが妹のエルナが彼

¹³⁸ コッホ先生とヘネクイン先生が間もなくベルフ一家のいる家に入居するだろうということ。「移送と収容」参照。

女に話すのを聞いていたし、ロップは大声でおめでとうと言ったし、エルナはコッホ先生がそばにいた時、私にお花を持ってきたから。エルナの「喜ばしい」事実の報告に気がつかなかったとしても、彼女がうさん臭いと思わなかったとは信じられない。その日はとても明るく始まった。お母さんから後で靴を作らせてもよいように留め金をいくつかもらった、ロップからはチョコレート。ユッフからはケース入りのくし。でもそのくしはずっと前にもらっていた、なぜなら私の古いくしはもう使えなかったから。

その他、ルースからも、マリー-テレーズ、エディットやレーニからも、ましてコービーやアードリーからもなにも音沙汰がない。アート・フェルボーム（今日は彼女自身の誕生日でまだ常に警察署¹³⁹に収容されている）以外は誰も私の誕生日を知らないし、もちろん誰の訪問もなかった。ヘネクインとコッホはまったく気がつかず、夜は暗い中（灯火管制のため、私もいいドレスを着なかった、コッホ先生とヘネクイン先生に目立つと思ったし、灯火管制だから無駄だし）泣かないようにすることと（あらゆることにもかかわらず）私の失望に気がつかれないようにするのは大変だった。私たちはおいしく食事した、そして唯一うれしかったのはお母さんがとても優しくしたことだ。彼女は私にとって素晴らしい日ではなかったと言った、そして来年お父さんが再び戻ってきたら（？）もう一度お祝いしましょうねといった。

ベルフ

1943年8月11日

コッホ先生は病院に働きに行く、だからもちろんラテン語のためにはやる気も時間もない。すなわち実際にはもうなくなる。もちろんなくなる。

ベルフ

1943年8月15日

学校が閉鎖しているのは忌まわしいことだ、というのはエルナがちょうど1年生に入学登録したばかりだし、その他トレースとマグも入学していたから。マグはちょうど4年生になったところで、私が中等学校（HBS）につれて行く、それは大丈夫だ。でもトレースをどこにつれて行けばいいのかわからない。マグのドイツ語はすごく進んでいる、形容詞のところまで！そしてパウリオンはもうすぐ2年生になる！

¹³⁹ 脚注 12 参照。

ベルフ

1943年8月17日

クラマツトの人たちがチデンに来て私たちのところにたくさん教師が来れば、たぶん彼女たちが部分的に例えば授業を引き継いでくれることを私は望んでいる。なぜなら現在トレースともうひとりいて…私は何をすればいいのかまったく分からない。ドイツ語教師が2人、フランス語が2人（ヘネクインはドイツ語とフランス語）、生物がひとり、化学がひとり、デルフトで学んだ人がひとり、それにまだいる。まだ収容所の外にいるデ・ヨング先生がコッホ先生と私たち以外に、デ・ヨングさんの以前の同居人ブルクさんもここにいることを知れば、私たちに彼女が居住区に入らなければならないときとたずねるはず。そうすれば私たちにはオランダ語と歴史の先生を得ることになるだろう。私たちは学校を設立できる！

ベルフ

1943年8月28日

コッホ先生が最近何を言ったか知っている？ 私がラテン語でほぼウィテ・ローマンとそのクラスのレベルに達したと言ったのだ。キケロに差があるだけ！ オウィディウスがもう理解できたので、実は私が彼女に尋ねたのだ。バンザイ、バンザイ！…中略… そう、私はまた日記帳の2枚を満たし、オウィディウスの午後をむだにしてしまった。でも私はこれを書くのがやはりとても楽しい。

ベルフ

1943年8月31日

今朝私はたまたまキールス先生と話した、彼女はとても親切。その時彼女は私が5Xのクラスに行きたいということを聞いたが、彼女は「そうするともう2年あるわよ…、あなたは6Xのクラスで¹⁴⁰勉強した方がいいのではないかしら？」と言った。私は驚いて息をのみ、というのは自分でもこのことを考えに入れていたのだが、いつもすぐに不可能なこととして否定していたのだ。それが可能なら…そうすればコービーのクラスに入れる、でもラテン語とギリシャ語の点が取れても、他の科目ではどうなるのだろう（ああ、主よ！）？ 私は歴史のことはなにも知らないし、理数系の科目に関しては1年半なにも勉強していないし、英語とフランス語もそんなに得意では

¹⁴⁰ 名前のかわりに密かに数字で授業の時間割が作られた。(NIOD 蘭印日記コレクション、E. E. de Jong-Keesing)

ない。今、これが素晴らしいことだとしても実現するとは思わない…。なぜなら私はすでに卒業試験資格を得る必要があったし、1944年の8月にまた5年生として学校に行けるとしても、私は2年間を失ったことになるのだ。そして私が午後ずっとおセンチな日記を書いているならば決して行けないだろう。

ベルフ

1943年9月5日

パウリーンは昨日正式に2年生に進学した、それで今1週間か10日くらい休暇があって私たちは地理だけをしている、というのはまだ終わっていないからだ。私は休暇をフランス語とドイツ語など先に進む前に、よく復習するために使う。その他今週はマグ、トレースとエルナのために勉強方法を決めるつもり。マグには中等学校(HBS)の初年度を教える。トレースは分からない、たぶんマグといっしょに地理と歴史、なぜなら二人ともどちらもまだ教えてもらっていないから。これはすなわち禁じられている課目で、だからマグは学校でもまったく教えてもらっていなかったのだ。その他トレースちゃんとすこし算数、国語と作文、生物をするつもり。エルナちゃんとはすでに読本を始めている、多分アネケ・デ・ヨングもいっしょに教える。彼女たちはすこし読本ができる。私はいわゆる子供の本にしたがとても難しい、でも訓練次第だ。2回目からはすこしよくなったと思う。彼女たちは数週間やってなかったし、もちろん今また慣れる必要があったから。私はまだどうして時間をみつければいいのか分からない。

ともかく。私のラテン語はもうあまり進歩していない。キールス先生はロップがもう何もしていないと聞いて驚いている。今彼はこっそり授業をしてもらえる、現在彼女とデ・クエント先生からだ、いいでしょ？私は彼がうらやましい、私の11日間で30分のラテン語と比べて。私は彼と一緒に勉強することもできない、なぜなら時間がかかり過ぎるし、私の本は大部分しまっているから。私は最初化学をしたかったが、でも昨日やった時、いかに理数系の科目への才能がないのかが分かった。2, 3の原子価以外はすべて、すべて忘れていた。ロップはあきれたことに、もっとよく覚えている。今もちろんすぐにやり直すことはできる、でも本はないし時間がない。なぜならやり直したら私はもちろん続けてしたいと思うから。ロップよりたくさんやってまた慣れ始めたにしても、また勉強しなければならない…いいえ、私はしない。

ワイヘンケ

1943年9月5日

今日初めて新約聖書とチェンバーズを何ヶ月ぶりかで読みはじめました。そのために静かな時間を見つけるのは難しい、でもまた気持ちが安まる、続けていくつもり一夜に蚊帳の中で。それは

できます。

ワイヘンケ

1943年9月8日

今日はヤーピックの誕生日で私たちはお祝いに今晚ワインを一杯飲むつもりです。リースと私は最近では毎晩コップにいっぱいワインを飲んでいるというのは事実です。私はいかに酒癖がつくのか理解できます。とてもおいしい、毎晩あらゆる忙しさと心配ごとを洗い流してくれるのです。

ベルフ

1943年9月10日

この頃オウィディウスの時間も日記を書く時間もなかった。でも私はとても恥ずべきことだが日記を優先する。ラテン語をしない日がいかに増えているのかは驚くべきことだし、キケロの授業は見込みがあるのに。もうギリシャ語のことは尋ねて欲しくない！でもたくさん書くこともあり、私は作文を維持する必要があるのだ！パウリーンは1週間の休暇の準備をしているが、私はフランス語もドイツ語も彼女に教えなかった。時間割もまだ決めていないし、でもこれは私が絶えず尋ねているのに、お母さんが私にトレースの教科書を渡すのを何度も忘れたからだ。どこまで進んでいるのか分からないから始めることができないのだ。

ベルフ

1943年9月14日

ヤップたちはものすごく怒りイライラしている。原因は私たちにとって素晴らしく、彼らにとっては（確実にもっと）悪い状況だから。そして誘因は、私たちがこの収容所のヤップたちに挨拶をしようとしないう事実で、他の方向をみている彼ら自身もその原因である。いずれにしても話し合いがもたれ、今は道でみんなニッポナーや警官に深くお辞儀をしなければならない。これが命令1。

でもそれから現在命令2があり、これはもっとひどい。すなわち教科書の使用はこれからすべて禁止するということ。これはさらにひどいことだ、なぜならクンプラン[仲間グループ]や居住区に住む人々に対して、危険を冒すことができないからだ。これは実際きびしく禁じられているのだ。だから教科書は不愉快なことになる前にしまった方がいいのだ。だから子供た

ちとの授業も停止だ。ちょうど全部準備したばかりなのに。一方私は責任が軽くなったと思っ
ている。私は新しいプログラムにかなりしり込みしていた、というのは毎午後2時間半時間をつい
やし、朝はニッポン時間で11時からレッスンをし、加えて他の時間は準備やチェックについや
すことになったからだ。

昨日ラテン語がもうできなくなってしまったと思い、泣きそうになった。現在、実際
にそうなるだろうが、辞書は持っていてよく、教科書用ではないオウィディウス（だから学校
の出版物ではない）も大丈夫だ。でももちろんとても難しくなって現実には不可能だ。いずれに
せよ彼らはいつか教科書を要求したり取り上げたりするだろう。でももちろん子供たちはドイツ
語の本が読めるし、いくら勉強になる本も読める。でも私はコッホ先生が助けてくれる時間が
あったとしても、オウィディウスはもうできないと考えた方が良好だろう。私には突然時間があ
りあまり、ヘネクイン先生は「さあ、フランス語、ドイツ語や英語の本を読むような楽しいこと
をたくさんしなさい」といい続ける。彼女は私に色々なアイデアを提供した、でも私がまだラテ
ン語をしようとおもっていることは考えていない。いずれにしても、クパラ[リーダー]で責任の
あるお母さんは私がまだなにかしようとするには賛成しないと思う。私はこれが長続きしな
いことを望んでいる、なぜならそうなる私も子供たちも頭がさびついてしまうだろうから。

ベルフ

1943年9月20日

昨日何をした思う？オウィディウス！私たちの寝室で、うまくいった。私が毎週これをし、その
合間に単語を習えば少なくとも遅れはとらならないだろう。なぜなら静止は後退を意味するのだから！

ベルフ

1943年9月22日

朝、支度が終わり洗濯場に行く必要がなければ、私は半時間、時には1時間寝室に戻り窓のカー
テンを閉めて数行翻訳する。たまには質問があるけれど、それはしたくない。私のワーゲンニン
ゲン辞書と文法の本でほとんどが解決できる。今は本を持って寝室から出て行かない、せいぜい
あまり目立たない単語帳くらい。本は下着の間に入れ、弟ケーシェのベッドの下には（家宅捜査
の際）それを直ぐに入れることができるトランクがある。私は許可も要請しなかった、なぜなら
そうすれば許されなかつたらうから。実行するのみ、なぜなら苦勞して得た知識を全部失うな
んて考えられないことだから。私が本を持っている限り…私は午後もできるかもしれない、でも
それはしたくない。なぜなら危険が少ないとしても挑発すべきことではないし、私は1日1時間

で満足しているから。そうすれば少なくとも記憶が薄れることがなくなるだろう。コッホ先生さ
えこのことは知らない。私は彼女に授業をしてもらおうよう強要したくないから、結局は。彼女が
したくないなら…それでもよい！しなくていい。

シスター・ロザリンデ

1943年10月3日

私たちは毎朝ここから5分のところにある教会に行く。そこで私たちは2つの荘厳ミサがある
時間とどまっています。なぜなら収容所にはありがたいことに60才を越えた3人の神父さまが
いるからです。私たちのはもちろん聖体は教会に置いていない、なぜなら私たちの礼拝の後には
プロテスタントのための礼拝や他の宗派の礼拝があるからだ。そういうわけで私たちは夕べの祈
りを持つことはできない。だから今日、私たちは sacrament も神父もない「即興の」夕べの祈
りを行なった。私たちは今月10月毎日合同でロザリオに祈り、そしてすでにかかなりの聖歌隊を
作った。すべての宗派の礼拝を行なうペンダポ[パビリオン]がなくなるだろうという話しだ。病
棟に加えられるとのこと。ヤップたちはこのことで病人の面倒をよくみていることを自慢してい
る。でも何千もの人々の魂に傷をもたらすということはもちろん気にしていない。…中略…

日曜日には3つの荘厳ミサも超満員だ、入れないためまだたくさんの人々が教会の外
で立っている。素晴らしい、私たちにとっても今信仰を営める場所がたくさんあるのは素晴らし
い。私たちが収容所に入ってきた時にはみんなから注目されていたのだ。人々は私たちがどのよ
うな態度を取っているのかを見たがっていた。私たちがどのような様子なのか見に来た人々がど
のようだったかを聞いた。「いいえ、私が見た時は胸が一杯になりすぐに立ち去りました」と言
ったことだろう。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月5日

現在、カーター牧師とファン・ヘルウェルデン牧師が居住区に住んでいる¹⁴¹。

¹⁴¹ 「移送と収容」参照。

シスター・ロザリンデ

1943年10月6日

私たちが手助けできることがたくさんあるのは素晴らしい。幼稚園がまた開く、カトリック要理の授業がすでに計画され始まった。でも学校のように絶対見えてはならない。オランダの子供たちは何も学ぶことが許されない。母親でさえ教えてはいけない。もちろんまだこっそりなされているが。子供たちはだから長椅子やテーブルの傍に座ってはいけない。でも現在シスターたちを囲んで地面の上に座っている。私たちが若者たちを助け、なにか教えることができるなら。

ワイヘンケ

1943年10月10日

チデンの子供たちは恐ろしくおろそかにされています。少年たちはここではクーリーのように歩きまわっています、汚れたズボンだけを身につけ通りで暴力をふるいます。そして彼らの母親たちは盗み、みだらな行為などを行っています。少女たちは怠け者でずうずうしく、いつもお金を要求します。でも青少年コミュニオンが彼らと生死をかけた戦いを始めました。戦後すべてがまた元どおり正常になると不愉快なことになるでしょう！いつか再び正常になるのかしら？

ベルフ

1943年10月12日

ラテン語は進まない。以前はあきれたことに洗濯場へ行く前に1時間寝室に行ったけれど、現在私はずっと12時まで働き続け、その後ケースをお風呂に入れる。そして本をもって寝室から出ようとは思わないし、あえてしたくない。そして午後食卓につけば子供たちは、私が怒りロップが私をあざ笑うまでものすごい騒わぎ声をたてる。ロップはまったく何も誰も気にしないで、常に不潔で汚れたまま食卓につく。彼は監視かゴミ収集以外は、あるいはゴミ収集のない日に部屋を掃除している以外は一日中遊んでいる。さもなければ私がする、そして彼は私たちのスサー[厄介事]はなにも気にしない。私は一度すでにお母さんに子供たちが食卓で黙らせるようにと探りを入れたが、彼女は禁じたり罰したりばかりするのに疲れ果ててもいる。でも年上としては口に出さない方がいい、それほど大騒ぎするのだ。もう気が狂いそう。私たちはお父さんから常に食卓では口をつぐむ必要があったのに。

そして午後庭で、椅子でさえ眠ることができない、なぜならすぐに警報が聞こえるからだ。「エルス、ヤップだよ」、それで起き上がってお辞儀する。あるいはフッシャー家のクンプランで突然いろいろ話し合いがある、あるいはピーターとウィル・ベルネロット・ムンスにイラ

イラさせられるか、あるいはお隣のフェルフォールト家の少年たちが大きな音をたてているかだ。バー。すべて同じように不愉快、まったく楽しいことがない、ただ嫌なことだけだ。…中略…

マグダも私がなにか注意すると（本当に私がたびたびしていることだが）大きな口をたたき、そして彼女はヘネクイン先生とグリム童話をドイツ語でよむことを拒絶する、それができてまだ。忘恩は世の習いだ。ともかく、子供なのだ。でもパウリーンも何にもしない。とてもイライラさせられる、私は疲れているとすぐに泣く。ものすごく子供っぽい。

シスター・ロザリンデ

1943年10月16日

マザー・ジェラルディーネの聖名祭があった。私たちは何とか形をつけ楽しい時を過ごした。午前中は荘厳ミサ、教会で8時の御ミサをした後、私たちの聖体が永久にとどまれるようここに運ばれた。マザーのお祝いへの素晴らしい贈り物である。午後は本当のタベの祈り、フレールアックス神父の説教さえあった。夜は朗読と歌、そしてたくさん笑って楽しんだ。

シスター・ロザリンデ

1943年10月17日

私たちは現在御ミサを家でする、でもシスターたちの一部はやはり教会に行っている。本当のタベの祈りがあった、素晴らしかった。私たちの聖歌隊は異なる5つの修道会のシスターたちから成り立っている。ウルスラ会のシスターたち、摂理修道会のシスター、よき牧舎会のシスターたち、カロルス会のシスターたちと聖心のシスターたちだ。

ベルフ

1943年10月17日

マグダちゃんが昨日12才になり、とてもたくさんプレゼントをもらった。家の中にたくさん人がいると、各自がなにかしらくれる。とてもステキ、私の忌まわしい誕生日よりよかった。…中略… マグのプレゼントはもちろん戦争と収容所に応じたもの、すなわちたくさんキャンディー、いろいろなワッペン、テンテン[ピーナツクッキー]とクッキー2枚。彼女はブルクさん、コッホ、ヘネクイン先生から一種のゲーム、おそらく収容所で発明されたものとお母さんからはビーズなどをもらった。そのほかには食事に特別おいしいもの、鶏の煮込みだ。最近ほとんどお肉は手に入れがたく、だから鶏、とても豪華でおいしかった。

昨日少年たちがパウリーンとマグといっしょにモノポリゲームをした。マグは夜遅く就寝することが許された。でも少年たちは女の子たちにまったく反応せず、お互い同士有利に運んだり、いかさまゲームをしたり、おしゃべりをしたり、おしまいにはマグが怒って涙を浮かべお母さんの所に行き、お母さんがロップを叱った—これも不愉快だった—そしてロップはお母さんに大口をたたいた、もう楽しくない！ロップは時々お母さんに対してものすごく生意気になる。特に彼のために私はお父さんがまたいたらよかったのと思った。

シスター・ロザリンデ

1943年10月19日

修道院管区長の誕生日。私たちは彼女の経歴を紙に書き、投影機をまわした。もちろんとても楽しい時を過ごした。

シスター・ロザリンデ

1943年10月20日

また幼稚園を維持させることが禁じられた、クラブ形式で授業をすることが許されないのだ。ああ、なんたること、今また午前中ずっと母親たちの重荷になる。そこにどんな危険があるというのか。現在ここに託児所が設置される、3才までの子供たちのためだ。収容所の第一リーダーは体育館を作るつもりだ。どういう考えなのだろう？そうになると午後ずっと、そして夜は9時、9時半まで体育の授業がなされ、それに必要な音楽も伴うことになる。そうになると私たちの敷地にはまったく静かでなくなる。修道院長さまたちがこれに反対すると決意した。

シスター・ロザリンデ

1943年10月21日

今週日曜日の「主キリスト」のお祭りに教会でミサ曲を歌うことが許された。私たちは新しい聖歌隊でペロシの第3ミサ曲を練習したばかりで、それを歌うつもりである。私たちはカーター牧師から足踏みオルガンを使う許可を得た。本当は誰のものなのかは知らないが、おそらくプロテスタントの人たちのものだと思う。私たちは唯一彼女たちから反感を感じる。世評では「プロテスタントが大多数だ」と云われているが、これは絶対正しくない。カトリックの大家族のほとんどがグロゴール収容所に統率されていた、なぜならもちろんほとんどが援助を必要とする人々だったからだ。

シスター・ロザリンデ

1943年10月25日

私たちは「キリスト降誕劇」を計画している。人々にとっていくらか気分転換になるし、信仰心を少し高める助けになる。女優、男優は8才から15才までの子供たちだ。私たちはこの幼い少年少女たちに朗読の調子を決め、役を上手く演じることができるようになる必要があった。私たちはわんぱく小僧のひとりに「なにか一度話してみて！」とたずねた。最初彼らは何も話すことが分からないが、その後「それじゃお父さんがヤップにどのように連れて行かれたか話すよ」と打ち解ける。そして少年少女たち全員が次々にどのように父親が収容されたかを話してくれる。

実に悲劇的だった。今どのオランダ人の子供にも父親がいない。男子全員がいまだに囚われており、ある人はすでに1年半以上である。収容所で幼児の話をいちど聞いてみると、彼らは「パパはもうすぐ帰ってくるよ、パパがいない誕生日はしたくないよ」などと話す。他の子は「パパがいない、パパはヤップのところだ、でも優しいパパの写真は持っているよ」とかまた他の子は「パパが戻ってきたら、連合軍が来てヤップたちを撃ち殺すよ」と話す。

彼らはよく「ニッポナー遊び」をする。それで少年のひとりがヤップになって他の子供たち―「父親、母親、子供」―から父親を連れ去りに来るのだ。それから彼らはまずすばやく地面を掘り、何かを土の中に入れてお互い同士結託し合っているまなざしでヤップの中に入れる。このヤップは子供にどなり（彼らが常にしているように）始める。「パピー」といって彼を連れ去る。しばらくして隠したものを地面から掘り出すのだ。

彼らはまたよく替え歌を歌っている。

1. 二匹のおさるをみた、にんじんの皮をそぎおとしている
2. 二匹の牛をみた、舟をこいでいる
3. 二匹のヤツペンを見た、家具を盗んでいる

ワイヘンケ

1943年11月1日

今、教理問答の講義を受けています。これまでほとんど影響を及ぼしていません。教理問答自体は素晴らしいものですが（カーター牧師によるものです）、私には安息がありません。私は「人生」は与えられるべき一定のリズムにかかわっていて、感情、思考、望み、可能性の間のバランスで、それによって調和が生まれると信じています。私のリズムは早すぎると思います、そして確固たる信仰、すなわち獲得した確信がそのリズムに大きな改善をもたらすと信じています。

シスター・ロザリンデ

1943年11月4日

聖カロルス祭のお祝い。荘厳ミサと夕べの祈りがあった、何と私たちはわがままが許されていることでしょう。私たちは本当の祝日を持てた。マザー・ジェラルディーネがとても楽しく準備した。カロルス様の素晴らしい写真とお花—これはこの収容所にはほとんどない—がテーブルを輝かせていた。夜は私たち修道会についての映写をしました。シスターたち全員が私たちのすばらしい修道会を賛美した。

ベルフ

1943年11月14日

私のメディアの翻訳はあまりすばやくは進んでいない。正反対！この速度で勉強すると 25 年かかっても終わらない。

ワイヘンケ

1943年11月17日

今日はこの収容所に入って二度目の私の誕生日です。40 才の誕生日はどこで祝うことになるのでしょうか？ 自由と静けさのみあれば、本当は何も興味が持てないというのは奇妙なことです！私はステキで実用的なプレゼントをたくさんもらいました。クラマットのベニーとエスゴーからも「バンヤック・セラマット[幸福を]！」とともにおいしい食べ物をもらいました。

子供たちは今日ミルク集配所の遊びをしています。この遊びの重要な部分は列に並んで票を配り、現実のまったくのコピーでした。ここの生活はパサールのため、お米のため、お砂糖のため、お肉のため、卵のため、ミルクなどのために列に並ぶことで成り立っているのです。…中略… でもやはり今日はまた素晴らしい誕生日でした。あなたは私のことを思って下さいましたか？2年前はオーストラリアから電報をもらいました、これを私はもう一度読み返しています。あなたに神のご加護があることを！ケンバリ[帰って来て]、愛する人。

ベルフ

1943年11月18日

私は聖ニコラス祭にお母さんにハンカチ入れを作った、強烈なブルーに薄いグレーとクリーム色

とすこしグリーンを刺繍した。彼女はたぶん使わないだろう、彼女はこのようなものを好まない、でも私はさまなければどんなプレゼントをすればいいのかわからない。これは私が思いついた最高のものだったし、何かを買うのは彼女自身も絶対にもったいないと思うから。彼女はいずれにしても聖ニコラス祭をお祝いしたくないと思っている、私がそれをどのようにしてあげるかみてみよう。私はデ・ヨングさんにもひとつ作りたいと思っている、なぜなら彼女はいつも私に優しくしてくれたから。コッホ先生よりも優しく公平だ。時間があれば彼女とヘネクイン先生にもなにか作るつもりだ。でも私はパウリーンのブラウスにも刺繍しなくてはいけない、これはお母さんから作ることを強いられている。本当はこんなことすべてがいまいましいことだ。

シスター・ロザリンデ

1943年11月21日

今日は「マリア様の寺院での任務」の祝日をよき牧者会のシスターたちがお祝いしている。私たちはシスターたちが教会にいた時、外で彼女たちのテーブルのうえに敷物をおき少し草を入れるための私たちの持っている唯一の小さな木の花瓶を置いた。居住地からのプレゼントだ、なぜなら私たちは全く何も持っていないから。お花はない、私たちは居住地の柵にそって歩いたが「何もない」のだ。よき牧者会のシスターたちはやはり楽しみ、また感謝していた。

10時に彼女たちは1人ずつ福音の誓いを新たにした。彼女たちは誓いをひとつ加え、つまり彼女たちは魂の救済のために働くことを自分の義務とした。午後は祈りの「お祝い」。夜、他の映画がないためにピウスⅦ世のローマ教皇の選択についての映画を上映した。みんなはとても興味を持っていたようだ。やはり私たちの聖なる父についてだったから。

ベルフ

1943年11月22(?)日

午後はずっと雨が降りつづいている。今私は散歩ができない。私はまったく日付の感覚がなくなる、11月22日だと思う。私はたくさんすることがある。お母さんへの聖ニコラス祭のプレゼントはできた、私はとてもステキだと思っている。現在私はそんな事にいそがしい、ライトブルーとダークブラウンとロウのような黄色。布などはお母さんからくすめ、これは全部ハギレだ。ひとつはデ・ヨングさんにあげるつもり、彼女は受け取るに値する。

シスター・ロザリンデ

1943年11月25日

聖キャサリンをウルスラ会のシスターたちが祝う。使徒の守護聖人である。私たちはいつもみんな合同で祝う。今日私たちは肉とパンをもらった、なんという饗応！

シスター・ロザリンデ

1943年12月1日

私たちは実際この合同修道会でまだとても楽しくできる。シスター・ヨゼは今夜ズワルテピートになって思いがけず他の修道会で大騒ぎを起した。よき牧者会のシスターたちがビックリして悲鳴をあげるのを私たちはなんと笑ったことだろう。家の周りがあるガデック[竹で編んだ柵]の裏で人々はきっと笑ったことだろう、なぜなら彼女たちは聖ニコラス祭の歌を歌っていたから。

シスター・ロザリンデ

1943年12月6日

私たちは本当に楽しい夜を過ごした。82 人のシスター全員が講堂に、各修道会のマザーとシスターの幾人かが聖ニコラス祭の前に出てくる必要があった。

ワイヘンケ

1943年12月7日

私たちはまた聖ニコラス祭を祝いました。また去年と同じように楽しかった。誰も 5 セントから 10 セント以上は費やさなかった、でもとても面白かった！！ここ私たちの家で、よく土曜日や日曜日に静かに緊張感がなくごく普通に楽しくなじんだ環境にいっしょにすわっていると、私は素晴らしいことだと思っています。まさに緊張が常にあり、いたるところで色々なことがあるので「ごく普通なこと」がありがたいのです。

ヘンケス - ライスダイク

1943年12月15日

聖ニコラス祭は「フローリックおじいさん」がセントでアンナ・クラークを「おばあさん」として¹⁴²居住区全体にとってのお祭りになりました。夜ミーブとアニーとハンス・ギーベンがここに来てお祝いをしました。去年のように空襲警報もなく、クンプル禁止（集会禁止）にもかかわらず、私たちはたのしくお祝いしました！

ベルフ

1943年12月16日

今日はコッホ先生の誕生日。私は彼女のためにすばらしい靴袋を作った、少なくとも私は芸術作品だと思っている。白い麻、黄褐色のリボンにモスグリーンを刺繍したもの。すごく熱心に作業した、なぜなら聖ニコラス祭にコッホ先生から素晴らしいネックレスをもらったから。それに私がハンカチをあげてもすばらしいもので、私自身のものだ—彼女は私のだったとは分からないし、だから私は私のためにしてくれたすべてに対して彼女にステキなものをあげたかった。彼女はとても喜んだが、まだそのほか趣味がよく、かわいい、自家製の収容所プレゼントをもらった。たくさんの訪問客があり、いろいろステキなものをもらっている。私は自分の忌まわしい誕生日のことを嫉妬心なしでは考えられない。

ワイヘンケ

1943年12月18日

今晚はすばらしい日没で、遠くにくっきり描き出された山々がありました。オガンフィールド全体が人でいっぱい。ここはどこにいても人々と騒音で満たされています。

¹⁴² フローリック氏とウェンスマ - クラーク夫人は俳優だった。クラーク夫人はハーグ市で「おばあさんがおとぎばなしを話しに来る」の役で有名になった。クラーク夫人はこの直後に亡くなり、フローリック氏はグロゴールで 1944 年 9 月 20 日に死亡した。(NIOD、IC、「第二次大戦中の蘭印での体験報告」M. M. Merens、G. Merens-Belzer)

シスター・ロザリンデ

1943年12月22日

私たちはクリスマスのお祝いの準備で慌ただしい。この居住区にいる人々のためはかなりたくさんの方がなされる。プロテスタントはクリスマスは学校—現在は教会—で歌とクリスマスの物語で祝う。12月24日はプロテスタントとカトリック全員クリスマスイブを合同、運動場でクリスマスソングを歌う。合同で6曲歌われるだろう、それから各聖歌隊が別々に。そしてかなり強力な私たちシスター聖歌隊も自分たちで選んだ歌を歌うだろう。

ワイヘンケ

1943年12月25日

クリスマス第1日目。人生は困難だと思う、一部はクリスマス第1日だから（ということは自分のせい）、そして一部は痛い足の指と腿の付け根が痛むからです。あなた、我らの主と見事にやっつけてのけるのはとても難しい、ものすごく困難です。私はとても閉鎖的で、聖なる魂を迎え入れられるにはやはり心を開放すべきでしょう。でも私は自分自身ではなく自分の魂を隠している。あなたがそばにいれば私を助けて下さいますか？あなたは共に闘って下さいますか？私は自分を哀れんではいません、でもとても孤独を感じます。私が窮地にあり難しい性格だからこそ、他の人を拒絶してしまい、その上人々は私のクリスチャン的性向を嘲笑するのです。私たちにとって本当に困難なことは—みんなにとって—とてつもなく徹底的に現在を生きていること、そして将来だということをご存知ですか。常に何が起こるのだろうかということに視点を当て、それに関して思考したり話し合う—そして今日の心配事にどっぷり浸かっている、すなわち自分自身の精神的な心配事や他の人々のいろいろな心配事です。そしてこれらはすべて、もし神の愛を信じるなら本当はないはずなのです。

今晚はチラマヤフィールドで大きなクリスマスツリーの飾り付けがあります、そしてカーター牧師と神父のひとりの説教と子供たちやシスターたちの歌。私はとても期待しています。

子供たちのジョーク。ひとりが本を読んでいます。「お母さん、オランダにも収容所があるよ、なぜならこの本にはノールトワイクとカットワイクってでているよ」（私たちはここでは収容所をワイク＝居住区とたいてい言うのです）。歌が1曲「私たちは皆神の子」1人の子供が問います「お母さん、警官（ここではかなり嫌われています）も神の子なの？」

シスター・ロザリンデ

1943年12月25日

私たちはここ私たちの家で深夜ミサをした、なんとすばらしい！ 教会では深夜ミサがなかった、そして私たちのところには人々が来ることが許されなかった。でも多くの人々が私たちの家の周りにあるゲデック[竹で編んだ柵]の外側に立って聞いていた。人々は私たちの歌を楽しみ、私たちが練習しているといつも人々のグループが立って聞いている。ああ、彼女たちには何もなく、歌は救いになります。

神に捧げる夜は滞りなく終わった、自慢するわけではなく人々は私たちの聖歌隊がもっとも素晴らしく歌ったと思っていた。ああ、おそらくとても簡素なクリスマスソングだったし、彼女たちはとても上手く歌ったからだ。とても素晴らしい日だった。今朝私たちは合同で食事をした、だからすべての修道会がひとつの講堂で。神父様が「私たちの聖体」をお迎えにいらした。祭壇は私たちがいた同じ講堂にあり、カーテンだけで仕切られていた。神父様は素晴らしい雰囲気印象を受けていた。私たちには楽しい雰囲気をかもし出す赤いロウソクと赤い紙もテーブルの上に少しあった。夜は合同でクリスマスソングを歌った。

ワイヘンケ

143年12月26日

昨夜私たちは、チラマヤフィールドでたくさん灯りのついた大きなクリスマスツリーで合同のクリスマスをお祝いしました。忘れがたいものでした。太陽がちょうど黄金の灼熱の中沈みかけた時に始まりました。それから直ぐに暗くなり、私たちは素晴らしい星空の下に立っていました、そしてクリスマスツリーがみんなの顔を輝かせていました。私たちはみんな一緒に、子供たち、シスターたち、婦人が4つのハーモニカの伴奏を伴って別々に合唱。すべてが高い雨に降り清められた空に素晴らしく響きました。そして今数千の人々とのつながり、現実につながって立っていました、現在の悲惨さの中とキリストの喜びの中でのつながりです。神父様はクリスマスの福音書を読み、カーター牧師は短いけれど魂のこもった説教をしました。最後はみんな一緒に「天にまします神の栄光」を高い木の周囲で真ん中にクリスマスツリーの灯りがともった星空に下で歌いました。そして世界中が今この瞬間にやはりこの歌を歌っていることを知り、胸がいっぱいになり泣きだしそうになってしまいます。

今朝は私の「静かな時間」におそらく一步前進したと思います。その時私は自分自身が絶対によりよくすることはできない、でもキリストだけが出来、キリストだけが望んだのだと理解しました。なぜなら私のためにも彼ははりつけにされたからです。私はこれらの思いですこし気が狂いそうです。…中略…

スズ製の花瓶に入った松の緑の大きな枝からなる私たちの「クリスマスツリー」は、

今日最後のローソク 2本が燃えつきました。

ベルフ

1943年12月26日

昨日チラマヤフィールドで合同のクリスマスのお祝いがあった。ようやく私はみんながいつもわさしていたカーター牧師の説教を聞いた！ 毎日曜日年老いた神父さんの最悪の、まったく最悪の説教には腹が立っている私は喜ばしく思っていたのだ。カーター牧師の説教は短かいが素晴らしかった！ 私たちは未来を絶望する必要がないとカーター牧師は言った、なぜならクリスマスは私たちに神が喜びをもたらしてくれることを教える。神は勇気を失わない！ だから私たちはこの時期にもクリスマスをお祝いするのだ。神の愛は常にある、私たちみんなのために。神は私たちと共にいる。神はその子を私たちに産み給われた。ここ地上は絶望と苦痛と疑惑の闇だ、しかし神は常に安らぎを見出す。だから私たちはクリスマスをお祝いする。神の愛に心を開放しよう！ 「神への祝福を」というのが彼の最後の言葉だった。

それは説教だけではなく、説教のあらゆるやり方がものすごく簡素でよかったのだ。彼はすべてにおいて素晴らしい演説家だった。彼の言いまわし、言葉づかい、声の調子、すべてが素晴らしく感情が抑制されていた。私はカーター牧師が本当にいい人だという印象を受けた。私は彼の説教をもっとたびたび聞きに行きたいと思う、でもいかに可能なのか？ 私がプロテスタントの礼拝に行くのはかなりむずかしい！ 私がこの3人の「説教の下手な神父たち」にとってひどいことではないにしても、許されていない、私はやはり健全な分別を持っているのだ。ともかくとても素晴らしかった。灯りのともったクリスマスツリーもあった、そして星が私たちの上を照らす野外での歌は素晴らしかった！ 私はヘネクイン先生といっしょだった、とても楽しかった。

シスター・ロザリンデ

1943年12月27日

キリスト降誕祭は大成功。券を持っている人は全員見に来た。人々はもう機会が得られないのを非常に残念がった。満杯の講堂での「お祝いの夜」はまだ十分でない。収容所委員会全員、医師たち、病棟の看護婦全員、「小アデッキ」の年老いた男子たち、みんなが見に来て十分満足していた。私たちはこんなに成功するとは考えていなかった、でもことにこの時期人々になにか素晴らしいものを与えることができるのは気持ちの良いものだ。

ワイヘンケ

1944年1月2日

大晦日にカーター牧師が再びチラマヤフィールドで何千人もの人々に説教をしました。私はこのような共同のものはとてつもなく価値あるものだと思っています。それから私たちはこの夜静かに過ごしました。アンデルセン童話を読み、12時にお互いに抱きあい、1月1日は誕生日なのでリーンチェにおめでとうと言いプレゼントを手渡した。彼女は3つの大きな切れたタンパ[唐箕]などをもらい、ロープが下に垂れ下がっていて、産卵場のようにハングマンが吊り下がっている。タンパから何が作れるのか、そしていかに工作するのが楽しいか、キパセン[扇]も工作できそして自分のためにぜいたくなキパス[扇]を作ります。…中略…

もう前に夜の教会について書いたかしら？ 最善なのは常に現在病棟になっている学校のペンダポ[パビリオン]です。教会はいつも満杯で、私たちはペンダポと病棟の間にある芝生の中、持参した椅子に座っています。星空の下で気持ち良く座っています、それは静寂と時々病気の子供が泣いたりあるいはおまるの音がしたり、そのあいだを牧師が説教するのです。

シスター・ロザリンデ

1944年1月3日

居住区の人々は私たちが東インドで25年働いているのでお祝いをしたがっている。お祝いの時期ではない、でも人々の気晴らしになるのなら、そして連帯感を与えるならいいと思う。人々の多くは素晴らしい祝日が口にのぼり降誕劇がすでに不愉快なことをすこし忘れられていると言っている。

ワイヘンケ

1944年1月7日

昨晚私たちはプロテスタント教会の一員として受け入れられました。とても素晴らしく、安らぎのひととき、まったく感傷もなく、深い感情で満たされました。私はこのごろとても安らかで内面に喜びがあふれ軽くなっています。この一歩は私に本当に幸福を与えてくれました。

ランジング - フォッカー

1944年1月9日

戦争がある、でも私たちは気づかない、なにも起こらない。毎日が同じく単調！友人を訪問するのももう楽しくない、なぜなら会話の話題は尽きてしまったから。「何かニュースがある？」「いいえ」沈黙。ため息。それですこし同居人の噂をして、物価が高いのをぐちる、今なにを話すことがあるのだろうか？夜に訪問者を迎えるには、私は疲れすぎている。夜に出かけるのももうしない。

ワイヘンケ

1944年1月9日

満杯のペンドポ[パビリオン]、そしてすばらしい堅信礼の説教。私が堅信礼を施されたことは私に安らぎと喜びを与え、深い感謝を与えます。今私はすでに何ヶ月間（何年も！）におよぶ状況になる前から捜し求めている言葉も分かります。本当に最も深いところで試練されていたのです。正常な時には触れられなかったままのことを。…中略… 説教は素晴らしかった。全体的に、洗礼にもとても印象づけられました、でも後で気がつくのです。なぜなら一日中「陶醉」していますから。夜は晚餐の饗応があります、プロテスタントの礼拝の中で不思議な神秘とカトリックで、とてもきれいで荘重だ。私はただ疲れていたもので、奇妙なものだけを見た。すなわち私の膝の上に果物のかたまりを落としたカンプレット[コウモリ]、そしてハレルヤの最後にあくびをもう押し殺すことのできなかつたシスター・ファン・ヘール・ギルドマスター！

でも各々の礼拝はまた驚くべき環境でおこなわれる、すなわちバケツやおまるがぶつかり合う音、病棟からのささやき声、病気の子供たちの叫び、その間に静かにベランダを拭き掃除する少年、忙しく行ったり来たりしている看護婦やシスターたち。それから外側でも色々異なる椅子や長椅子に座っているまだたくさんの人々が満杯のペンドポ、あるいは石や芝生に座っているか、あるいは医師の診察室の扉にもたれているか、通りの方でも人々や子供たちが窓の格子に向かって登って聞いている、見回りの自転車に乗って通り過ぎる警官の声と通り過ぎるニッポン兵の物音。これがこのイメージです。

ランジング - フォッカー

1944年1月18日

記述することは実際あまりない、でも私はこの日記をある程度維持しておこうと思っている。私はこれをあとで少しは興味深いと思うだろうか？ 記述や書類に対する価値観はさもなければこ

の時期完全に変化している、今クラマツからの引越しで手紙の包みは捨て去ってしまったのだ。興味深い 1914 年から 1918 年の義母からルーへのおもいやりのある手紙。いくつかは読んだ、でも本当に関心を持って注意深く読む気はなかった。だから子供たちが何年かたって興味を持つとは思えない。おそらくこの時期は、自分たちが経験した一無意識に—ので後々興味を持つかもしれない。ほとんどの人々は過ぎ去った子供時代に強い関心を持っている。

ベルフ

1944年1月18日

ヘネクイン先生がパウリーンにも今教えている、2日に1回、1時間半だ。これはお母さんが子供たちで疲れてしまったから、なぜなら子供たちはまったくの退屈さからイライラしていて、短気で騒がしかったからだ。彼女は私が洗濯をしていたヒディングさんのところから戻り子供たちの面倒をみることを欲した。彼女はそれを「優先させる」ことができなかった。コッホ先生は私が寝室で子供たちに危険なく教えることができると思っていた！ あきれたことだ！ 単に彼女自身がやる気がない証拠なのだ。

ともかく、ヘネクイン先生が週に3回ヒディングさんの洗濯物をしている、なぜなら彼女は病気が回復していて仕事を探していて、ゴミ収集¹⁴³はやる気がなくなっていたからだ。他の3日はパウリーンにドイツ語とフランス語を1時間半教えている。私はパウリーンにはかなりのレッスンが必要だと思った、彼女の頭の中は女ともだちや彼女の崇拜者たちの外にはないのだ。でも小さな子供たちへのレッスンはもっとプルロー[必要]だった、なぜならお母さんが困っているから。パウリーンには結局イライラさせられることがないのだ。でも現在コッホ先生はこの部屋に大きな危険はないと言った…私はパウリーンも考慮に入れるべきだと思った。でも…パウリーンと、それにマグダ、それにトレースとエルナ、これは多すぎる。その上パウリーンは私には手が負えなくなっている、特にドイツ語。文法の基礎は大部分教えた、でも言語、生きた言語に関しては、私は彼女に会話を教えたり書いたり自由に使うことを教えることができない。私自身2年しかドイツ語を習っていない。だから今ヘネクインがパウリーンを教えている、その上彼女自身も教える気にすごくなっている。私は—彼女の病院時代から予想していたのだが—彼女が私とおそらくロップや他の子たちにまたドイツ語を読むのを教えることを望んでいた、でも今その好意はパウリーンに示されている。

ともかく、私は彼女のために心から賛成している、でもコッホ先生には我慢できない。彼女はただ単に「無気力」なだけ。彼女はヘネクイン先生ほど教えることが好きではない、そのことを私は今になって気がついたばかりだ。彼女は私といっしょにありふれた物語を苦労して読

¹⁴³ ここではヘネクイン先生が居住区のゴミ収集係のコーディネートをやる気がもうなくなっていたことを意味している。

む気がないだけ、それだけ。彼女は自分が好きなものだけ読むのを好む。彼女はファン・ルュールさんといっしょにプラトンも読んでいます。そう、彼女は卒業生のファン・ルュールさんが大好きで、キケロよりプラトンのほうが好きだから！

私はファン・ルュールさんが、彼女はステキな人だけど、週に 2, 3 回読みに来ると泣かずにはいられない。まるで全く危険を探ることができないみたいに！まるで 7 人の子供たちを持つクペラ[家長]のためには危険がないかのように！なぜなら彼女は、私を息苦しくさせる前にお母さんに一度は弁解したのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年1月21日

明日は「カロルス」25 周年だ。この居住区にいるパーチェ・ファン・アルケンとその他色々な人がこのことを知っている。彼女たちの家族が最初カロルスの役員だった。彼女たちが公表し、現在、記念日を祝おうと小さな婦人会を形成している。イエス会 (S.J.)¹⁴⁴のフレールアッカース神父をそのためにみつけることができる。教会で明日荘厳ミサが行なわれる。収容所長コンドーがこれに際して居住地の中に花を持ってくることを許可した。彼は許可書に自分で署名さえした、これは全くいままでなかったことだ。収容所リーダーのウィリンヘ夫人が引き受けた、なぜならあらゆる要求は彼女の手によってなされるからだ。

あきれたことには歓迎会も必要だ、この「居住区」においてだ。なんという思い上がり！でもこういうのは私たちにとって常に「懺悔」だ。この委員会は私たちが午後「盛大な晚餐」を受け配慮をしている、なんとまあ！ジャガイモさえも与えられるのだ。私たちはシスター・フェルナンダが送ったニワトリももらう、なんという饗応！今朝はライ麦パンさえももらった。ウルスラ会の修道院管区長（イルデフォンセ）もちょうど聖名のお祝いをし、収容所外部からクッキーが送られてきた。うれしいことだ。

シスター・ロザリンデ

1944年1月24日

なんとこの 25 周年記念日は忘れがたい日だったことだろう。誰も収容所の中でこれほどは期待していなかったと言える。みんなが一緒に働いた、特にここバタンハリ通りのシスターたち。お祝いは私たち自身が感謝をこめて歌った朝の荘厳ミサ（ペロシ第 3 ミサ）と共に始まった。なぜなら没収された物資や、伝道を行なう家があらゆる所で差し押さえられたことに関しては愚痴を

¹⁴⁴ S.J.=イエズス会のこと。

言うべきでないからだ。これはすべてまた元通りになるだろう、伝道魂は生き続け、変わることなく機能し続ける。私たちは確かにかなり分離されているにしても、いたるところ素晴らしい仕事はまだある。ここバタンハリ通りからは3人のシスターがチデン病院に働きに行き、2人は「小アデック」の病棟、その他は助けを必要とする人々のために社会奉仕をしている。そして私たちの助けによって人々がいかに喜んでるかを聞くと私たちは、実際この居住地のシスターたち全員は満足感を得るのである。

荘厳ミサの後、私たちは讃美歌を歌った。シスター・グラシアは教会（全ての信徒のため）と隣接する病院で臥せている。彼女はすべての話しを理解することができる。ほとんど全員が異なった宗派の看護婦たちが静かにすることを特別に配慮した、とても親切だ。私たちの聖歌隊も人々を惹きつける、というのはかなりの数がまた教会に来るし、また教会に行く勇気を持ち、多くのプロテスタントの人々さえ聞きに来るのだ。それで修道院管区長が彼女の聖名のお祝いをいっしょにし、私たちは二重のお祝いがあり、前の夜にはカンタータを始めた。

荘厳ミサの後はずぐ歓迎会のために講堂を準備した、すべてのことに使われる講堂、特に幼稚園として、でも日曜は自由に使えます。歓迎会はとても盛況で楽しい慌ただしさだった。多くの貴婦人たちが彼女たちの夫がリーダーだったローマ・カトリック連合や協会の名においても祝った。ファン・モーク夫人も個人的にお祝いを述べた。神父さまたち、修道士たち、また「小アデック」の年老いた紳士たちも参加した。歓迎会の半ばにシスターたちや婦人たちによって素晴らしいカンタータが歌われた、その後フレールアッカーズ神父が説教をした。…中略…

このような瞬間には、今カロルス病院はどうなっているのかと考えるだけで胸が一杯になることが理解できるでしょう。私たちは少したってから、よき牧者会のシスターが入り口をととても素晴らしく飾ったガレージに行った—ここが25年目の私たちの「家」だった。私たちはそれから心から笑い、その日を楽しく過ごした。委員会によって提供された素晴らしいお祝いの席で全ての修道会がまた結束した。

ベルフ

1944年2月17日

私は実はやる気がない、読む気持ちにならない（頭が痛いからだし、まったく軽いオランダの本を持ってないからだ）、でも雨が降っているため、そしてこれはめったにない機会だからなにか書くことで慰めよう。この日記は私の人生の慰めである、私の存在に興味と変化を与えるものである。私が午前中ベッドからでる意欲があるとする、なぜなら私がしたいと思うことのできる午後の時間をすでに熱望しているからだ。

私はちょうど「キューリー夫人」を読んだところ、私は辞書を横におき、全ての単語を探して読んだ。今後はフランスの本が読めるようになりたい。私は今ちょうど「Ariel ou la vie de Shelly」を始めたところ、でもこれはもっと薄くて簡単だ。この2冊の本のほかには、私の図

書館には（棚の一番上段）にはウェルギリウス、サルスティウス（未来の夢）、キケロの面白い古い詩集、それからアイネーイスからの選集、日本に関する4冊の英語の本（1冊は日本の劇に関するもの）、ファン・ローンの「ヨハン・セバスチャン・バッハの生涯」（私は読み始めたが、先に進む気力を失った、本当はあまり興味がないがそれを誰にも話そうとは思わない）がある。その他にはショーの「聖女ジョーン」（素晴らしい！）とツアドクス・ヨセフス・ジッタの「Nieuwe geluiden, Antieke cultuur in beeld」、リルケの「Das Marienleben」、ヘンリエッタ・ローランド・ホルストの「トーマス・モア」（これはデ・ヨングさんといっしょに読んでいる）。それからカタリーナに対するキケロの4つの演説、この最初の1つは私がものすごくまじめに取り組んだ（正式には現在の私のラテン語で、翻訳をしているところ、うまく翻訳するのは常に困難だ、でもほかにはちっとも面白くない。私はもう長く勉強するつもりではない）。その他ラテン語の読み物と私の親しんだオウィディウス、加えて本が2冊、1冊はゴヤ（面白いと思わなくてはいけないの？私はあまり最善を尽さなかった）に関するものと挿し絵付きの「Der Basler Kunstsammlung」、ホルバインの素晴らしい絵がのっている！まったくすばらしい。…中略… 私が本を読まなかったら、本について日記を書くということがわかるでしょ。これらの書物はすべて私にとって埋め合わせになるものだ。奪い取られずにいてくれれば！

午前中は子供たち、マグダとトレースといっしょに勉強し、エルナに読み方を教える。マグダはフランス語とドイツ語とオランダ語、トレースはオランダ語と地理とフランス語がある。マグダはとても頭が良い、彼女は絶対文学好きだ。トレースはやる気がない、でも時々突然とても良くなる。子供たちとの勉強はとても不規則的だ、私はときどきバザールに行くか、ミルクを取りに行く必要がある。そして私たちはいつも部屋の中になければならない、部屋を掃除する時は厄介なことになる。私たちはお母さんの部屋と私が今エルナとパウリーンとで1つのベッドで寝ている小部屋を使う。私は子供たちに自主的に宿題をさせるのは危険が大きすぎると思う、だから午前中にいっしょにしてしまう。ひとりが宿題をしている間に、私は他の子を手伝う、これはとても面倒くさい、なぜなら私と同じく徹底したトレースは宿題にもものすごく時間をかけるし、マグはものすごく速い（そして良くできてもある。彼女の作文はすばらしい！）

午前中は中断やくだらないことがあり、忙しく無秩序だ。午後は素晴らしい、私は夕食後の時間帯に食器洗いがあある以外は自分の時間が持てる。月曜日はフランス語をファン・ビューティンガー・ウィヒャースラーマン・デ・フリース夫人のところでリリー・デ・カント（彼女とはとても気が合う…中略…）といっしょにする。私たちは毎週詩を学ぶ、何度も章を自分の言葉で語りなおしたり（ウィヒャース夫人は第1回目に関してはとても満足している、でも私はものすごく準備していたのだ！）毎週少なくとも1章読む。私はリリーよりずっと上手い、でもあらゆることを望んではいけない。デ・ヨングさんのところでは私ひとりだけではない、残念ながら。パウリーンのクラスの子でマライケ・ファーガソンと一緒にだ。彼女はパウリーンよりずっと高いレベルだ（両方とも16才）、でもやはり。デ・ヨングさんにはもちろんいいですよと言っている。ともかく最終的にはそんなに反対しているわけではない。とても気持ちのいい子だし、「頭のいい」子でもある。

ヘンケス - ライスダイク

1944年2月19日

アンネは素晴らしい誕生日を過ごしました（2月15日）、前日の家宅捜査の騒がしきは忘れていました。私たちが静かに過ごす日は完全に楽しく過ごしています。…中略… ミープ・ウィリンへは私たちが週に1度、音楽の夜会を持つことを実現させました！

シスター・ロザリンデ

1944年3月30日

私たちは明日キリスト受難劇の最終リハーサルがある。今日は女優男優たちが衣装を身に着けた。私たちが借りた布やカーテンでこのような成果が得られるとは考えられなかったことだ。まだまだ素晴らしいだろう、少年たちは舞台を作るのに忙しい。それにしても収容所の中、あらゆる集会、礼拝も禁止されるだろうという冒険的な噂がたちこめている。信じられない、でも…違う男たち、違う規則¹⁴⁵。

シスター・ロザリンデ

1944年3月31日

完成した舞台に感嘆しながら家に戻った。熱心に働いた、そして…それから**爆発**が起きた。マザー・レオニーが私を呼び、外で「マザー、教会の礼拝がすべて停止されますよ」と言った。私は少年たちに話しに行った。何と彼らは打ち負かされたことでしょうか、でも私は彼らがまず「教会」を考えたことをこころよく思った。「マザー、幸いにも僕は今朝教会にいつてきたよ」「僕も、僕も」と叫んだ。「みんな、希望を失わないようにね。何らかの処置をしていますよ、よくお祈りを続けていてね」すぐに舞台を壊し始める。

シスター・ロザリンデ

1944年4月2日

御ミサはない、聖体拝領もない。フレールアッカース神父は慎重に少し成り行きを見守るつもりだ。日本人が礼拝を禁止する計画だったのを知っていたカーター牧師は、最後の日に「堅信礼と

¹⁴⁵ ここでは軍政実施を意味する。脚注 31 参照。

晚餐」をすばやく行なった。彼らの礼拝の間に突然ニッポナーが中に入り、とても怒っていた。ウィリンへ夫人がその礼拝を続ける許可を取ったが、でもそれから…「教会は禁止！」と彼は言った。誰もまだ復活祭をしていなかった。まさに復活祭の直前だったのだ。早急な解決を望んでいる。

シスター・ロザリンデ

1944年4月5日

すばらしい、私たちは家で再び御ミサを行なった。なぜなら私たちはここでは家族的結合で生活し、それで御ミサは声をださなければ、以前のように静かに続けるべきなのだ。神父さま 2 人がすぐに朗読にやってきた。第 3 ミサには遅くなりすぎた、というのはすぐ隣が託児所で、だからニッポンの命令に従わねばならないからだ。

人々は現在告解することも許される、でもペンドポ[パビリオン]やどこでも人々のための御ミサは許されていない。フレールアッカーズ神父はものすごく復活祭を望んでいる。私たちの収容所長はそれほど嫌がってはいないらしい。彼はかなり同調しているようだ。彼は最善を尽すつもりだと言った、というのは収容所全部から請願書が出されていたからだ。でも軍総司令官が決定権をもっている。

ヘンケス - ライスダイク

1944年4月7日

礼拝が禁止された。

シスター・ロザリンデ

1944年4月9日

復活祭。とても複雑な気持ちになった日である。私たちは幸い御ミサを持つことができた、ものすごく静かに、でも他の人々（ローマカトリックの人々）はみんなできなかった、だから復活祭を祝えなかった。人々はとても悲しみにひたっている、なぜならこれらはすべて精神を強くすることができるからだ。私たちは彼女たちをできる限り慰めた、でもひとつが終わらないうちにまた他の命令がまた平和を妨げる。ヤップの戦略だ！神経戦！

ベルフ

1944年4月16日

コッホ先生は、プラトンは児童文学ではないと言う。少なくともこの点で私が子供だとみなされるなら。私はとてもプラトンを読みたいと思っている。私はやっとな真の賢者であり地上人ではない人の言葉のなかに解放を感じるのだ。デ・ヨングさんが私といっしょにプラトンを読むはずだった、でも最初のページは不自然な愛について書いてあり、そのとき彼女は私には適応していなかったと思ったので、この最初の時以来戻ることはなかった。彼女の気持ちが楽になるまで、と思う。**ナンセンスだ。**

なぜ私は18才なのにこの世界のことを知ることが許されないの？ 危険は物の存在にあるのではなく、認識する方法によるものだ。これまでに生存した人の中でもっともよき賢者のひとりの言葉にどんな危険があるのだろうか？ 「不適當な」ものに関して哲学論文の中で取り扱われている場合は、すべての哲学的な論文を読むことが許されないということ！そうすると最も素晴らしいもの、真実のもの、最善のものを禁じることになる！私は人々がいかに慎重なのか理解できない！私が幼すぎて読んだもので有害になったものは決してないと信じている。私はたぶん若い年代に読むのにはそれほど適当でないものも読んだことがある。でももし私が道徳的になにか間違ったことをしたならば、それは私が大人になる過程の結果であり、自分自身からくるもので読書のせいではない。

ああ、私は間違った本が非常に有害になるかもしれないのを知っている、でも最悪で、間違ったもので、低いレベルのものでも自分の心になにか共感を呼ぶものがあるはず、なぜなら「純粋な人はすべてが清らかに見える」でしょ？ でも完全に純粋な人はいないから、だからこれらの価値の低い書物が存在するのだ。でもここでは価値の低い書物についてではなく、あきれたことに**プラトンのこと**なのだ。プラトンを読んで悪くなった人を聞いたことがある？

そのほか、プラトンをデ・ヨングさんと読むことはもうどうでも良くなった。私にとって直接、声に出して読み理解することは難しすぎたが、デ・ヨングさんは私が家で自習するためには彼女の本を私に貸したがいなかった。もう読み続けることには興味がない。将来まだ機会があるだろう。

シスター・ロザリンデ

1944年4月25日

ひっそりと最初の聖体拝領、私の2番目の教え子から。

シスター・ロザリンデ

1944年5月28日

聖霊降臨祭。御ミサの代わりに女性たちはパチョレン[鋤作業]に行く。多くのカトリックの女性たちはこれをととてもひどいと感じ、午後遅く常に収容所の人々に開放されている私たちの小さなチャペルに祈りに来る。フレールアッカー神父とカーター牧師がソネイのところに出向いた。彼は話を聞かず、45分間待たせた後ニップのカトーを送った。やはり礼拝許可をもらいたいことへの唯一の答えは「インポシブル」あるいは「ティダック・ボレ[してはいけない]」すなわち「不可能」か「許さない」である。ひどいことだ、でも教会はない。

シスター・ロザリンデ

1944年6月8日

私たちは神父さまの説教をタイプするのに忙しかった。今後カトリック信者には毎週説教がひとつ転送される¹⁴⁶。幸いなことだ、今少なくともなにかがある。

シスター・ロザリンデ

1944年6月16日

クラマットにはここよりかなりましな収容所長がいる。彼は日曜日の礼拝を許しているが、ここチデンの収容所長は聞く耳をもたない。いずれにせよ、この収容所の中には礼拝を行なう場所がもうどこにもないし、ペンドボ[パピリオン]は取り上げられ、いろいろ他の目的に使われることになっている。

聖心祭。私たちの聖なる父はタンゲランに収容されている二人の 아일랜드人のウルスラ会シスターになんと大きな幸運をお与えになったことだろう。彼女たちは9日間の祈りを行なった、というのは聖心祭でまた一度聖体拝領に行くことができたから、そこで理解しがたいことがおこった…英国人と米国人女性が昨日タンゲランからここに移送されてきた。およそ500人の女子と二人のアイランドシスターたち。なんという再会でしょう、去年以来彼女たちは聖職者をひとりもみていなかったのだ、そして今彼女たちは御ミサと聖体拝領ができた。何と彼女たちは喜んだことでしょう、主はやはり良いことをなされた。

¹⁴⁶ 脚注 70 参照。

シスター・ロザリンデ

1944年6月29日

「ペトロとパウロ」の日に一度だけ礼拝ができるように請願した、そしてちょうどベルナード公の誕生日だったため、「ティダック・ボレ」すなわち許されないと聞かされた。ああ、ソネイがここで密かに御ミサをしていたことを知ったら決して許されないし、もっとひどい罰が続くかもしれない。私たちは毎日「イエス様、ありがとうございます！」と言うだけ、でも…葡萄酒とホスチスがなくなっていく、神父さまは御ミサにはすでに小さなホスチアを使っている、そして私たちはすでに何ヵ月もホスチアの一部をもらうだけ。

シスター・ロザリンデ

1944年7月23日

ソネイの代理（ソネイは戦いに行くという）のトトキが現在のボスである。彼はかなり好ましくみえる。彼は昨日の午後突然私たちのところに現れた。私たちはまさに英語の授業（禁止されていること、でもこれから新しい統治者がくると、私たちは彼らを十分理解していないし、今はその到来の準備をしているところなのだ）をしていた、その時突然ゲデック[竹で編んだ柵]の下に茶色い長靴をみたのだ。「ニッポンよ」とマザー・ユリが叫び、まるで感電したかのように私たちは起き上がった。幸い奇妙なものではなく、なぜならこれは必要で、そのあと深くお辞儀をしなければならぬのだ。本は閉じられハンカチですばやく黒板の字を消した。彼は私たちがここで何をしているのか、ここは何なのかを尋ねた。私たちはすべて人々のためにしているとすばやく言った。彼は見廻り、シスターたちが裁縫や洗濯をしているのをながめてから立ち去った。私たちはほっとした。

シスター・ロザリンデ

1944年8月6日

なんと私たちは特別扱いされていることだろう。部分的にせよまだ毎日御ミサと聖体拝領がある。私たちは毎日最後の葡萄酒の瓶がなくなるのを怖れている、その後はどうなるのだろう…。

不思議なこと、私たちはホスチアをもらった。現在まだ少年棟にいて入ってきたばかりの幾人かの女性がいる、彼女たちは私たちのためにモンセニユール・ウィレケンスからバスの中でもらったものだ。よき牧者会の二人のシスターたちが織物工場に行ったので門を出なければならなかった時、女性のひとりが他の人に、シスターたちが理解できるようにかなり大きな声で「今私たちはホスチアをもらいました、今私たちはまだシスターたちに手渡すことができませ

ん」と言った。シスターたちは理解できたとうなずき、待つことがメッセージでした。最近私たちはそれを受け取りました。でも今まだ葡萄酒。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月9日

絶えず誕生日が過ぎ去って行きます。どれくらいまだこのような仕方で迎えることになるのでしょうか？ ヤン・ヘンドリックは彼の誕生日にヤン・オルファートが毎日歩いて歩いていたサッカーシューズをもらいました…申し分なくきれいにし包装して！それぞれの誕生日に何かを作られる。ヤン・Hはシスター・グニングのために我らが主を描きました（靴に！）。子供たちはほとんど裸足で歩いています！

シスター・ロザリンデ

1944年8月14日

今日はまた大人の洗礼があった。すばらしい、私が教えを許された3人目で、明日聖母マリア祭で彼女は最初の聖体拝領を行なう。私たちがここゲデック[竹で作られた柵]の裏側でいつもまだ御ミサをしているのをソネイが気づいたらと私はドキドキしている。主は私たちをお守り下さるだろう。私たちは彼が気づかないことを祈るばかりだ。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月31日

9時半。子供たちは寝ています。土曜日の夜です。10時半に消灯しなければなりません、それからリートと私はひっそりと就寝している居住区でわずかな憩いの時を過ごします、ヤップが私たちを見ることができないようにベランダに座って。

ベルフ

1944年11月12日

私はもうすでに数ヶ月ウィヒャースさんから授業を受けていない、とても残念だと思っていることだ。というのはWさんが大好きでとても気が合うし、授業はとても楽しいからだ。その上、彼

女の授業が終わるということは、すなわち私とリリー・デ・カントとの付き合いも終わるということで、とても残念に思っている。なぜならリリー・デ・カントはこの居住区で知り合ったものとも気丈なともだちだから。彼女は常に他の人のためにすることをいとわないし、常に嫌な仕事をすることもいとわない。ほんとうに優しく私心のない人だから。

ヘンケス - ライスダイク

1944年11月16日

禁止されているけれど、私はまだ子供たちを教えています。アンネはフランス語の最初の部分をほとんど終了しています。

ベルフ

1944年11月19日

今日私はとても喜ばしい気分、とても幸せだった。お母さんはピアノでショパンのバラードを弾いている。バラード第3番は素晴らしい、一番星が輝く永遠の中、澄み切った夜空に真っ直ぐのぼりつめるための広い翼を持ちたいと望むほどだ。私は詩を書くこと、あるいは舞うこと、あるいは歌うことができたらと思った、とても素晴らしい。自分を表現するために舞ったり歌ったり詩を書いたりできるのはとても素晴らしい。時々私は魂の奥深く遠いところで、詩を書いたり絵を描いたりする才能、ともかく本当に美しいものをすべて表現するためにあらゆる才能が機会を待っているのだという気持ちになる。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月7日

私たちは聖ニコラス祭をとて楽しく祝いました！垣根からとった枯れ木の焚き火の上で、リートが砕したお米とそして水のようなコーヒーからお祝いのプディングを作りました！ベッドに座り、本当のお祝いになりました！

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月25日

クリスマス第1日目。リートがルカ2のクリスマスの物語を読みました。お砂糖といくらかのサゴ・アンボンでブディングを作りました。数本のロウソクが灯っています。私たち7人で座りました、というのは愛らしくて気丈な¹⁴⁷デーワと一緒にです。私たちの思いは静かで、確信があり、そしてやはりこのよき瞬間への感謝の気持ちで、そこに座って…つかの間惨めさと飢えとヤップのことを忘れていました…私たちは自らのクリスマスをお祝いしたのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月18日

午後3時。リートは深い眠りについています。アネケと私だけが起きています、他の人たちも昼寝しています。雨です、だからヤップは見廻りに来ないでしょう（私たちは休息が許されていません）。窓は心地よく閉まっていてミミ猫がごろごろ喉を鳴らしてわらかごで横たわっています、不可欠な物です。

ブールマ

1945年1月29日

幸いなことにまだここでは本を交換することができる¹⁴⁸。私は今週ジェーン・ウェブスターの「あしながおじさん」を読んだ、ものすごく面白い本だ。3日間で読み終えた、ほかのものは10日間くらいかかるのに。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月9日

アネケの誕生日。私たちがひとつの家族として祝ったのは4度目になります。やはり本当のお祝いの日になります。プレゼントの一つは診断証明書をもっている誰かからの野菜が少しでした。

¹⁴⁷ 彼女の母親は1週間前に死亡した。

¹⁴⁸ チデンでは最後まで図書館が運営されていた。これは密かになされていた、人々は収容所長が判を押した書物のみ（聖書も含む）所有でき、書物の他人への貸し出しはジャワ規定18項によって禁止されていた。大きな収容所ではそれほどこの条項は厳密に守られていなかった。（Rinzema,p.92-93、Van Velden, p122）

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月15日

(娘のアンネの誕生日) 毎分を 100 パーセント楽しんだ一日。彼女のともだち二人と庭のティカール[ござ]の上で、プレゼントの一つである小さなロウソクを 2 本でその日の終わりを祝った。蓄えておいたお米に発酵させたサクランボに砕して焼いたランブッタンの種¹⁴⁹をかけたものを、真ん中にロウソクをたて、私たちは寝る前においしく食べた。この特別食を楽しむ 4 人の嬉しそうな顔つき。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月22日

昨晚リートの腕に寄りかかって病後はじめての散歩をしました。ブッデライ夫人がストラウスとデュパルクを歌うのをすこし聞きました。この半時間ほどを楽しみました。おそらく最後のチャンスでしょう、というのはピアノも運び去られるはずです。…中略… 7 時、食事をしました、お米は幸い乾燥米です！アンネは彼女のお人形に食べ物を与えています。ヤン・ヘンドリックとヤン・オルファートはランプのした床ですごろくゲームをします。…中略… トウルディーはパンを切り、リートはまたベランダでまた密かになにかしています。雨が降っています、「あれやこれやの食事」でそれを祝う必要があります（ウィニー・ザ・プーが言うことでしょう）。また楽しい夜になります…。遠くで汽車の音がし、私たちはこの瞬間を楽しんでいます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月27日

今でも毎日子供たちは学校の課題を勉強しています、アンネもヤン・ヘンドリックもよく進歩しています。ヤップに気がつかれてはなりません！私は持続できることを望んでいます。

¹⁴⁹ 焼いたランブッタンの種は実に苦みがあり、麻痺効果がある。(Buah-buahan yang dapat dimakan Jakarta 1997 年 p300 E. W. M. Verheij, R. E. Coronel)

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月8日

リートは膝を組んで二段ベッドにいるアネケのフランス語の聞き取りをしています。ヤン・ヘンドリックは九九を全部理解しています。現在アンネはあまり弱っていなければ、1週間に3度コニー・グラウデマンスといっしょにM先生のところで勉強しています。彼女たちは全科目をし、とても楽しんでしています。彼女たちは小学校5年生を半分すませたところです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月30日

聖金曜日。ヨハネ 17 を読みました。リートは子供たちにも読み聞かせました。彼らは良く理解し深い意味も理解したと思います。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月31日

アンネは6年生の教科書を始めました。彼女は弱っています、でも楽しんで勉強しています。今は歴史と地理も教科書なしでしています。彼女はとても進歩しています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月1日

日曜日。復活祭。私たちは一日だけ静かに過ごさせてもらえるでしょうか?…中略… アンネはテーブルに復活祭のため人を驚かせるものを用意しました。私たちは少しお粥を食べ、今日はお肉の腸パイを一匙もらいました…これがお祝いの食事でした。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月19日

結婚記念日。お祝いの日！ミルクの缶を開けます、ですからクリーム入りのコーヒーと私たちは呼びます。ベッドではアンネからいろいろな草をいれたかごをもらったヤン・オルファートの「ブ

一ケ」、かわいい！

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月10日

私たちは毎日がおだやかに過ぎていくのを喜んでいますが、そして一日の終わりはいつもリートと一緒に外に座ります、お向かいに人が住んでいないことに感謝しながら。子供たちが眠ってから散歩をするには今はもう元気がないので、この半時間が私たちの心の拠り所です。私たちはまだかなり正常だと思っています！！

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月19日

一昨日…ラーン・トリヴェリで音楽の夜会。ガイナ・ヘット・フンがバイオリン、デ・ナンテス・フィッシャーが歌いました、フランスのシャンソンです。グレータ・ブークとクリンス・レ・ローイの二人も歌いました。私たちは数百人の女性たちと小さな裏庭の地面に座って、これらの女性が私たちに慰めを与えてくれたことに感謝しながら楽しみました。私たちは再び「人間であること」を少し感じました。彼女たちはもっとできるように願っています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月20日

小さな男の子が「お母さん、はだかの兵補をみたよ。パンツだけはいてたよ、ブラジャーはしてないなかったよ」と言いました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月29日

ベルンハルト王子の誕生日。私たちはもちろんこれを「祝日」にする理由だと思いました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月1日

今日初めて礼拝が許可されました…なんと祝福された日でしょう！

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月4日

誕生日(夫ウィル)の素晴らしいことは、みんながお互い同士を思いやることです。あなたがオランダで私たちのことをとても心配して下さっていること、そして私たちはまた新たに勇気をだして前進しようと努めています！ヤン・ヘンドリックが今朝一衣類は戸棚のどこかに吊られている—今日のために私の衣装を持ってきました。グリーンの子供と白いスカート！お父さんはきっと同じ物を選んだことでしょう、彼のいちばん好きなセーターなのです！そしてヤップが2オンスのグラ・ジャワ[ヤン砂糖]を持ってきました!!! 私たちは普段よりたくさん食べてしまいました。ヤン・オルファートはまだ薄暗い中お花を持って来ました…楽しい日になるでしょう！
…中略…

皮を発酵させたお水の「パンチ」（バナナの皮とパパイヤを何週間も集めました）を飲みました。多くの人々がここに来る気力を持っていました…このように私たちはあなたのいない4度目の誕生日をお祝いしました！ 40才です…7月4日！ 子供たちはあなたのことをとても懐かしく話しています—そしてあなたとまた会えるまでこのままでしょう。リートと私は彼女が大切に保存していたアプリコットブランデーを指差しに二杯ずつ飲みました。

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月7日

この日曜日、7月1日トゥルース・デ・Cによる初めての礼拝があった。アンパシットの庭で礼拝と歌と聖書を読むことだけが許された。ローマ・カトリックの御ミサも許されている。トゥルースはこのお祈りを完璧にし、讃美歌の選択は素晴らしかった。…中略… 私は今週から娘のアングの教育を始める。

ブルーマ

1945年7月14日

わたしはとても楽しい誕生日を過ごした。7月7日、まだお粥があり、それから9日にはお誕生日をパンでお祝いした。午前中わたしたちは米国人からのミルク入りコーヒーを飲んだ。午後にご飯に最後の缶詰のお肉、その後プレゼントをもらった。お母さんからはブラウスとガールスカウトのワンピースから作ったスカート、ハンからはボールペンやエンピツ入れ、そしてほかになにかまだ出来上がっていないものもある。ミーンからはスカーフ、カトリーン¹⁵⁰からはしおり。この家からはもう1枚ステキなハンカチ、ブローチ、バンドとPOW番号。夜はスパム[缶詰のハム]と魚、固ゆでの卵、玉ねぎ、ハチミツ入りクッキー入りのサンドイッチと何も入っていないサンドイッチ、それから香辛料入りビスケットのようなまだ食べていないふっくらしたパン、そしてデザートはコーヒーとココヤシの味のするアイス。テーブルは木の葉でとても楽しく飾られ、

わたしたちは礼儀正しくナイフとフォークで1時間ほどかけて食べた。わたしたちはみんなテーブルの周りで本当に「楽しんだ」。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月21日

昨日と今日最後のピアノ数台が居住区から持ち去られました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月24日

明日はヤン・ヘンドリックの誕生日。彼はとても楽しみにしています、私たちはみんな彼のためになにか作りました。そして明日はやはり私たちが一緒だということを喜び感謝しましょう。

¹⁵⁰ ハンネディ、アンネミンとカトリーンはヤネケ・ブルーマの叔母ディディ・ポッテマネ - デュモントの娘たちである。ポッテマネ一家とブルーマ一家はチデンで同じ家に住んでいた。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月25日

うれしがり生き生きしている男の子、お誕生日の少年！

「ヤン・ヘンドリック、病気だったのであなたへのプレゼントがまだ出来上がってないのよ！」「気にしないでいいよお母さん、ぼくはお母さんからもう本物のお誕生日のキスをもらったよ！」

リートおばさんは病棟での果物を蓄えて彼にピサンを送りました！彼はインディアンの衣装で歩きまわりアンネのベッドの上でプレゼントをひろげています！

ボルハイス - スキルストラ

1945年7月28日

女子の 80 パーセントにとっての娯楽はレシピを書くこと。私はまったく無視していた、でも病後安静を強いられたこと、女性雑誌リベレ、そして娘のアンケなどのせいで私もお米料理と安い皿料理のレシピの誘惑に負けてしまった。

ブールマ

1945年8月2日

10 日後の 8 月 12 日はママとパパの結婚 20 周年だ。わたしはそれでささやかな贈りものをママたちに作りたいと思っている、でも何がいいか分からない。いま彼女は婚約時のスナップ写真ももらったので、わたしはいまそれに額縁を作ろうかと思っている。

ブールマ

1945年8月15日

ハンコの誕生日(8月24日)にはよい知らせをなにか聞きたいものだと願っている¹⁵¹。わたしはお母さんのためにハンコのスナップ写真を額に入れるつもり(わたし流のやり方だけ)。カトリオンにはぬり絵の本をつくろう。幸いそのための紙を今もらったので、少なくとも進めることができる。あと8日だ、それにわたしはまだ半日出ているのだ(仕事だ！)。

¹⁵¹ 弟のハンコはチマヒ4号収容所に収容されていた。

終戦後の生活への想い／収容所の雰囲気

ベルフ

1942年12月25日

私は戦争に関してはそれほど楽観的ではない、最近ではかなり良い方へ向かっているけれど。でも私はやはりこっそり（言いたくはない、なぜなら、この家のみんなは、私をととても悲観的だったと言っているから、でも私は常に現実的であることに努めているのだ）「戦後」についてしばしば考えている。お父さんが私をギムナジウムに通わせてくれることをものすごく望んでいる。…中略…

時々、私はお父さんが家にいたら願ったりかなったりだと思う、でも彼は私をきびしく扱うだろうと思う。なぜなら私は最近ものすごくえらそうで横柄だから、だからこそ彼が家にいたらいいと思うのだ。

ベルフ

1943年3月19日

ハインが家に戻って来たらどうなるだろう？たぶんもう私を見ないかも、彼は私のことを好きだったけれど、ごく一般的なやり方だし、私が彼のことを思っているほど忠実でとても好きだというわけではないから。それに私はかわいらしい女の子ではない。私はメガネをかけているし、スポーティーでも魅力的でも活発でもない。正反対。でもハインは私を水泳プールにいる活発な女の子たちよりは高く評価していると信じている。私はハインがあのアデックで私のことを何度も考えているとは思わない。もう彼がいなくなって9ヵ月たった。

ヘンケス - ライスダイク

1943年3月22日

時折なぜ私はこんな一般的なことを書いているのかと自問しています、これはつまり私がいつかもっと緊迫するだろうとずっと感じているからでしょうか？後でなにか「家族」の役に立ってほしいと願っています。現在私は元気がなく疲れています。またものすごく暑くてだるいお天気です。

ベルフ

1943年4月25日

お父さんは冷淡であり愛情こまやかというわけではない、そしてこの1年間は仕事にばかり熱中し、ほとんどお母さんを構っていなかった。これは絶対すべきではなかった。最近、私たちはこのことについてたびたび話し合うことがあり、私はそのことが正しくなかったと判断を下した。これはおそらくすべきことではなかったかもしれない、なぜならそれで（おそらく私の一般的に冷静な判断でも）お母さんが現在、お父さんとの結婚をより冷静に見つめるようになったからである。これまで彼女は結構生活をロマンティックなものに保っていたが、今は時々とても皮肉って言うことができる。たとえばまた復活祭にストリウス収容所へお菓子の小包を送ってもよかった。お父さんは私の性格みたいだけれど、私が愛情を表現することができるかどうか疑っている。お母さんは最近お父さんの中に気づき（というには彼がいないから）、今彼女は「お父さんは本当に喜ぶかしら？だって彼はすごく冷淡だからね」と誇張している。今、私は絶対にお父さんが喜ぶと信じている、なぜなら彼は自宅での気楽さがなくて淋しがっていて、だからこんなことも好ましく感じるという理由があるだけだとしても。でも私はやはり彼にとってもこの年月の間に、お母さんと彼との間に何かが育っていったことを信じている。うん、やはり彼は喜ぶと思う。

でもお母さんは自分が渦中にいて、この正直に現実を見つめることにすぐには対処できない。最近彼女は「あまり楽しくはない、でもすべてがよりはっきりと現実的に見える」と自分から話した。彼女はなんでも私と話し合うわけではないけれど自分のことをたまには打ち明ける、私はよく理解できる。でもお母さんは今「すごく戦ったとしても、人生はやはり勝るものだ」と感じている。そして彼女に降りかかったことすべてが、彼女を意気消沈させ、彼女にすこし投げやりな憂鬱さを与えている。彼女には似合わないこの冷淡さはもちろん：第1にお父さんがいないこと（部外からはよりよく状況を把握できるということ）、2番目は私の冷淡さ、そして（確信が持てることは）お父さんのエゴイズムに関する私の冷淡な判断からきていると思う。これは私がすべきことではなかった。なぜなら今お母さんにとっては変になりそうだし、お父さんが家に戻ったらふたりにとって難しいことになるから。私はどんな結婚も円滑に進むものではないと思っている。

ベルフ

1943年5月7日

ありがたいことに、まだ私たちは援助を求めるためにG E S Cに行く必要がない、でもなにかも不愉快でお母さんは最近かなりシニカルでもある。これは彼女にとっても大変なことだ、というのは夫をこれほど愛している女性はそんなにいないからだ。私の将来は絶対そうならない。すごくゆううつになる、そして時々人々が周りにいるのが耐えられない気分になる。私はまだ外に

いるデ・ヨングさんのところに毎週行くことができるのを喜んでいる、これはいくらか喜びを与えてくれる。

ベルフ

1943年5月10日

私はもうすぐ 17 歳になる、することがたくさんある。私は自分自身に満足する人生が送れるとは絶対思わない。でも修道院に行かねばならないとは望まない。私は世の中でたくさんをしたい。そう、神秘的なものにとっても魅せられる。いずれにしても絶対お金持ちにはなりたくない、決してぜいたくはしたくない。そのためには貧しく不幸な人が多すぎるから。これは許されない。私はまだどのように人生を送るのか分からない。あるいは学ぶべきなのかも。素質はある。自分の素質に従うべきだという人々がいる。でも私は、いずれにせよ私の信じていることを探し求めたい、徹底的に。そして決してお金持ちにはならない。でも私はまだ自分を制することさえできない！それがまず必要だ！

ベルフ

1943年6月14日

私は毎晩ふさぎ込む傾向になっている、戦争が私を意気消沈させるし、嫌なことがなにか起こりそう！彼らは現在千島列島で戦っている。ヤップがここから武力をもって出て行かねばならないなら、さらに嫌な週になるだろう、絶対に！そして私といえば小さなことにぐちっているだけ。恥なければ、でも私自身をすぐに忘れてしまうほどには恥じらっていない。正反対！戦争が終われば、自分に一度男ともだちを饗応しよう。いや、やはりやめた方がいい！もう一度学校にいけたらすばらしいだろうに。

でも今よく考えてみると、私は 17 才になる、アードリーはすでに 18 才、エディットは 19 才に、コービーは 18 才に、ルース・エッセンは 19 才に、マリー・テレーズは 18 才に、アート・フェルボームは 17 才になる。リリー・デ・カントはもう 18 才だ。私たちはみんな学校に行くにはほとんど年を取り過ぎている。私はまだ大丈夫、でも他の人たちは…。でも私はもう学童のように感じない。みんなは学校のためのお金やチャンスがあるのだろうか？と疑っている。これはとても非現実的なことだ。私がいつか学校でお叱りを受けるだろうという考え、まして先生をからかうなどということは絶対ない…。私は大学にいく年齢に十分達していると思う、でも 7 人の子供がいる。いつかは可能なのかしら？時々特にこんな日にはラテン語をする気力がなくなる。でも長い期間ではない、ラテン語をするのは素晴らしいことだもの。そして私は自分の好きなものがあることを感謝しなければ、ほとんど誰ももうないのだから。

ベルフ

1943年8月22日

私が常にあまり孤独を感じないなら、「お母さん以外」に誰かいっしょに散歩に行く人がいたなら、なぜならコッホ先生はしばらくそんな気になっていないから。

ワイヘンケ

1943年9月27日

私たちがここで忘れていることは戦争です、なぜなら私たちはすべてから、ことに戦争から完全に隔離されているからです。私たちはまだ恵まれ過ぎていて、ほとんどの人は内面的にまったく変化していません。なぜならまだ食糧があり、クレトンサラサのクッション付きの椅子や一家の銀食器があるからです。でもやはり近ごろ私は、私たちがペンキの塗っていない、汚れた「木の壁」やはげ落ちたりぐらついたりする椅子などのある家に完全に満足していることに（でも後でちゃんとした家だと素晴らしいのですが！）気がつきました。

ベルフ

1943年10月2日

私の人生は山岳のようではなければならない、ゆるみなく力強いものだ。でもそのためには楽しいことをすべて壊さなければならない。それはとても難しい。ああ、私は未来をみた、若い少女たちのほとんどが夢見るものとはまったく違ったものだ。この未来への道を歩もうとすれば、まずウィテ・ローマンのことを頭から追い出さねばならない、あとはひとりでに続くだろう。私は実際説明することができない、とても奇妙なことだ。でもこれは愚かな考えではない。私は全部本当だと分かっている、私の未来が何なのか知っている、私が強ければ、神聖で真剣なものだということ…。偉大な人物にたとえば、ソクラテスの人生みたいだろう…。数日前こんな考えに支配されたのだ、今私はもう説明できない。

私はまたもちろん理想、自然な理想を持っていた…。私は将来学校の先生になりたかった、大都会周辺、どこか郊外のオランダのギムナジウムで。…中略… よく働き、たくさん友人がいて、魅力的な仕事だ。はい、はい。でも人生の目的は何だろう？できるだけ居心地よく過ごすことでは決してないはず！だから私はそれが悪いことではないとしても、世俗的な願望をすべて心から追放すべきだと知っている。

ワイヘンケ

1943年10月10日

昨日また一度私の班を見廻った。このようにすこし人々と話すと、彼女たちが長引けば長引くほど頭がおかしくなることに気づきます、注目に値する人々です。1人の女性はアンパシート地区の彼女の小屋に熱狂し、もう1人の女性は彼女の掘っ建て小屋(同種の小屋)をののしっている。1人の女性は葉巻を吸い、もう一人は完全に無関心でベッドに横たわっているだけ。それぞれの視野は自らの悲惨さだけに限られ、そして涙をあふれさせているのです。

ワイヘンケ

1943年10月15日

この収容所生活への反応、いまだに次第に存在する脅威から身を守ること—小さな落ち込みと自らの困難の中での体験、最も自己的な関心事までになる息苦しい拘束、それが途方もなく些細なもので、そしてこれらの姿勢によってほとんど役に立たないということ—意識的なごまかし、そして自己欺瞞—ときどき神がこのような創造をまだ許し、また創造し続けていることが理解できないのです。だから例外があるほど元気づけられ楽しくなるのです。そう、昨日カーター牧師が少年たちとオガンフィールドでパチョレン[鋤作業]をしているのを見ました。

ワイヘンケ

1943年10月15日

昨夜、イリーと私が夜の散歩で気づいたことは、ここは、カンボンから2メートル離れた白人女性社会で、ほつれたゲデック[竹で編んだ柵]の薄い壁によって完全に隔離されているということです。鉄道の土手側にはオガンフィールドがあり、そこはチデンの住民全員が感情をさらけ出し、嘆きに来る場所です。そこではゲデックの向こう側に土手が見えます、クーリーが芝生の上を歩きながら作業し、ヤシの木が遠くにあり、素晴らしい夜の空気、そしてそこでは広大な水田の後方に海の兆し、自由の兆しを感じるのです…。オウクェ、今私たちは本当に飽き飽きしています！

ベルフ

1943年10月29日

お父さんはバンドンにいる、これは確かだ。もう長いこと、でも私は書きとめておくのを忘れて

いた。私はお父さんが好きなのかどうか自問してしまう、というのはもっと関心を持っているのが普通でしょ。彼のことを考えると温かい優しさを感じ、そして彼が家に戻ってくることを願っている。でもここ1年半はほとんど考えていない。彼に家に戻ることをとても望んでいるとしても。

ベルフ

1943年11月7日

日々は退屈だ、でも私は他の人より退屈していない、なぜなら洗濯さえも楽しんでしているから。すこし慣れたら、どの仕事でも楽しくしている。私の気分は小さな思いがけない幸運あるいは失望に左右される。私が毎日の散歩でエルス・ミスベルフやウィテ・ローマンに出会い、彼らが私に親しく挨拶するとハミングして家に戻るし、彼らが私を無視すれば孤独を感じる。どの散歩も、毎日が私にとってはイベントで、いろんな出来事が起るのだ。何を考えていても良いし、人々や子供たちに出会う、お天気の良い日もあるし悪天候もある、そしてアンパシート通りのひとたちは遅い午後太陽の下、なんて楽しそうな顔ができるのだろう！遊んでいる小さな子供たちはみんななんて楽しそうなのだろう。小さなクリッシェ・ベルネット・ケンパースが親しそうに心から「こんにちは！」と叫ぶのは、なんとステキなことだろう。

みて、私は単調な生活を全然嫌だとは思っていない。私は映画館に行きたいとは思っていないし、以前のぜいたくな生活に戻りたいとは全然思っていない。私が昔のタナー・アバンでの日曜日などそんなに素晴らしいとは感じていなかったと信じて。私は街のドライブなど好きでなかったし、毎日曜日にはいつも「ああ、いやだ。またジャガイモとさやインゲンだわ」と思っていたのだ。日曜日のイチゴアイスはいやいや食べたものだ。私は不満足だった。今も不満足ではある、それは私が孤独だから。私の性格のせいだ。お母さんは昔をひどく偲んでいる。私はそうじゃない。私はほとんど、この収容所のほうがいい！と言える。私はこの収容所が好きだ。私は毎日ものすごい食欲でテーブルにつく。私はガドガド、サユー[野菜料理]、サンバランやデザートに舌を鳴らす。昔のジャガイモやパンケーキ、キャラメルカスタードなどよりもずっとだ。

コッホ先生から読書のためにステキな本をもらった。ラテン語のための時間はいつも残っている。私は自分の仕事を「喜んで」する、午後は遠くに散歩し、いつも興味ある「私」という関心事で気晴らしをする。私はまあとても自己中心的だ。もちろんすごくたくさん嫌なことがある、でも私はこの単調な生活が嫌だとは思わない。

ワイヘンケ

1943年11月11日

最愛のあなた、私はよくあなたの顔写真をながめています。たくさん問うことができます、そしてたくさん願望、でもあなたが私を愛していることを知っています。

ワイヘンケ

1943年11月15日

現在、赤ちゃん以外ミルクは差し止められました、そしてパンももうすぐ差し止められるでしょうし、お米はまだ（不十分な量で）配給され、お砂糖もありません。でも最大の問題は精神状態です。すなわち意気消沈するこの無意味な存在、そしてほとんどの人は具合が悪くなり良くなるはないという絶望感。女性たちは今またさらに自分をおろそかにし、パサールの朝はみすぼらしい混乱状態です。

ベルフ

1943年11月18日

「またつぼみがふくらんだ、また香草が緑になる（Weer zwelt de knop, weer groent het kruid,）
ああ、ここから出して、ここから出して(o laat me eruit, o laat me eruit,)
また私の頬がふるえている(reeds tint'len mij de wangen.)
とても不思議だ、花と香草も('t Is wonder dat, met bloem en kruid,)
未熟な心も開く(ook 't jonge hart zich opensluit)
春のかおりと春のさえずりのために」(voor lentegeur en lentezangen.)

私はこの歌を歌った時、急に若く、不思議に、力強いほど若いと感じた。広がる人生、困難だがものすごく素晴らしい人生が前方に横たわっているのだ！不可思議な体験！大抵私は人生を怖れている。私は東インドでこんな感激を覚えたことを思い出せない。オランダでは12才の時にあった。そのためにはオランダにいるべきだと思う。私は12才の時の、人生を望ましく生きるための鉄のような意志をまだはっきりと思い出すことができる。若々しい情熱、これを私はまだ持っているはずだった。でもここでは自分の中にこの粘り強い意志をしばしばなくしている。私はとても弱い。もちろん自分の責任だ、でも気候や、お国柄のせいでもある。いかに私が東インドを愛していても、やはり与えられないものもあるのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1943年11月19日

結婚 12 年半、こんなふうに過ごす誰が考えていたでしょう？新しい日が始まりました…他の日と同様熱心に働き作業をする日、でも幸いこの家では誰もが快活に義務を果たしています！私は絶望してあきらめることができません、私は私たちが共にした 11 年の素晴らしい年月が喜ばしいだけです。私たちにまた共に歩めることが許されるチャンスがあるのでしょうか？

ワイヘンケ

1943年11月29日

大人は快活さを保つのが困難だと思っていますーケンカがすぐに起こりますー女性たちは無頓着になっています。私たちはいつも食事、衣類やお金のことを話さないように、一緒に「何か好ましい」本を読もうと決めました。

ベルフ

1943年12月5日

私は親しい女友だちを、ウィテ・ローマンを、ラテン語を渴望している。3つのうち1つがあればいい、そうすればおそらく私は大丈夫だ。なぜならラテン語をしていた時には、女友だちの必要を感じなかったし、ハインのことも忘れていたから。…中略… 孤独を考えたり、ウィテを憧憬したりできる自由な時間がたっぷりあるのだ。私は1日中ラテン語をしたり、友情や恋愛を必要としなかったり、ラテン語とコッホ先生以外には無頓着だったりした時期を望郷の念をもって思い返している。だから私はまた自分の時間を、日記や無益なまったく運命づけられていない願いごとではなくラテン語に当てたいと思っている。そして揺れ動く感情やぼおうっとした男の子への渴望等のわずらわしさなどではなく、なぜなら学問ほど苦勞と時間をかける価値のあるものはないのだから。そして私はラテン語が好きだし有益でもある。この瞬間は後で悔やむだろうことに時間を費やしている。

ランジング - フォッカー

1943年12月12日

12 月はいつも意気消沈させられる、この時期は少なくとも！もうすぐ、私たちはまた絶望的な

気持ちで 1944 年に突入する。…中略… 人生は瞬く間に過ぎる、私たちはまだたいいは陽気だ、でも雨が降り、家の周りの庭が泥の池になり、ちゃんとした靴ももうない、快適に座る場所もない（満杯、そして泥で汚れた後ろのテラスに数脚の古い固い椅子があるだけ）、そうになると私たちはしばしばふさぎ込んでしまう。

ヘンケス - ライスダイク

1943年12月15日

1 人の女性が、頭がかごの縁からぶら下がっているアヤム[ニワトリ]（食肉用に処理した）をかごに入れて、高齢男子の家の傍を通った。

「そこにあなたが持っているのは、おいしいニワトリかい、奥さん？」

「いいえ、これは平和の鳩ですよ！」

ワイヘンケ

1943年12月18日

私は気分が悪くふさぎ込み、このゲデック[竹で編んだ柵]の中ではもうこれ以上我慢できないと感じています。アア、ディッキェ、とてもひどくて絶望的です。これはとても無益な生活です、何も建設せず、一步も先に進まない、無気力な生活を送り、世の中から断絶されています。助けられることがあれば、陰鬱な共同体を救うためにできるだけケンカを避け、怒る人々をなだめることに努めているのです。

ベルフ

1943年12月24日

もし誰かが後にこの日記を見ることであって、これが日本の支配下のチデンで書かれたものだと分かったら、期待を込めて開き、読んだ後は完全に失望して閉じることだろう。なぜなら、これは日記として期待される日々の事実や収容所生活についてやこの時代の典型的なことなどは全く違い、私自身のこと、私の幸せ、私の悲しみについて書かれているからだ。私が不幸だとしたら、それは戦争のせいというよりも、私の性格によるものだ。戦争が起っていなくても、おそらく私は同様に不幸だっただろう。ただひとつの違いは戦争がなかったなら、考える時間がもっと少なかっただろうということ。ロップは全く違ったふうにとらえている。彼は自分が主張するように寝ることと食べる以外にはまったく興味を持たない。…中略… 私は女友だちがいな

いことやコービーがいなくて淋しいことをぐちった…中略…それに対してロップは言った：
「あんな女のたちがいなくても構うもんか、みんなおんなじだよ、僕はだれでも気にしないよ」
「でもあんたのともだちは…」私はびっくりした。
「ああ、ポーベル？」とロップは言った「本当は必要ともおもってないよ、僕の友だちのひとりだけだね」
私は授業がなくて淋しいことを話した。
「学校に戻りたいとは思わないの？」
「ああ、思わないよ」
「じゃあ、一体あんたは何がしたいの？」
肩をすくめる。
「でもそれじゃものすごく不幸せだとは感じないの？」
「もちろん、あんたは感じないのか？」

私は驚いた。私は彼が今ものすごく不幸せだとは決して思わない、でも彼は何にも意に介さない。私は英語の単語の「dull」をここで使うべきだと思う。「He's in a dull mind」本当にロップは一日中遊んでいるか、警防団なんかをしているかなのだ。でも彼は食卓ではまったくしゃべらない、私にたまに自分の心をさらけだすだけ。彼は同年代の少年たちの誰とも付き合わないし、自習するほど学問にも興味を十分持っていない。実際彼は私よりもっとひどい状態なのだ。なぜなら私は望みや「関心事」や感情、自分を憐れむ心や理想や哲学心をたくさん持っているから。でもロップはお母さんと同様、外部の環境によって犠牲になっているのだ。

彼が願っているほど私は「終戦」を願っていない。私はこの瞬間のもの、ここの収容所で偶然左右されることを求めている。でもロップは全く意に介さない、すべてがまた普通になり、またステキな家に住み、おいしい食事がもらえ、学校に行ければ喜ぶのだろう。彼はぜいたくを愛し、それがなくて淋しがっているのだ。彼は食事のことにいらだち、独身の女性たちを見ることもできない。彼は2人のしゃくにさわる少年たちと部屋にいて、終戦を願っている！でも私は、私はこの収容所に執着し、あとから絶対になつかしがるだろうことが分かっている。私はみんながいっしょにカワット[鉄条網の柵]の中にいることを好ましく思っている。私はこれらの人々の何人かが好きだ、渴望し、思いを巡らす…。私は自分の中に幸福を持っていて、私は理想主義者である。ロップはお母さんの冷静な商魂を受け継いでいる。きついように聞こえるが、彼らみたいなタイプはより精神的なものには支えられていない。心地よい生活がすべてであると彼らは考えている。だからロップは私より哀れむべきなのである。

シスター・ロザリンデ

1943年12月31日

今日は静かだった。他の年と同じように、でもこのような日々には、人々の心に多くの思いが巡っている。

ベルフ

1944年1月1日

幸ある新年を！ことに幸福を！昨晩はチラマヤフィールドのプロテスタントの礼拝に行って、私はお母さんといっしょにカーター牧師の説教を聞いた。私は人々の後ろの芝生にいて、説教の後、誰も気がつかないうちにたち去った。私はまったくひどいとは思わなかった。説教は素晴らしかった、でも人々はカーターがとても陰気だったので失望していた。以前はみんな終戦がいつになるかを予想しようとしていた。今すぐにか来月、あるいはクリスマスと。悲観主義の人々の何人かが、まだまだ長くなりそうだといった…。現在はみんな陰気に、少なくともまだ1年かかると考えている。私たちはマレー新聞に載っていること以外はニュースをほとんど聞かない。噂ももう巡らない、みんな意気消沈しているのだ。

ワイヘンケ

1944年1月2日

1週間後に信徒として受け入れられる、私はまだ信仰告白のことを気に病んでいます。これに関するあらゆる考えのなかで、私たち、少なくとも私は、戦前は実際のところ生きていなかったという結論に達しました。僅かしか求められず、自分からは本来の真実の姿を現すことさえわずかしか要求しませんでした。現在、何かを形成するため、自分自身からではなく、あらゆることから何かを形成するために自分の持つあらゆる気力と力をもって進まねばなりません。今はそれで完全に価値あるものを形成するために、自分が何か「価値」（威厳のあるという意味で）のあるものになりたいということです。そしてこれはやはり戦後のために望ましい準備にもなると信じています。

昨日、1月1日は注目に値する日でした。誰もが快活で、気丈、そして落ち着いていました。前年のように「噂」で解放が近いと約束されたわけでは決してなかったけれど、人々は気力を保ち続けているようにみえました。

ワイヘンケ

1944年1月3日

感じたままをすべて書き留めておくことがほとんどできないのは、やはりとても残念です。たくさん、とても多くのことが同時にわきでてきます、わきでたりお互いに舞い上がったりする思考と感情のかたまりです。私が何か素晴らしいことを聞いたり体験した時にはいつもあなたのことを考えます、そしてあなたも多くの愛情を持って私のことを考えて下さっていると感じています。私はあなたのため、そしてオランダにいるほかの人のためにも、プロテスタント教会の信者として受け入れられたことを喜ばしく思っています。すべての迷いとためらいに並んで、私はやはり何かこれで踏ん切りがついたことが分かります、必要だったのです。

ワイヘンケ

1944年1月23日

私たちがものすごくオランダやヨーロッパを切望するのは奇妙なことです。私たちが食事のことを話していなければ、オランダのこと、アムステルダムのこと、春のこと、自転車道のこと、海のことなどを話しています。私は毎晩のようにオランダを夢にみますーそして私たちはお互いに真剣にこれらの話しに興奮しないよう約束しました、なぜなら魂の安息のためには厄介だからです。

ベルフ

1944年1月28日

戦後への私の心からの願い（子供っぽい願いだ）のひとつは、12月8日からギムナジウム4年生になること、もちろんウィテ・ローマンなどのいるクラスだ、これは前にも書いた。でも近ごろ特に私の関心が高まってきているのだ。昨夜は夢にさえみた。これはまた私のうぬぼれた空想で、ヘネクイン先生がこのクラスを、全員ではないけれどクラスを中心になる人たちを高く評価していることが原因だ。6人の頭の良い男の子たち、すなわちマールテン・ロイニッセン（素晴らしく頭が良いとヘネクイン先生が言う）、…ヨルクマン、ヤン・ヘークマン、ウィテ・ローマン、ハイプ・フラーザーとゲーラルト・ファン・ハッセルトだ。このクラスはギムナジウムの中で最も見込まれたクラスだったはずだ、その上、一人一人が礼儀正しく魅力的な少年たちだった。そしてこれは私の年齢だ。…中略…

この6人の頭の良い少年たちと一緒に学んだり、いちばん良い成績を取ることに努力したり、討論クラブやそして同じ目的で理想のクラスと一緒に形成することを私はなんて素晴ら

しいとおもうことだろう。すなわち学問！自分を成長させること！興味のあることについて話し合い、一緒に劇を演じ、キャンプをし、必要ならばスポーツをし、また一緒に聖ニコラス祭を祝ったり、CAS¹⁵²のパーティーに行くこともありえる、時々ほんの少しダンスをしたり…ダンスは本当に興味ないけれど、時々ごく子供っぽいことを演じたり、モノポリゲームをしたり、合同誕生パーティーをしたり…。 …中略…

また決して実現しそうにない私のばかげた幻想だ。…中略… でも私はものすごく、いつかはこの6人の少年たちと（ああ、多分アデックで大人になっているだろう、すごく変わっているかもしれない）マジメで、熱心に勉強するギムナジウムのクラスになりたいとやはり渴望している。入学でき、このクラスとともに素晴らしい休暇を過ごしたいと願っている、それが一年だけでも。なぜならそうすれば私はオランダの少年少女たちやオランダの学校や、私が昔本気でここ東インドにみつけるこのできないと思っていたオランダの学術的な精神を求める必要がなくなるからだ。そうすれば私はこの先の人生の中で、心配事のない青年期の友情（1つのクラスにいるというつながりの特別な友情）、そして真剣に学ぶ1つの、1年の学期を顧みることができよう。…中略… そう、素晴らしいと私は思う。できるはずだ、なぜ私はそれを経験できないといえるのか？ とても望んでいるのだ…私はもう1年普通に学校に行きたい、そして結局本当の男友だちや女友だちが欲しいのだ…。

ワイヘンケ

1944年2月10日

ニッポン視察やとても多くの病気ばかり。黄疸、百日咳、そしてマラリア（赤痢は減少）、あらゆることが一緒になって非常に緊張した神経質な様相、とてつもない噂、ひどいケンカと不愉快な状況。私はベッツ・ティヘラーが気力を失わないよう私に描いてくれた絵をよくみています。…中略… 私たちは疲れ果ててきています、そしてこれは解放後に力が必要だろうと考えると残念なことです—あるいは私たちはまず休暇を取ることが許されるでしょうか？私たちが最初に未来について考えたらとても重苦しくなって、今ではわずかししか考えません。現時点のことがたくさんあり過ぎて、未来を考えるには疲れ過ぎています。未来は私たちにとって現在のところ、休養とたくさんの食事（なぜなら一日中ほとんど飢えていますから）と新しい衣類、そしてオランダだけです。私は本当に望郷の念に苦しみ始めています。そして私たちはオランダや欧州のことについてはなるべく話さないようにもしています。なぜならその願いは痛みを伴うからです。

¹⁵² 彼女はCAS（Carpentier Altling Stichting）の一部であるバタビアのリセウムのパーティーをいっている。

シスター・ロザリンデ

1944年2月18日

少しでも収容所外部で見られることは何でも、家を、家族を憧憬して年老いた男子たちによって報告されている。時々彼らは銃声を聞くと、またたくさんの列車が軍隊といっしょに通り過ぎていくこと。彼らにとってはすべてが意味を持っている、特に解放の到来として。そんな男子が外部から小包を受け取ると、何度も何度も戸棚から取り出してみている、痛ましい！

シスター・ロザリンデ

1944年3月19日

聖ヨーゼフはまだ私たちが収容所を出ることを配慮していない。とても信頼していたのに。ともかくまだ時期ではないのだ。主は何が良いのかご存知だ。

ベルフ

1944年9月17日

彼との一番素晴らしい思い出¹⁵³は、セラジョーフィールドで私たちが一緒に鋤作業をした午後、一生懸命働いていた時にウィテ・ローマンが私に話しかけた午後である…。

でも、いいえ、私は書き留めない、なぜなら思い出はこの日記のなかでの言葉より心の中のほうがより純粋に保てるから。私はその午後、ウィテ・ローマンが自ら、夕暮れの、黄金の陽光の下、高い樹の下で私に話しかけたことだけを書きたい。そして私がパチョル[鋤]を彼に返した時に、お互いの手首がふれあったこと…私はニッポンのために庭作業をしなければならなかったぼーっとした人々の間で鋤作業をしていた、そして思いがけず私の心を満たしたこの強烈な喜びに、誰も、誰一人気づかなかった。その午後私はまさに歌うことができた！

そう、こんなことが何ヵ月も他のことがとても苦く期待外れなものを感じるよう、私を温かい気分にする…たぶん私とウィテの長い別れの結果や、私たちがそれぞれ違う収容所にいる間に起ることすべて、知らず知らずにお互いを遠ざけるかもれないような、一緒に体験できない収容所生活の結果について不安がつのるばかりなのだ…なぜならウィテと私はお互いにやはり確かな関係ではないからだ。多分幸いにも。

¹⁵³ その間に他の収容所に移送されたウィテ・デ・サヴォルニン・ローマンのこと。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月10日

私たちにまた悲惨な新年が始まります！

ブールマ

1945年1月29日

大きな引越しのものすごいさわがしきで、ここでの戦争がおわるだろうと思われている。その引越しが早く来たらいいのに！ああ、終わりになってほしい！パパと弟のハンコとオランダの家族みんなのもとへ、そしてオランダで学校に行きたい、ここ東インドにはもう二度と来たくない！

ベルフ

1945年2月4日

時々のを絞められるような恐怖が走る、それから私の魂は極限の絶望に沈む。ある人は神を信じている、でも私はどこに神を探せばいいのかまったく分からない！私は戦後、自分のカトリック信仰で何をすべきなのか分からない！私がまだすがりついている理想は、自分自身をできるだけ望ましい人間にすることだ！でも深い魂が時には起き上がり、休むことなく探し求めることを人々は妨げられない、そして人間自身はその知識によって建設した恐ろしいおりに捕らえられているために何も見つけられないのだ…。そう、私は18才で若く、私の心は、少し前にはまだ出口がみえない捕らえられた動物のように理由なく恐れていたが、翌日にはコービーが私に優しくすれば計り知れない喜びを感じることでできる状態なのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月8日

列車が震動するかすかな汽笛を聞いて下さい…これは私たちにとって「遠い」ことを意味しています…違う世界だということ！3年たった後にはもう想像さえできません。新しい世界はどのようなものなのでしょう？混沌としたもの？唯一私たちを鼓舞させることは、ウィルとヤン…が戻ってくるということです…父よ！それから食事、何日間も、そして眠ること！

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月10日

パパ・ウィルはどこにいらっしゃるのでしょうか？どうか子供たちがあなたのことを忘れていないかと心配しないで下さい。彼らは一日中あなたのことを話しています。「お母さん、覚えてる…」そしてそのあとに話しが続きます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月18日

人々は疲れ果てやせ細って見えます、ドレスはすべて大きすぎます。それでもほとんどの人々は気力に満ちています…本当に注目に値します！

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月21日

けんかをする母親たち、泣く子供たち、遊ぶ子供たち、歌う子供たち、吠える犬たち（戻ってきた犬たちで、ここにはおよそ 10 匹います）¹⁵⁴。一度このような物音がもう聞こえなくなったらどんなに奇妙でしょう。自転車に乗って興奮した班長が通りを走っていると、つまりいつも「何か」を期待して、すこしだけ好奇心を持ちます、おそれは全くありません。私たちは水に浮かぶ木片のようにただよい、どこに行くのやら…。いつ私たちはオランダの青い空を再びみるのでしょうか？いつまた黄金のキンボウゲをみるのでしょうか？そしていつ私たちは風の吹く秋の日を経験し砂丘を散歩できるのでしょうか？いつになったらこの収容所生活、飢え、メガホンで夜中に起こされることに終りがくるのでしょうか？

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月22日

ウィルが病気でないことを願います。毎晩彼の夢を見ます、すでにずっと何日も。その他はすべてが非現実的のように思えます、衰弱に「漂い」、思考に揺れ動きもします…今本当に終わりが間もなくやってくるのでしょうか？これは思考の根底にあるもので、そしてこれらの年月の終末が、

¹⁵⁴ 「収容所組織－欧州人並びに日本人収容所幹部」シスター・ロザリンド日記断片 1944年8月23日参照。

どのようなかたちであれ来るだろうから、気力を保ちます。私たちはいつかやってくるだろう…解放というこの素晴らしい考えにすがっています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月25日

昨夜またウィルの夢を見た、とても気にかかりはじめています。彼はどこに、そしてどうなっているのでしょうか？

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月27日

お母さん、まだいますか？ここ私のベッドの横には（私たちは横たわっていない時には座っています、他の場所ではなく、椅子を加えることができないからです！）花をいれた！…ウェッジウッドのバター入れがひとつおいてあります。私が持っている唯一のウィルとあなたの写真、そしていくらかの本。この花瓶はあなたの大切な思い出です、すべてに対するあなたのすばらしい好み。望ましいかつての生活。私たちがまだことによると多くに降りかかっていた物事について何も知らなかった時代。私たちはかつてのあなたがたを前に見ています。私たちは今あえて泣きもしません…。私たちは気丈でなければなりません。でも終戦の最初の喜びが静まれば、あなたがたとあなたがたへのそして愛するオランダへのこの年月の強い渴望のために泣くことが、私にははっきり分かります。叩きのめされ、打ちのめされた私たちのオランダが再びよみがえり、みんなの力でみずから大きくなるであろう。神様、その瞬間には、なんと私たちは喜びを言い尽くせないことでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月3日

まだ私たちは私たちの部屋で心地よい簡素な生活をしています—ところどころで見つけた木片で火をおこしたりして。埃っぽいテラスや病人たち、家の中も外も泥だらけで乾かない洗濯物にもかかわらず、私たちは楽しく生活し、やはり楽しんでます！リートと私は同じように物事に対処し、「食べ物」の時間に関しては完全に同意見で、食事に関して常におしゃべりしないようにしています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月18日

混沌とした空気がただよっています、私はその到来を感じます。私たちが一種の地獄を通らねばならないという感覚です。なぜだか分かりませんが、でもまだ私は望ましい終末を信じています。間もなくやってくるでしょう、あるいはまだ数ヶ月かかるのでしょうか？ウィルはまたよく私たちのことを考えています、私にははっきり分かります。あまり心配しないでほしい。気力がなくなることは本当にありません、私たちは思っていたより多くのことに耐えられるのです。私たちは共に素晴らしい時を過ごし、常に意識して楽しんできました…そして何が再びやってくるのか、いかに素早くこの悲惨さから逃れられるのかは誰にも分かりませんが、…その後は？ああ、私には考えられません。それは霧が突然晴れる瞬間のようなものでしょう—厚い、窒息させられるような霧で、漠然とした物音に満たされたもの—そして眩しい光で照らされた太陽、そして静かな、暗い場所に光が照らされる…再会はどんなものなのでしょう？誰がいなくなっているのでしょうか、永遠に？どれくらいの人がこの運命を決して知ることがないのでしょう？

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月2日

朝早く起きると、そのたびに新しい喜びです、そこで私はまた毎日に感謝もしています。薄紫の空、木々がゆっくりと金色に色づきます。庭には小鳥、木々、幸い前方にまだ芝生のある庭で子供たちが走っています、そしてこの居住区のほぼいたるところにあるように物干しがいっぱいではありません！j 居住区がまだほとんど眠っている 30 分だけ、私たちは朝の静寂をすこし楽しみます、気持ちがいいものです…さわやかな希薄な空気。あらゆる悲惨さにもかかわらず、このように新しい日がまた喜ばしい感覚を与えてくれます。自然は、焼き印をつけられた羊の群れのようになっている、あるいは漂っている私たちを裏切りません。私の周りになにか素晴らしいものがある限り、私はくじけないし、牢獄においてさえ私は切り抜ける力をまだ見つけることができるでしょう。これは思ってもみなかったことです。

自分の思考の中に一人でいられることは落ち着かせ、朝の点呼の後に始まり、夜まで一日中続く地獄のような騒音の中で生活すること、そして完全に自分の生活を閉鎖し、この満杯の家の中でさえも居心地良く、楽しいことを学びます。自分の周りで一緒にいる輪がだんだん小さくなる…今は重要なのは私たち 6 人で、私たちはすべて 6 人でこの心地よい雰囲気を保ちます。私たちの周りのいさかいや疑惑、憎しみなどを見ると、これは陰気さに対する確かな武器になります。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月14日

リートは蚊帳から減じた栄光の優雅さで、そこここに留め針をつけ、でもまだすそがなまめかしくくっついているほころびたネグリジェで闊歩しています。私は彼女の朝食をベッドで与え、今一度彼女に静養させています。それで彼女は編み物をしながらおもしろしく「昔」のことを話し、薄くて、生ぬるいお茶を楽しんでいます。私たちはこんなわずかなことにも満足しています、このように住み続けることができるならば。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月23日

奇妙なこと、居住地のあらゆる局面が一日のうちに変わることができる。まだ2週間前には、私はオガン通りのロープの傍で熱湯消毒した洗濯物を待ち、遠くにヤン・ヘンドリックを見ようと願って立っていました…そして今、昨日の夜私はリートととても楽しく、現在住んでいるノールトダイクの家のひとつについてしゃべっていました。

ベルフ

1945年5月2日

私はこの困難な収容所時代が好きである。私は時々近い将来、自由な生活のあらゆる困難さを見つめることにほとんど恐れを持つことができる。考えているだけで…あらゆる信仰の問題…ブルッ！収容所に祝福を、飢えと規律正しさと強要に！

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月24日

この居住区の中では、すべてを頭から切り離し、どんなことにも計画を立てず、精神生活を単に止め、すべて最低限の努力で、できるだけ静かに生活すれば、受け入れられます。ひとつの不安の後にはまた他のものが圧倒します。すこし休養がとれれば、またなにか恐怖をかきたてるものがあります、それで数日何も起らないと、奇妙だとさえ思うのです…。すべてを受け流していくことが必要です。それが精神的にも肉体的にも傷つかない唯一の方法です。…中略…
でも私たちはここではまた心地よく住んでいます、ちょうど私たち6人が窮屈に座れる2人乗り

ボートの囲いのようです。私たちは話しにしがみつかず、噂を信じないで、冷静に待ち、できるだけ疲れないようにしています。私たちは普通の生活はもう想像できないのです。私たちは想い出に生きています…。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月7日

5 時、私は二段ベッドの上で、ゲデック[竹で編んだ柵]越しにアラン・アラン[萱]と遠くを見えています。いつ私たちは鉄条網の外を歩くことができるのでしょうか？隣の部屋の女性が、壁の空気穴から無感覚にうなっています。彼女はまた食事のことを話しています。昼食においしい食事！子供たちは我慢できず、外に出てぶらついたりしています、というのはもう遊ばなくなっています。

ベルフ

1945年6月10日

私と同じように理知的に考え、そして感じる誰かはどこで見つかるのかしら？私は大衆からコピーをみつけた、彼女は私のように感じるので例外的存在だった、私は彼女を愛した。私はものすごく苦勞して彼女を手に入れた、その後彼女がそれほど理知的に考えないことがわかったのだ。また私はひとりになった。コッホ先生は私のように理知的に考えた、でもしばらくたって違うことが分かった、全く違うように感じると…私はまたひとり。二人の人間が同感し、砂浜の貝殻のようにお互いぴったり合うことは本当にあるのかしら？そうは思わない。ことに私のように奇妙な形をした貝殻は！一度はもう一つの貝殻に合うだろう、でもそれを広い広い世界中の海で見つけることができるのだろうか？時々その貝殻を見つけたと思う。お互いをぴったり合わせる、そしてゆっくりと内面的に満たされない感情が育っていき、しばらくするとお互いにふさわしくないことが分かる…。そしてまたひとりぼっちになって、新たに、新しく探し続ける…そしてほとんどが実りのないもの。このような深い魂の中では、人間は孤独である、そして得難い貝殻であるほど、孤独感が激しいものだ。

でも誰もがぴったり合うひとつの貝殻があることを知っている、ただひとつの完全な貝殻、神という名の貝殻だ。でもまさにこの少なくとも名前を知っている貝殻こそ、広い海原でもっとも見つけることが困難なものではないだろうか？あるいは探さないで自分がその片方になることをつつましく待つことによるのみ見つけることができ、唯一真実の満足感が得られるのだろうか？人生はなんて困難なのだろう！私は間違った道をたどっているように思う、でも自分の人間としての発見や、19 年間に経験したものからの影響、戦争がすべてを複雑にし、混乱

に導いたこれらすべての感情と価値観をどうすればよいのだろうか…。私は今とても貝殻が無い感覚だということだけを知っている、そしてそうでもある。いつかこの時期に終わりがあるのだろうか、私にとってこのためにまたあたらしい苦難を開くことを知っているとしても。私はどのように新しい生活をはじめていいのか分からない。そしてまた新しく愛することのできる男性もあらわれるだろう。人生との闘いが待っている、私が見たり見なかったりする危険、あるいは成果のない屈辱的な不名誉な人生、そして上手くいったのかは誰にも分からない。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月12日

ウィル、私は二段ベッドの上に寝そべって、鉄道の土手の上をアラン・アラン[萱]越しに眺めています。数人の原住民が、牧草をピコラン[かつぎ竿]にのせて土手の向こうを歩いています。あなたはどこにいて、何を考えているのでしょうか？これらの年月で同じような思考の成長がありましたか？どのように、どこで再会があるのでしょうか？私はたどり着くことができると知っています、まだあなたのために生きています。私は毎日あなたを夢に見ます。私たちはまるで何年間もの恐れや悲しさ、別れがなかったかのように普通に生活しています。またみんなこのようになるのでしょうか？これを書き留めているうちに、私はそうなるとはっきり分かります。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月21日

ヘニー、あなたは今日誕生日のお祝いをしています。どこで、どのように？あるものわずから、おそらく自分の家のどこかでお祝いの食事を作っているのでしょうか。私たちのことを考えていますか？あなたがたが、孤独で汚れたまま横たわって死んでいく、あるいはおそらく解放が来る前に死んでいこうこの不潔な、墮落した哀れな人間の群れのことを知らずにいることは良いことです…。

ブルーマ

1945年6月25日

ああ、わたしはまだ真新しく匂う何冊もの新しいノートをもものすごく望んでいる、そしてまた新しく匂い格好よく見える教科書、そして昔持っていたような心地よく書けるボールペンをもものすごく期待して待っている、そして勉強する：テーマや計算。ああ、早く来て欲しいな！戦後は3

種類の文集を持つ。料理の本と、型紙を写したり貼ったりできる手芸の本とステキで役立ち、簡単に作れる色々なものを載せている工作の本。それからわたしは布切れを入れる、割れ目があり、光沢のあるししゅう糸の箱、木材と絵の具といっしょに糸のこ、革細工の革とフェルト、ラフィアも。たくさんだ、わたしは全部もらえるとは思っていない。わたしはまたダンスの講習やバレエ、ピアノのレッスンもしたい、それからたのしいボーイスカウトのクラブやスポーツいろいろ（テニス、水泳、ホッケー、ゴルフボール、その後ボート競技）。わたしたちがもう一度はやく4人いっしょになれば、そうすればわたしは幸福と喜びにあふれることだろう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月25日

11人がいる11㎡の私たちの部屋は良い雰囲気です。リートはまた寝込んでいます、今完全に疲れ果てています。私たちは雑用を探し、多くは沈黙しています。話すことでさえ疲れ、思考をもう言葉にあらわすことが上手くできません。でも私は将来をしっかりと信じて、力が尽きたところを精神的な喜びで満たすようにしています。ウィル、あなたもこんなことがありますか？あなたのハガキはいつものように、大抵長く、また半年くらいたったものですが、あなたの書き方は変わっていません¹⁵⁵。待つことの緊張感は大きいものです。いつになったら一緒に先に行けるのでしょうか？

私は毎日のように夢見ています、そしてこれが意味を持つことを確信しています…ごく普通に私たちが経験し為したこと、新しく、でも古い、新しい環境で、でも良く知っているいろいろな物事が私たちをなにも変えていないということ。そして新しい日がくると、私は喜びに満たされて、アンネがまだ気持ち良さそうに寝ている二段ベッドから飛び降り、言い換えればおります。それから靴箱にたたんだように眠っているヤン・ヘンドリックを起こし、それから少しするとそのふわふわした髪と顔のヤン・オルファールトが現れます！交代で私たちは外で鍋（何か他のものはありません）でじゃぶじゃぶからだを洗って。生ぬるいお茶を飲みます。クンプル[点呼]と朝食の後、子供たちが外にいれば、私たちは穴に布を吊るしベッドに横たわっているリートを洗います。彼女はまだ冗談が多く楽しい！そしてやるべきことをそのままにさせ編み物仕事をもって彼女の横に座り、心をそそのかされることが多いです。

¹⁵⁵ 「収容所外部との接触」1945年6月24日参照。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月2日

土手の向こう側に1週間前に焼き払われ、今また緑の芽が枯れた地面から出始めたアラン・アラン[萱]がみえます。広い空はくっきりとしたブルー、遠くに小鳥が飛んでいます。もう2ヵ月間、私たちはここに住んでいます、辛抱強く終わりを待ちながら…どんな終わりでしょう？多くの女性たちは死んだような目付きで歩き回っています。恐ろしくなります、私が本当に怖れていることはただ一つ、パニックです。

ブールマ

1945年7月14日

わたしたちは今何かステキなレシピを集めて書きとめています。戦争が終わったら料理の本を作る、でもまた全部書き写す必要がある。わたしは本当に退屈な気分です。戦争のため落ち込んでいた、でも今また上向きになっている。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月30日

日々は好ましく満たされ、私たちはまったく退屈しません、子供たちもです。時は幸い瞬間に過ぎ去ります！私たちは常にまだ気持ち良く楽しく過ごしています、これはニッポンには変えることができません。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月14日

私はまたよく横たわっています、死ぬほど疲れて気力がありません。起きればいろいろな計画がありますが、なにもやり遂げられません。私はこれまでになくウィルと子供たちだけになりたいと渴望しています。彼らはとても多くを逸し、私は彼らにはわずかのことしかできません。すべてが重苦しく感じます。時々暗くなると少し散歩し、どこか芝生の上にひとりで座ります。とても難しい。それに今ものすごく長く寝込み、自分を強く感じず、これを我慢強く耐えているリートにとっては。どうして愚痴をこぼすことができるでしょう。でもこれはすべてのことのための日記、みんながこれを読むことがあればその時はすべてが終わっているでしょう、少なくともそ

の前にヤップにみつからなければですが…。それからなにが起きるのかは、私はもう意に介しません。私はゆっくりとやってくる苦い終末までがんばっていただけです。

アンネは優しく大きくて、静かな支えと助けです。唯一心配していることは私たちがもう一度違った人生を始められるのに「間に合うのか！」ということです。ああ、私たちは一緒にとても楽しい計画をたてています。小さなお家、庭で一緒に働くこと、家に帰ってくるパパ…いつ？神様、いつでしょう？

多くの人々が今、この年月の中でいかに独力で人生が素晴らしいものでありえるかをじっくり自覚しています。ここ東インドで、人生は容易く平坦で背景の無いものでした。「お母さん、ミルクティーがどんな味が覚えている？」とアンネが昨日言いました…。毎日私たちはできるだけ楽しく過ごしています。その間にも長引くほど多くの人々が続けて亡くなっています。次には誰が続くのでしょうか？

人間関係

ベルフ

1943年5月7日

コービーがここにいてくれたなら！私にとってここにはだれもいない、だあれも、1ヶ月に1度か2度見かけるアート・フェルボーム以外は。それは彼女が単に弟のロップを気に入っていたからだ。だから彼女は私のことを我慢していたが、その以上は私に興味を持っていなかったし、私もそれほど落胆していないけれど。私の望みも高いのだ。

ベルフ

1943年6月14日

私はとても女ともだちが欲しい、時には男ともだちが！私はもうほとんど陽気ではない。コッホ先生も含めてみんなが、私を一度クラブや少なくとも討論クラブ（小部）に行かせようと試みている。私は優越感を持っているわけでは決してない。討論クラブには感じのよい連中がいる、でも決めかねている…私は彼女たちとはものすごく距離がある、行く気がおこらない。でも女ともだちがいなのはもう耐えられない。近ごろ私はまるで老女のように！

ベルフ

1943年8月15日

ここで私たちはG一家とすごいスサー[厄介事]がある。彼らは本来この家の大家で、常にガレージにいた。私たちが（およそ一週間前）一人につき4 m²（食堂を含めて）与えられると聞いた時、彼は奥さんと共に、3人は優に入れるロップのグダン[物置]を欲した。お母さんは反対した、でも彼は収容所委員会に家の図面と青写真を持って行って、グダン（9 m²だから食堂なしと考えても1 m²多い）だけではなく、その上そのグダンと彼らのガレージの後ろにあるそれぞれ2.4メートルx2.6メートルの2つの小さなグダンからの選択権も与えられた、それでももちろん彼らはこの2つのグダンを選んだ。

もうこれは完全に不公平、なぜならこの2つのグダンにはそれぞれ2人ずつ人が入るのに、今は彼ら2人だけで2つあるのだ！そしてお母さんが物笑いの種になっている、というのは彼らが今委員会から正しいと認められたからだ（この件では、委員会は区分けをウルスン[手配]する人で、ウィリンヘ夫人ではない。というのは彼女にはヘネクイン先生がこの件の話しを

し、彼女は嫌なことだと思ったが、公の規則を変更することができない)。そして今まさにお母さんが不当だったように見えるが、そうではない。彼女はできるだけ公平に扱ったのだ。でも彼女は母親と子供たちが、だからガレージに詰め込まれることになるのに、G夫婦を3メートルx3メートルのグダン(2つの小さなグダンはいうまでもなく)に入れるのは今度のクンプラン[仲間グループ]に対して責任が取れないと考えたのだ！

お母さんはなるべくならG一家がすっきり出ていくことを好んでいた、というのは狭量な東インド人としての彼らは、教養がより高いレベルの35人からなるクンプラン[仲間グループ]連中とはまったく合わないだろうし、彼らは家主として全部こそこそチェックしているからだ。そして問題になるのは、彼らが典型的な東インド料理を食べること、なぜなら私たちは同じ窯の食事をしなければならないからだ。だからお母さんはコッホ、ヘネクインとの話し合いの後、G一家がいっしょに小部屋が一つある一人用の家に行くのが最善だと考えたのだ。でも彼らがそのままここにいすわれば、いちばん裏のグダンの一つに行くべきなのが最善で公平だとお母さんは判断したのだ。そしてその場合には、お母さんはG一家がそこには大きすぎる巨大なダブルベッドが問題だろうから、その時は彼らの巨大なベッドと引き換えに私たちの小型のダブルベッドを申し出た、それでももちろん私たちのところでは私たちのよりもっと広い場所を取るだろうけど(そして最終的にはいくら巨大でも4人の子供がダブルベッドに寝ることはできない)。あきれたことだ！

それから今朝、G一家が彼らにとって喜ばしい—私たちにとっては信じがたいし後にはひどい—ニュースをもって家に戻ってきた時、お母さんにこのことを台所で伝え、彼らはダブルベッドの交換を求めた！お母さんはもちろん交換しなかった、なぜなら彼らのベッドは彼らのグダンに入れるべきだから。そうすると彼らには戸棚の場所がない、でもそれは必要ない。すなわちそれはもう一つのグダンに入れることができるからだ、あつかましいでしょ？！彼らは自分たちさえよければ私たちがどうでもかまわないのだ。それから小さなベランダと裏に2つの小さなグダンがあるガレージは子供を持つ家族には素晴らしいものなのに、すごく残念なことだ。だから委員会が常に公平だとはいえないのが分かるというものだ。

ベルフ

1943年8月17日

各家ごとにひとりリーダーを選ぶ必要がある。でもお母さんは、日陰のあるベランダ付きの2つのグダン[物置]に王者のように居座っているG一家がいるため、なりたくないと思っている。そこは疲れ果てているお母さん、あるいはほとんど神経症のヘネクイン先生にとってはこの上なく心地よかったはずなのに。G一家とは特に将来の状況に関しては話し合いにはならないので、そして彼らがお母さんをグダンペルカラ[グダン事件]の後ちょっとした怪物だとみなしているのも、お母さんは誰か外部の人がリーダーになるのほうがいいと思っている。なぜならヘネクイ

ン先生はたいていゴミ収集係だし、コッホ先生は昨日から病棟で働いているから。

ベルフ

1943年8月22日

ベルネロット・ムンス¹⁵⁶さんがロップのグダン[物置]に走って行って、戻ってきた。他の奥さんに彼女は「子供たち（彼らには触らないで！）が入らなければならないのはおそろしく小さいグダンよ！」と言った。これらすべてむっとした顔付きで。ともかくこんな調子でベルネロットさんが始めた。誰に対してもにこやかにはできず、そして私は一度だけ彼女が笑うのをみただけ、それも彼女の仲間グループの人に対してだけ。誰も彼女とはまだあまり接触がない。彼女は一言もしゃべらないし、お母さんだけが彼女と息子たちのことに関して話しただけ。現在最大の問題は少年たちがしょっちゅうケンカすることで、彼女はもう飽き飽きしており、彼女はロップともまたケンカになるだろうと心配していたのだ。やはりとてもかわいそう。彼女は頭痛持ちで、お母さんは彼女が付き合ってみればそれほど悪い人ではないと言っている。ただ私がいくらか想像できるのは、彼女が首までずっとスサー[厄介事]につかっているようにみえることだ。ともかく、ロップが協調し感情を抑えることを強いられた後、少年たちはやはりグダンの中でロップの傍の二段ベッドにいる。

ベルネロットさんは不機嫌そうな顔つき。コッホ先生さえも彼らがすごいケンカをするというお母さんの説明に「そう、でもこんなふうに入ってくればね…」と答えた。そして私に対しても「なんという不機嫌な人…」と口を滑らせた。私たちとこれほど長く知り合いでなければ口を滑らさなかつただろう、なぜならK先生は悪口を言う人では決してないし、誰にも劣らずいい人だし愛情あるれる人だから。でも私に想像できるのは、いつも自分の感情を抑え常に親しみやすくにこやかな人でも、長い経験によって、それがいつも心から望んだものではないことに気づき、こういうことに腹をたてるということである。…中略…

デ・ヨングさんは家中をにこやかに元気な言葉で歩いている、娘からは私にはまだあまり分からない。でも13才の女の子は妹のパウリーンとうまくやっているととは思わない。概してそれほど賢明な人たちにはみえないし、彼女たちはこの家とのコンビネーションとしてあまりうまくいくようには思えない。でも彼女たちはそうなのだ、でもしかたない。

¹⁵⁶ ベルネロット・ムンス夫人はクラマツト収容所から2人の息子と到着した。「移送と収容」ベルフ 1943年8月22日の日記断片参照。

ベルフ

1943年8月25日

コンビネーションは期待以上、あの2つの家族もだ。2人の女の子の名前はフリーダとズスで、彼女たちはまあ感じがいい。ベルネロット・ムンスさんの不機嫌な顔付きはいつものことだとのこと。彼女はいくらか打ち解けはじめ、私たちが最初から思いやりがあり公平にしていたので、すべて期待以上。

ベルフ

1943年8月28日

デ・ヨングの女の子たちは不満気な顔つきだ、でもまあ感じはいい。妹のズスはまだ男の子みたいな子で、フリーダはまあ感じがいい。でもすこし単純みたい。私にはあまり支えにならないだろう。時々彼女と少し散歩する、彼女は時折いくらか好ましいことを言う、つまり彼女は私が入っているのだ。ブランド・コルスティウス先生が幅の広すぎるベッドを持ってきた、1.15メートル幅、大騒ぎを引き起こした。「单身」女性全員が憤慨している、というのはヘネクイン先生も1.15メートル幅のベッドを処分したから。優にタイル1枚分の幅の違いがあり、今は2つのベッドをもう入れることができないのだ。その上、幅の狭いベッドが自由に使える、なぜならブルクさんは大部屋でトランクの上で眠るからだ。でもブランド・コルスティウス先生はベッドを手放さない。彼女はひどくチャーミングだ、でもまったく譲歩しない。

こんなこと以前はばかげたことだったが、今はとても重要なのだ。ベッドはできるだけ実用的におく必要がある。こんな満杯の家では、廊下が狭く不便なのはたまらない、これは長引くとイライラさせられるものだ。食堂からは家の前や寝室に行くために廊下を通らねばならない。ブランド・コルスティウス先生はベッドのスペースを得るため戸棚をわきにやったので、廊下が狭くなったが、お母さんは戸棚をまた元に戻した。つまり廊下は広くなければならないし、ベッドは今1メートル幅でなければいけないということだ。

これはお母さんが譲歩しないポイントの1つである。彼女はたくさんのことを譲歩したのだ。つまり私たち自身は食卓がおいてある狭い場所にいること、献立はベルネロット・ムンス一家がよく安上がりの食事をする習慣なのでより安価に作られていること、丸い実用的なテーブルがベランダから取り除かれたこと、これはムンス一家の邪魔になるとわかったからだ、お母さんがいつも好んで静かに縫い物をしていたのに（結局ベランダもやはり私たちのものなのだ！）。すべてをお母さんは幸い親切で分別のある「单身」女性たちに穏やかにウルサン[手配]させた、でも良い廊下は必要なのである。結局は戦争について好ましい報告が伝えられているにしても、終わるまでには何ヵ月もかかるはず。

お母さんはでもこの家のリーダーになるだろう、言い換えればリーダーのままだろう。

なぜならこのようなクンプラン[仲間グループ]のリーダーには外部からの人々を据えることはできないし、「単身」女性たちも正式には家事労働の分別がないだろうし、そしてムンス一家も不適任だから。お母さんはとてもよくやっている。彼女は無意識に影で糸を引き、簡単でおいしい献立を考え出す。彼女自身は自分の利点になることを欲していないことがすぐに分かるし、この家を優しく公平に治めている。だから今のところみんな彼女を当然リーダーと考え、状況に満足しているのだ。…中略… グダンにいるG一家からはもう何も分からない。彼らはビングン[頭が混乱]しているのだと思う。

ベルフ

1943年8月30日

デ・ヨングさんはまだ常にとても感じがよく、そしてベルネロット・ムンスさんは幸いとても思いやりがあるとわかる。少年たち（ピーターとウィル）も好ましいままで。

ベルフ

1943年8月31日

大勢のひとたちでこの家はものすごく慌ただしい。ロップは本当にエゴイストだ。彼は朝ゴミを運んだあとは何もしない、それが9時半に終わっていてもだ。彼は友だちと遊び、私たちのウルサン[仕事]や雑役には興味を示さない。例えばピアノはもう1週間なくなっているのに、今日彼は「ピアノはどこにあるの?」と尋ねる。いちばん愉快的なことは、私たちが彼をみかけると（テーブルについているときだけ）、うなじが汚れた清掃服をまとい、ぼさぼさの髪でいつも不潔なのだ。熱心に働いている女性たちはみんなきちんとテーブルにつく。でもこの男の子はそんなこと必要ないと思っている。そして「ちょっと身なりをととのえたら」とか「なんてかっこうなの」とか言うと、彼はまったく聞こえないふりをするのだ。

ワイヘンケ

1943年9月27日

ここチデンは注目に値する共同体です、外部の世界と自分自身の非常に緊張した相互関係によって重荷を負わされ、共同生活をもたらすことのできるもっとも腐敗し不快したもの（喧嘩、いじめ、ごまかし、盗み、不潔さ、すべてがその一番ひどい、そして下劣なかたち）で汚染され、毎日の何千もの小さな狂ったそして痛ましい出来事のユーモアによって和らげられ、そして時には

精神の気高さと貴さによって、そして共同生活と協力を本当に「理解」することによって荷が軽くなります。でも概して、人々がとても哀れを誘うものだということにまさに呆然とするのです。これは女性独自のものなののでしょうか？この家に住む私たち自身、私たちの置かれている状況を認識し、お互いにとっても恵まれている私たちでさえ、家事のささいなこと、あるいは小さな変化についてどうして愚痴をこぼさずにはいられないのでしょうか。…中略…

もうひとつクラマツトからの面白いお話。チデンへはトランクを1つだけ持って行けると仮定して、ある婦人はいろいろな銀の食器を1人の同居人にあげてしまいました。後にもっと持って行ってもいいことになった時、この同居人は何も返さないと考え、そして現在I夫人はここチデンでII夫人が彼女の銀食器でおおげさに食事をしているのをみえています！同II夫人は、私たちがまだチデンに出発する場合にそなえて、クラマツトでかなり押収したのです。このようにここでは多くの女性たちが押収した靴、ドレス、衣服、椅子などを使用しているのがみられます！…中略…

ここでは概してクラマツトからの人々がもっとも熱心に働いています、すなわち彼女たちはクラマツトで常にそのように振る舞っていたからです。トコでは彼女たちが最もすばらしいヘルパーですし、パサールでは彼女たちがもっとも活発です。…中略…

私たちには、一日中近辺を監視する年長の少年・少女たちの居住区警備隊もあります、残念ながらこれも必要なのです！チデンの少年たちがブアヤ[扇動者]です。彼らはものすごく盗みを働き、品物を密かにゲデック越し[竹の柵越しの闇取引]で売っています。ここでは風紀に関してはひどい状況だと思いました。あらゆることがこの収容所に「モラル」がほとんどないことを証明しています。

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月5日

年輩いた男子の一人で、こまかい仕事のための大工さん、デルフスハーベンのランスさんは私の大親友です。彼はヘンケス - ライスダイク一家全員を知っています。彼によるとおばあさんが全家族の乳母だったとのこと！もう一人のお年寄りの男性は、時々私の庭仕事を手伝ってくれます。これは私がまだひんぱんに好んでしている仕事です。

ワイヘンケ

1943年10月10日

面白いジョーク。「刺のある風景」NSBの家で大ゲンカがあった。班長がやってきたときには、お互いに国家反逆者だとのしりあっていた！

ベルフ

1943年10月18日

今日ブルクさんと言い争い。私は今朝部屋掃除が遅くなり、バケツ、雑巾とサブ[ほうき]を片付けるため裏へと急いでいた。もう9時で、私は洗濯をするため急いでヒディングさんのところに行く必要があったのだ。食器洗いをしている傍の廊下はとても狭い。そこには戸棚が置いてあり、人々が食器洗いをしている場合、子供たちは向こう側の芝生を歩いて行く習慣だった。大人にそれはもちろん強要できない。さて、私がそこに装備一式を持ってやってきた。コスター先生が立って洗い物をしていて、ブルクさんも忙しくしていた。私はもちろん芝生を歩いていった方がよかった、でもまあいい、急ぐのだから構わないと思ったのだ。私が通り過ぎた時、ブルクさんが命令調で「芝生を歩いて行って！」と言った。そしてはずかしめられ、「そうは思わないわ！」と自分の立場を弁解した。私は廊下で激情が高まるのを感じた。「そうなさいよ！」と彼女が私の後方で叫んだ。バケツを裏にしまった時には、激怒していた。最初私は食器洗いのところを歩いて戻るつもりだったが、いずれにせよケンカは避けなければならない。私は芝生を歩き、洗い物のところで、恥ずかしさと激情によってしわがれ、押し殺した声で「私は命令などされないわよ！」と叫んだ。「これは命令じゃありませんよ、これは…」「命令だよ！」と私は言い返した。私はほとんど言葉が出ず、すばやく靴を投げつけた。

ヒディングさんのところについた時、私はまだ怒りで真っ青だった。私は命令されたくないし、子供としては扱われたくない。特に私の家で見ず知らずで30才にもなっていないブルクさんには！彼女はもっと丁寧に尋ねるべきだ。彼女はお母さんが彼女に命令ができないと同様、私にもできない。私がばかげたことをしていることは分かっているけれど、彼女は私に恥をかかすべきでもない。お母さんはこの事を知らない。

ワイヘンケ

1943年10月21日

この収容所では、民主主義の原則は目を見張るほど失敗に終わっています。ごまかしや狭量さ、下劣さによって、自由競争や自由取引は死んだ見解として追い払われ、規則は独裁的な方へ向かっています。驚くべきことです！

ベルフ

1943年10月29日

お母さんはこのごろ、現在…コッホたちを大分不快だと思っている。唯一私たちが毎日出会う場

所、つまり食卓で、彼女たちはだんだん感じが悪くなっている、食事中にという意味で。特にコッホ先生は彼女が不味いと思うものはほとんどいつも拒み、私たちは残り物などを食べることになる。もちろん拒むことが無作法すぎるときだけは、彼女は食欲をそそるものだけを食べる。古いお肉とおいしそうな赤身のビーフステーキがあると、古いお肉には「いいえ、いりません」と言い、「私はパンとお肉を食べますわ」と言ってビーフステーキとパンを2、3枚取る。あるいはお昼のナシ・ゴーレンが残っていたら、これは胃にもたれるので「これは子供たちが食べますよ」と言うのだ。でももし何か好物だと…「私はもう一匙サユール[野菜]をいただきます」…そして「おいしいわ!」と舌を出して歌うような調子で、あるいは「私はもう一切れタマゴをもらおうかしら」と、すごく利己的。お母さんは怒っている。あらゆることからコッホ先生が自分自身をいかに重要だと思っているのかが分かる。そしてまさに母親たちは他人を優先することを学んでいるのだ。最近彼女は手におできができていて、それで「うまく乾いたわ」とか「また始まったわ」「よくなってくれないわ!」などとその状況を数え切れないほど何度も繰り返すのだ。

最初はこういうことはさほど気がつかなかった。でもある程度長期間私たちと生活している現在、長くいるほどあまり重要でない質問や、長引くほど自分自身や互いについてのおしゃべりをするようになり、お母さんを怒り狂わせるのだ。彼女のいらだちは私にぶちまけられ、ついにはおおげさになる。ヘネクイン先生が病気の間、代わりになったロールダ先生といっしょにコッホ先生がゴミ収集の少年たちを呼んでいる時、お母さんは「まあコッホ先生、なんてまたお忙しい」言う。これは、お母さんと私が（そしてこれは私のコッホ先生崇拜後の変化）コッホたちに批判的になりはじめた時、私の心中もさらけだし、現在私がお母さんの意見や批判に同意しているとお母さんが考えていることから来るものだ。時々はそのような場合もある、でもいつもではない。私はお母さんがこんなに理由なく苛立ちをぶちまけるとコッホ先生への私の愛情がたびたび傷つけられるように感じる。そうすると私は何も言わない。

でもお母さんは、午前中も午後もベッドで寝ながら読書しているヘネクイン先生に、ヘネクイン先生とコッホ先生の仕事を得る一般的な評価に、早朝に庭でコーヒーを飲むことから始め、一日中ベッドで読書し、夜はベッドの傍の灯りで楽しくすごしているすべての独身女性の安穩さに嫉妬しているのだ。その間彼女自身は一日中ケンカをなだめ、ペルカラ[厄介事]を解決し、パサーリストを作り、ケーシェを膝に乗せて縫い物は全く進まないのだ。私にはすごくよく分かる。

日曜日、私たちはまた「ケンカ」、その瞬間爆弾がはじける、そして彼女は私をものすごく非難した。もちろんその半分はおおげさだったけれど。でもこれはすごく必要だった。なぜなら私は一疲れ一イライラし過ぎ、尊大すぎ、朝機嫌が悪すぎ、感情を抑えることができなかったから。私はケンカがおわった後はすっきりした感じがした。数日後、感情を抑えようとする少女の話を読んだ。これらすべてが私を少し良い方向に導いてくれた。私は少し自分の感情を抑える努力をし、あまりいばらないようにするつもりだ。私はこの日曜日の前、ブルクさんの事件の後に「今は悲劇だ、爆発しそうだ!」という感じがあったのだ。今私はまた自分を少しコント

ロールできる気がする、3日間安静にしていたことによっても¹⁵⁷。

なぜならお母さんにとっても不快なことだったから。彼女はあらゆる問題を引き受け、常に自分を優しい人として、クパラ・ルマー[家長]として自制していなければならないし、全然休養できないから。だから私はお母さんをいくらか許そうと努力している（私の性格ではまったく、私はすぐにかつとなる、ことに家族に対しては確実）、なぜなら彼女はいつも完全に公平なわけではないから。とりわけ、いつも少し心の中をさらけ出すことができる私に対しては。すなわちケーシェのこと、お父さんのこと、コッホたちのこと、ユッフのこと、戦争のこと、みんなのことについて。しばしば私は他の人のことについては同意しないことがあるけれど、彼女を多少傷つけることを怖れたときは、黙っていたほうが良いと思う。彼女と同じ意見の時には、私は賛意を示す、結局みんなが好ましいとおもっているからだ。そして私自身もエゴイストで、彼女を傷つけることが多い。私は彼女の支えが必要だった、というのは私自身をととても重要人物だと思っているし、結局自分自身への関心を必要としていたから。

それほど不愉快な生活を私はしているわけではないし、未来がまだ私には開かれています。お母さんは違う。彼女はもう43才だし、苦しい経験によって違っている。あらゆる事にもかかわらずすべての可能性が待っている私とは物に対する見方が違っている。私は私の人生をこれから生きることができる。望ましい、望ましくない、間違っただけにしても。あらゆることにもかかわらず、常にそれを背景に感じている。お母さんは違う。この苦しみによって多くを失っている。すでに私は判断してはいけないことを言う。私はそう感じているから。おそらく43才だとまた他のことがあるのだろう。

ワイヘンケ

1943年11月1日

この居住区のなかでまた様々な盗み、おそらくここの悪漢たちによるもの。惨めです、おそらくこれらすべての背後にいる「身持ちの悪い」女性が私の班にいます。警官が食糧を買う、ここの居住区で選らべるもの全部。なぜなら居住区の外はもっと高く、手に入れることがほとんどできないからです。

ワイヘンケ

1943年11月17日

私の班のケンカ、すなわちトイレが生理になっている誰かによってあまり清潔でなく、不潔でさ

¹⁵⁷ 脚の潰瘍のため、ベルフはやむなく安静を保つ必要があった。

えある。訴えられたのはすでにもう何年も生理の終わっている 58 才の女性。訴えたのは家に犬や猫をたくさん飼っていてちょうどサポー・リディ[ほうき]で糞を外に掃き出そうとしていたいやらしい人。彼女は 1 時間あの臭いサポー・リディを他の人たちの鼻先で振り回しながら「あんたがやった、いやらしいそつき」と叫んでいます。1 時間の間、もう一人が、彼女と同年代の人などが…反対しました。これがだいたいあらゆるケンカのレベルです、無意味で目的がなく無分別なのです。

ベルフ

1943年11月18日

私はやはり衰弱しすぎて、無関心。時々うんざりするどうでもいいような態度になる。例えば人に慕われるようになる点で。私は概して他の女の子たちに対して、陽気で魅力的な子になるには気力がなさすぎる。同居人に挨拶したりいくらか親しげに見て慕われるようになるのには気力がなさすぎる。もう私は 33 人の人たちにおはようございますという気にならないし、私が怒っているなら、怒っているように見える。私が自分をいくらか抑えているのはお母さんに対してだけである、なぜなら彼女が神経質だから。ヒディングさんのところで働いているリース・シュラーも私には我慢ならないと思っているとおもう、なぜなら私は熱心に彼女にこんにちはとっておしゃべりをする気持ちも元気もないからだ。要するに—陽気で快活な—他の女の子と違い、陰気で退屈で気力がないのである。でも私はやはり自分自身を高く評価している！

ヘンケス - ライスダイク

1943年11月19日

リートから「新しい家のために！」とひそかに銀のスプーンを 5 本もらいました。私たちはいっしょに楽しく過ごしています。

ベルフ

1943年11月22日

デ・ヨング - ケーシングさんは収容所に入ってきたばかりの時、ここ私たちのテーブルで食事をした。最初は私たちから始めた、とても痛ましい状況¹⁵⁸だったからだ。そしてデ・ヨングさんが

¹⁵⁸ 彼女の夫が死亡したこと、脚注 21 参照。

若い女性と小さな子供たちといっしょに一人ぼっちで空っぽの家に入居し、「コンビネーション」とはすぐにいっしょに食事できなかつたからだ。デ・ヨングさんの娘のアンクも私たちといっしょに食事をした。でもアンクは扱いにくい、**ひどく厄介だ！**デ・ヨングさんはコッホ先生とヘネクイン先生がものすごくいらだち、お母さんもアンクの態度がよくないし、アンクが貴重な食事を好まず残すのはもったいないと思っていたことを確実に見ていた。…中略… デ・ヨングさんが彼女の家に途中から入ったメーレンス一家と食事をするより私たちのところで食事をするほうがいいと望んだ時には、彼女は人々が即座に同意しないとは気づかなかつた。その反対、彼女は切に願いつづけ、食事に来つづけた。コッホたちは全く無視しつづけていた。そしてデ・ヨングさんがお母さんと決まりを欲した時には、お母さんは一如才なく外側に置き嫌な仕事をお母さんにおしつけているコッホ先生とヘネクイン先生との話し合いの後で、アンクを一緒に食卓には望まないということをはっきりさせる以外なかつたのだ。

でもデ・ヨングさんはこの痛ましい大団円を予測できたはずだつた、容易く。その上、彼女は計画の変更もしたのだ、今またメーレンス一家といっしょに食事するといいだしたのだ。それからまた私たちといっしょに食事する方が良くいと主張したり。これら言い争いとデ・ヨング一家のいつも遅れてテーブルにつくことなどによって、今規則的に決められたことがうまくいなくなり、家や食卓の規則にとっては最善のことではない。実際これ以上は続けられなかつた。アンクはいつもお祈りについてくどくど小言をいった。でもこのことは、まだ14日前に御主人を亡くしたばかりで、まだ具合のよくないデ・ヨングさんにとって、他人を考慮してアンクを大家族のところに引き渡したいとおもうことはとても不快なことだつた、そしてお母さんにとって

も。

でも数日後、私は自分からデ・ヨングさんを訪問した。というのは最終的にはお母さんとデ・ヨングさんの問題だし、私はいつもデ・ヨングさんとは親しくしていたから。要するに私はその後いつも普通に彼女と付き合っていたということ。後に彼女はまたお母さんのところを訪問に来たけれど、人間に対する信頼をかなり失つたようだ¹⁵⁹。デ・ヨングさんは人間に対して子供っぽい、愛らしい信頼感を持っていて、みんな、特に7人の子供を持つお母さんはすべてにおいて自分のために犠牲を払うだろうと思っている。お母さんからはそのような優しく、愛情に満ち、犠牲になるような印象を受ける。彼女はそうでもあるけど、でも多くの商才も持っている。そして彼女のモットーの1つは「過ぎたるは猶及ばざるが如し」で、ここでは彼女の家の食卓に関してのことなのだ！でも彼女は喜んで蚊帳を病院に与えるし、人々が必要とすればなんでも差し出すけれど、その人々自身がそうでない場合や、そんな印象を受けた場合はそうではない。お母さんはそんな性格なのだ。

でもデ・ヨングさんは彼女に失望し、私にここで人々はきびしくなっていると何度か

¹⁵⁹ デ・ヨング夫人は同じ出来事を1943年9月17日の日記にしている、「アンクはもうB（ベルフ）一家と食事をしてはいけない、なぜならエルナがそれでめんどろなことになるから。パー、なんて嫌なこと。でもそうなのだ。誰もが自分の立場のために力を尽している。これが世の中だ。」(NIOD、蘭印日記コレクション、E.E.de Jong-Keesing)

言った、その中にはお母さんも含まれていると私は思う。他の人たちも。

ベルフ

1943年11月23日

デ・ヨングさんは勇気がある。本当に勇気がある。私よりずっと勇気がある。彼女はあらゆることにもかかわらず絶対にくじけない。そしてこれが私の共感を示すよう聖ニコラス祭の贈り物を彼女にあげたいと思う重要な理由である。彼女の孤独で勇気ある闘いを考えると私の中に大きな慈愛を呼び起こすのだ。常に彼女はおしゃべりをする時間と興味がある。アंकの誕生日も彼女の誕生日も私たちからは何の関心も払われなかった、なぜならお母さんは彼女の誕生日を知らなかったし、収容所外部にいて父親がいたアंकには何もあげたくなかったからから。でもデ・ヨングさんはいつも私たちの誕生日を尋ね、日付を記し、私たちはみんな確実に彼女から贈り物ももらっていた。彼女は私たちに関心を持ち、本当に関心だ。お母さんが疲れて気持ちが沈んでいると私がぐちると、彼女は日曜に直ぐにおしゃべりするためにやってくる。それが助けになるわけではないけれど、でもやはり親切である。彼女は私にも「聖ジョーン」を読むことをすすめた。毎金曜日私は彼女のところを訪れる。彼女は頼りになるのだ。

ワイヘンケ

1943年12月18日

この生活はとても暗くとても困難です。私の班ではもっとも吐き気をおこさせるようなケンカのクライマックス。すごく不愉快で、すごく狭量で、すごく不潔で恐怖をかきたてられ陰悪なのです。

ワイヘンケ

1944年1月2日

私の班でまたうんざりさせられるケンカが終わったところ、それには少女の時ヒルヴァーサムに住んでいて、私がギムナジウム1年生だった時とても尊敬していた女性が係わっていました。この世の中不思議なことがあるものです。

ヘンケス - ライスダイク

1944年12月24日

アニー・ファン・デル・プラスからいくらかお砂糖をもらいました。彼女はまだいくらか「祭日用」に保存していたのです。

ブールマ

1945年1月29日

ここの雰囲気は耐えがたい。ファン・デル・K一家はものすごく愚痴っぽい。まったく何も良い方にとらない。ファン・デル・K夫人とウィリーは一日中できる限りふきげんに眺め、いくらか余分にすることがあるとなんでもぐちっている。食事中はものすごく強欲だ。少し前にパンはのどが通らないといていたのに、でも今は全部食べてしまう。おいしくないと思っている！想像してみてください！でも彼らは**空腹なのだ！**

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月11日

これから私は子供たちに本を読み聞かせます。日曜日はまだ常に特別な日なのです。私たちはみんな同じように疲れています、でも6人楽しく過ごしていることに感謝しています。トゥルディー・デ・ヨセリン・デ・ヨング - ムニンクが私たちの家に住んでいて、しょっちゅう私たちのところにいます。一日中メガホンが叫び、居住区の騒音、混雑はすさまじいものです、でもこの部屋はいつも楽しい。私たちはどんなに些細なことも子供のように楽しんでいます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月12日

現在徐々に「健康な」働く女性たちが連れ去られ、長引けば長引くほど裏切りなどが増えてきています。トコやパサールでは、人々はお互いをもう信用していません。飢えは多くのことを引き起こします…。他人の食糧を盗んだり、あるいは子供たちに盗ませている人さえいます！でも私は、この苦境はまだ頂点には達していないと感じています。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月14日

トコ、パサール、中央調理場で働いている人々が解雇されます、おそらく闇取引をしたのでしょう。苦情は班のリーダーにのみ訴えることが許されています、ニッポンにではなく。私たちはそれほど落ちぶれたのでしょうか、これをなした女性たちは？

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月13日

盗難がすごい。人々はお互いの食糧を盗み、子供たちは長引けば長引くほどたくさんとって逃げます。バンドン移送からの女性たちは夜中に盗みにいきます…これは簡単で、そこでは**全部外**におかれているからです。庭のものはもうほとんど残っていません、トマトは根こそぎ取られてしまいました。これは不潔に積み重なっていて、まだまだひどくなっていくことでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月31日

今よく考えてみると、私たちはこの最も原始的な状況の下で獣のように密集して生活し—確かに、自然が必要不可欠なものだけを為すことを強いるように、おまるを手に取り子供たちの一人が待つなかを部屋でする、なぜならこの「小部屋」には窓もドアもない—そして周りには人々は食事のことだけを話し、ほとんど出ない水道の「水汲み当番」、あるいは公平に分けられていない食事についていさかいをしているのです…。知り合い—幾人かの例外は除きますが—自分をもう制御できなくなり、これら同じ様なことや「いつになったら終わるのでしょうか」と苦情を言っています…それでだんだんリートと私はいっしょに並外れて素晴らしいコンビネーションを形成していると確信するようになりました。私たちはまだ楽しみ、空腹については口をつぐみ、できることに全力を尽しています、けれど私たちも本当に他のみんなと同じことを望んでいるのです。1度はやってくるでしょうし、私たちはできるだけ快活に、この悲惨な状況が終わるのを待っています。子供たちは分別がありよく手伝ってくれます。彼らは私たちが食事のことを話したくないことをとてもよく理解しています、そして彼らはどの「特別なひとくち」に対して感謝を新たにしています…なぜならこの状況でさえまだ可能なのですから。

ブールマ

1945年6月7日

昨日の午後、ディディお婆さんとお砂糖のことでいやな出来事があった。すなわち彼女たちからたくさんもらっているのに、わたしが彼女たちに配分しなかったということ。またわたしがいつも配分に眼を光らせていることも。これにはとても悲しかった。彼女たちは確かに正しい、でもわたしは自分でもお砂糖¹⁶⁰をどうすべきだったのか分からなかったのだ。夜、わたしはこのことを整理して、そして今またすべてが解決した。

ブールマ

1945年8月15日

わたしたちはみんな再び普通に生活する必要にせまられている、なぜならわたしたちはお互いに一日中ケンカしているし（それほどひどいともいえないけれど！）、冷やかしやおふざけを受け入れられず、こまかいことにいらだち、そしてみんな疲れ飢えている。

¹⁶⁰ ヤネケ・ブールマは砂糖を蓄え、例えば誕生日のために取っておこうとしていた。（ブールマ 1945 年 11 月 3 日の日記断片）

性意識

ベルフ

1943年3月18日

私にとって男の子がどんな外見をしているか、今はそれほど問題にしてないと思っているけれども、ある種のタイプ、たとえばフリップ・マルスのようなタイプにはとてもまいてしまう。ウィテ・デ・サヴォルニン・ローマンも私がまいてしまうタイプではないわ。彼は男の子であって、リセウムの生徒であるだけよ。…中略… 彼がここへ来るか、それともクラマツト¹⁶¹か、私はどっちがいいかわからない。もし彼がクラマツトへ行ったらば、私は落ち着くけれど、そしたら彼を好きになるチャンスもなくなる。ここには誰もいないし、私は相変わらず恋いをしたいのだ。(ハインのことを想うと私は恥ずかしくなるわ。彼がまた戻って来ればいいのに。だって、私はまだ彼を心の底から愛しているの)。¹⁶² 変ね。なぜなら私はもう 17 歳になるし、当時は 13 歳だったけれどもすでに同じ気持ちだったから。セックス・アピールと愛との境はどこにあるのかしら。というのは、私はW.L.をももちろん愛していないけれど、2、3 日彼のことを想ったりもしたし、そしてハインを私は本当に愛しているのだから。W.L.のことなんか丸っきり私にはどうだっていいのだ。

ベルフ

1943年3月22日

ウィテ・デ・サヴォルニン・ローマンはクラマツトへ移された。本当のことを言うと、私自身でもそれに我慢がならないし、とてもがっかりだ。あるいは、だった、とでも言ったらいいかしら。だって、もう再びそれになれたから。その男の子のことにに関してだからでなく、私は今ちょうど、少年と少女の間のセックス・アピール力を必要としているのだ。ともかく、これで私の心の安静を得るためにはベストでしょうし、多分このようにしてその欲求をなくすことができるかも(???)。だって、私は男の子に対してほとんどいつもの自分ようではないのをとてもばかばかしく思っているんだから、でも一方で、すてきだと思ってもいるのだ。

アードリー・プレイは、何も話さないことにそれほど負担がないし、彼女はそのことをまったくからかって言うほどなのだ。例えば、ルース・ヤンセンは、何かある理由で偶然捕らえられなかった誰かある 21 歳くらいの男子と一緒にいるのを経験しただけだが、話でわかった

¹⁶¹ ウィテ・デ・サヴォルニン・ローマンは、まだ強制収容されていなかった。

¹⁶² ハイン・ファン・デル・ヘルダーは、1942年6月25日、アデックに強制収容された。脚注2参照。

のだけれども、彼女は以前 W.L.と熱々な関係にあって、レックス・ブレーマンにも何と云うか、「目をつけて」いたようだ。ともかく、彼女がバンドンへ行く時、(アードリーの話によると) 彼女はその男の子に濃厚なキスをしていたそうだし、当然、彼も彼女にしたのだ。そういうことをアードリー・プレイは理解できない。それで、彼女は私にこう尋ねるのだ。「そんなこと本当に狂ってると、あなた思わない?」。私はもぐもぐと「そうね」と言ったけれど、自分ではしないでしようし、認められもしないけれど、心の底ではよく理解できるのだ。こういうことには気をつけなければならない。しかし、アードリーは彼女が好きになった男の子とキスするなど真に心の底から欲したことはほとんど一度もなかったし、実のところ、私がハインを好きになった時のように、彼女は義務感(!) いっぱいに、心から恋いをしたことなんかないと私は思うわ。今、私は異常であり、誰も私のように「愛」をあまり真剣に考えないけれど、キスを求めることは、ルース・ヤンセンと私を含めてたくさんの子供たちも理解したでしょうに、おそらくまちがったやり方で... でも、アードリーはこういうこともないのだ。

ワイヘンケ

1943年9月27日

でも今はもう、実際誰一人としてブランダ[オランダ人]は町にいません。そんな訳で 10月1日までに入所する修道女と神父たち、何人かの牧師や医師たち(コレット、レディンギウス、ファン・ダイク、ファン・ハッセルト)の輸送が。(何人かの男性に女性全員ということは、女性は男衆から離れていることができない事実からしても、どのようにやって行くべきか私にとって謎なのです!)

ベルフ

1943年9月29日

今朝、ヘネクイン先生がデ・グロート牧師の息子たちのことを話した。長男は四年生の時にすでにロシア語を習って、今はストリウス収容所ではほとんど学士号取得者までになっている。彼は一年生で、すごく利口らしい。それはなかなかの男の子!そして一人前の男性だ。なぜならば、私はだんだん一人前の男性を必要としているといつも感じているし、-「スイート・セブンティーン」としてはおかしく聞こえるかもしれないけれど、男の子でなくて。私はとてもつらい日々をすごしているし、一体幸せに、私が死ぬ前に本当に幸せになれるのかしら?

ベルフ

1943年10月12日

ウィテ¹⁶³は実はもう全然私に目を向けない。彼は私を親切だと思っているのだが、まあ...だって、私がコッホ先生のところにいたから。そして、私はもちろんかなりまじめだし、向うのほうからあいさつしてくれる、感じの良い女の子なんです。そして、それだけで全然好きになってもらえないし、一度も目もくれない。でも、うんざりしてしまうのよ。男性にたいしてあんまり、全然、といった方がいいかも、魅力的でないということは。私はハインとも、彼が本当に私にいわゆる「ほれて」いたというところまでは決していかなかった。私はこの頃、あごを突き出して歩くように一応努力しているのだ。そうすると、自信があって投げやりに見えるからだ。…中略…

妹パウリーンは今すでにひとりの男の子と夕方散歩している。フリッツ v. d. カンプだ。これは極秘。お母さんはこのことを知らないし、いやだ一、本当に隠れてだ。そのうえ私はうらやましく思っている。私が13歳の時にはまるでうまくいかなかったのだ。しかし、彼女は見た目もすばらしいのだし、それだけに楽なのだ。誰も、女の子すら私を見ないのだ。…中略…そして男友達を受け入れることを妨げる良心があることだし。つまりは、もちろん受け入れるものがないのだ。私は醜すぎるし、つまらなすぎるのだから。多分、私を気に入ってくれるようないくらか年上の人生経験豊富な男性ならいるかも。でも、若い男の子が私を気にかけるとは信じられない。

¹⁶³彼は1943年8月24日にチデンに到着した。

収容所外部との接触

ヘンケス - ライスダイク

1942年11月8日

残念ながら、この収容所には男性の立ち入りが禁止され、その結果ジョンゴス[下男]は全員去りました。しかし、私の下男サタムには、私のお金がある限り—毎月支払う約束をしました。

ヘンケス - ライスダイク

1942年11月23日

時折のことですが、夕方、自転車に乗ったひとりの男の人が鉄条網に寄りかかっているのを目にすることがあります。婦人が歩み寄ります。彼はまだ働いていますが、彼女は収容所に...

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月10日

コキ[女性の料理人]とバブ[女中]たちは夕方家へ帰ります。ここで寝泊りはできません。…中略…ミーブと彼女の子供たち、そしてアニー・ファン・デル・プラス - プライテ夫人は、5日間にわたり山地へ行きました。特別な「ニッポン・パス」があれば、まだこれは許されています。

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月19日

12月24日には、やっとまたストリウス収容所にいる夫のウイルに小包を持って行くことが許されました。すると、何百人もの女性たちがアデッキとストリウス、このふたつの刑務所へ自転車を走らせるのを目にすることになります。送り届けた物の全部が、決して彼らの手に入らないことだけは承知しているのです。

ベルフ

1942年12月25日

今朝、ストリウス収容所にいるお父さんのところへ甘いものが入ったクリスマスの小包を送ることが許される。

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月31日

[大晦日] 私たちが送った小包を男性たちは楽しんでいるでしょうか？また、みんなで一緒に少しばかりのものを送った第10大隊¹⁶⁴にいる1200名の捕虜たちもでしょうか？

ヘンケス - ライスダイク

1943年1月10日

バブ[女中]は全員出て行かなければなりませんし、これから私たちはすべて自分でしなければなりません。今日は、まだ収容所の「外」にいるマリーチェとヤン・ヨーステンのうちでインドネシア料理をごちそうになりました。別れはつらいものでした。いつももうずっと再会できないのではと心配になってしまいます。私たちはこれらのバブたちをできるだけ手助けしています。私たちのために働くことが許されなくなって、彼らはどのように生活の糧を得るのでしょうか？このような人々が町中にだけでも何千人もいるのです。

ヘンケス - ライスダイク

1943年2月7日

子供をたくさんかかえた母親たちは、しばらくの間バブ[女中]を置くことが許されています。幾人かは、バブを2分の1または3分の1持つ権利があります。収容所は封鎖されていますが、私たちは水曜と日曜だけは外に出ることができます。¹⁶⁵ 依然外で仕事をしている女性は今もパスを持っています。…中略… 現在400人のバブが入場を許可されています。

¹⁶⁴ この戦争捕虜収容所は、バタビアのワターロープレインの南方に所在した蘭印軍の最古の駐屯地にあった。

¹⁶⁵ 脚注 63 参照。

ヘンケス - ライスダイク

1943年3月6日

3月1日からは、もうバブ[女中]はひとりもいない！ 私たちはアデック、ブキドーリ、ストリウスの刑務所へ再び小包を送ることが許されましたが、これはその月の5日、15日、25日にです。

ヘンケス - ライスダイク

1943年3月14日

外出するためには、現在全員がパスを持たなければなりません。収容所を出入りする際にはコントロールが。でも私たちは外出するための時間がもうそれほどありません。

ベルフ

1943年3月17日

コービー・ケニンクと一緒に、デ・ヨング夫人のところでこっそりと授業を受けている（オランダ語）が、¹⁶⁶ すべての授業はもう少し前から禁止されているからだ。最初は、フランス語の授業を大部分の女の子と一緒に受けていたけれど、今となってはそれは目立ちすぎる。だから、ゴン・フィッサー、コリー・リント、エルス・マイスベルフ（3人ともクラマツトから）は、別々に授業を受ける。コービーはとても親切だ。私はいつも水曜日を楽しんでいるけど、これもそう長くは続かないだろう。

ヘンケス - ライスダイク

1943年3月20日

昨日の夕方、赤い腕章をもらいましたが、また、これを私たちが外出するときには付けていなければなりません。ますます複雑に... しかし、正門がこれからもずっと開放され続けるとは私には思えません。私には1177の番号が付いています。事務所での労働パスの番号は232で、普通のパスは同じく1177。

¹⁶⁶ コービー・ケニンクと同様にデ・ヨング夫人も当時まだ収容所の外に住んでいた。

ベルフ

1943年4月2日

スカブミに、家族収容所とのうわさが流れている。これは本当らしい。なぜならみんながこれについて話しているからだ。様子を見るのみだけど、コービーを失うことにもなる。この家族収容所は、たとえばプレイ一家やケニク一家のような場合、つまり夫が在宅し、無職で捕らえられないでいる場合らしい。私はこれが実行されないことを望んでいる。コービーとは今ちょうどうまくやっているのに。だけど、心の底から身を入れているようなことは、絶対に続かないのだ。特に今の時勢には。

(3月31日) 水曜日はとても楽しかった。デ・ヨング氏は、病気で家にいて、そのためデ・ヨング夫人は、私が内緒の授業のために裏のベランダに着いた時すぐにも、もちろん行わないことを告げた。(彼に知られてはならないし、彼がこのことを知っているとしても、本当はこれを良く思っていないので、彼女は彼がいるところではまだしていない) 私はドイツ語と英語を習うために、いつもコービーより30分早く来るので、まだ少し時間があった。なぜなら、デ・ヨング夫人から強いられて、また私自身のためにもだけど、残ってコービーを待っていた。デ・ヨング夫人は自分の本をしまっていた。とてもうれしいことに、彼女のギリシャ語辞典をもらえた(どうせすぐになくしてしまうけど)、そして英語の本も何冊か。この後者の本は、デ・ヨング氏が私にどうだと尋ねたためだ。デ・ヨング夫人は、コービーに注意するようにしたけれど、コービーがその連絡を受けたかどうかかわからないと言った。運良く彼女はやって来た。私は彼女が自転車で垣根から中に入ってくるのを見た。そしてデ・ヨング夫人が「彼女に伝えてきなさい」と言った。そこで私は裏へ向かった。というのはそこに私たちの自転車をいつも置くからだ。

私の背後で、デ・ヨング氏が、彼のこっそり(!)行った奥さんに、事情を聞いただしているのを聞いた。なぜなら彼にはまったくちんぷんかんぷんだったから。結局、私はコービーと一緒に家に帰ったけれど、クラマットのためにコービーの手紙を手渡しに、私たちは最初にアードリー・プレイ¹⁶⁷ のところへ寄って、…中略… というのは、私たちはクラマットに入ることを禁じられているし、非常に困難な状況にある場合に当てられた何人かのバブ[女中]と毎日収容所の外で働く女性を除いては、この収容所に入ることも許されていないし、彼女たちは収容所を出入りするためのパスを持っているのだ。また、(日曜と水曜の「キャンプデー」である)フリーな日には、もちろん私たちだって出入りすることを許されているのだ。カワット[鉄条網の柵]のそばへは、今後は近寄ってはいけない。(これは以前にはまだ救いであったし、あらゆるものが取引されたり交渉されたりしたけれど、もうしてはいけないのだ。アタップ[ヤシの葉の覆い]が前面につけられると言われている。

¹⁶⁷ アードリー・プライは当時まだ収容所にいなかった。

ベルフ

1943年4月25日

ボイテンズルグのコービーから葉書をもらったのだ！とにかく、とってもうれしい。まったく狂ったみたいになれなくなっちゃったけれど、これ本当なのよ。…中略… それで、いつも郵便はライディ・ファン・ヘークやその他の女の子たちによって配られているのだけれど、必要なとき以外は原住民が収容所にはならないからだ。朝と夕方郵便が届く。それで、郵便はパビリオンの人へもかなりよく来るけど…中略、だから私はとても期待して様子をうかがっていたけれど、一度も私にはなかった。(あるはずもほとんどないけれど！) 女の子はいつもパビリオンの方へ向かって通りすぎてしまった。だから、夕方、私は芝生の上で、「De Nederlandsche poëzie in honderd verzen [オランダの詩歌百選]」を読むことにしたが、こんな時、郵便さえあったらば！今回はライディ・ファン・ヘーク。彼女はパビリオンへ向かって通りすぎてしまうだろうか？ ちがった、彼女は葉書を持って私のところにやって来た。私が最初にしたことは筆跡調べだったが、アードリー・プレイ¹⁶⁸のものではなかった。この葉書はそれでも絶対に私宛であるとすぐにも思った。心臓がどきどきしてきた(バカね)。大好きな男の子が私の手を取ったり、もっと親密になりたいようになったらう時のように。かわかるでしょ。まあ、すばらしい！コービーと書いてあった。葉書は(4月22日)木曜日に出され、彼女は火曜日にボゴールに到着した。早いぞ。でもボゴールからは24日になってやっと出された。まず検閲を受けなければならないのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1943年5月1日

キャンプデーには、収容所はそれはそれは大混乱します。その日には私は大抵、家に残ります。今朝起きた時、今日は「何か」起こる予感がしました。これまですべて正常に経過しており、長いこと待ち望んでいた雷雨が荒れ出し始めました。-2時半。本当に特別なこと：明日には誰一人として外出が許されません。「 balan [荷物]」もです。この居住区における楽観性のハイライトか？「夕方、ベッドの下に泥棒がいるか調べたりして」

¹⁶⁸ コービー・ケニンクとアードリー・プレイは、1943年4月にボイテンズルグにあるコタ・パリス家族収容所へ移された。「移送と収容」ベルフ、1943年4月16日の日記の断片参照。

ベルフ

1943年5月7日

あのプリンセン¹⁶⁹の本はオランダの文学史だ。私は以前デ・ヨング夫人に良い文学、できるなら少しは幅広く載っている本の題名を尋ねたが、その時彼女はこの本をあげたのである。彼女は、戦後の新しい版を待つべきと私に言ったが、昨日ロップと一緒にパサール・セネンでお母さんの誕生日用に本を探していたら、そこに無傷の真新しいプリンセンがあったのだ。新品かも、1928年出版！驚いたことに、3ギルダー50。私は反対したけれど、ロップは思いとどまる気は全然なかった。つまりは戦時なのだ！まあ、デ・ヨング夫人が反対するぶんには、私はあまりいやとは思わない。以前そうだったものは、そのままなのだ。要するに、戦後版は少しは幅広くなることはあっても！ロップは2ギルダー50まで値切りそれを買った。私はとてもうれしかった。それも単に自分の弟からとは！私は新しい、太い黒ぶちのメガネも手に入れ、前のものよりはあまりすてきでないけれど、もうメガネ屋も幅広い品揃えでないのだ。また丈夫でなければならぬし。というのは私の古いのがたがただったから。また、私たちは今後、日曜日にだけ収容所の外に出ることをまだ許されている。

ベルフ

1943年5月9日

今日は日曜日だけど、キャンプデーが今また毎水曜日の午前7時半から4時半までに替わった。短いんだ。だから、今日は外出できない。つまらないな！

ベルフ

1943年5月19日

ああ、いつも水曜日に収容所がオープンされればいいんだけど。だってその日はいつもとても楽しいし、当然—それがあっても十分なのだし、私にまだある唯一のことだから。

¹⁶⁹ 彼女が前日に弟のロップからもらった本。

ベルフ

1943年5月30日

マリー・テレーズ¹⁷⁰に便りを書いた。お母さんは、戦争税のために私たちの住所が知られたくないので、テロック・ベトン通りと私が書いたことをよく思わなかった。でも、実際には今ここは違うのだ。日本人は住所なんかについて全部知っているし、私はこのところすでに度々便りしたのだ。その葉書に（もし彼女がもう前の住所に住んでないとしたら）保護居住区に配達されるようお願いを書き記しておいた。うまく届くかどうか興味ある。

ヘンケス - ライスダイク

1943年6月9日

5月10日にマレー語でのウイルの最初の手紙。そして、6月9日に2回目。生きている証としてはうれしいけれど、彼らはすべてを書くことを許されていません。復活祭には、私たちはおいしい物が詰った缶を入れた小包を送ることが許されたけれど... 後になって空っぽの箱が送り返されてきました。ウイルは、娘アンネのウサギの絵の中に私たち4人を描きました！ああ、いつになったら元に戻れるのでしょうか？

ベルフ

1943年6月22日

ボイテンゾルグの家族収容所へあてた葉書はもう届かないようなので、コービーは私に便りすることができない。おそらくボイテンゾルグでは（ティダック・アダ・スサー[問題なし]！とロッブがマレー語に訳した！）葉書を送受するチャンスがないのかも。コービーがとてもなつかしい。結局、マリー・テレーズからも何も便りがない。スラバヤから欧州人が去ったとの話がのぼっている。

ベルフ

1943年6月22日

収容所は今完全に封鎖されてしまった。キャンプデーの水曜日には、まだ外のデ・ヨングのどこ

¹⁷⁰ スラバヤにいる彼女の女友達。

ろで食事したが、彼らはとても不安そうだった。ここにドイツ領事が到着したけれど、何か反ユダヤ人¹⁷¹についての何かが起こっているようだ。働いている女性たちは外に出ることも今後許されないし、緊急な場合に来ていたおよそ 30 人のバブ[女中]ももう来ない。加えて、彼らはものすごく大量の家具を運び去っている。ベッドさえもと、ささやかれているのだ！バタビアは病院の町になってしまったようだし、強行措置も通告された。誰一人として収容所の外へ出ることを許されていないので、私たちがニュースを聞くことももう全然ない。

ベルフ

1943年6月26日

けさ、お父さんから 3 回目の葉書。とてもうれしくて興奮。

ベルフ

1943年7月7日

スラバヤのマリー・テレーズから葉書もらった。彼女は私の葉書を受取ったけれど、その他特別なことは書いてなかった。

ベルフ

1943年7月21日

収容所の外にいるデ・ヨング夫人から妹のパウリーンにチョコレートが郵便で、そしてパウリーンと私宛に葉書が着いた。彼女は私に本を送ろうとしたけれど、郵便では送れなかったのだ。…中略… 便りをくれて、デ・ヨング夫人はまったく親切だ。彼女がとても好き。そのほか、私はお父さんから葉書が早く届くことと、私の誕生日¹⁷²に誰かから便りをもらうことを願っている。

¹⁷¹ デ・ヨング一家はユダヤ人であったため、反ユダヤ人措置を心配していた。ドイツの外交官及び領事館代表による影響下、1943年4月にジャワで新聞とラジオでの反ユダヤ人キャンペーンが開始された。1943年中頃、ドイツの代表団が南部を訪れた。この代表団は、経済顧問ヘルムート・ウォールタート、奉天からドイツ総領事E.ラム、神戸から領事のH.プロイネルトにより構成されていた。1943年7月、彼らはジャワに在留、その翌月からユダヤ人の強制収容がドイツ人に扇動され実施された。(Van Velden, 77, 314-318)

¹⁷² 妹のパウリーンは7月19日が、また作者自身は7月23日が誕生日。

ヘンケス - ライスダイク

1943年7月22日

保護居住区は決定的に封鎖されてしまいました。ここ二三週間、ストリウス刑務所にもう何も送ることはできません。マリーチェ・ヨーステン（彼女はまだ外に住んでいます）が夫のウイルに葉巻と石けんを少し送ってくれました。

ヘンケス - ライスダイク

1943年7月26日

数日前に私たちは3回目の葉書を—むちゃくちゃなマレー語のもの—ウイルに書きました。

ベルフ

1943年7月28日

今日、私の誕生日のためにエディット¹⁷³からも葉書もらった。彼女はアードリーからボイテンゾルグ発の便りも受取った。アードリーは葉書を2回私に送ったらしいが、どうも何も届かなかったようだ。それで、エディットを通してコービーについて何か知りたいと思っているけど、あまり期待しないでおこう！

ベルフ

1943年7月29日

コービーに関して大至急エディットに書いたので、何か便りが来るか期待しているが、だめかも。なぜエディットはボゴールとの連絡が取れて、ここの私たちはできないのかよく分からない。つまり、バンドンなどからの葉書もこの収容所に入るというのに。

¹⁷³ おそらく、エディットは当時、収容所の外、パタビアのどこかにいたとおもわれる。

ヘンケス - ライスダイク

1943年8月7日

昨日から、外界との接続がすべて断絶！…中略… ウイルの4回目の葉書が来ました。今日の午後、私は返事を書くことを許されています。

ベルフ

1943年9月3日

今また急に昨日聞きたいやな知らせのことを考えた。…中略…：デ・ヨング氏が亡くなった！私は昨日、コッホ先生が私を気分転換させるために、オウィディウスと一緒にしてくれたことにとっても感動した。彼は狭心症で、その発作を起こしてしまった。収容所がほとんど封鎖されたときに捕らえられて、突然発作を起こしてしまった。私たちは収容所に来たばかりのある婦人から聞いた。何が実際に起こったのか知らないけれど、奇妙な出来事であったようだ。何も書く勇気がない。もし彼らがこの日記帳を見つけたら… 実のところ、私はこれ以上何も知らないのでもある。¹⁷⁴

ヤッペン最近ひどく気狂いじみたことをしているようだ。また、ユダヤ人に対する作戦に関するうわさがたびたびあがっているし、再びたくさんの男子が捕まったらしい。おきのどくなデ・ヨング夫人！私は彼女がここに来てくれればいいと思っている。私たちのところには、1箇所まだ場所があるからだ。でもこれが実現するとは考えられないけど。でも、お母さんにはこのことを提案しておいたが、夫人の娘アネケはもうここにいるし、すでに満杯なのだが！¹⁷⁵ かわいそうな、かわいそうなデ・ヨング夫人！夫を失うとは何とつらいことでしょうに。戦争とは比較にもならないでしょうに！彼女はとても活気があって、熱心で、戦後の計画を一杯抱いていたし、戦争をひたすら生き抜いてきたのに！また、このようにして死ぬことはいかに恐ろしいでしょうに。

ヘンケス - ライスダイク

1943年9月5日

ミーブはコンドー所長とともにグロゴールに出向きました。そこの食事は良好で、雰囲気も同様ですが、それでも赤痢が多いです。

¹⁷⁴ 脚注 21 参照。

¹⁷⁵ この2日後に、デ・ヨング夫人はチデン収容所に入所した。「移送と収容」ベルフ、1943年9月5日の日記の断片参照。

ワイヘンケ

1943年9月8日

さらに、クラマツト居住区での死亡件数についてや、また、その男性たちがひどく病気でもあり、みじめにも病院へ輸送されているいやな話が。つい最近そこでご主人を亡くしたベップ・デ・ヨング - ケーシングが¹⁷⁶ 昨日この収容所に来ました。血の気がなく、ひどく小柄であわれです。彼女が何回も言ったことは、「ここにいられてありがたい。ここはくつろげるわ」。長い間ずっと、彼女の家の前にババツタル[草刈人]とジュアラン[物売り]がいて、いつときも落ち着き、意のままになれなかったのです。¹⁷⁷

ヘンケス - ライスダイク

1943年10月5日

新月がすばらしい。レバラン¹⁷⁸は、今年、私たちが何も気付かなかったくらい、とても静かに終わりました。もう郵便が届きません。マリーチェ・ヨーステンはヤンと子供たちとともにチラチャブに。彼氏は、まだ働いています。

シスター・ロザリンデ

1943年10月7日

今日のお昼には収容所でとても仰天することが。何とも突如に乗り入れてきたものは：カロルス病院の私たちの車と日本人医長であるミチイ医師の運転手の横にシスター・フェルナンデ。皆がしばし当惑し、シスター・フェルナンデは私たちを目にした時、感情を抑えられなかった。彼女は最初何も言えなかったが、すぐにも「カンパー通り3番地、あなたに手紙です」と告げた。すばらしい。私たちは再び身内のことを知りたかったのである。とてもひどいことでもあった。何もかもが一度に離れ離れにされたのだ。彼女はあえて車を止めようとはしなかったが、ゆっくり走るので、彼女にはまだ少し何か話す時間があった。手紙の中で彼女は、「私はまだそれから立ち直れないし、みなさんのことでまだめこめそしています。まったくむなしいところで、檻の中

¹⁷⁶ デ・ヨング氏は、憲兵隊の尋問を受けている間に死亡した。脚注 21 参照。

¹⁷⁷ これらの草刈人は密告者であった。エリザベート・デ・ヨング - ケーシングは、彼女の著作「Op de muur」の中で次のように記述している。「何軒かの家の前では、私たちの家もだが、あるインドネシア人の草刈人が同じ所に長時間居座っていた。誰かが彼にもうそろそろ他の所へ行ってパチパチとやってみたらどうかと尋ねると、彼は、『できません。Saja bikin keredja spion - 私はスパイとして仕事をしているのです』と答えたのであった」(Keesing, 110-111)

¹⁷⁸ 断食の終了時にイスラム教徒が祝う祭り。

にいる羊のようなみなさん」と記した。しかしまあ、私たちもしばらくの間同じように感じたが、再びすぐにも持ち直すように努めたのである。彼女は、サレンバ島にいるウルズラ会の人たちはもう十分に慣れたこと、クラマツト収容所からマザー・アグネスが訪れ、そのウルズラ会の修道院長であるマザー・ボニファースがかなりの重病にあると伝えたことを記していらした。私たちのシスター9人はクラマツト収容所に残り、ウルズラ会の12人も同様であるが、カプアス通りの12人だけが私たちのところに来るので、ここはシスターが合計83人となる。

シスター・ロザリンド

1943年10月9日

再び、シスター・フェルナンデが収容所を訪れた。彼女は、「摂理修道会」の病気のシスターをひとり連れていらした。私たちは伝言を受取った。マザー・イルデフォンセと私は、指定された時間に正門へ行ったが、かなり長い間待たなければならなかった。車が中に入って来た時、私たちは病院の敷地内にいて、正門ぎわで起こる様子を見た。警官は、私たちがあとで実際に聞かされたように、彼女たちを拒否しているらしかった。私たちはシスターたち（ウルズラ会のマザー・サルバドールもいらした）が、再び正門へ向かって戻るのが見えた。私たちは急いでお祈りを唱えたら、そう、確かに、彼女たちがまた監視所に歩み寄るのを目にした。コンドー（ニップ）が許可を与え、その時、警官は入ることを許された彼女たちを神妙に見入らねばならなかった。

彼女たちはすぐにも病院に来たので、私たちはしばらく話げできた。私たちは、外ですべて順調にことが運んだことに喜んだ。彼女らは私たちに果物入りの籠を持ってきた。私たちはこれを自転車に載せ、シスター・ヨセがハンドルの近くを先頭となって歩き、マザー・イルデフォンセと私は、石けんの入った箱と果物入りの籠のバランスを保つために後について行った。何となくさん笑ったことか。彼女から手紙も渡された。その中に書いてあったが、正門のところでは果物の籠を4つ送り返えされたとのことだ。彼女が帰宅すると、驚いたことに家に置いてあるのを彼女は目にしたのだった。何と腹を立てていたことか。シスター・フェルナンデは、「彼らはあなたたちに何も認めない。まったく叫びたくなる」と記していた。外では私たちのことを必要以上に心配しているようだが、残念なことだ。これではほとんど連絡できないが、可能であったら、私たちは、彼女たちに私たちの様子を知らせるべきだった。

ワイヘンケ

1943年10月21日

収容所に大事な原住民のおくさんをあとに残してこなければならなかった、ひとりのお年寄りが来ました。シ・アニーはその時すぐに、私たちの収容所との境にあるカンポンに移り住みました。

毎日、このおじいさんはゲデック[竹で編んだ柵]へ歩み寄り「アニー」と呼びます。そしてアニーが「ええ」と答えます。おじいさん：「アダ[何かあるか]？」アニー：「はい」そうして、いろいろと話がされます。

ワイヘンケ

1943年11月1日

今夕、捕虜 6 人の死亡通知がありました。するといつも同じドラマが。「間違いかもしれない」と困惑する婦人は真っ先に言う。もちろん、そばにいないため… 不自然な平静さが、この死亡で欠如していたこと（悪質な食事、栄養不良、薬品不足）、孤独な死、そして押し寄せるたくさんさんの疑問を思う絶望的な状況と交互に入れ替わるのです。それに加えて、他の女性たちの内にこもる恐怖感！いつか私たちも。

シスター・ロザリンデ

1943年11月5日

この居住区に再び小包が来る。だが、私たちの収容所には深い悲しみもある。なぜならば捕虜 10 人の死亡通知が同時に入ったからである。この居住区にいる女性の夫たち。この通知は納税通知書に似ていて、そのため、彼女らは笑いながら受け取り、「支払い額はいくら？ お金はまだたくさんあるけど、まさか」ごらんなさい。3 人の幼い子供の父親の死亡通知。

教会で私たちは合同で故人のためにお祈りした。女性たちにいかに恐怖感をもたらされたかお分かりになるでしょう。各人が、「私もそのような通知を受ける可能性がある」と思うのだ。いくつかの通知では、6 月と 7 月に死亡したと書かれてあり、ということは、すでに 5 ヶ月前であり、これらの通知はすべてフロレス島から来ている。誰一人として、彼女たちの夫がそこへ輸送されたとは知らなかった。他の女性たちも、夫が未だにアデックやストリウス収容所にいるとはもう信じていない。私たちはいかに何度も苦しめられることでしょう。

ベルフ

1943年11月7日

私の元のテニスの先生、ゲルネルが捕虜の身で亡くなった。今週には、男子と捕虜の死亡通知が 9 通収容所に入った。お母さんはそれをととても気にかけている。お母さんにとって、この生活はととてもつらいものである。でも彼女は私よりももっとも勇敢である。

シスター・ロザリンデ

1943年11月10日

シスター全員がそれぞれの修道院、つまり各自の修道会から何かを受取るという大変驚くことが今日はあった。実は、聖フィンセンティウス病院にずっと残されていた、ひとりの少女が収容所に来たのである。シスター・フェルナンデは私たちに果物を送ってくださった。それもパパイヤ、バナナ、ジェルック[柑橘類]入りの籠を4つ。何とうれしかったことか！特別なごちそうであった。このような不意打ちが収容所であるのはとてもすばらしい。彼女は卵、全部がゆで卵が入った籠も送ってくださったが、これは収容所に持ち込むことが許されなかった。つまり多すぎたから。実のところ、私たちはもう長いこと外部のことを見聞きしていないため、とても欲しかった手紙がその中に入っていたのだ。私たちが別れたあとに、何も知らせをうけたことがなく、シスター・デシデーラと他に8人のシスターがいるクラマツト収容所へは、この収容所からシスターがひとり行くそうだ。そうしたら、彼女たちが少なくとも私たちのことを知るチャンスがある。

ワイヘンケ

1943年11月20日

本当にまた空襲警報の状況です。毎夜、監視に加えて、36人の少年が居住区内を警戒していますが、それでも大量に盗んでしまう泥棒を同時に見張ります。昨夜は、予想される「消灯！」の代わりに「点灯、点灯！」との叫び声で目が覚めました。大騒ぎ、叫び声、笑い声、そして私が大急ぎで通りを走っていたら、女性たちの一団に追われる泥棒がいたのです。叫んだり、笑ったりしたガウンとカールピンをつけた女性たち（ベラおばさんを先頭に）、ほとんど裸の大小の少年たちみんなが、そのうちに屋根に上がっていた泥棒のあとを追って通りを走っていました。そこでは、明らかに盗んだガウンを着ていた彼が、屋根からアイロン台の上に飛び降りたら、これが壊れてしまい、そのため彼はちゃぶ台の上に落ちてこれも壊れてしまい、一ガウンを身を包んで逃げたのです！まったく大笑いしてしまいました。

シスター・ロザリンデ

1943年11月21日

「よき牧者」のシスターたちの祭儀が終了後に起こったこと（すでに大分遅くもあったが）：グロゴール収容所からシスター・アデレイダが、びっくりしたことに私たちの目前に立ってらしたのだ。いろいろと果てしない質問が交わされた。どのようにしてここへ来たの？ひとりで、それとも警官同行で？いつ戻らねばならないの？私たちの所に泊まる？などなど。その晩、私たち

は 11 時になってやっと床についた。シスター・アデレイダは翌朝にはもう戻らなければならなかった。彼女は、病気の子供を連れてくるはずだったが、ここに来る直前に死亡してしまったのだ。その母親もしばし来ることが許されて、シスター・アデレイダはその到着を待たなければならなかった。なぜならば彼女は警官同行で戻らなければならなかったから。まったく私たちは、極悪人みたいだ。でも、またまた楽しかったし、マザー・エドムンディスとほかのシスターたちも元気で、まだ飢えに苦しんでいないことが分かったのである。

ワイヘンケ

1943年11月29日

ありとあらゆる捕虜からの葉書の束が届きました。それらを配って回るのはすばらしいことです。家中に歓声が響き渡ります。「葉書、葉書、葉書」「誰？何？」「葉書」現在、私たちも書くことが許されています。一家族につき 1 枚で、3 ヶ月に 1 度！

シスター・ロザリンデ

1943年12月5日

うれしいことに、サレンバ島にある私たちの修道院のシスター・フェルナンデから小包をいただいた。居住区の外からの箱入りスペキュラースだった。本当にすばらしい。私たちは仲間同士分け合った。頂いたものはみんなで分け合うのである。

シスター・ロザリンデ

1943年12月7日

またどなたか亡くなった。フレールアッカーズ神父は、墓地について行くことを許され、そのあと急いでモンセニユール・ウィレケンスのもとに立ち寄られた。再び何かモンセニユールについて耳にするのはうれしい。モンセニユールは相変わらずお元気だ。…中略… モンセニユールは、フレールアッカーズ神父に対し、今後、いかにホスチア用の粉と葡萄酒を手に入れるかが問題となるとおっしゃった。大量の貯蔵品はすでに減ってしまったようだ。民間人男子のストリウス収容所だけでも月に 1 万枚のホスチアが必要だ。現在までに 300 人も改宗したことはすばらしい！私たちが知るかぎりでは、そこには司祭がふたりおられる。

ワイヘンケ

1943年12月10日

昨日、7歳の子供が死亡しました。父親は初め、車がなかったためにアデッキから来させてもらえませんでした。結局やって来た時には15分遅すぎました。そして10分間留まることを許されたのです。このようなことは、ほとんど実感できないほどにまったく劇的なのです。その男性は何と言う一夜をおくったことでしょうか。またほかの男性たちも何と言う一夜を。全くもって不安で無分別で不安定さ。なぜならば、大半の男性は、妻や子供たちのことについて何も知らないし、自分を非常に不安にする限られた場所にいるからです。

食事が良くないであろうところ、医師たちも、私が思うに、何かあるようなところ（あるいは誰もいなか、それとも一部は連れ出されてしまった）、バンドンのズスや子供たちを心配している私のことを考えてもごらんなさい。私たち女性は、生まれつきこのような「閉鎖的」存在にもっと適合しているのですが、男の人たちは、それだけで気が狂ってしまったり、完全にぼけたり鈍感になってしまうのです。それでもまた、私たちのところと同じように彼らのところでも、ものすごい雷が落ちたように死亡通知がたくさん舞い込むのです。お互いに離れていること、無力感、これら全てのことで結局、実感させられることになるのです。これ以上耐えられないと。

シスター・ロザリンデ

1943年12月11日

再び、あまり良くないニュースが。ウルスラ会の管区長は、今日三人のアイランド人のシスターがポスト通りの修道院からトラックで連れて行かれたと知らされた。三人ともすでに高齢の方たちで、多少病気がちでもいられる。彼女たちはタンゲランへ移送され、そこは英国人用の収容所であり、元は少年院だったところである。チチュルーのさまざまな教団や修道会のシスターたちは、今日、それも真夜中に中部ジャワのメンドゥーへ移送される。我らオランダ人みんなは以前も今も運ばれて一体どうなることか。大半の人々は家族がどこにいるのかまったく分からないほどに、私たちはあちこちへ運ばれるのだ。

ラージング - フォッカー

1943年12月12日

夫のルーから葉書、3回目、20語。依然同じ住所でジャワXで、またも非常に機密だが、第10大隊を意味するようだ。兄のブラムからストリウス収容所発、25語の葉書が。現在は、死亡通知も届く。そのうち幾人かの男性は6月に亡くなった、それもジャワで！娘のカロリーンの友

達の父親の場合は、8月にはここで彼の誕生日を祝ったのだ。女性たちに何ヶ月も知らせがなかったとは、まったくひどい、ひどい！

シスター・ロザリンデ

1943年12月14日

昨夜、一瞬恐怖を抱かせたことが、今に私に振りかかった。収容所リーダーのウィリンヘ夫人は、私たちがクリスマスのために予行練習をしていたところに突然入ってきて、私の前にまっすぐに歩み寄った。「あなたはカロルスのマザーではありませんか？」「そうです」と私は言った。「それでしたら、明日あなたはケンペイタイのところへ行ってください」ケンペイという言葉はすべての人にとって恐怖なのだ。なぜなら、殴打されずにはほとんど誰もそこから去ることができないから。私は初め彼女を啞然として見ていたが、その時彼女はすぐにも言った。「何ともないですよ、マザー。ケンペイのところ、居住区の外にいるあなたのお仲間のシスターのうちのひとりと話しする許可を与えられたのです。彼女はケンペイタイで働く日本人から解雇されたのです」。

私は、シスター・フェルナンデとしばらく話ができて、印人のシスターやシスター・ヒルデとゲントラムがどうしているか聞けるのをうれしく思った。でも次の日に迎えが来るまで待たなければならなかった。シスターたちの恐怖におののく顔つきをお見せしたかった。でもこれが本当ならばですが。あなたがお戻りになりさえすれば。私たちがあなたのためにお祈りしましょう。その勇気をお持ちですか？などと。そこで私は早々と良心を探ったが、残念ながら、そこにはすでに罪状があげられていた。しかしながら、実際には知らされていない。つまり、敵に対して罪となることをしたことがない人は、オランダ人ではないのであろう。でも私は怖くなかったし、殴打に対しても。あそこではたくさんの人々が拷問にあったが、それを乗り切ったのだから、怖くない。

その夜はぐっすり眠れた。そして翌朝の10時半頃に警官が私に正門へ来るようにと言った。私の赤い腕章をつけて（私は敵性人として外ではこれが必要だった）、ケンペイタイに出頭しなければならないひとりの婦人とともに日本人収容所長コンドーの家へ向かった。案内状を持って、私たち（ひとりの婦人と私）は、警官に同行されてケンペイタイへ行った。そこに到着すると、私たちは監視の前で深くお辞儀をさせられて中に入った。どんなにか多くの人たちが罪なくここで苦しんだのかと思うと身震いしてくる。

ケンペイタイ長のコバヤシが笑いながら私たちを迎えた。そこにシスター・フェルナンデとシスター・ヒルデが立っていた。私たちは再会できて何とうれしかったことか。シスター・フェルナンデがコバヤシに尋ねた。「ボレ・ビチャラ・オランダ？—オランダ語を話してもいいですか？」彼はよろしいとうなずき、私たちはあれやこれやと話した。クラマツト収容所の様子はどうか？私たちの出発以来、何も音沙汰なかったのだから。グロゴール収容所はどうか？病人は？

あなたたちのところ、そしてふたつの病院の様子は？

20分後にコバヤシが戻り、私たちは別れを告げた。シスター・フェルナンデは、再び非常に罪ある行為をして、分厚い手紙を私のポケットに押し込んだのだ。まあ大変。私はどこもかも、上も下も注意して見回した。このことを、まさにライオンの巣の中でだ。でも、たくさんのニュースをもらってうれしかった。マザー・コルン、リオベン、アグネレがオランダ人のシスター全員とともにスマランの収容所にいることも分かった。どんな様子で収容されているのだろうか？当然ほとんど何も持って行かれなかった。ベッドもだが、これは幸い私たちにはまだあるのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1943年12月15日

夫のウイルからまた葉書が。

ベルフ

1943年12月16日

お父さんはまだ、あるいは、再びストリウス収容所にいる。

ワイヘンケ

1943年12月18日

ズスのことが非常に心配です。バンドンではとてもひどい状況だ&ここでは言われていますし、あの非常に神経質なヤンスはどう振舞っているのかしら。ズスはお金もなく、病気の子供たちとひどい食事であるのに、何の手助けをする方法がないのです。時々私はどうしたらいいのか分かりません。比較的、ここの私たちは良好な状況にあります。私たちのところは模範的な収容所で、欧州人との人間関係もバンドンよりもっと良いらしいのです。

シスター・ロザリンデ

1943年12月24日

妻たちは捕虜の夫に便りすることが許されているが、書くことが許されている文章は指定されて

いる。私たちも各自が葉書1枚書くことを許されていて、各地の収容所に捕らわれている仲間のシスター宛に行くことになる。

シスター・ロザリンデ

1944年1月1日

私たちはいろいろなところに葉書を書いた。そう、教え込まれた文面でだが、少しでも私たちのことを知ることができよう。生きている証。

シスター・ロザリンデ

1944年1月8日

あるひとりの婦人が居住区に来て、うれしいことに私宛のモンセニユール・ウィレケンスからの伝言を受けた。「Luctor et emergo! (闘え、そして勝利を)」私はこれを理解した。さらに「私は何度かマザー・イボンネの訪問を受けた」「Het daget in 't oosten (東方に朝日は昇りて)」¹⁷⁹ — これも理解できたと思う。モンセニユールはいつも用心深い。バンドンのP. デ・ベッカーがスカミスキン刑務所¹⁸⁰で亡くなったという知らせも入った。お気の毒。まだとても若いのに。ポゴールでは、「ベルギー人」P. デ・リッターが強制収容された。つまりベルギー人もすでに捕まったのだ。およそ80歳の老マザー・ルトガルデもクラマツト収容所に。大聖堂では、深夜ミサにオランダ人以外の1300人以上の人々が訪れた。何とすばらしいこと。モンセニユールは印人と原住民に関しては満足なさっている。

ランジグ - フォッカー

1944年1月9日

私たちは葉書を1枚書くことを許された。父親、夫、息子宛だけで、25語で、それように決められたマレー語の文章だけを使って！それでも、私は夫のルーにお金がもうもらえないと知らせることができた。¹⁸¹分かればの話だけれども！死亡の通知は書いてもいいので、「モンイェト・

¹⁷⁹ 彼の暗号文および聖歌「Het daget in het oosten」を引用することにより、モンセニユール・ウィレケンスは連合国軍が有利な戦況にあることを伝えた。

¹⁸⁰ スカミスキン刑務所は、バンドンの東方約8キロ離れたフローテ・ポスト通り沿いに所在した。ここには主に高級官吏が強制収容されていた。

¹⁸¹ 「食糧及び物資事情」1944年1月9日参照。

スダー・メニンガル! [サルが死んだ]」と書いた。私たちは以前給料のことをいつも「サル」と呼んでいた。…中略…

ブラムから葉書を（1943年12月12日に）もらったが、兄弟へは返事を出すことは許されない。

シスター・ロザリンデ

1944年1月10日

わー、クラマツト収容所から初めての生きている証。マザー・デシデーラが葉書をお書きになり（いつもマレー語）、幸いにもお元気ようだ。

ワイヘンケ

1944年1月19日

最近、4人の女性が正門のところに立っていました。彼女たちは、他の8人と一緒にバーのホステスになるためにバンドンからここにやって来ました。彼女たちの様子から、「当局者用」の売春宿に来たのです。その4人は断られ、彼女たちの子供たちとともにグロゴールへ送られました。そこでは、子供たちが百日ぜきだったので、彼女たちは認められませんでした。それからは、場所がないチデンへと向けられ、最終的にはこのかわいそうな人たちはクラマツトへ行きました。本当に強烈な女性たちでした。また、彼女たちがそのことをしなかったので良かったです。1月12日には、バンドンですすでにお金が取上げられました。そこの調理場はまずまずで、12歳以上の少年は全員8月に捕虜にされました。

シスター・ロザリンデ

1944年1月31日

私たちは正門のところで外にいる仲間のシスターふたりと話す機会を再び逃した。シスター・ヒルデとマザー・フェルナンデが正門にいらしたが、私は彼女たちと話す機会をもらえなかった。ふたりの警官が私たちの間に立ち、彼女たちは去るべきこと、私たちは言葉を交わしてはならないことを命令した。彼女たちは本当は病院用に保育器を持って来なければならなかったが、赤ちゃんを居住区に取りに来るようにと電話口で理解してしまった。

シスター・ロザリンデ

1944年2月10日

私たちの居住区の病院で、(摂理修道会の)シスター・ザヴェリウスがお亡くなりになって、この修道会では、東インドで最初に死亡したシスターである。彼女は5ヶ月間ものすごく苦しみ、最後の何週間は、とても死を望んでおられた。埋葬のために、マザー・テレスフォーラとともに同僚をふたり伴うことが許されていて、そうするとこれは管区長のマザーと私になるはずだ。思いがけない幸運だ。なぜならば、私たちが同行することをコンドーが了承したら、こっそりと仲間のシスターたちの家へ寄って話しをする約束をすでにしていたからだ。きっと彼女たちは喜ぶにちがいない。

シスター・ロザリンデ

1944年2月12日

刑務所での儀式はとてもすばらしかった。霊安室から遺体を「デ・プロフィデイス」を歌いながら運び出し、「デ・スプベニーテ」で教会の敷居を通過し、そのあと免罪のお祈りが行われた。私たちの聖歌隊が「イン・パラディスム」を歌い、シスター全員が黙祷しながら居住区の正門まで棺台に続いた。私たちマザーとフレールアッカース神父は墓地へ向かった。墓地には、マザー・フェルナンデとシスター・グントラムがいらした。私たちは了解のまなごしを交わしたが、話すことは敢えてしなかった。まず、棺持ちが去らなければならなかったし、どこかに裏切り者が隠れているかも知れないから。マザー・フェルナンデは手紙を持ってて私に合図した。「ちょっと待ってください」の意味を私は彼女に示した。

全員が去った時、私は「非番なので、ジャワ時間の4時まであなたたちにお供します」と言った。何と楽しかったこと！マザー・テレスフォーラはクラマットの聖フィンセンティウス¹⁸²まで同行なさった。修道院管区長は、ノールトワイクとポスト通りへ向かい、私は仲間のシスターたちがまだ働いているクラマットの元の聖フランシスカスハウスへ行った。そこへ到着すると、すぐにもシスターや看護婦が私を迎えてくださった。しばしの再会はうれしかったけれど、長くは続かなかった。4時に、私は収容所に戻っていなければならなかった。良い知らせを聞いた訳ではないが、うれしかった。マザー・フェルナンデは、たくさん心配事がおありだ。なぜならば3つの病院は全て破産寸前だから。ニッポンナーはカロルス病院を手放したいようだ。彼らはシスターがその調理場、リネン室、洗濯場、手術室などを監督するために、再び働きに来る必要があると考えているのだ。彼らは退散するのだろうか？これが本当ならいいのだが！

¹⁸² これはクラマットにあった少年収容所。(尚、バダラ・チナ通りの少女用収容所マスター・コルネリウスと混同なきこと)脚注43参照。

そこで、POP¹⁸³は、その中にポビン病院が加わったようで、もうお金がなく、POP運営部は自治体に引き継がせようと望んでいる。もしこれが実施されたら、私は仲間のシスターが解雇されてしまうか心配だ。私たちは一体どこへ行くのだろうか？

ヘンケス - ライスダイク

1944年2月19日

再び、男性たちを乗せた列車が通過しました。ストリウス収容所とアデッキがなくなったと言われています。

シスター・ロザリンデ

1944年4月1日

シスター・リシニアは再びクラマツト居住区へ出発なさった。ソネイ所長が専用車で彼女を同乗させて行った。彼女は私たちの小屋に立ち寄ったけれど、彼女たちの居住区のほうがもっと良いと思っている。私たちは互いにたくさんの挨拶を持たせ、手紙は危険すぎるのでやめた。

シスター・ロザリンデ

1944年4月21日

シスター・オディリアはふたりのご老人をクラマツト居住区、つまりマザー・デシデーラがいらっしやる場所へ移さなければならなかった。彼女は夜中の1時になってトラックで発つことができた。クラマツトに到着すると、ヤップと警官が正門のところに残った。そしてシスター・オディリアは患者を中に連れて行くために一緒に中に入っていいかと尋ねたが、もちろん仲間のシスターのうち誰かに会えることを願って。恐ろしい思いで一緒に歩いていると、途中で彼女は看護婦に「仲間のシスターのところへ寄れますか？」と言った。それから彼女は急いでその方面へ向かうと、マザー・デシデーラと呼んだアグネス夫人にちょうどばったり会った。即座に言葉を交わしたあと、彼女は再び急いで正門へ向かった。中には何人かの日本兵と警官がいるトラックで帰路を。運転手はもう少しで監視所にぶつかって倒すところだったが、やっと夜2時半に帰宅した。

¹⁸³ 脚注 24 参照。

シスター・ロザリンデ

1944年5月4日

昨晩は、チャルダ・ファン・スタルケンボルフ - スタハウアー夫人¹⁸⁴ が私たちのところへ訪問に来られた。とてもなごやかな夕べだった。総督夫人は、お嬢さんとともに収容された4個所の刑務所で体験なされたことを全て語られた。タンゲランではまさしく飢えに苦しんだ。夫人は、飢えて泣き叫ぶ英国人の幼い子供たちに幾度も彼女のお皿から分け与えた。それから、一口の食べ物が分配された。これ以外なかった。夫人は粗い木の板のベッドがある独房に、...たくさんの南京虫と。すべて自分で掃除しなければならなかったのだ。以前は、ドアの上に付いている名札や名前から察して男子が収容されていたようだ。チャルダ夫人の独房には牧師が入っていた。ティネケの独房には、ファン・スハルクワイク神父。

マザー・ジェラルディーネと私は、チャルダ夫人を家までお送りした。着くと夫人は私たちに彼女のパビリオンを見せてくださり、総督の何枚かのスナップ写真も。彼はダークスーツを着ていた。彼がどこにいるのか分からないらしい。本当に台湾なのか、それとも彼はやっぱりジャワにか？

シスター・ロザリンデ

1944年5月19日

収容所全体にすばらしい不意打ちが。初めて外国から小包。ワー、すばらしい。誰もが有頂天だった。アメリカが赤十字社を通して私たちに送ったのである。ここの少年たちが正門へ行かなければならなかった。木箱は、すべて平等に分けなければならない班長へ渡された。その中身には：チーズ、バター、コーンビーフ、ハムエッグ、粉スープ、コーヒー、角砂糖、ビタミン剤、チョコレート、大量の薬品と包帯類。ワー、何と豪華な！医師たちはちょうど必要であった、セラ・プロントシル¹⁸⁵などに大喜び。アメリカデーを何日か実施すると管区長はおっしゃった。特に降臨祭には祭事がある。当然これもせいぜい一回か二回のこと。なぜならばたくさんの人々や収容所と一緒に分けたらすぐなくなるから。

¹⁸⁴ 彼女は、1944年4月7日に、娘ティネケとともにタンゲランからチデンに到着した。脚注27参照。

¹⁸⁵ プロントシル (prontosil) は、サルファミドクリソイジンを成分とした抗菌剤の商品名。ここでは血清状のプロントシルであったため、その注射液とおもわれる。

シスター・ロザリンデ

1944年6月16日

シスター・バレンティナーがいらして、腎臓結石で病院に入院なさった。彼女は私たちに「ニッポンの専用車と同乗のカロルスのシスター」と告げにいらした。私はすぐに病院へ行った。クラマツト収容所のこと、マザー・デシデーラについて何か知れるのがうれしかった。彼女はお元気だが、ことのほか忙しすぎるようだ。レンチェス医師はすでにチデン収容所からシスターをと要求したが、所長は、自分たちで何とかするようにと言った。6千人いるチデンは、1500人のクラマツト以上に看護婦をどうしても必要としているのである。

シスター・ロザリンデ

1944年7月1日

赤痢が流行し始めているとグロゴールからの報告。あそこでは何とひんぱんに伝染病が発生するのか。新しい下水設備が原因であることはまず確かだ。仲間のシスターたちは大忙しにちがいない。ソネイは私たちをそこへ行かせないのである。というのは、クラマツトでも同様に要求したけれども、許可を得ることができなかったからである。ソネイは、この収容所にはたくさんの方がいるのだから看護婦不足になってはならないと（もっともなことだが）言ったのである。クラマツトには1500人、グロゴールには800人から900人、そしてここには約6000人が収容されている。だが、その800人のうち500人が病気がらしいし、これは大変なことだ。すぐにフェルハールト医師とひとりの分析家がそこへ送られた。私たちはその報告に大変興味がある。ああ、10分もお互いに離れていると、お互いのことについて外国にいるかのように何も知ることがないのである。収容所は密閉されていて、敢えてゲデック[竹で編んだ柵]の近くに行くことはしない。ニッポンは、なぜかと問うだけだし、...そして、監禁されることもありえる。

シスター・ロザリンデ

1944年7月5日

私たちは、教皇¹⁸⁶から靴（笑うなかれ）をいただいた。つまり、神なる父が東インドの被抑留者へ送金なさり、ジャワの収容所でもその一部をもらえるのだ。だが非常に少ない。そこで、靴を全然持っていない人々がもらえるように、チャンスを得るためくじ引きに加わる。82人いる私

¹⁸⁶ 1944年7月初旬に届いた靴の送達には、主に子供用の靴が入っていた。これにかかわる費用はオランダ政府から出ており、パチカンを介して現地に配送された。(Van Velden, 161)

たちのコンビネーションのふたりが1足持っており、要するに教皇の靴を履いている。我らオランダ人の子供たちが、まるで原住民と同じように裸足で歩かなければならないことを、ヤップはやはり少しばかりかわいそうと思っている。木のサンダルで歩くことは、大人や私たちの多くもすでに行っているが、子供たちにはとても難しいのだ。いかにこの靴で耐えるべきなのか？シスター・フェルナンデが完全に収容所が閉鎖される直前に、かなり多くの白い靴を私たちのところに送ってくださったのでとてもうれしい。

ヘンケス - ライスダイク

1944年8月9日

4月にはまだオーストラリアに住んでいたふたりの女性は現在はここにいます。彼女たちはいかなることもしゃべることを禁じられていますし、魚雷攻撃を受けてここへ連れて来られたのです。

シスター・ロザリンデ

1944年10月17日

シスター・グントラムとシスター・イエスアルデが正門のところにいらした。ああ、収容所の外のほうが私たちよりもっとひどいと感じる。彼女たちは無駄な心配をしている。シスター・グントラムはすぐにも涙じみた。そこで私は、「あなたたちはそんなに心配する必要はないのですよ。本当に」と大声で言った。警官はとても残酷であった。彼女たちが病院から連れて来た幼い子供を、実の母親でさえ受け入れることを許さなかった。あとで私たちがそこに行くと、神のご恩寵もあって許された。私は彼女たちにオランダ語で話すことを禁じられ、彼は怒ってマレー語で私に言った。「普通(?)に話せ。インドネシア語を話せ、その子供のことだけを」。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月30日

葉書が届いた。C.Q.¹⁸⁷からたくさん。

¹⁸⁷ ジャワC.Q.は、日本の管理上、チマヒ／バンドン地域における収容所を意味した。

ヘンケス - ライスダイク

1944年10月31日

オランダから 131 通の赤十字社製用紙が届く。そのうち死亡 35 件。

ヘンケス - ライスダイク

1944年11月16日

22 通の葉書が「配達不能」で戻ってきましたが、逆さまの「チャプ[スタンプ]」が押さされただけで...これは「死」を意味します！ソネイはこのような通知をできるだけ夕刻に配達させます。死亡？ ... どうして？ ... どこで？ ... いつ？これが要するにこれらの女性がもらう唯一の知らせ！...中略... グロゴールの少年たちに小包を送ることを許されました。ストリウス収容所にはバンドンからの女性が 1300 人います。このことを私たちは、一時的にここの病院に入院しているふたりの女性から聞きました。

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月13日

今日は再びマレー語の葉書をウイルに書くことを許されました。

ブールマ

1945年1月29日

私たちがここに収容されてから（1944年10月から）これまですでに亡くなった男子に関する死亡通知が少なくとも 50 通届き、毎回ひどくショックを受ける。ヘルダお婆さんが（1944年12月に）亡くなったときに、おじさんが今まで何も知らなかったのは非常にひどいし、まったく不快だ。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月10日

幾人かの女性、主に収容所運営部だが、ある軍人の妻も先週オランダへ電報を打つことを許され

た。7千人の女性につき10通なり！

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月11日

タンゲランで手術を行ったスケルテマ - ヨウストラ医師を通して、ミープ・ウィリンへに関する報告が。同じく、アニー・ファン・デル・プラスとハンス・ギーベンもそこにいますし、12月の輸送の全部がそこへ行きました！

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月4日

その合間に、事務所に二、三人の女性が戻ってきた自分の葉書のことでも立ち寄りしました。死亡を意味する逆さまのヤップのスタンプ付き（つい最近自分の夫宛に出した葉書）を...

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月23日

少年たちからのを含む郵便が届きます。その多くがバンドン収容所で父親と一緒にいます。

ブールマ

1945年5月7日

ああ、そうそう。先週ね、ハンコお兄ちゃんからハガキをもらった。彼はカップおじさんのところ¹⁸⁸にいて、彼はお父さんが元気であることを知っているけれど、彼のところには収容されていないのだ。少しでも私たちはわかったし、本当にものすごくうれしい。このことはお母さんをちよっぴり元気づけた。

¹⁸⁸ ハンコとカップ・ボッテマンネは、チマヒに強制収容されていた。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月20日

ゲデック[竹で編んだ柵]のあちらこちらで「密輸」がたくさん行われています。飢えが衣類との取引を盛んにさせているようです。

ボルハイス - スキルストラ

1945年6月23日

パピーから「マラヤ・キャンパス」発の葉書を受取った。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月24日

ウイルから葉書が。今回は「マレー」から。彼は現在、半捕虜収容所にいるらしいです。それがジャワの外であるとは、私たちは未だに信じていません。昨夜は、「taske thee (一杯の紅茶)」を「マザー」ピーターのところで飲み、フラマン語で楽しくおしゃべりしました。彼女はご主人のことを心配しています。彼女は彼から葉書をもらってないけれど、彼女の葉書はまだ戻っていません。だから彼女はまだ気力十分ですが...

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月29日

再び、男子の死亡通知が届いている (返送された自分の葉書)。こんなことで、元気付けられようか。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月1日

今日、ジャワ C.Q.から葉書が届く。

ブールマ

1945年8月2日

私たちは昨日またハンコからハガキをもらった。残念なことにパパからはない。パパからハガキを絶対にもらえない。なぜなら彼は働くことを拒否したので、罰せられていて、書くことを許されていないから。私たちがパパに書いたハガキ2通が戻ってきた。¹⁸⁹

ボルハイス - スキルストラ

1945年8月5日

息子マイントから6月5日付けの葉書を7月31日に受取った。彼からの便りがあってうれしい。オランダからは、赤十字社製用紙が：「一報を乞う」1943年ムーケより。…中略…マイントに返事を書いた。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月10日

イエッティ・ラヴェルジェはベルトの死亡通知を受取りました。「1945-4-22 死亡」と記されていました。これは、彼女が彼に送った自分の葉書でした。その他のことは彼女は何も知らないのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月14日

12日にウイルから葉書が。短く、力強く快活ですが、またも半年以上も前のです。文面は：「心身ともに良好。アンネの誕生日おめでとう。君と子供たちが元気であることを願う。君と子供たちに愛とキスを。愛をこめて ウイル」

¹⁸⁹ 彼女の父親は、1944年11月11日にすでに死亡していた。家族はこのことを1945年9月10日になって、赤十字社からの手紙により知った。

ボルハイス - スキルストラ

1945年8月16日

さらに、私たちは8月12日日曜日に「マライ・キャンパス」発のガルブランドからの葉書をも
らった。彼は、ヒールスムに住んでいるらしい父と母からの便りを受けた。撤退か？

戦況の報道と流言

ヘンケス - ライスダイク

1942年12月16日

私はたくさん読書していますし、もう私たちがラジオを持つことを許されていないのでうれしいです。どんなに小さなニュースでも、結局何んにも起こることはないのですが、私たちがことのほか喜ばせてくれるのです。

ベルフ

1943年3月19日

戦争は特にソ連では連合軍にとって有利だが、すべてのラジオが収容所から取り上げられてしまって何も聴けないし、だから当然私たちは何も知らない。

ベルフ

1943年4月5日

噂はそれでも希望にあふれ続けている。いかに人々は持ちこたえるのか！でも、インドネシア人の一部は次第にまた私たちの側に立つことになる私は信じている。要するにこれはひとつの推測だが、この収容所にいる私たちにはこのことをあまり感じられない。

ベルフ

1943年4月23日

ドイツは非常に激しく爆撃された。とっても、とっても激しく。信じられないほど強力な爆弾で。これがドイツを降参させるための手段となるようだ。まあ、いいけど、私にはこれを確かなものとして断言する勇気がないが、でも別に驚かないだろう。もう、アフリカについて話したかしら？ 1942年11月頃に、ドイツ軍がすでにエジプトに駐留していたアフリカへ米軍がフルスピードで進攻した。最初、彼らは猛スピードで進軍したのだ。というのはドイツ軍がエジプトで戦っている間に、彼らは西部から東部へ向けて進軍したからだ。その後、戦闘は安定したが、現在彼らはすでに何ヶ月にわたりチュニスを巡って戦っている。しかし、噂では、近いうちに終了すると言

われている。もちろん米軍の有利となる。私はドイツ軍がこれにもまた勝つであろうとは全然思ったことがなかった。だが、英軍は彼らに対してもとつくと降伏してもよかったのに。ソ連に関しては、2年目の冬の間にソ連でのドイツ軍は新たに信じられないほどひどく反撃された。すごく緊張させた。去年彼らは、モスクワへ至る以前に反撃され、今年はずっと南方に向けて（コーカサス山脈）戦っている。スターリングラードを巡って彼らは猛獣のように戦った。ドイツ軍はこの町の一部を手中に収めた。私たちは毎晩ラジオとっても恐ろしい思いでつけている。ヤップが言った。「モスクワの奇跡は繰り返されないであろう...」これは、まさしく繰り返されたのだ。ソ連軍は冬季攻防を開始し、ハリコフを通過してまでドイツ軍に反撃したけど、ハリコフは再びドイツ軍の手中に収まってしまった。今は冬は終わり、雪が溶けても私たちはソ連に関して何も聞かない。

ベルフ

1943年4月25日

もし、このように続くとすれば（4月25日、復活祭）、夏にはドイツ軍は攻勢中で、冬にはソ連軍が。そうしたら、一体あとどれくらい続くか私には興味あり！ここにいる私たちはもちろん主要な事実や状況などだけ、いくらかわかっているけれど、特にオランダ語放送がなくなってしまった以後は、何もわからない。（私たちはマレー語をこれからは理解できなければいけないんだ！）幸いにも、すべてがソ連だけに左右されていないのだ！ああ、ありがたい！だって、共産主義は一体どうなるのだろうか？私としては、（でも私はこれについてももちろん何もわからないけれど、また、お母さん以外には言う勇気がないが）ドイツへの爆撃に対する意義にとってもこだわっている。ドイツは、チュニスでの問題がそのまま続いているにもかかわらず、もうそんなに楽観的でなくなっている。現在はガスについてささやかれている。ドイツがソ連に対してガスを使用するらしいが、英国は、以前行われたロンドン爆撃と同様に— その10倍のし返しをする— と脅かしたのである。それで、まあ、ドイツはこれを本当に知っていて、ヒトラーはペルロー[必要]なことは何でもやりかねないと私は思っているけど、おそらく、この脅かしが、ガス使用の計画を阻止することになるかもしれない。私は、ベルリンが不毛と化された発表やシュテッティン、ケーニヒスベルク、ニュルンベルク、ライン川周辺都市が連続して爆撃されていると今朝聞いた。ハンブルグはもうすでに壊滅し、この状態だと、あと1年もきっと続かないだろう。

これは、私が本当に信頼する、信用すると呼ぶような初めてのことである。ジャワ北西部沿岸のラブハンへのいわゆる上陸についてのようなことを無意味に期待していたこともあったけれど、ここでは私は確かに感じているのだ。戦争ほどこんなに不測なことは他にはないので、もちろん断言することはできないけれども、これもあと1年も続くことはないのだ。これはドイツにとって持ちこたえられることでないし、イタリアでも彼らはまったく成果がないようだ。私は、ドイツが負けると思う。これを今私は確実に期待できるのだ。彼らは英国よりも強力であ

ったし、必要とあればソ連に対抗することもできるが、アメリカには匹敵しないのだ。だけど、ものすごいんだ。ドイツ軍にこの何年かを苦しめられて.....そして今度はその彼らが豊かな国に敗戦せざるをえないのだ！彼は正しくなかったー私にはまだ理解し得ることではないがー、だけど、私は英軍よりも彼らをもっと尊敬している。これももちろん印象でだけれども、戦後にはお父さんが私たちと一緒に成れた時には（？）、このことについて彼と話をし、この戦争についてたくさん読むつもりだ。でも爆撃はとてもおそろしい。もちろん、私たちにとっては連合軍が勝つことはペルロー[必要]だけれども...私はほかに望みようがない。ドイツの支配下では人間らしく生きることはできないし、台無しにされてしまうわ。

そのほか、オランダの撤退、オランダでの爆撃、オランダ侵攻についての噂のぼっているが...これは噂なのである。でも、エイマイデンとエイントホーフエンでは何かあったらしい。また、私は、フランスではその雰囲気非常に反抗的であること、そこではドイツ軍がとても苦戦していること、イタリアが重爆撃を受けたこと（ドイツよりひどくはないが）、スペインとバチカンがボルシェビズムに戻るために和平提案を行ったこと、...そして英国とアメリカがドイツを完全に制圧するまで戦うつもりであることを知った。こうなるとしても私は驚かない。つまり、ドイツはすべての意に反して戦い通して、国民が制圧され続け、...だが、イタリアが退いて、そして事が展開して行く。私は少しは信じるようになってきたが、お母さんはとても陰気だ。彼女は、ほかの者よりちょっとは知ってる男性たちのばかげた予言によってたびたび楽観的でした。そして、彼女は今、そんな気分になっている。まだ続くのであるが...ああ、どうでもいいわ。待つのみだ。何の変化も感じられないような、まるで灰色の霧...私は、欧州で今後5年以上も続くとは思わない。...中略...

日本との戦争とここの状況について言えば、終わりの見通しが見つからない、米軍がある日ここに不意に訪れるなんて信じられない。もしそうだとすれば、事前にわかるでしょうに。

ベルフ

1943年5月9日

チュニスが陥落したらしい。私はこのことを二方から聞いたし、疑わしい情報源からのものではない。加えて、チュニスは事実上米軍の手中にあることを最近何度も耳にした。つまり、これはすでに何週間も予期されていたために¹⁹⁰、私は信じれるんだ。そのほかすばらしいことを聞いたのだ。つまり、イタリアが降伏し、日本は枢軸から脱会し、トルコは戦争中で、バリ島付近で戦闘が。チュニスに陥落したことはすばらしい、でも、その犠牲となった戦死者のことを考えなければだが。イタリアに関しては疑がわしいが、噂からイタリアで何か起っていることは確かで、この数週間にわたって、イタリアでの和平作戦、スペインと教皇の和平提案がささやかれている

¹⁹⁰ 1943年5月に、連合軍は北アフリカ全土を征服した。

のだが…。あり得る。これが本当ならそのうちにわかるだろう。そうしたら、私たちはのところはもっと進行しているだろうが、ヨーロッパでは1年も続かない。でも、その場合ここはどう万事が変わるかわからないけれど、お父さんはいつも言っていた。「一撃を欧州は負うことになるはずだ」と、お父さんはそれをわかっているのだ。…中略…

しばらくして。バンザイ！弟のロップがスピーリング夫人の知らせをもたらした。「連合軍がイタリアへ進軍した」と。そしてフロートハイス夫人からは、「イタリアが降伏した」と。こいこれらの情報源は最上のものとは言えないけど、私は…ほとんど信じているわ。これが本当なら、…これが本当だったとしたら、そうしたらすぐにも終戦となる。多分、いや確かに1944年前にだ。まったく、まったく。彼らがドイツを南部から攻撃するときは、5月が好都合だ。そしてソ連が東部を攻撃、爆撃で、バンバンザイ！戦争が終わる。バンザイ！再び平和が訪れるのだ。本当にうれしいわ。だって、まったく惨かったんだから。あわれなドイツ軍には好都合！平和になる前まで、かわいそうな人々は何ヶ月かまだ相当つらい時期が訪れよう。なぜならば、ドイツは負けねばならないから。完全に！そして平和の後には、そしたらアメリカは豊かで、強国となる。いや、これはあまり良くないわ。アメリカが少しは嫌なことを利用することもありそうだと思うているが、これについて私が判断すべきことでない。

戦後は当然大混乱が生じよう。ドイツは壊滅し、ソ連は廃墟と化し、経済状況は…。どうなるのだろうか？すべてが楽観できるものでない。すごい。ドイツでその政権が降り、異なった状況が生じることと、欧州は少なくともその危険から守られることは当然である。でも、ソ連側からの同様な大きな危険に脅かされるのではないか？ソ連は非常に多く考慮しなければならぬ一国であることを示したし、どういうことになるやら？アメリカの贅沢品や映画の非常に悪影響を及ぼす洪水が欧州へ流れ込むことになるのだろうか？一体わが国はどうなるのだろうか？ああ、心配するのはやめよう。でも、日本との問題はどのような結果となるのだろうか？果たしてドイツ、ソ連のあとは米軍がか？彼らがこれをしないと、結果がどうなるかわからないし。でも、アメリカはしばらくの間持ちこたえることができると、私は思うわ。しかしまあ、私はそのことについてももちろん何も知らないけど。でも、そうしたらもっと長くかかる。私はすべての詳細を知りたいのだ。

ベルフ

1943年5月10日

イタリアが降伏したことは本当だ。今、あと1年以内にドイツもおしまいだ。ヒャー、私は平和になること、もう耐えられなかったことが急にまた想像できるのだ。再び学校へ行くことも。前の戦争のあとにも、すべてが再び続けられたのだ。でも、あまり楽観的でいないようにしよう。ここでこれから何が起こるかわからないから。

ベルフ

1943年5月12日

イタリアのことは本当でない。今日はキャンプデー¹⁹¹、それで、わかったのだ。もう何にも信じないことにする。

ベルフ

1943年7月14日

シシリー島で現在再び連合軍の上陸があるらしい。

ヘンケス - ライスダイク

1943年7月26日

すでに何回か停電が。時々届くマレー語の新聞「アジア・ラヤ」によると、スラバヤが爆撃されました。

ベルフ

1943年8月5日

そして、スラバヤ、アンバラワ、マランの人々がここクラマツトに来るという話が出ている。でも、私は確かなことはわからない。スラバヤの一度目は確かだし、多分何度も爆撃されたらしい。ソ連では順調だ。若干のニュースは、何人かが購読しているマレー語の新聞から依然私たちは入手している。シシリー島についてはあまり知らされていないし、ヤップはもう勝利を収めていない。

ベルフ

1943年8月31日

戦争は非常に順調に行っているようだ。東部ジャワは、かなり爆撃を受けたことがマレー語の新

¹⁹¹ 「キャンプデー」とは、水曜日と日曜日に当てられた外出日をいう。脚注 61 参照。

聞に出ていたのだが。

ベルフ

1943年9月14日

相変わらず、居住区の外から大勢の人々が入所しているので、私たちはかなりニュースをたくさん知ることができる。加えて、居住区内へは、(すぐに話したくなるような) 重大なことがのっているマレー語の新聞を入れることを許されているけど、その他の郵便物は届かない。ところで、昨晚新聞に出ていた大変喜ばしい事実：**イタリアが降伏** バンザイ！バンザイ！これは公式だ。新聞からではないけど、次のことは本当なのだ：マッカーサー元帥がニューギニアに司令部を置く！ソ連ではすばらしく行っていて、ソ連軍はフィンランド全土を占領したようだ。彼らはフィンランド北部のラップランドを侵略したことが新聞にのっていた。また、サバンは連合軍の手中に(?) ソ連と太平洋については、ニューギニアで非常に強大な軍隊が上陸したことが先週のつたあと、前の週のイタリアのことと同じようにどんな言語でも沈黙のままだ。¹⁹²まあ、すばらしいわね？ドイツが今月中に降参しなければならぬとしても、私は驚かないわ。だって、国民はたくさんの爆撃のあとは、もちろんこれ以上耐えられなくなってきているから。その他、大勢の男子がストリウス収容所から連れ出されたいが、お父さんを含む高級官吏も同様と言われている。確かなことではないけど。とてもひどいことだが、彼が台湾なんかにいるほうがもっとひどい。

ベルフ

1943年9月16日

まず、イタリアについて話そうと思うの。そうしないともう機会を逃しちゃうから。つまり、イタリアでは大混乱しているが、降伏状態にあって、その大分前からドイツの軍隊のせいであった。つまり、シシリー島での前に行われた闘争の頃であるとも思う。ドイツ軍は、ロンメルを司令官に、現在ポー平野とジェノヴァを占領している。また、ローマもドイツの手中に。というのは、この町が連合軍に委ねられたあと、近辺からのドイツの軍隊が町を包囲したためにローマがドイツ軍に降伏したのだ。これ全部は当然数日間の出来事だったし、マレー語の新聞にも書いてあった。南部には英軍も駐留しているらしいが、私にははっきりわからない。まったく大混乱しているにちがいないわ！

¹⁹² 1943年9月初旬、事実ニューギニアで連合軍上陸が決行された。(スマトラのアチェ沿岸前方の島) サバン上方で、1943年8月に空襲作戦が実施されたが、1944年4月19日になって初めてサバンは連合軍の手中に陥った。

シスター・ロザリンデ

1943年10月7日

私たちは、この一週間を監禁と解放の間近さを秒読みしながら収容所での日々をおくっている。収容所で誰かに話しかけられるととてもうれしいし、そんな時そっと尋ねられるのである。「クリスマスには出られるでしょうか？」私たちはその答えをすることはなく、「わかりませんが、平和になることを願いましょう」と言うのだ。なぜなら、これらのオランダ人女性のうちでさえスパイがたくさんいるのだから。確かに、これもニッポンの強制のもとにあるが、反ニッポンの何かを言えば大きな危険にさらされることになる。これら全ての措置は、ヤップが順調でないことを示しているし、私たちには早急の解放に対する希望を真に抱くようにさせるのだ。

ワイヘンケ

1943年10月10日

大げさな噂、「コーヒー占い」、あるいは予想のうちのひとつによると、今日「何か」かが起こるはずだ。唯一のことは、今朝の飛行機のすごい動きでした。また、「ルーズベルトが再び語り、日本に最後通牒を突き出したと言ったのでした。つまり、10月24日までに太平洋から撤退しない場合には、日本は炎と化す」—これは、いつも言われ、かつ信じられているばかりのことのまだかなり軽い例です。

ワイヘンケ

1943年10月15日

そして、私たちの頭上を狂ったように飛行機が練習しながらとんぼ返りし、私たちのゲデック[竹で編んだ柵]に沿って、兵士をぎっしり積み込んだ輸送列車が通過し、私たちの周辺では噂が飛び交っているのです。ビルマから兵士が来る、ビルマとタイは解放されている、ベンガル湾で激しい海戦、カレーとマルセイユに上陸、チャーチルが、ソ連軍はベルリンへ向けて進撃と言ったが、私たちはだれが一番か様子を見るのみ！コノエ¹⁹³が、和平交渉のために渡米したが無駄に終わる。日本に対して今後は完全に包囲する旨の10月24日までの最後通牒が突き出され、その日以後、日本はドイツと同じ運命をたどるであろう！

¹⁹³ 近衛文麿のこと。

ワイヘンケ

1943年10月16日

今ちょうど誰かが開いているカーテンを横切って（ここは窓もドアも全部が日夜開けっ放しで、1枚のカーテンだけが迎えないことを示しています）、部屋の中に入って来て言いました。「ドイツが陥落した」。本当か？私たちはほとんど反応をしめさないほどすでに鈍感になってしまいました。しかし、私はこの知らせで、今日着手しなければならない色々な雑用をするための活力を十分に取り戻したのです。…中略…昨日の昼休みに誰かがふと外を見ていたら音も発せずにとっても高いところに60機もの飛行機を目撃しました。

ベルフ

1943年10月17日

戦争についての噂はとてもすばらしい、特にソ連のはだ。私はワルシャワが占領されたと聞いたが？そして、カレーとマルセイユとダンツィヒ。また、今日、収容所の外で放送しているマレー語のラジオでドイツが降伏したことを知った。ドイツはこのところ大分ひどく爆撃されたいらしい。カレーとマルセイユの占領についてはずっと前から聞いていた。ソ連がワルシャワに駐留していることが本当ならば、これも可能だが？秋と冬はソ連にとって有利な時期なんだ。なぜだか私はとても知りたいけど。ソ連の軍隊がどう配属されていたか、彼らがどんな手段を利用したかをだ。その勝利は、まず第一にソ連、第二にアメリカの非常に強力な手段のおかげだと私は信じている。アフリカへ侵攻が始まった。

みじめなドイツよ。ここももう終わることを望むだけだわ。私たちはまだ餓死の危険はまだない...ここバタビアでの話だが。バンドンの収容所では、また、人々が「ラパー[飢餓]」におちいつているとクワット[鉄条網]のあちこちで言われてるし、アンバラワでは収容所で多数の欧州人の子供が死んでいくのだ。この私たちはまだ良好、まったくまだ良好。私たちは寝床と食べ物と衣服がある限り不平なんて言うてはならないのだ。ヨーロッパでは状況がもっと悪い。神様はぜいたくさをきびしく、とてもきびしく罰する。

ワイヘンケ

1943年10月21日

噂、そして噂。ものすごい。ある婦人は、今この居住区で丁寧に優しく言いました。「戦争は収容所内のほうが外よりもっと好調だ」と。…中略…今朝、タンゲラン方面へ白人女性たちでぎっしり詰った列車が通り過ぎました。ニップはいなく、警官の見張りだけ。両側から激しく手が振

られました。びっくり、まるでいなずまのように。彼女たちはどこから？誰かしら？¹⁹⁴すでに2度も鈍いボンという音を聞き、そのあと、はっきりとクマヨラン空港上からとわかる炎ともくもくと立ち込める煙が。このようなことだけでも、ますます感情を高めさせます。

ワイヘンケ

1943年11月11日

いつも夕方に、遠くで不可解な「ボン」という音がします。これは、ドア、溝を渡る人々、雷雨、または爆撃の可能性があります。私たちはこの最後のことを願っています。特に一昨日9日の夜には、空襲警報があったのです。キエフは陥落し（極秘）、スラバヤは再度爆撃されました。このところすべてが興奮させますが、ブーゲンビル島での敗戦は(私たちにとって)まず確かです。新聞はあまりにも意気揚々としてますが、**少しは**、本当であるに違いありません。また、連合軍が14ヶ月前からソロモン諸島で戦闘を開始し、その後ブーゲンビル島で敗戦に到らしめたことを考えると、これは苦い、気分を悪くする不正な話ですが、私たちはまさしく「何か」に向かっているのですが、それだけで何も起こらないのです。本当でないことも当然であり、みじめな話となりますが、ここは困難な状況にあり、人々は神経をとがらせているのです。お決まりの言葉：神経は大分まいっている、…中略… 結びに冗談を。あるひとりの婦人が言った。「私たちは解放されたが、収容所の私たちはまだそれを知らないのだ」。ほかの人は、「それが分かってうれしいわ。私の主人が正門のところに来たら、“行ってちょうだい。あなたは噂よ！” と言うわ」

ワイヘンケ

1943年11月15日

昨晩は、突然全部の外灯を消さなければなりませんでした。大きな興奮と緊張が、結局スラバヤは2、3回も続けて爆撃されました。そのほか何もし。ああ、いやだ。一体私たちは「何に」向かっているのでしょうか。この状況はとってもひどくなり、最もひどいことは、私たちは実際にはまだとても快調に暮らしていることです。

¹⁹⁴ 1943年末、タンゲランに強制収容された米国人、英国人、ユダヤ人の女性たちの一部とおもわれる。

ベルフ

1943年11月18日

昨夜は初めて空襲警戒警報があった。空襲警報は前にも一度あったが。でも今度は本当に大まじめにサイレンが鳴ったのだ。スラバヤはこの10日間に2回も爆撃された。

ワイヘンケ

1943年11月18日

昨夜にまた警報が。2時5分前に私たちはサイレンを聞き、2時15分に飛行機が1機、そして私たちの少年たち（私たち専用の夜警）と警官がすべての明かりを消すようにと大声を立てて走り回っていました。

シスター・ロザリンデ

1943年11月18日

びっくりさせられることだった。ええ、そう言っても良いでしょう。なぜなら、皆が解放を切に待ち望んでいるからだ。空襲警報があつて、私たちは初めてサイレンを聞いた。本当にあつたのかどうか私たちには分からない。

シスター・ロザリンデ

1943年11月19日

スラバヤが爆撃されると、マレー語の新聞に出ていることが話されている。新聞はこれに関してその怒りを示している。なぜなら、「米軍はめくらの豚のように爆弾を投下した」と出ているから。新聞が言いたいのは、手荒い方法でということだが、本当でないに違いない。

シスター・ロザリンデ

1943年11月20日

さて、飛行機がないか再び空を観察しよう。胸内に再び希望あり。

シスター・ロザリンデ

1943年11月21日

再び爆撃が：今回は、ソロ、マディウン、ボジョネゴロそして他に1箇所。

シスター・ロザリンデ

1943年11月30日

あちこちでの爆撃について耳にするが、一体信じていいものだろうか。ケンペイタイに見つかる危険をもともしなで、情報を持ち込む人々が相変わらずいる。

シスター・ロザリンデ

1943年12月1日

「小アデッキ」にいる老紳士のひとは、収容所の外にいる彼の妻と、何か良い知らせがある時は小包を付けるために（この場合の小包は許されている）、一本の針金にひもを結ぶことを約束した。非常にスリルに富んだ知らせがある時は、一本の白いリボンをそれに付けるのである。事実、彼は白いリボンの付いた小包を受取った。希望に一番乏しい情報についても人々は楽観的であるが、長い間静かであったり、外から良いことを何も聞かないと意気消沈してしまう。人々は解放を切望している。ゲデッキ[竹で編んだ柵]と鉄条網の裏に閉じ込められていることは、とてもつらくもある。だが、一体オランダではどうなのだろうか。**何んにも**私たちは耳にしない。餓死するのではないかととても心配だ。ここの私たちは相変わらず良好であるのは、感謝せずにはいられない。

シスター・ロザリンデ

1943年12月3日

新しい情報がもう入らない。ヤップはその方がもっと望ましいと思っているらしい。

ランジング - フォッカー

1943年12月12日

年の終わりに近づきしも、未だに解放の見通しなし。去年のクリスマスには、「まあ、いいや。来年のクリスマスにはきっと変わっているでしょう！」と私たちは言った。そう皆が確信していた。さて、今では何人かは言っている。「1944年のクリスマスにも私たちは多分ここにいるだろう」。私たちは何も知らない。日本軍のすばらしい成功をナイーブに列挙するマレー語の新聞からの嘘だけだ。つまり、彼らは決して撃退されることがない、1機も負けず、敵のすべての攻撃を成功のうちに退ける。

でも、その行間に少しのことでも知れる。日本の南東にある群島は着々と連合軍に占領されており、恐らく包囲作戦が。東部ジャワが爆撃される：11月10日、12日、そして18日の重爆撃のあと、私たちは何も耳にしない。再攻撃を彼らは秘密にしているのか、それとも何事も起こらないのか？

ヘンケス - ライスダイク

1943年12月15日

「アジア・ラヤ」新聞は、未だにほとんど毎日届きます。

シスター・ロザリンデ

1943年12月22日

米軍の飛行機が飛来したらしい。私たちは突如呼ぶ声を聞いた。「ジャガ・オラン・ブランダ・ペルンプアン。—オランダ女性に気をつけろ！」一瞬ぞっとした。原住民が何をするか決して分からないから。

ランジング - フォッカー

1944年1月9日

まずはちょっと、一年前に私が書いたことを読み直した。やれやれ！それでは、一体今年は！...??? しかし、私たちはもう期待を何も表さないでいるし、表す勇気ももうないのだ。彼らは、現在では私たちを情報からほぼ完全に遮断することに成功した。入って来た情報に対しても、ほとんどいつも否定されてしまう。誰もが「もう何も信じない」という気持ちである。マレー語

の新聞「アジア・ラヤ」だけは毎日届き、原住民でさえも我慢することができないほど明白な嘘を並び立てている。紙上では、行間から読みとって出来事の一応の推移だけを理解することができる。米国と英国に対するたくさんのののしり。

ランジグ - フォッカー

1944年1月18日

時間が速く過ぎていく、でも大変ゆっくりと！ほとんど何も起こらないし、少なくとも、私たちに解放が間近にあることが感じられない。一体全体いつ終わるのだろう？ 6月、あるいはもっとあとになってか？多分11月、12月？ 1943年には戦争が終わるはずだったし、このことは決定的な事実であって、最も懐疑的な人もこれを疑っていなかったのだ。とても驚くべき 1500年頃のノストラダムス¹⁹⁵の予言がある。予言によると：ヒトラーは二人の部下とともにライン川に投じられ、ムッソリーニは教会の階段の上で暗殺される。それなら、早いほうがいいのに。フランスは1944年に再び君主を置く。この書物はすべての予言やトランプ占いと同じように厳しく禁じられている。欧州ではめちゃくちゃに混乱しており、やっとのことで実際に侵攻が予想されていることを新聞さえも認めている。ナルヴィクからスペインまで、西岸はドイツ軍により強化され、連合軍の攻撃はきっと反撃されるであろうと、新聞は書いている。もうやらせてあげて！

ヘンケス - ライスダイク

1944年1月26日

新聞によると、ローマの北方30キロで英軍と米軍の上陸が。東京は、戦争における勝利と敗北は「一髪之差」であると語った。

ワイヘンケ

1944年2月16日

ひとりの警官が月曜日（2月14日）の家宅捜査の際に、ある婦人のところで、「4月、自由に、4月、自由に」とつぶやいたと噂がのぼっています。

¹⁹⁵ ユダヤ系フランス人医師、予言者、占星術師ノストラダムスの予言は、第二次世界大戦中に非常に評判となった。彼の予言は、さまざまの解釈が可能で、彼は以前まったく行ったことのないことを起こり得ることとして予言している。

ヘンケス - ライスダイク

1944年2月19日

マーシャル諸島に上陸、エストニアにソ連が。また、「国民参議会」¹⁹⁶は、非常に重要な新聞の埋め草です。

シスター・ロザリンデ

1944年3月5日

2年前にバタビアは、市長の「市民の皆様、戦略的検討によりバタビア市を明け渡す結果となった」¹⁹⁷の言葉とともに降伏した。2年あとも私たちが収容所の中に閉じ込められていることを誰が一体想像できたでしょう。外では激しく争そわれているが、幸いにも、私たちはそれを行う必要がないのだ。

私たちは、町風景を目にすることに不慣れとなっている。周囲にまったく一人の原住民も見ないことや、マレー語を一言も聞くことがないのは、私たちにとって大変奇妙なことだ。私たちは、何も聞かないし、何も知らない。全然信用できないような時たまこっそり入る情報以外はだ。時には一日中、本当にたくさん飛び交っている。そしてお互いに、「あら、大変だ」と言い合うのだが、その数日後になっても何にも起こらないし、再び全てがとても静まりかえる。でも、「ムスフ[敵]」（私たちも属する連合軍のこと）は、太平洋へ進撃するはずだ。でもどこへ？私たちの地域に向けてか？それとも日本へ？最後通牒が突き出されたいが、これまで何度もあったことだ。私たちが何も感知できないのだから、どうにもなりやしない。

ヘンケス - ライスダイク

1944年4月7日

もうマレー語の新聞は届きませんが、時々ニッポン・ウィークリー「ザ・ボイス・オブ・ニッポン」¹⁹⁸だけがきます。そのまま読める新聞を手にするのは気楽です。

¹⁹⁶ ここでは、国民の大多数を日本の戦争協力に転化させる措置を協議するために1944年1月末に開催された2回目の「中央参議会」会議を意味するものとおもわれる。(L. de Jong, 11b, tweede helft, 931)

¹⁹⁷ 市民を憂慮して、バタビアは「解放都市」として宣言された。蘭印軍はそのためバタビア地方自治区内では戦闘しなかった。

¹⁹⁸ 被抑留者A.F.D. Brodie, J.H. Ritman及びA. Zimmermanによりバタビアで編集された英文の日本のプロパガンダ新聞。(L.F. Jansen, *Indezehalve gevangenis. Dagboek van mr dr L.F. Jansen, Batavia/Djakarta 1942 - 1945*. G. Knaap(ed.), (Franeker 1988) 286)

シスター・ロザリンデ

1944年4月11日

新聞（私たちは現在英文の週刊紙「ザ・ボイス・オブ・ニッポン」をもらっている）は、聖なる父が私たちの戦争捕虜に対してお金を送ったと書いている。私は、彼らがこれを受取れること、または少なくともその恩恵に授かれることを望んでいる。

シスター・ロザリンデ

1944年4月20日

ものすごい噂が広まっている。少し前まで副班長をしていた、ある教授の妻であるひとりの婦人が、私たちは解放されたとの大きな喜びを1軒ごとに話している。彼女は、ニッポンの大本営にすでに用意されている布告文を見たときと言った。収容所全体がこれをほとんど信じている。そんなことありえようか。また、ある警官が上着の下に白いハンカチをひとりの少女に見せ、12日間以内にすべてのニョニャ[女性]が解放されると言ったとも語られている。いや、そう簡単には信じられないし、特に原住民は誰も。人々は、収容所を出るためにドレスとか何かをすでに用意しておきたがっている。また、そのために靴までしまっている。

シスター・ロザリンデ

1944年4月21日

新たな興奮！国旗が取り上げられ、至る所、特にゲデック[竹で編んだ柵]に沿って照明が設置される。新しい監視所もだ。何と私たちはみごとに見張りされ保護されているものか。人々は言っている。「オランダ国旗が収容所の隅々に付く」...??

シスター・ロザリンデ

1944年4月23日

ペンダフタレン[登録カード]の提出！そう、それで私たちは支払ったことを示すことがもうできないし、日本政府に従った証明もない。収容所の住人は結論を下す。今日の朝は、正門でホルマツト[敬意]を表す必要がなかった。全く奇妙。「ほらごらんなさい。私たちはもう日本人の家来ではないのだ」と、女性たちは言っている。人々にとり何と緊張することか。私たちはただ最も賢明な側に立って、ゆっくり様子を見ることにしよう。

シスター・ロザリンデ

1944年4月28日

私たちが自由にされるという噂がしつこく漂っているが、平和にはならないだろう。ヤップは中国との戦争に一層集中するために南太平洋を手放さねばならないと言われている。自由になり、捕らわれの身でなくなる。素晴らしいことだが、...信じられるのかしら？

シスター・ロザリンデ

1944年5月1日

人々はますます早急の解放を望むようになる。スカルノ、ラティプ、そしてかのモハマッド・N¹⁹⁹がアンボン人の警官に殺されたことは本当であるかもしれない。彼らは大いなる扇動者であった。

シスター・ロザリンデ

1944年5月3日

艦隊が航行中だ。外領²⁰⁰の占領に対しニューギニアのメラウケからと、ジャワに向けてはパースル（パース？）から出港した。本当か？まだ確かに信じる気にはなれない。ファン・モーク副総督がラジオで演説し、月末には全てが終了すると語ったらしい。

ランジング - フォッカー

1944年5月6日

このチデン強制収容所は、私たちが一度は体験させられるべき奇妙な精神病の犠牲にこの何週間というものになっています。「私たちは解放されたけど、それをまだ知らされていないのだ！」と、これはスローガンだ。ものすごい噂が広まっている。私たちのうちの過半数がそれを信じており、他の半数は敢えて信じることはせずただ望んでいる。それは本当であることに絶対間違いないとしている人もいる。ニッポンと米国との交渉は、戦線を縮小するために私たちとフィリピンを放棄する結論に至った。戦争は決着がつくまで続く予定だ。月末前に私たちはここから出なければ

¹⁹⁹ これは、1950年9月から1951年3月まで首相を務めたモハマッド・ナチールのイスラム名とおもわれる。

²⁰⁰ オランダ領東インドにおけるジャワ及びマドゥラを除いた地域を指す。

ならず、私たちは150名のグループになって行く。欧州人の住宅はすでに修繕されおり、原住民はそこから出なければならぬ。国旗は収容所事務所に用意されている。布告はおかしい。(あるいは、私たち全員が!) これは、ともかく5月6日、10日、17日またはそれ以降に私たちは知ることができる... ホテル経営者と大邸宅所有者はソネイのところに呼ばれ、何名宿泊させることができるか尋ねられた。あーあ、こんな噂に気が狂ってしまう。これは本当のことと書いてある紙切れがゲデック[竹で編んだ柵]の上にも下にも何十枚と散らばっていると... でも、私自身その証拠となるものは何にも見たこともないわ!

シスター・ロザリンデ

1944年5月10日

私たちは何の変化も認めていない。あちこちで爆撃されたと言われているが、私たちは何も見聞きしないし、それを信じることもない。また、人々はゲデック[竹で編んだ柵]越しに、私たちは解放され、ヤップが撤退すると明記されている紙切れをもらったとも言っている。私たちには信じられない。

ランジグ - フォッカー

1944年5月15日

「私たちは解放されたけど、それをまだ知らされていないのだ!」という噂が未だに漂い続けている。その都度違う日付で、私たちがそれを知らされるはずの最初は5月5日、そして10日、今は明日か明後日のようだが... 噂は漂い続け、これはいつもゲデック[竹で編んだ柵]越しに舞い込む紙切れにより確認されるのだ。ソネイは、「私が去るときは...」などと述べているらしいし、そして早くも彼の飼い犬の世話を他の者にさせるようとしている! しかし、噂で何が本当なのかは絶対に分からないのだ。つまり、いかに人々はでっちあげるものか理解しがたい!! 誰かが体験したかのようなことがはっきりと語られ、その人物のことになると何にも知らないのだ。ソネイが私のところへ来た時も、彼が私に言ったとされることがこのような形の話になって伝わった。誰かが私から個人的に聞いたことだと。

悲惨なこと全部が今終わりになるとは信じられない。大方の人々は敢えて信じようとしなないし、私たちはすでに非常に多くのすばらしいことを信じたが、そのあと、すべて本当でないことが分かっては、またがっかりさせられてきた。しかし、このことはそのまま**続く**のである。何かが起こっていることは確かだが、でも何がかな? 私たちは推測し、ひそひそと話しては願う。いや、ひそひそと話すことは事実上しない。というのは、皆が公然とそのことについて話すからだ。**ザ**・世評! ...中略... 近ごろは全収容期間のうちで一番緊張する。叔母のようにご

く僅かの人は何も信じない。私はもう彼女とはそれについて話すこともしないし、その不信さに我慢ならないのである！信じる者と信じない者で猛げんかをしている家々もある。すぐにもそれが分かるでしょう！

シスター・ロザリンデ

1944年5月19日

人々はすごく楽観的で未だに解放されることを信じている。スイス領事を見たという人がいるそうで、それで考えさせられるのだ。私たち自身、それを信じていないが、話に耳を傾けることは愉快だ。

今朝私たちが耳にしたことはまるっきり「騒ぎ」であった。収容所北側ブランタス通りの人々は罰せられ、家に留まっていなければならなかった。バリケードで通りは封鎖された。若干のクパラ[リーダー]は正門付近のニッポンのところへ行かなければならなかった。その場所で、彼女たちは刑罰が終了し、収容所内を再び自由に動けると言われたのだ。彼女たちは帰り道でうれしさのあまり大声で叫んだ。「私たちは自由に。私たちは自由に」と。このことをすでに神経が高ぶっている人々は、私たちが自由になったことが公に認められたのだと思い、収容所中を「私たちは自由に」と、お互いに大声でわめいていた。

ああ、大変、何という状況、全く不安にさせる。それが本当でなかった時には、その次に何が起こり、ソネイがこれを耳にしたらば。私たちもこの叫びを聞いた。ちょうど修道院長と一緒に赤十字から受取ったおいしい物を立って眺めていた私は、「マザー、私が様子を見に行きます」と言った。私はウルスラ会（ユリー）のシスターひとりとともに見に行くと、少年がふたり寄って来て言った。「バカだなあ、シスター。本当だよ、自由になったんだ。ソネイは収容所を明け渡したんだ」。私たちは笑い出してしまった。まさか、私たちが信じるものですか。そしてさらに先で私たちは、誤解してがっかりした顔つきを見た。

ああ、いかに私たちはあれやこれやと振り回されていることが分かっていたらば。いかに状況が重大であるか知っていても、何も分からないし、鉄条網とビリック[竹で編んだ柵]に囲まれて明けても暮れても閉じ込められているままだ。それでも、本当に私たちはいつもありがたく思うのだ。もっとひどいこともあると、まあ私たちはお互いに言い合っているのである。

シスター・ロザリンデ

1944年5月23日

私たちは、ニッポンがジュネーブ²⁰¹に参加していることをさらに感じるようになった。私たちが、一全て英文での一偽り紙ではあるが、新聞をもらうようになって以来、収容所内で私たちの希望の光が増した。

シスター・ロザリンデ

1944年6月18日

ソネイは、昨夜 10 時半になって班長たちを呼び出した。彼は言った。「米軍が接近していて、いつ何時にも彼らが現われることを予想している。しかしながら、それで君たちは解放を認められたなぞ思ってはならないし、戦争は上に下にとそのまま続くのである。君たちは防空壕を作っても良いが、その必要は特にない。米軍は収容所の位置を見出すこともあろうが、空中戦として収容所の上空でも行われることもあろう。平静を保て。私は、そしたら去らねばならぬが、我々は君たちを保護するであろう」。

状況が危険となるとニッポンが発言したのは初めてだ。これを私たちは信じて良いのだろうか？ 私たちは事実上もう何も信じないし、ニッポンがそう言ったとしてもだ。密告、第五列、センセーションを巻き起こすこと、人民をいらいらさせること、こんなことを彼らは上手にできるのだ。

シスター・ロザリンデ

1944年6月20日

空襲警報あり！本当かな？ 私たちには分からないが、ちょっぴりは信じられる。

シスター・ロザリンデ

1944年7月8日

突如空襲警報！戦争捕虜と被抑留者の耳に快い響き。かすかな希望が再び訪れる。彼らは本当に近くにいるのだろうか？ でも...それなら彼らのもとでもっとたくさん行動があるはずだが。所長

²⁰¹ ここで彼女は、「ジュネーブ協定」を意味しているのかもしれない。

は年長の少年たちで形成された消防団に対してこう言いさえした。「遊びではないのだから真剣にやれ」。もう何も信じられない。

事実、再び3日間の訓練あり。神様、あとどれだけ？ああ、ここは息苦しくなってくる。閉じ込められると言うことは、結局閉じ込められていること。

ベルフ

1944年9月17日

もうまた9月だ。まだ、戦争は終わっていない。少なくとも私たちにとっては。私たちは他の世界については何も知らないし、このチデン収容所の外にあるすべてに関して何もだ。私はだいたい（1945年）5月と考えているけど、それまで長い月日がかかる。

ベルフ

1944年11月11日

戦争はまだ終わってないし、これは、人間が生命を失ったらどういふ結果となるかを実感したときまで続くのである。収容所新聞「ザ・ボイス・オブ・ニッポン」から読み取れる少しのこと以外に、ここの私たちは戦況について何も知らない。この前は、「ヨーロッパ戦争の終局」について数えきれないほど出ていて、それは不吉な兆候だったけど。その新聞はもちろん戦争における事実を絶対にのせないし、そのためには敵は不快すぎるのだけど、良識ある者はすぐに読み取ってしまうものだ。そして、6300人いるこの収容所で何の情報源もなく過ごす者は、確かに（少なくとも、その人が分別あって冷静に二本の足でしっかりとかまえている場合だが）、行間を通して一般的な状況を少しでも憶測することを習うのだ。いつも噂におぼろげとなってしまうし、ここでも今なおだ。そして、新聞から論理的に分別して得た結論を固守することが困難となる。噂によると、ドイツは数えきれないほど降伏し、日本はそれより少ない回数をだ。シンガポールが陥落し、スマトラ占領、また、ジャワ全土が壊滅的に爆撃されたが、私たちの最愛の里、バタビアの町以外はだ。

ベルフ

1944年11月12日

私は、オランダは解放されたと信じているが、そこでの共産主義の反乱について噂が流れていて... 私は、ドイツは疲れ果てていると信じているし... 私は、日本との戦争はもうあまり長くは

続かないと信じているし... 私は、私たちに「知らされるはずのとき」は、どちらかというとも1年先であると信じているし... でも、お父さんはどうしているかな？

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月12日

すでに1ヶ月半以上にわたって届く新聞、そして出入りするたくさんの輸送がもとで、再び「噂」の渦が広がっています。中には、私たち全員がオーストラリアへの移送に就けられるだろうということが。私たちの家のある「婦人」がある時言いました。「オーストラリアか、...奴らはそのための船もあらんやろ?...ああ、でもさー。私たちみんな、まず、穴のあいたバケツを出さな—あかんと聞いたんよ！」

ヘンケス - ライスダイク

1945年1月15日

私は、この食糧不足は良い兆候だと信じています。第1に供給なし、第2におそらくジャワにはもっと人が。外領からか？

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月3日

「ニッポン・タイムズ」²⁰²が届く、半年前のニュース。戦線はアーヘン—アーネムに。カナダ軍部隊はペール湿地帯とスヘルデ川河口付近で戦闘中。結構なこと！私たちは再び希望をいただきます。

ボルハイス - スキルストラ

1945年2月8日

私は、私たちが良い方向に向かっていると感じている。オランダが解放されたいことやフランスが決着をつけ、ペナンとシンガポールも同様などとの噂や報道記事によってというよりも、

²⁰² 日本軍の英文プロパガンダ新聞。

むしろ点呼中の若干緩んだ姿勢による。キオツケー、ケーレー[気を付け！敬礼！]の穏やかな実行、本当は、リーダー側の原因であるいいかげんなやり方。また、現在オーケストラを結成する試みやリーダーの何人かの女性がニッポン側から砂糖で安静療法を受けていること。全体として、私はそれが近づいていると感じるのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月18日

回覧板：井戸（多くの家にひとつあり）の手入れをすること。万一の爆撃とそれによる水道の切断を考慮して！早く連合軍が来てくれればなあ。本当にその見込みがあるのかしら？

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月24日

昨晚、エンデルトとファン・フローテン両氏としばらく話しました。彼らは、チマヒのバロス第6少年収容所への移送に少年たちについて行ったのですが、タンゲランから来ました。エンデルトはとっても楽観的で、彼によると戦争はあと長くても3ヶ月続くということです。私はそれを信じません... たくさんの事が起こるであろうということは分かりますが、そんな早くは終わらないのです。つまり、このように今日、私は思っているのです。

ヘンケス - ライスダイク

1945年2月28日

私たちの居住区は今ではとても狭くなりました。楽観的な人によれば、防御しやすいとのことだが... これは本当に新局面に入るのでしょうか？私たちはここジャワで人質として見なされているのでしょうか？そして、彼らは私たちに対していくら払わなければならないのでしょうか？

ブールマ

1945年3月26日

いまだに戦争は終わらない！それで、私たちは今度は8月に希望をたくすのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年3月27日

タンゲランが今では明け渡された？グロゴールは？もしヤッペンがそれを行ったとしたら、戦争終結はすぐだと私はいつも感じていました。なぜならば、彼らは捕虜全員を町中や拠点に集中させたほうがもっと都合がいいからです。

ボルハイス - スキルストラ

1945年4月8日

私たちが解放を間近にしているというのに、飢えや疲労により多分私は見捨てられてしまうような感じがする。私たちは先週1月5日付の新聞「ニッポン・タイムズ」をもらった。その中に書かれてあったこと：日本で3つの町が爆撃された。フィリピンが米軍の手中に。彼らはニッポンの爆撃を受けた援軍を迎えた。ルソン島でUSAの攻撃が。日本で灯火管制。東京から疎開。そして特に重大だったのは、あるヤップお偉方の演説：「米国は物資に優る国であるが、...ニッポンは魂に」。要するの、結局このことを（緊急に事務所でこれを全部読むべし）3ヶ月後に読むのだ。同様に：スマトラは自主管理を形成中。ところで、新聞から一部入手した噂を信じるかしら？折りたたみ式の着陸場でスマトラに米軍上陸があること、どう想像したらいいのかしら、同様の病院も。さらに、ジャワでメラック、チラチャップ等の沿岸で侵攻が伝えられている。

結局、終わりは近づいているし、2ヶ月前に私は、5月にと考えていた。ああ、もう私には分からなくなってしまったけど、私たちは度々あちこちに揺れたが、みんなの気持ちとして、だんだんと今は早急な終局の可能性の方に傾いている。状況は、これがどうしても必要なくらいだ。また、全員において非常に激しく弱まってきた希望のためにも。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月9日

オランダ、ベルギー、フランスが解放！最初は噂話しでしたが、私たちは今一番あなたたちのことを思っています。ここは、ニッポン・ニュースによると大変うまく行ってます。あの馬鹿な人たちは、私たちが全てを彼らの記事から推測できることをまだ分かっていないのです。本当に2、3ヶ月以上は続かないのでしょうか？そして、私たちのお友達ソネイは、何をまた私たちに対してたくらんでいるのでしょうか？

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月13日

再び一連の警報、もちろん訓練（本当にそう言ってるが！）

ベルフ

1945年4月16日

この日を覚えておきたいのだ。今朝初めてアメリカに爆撃されたのか、いやむしろこう言ったほうがいいかも、米軍が本当にこの町の上空に現われた（爆弾は投下されなかった）ことをあとで知りたいから。あるいは、クーシュー・ケーホー（空襲警報）の間に起きたドスンという音はただ訓練だったのかを。でも、どっちにしても丸で本物のようだったし、この長い3年の間に初めて私たちの同盟者が町の上空に現われたことを本当に信じるわ。しかし、機関銃と高射砲のドンという音やガタガタはすべて空砲で、訓練だとあとでみんなが言い張ったのだけど...こんな訓練は今まで一度も、私たちの政権下にも経験したことがなかった。

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月16日

少し新鮮さを失いかけてくる...11時半に警報！遠くで大きな爆発、歓迎すべき音が。それとも彼らは私たちを気狂いとも思っているのかしら？彼らはそれをする事ができるのです。空のとても高いところに1機の航空機が見えたらしいということです。1機の航空機？何千機も見たいくらいです！でも、私たちが一度も聞いたことのない対空高射砲が作戦中だったのです。

ベルフ

1945年4月21日

スマトラが解放されたいが、コッホ先生はそれは本当であると言っている。彼女はまた、5、6週間したら私たちは出られるとも言っている。そうよ、こうコッホ先生が言ってるの！6月の初め...考えにも及ばないけど、今、コッホ先生に言われて、私はうまく行くようにとても望んでいる！それが非常に必要なんだ。大勢が病気だし、コッホ先生にしても下痢で横になっていなければならない。もし私が状況の悲惨さを表現しようとしたら、何ページにもわたってびっちり書かなければならないし、そんなことする気持ちは全然ないわ。...中略... 戦争は本当にすぐに終わ

ののだろうか？ ロップが再び家に戻って来るだろうか？ そしてお父さんとウィテ・ローマンは？
私はやっとまた弟や妹を学校に送り届けることができるのかな？

ヘンケス - ライスダイク

1945年4月30日

ニッポンが私たちの美しい東インドを空っぽに略奪して、レモンを空っぽに絞りきったときに平然として退去するような感じを私は抱いているのです！ 彼らはどうせこれを続けることができな
いし、それを彼らは十分承知しているけれど、これまでに長年にわたって毎日この収容所を通
り過ぎた満員の列車で分かるように、彼らはたっぷり私腹を肥やすでしょう。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月2日

10時15分前に警報。遠方のタンジョンプリオク方向から再び鈍いとどろきが。

ブールマ

1945年5月7日

さて、戦争はでも本当にあっけなく終わった。…中略… 私たちがすぐにも自由になるとのす
ごい噂がたくさん出ている。マッカーサーがスマトラから言ったらしいことは、もし彼らがジャワ
にある婦女子収容所がスマトラにあるのと同じような状況にある場合には、厳しい報復措置が取
られるだろうとのことだ。だから私たちは現在とてもたくさんのくだものをもらっているのだ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年5月31日

噂：「もう戦闘がない！」もし、そうだとすると… でも、もう私たちにはそれが信じられませ
ん。

ベルフ

1945年6月10日

もちろん、戦争はまだ終わってない。コッホ先生は6週間ほど前にこのことを言ったけれども。コッホ先生もこの点をそう的確に判断しなかったとその後私はかぎつけたわ。スマトラは全然解放されてないし、フィリピンだけが今ちょうど。現在は、誰もが戦争は終わった、つまり、かの紳士たちがジャワを去ると固く信じている。私はそんなの何にも信じないし、7月23日の私の誕生日に未だに困難の真っ只中にいたとしても全然不思議にも思わないわ。戦争は果てしなく続くのだから！

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月12日

ソネイの予告された出発にともなう最も特別なことは、明らかとなった予言... 他のこともか？この出発のあとには早急に戦争が終了するらしいです。おかしなことですが、希望に満ちた気持ちにしてくれます。

ヘンケス - ライスダイク

1945年6月24日

18歳から40歳までの女性150人が呼び出され、ダブール[調理場]の仕事のために記入されたと居住区の外では言われています。噂は本当でしょうか？ ひとりの看護婦は7月1日に町の病院へ働きに行く... と言われています！でも、言われていることが多すぎます！また、様子を待つのみ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年7月22日

たくさんの病人や死亡者で、大勢が氣力を失い、かつ途方もない噂を信じていることは不思議でないでしょ？でも、ここの居住区でラジオが聴かれていると、私は確信しています。

ブールマ

1945年8月2日

また良い知らせがある。ソ連軍が東京から 60 キロのところにおいて、今日は、彼らが東京にいるとさえ言われた。もし、それが本当だとしたら、すぐにも終了することになる。なぜなら、彼らはそれを待っていたからだ。ニッポンの部隊が日本へ護衛つきで戻りたがったが、ソ連軍と米軍はこのことを望まなかったのだ。

ブールマ

1945年8月15日

今また、しつこい噂が出ている。私たちは遅くとも 8 月 31 日前に日本の部隊から解放される。7 月 27 日には何かが起こるはずだったけれど、ニップ、イギリス、アメリカ、そしてソ連との話し合い中に、いまましいヤッペンがウラジオストクを攻撃してしまった。彼らはそこでこっぴどい目に合ったが、今度はソ連軍がまず反撃に出て、日本を壊滅的に爆撃した。連合軍は見守っているだけだったが、今ではこれもすぐに終わるはずだと言っている。なぜなら、ジャワとスマトラにいる女性たちの状況がひどかったからだ。占領軍部隊と食糧をのせた船隊が、もう 1 ヶ月もジャワの近くに横づけされている。要するに、その費用にもたくさんお金がかかるし、それを彼らは支払い続けることができないのだ。

ボルハイス - スキルストラ

1945年8月16日

靴下と毛糸と途中まで編んだ靴下を全部引き渡す。軍服に包まれたヤップは奇妙だし、何日か数回の爆発音が聞こえ、高射砲が使用された。1945 年 8 月。これはジャワの私たちにとって助けとなるのか？ 占領軍が今月ここを去るはずであるとささやかれている。でも、私たちのうち誰が一体信じるであろう。しかし、いかに緊急に助けを必要としていることか。非常事態だ。

ブールマ

1945年8月16日

さらに最近の 3 日間は空中戦があり、昨日とおとといは爆弾か対空高射砲さえ聞いた。食事がもっとたくさんもらえて、状況が突然変化するとは、何とすばらしいことか。これで終局、また、

7月27日に起こると言われたことが始まるのである。私たちはお米を自分たちで炊くことが許されるし、外からおかずももらえるそうだ（居住区の外に、私たちの男子たちが建てた調理場がたくさんあるのだ！）私のおなかはおいしい物で破裂しそう。たった今、私が言ったこと。「戦争が完全に終わったと近いうちに私たちに知らされたら、その時に、私は涙を流したいだけ流すわ」。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月17日

戦争が終わったことがかたくなに言い続けられていますが... ほとんど誰もそれを信じる勇気がないのです。

平和通告

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月22日

ニッポンは、引渡してあったオレンジ色のものを重作業班の少女たちに返しました。これがきっかけとなり、居住区でオレンジデー、真なるオランダ人の群集。オレンジ色のリボンや飾り帯を付けた子供たちが母親に手を引かれて一緒に歩いています。ニッポンは何も逆りませんが... 本当にかしら？それならなぜ、まだ旗が揚がってないのでしょうか？…中略…

私たちはもうクンプレン[点呼に整列]する必要がありません... そこで私はもうヤッ
プの前でお辞儀することもないのです！今や、この悪漢はその権力を決定的に喪失した！

ベルフ

1945年8月22日

今日は、私たちにあるすべてのことにたっぷり喜ばせてもらおう。今日は、3年半切望しながら待っていた1万1千のチデン住人にとって、まさにその日なのだ。今日私たちは、戦争が終わり過去のものとなったと保証されたのである。一体どうこれを把握できようか？8月22日。1940年5月10日以来、こんな感動をもって日記を書いたことがなかったけど、今、喜びの感動を（！）あとで全部書き留めておこう。おそらく明日には、私たちが今後アメリカ当局の保護下に置かれることが正式に発表されるはずだ。町は昨日明け渡されたらしく、私たちの同盟者はジャワの占領を開始したのである。争いなくこの管理の入れ替わりは行われる。つまり、無傷で私たち7人は戦争から解かれたのであり、望むらくはお父さんと弟ロップも。私たちはこの移行期の週には、たくさんのおもてなしをもらっている。こんなにありがたく思ったことあったかしら？今、戦争が本当に、本当に終わり、今、男の人たちが私たちのもとへ戻り、今、やっと新しい生活が始まるのだ。

「プラン・プトゥル、プトゥル・ハビス[戦争は本当に、本当に終わった]」と言った監視ノダは、その名前を私の日記に書き留めておきたい人だ。なぜなら、彼は私たちに本当にとっても親切な人だったからだ。彼は、私たちの困難さや悲惨さに対して暖かい心をもって理解してくれたまさに父親みたいな友だちだった。彼は、祖国へ戻れることをとても喜んでいる。ヘネクイン先生がこれを見るまで長らえなかったのは何と悲しいことでしょう！²⁰³ さあ、明日、明日は忘れ得ない日になるはずだ！明日、私たちの国旗が揚げられるようだ。ああ、私、とっとうれ

²⁰³ 教師ヘネクインは、1945年7月15日に死亡。「健康状態と医療事情」参照。

しいわ。

ヘンケス - ライスダイク

1945年8月23日

6時に目覚める。あたりはまだ静まりかえり...真っ暗。急いで服を着て、朝ご飯用にナシ・ゴレンを作る！盗んだゲデック[竹で編んだ柵]のパチパチと音を立てる焚き火で息子のヤンとヤン・オルファートと一緒に！その時、突然線路の方から声... オランダ語を話す声がしました。「お父さん、このあたりからその家並みが始まると、ぼくも思うけど。そうだ、ここがチデン収容所だ！」そこで私たちは呼び返し、こう歌いました。「オランダがよみがえる日が再び訪れし！」と。そのあとは？そう、そのあとは私たちのいる収容所にうれし涙が流れ出しました。今までこんなに大泣きしたことはありませんでした。以前まで憎み合っていた女性たちが抱き合い、誰もがお互いに駆け寄り合いました。私たちはお互いに黙って見つめ合うだけで、何もしゃべることができませんでした。4年間私たちはお互いに助け合い、お互いに我慢し、一緒に仲良くやってきました。何かノスタルジックなものを私たちは抱きましたが... その間に、ナシ・ゴレンが冷たくなりかけていました。

全ての家のクバラ[リーダー]への正式通告：戦争は終わった。...占領軍が来る予定であり、...私たちは歌ってはならない！私たちはもう何もする勇気がないのであろうか？「ウィルヘルムス」さえ響き渡ってはならないから？私たちはどうなるか静かに様子を見ていなければなりません。彼らは私たちを静かにさせておいてくれるのでしょうか？多分、このことはうまくいくでしょう。私たち全員がもうあまり力がないのですから。反応で、また、収容所内へ流れ込むたくさんの方の悪い事で誰もが参ってしまうのです。まったくおかしな時に何かが入荷し、しばしば遅くまで料理されるのです。重作業班の少女たちはもう働いていないし、多くの看護婦は病人のもとから去ってしまいます。非常にたくさんの女性がもう何も食べることもできませんし、その大半が助からないようです。お葬式は依然続いています、今では、また本物の霊柩車です。これが、自由を目前に見ていて、生き続ける力をもう持たない人にとって、たった一つの違いとなるのでしょうか？その反動は起こりかけていますが、毎日が幸いにも良いニュースだけをもたらしてくれます。ヤップの目の前で今、続きを書いています... 丸で彼らは知っていたかのよう。

私たちは注意深く順応していきます。私は、脂っこいものを大量に摂りたがるリートに歯止めをかけています。私は一日中料理に熱中してますし、子供たちはおいしく食べて快活になっていきます。夫たちの帰還に関しては、私自身頭の中でまだ整理がつかえません。どこにいらっしゃるのでしょうか？いつ来るのでしょうか？まだたくさんの事がなされなければなりません。

万歳！私たちはトイレットペーパーをもらいました。溝はこれからもっと一杯になるでしょう。毎日私たちは見事なお肉をもらえ、すでにビーフステーキさえ食べたのです！私たち

はこの荒れ果てた収容所の一画を楽しんでいます。病人は出るようになっていて、今日の午後には用意が整ってなければなりません。チャルダ・ファン・スタルケンボルフ総督夫人は、まだ何も知らず、彼女のご主人がどこにいるのか何も知らないのです。昨日は、ゲデック越しに取引が始まったようで、リートの娘アネケは古いブラウスで見事なバナナ、それもシシル[房]ごとです。ヤップはこのことをもう阻止することはできません。

4時。アネケが病院の事務所から書いています：「靴とキュウリが入荷！」チェコ人の女性は、まだ働いている夫のもとへ去ります。私たちはもう寒気がしません。

ベルフ

1945年8月23日

国旗はまだ揚げられていない。それには、公式の移管まで待つのである。それがいつなのか誰も知らないけれど、私たちの今の収容所リーダーであるロールダ先生が、今日家々のクパラ[責任者]をパサールへ呼び出して、私たちの所長サカイ（そうよ、ソネイは避けがたいドラマのあと、6月20日に去った）の代理として、一平和一にと正式に通告した。ちょうど1週間前の8月16日に全てが始まったのだ。日本で東京のすぐそばで戦闘があったこととニッポンへはこの地域に関して、つまり、彼らが8月20日前までに退去すべきことの最後通牒が突き出されたことを、私たちは噂としてすでに知っていた。8月16日木曜日に、パンが何も入らないであろうと私たちは聞いて、新たにタピオカ粥の期間を過ごし、これにより再び失ってしまうかもしれない全員の貴重な命を心配したのだ。私は、収容所のためにアメリカ製オバットゥ[医薬品]の荷物を下ろすために突然呼び出された。やっと、解散させられた！何度もあったように遅すぎて！その際に私は、一人につき毎日200グラムのお米が配給されて、たっぷり注文することの許可が出たと聞いた。2食分で200グラムのお米だなんて信じられないほど最高！

有頂天になって家に戻った。その日の朝、日本軍用の編物本部が閉鎖されて、全部のニッポン・ソックスと毛糸と編み棒を、ただちに引渡さなければならなかった。（これは、ホルマット[敬意]を表したお辞儀が十分でなかった場合の罰と言われた）。誰もが楽観的な気分だったのはまったく不思議じゃないわね？また、まったく気狂いじみていたことは、何週間にわたっても一日として休みがもらえなかった私たち重作業班の者たちは、他に仕事がないときにはいつも菜園で働かされ、突然3日間の休暇をもらったのだ！お米は自分たちで炊かなければならない。次の日に、お母さんと私が火のそばにいたら、そのとき突如耳にしたのだ。明日からは、3食分で一人につき400グラムのお米が！ええ、まあね！私たちは全部自分で料理しなければならないのだ。ボタンハリの調理場が閉鎖されたから。とつてもすばらしい注文が行われた。私たちは1日に30グラムの砂糖をもらえることになって、ニッポンがお肉のことで努力するはずだ。私たちは毎日テンペ[発酵豆腐]かオンチョムパイ[発酵した黒豆のパイ]をもらえるようになり、調理場のカチャン・イジョー[小粒グリーンピース]かインゲン豆もだ。優れた贈り物の洪水が収容所に

流れ込んでだ。塩魚、グラ・バトゥー[氷砂糖]、紅茶、石けん、コーヒー、グラ・ジャワ[ショロ糖]、何度も私たちはココヤシをもらったし、サウオ[果物]は毎日で、チャベ[唐辛子]、カチャン・タナ[落花生]も入ったし、食べきれないわ。

でも、土曜日または日曜日（8月25日・26日）終結させなければならないことの最後通牒や東京での戦闘についての噂が漂いつづけていた。8月20日月曜日には、重作業班の全員が呼び集められた。居住区付近の立ち退きのあった家々全部を火曜日の午後5時までに再び居住可能にしなければならなかったの、私たちがゲデック[竹で編んだ柵]を取り外してくれないかと頼まれた！同じ日のお昼には初めてまたお肉が入った。一人につき40グラム、4歳以下の子供は15グラムだ。また、夕刻遅くに、少量の特配：パン、何とすることもないんだから、2人前を4人にだ（私たちは、ちなみに以前には1食分としてもらってたんだから）！火曜日の午前中に、私たちはさらにカワッテン[柵の移動]をさせられ、雑役のお米200グラムに加えて雑役のパン、つまり半人前のパンを得た。ああ、そう、翌日にお偉方が来る予定である：家々、敷地、庭を全部きちんと片付けてくださーい！それとも、班長たちが、上着類か下着、そして靴を必要としている者を記録したかっただけかな！日曜日（8月19日）から監視が2倍に増やされて、それもニッポン兵士でだ。私はまだ信じる勇気がなかった。まだまだ。でも、水曜日の朝、つまり昨日に私はゴミの回収中にこう聞いたのである。副班長が言って回ったこと：「私たちが待っている人物が来ると、彼はすばらしい知らせを私たちにもたらすが、パニックの雰囲気にならないように…」その時はっきり分かったわ。あとでノダが、重作業班の養豚係りであるポップ・フランケにそのことを言ったのである。

お偉方の視察はまだ行われてない。それは耐えがたいこと... 昨日の朝は急に、全部の引渡したり取り上げられたバラン[荷物]、扇風機、プレーヤー、カメラ、電球、映写機、冷蔵庫、まったく次々と収容所に戻さなければならなかった。そんなことで私たちは一日中快くかった。私たちは初めてまたレコードもかけれたし、最高！中でも「アメリカ、アイ・ラブ・ユー」。ああ、私たちが歌に合わせて声を張り上げたごとく！いつ、いつになったら私たちは最初のアメリカ人を見るのかな？私たちは今ちょうど80グラムのお肉をもらったところだ。

ブルマ

1945年8月24日

バンザイ！バンザイ！バンザイ！やっとうと自由と平和が！！

昨日私たちは、**平和**が調印されたことを正式に聞いた！ニッポン部隊は、明日かあさってオランダ軍の海兵隊と空軍と交代する。私たちにはものすごくたっぷりとあつて、もう食べきれない。きっと、教えてあげるね。だって私はこれから料理しなければならないから。

ボルハイス - スキルストラ

1945年8月25日

日々が急いで過ぎ去り、感動は多し。一昨日以来、私たちは戦争が終了したことを正式に知っている。やっとのことで、これまでになった。私たちにはほとんどこのことを理解できない。全部私たちはオレンジ色を身につけ、移管の時を待ちきれない気持ちで待っている。食糧は増加し、飢えはなくなった。私たちは疲れてぼうっとしていて、今では薪をもらうので自分たちで調理している。私たちに現在あるもの全部を思うとふらふらするほどだ。塩魚、お肉（60 グラムに加えて 40 グラム）、紅茶、コーヒー、戦前と同じ量のお砂糖。ココヤシはほとんど毎日。カチャン・タナ[落花生]、グラ・ジャワ[シュロ糖]、化粧石けん、歯磨き粉、歯ブラシ、タオル：5人に付き4枚。